新群書類從　第三

例言

一本巻には古名優の逸事傳記其の他演劇に關する雜書と、元祿前後に行はれたる狂言本とを收む。即ち演劇に關する雜書には、

役者論語　　刊本
古今いろは評林　　同
芝居乘合話　　寫本
作者店おろし　　同
並木正三一代咄　　刊本
岩井半四郎最期物語　　同　　永田氏藏本
正德追善曾我　　同　　安田氏藏本
梅幸集　　同　　同
中山文七一代狂言紀　　同

眠獅選　同
傳奇作書追加　寫本　小栗氏藏本

又狂言本は凡て刊本にして、其の外題は次の如し、

娘孝行記　富永平兵衛作
熊野山開帳　同
業平河内通　同　狩野氏藏本
御曹司初寅詣　近松門左衛門作　永田氏藏本
傾情一張弓　津打治兵衛作　同
傾城三鱗形　同
京ひな形　山下半左衛門作　同
一谷坂落　狩野氏藏本
當麻中將姫まんだらの由來
箱傳受　狩野氏藏本

今川かな手本　　永田氏藏本

有卦入万倍曾我

一『役者論語』は、道外方金子吉左衞門の著「耳塵集」をはじめ、「續耳塵集」、「あやめ草」、「賢外集」、「佐渡嶋日記」等を合せたるものにして、坂田藤十郎芳澤あやめ、其の他、元祿前後における名優の逸事を載す、八文字屋板行俳優七書の一なり。

一『古今いろは評林』は、八文字屋の編並びに板行にして、忠臣藏淨瑠璃及び演劇に關する事項を細大洩さず集錄したるものなり、實に戲曲忠臣藏の沿革史といふべし、

一『芝居乘合話』は、狂言作者中村重助の著なりといふ、重助は堀越二三治の門人にして、俳名を故一といふ、明和年間森田座の立作者なり。活東子編「燕石十種」中の「劇場新話」は、本書を後人が手を入れ、取捨したるものなりといふ、されば同書と大同小異重複の嫌ひ

なきにあらざれど、其の異本として特にこゝに收むることゝせり。

一『作者店おろし』は、狂言作者三升屋二三治の著なり、二三治は本名伊勢屋宗三郎と稱し、もとは淺草藏前の札差にして、代々家富み榮えしも、二三治に至り芝居を好み、殊に七代目海老藏を贔屓にし、自ら狂言作者たらんと欲し、初代櫻田治助の門人となり、遂に文政の末年河原崎座の立作者となれり。狂言を作せし外、劇場に關する著書二三あり、本書は其の一にして、古來名ある作者の逸事を集めたるものなり。

一『正德追善曾我』は、元祖市川團十郎才牛が、元祿十七年(寶永元年)横死の顚末を記したるものにして、正德六年故人の十三年忌に、追善の爲め刊行したる由、錦繡堂の序に見えたり。されど此書は『寶永忠信物語』と題して、是より先き寶永二年(事件の翌年)板行され、

正德六年更に改題したるものなることは、こゝに收めたる取合せ本にて知るを得べし。而も表題の異れる外、內容には少しの相違なきこと、七代目の跋に見えたる如し、此書は七代目が最初「追善曾我」の一三四の卷を有したるに、石塚豐芥子また外題變りながら「忠信物語」の一二五の卷を有し、二書合すれば完備すべきにより、七代目は懇望して豐芥子より讓り受け、こゝに同書は全部揃ひとなれり。よりて七代目は、其の代りにとて、古河默阿彌に筆耕を托し、二三四五の四卷を寫さしめ、一の卷の板本を合せ、これに己れが跋を附して豐芥子に贈與せりといふ。

一『傳奇作書追加』は、先きに「新群書類從」第一冊編輯の際缺本なりしを、今回幸田成友氏の盡力により、本卷に收むることを得、こゝに傳奇作書の完備を告ぐるに至れり。但し同書中「難波土產」及び「操年代記」の拔萃は、既に歌曲の部に、二書とも全本を收めたれば、こ

こにはこれを省くことゝせり。

一狂言本は、後々の根本もしくは臺帳と稱するものとは素より同じからず、寧ろ筋書といふべきものなり。されど今日の筋書に比ぶれば、やゝ詳細なるものあり。今其の作者について一言すべし。

一古狂言本には作者を記したるもの頗る稀なり、これ古淨瑠璃と同じく、元祿以前には、多く作名を附せざる習慣によるなるべし。然るに富永平兵衞といふ作者出て、延寶八年の顏見世狂言の番附に、はじめて作者の名を出せしより、一時は世の物議ともなりしが、これよりして後々淨瑠璃狂言本とも漸く作者の名を記す習慣とはなれり、「娘孝行記」、「熊野山開帳」、「業平河内通」の三種は平兵衞が作なり。

一近松門左衛門の事は、世の洽く知るところ、狂言作者としては平兵衞とほゞ同時代なれど、やゝ後輩なり。都万太夫座の作者とし

て、名優坂田藤十郞の爲めに脚色せし狂言數番今に傳はれり。されど本卷には、僅に「御曹司初寅詣」一種を載するに過ぎず。

一津打治兵衛は、江戸作者の中興と稱せられし人、寶永元年廿二歲にてはじめて作者となり、正德享保を世盛りとして、二代目團十郞の爲めに作せしもの多しといふ。「傾情一張弓」は其の作なり

一山下半左衛門は、京ゑびすや座の立物にして、坂田藤十郞と時を同うし、これと拮抗したる俳優なり、狂言を作りしことに就ては、是迄聞くところあらず、されど當時の座頭株は大概狂言を脚色したれば、半左衛門に「京ひな形」の作ある異とするに足らざるべし。

明治四十一年五月

水谷不倒識

新群書類從第三目次

演劇

目次終

演劇

役者論語

此書や、むかしより上手名人と稱せし役者のはなしどもを、古人書留め置し卷々なり

舞臺百箇條　元祖坂田藤十郎師匠杉九兵衛といふ花車形の書置る書也

藝鑑　富永平兵衛むかしの狂言作者也書置る

あやめ艸　元祖よし澤あやめはなしとも福岡彌五四郎書とめたる書也

耳塵集　上手のはなしを金子吉左衛門書しるす

續耳塵集　民屋江音四郎五郎事書留し事也

賢外集　染川十郎兵衛聞覺し事をはなせしを東三八(狂言作者也)書置る賢外といふは十郎兵衛法名也

佐渡嶋日記　むかし今い藝者心得に成べき事を蓮智坊が書置なり蓮智は佐渡嶋長五郎法名也

右七部の書は優家の龜鑑なれども梓にちりばめ付錄に當時三ヶ津役者藝品定を加入する而已

嘉永丙申晩秋　八文舍自笑述

舞臺百箇條

杉九兵衛述

一今の立役のきつぱをまはして、かたきをきめるは、かたち計にて心のきつぱをまはさず、見物衆にほめらるゝ事をのみむねに持てまはすゆへ、かたきをきめるではなくて、見物衆へ廻すきつはになる、夫故敵役の身にこたへず、よはみの出し所がはづまぬのみなり、相手仕事なれば我は相手をたて、我も相手にたてらるゝ様にさへすれば、舞臺のおもてしつくりとなる故、自然と見物衆のあつと感ずる場へゆく也、相手にかまはず、我ひとりあてんとするを、孤自當といふ、孤はひとりとよみ自はみづからとよむ耻べし〳〵

一精を出すといふは、ねても覺ても、仕内を工夫し稽古にあくまで、精を出して、扨舞臺へ出ては、やすらかにすべし、稽古に力一ッぱい精出したるは、やすらかにしても、少しも間はぬけぬものなり、稽古工夫には心をつくさず、舞臺にて計精を出だせば、きたなく、いやしく成て、見ざめのする事うたがひなし、扨惣稽古といふものは、初日より二日も前にすべき事也、初日の前日はとくと休みて、きのふの惣けいこの事を、ほつ〳〵心におもひめぐらし、氣をやすめて、初日を始れば、初日よりおち付て、間のあく事なし、前日にアタフタト稽古し、夜をかけて物さはがしく、翌日を初日とすれば、わるい事もかなりがけにせねばならず、此ヶ條大切の事なり

一狂言の實は虚よりおこり、おかしき事は實よりせねば無理あてになる也

一狂言をするは、心一ぱいにするをほむべし

一藝者其一人となれば、至らぬ藝者そねみ、あしざまにいふ事は、たとへていはゞ、數百の蟻の、蚯蚓をせゝるに似たり、甚あさましき事也、其長に至るものは、おのれが心をみがきて、其品に應ずる妙をあらはせり、甘柿の木に澁柿をつぎて、はやく實ののるをたのしまんとするゆへ、却て澁柿の惡名をとる、澁柿の木に甘柿を接合せ、生たつ時は本の味をうしなはず、万物も實ばへより善惡しれがたければ、役者も物になれたる人にたより、椄穗のごとく修行せば、名譽の名を得べし

一役々の情をかんがへみるに、けいせいは位高(みだか)にして、心はしやれたるもの也、武士の女房は下をあはれむ心有て、人おどけたる事をいふ時は、きつとするかたちよし、よつて武士の妻とみへる也、すべて藝者は相手の氣に應ずるを第一とす、音の合ぬ狂言は名人たりとも、心に叶はず、されば其人の氣によつて、せわしくしてしにくきあり、又藝のかわる仕内有、又よくおぼえてせわしきあり、延過るあり、あるひは拍子きゝにて氣のはる有、しそんじあつても取直しできる有、うれい事をする時武士の妻は、聲をあげてなくは見ぐるし、男も聲をあげてなくものにあらず、年より愚にかへるゆへ、思はず聲あげてなく事有、至てうれい事するに、こらへてなく有、おさへてなく有、おさへてなくは人目をはばかり、こらへてなくはみれんにみゆる也、又ぢかい切腹手負などいふ時は、一調子高し、これよりのぼす故、前後いふ事さだかならず、次第〳〵に聲もよはる也

一見物人なきとて、姿をいとはぬ事、其身のそん也、たとへば全盛するけいせいは、さのみすがたを粧ひなくとも、人目に立風、またはやらぬけいせいなりとも、衣裳はなやかに著る時は、おのづから人心迷ふ也、狂言の役の替りを、人に賴むたのまるゝ事も、人の役故そまつに勤めても、其身の誤りにならぬと心得るは、大きなる違ひ也、万一本役の人より、一ト所成とも勝れたる仕内あらば、其身の會稽ならずや、おしひかな其一人に成るべき身をもつて、はじめ一ト足のふみちがひより、万里の迷ひとなる也

〇是より下の箇條は虫ばみて見えず惜むべし〳〵

舞臺百箇條終

藝鑑

富永平兵衛著

何事も時に隨ふ習ひなるに、わきて狂言の風は、時代の品替れり、むかし狂言盡(きやうげんづくし)の時あたりしと承り傳へ侍る浪人盃といへる、狂言を、左に記するもの也

一荻山の家中高坂采女といふ武士、馬上にて使者におもむく道の景色を稱し、旦那より小性家來までせりふ渡り、采女が曰、むかふの館は聟君のお國なれば、國境より、行義正しく、いづれも麁相のなきやうにと申さるれば、皆領掌の答あり、謳(うたひ)に成る也、馬をあゞらし、しと／＼行むかふへ、深あみがさ著たる浪人もの、あゆみきて、しほ／＼と平伏すれば、家來とがめて、何者なれば慮外もの、笠を取て片付ろと、いへども更に答なし、イヤ推參なと侍ども立よらんとする所を、主人ヤレまて／＼、彼者我にむかひて平伏の躰(てい)とみゆれば、これ全く慮外にあらず、去ながら笠をとらぬは心得ず、コレそな男、それがしに向ひ用ありげに見えたるは、いかなる人にて何の用事子細きかんとありければ、彼男謹て、采女殿には御堅固の躰先以大慶至極以前御懇意の拙者なれども、年へたれば聲もきゝわすれ給ふべし、今日此道筋をお通りと承りあまりなつかしく、最前より待うけ、お馬のさきに平伏いたしながら、御勘氣をこふむりし身なれば、顔を貴殿に見せ申もおそれ有、又面目なく存、慮外のあみ笠眞平御めん、と詞の內采女つく／゛＼おもひ入有てム、扨は貴殿こそ以前の傍輩轟辨右衛門殿な、此方もなつかしく存る、某は御用の道筋馬上は御免、あみ笠を慮外と申すにあらず、お顔が見たい、お斷のだん何かくるしかるべき、サア／＼笠をとり給へ、辨右衛門殿に違はあらじと詞かけられ、扨々よくこそ御推慮、いかにも辨右衛門がなれのはて、おはづかしやと、笠をとれば先は御無事でお久しやと、互にふりにし物語、いさゝかの事にて、勘氣を得られし貴殿、申出さぬ日とてもなし、何とくらし給ふやと問れて、辨右衛門ア、かたじけなき御詞、浪人の身なれば、朝夕の煙かつ／＼、習置し謳(うたひ)の補乞、無念とは存ながら、もと諫言過て御勘當、かな

らず時節をまたれよと、其元のお詞をたのみに、今日まで命ながらへ候也、御上使とあれば、殿の御名代御目見へいたす心地仕る、これを浮世のおもひ出と致す了簡、ずいぶん御無事にお勤あれ、お急ぎのさまたげ名殘はつきずおいとまと、泪ながらに立行をしばしとゝめ、仰の如く今日殿の御名代、追付御勘氣御赦免有て、所領御安堵のしるしの盃を致さん、ハッアこれは有がたしと、又手をつけば釆女扇をひらき、途中の馬上取あへぬ心ざしの大盃、いざ〳〵つげと小性にいひ付れば、同じく扇を銚子としつぐおもひ入、呑こなしサアいざ參れと、辨右衛門にさす、此お盃といひお志しの深切いつは飲ずとてうどたべんと、三度いたゞき呑思度有て、時刻うつると立ざまに、お志しの御酒に醉ひたりと、足元ひよろ〳〵國を祝ひ、禮をいふに舌まはらず小歟ぶし、こなたは馬上に泪ぐみ。おさらばさらばと別れ行、此一段にて狂言大當りせしと也

一むかしの狂言は多く衆道の趣向有けり、若衆形の立者は若女形より高給銀也、其時分は町々にも衆道はやりけり、むかしの狂言を又書付侍る、氏神詣とやらん外題をいひ傳し也

殿樣氏神詣遊ばさる、六法の出所作あり、跡に引馬行列おどり、其時分の歌ニ上り殿のお馬はさび月毛連錢あし毛鹿毛かすげ、しと〳〵打てはかけあがり、お江戸そだちのひげ〳〵男、お馬の口をしつかりと、つりゝん〳〵ひげ男、つりゝん〳〵〳〵つりりん〳〵りん〳〵〳〵〳〵りんとはねたるいさみ馬、つなぎとめたよ戀のせき札、皆々大義じや休め休め、家來が手をつき、先殿樣には神主方にて御休足と、歌にて皆々はいる奴共はけしきを詠め、小性のきりやうを評判、艶之丞(やさのじやう)がよいイヤおらは友彌殿にほれたと、いろ〳〵噂するを、侍出て、何をたはこと、御小性の噂今一言云て見よと、とがめられてソリヤこそと、跡をも見ずに迯はいれば、かんなぎお神樂〳〵と呼はりて、侍はいる所へ、艶之丞出、神前に向ひ拍手打、主君國家大平御武運長久と祈念する折から、茶道珍才うしろに立、艶之丞が袖を引小聲に成て、其元のお爲を申さん、殿さまの御寵愛は其元お一人とおもひしに、比間よりつぱ[illegible]友彌殿に御鼻毛を延し給ふ、[illegible]使に參るこ

なたは神主へ參れと、仰付られたは、跡にて友彌と殿さま、契らせ給ふはかりごと、御油斷有なとたきつけてお使にはしり入、艶之丞ははらをたて、扨々友彌めにくや腹立やとねたみのせりふ有所へ、殿樣御立といふ內に、家來數多出、奥より殿は出させ給ひ、友彌に仰て艶之丞を呼給へども返事せず、殿見給ひコリャ艶之丞、もはや歸らふこれへ參れ、ハッ爰へこいと手をとり、引よせ給へば艶之丞物をもいはず、殿の顏を見てふいとふり切、端がゝりへはいる、コレハさてきやつも、フイト行おつたと、草履取を呼給ひコリャ艶之丞がしかたはどうじやあろと思ふぞと尋給へば、草履取又殿の顏をみてふいとふり切、ツイトはいる、かくの如く家來どもを一人／＼呼て問給ふに皆／＼同じくふり切はいる、扨もめんような事、今ははや引馬ばかりに成たと、馬を引よせコリャ馬よ、何と艶之丞がふいといた心はどうであろと思ふととひ給へば、馬も[illegible]ついとはいゐが幕也、今思へばか様の狂言六番とはおかしく侍れども、其時分の見物かゝ[illegible]面白くおもひ、又役者もかやうの狂言をよくこなし勤ける也

一明曆二年の丙申、其頃は京は女形のさげ髮に法度にて有りしに、橋本金作といふ女形、さげ髮にて舞臺へ出、其上棧敷にて客と口論し、脇ざしをぬきたる科によつて、京都かぶき芝居殘らず停止仰付られたり、これによつて京都座本村山又兵衞といふもの芝居御赦免の願ひに御屋敷へ出たる事十餘年、しかれども御とり上なかりし故、又兵衞宿所へもかへらず御屋敷の表に起臥して、毎日願ひに出るに雨露に打れし故、著物はかまも破れ損じ、やせつかれて、人のかたちもなかりしなり、其頃の子供役者ども多くは商人職人と成、又は他國へ小間物など商ひにゆくものあまた有、わづかに殘りし子供役者銘々に出錢して食物を御屋敷の表へはこび又兵衞をはごくみしが、芝居御停止十三年、寬文八年戊申にかぶき芝居御赦免なされ、三月朔日より再興の初日出せり、狂言はけいせい事也、此日は不就日なりとて留けれども、吉事をなすに惡日なしと、おして初日を出しぬ、十三年が間の御停止ゆりたる事なれば、見物群集の賑ひ言語に述がたし、村

山氏の大功後世の役者尊むべき事なり
一傾城事の狂言、今とはかくべつの風儀の違ひ也、先其場に口上出て、只今けいせい買の始りとふれてしまへば、村山八郎兵衛といふ立役、買人にて此出立白加賀の衣裳に銀箔にて鹿の角を蜂のさしたる所を、惣身のもやう也、一尺七寸の脇さしを向へ落る計にぬきさし、左ははりひぢ右の手に扇の要をつまみ、端がゝりよりゆらり〳〵と出、正面へ立ながらせりふに曰
八まん之が買人でやすと、扇にて脇ざしの柄をたたけば、見物一同に、そりや買人の名人が出たは出たはと聲々に譽る事暫く鳴りもしづまらず、時におくびやう口より、揚やのていしゆ、古き淺黄袴の腰をねぢらせ、てぬぐひを腰にさし、貝じやくしを持て出、ヱ旦那お出かといふ聲の內、偖見物そりや亭主が出たは、あの顏を見よ、おかしやと笑ふ聲、次のせりふもいひ出せぬ程也、漸笑ひしづまれは八郎兵衛、なんとまだ太夫は見えぬか、イヤもふあれへもふ追付是へお出と、端がゝりを打詠めアレ〳〵只今これへ見えますといへば、ヤレけいせいが出てくるはと見物みな腰を立直し、物をもいはず揚まくを詠めゐる、時にけいせいの姿、おかしきいしやう金入也、其時分女形のかつらかくるはたま〳〵にて、多くは花紙をひようごわげにつゝみ、只壹人出て大じんさまお出かへといふを、扨もと悦び大じんと互に手に手をとれば、又笑ひ座敷のあいさつ、一ッ〳〵こなしを、どよみをつくりて譽たり、扨亭主盃をめぐらし、酒の肴に太夫樣一曲の舞所望〳〵とせりふの內、頓てはやし形出ならべば、女形舞の所作有、これは狂言一ばんの仕組なり

○右に書顯す狂言あまたあれ共事繁ければ畧之

藝鑑終

あやめぐさ

福岡彌五四郎述

よし澤氏は古今女形の上手なる故、あれ是へはなされしことを聞傳へ、又は自分にも尋ねて書置ける事三十ヶ條に成ぬるまゝ、あやめぐさと名づけ、此道のしるべとし、ふかく秘して人にもらさず、其ヶ條左のごとし

一或女形よし澤氏に問けるは、女形はいかゞ心得たるがよく候や、よし澤氏のいはく、女形はけいせいさへよくすれば、外の事は皆致やすし、其わけはもとが男なる故、きつとしたることは生れ付て持てゐるなり、男の身にて傾城のあどめもなく、ぼんじやりとしたる事は、よく〳〵の心がけなくてはならず、さればけいせいにての稽古を、第一にせらるべしとぞ

一歌流もとは香龍と書たるを、女形の名にはつよすぎたる龍の字と、よし澤ゐけんにて歌流と書替られたり、歌流あるとき狂言の仕様を誇られしに、よし澤氏曰、家老の女房にて敵役をきめる時、武士の妻なればとおもふ心あるゆへ、刀のそりを打事かならずりつぱなるものなり、武士の女房なればとて、常に刀をさす物にあらねば、刀の取まはしりし過たるは下手の仕内なり、刀をおそれぬといふ計が仕内なり、何としてかとしてナンとゝいふて、ぶたいをたゝいてつかに手をかくるは、ぼうしかけたる立役なるべしと、度々申されしとなん

一（後ニ芳ニ改ム）吉澤氏の曰、女形の仕様かたちをいたづらに、心を貞女にすべし、但し武士のつまなればとて、ぎごつなるは見ぐるしきつとしたる女のていをする時は、こゝろをやはらかにすべしとぞ

一中の嵐三右衛門吉澤氏と夜ばなしの時、とろゝ汁を出されければ吉澤氏箸を取かねられたり、三右衛門いはく、女形は此たしなみなくては、さて〳〵われらあやまり入たり、晝夜心易く致すゆへとの存ちがへとわびことをせられしよし、後に片岡氏に三右衛門あいて、あやめは名人なりと申されしは、かゝることまでに、たしなみふかゝりしゆへなり

一十次郎申されけるは、女は右の膝をたて男は左の膝を立る、あゆみ出しもおなじ事とぞ、弟子へおしへられしもその通りなるを、吉澤氏ひそかにゐけんせられけるは、それは其通りなれども、見物衆の方へむかふ方のひざをたてず、又見へによるべし理窟ばかりにては歌舞妓にあらず、とかく實とかぶきと半分〳〵にするがよからんとぞ、十次郎もそれより見へしだいにせられしなり

一武士の女房に成て刀を取廻す事、大勢に取こめられ、たとへばお姫様をかばふての仕内には、いかにも男まさりに刀をさばくべし、こゝを大事と忠義の心せまるときは、さすがものゝふの妻なり、座敷にて敵役をきめるはいまだせんのつまりにあらず、刀さばきおだやかなれかしと、さい〳〵玉柏への咄なるを聞たり、これは玉がしは大勢に取こめられたる仕内かひなき故の異見とみへたり

一女形は色がもとなり、元より生れ付てうつくしき女形にても、取廻しをりつぱにせんとすれば色がさむべし、又心を付て品やかにせんとせばいやみつくべし、それゆへ平生ををなごにてくらさねば、上手の女形とはいはれがたし、ぶたいへ出て爰はをなごのかなめの所と、思ふ心がつくほど男になる物なり、常が大事と存るよし、さい〳〵申されしなり

一敵役をきめつけることはまづは女形の役にはめいわくなる事と思へども、狂言の仕組によりていやといはれぬばあれば、其役を請取る事なり、かたき役をきめて勝をとれば、見物衆はさてもよいぞと、その女形を譽るものなり、これにくし〳〵と思ふ敵役を、よはかるべき女がきめるゆへ、うれしがるはづにてはあれども、これに乘て見物へのあたりをこのみ、又しても〳〵此格な事をしたがるは女形の魔道なり、つゐには筋道へゆかぬ役者に成べしとぞ

一あやめ十次郎へ申されしを聞てゐたるに、さりとは見物のうけもよくてめでたし、しかしおかしがらする心持を止め給へ、仕内にてしぜんとおかしがるはよし、おかしがらせんとするは女の情にあらずとなん、十次郎少しはらをたてられたる躰なるが、其のちわれらにあふて、あやめは此道のまほ

り神と存ると申されしなり

一女形にて居ながら、立役になつたらばよからふといはるゝは恥のはちなり、女形より立役へなをつて、立役にてともかくもよいといはるゝは、女形の時はわるかるべし、立役に直つてあしきは、女形の時よかるべしと、常に申されしが、あやめ立役になられてはたしてわるかりしなり、女にも男にもならるゝ身は、もとになき事故とかんじ侍りぬ

一女形にてゐながら、もしこれでゆかずは立役へ直らんと思ふこゝろつくがいなや、藝は砂になる物なり、ほんのをなごが、をとこにはならぬにてがてんすべし、ほんの女もはやこれではすまぬとて、男にならるべきや、その心にては女の情にうときはづなりと申されしも尤ぞかし

一女形にて大殿の前へ出、夫(おつと)に成かはつて、事をさばくといふやうなる、女家老の役あり、いかにもしつかりとせぬ樣にすべし、しつかりとしては男の家老がぼうしを著たるに成べし、申ても大勢立合の所へ、いかに家老の女房なればとて、心おくせぬ理はなし、身もふるふほどにあぶな／＼かゝり、敵役がどつとつゝこんだ惡言をいふた跡にて、それよりきつとすべし、女は其場に成てはおとこよりいひ度ことをいふものなり、但シ少は上氣したるていにて、狂言をすべしと申されし

一女形は貞女をみださぬといふが本體なり、是を以てほんの女とおなじ道理を合點すべし、いかやうに當りの來べき狂言にても斷いふべし、女形より役をいぢるといふは、此場が第一なるよし、若き衆へ咄されしなり

一所作事は狂言の花なり、地は狂言の實なり、所作ことのめづらしからん事をのみ思ふて、地を精出さぬは、花ばかり見て實をむすばぬにひとしかるべし、辰之介など上手は上手なれども、此場の工夫なき樣に覺えぬ、花のさくは實をむすぶ爲なれば、地を慥にして花をあしらへと、若き女形へ度々異見せられし

一藤十郎と狂言する時は、ゆつたりとしこ大船に乘たるやうなり、京右衞門と狂言する時は、氣がはつて精出さねばならず、三右衞門と狂言する時は、ひ

つはつてせねば間がぬけたがるといふ事、さいさい申されしなり
一人の金をかへさずはらひもせず家をばかい、けつこうなる道具を求め、ゆる〱と暮す人と、相手のそこねる事をかまはず、我ひとり當りさへすればよいと、思ふ役者が同じ事なり、金をかしたる人何ほどか腹をたつべし、相手になる役者、みぢんに成ことなれば、つゐには身上のさまたげともなるなりと申されし
一左馬之助申さるゝは、まりをけるやうに、相手へのわたし方を專にするがよしと、あやめ申さるゝは、鞠を蹴る樣に渡し方を專にはしがたし、相手をそこなはぬやうにするといふは、我が當りをと心がけぬことなり、上手に成るやうに精出さば、一場のあたりはなくとも、全躰の人がらにあたりあるべしとなん
一あやめ申されしは、我身幼少より、道頓堀にそだち、綾之助と申せし時より、橘屋五郎左衞門樣の世話に成たり、五郎左衞門樣と申は、丹州龜山近所の鄕士にて有德なる御人、いかふ筋目ある人なりしが、能をよく被成たり、親方は三味線方にてありしゆへ、さみせんに精出せと申さるゝあい〱に、五郎左衞門樣を客にするこそ幸なれ、何とぞ能をならひおけと申されし故、二三度も賴たれども、五郎左衞門樣とくしんなく、女形の仕内に精出すべし大槪人に知らるゝ迄は、外の事むようなり、それに心があれば本体の仕内の心がけが外に成べし、其上能といふものはなまなかに覺へては狂言の爲あしかるべし、なぜになれば、仕内はぬらりと成、又しても所作事が仕たく成らんか、かぶき方の舞をもよくこなしたるうへに、能もして見たくば、かつて次第とてをしへ給はらざりしなり、其のち五郎左衞門樣世話にて、親方を出、三右衞門どの取たてにて、吉田あやめと、我身よし澤あやめにて、一度に出、吉田に仕まけぬる事度々なりしが吉田は北國屋樣といふ御方に、能事を少し習ひしゆへ能仕立の所作をもつて、さい〱當りをとらんとせられしに、わが身は又地の仕内にのみ骨を折て勤し、いつとなくわが身名をしられ、吉田はとりあへぬる人もなく成て、今は役者もやめたり、

さてこそ五郎左衛門様の言葉思ひ當りたり、此心わすれがたく、我身家名を橘やとつき、五郎左衛門様のかへ名をもらひ權七とつきたるよし、ひそかにはなし申されし

一下手を相手に取たる時、その下手を上手に見する様にするが、藝者のたしなみなり

一仁左衛門方へふるまひに行しに、三八わが身に向ひ、申はいかゞなれども、ちと新町へ御出候て、太夫のてい御らんあるべし、五年まへとは大きにもやう替りたり、きさまのなさるゝは五年まへの太夫の躰なり、只今はよほどそれよりはおちたる風なれども、諸見物それを見てゐる故、風があふのあはぬのと申よしのこたへに、御ゐけん忝し、しかし太夫は高上なるがよし、たつた五年の間に、それほど風俗が替りたらば、二十年まへはうつとうんしやうなるべし、よき御異見にて心つきたり、五年まへをりのりこし、廿年まへの風に致度候、けいせいは古風にてだてなるがよし、茶やふろやは、當世過てするがよし、此心得より外はなしと申されば仁左衛門どの茶やふろやは當世過たるとある、過たるの言葉かんしんと申されしと、あやめのものがたりなり

一仕内が三度つゞいてあたると、その役者は下手に成ものなりと、若き衆へ申されし、當りたるかくをはづすまいとするゆへ、仕内に古びがつくと見えたり

一女形はがく屋にても、女形といふ心を持べし、辨當なども人の見ぬかたへむきて用意すべし、色事師の立役とならびて、むさ／＼と物をくひ、扨やがてぶたいへ出て、色事をする時、その立役しんじつから思ひつく心おこらぬゆへ、たがひに不出來なるべし

一女形は女房ある身をかくし、お内儀様がと人のいふ時は、顔をあかむる心なくてはつとまらず、立身もせぬなり、子はいくたり有ても我も子供心なるは、上手の自然といふものなりとぞ

一あやめ申されしは、頃日天王寺へ花の會を見に行しに、いろ／＼のめづらしき花共あり、したが今は梅のさかりなり、梅はめづらしからずとて、名もしれぬ珍花共ありて見物の衆手を打てめづらしが

りぬるに、我身は梅花をよく立たるにのみ心とまりたり、ありふれたる花にて仕立の上手なるをかんじぬ、仕内もその樣な物にて、女形は女の情をはづさぬやうにするが根本なり、めづらしくせんとて、おかしみをたてとし、つよい事を柱とせば、花は珍き花なれども、いつみてもよき花とはいはれまじきなり

一玉川半太夫は、上手ではなけれども、すぐ成仕内にて名を取たる人なり、岩井平次郎は上手なれども、曲が過て後には、見おとされしなり、心得置べき事とぞ

一小勘太郎次くせに、左の手にて膝をたゝく癖あり、去とは見苦敷と人々ゐけんせしに、尤なりとて心を付てたゝかぬやうにせしに、扮仕内にはり合がぬけて、俄に七ぶぎりも仕内下りたるやうなり、それより又膝をたゝいてすればいき返りたる樣にはり合が出來たり、しかれば癖といふものあしき事なれ共、無理直しはならず、無理に直せばいきほいのぬける事ありとぞ

一澤村小傳次若衆形にて、藤田孫十郎芝居へすみ、わが身は都万太夫へ住たる年、小傳次何か腹を立て、わが身方へきたり、淚をながし、同座若衆形鈴木平七と、鑓の仕合の所へ、女形浪江小勘かけ入てなだめる事あり、其所へ敵役笠屋五郎四郎來り、ヤア／＼わけまい／＼、すでつちめらがほでてんがう、互にてこねさせたがよいとの口上、いかに狂言なればとて、色をたてる我々を、すでつちめとはわるきせりふ、もはや明日より座本へ斷いふて、出まじきとの儀思ひ出せば久しき事なり、狂言のせりふにすでつちめといふが、色の障に成るとある心入、今時の若衆思ひもよらず

一ひとゝせ早雲座にて、座本は大和や甚兵衞なりしが、立役藤十郎京右衞門いまだ半左衞門と申せし時なり、一所に住べきはづを、夷屋座へ取たてゝ座本にせんとの事ゆへ、半左衞門は別になる相談より、辰之介とわが身兩人早雲座へすみたり、辰の助は夷屋座のやくそくなれども、半左衞門と入替りの心にてのこと成しが、辰之助をとりはなしてはと夷屋座へは、萩野右馬之丞岡田左馬之介を抱へ、其詰に十次郎かもんをかゝへたり、時に藤十郎申

されしは、今京都の芝居三軒の内、夷屋座には半左衞門といふつはものに左馬之丞左馬之介あり、藤川武左衞門若けれども長十郎あり、此方芝居には座もと甚兵衞われら次郎左衞門にそなたと辰之助あり、か樣に牛角(ごかく)なれば、二軒ははり合ふこゝろ出來る物なり、万太夫座には、中村四郎五郎を立役のかしらにして、生島新五郎、古今新左衞門、三笠城右衞門、女形は霧波千壽、淺尾十次郎、よほどしばゐがら落たり、此芝居こわものなり、二軒ははり合ぬけになり、万太夫座は脇ひらはずに精を出すなるべし、座がすぎると外を直下(ちよつか)に見るゆへ、あやうきことあり、これ狂言の仕内第一の心得とのはなし、果してその年万太夫座は大入にて、二軒ははきとなかりしゆへ、座本せきが來て、いろ／＼狂言の相談有を藤十郎いふはいや／＼こゝをせくはあしゝとて、長十郎を山形おりべの助に仕立、新よめかゞ見を出されけるに、打て返すほどの大入、長十郎初て地の舞臺へ出られしときにて、澤村小傳次おとゝの由ひろうし、新役者へ大役をさせて入をとる工夫、はたして仕當てられしを思へば、こゝろへ置べき事と、あやめの物がたりなり

一女形といふもの、たとへ四十すぎても若女形といふ名有、たゞ女形とばかりもいふべきを、若といふ字のそはりたるにて、花やかなる心のぬけぬやうにすべし、わづかなる事ながら、此若といふ字、女形の大事の文字と心得よと稽古の人へ申されしを聞侍りし

あやめ艸終

耳塵集上之卷

今の歌舞妓は名護屋三左衛門といふ浪人より始りしとなり其故は雍州府志第八十章之內

一又一種歌舞妓といふ者有、元出雲大社の巫女國女と號するものあり、神樂を一轉して歌舞す、是古に所謂白拍子の類にして元神樂の變風なり、永祿年中名護屋三左衛門といふ者あり、元武人にして落魄生や京師に有て、則國女と密に通ず、懇にこれ謀て歌舞妓の曲をなす已上雍州府志

聞書　　必能院敬信

一山下京右衛門曰、坂田藤十郎は天性の名人にして、三ヶ津心有藝者のゆるしたる名人、今上手といはるゝ立役の中に、藤十郎に及ぶ藝者一人も有べきとはおもはれず、我も又及ばず、然れども天性の名人成るが故、却而師匠には成まじきや、その故はたとへば木作りの名人が松にてもあれさま〴〵に枝をねぢたはめ、見事に作りなしたる松と、又天性ふりよく見事に生たる松のごとし、余の上手は下手をねぢたはめ能藝にいたしたる上手なり、それゆへ今の上手は下手をねぢたはめ能藝にする事を覺え弟子にをしゆる事あり、其故に師匠とたのまるべし、又天性の名人は生れながらの名人なる故、我ねぢたはめられたる事なければ、我又人をねぢたはむる事をしらず、去程に師匠にはたのまれまじきなり

一又曰實事をして上手にといはるゝは柔がらにならず、實事は初心の藝者もその狂言の筋をいふがゆへすこしはまぎるゝ也、いはんや、上手をや、誰ならぬはおかしき事也、さればこそ耳取て鼻かむやうなことをいひて笑はすはあれど、藤十郎ごとく實をいひて笑はす藝者はあらじ

一坂田藤十郎曰、おかしき事が實事也、常にある事をするが故なり、今の藝者の實事を見るに、互にそりをうち鼻とはなとをつき合、ぬけぬかんなどの詰合、實の侍のすべき業ならず、此心ゆへせりふづけも又々右に同じ、是をさして實事といふべき歟

一又曰身ぶりのよしあしを吟味する藝者あり、尤見物に見するものなれば、あしきよりよきはよからん、予は吟味なし、身ぶりとて作りてするにあら

ず、身ぶりはこゝろのあまりにして、よろこびいかるときはおのづからその心身にあらはるゝ、然るに何ぞ身ぶりとて外にあらんや

一或藝者藤十郎に向ひ、貴殿諸藝達し給ふ中に、別而道外のあど名人なりしとほむる、藤十郎曰道外のあどとは何ンの事なるや、予は道外と狂言する也、手前さへ實らしくまんぞくに狂言すれば、道外もしやすく、おのづからあどになる也、あどゝおもひあどをうてば、道外師は狂言の邪魔に見ゆるものなり

とかく道外師と狂言を大事にかけよくせんとおもへる也

一大坂道頓堀にて勸進能ありし時、京よりほねや庄右衛門とて、名人の小皷三番目を打れしに、諸人こぞつて是を聞く、尤上手とは思ひしかどもおどろかず、則初日の事なりしに、藤十郎は庄右衛門弟子殊に無二の懇故、見舞がてら見物して、諸人の評判を聞、すぐに庄右衛門旅宿へゆき、此度の能大坂の衆中の心ざす所は御身一人、しかるにさのみほめもそしりもせず、心得あれかしとなり、庄右衛門心あかれ、明日よりはほめられて見せんと有りしが、案のごとく二日めより日本第一の上手とほめたり、藤十郎又行て今日の評判格別、何ンと心得皷を打給ふやと尋しに、庄右衛門曰初日は大事にかけ、御身が狂言する樣にほめられんといふ事をはなれ、まんぞくに打たり、今日はさらばほめられんとおもひ少し曲を打たり、それ故ほめるならん、ほめさすやうにはうちやすきもの、まんぞくには打にくきものとかたりぬ、予同座に居て是を聞、ほめられふとほめられまいと自由になるは是名人藝なりと、つくづく顔をうち守り居たりぬ

一藤十郎曰、藝者によりて狂言をされ相手にも笑せる有、是心得がたし、我仕習の時より今日舞臺にて仕なれたる狂言を今日は此心にてせん、明日はかくやせんと、常々舞臺にてけいこせり、其故はあたらしき狂言の稽古初日は相手も我もせりふ覺へざるがゆへ、狂言の仕樣あらかた也、隨分よくせんとはおもへども、なかなか仕なれたる狂言とは格別也、夫ゆへしなれたる狂言をされ、相手笑はせる藝者は此心なきやとなり

一或藝者藤十郎に問て曰、我も人も初日にはせりふなま覺なるゆへかうろたゆる也、こなたは十日廿日も仕なれたる狂言なさるゝやうなり、いか成御心入ありてや承りたし、答て曰我も初日は同うろたゆる也、しかれどもよそめに仕なれたる狂言をするやうに見ゆるは、けいこの時一せりふをよく覺へ、初日にはねからわすれて、舞臺にて相手のせりふを聞、其時おもひ出してせりふを云なり、其故は常々人と寄合、或は喧嘩口論するに、かねてせりふにたくみなし、相手のいふ詞を聞、此方初て返答心にうかむ、狂言は常を手本とおもふ故けいこにはよく覺へ、初日には忘れて出るとなり

一高安友之進といへる能の脇師名人のきこへ有、大坂道頓堀にて勸進能有し時、初日の前日友達をいざなひ舟遊びに出、酒にみだれ放埓の躰也、折ふし京より津田三益といへる醫師見廻に下り、同船に有しが、友之進にむかひ、此度の能御身獨の目當也、則明日は初日然らば今日はきんがく有べき處に、油斷の躰明日の初日大事ならずやと異見ありしかば、友之進答て曰、初日は大事のものにてはあらず、大事は常の稽古にあり、稽古の時魂を入能覺へ込、初日はわすれて出るなり、初日を大事とおもへば我藝にあらずと答へければ、三益感じ入たるとなり、予がおもふ事藤十郎日頃仕なれたる狂言にて稽古を仕覺へ、あたらしき狂言初日にせりふをわすれて出るとかたられしと、友之進初日はわすれて出るとこたへられしも同意也、名人の詞は自然と當れると

一或人藤十郎に問て曰、せりふははや口なるがよきや、またおそきがよきや、答て曰はやかろわるかろ大事なし、おそかろわるかろなをわるしといふ事あり、同じわろき內ならば、早きはこらへらるゝ、おそきはわろき中のわろき也

一淨るり太夫加賀掾弟子共寄合て曰、師匠の淨るりは、ふし所になれば極て見物ほむる、我々は何ほど節をかたつてもほむる事なし、さればとて我々が付たる節にもあらず、師匠のふし付をよくならひてかたれどもほめざる事はふしぎといへば、加賀掾打笑ひさにてはあらず、我は何となく淨るりをすなほに語ふし所にてふしをかたる、おぬし達は

淨るりをかたり出すといなやほめられんとおもひ、初手から終まで面白くかたる故、ふし所に成てもはやおもしろふかたるふしなきゆへに譽る所なし、第一ほめられんと思ふて語るはわろしとなり

一耳底記に細川幽齋の曰、ほめさせんとするは下手藝也

一藤十郎曰、ほめられんとおもはゞ、見物をわすれ狂言を誠のやうにまんぞくにいたしたるがよし

一又曰嵐三右衛門は名人なり、性根もなき狂言に手くせとしてうそらしきせりふをつけ、そも〱狂言といふものは、此三右衛門がやうにするもの也といはぬ計に眞面になりてする故、おもしろし、其上藝もゆる〱とする事ならぬものなり、とかく我には藝に分別有てわろしとなり

一京右衛門曰、我等しならひの時分、能心を付て見るに、三右衛門はうそらしき狂言の仕樣にてしかも名人なり、藤十郎は誠にして同名人なり、とかく藤十郎と三右衛門と二人を一所にして仕習はんとおもひ精を出したるとなり

一或時十二段狂言仕組の時、淨るり御前藤浪千壽、十五夜袖崎源次せりふの時、藤十郎曰源次狂言の仕方心得がたし、千壽は淨るり御前にて主也、源次は十五夜にて家來なり、然るに今日狂言の仕樣主從のわけ見へず、根心に千壽は一座の立女形、我はそれより二三番目、何ンのその藝になつたら仕勝てくれん、がく屋の心が舞臺へ出る、千壽に仕かたんとおもはゞ、淨るり御前は主、十五夜は家來なる程に、その家來をいかにも家來らしく能すれば、千壽に仕勝事もあらん、家來の分として主に仕かたんとおもはゞ、十五夜にもあらず、本より淨るり御前にてもなく、もし今其樣な奉公人あらば隙をいだすべきより外なしとしかられければ、一座の人々感心源次はあやまりぬ

一佛の原三ノ後日の狂言に、梅房文藏請出したる奥州といふ女郎を、家來望月八郎右衛門が女房につかはしたるに、月日かさなれどもいまだ枕をならべぬよし、文藏心に扨は日頃いひかはせし詞をたがへじと、此文藏にたてる心中成るべし、返而八郎右衛門がおもはん所もはづかし、奥州に異見をく

わへんとはおもへども、人めをいとひ夜陰に及びかづきをきて女の姿にさまをかへ、八郎右衛門が屋敷へしのび入、奥州に出合右いけんせしかば、奥州大きにはらを立、枕をならびやうがならべまいが八郎右衛門殿と私との詰ひらき、一度女房にやつて置ていらざる御氣づかひ早々御歸あれといへば、文藏心に誠にあかさぬはこしもとどもあまたそばに有故ならん、今お隙をとり奥州とさし向ひに心底を尋んと、さしてもなき事にいろ〳〵と隙を入ることおかしき事にて文藏がしこなし也、初日七月十五日見物このしこなしにたいくつして、おけよ引込よと口々にいひて、其段狂言わけもなかりしが、芝居はてゝ予藤十郎かたへ禮に行、貴殿今日おかしき段、門左衛門我等談合にてせりふ付たりしかども、見物其意得ざれば力なし、せりふ半分御ぬきあれかしといへば、いや〳〵明日狂言の仕様ありと、十六日見物思ひ多くして有しが、かのおかしきだん大きにおもしろがり、藤十郎様ながふ〳〵と口々にいへり、其暮に藤十郎同道にて大文字見物に參らんとさそひに立より、扨々昨日とは違ひ結句は長々とせりふをつけそへなされ候が、ながふせよとは常々とちがひ、七月の見物の御きげん取くるしと申せしかば、いや〳〵見物にむりはなし、此藤十郎がさいくにおかしき所と心得たる故也、高が奥州が心底を聞んがためにいろいろと隙どるしこなしその氣を持狂言すればよしと工夫して、今日いよ〳〵せりふをながくつけてせしに、あんのごとくながふ〳〵といふてほめたり、とかく本心が大事なり、當年五十三になりしがいまゝであがらぬ藝、もふあがらぬ事かとくやまれぬ

耳塵集上之卷終

耳塵集下之卷

一古嵐三右衞門常に酒を好で呑るゝ故、舞臺にても誠の酒をのまるゝやうに見ゆる、扨々名人かなと譽る人有しが、かたへの人此度最上藤八鑓にてつかるゝ所、實にも誠つかれたるやうなり、定てあれも常々鑓にてつかれたるらんと笑ひぬ

一或藝者十二三なる實子の物をならふに、役者のならわひでもくるしからざるは、天露盤手跡其外是是はならはひでもくるしからずといひしかば、藤十郎聞ていや／＼さにあらず、役者の藝は乞食袋にて、當分いらふが入まいが、何にても見付次第ひろひ取、袋に入て歸りたるがよし、入ものばかり用に立、いらざるものはとつて置、入る時出すべし、ねからしらぬ事はならぬもの、巾著切の所作なりとも能見ならへとなり

一或藝者曰、下手役者の藝を見ても、心あらん人には修行になる也、其故は下手を見てわろき所をよく覺て我はせぬ也

一耳底記細川幽齋曰、一晉がいふ事は小笛に我笛を似せたらばくせ事なりといふなり尤也、年寄てと若き時とは違ふべき事也、一晉が曰我も若き時はゆたりと吹たる也、又我をしへぬ手をふくならば、をしへまじきとなり已上

一中川金之丞は、藤十郎京右衞門其外心ある藝者が名人とほめられし名人、金之丞予にたいして曰、人は舞臺へ出る度毎日ほめられんと申おもひ、けん物數多くいへども我はきらひなり、一所二所計り心をつけ念を入、其外はうけ返答いかにもまことしらしくせんとおもふのみなり

一或人香を聞習は、蘭奢侍を手本にして、それよりは淺き濃きあるひは聞がなきなど、分別する事あり、藝者もさもあらん、しかし手本になる藝者は唯ならんと問しかば、側なる人我も不知とや

一荒木與次兵衞金子六右衞門は、手負の名人なり、六右衞門曰手負とて刀を杖につき息つぎせはしく苦しげにする計にては有まじく、かたきいまだ近所に居ると思はゞ、隨分氣を張り、四方に眼をくばり、しかも深手と見へて苦にせぬ身ぶり、又かたき迯歸りたるとおもはゞ、初て手疵苦になる躰、又味

方かけ付看病せば、口にては強き事をいひながら、おのづから氣ゆるまりよはりたるてい、又手負の間刀を杖につくとも小足にあるき度々刀を杖につくは見へあしく、刀を杖につかば二足も三足もあるき、又刀を足本より二三尺先へつき立、それも刀に二足も三足も先へあるきこし、又右のごとく刀を二三尺ほど先へつき立たるがよし、刀の長さはつか共に乳切(ちぎり)なるがよし、刀みじかければ、腰かゞみてわろしといへり・尤成ル吟味なるべきか、其時分手負をして大分入たり

一京右衛門曰、藝は狂言のよしあしにかまはず、力一ぱいふんごんで致したるがよし、しかれば六七分の狂言も、十分にも見ゆる也、とかく窺(うかゞふ)てするは損也といへり

一藤田小平次は實事に名を得し藝者なりしが、或時刀の反りを打には、相手の目の中をにらみ付たるがよしといへり

一仙臺彌五七といふ道外師、京都にて高給銀をとり、並なき上手なりし故、予道外仕習の時分、ねがはくは彌五七程の藝者に成たしとおもふて居たりし折柄、藤十郎曰、一向道外するとも、必彌五七まねをいたすべからず、其故は此程の狂言に、只今大殿樣御死去なされしと聞て皆々おどろく、彌五七道外の南無三ぼう寐耳へ牛の入りたる樣な事かなといへり、いかに笑へばとて道外のいふまじき事也、先道外の役はいつとても不調法者麁想あほうなり、ねみゝへ牛が入たるとは、或は太鼓もちなどの師の輕口なり、たとへ師なりとも大殿御死去と聞てね耳へうしが入たるとはいふべからず、ねみゝへ水の入たるといふは常なり、同はね耳へ水の入たる樣な事といふて笑せたしといへり、予が曰左樣に申さば見ぶつ笑ひ申まじと申せしかど、そこが工夫なり、云所によつてわらふべしとなり、其後予がせりふに、たゞ奧樣若君樣を御誕生なされしといふを聞て、南無三寶ね耳へ水が入るやうな事かなといひしに大きに笑ぬ、かやうのせりふ付、格別よかりしとは此樣成ル吟味故歟

一或書物につんぼうは人々寄合て咄有に、人の口元を見て唯にこ〳〵と笑ふなり

一大津ならやといふ狂言に、藤十郎あきじりなりし

が、目の玉をまん中におけば、あきじいの様に見ゆると也

一村松といふ狂言に、藤十郎瘂の役なりしが、初日に見物瘂度毎に見物おかし笑ひぬ、則能狂言にて評判宜敷ゆへ、或人初日の夜悦に行、瘂大きに出來たりとほめぬ、藤十郎其意を得ず、此度瘂をせんと思ひ付しは見物のこゝろにいつもの狂言には藤十郎はよくものをいへり、此度は瘂故おもふ事もしかじかと得いはず、不便の事やとおもはせ見物に泣せんとおもひしに、今日笑ふたり是は予が工夫たらざる所、明日より泣せんとあんのごとくなかせたり、ある藝者行て問て曰、いか成工夫にて今日の様に見物なきたるぞやと、答て曰、瘂はおのが心に我は瘂なると思ふが故、人のきくをはづかしくおもひ、たしなみて瘂ぬ、しかれどもうれしきとき、或は腹の立時、我を忘れ瘂るなり、夫故今日は瘂ず、嬉敷ときはらのたつ時又はおかしき時に瘂る計也、答て曰、然共初中後瘂の様に見へしはいかに、答て曰口の内にて瘂りいふ所は瘂ず、口の内にて瘂が故それ程せりふのあいだをぬく計也といへり

一古嵐三右衛門ぬれ口舌などの狂言の仕組に、相手の役人を我が内へ呼寄せ、本より酒ずき成ゆへ頓て盃を出し、其座に懇して居る子どもあれども、それには目もかけず、外の子供につぶやきさゝやき或はほうずりつけざし、後には醉て正躰なし元より若衆は悋氣して様々のゝしれば、同子ども立役あいさつに入中を直し盃させり、此時は藤十郎親坂田市左衛門眞野や勘左衛門座本にて有しゆへ、其座へ藤十郎來り、是は〳〵そう〴〵敷事かな、初日も近日ぞや、若衆と口舌所にては有まじき事、はや〳〵けいこせよと笑ひ〳〵申されしかば、三右衛門我も左様に存じ、最前より稽古を致したりと、初日盃を出せし時より、今なか直しの盃まで、若衆のりんき人々の挨拶にいたるまで、こと〴〵く皆覺へ、是替り狂言の稽古也と其通に仕ぐみたり、いづれも役人にはいかにといへば、作りたる事はわろし實よし、その義をおもふが故に、日頃は稽古の塲へ盃は出さねども、此度は替り狂言のせりふ付のため盃をいだし、若衆が是非悋氣をせねばならざる様に仕かけかくのごとし、いづれも舞臺にて

唯今の樣にいたされよといへり、是又よき思ひ付なり、古人はかほど迄心をつくせり

一松本名左衛門我と人と立ならび所作をするに、獨舞ふ時今一人は囃の前に住ひ居る、此時多くは休み湯などを呑り、我は休ず囃の前に住ひ居ても心の内にて舞ふて居る也、しからねばうしろすがたあしく所作切ると也

一彌五左衛門といふ有、役は花車形にて、狂言作者の名人なり、むかしははなれ狂言なりしが、今の二番つゞき三番續はこの彌五左衛門作なり、則非人かたき打の作者也、藤田小平次も此彌五左衛門吟味によつて實事師の名をとれり、荒木與次兵衛中川金之丞金子六右衛門其頃若き藝者寄合てとかく彌五左衛門が手にかゝらねば、本の上手には成がたしといへりとなり、則彌五左衛門曰、今上手の中に、相手のせりふをいふ内に、休でゐる藝者多し、よからぬ事にや、第一狂言ゆるまり、其身のからだ死るなり、とかくせりふをいふ相手の顏をよく見てゐるか、但耳をそば立聞てゐるがよしといへり、

一片岡仁左衛門敵役致されし時曰、いつとても狂言の詰ぎはには敵役のせりふにゐゝ口おしい、たくみし事があらはれた、家來どもそれ一人も殘らず討てとれといふ事は、敵役をはじめいづれも役人狂言の詰ぎは成ゆへ、俺相になりぬ、一番の狂言の詰際は大事也、我はそこに心をつけいるにもせりふに力を入さらに詰ぎはとおもはず念を入るなり

一富永平兵衛は右彌五右衛門に次での作者にて、今顏見世の役者附に、狂言の作者と書事富永平兵衛初り也、延寶八年の暮の顏見世成りしが、其當座は諸人こぞつてにくめり、夫より平兵衛打つゞきおもしろからぬ狂言に見物あきはてぬ、今一入工夫致され能き狂言を致されよと申せしかば、平兵衛曰、わろき狂言を出すは能こゝろならねど、座本衆の大き成ル仕合なり、替る度毎に能き狂言を出し、もし其よき狂言に見あきなば道頓堀に草はゆべきといへり、いへばいはるゝものかおかしきへらず口なり

一高野山万燈といへる狂言の中の口閉に、嵐三十郎腹を切る、藤十郎此看病をよくいたしぬ、或藝者是を見て、京右衛門に語つて曰、藤十郎は常に外科醫

をよく致さるゝ故、手負の若病自然とよし、外の役者の及ざる所といひしかば、京右衞門いわく藤十郎は外科をよく致さるゝ故手負のかん病よく致す事をして見物にほめられぬ、我は本より外科をせざる故隨分不調法いたし、京右衞門は外科をせざるゆへ手負のかん病得せぬ所をよくするといひて見物にほめられぬ、いへばいはるゝものなり、しかし是誠なり

一寶永四年亥の年、江戸村山平右衞門京都万太夫芝居へ登り、十月江戸へ下る時坂田藤十郎私宅にて立振舞致され、予も相伴いたせしが、平右衞門藤十郎に向ひ御かげ忝し、我始て下りし顔見世より、貴公樣を手本と致し、實事ぬれ事によらず一切貴公樣の御まねを仕りしに、よき事は何國にてもよし、今江戸二三番切の藝者に成りぬ、是皆貴公の御蔭と申せしかば、藤十郎かぶりをふり、幸定而わるからん、藝は我性根より一流仕出したるこそよけれ、我を手本にせば我よりおとりぬとおもへり、今少し工夫致されよと申され其塲しらけたり

一京右衞門曰、狂言により中入より出る役人の事を前にいはねばつまらぬ事有、是よからぬ事也、今する所より外に跡の爲にいふ事其塲のさまたげ、口は調法なもの中入にていかやうともいわるゝものなり、狂言はいつとてもおもしろく出來る樣に致したるがよきとなり

一藤十郎曰中入に出る役人の事、前にいはでかなはずばその役人の事表にいひたて、今のせりふは次にいふべし、その故は中入の役人の事、前にいふは見物に能覺させんとの事なり、しからば表にいひ立よくおぼへさせたがるがよし、又今いふせりふを次にせよとは、今いふせりふは則今の狂言にして居るゆへ、見物をのづからよく覺るとなり

一或時替り狂言近松氏我に談合にて、樂屋に役人を集め、狂言を咄したるに、我が役よき人は狂言をほめぬ、役惡き人は吉惡をいはず、狂言のよしあしをしらざる人は、いつも顔を見て多分に付べきてい、中にも文盲にして狂言の心なき人は先一番にはらを立我が家來をしかり、きげんあしく人々にいとまごひもせず立歸りぬ、其ころ藤十郎座本にてありしが、きやうげんのよしあしをいはざれは、外よ

りいひ出すべき事もなし、藤十郎曰先上の口明より稽古の致されよと立歸られぬ、翌日より稽古にかゝり、四五日の內に上の稽古しまい、其後四番目の口明をけいこする日に至り、藤十郎今一度狂言の咄しを聞事をさんと有しゆへ又はなしぬ、然れども言あしをいはず、木履をはき傘杖にて出る程狂言成しが、樂屋番にいひ付、右の品々取寄、木履をはき杖をつき傘をさし。さあせりふを付られよとありし故、近松氏予かたの如くせりふを付一遍稽古を通したり、藤十郎曰扨々よき狂言かな、初て此狂言の咄しを聞ても又今聞なをしてもわろき狂言と思ひぬ。しかれども作者の心に能き狂言をおもへばこそ役人をよせて咄されたり、我心にあしきと思ひても見物のほむる狂言あり、我當年五十に餘れども、狂言の咄しを聞て善悪を定めがたし、我是をしらば、今時分は長者にも成ぬらん、仕手のふ作者の心格別なれば、先せりふを付させんと思ひ、木履からかさ杖を取よせ、はじめより立て稽古をせしなり、是縱横のまんといふ心、然るに今作者のせりふ付によつて、正しくよき狂言としれり、兎角狂言の稽古は我がごとく初手から立たるがよしといへり、此おもひやりは、もと藤十郎能き狂言を拵らへられたる故なるべし、いつとても藤十郎狂言のはなしを聞るゝに、我が役の多少にはかまはず、狂言の筋を能きかれたり

一京右衞門狂言の咄しを聞るゝに、よしあしにかまはずまづ狂言をほめられ、作者にむかひせりふ付よくたのむとなり、若氣に入ぬ狂言あれば、ひそかに作者を呼付、今一度聞なをし善悪の談合有て仕直せり、かりにもはなしの場にてあしきとは申されず

一藤十郎曰、若まづしうして金銀ほしき時、金銀はぬすみても有べし、又道なかに落てもあるべし、狂言計はぬすまんとおもひても、拾はんと思ひてもねからなきもの也、此事をしらぬは文盲なる下手の役者なり

一其頃女がた若衆がた立役道外親仁方に至るまで、藤十郎相手になるもの皆上手に見へたり、其故はせりふのいひやう、いきづき立居に付て、藤十郎立てをしへぬ、何も藤十郎に歸伏して居る故に是を

そむかず、をしゆるにまかせ致すが故格別によく見へたり、しかも藤十郎役すくなくでかしばへなき事あり、或人藤十郎に對して曰、狂言は面白くはやれども、貴殿役すくなく是のみ殘り多しといへば、藤十郎打笑ひ、狂言さへよくばかんにんあれ、藤十郎が藝の善惡はかねて見物によくしれり、全く藤十郎を見する芝居にあらず、狂言を見する芝居也といへり

一延寶六年午の正月に、新町あふぎや夕霧過行たり、同く二月三日より、夕霧名殘の正月と云外題にて、則坂田藤十郎藤屋伊左衞門といへる買手に成りぬ、此時藤十郎三十二才、又所望有て同六月に右の狂言を出せり、又同十月二日より右の狂言をいだし、同廿九日迄大入、おなじく中頃より右の狂言いだせり、是は來る正月二日より、夕霧一周忌致さんが爲見物に思ひ出させる爲也、一年の內同狂言を四度仕る事およそ是はじめの終ならん、寶永六年己丑霜月朔日藤十郎死去生年六十三歲、右延寶六年午年より、寶永六年丑のとし迄三十二年、此間に夕霧名殘の正月、同一周忌、同三年、同七年、同十三年忌、同十七年忌、其外右同じ狂言、くりかへし致したる事以上十八度、是又珍らしき狂言也、其外けいせい玉手箱、又堺大寺、傾城江戶櫻、傾城阿波の鳴戶、けいせい佛原、同二の後日、壬生大念佛、同後日、同二の後日壬生大念佛、同後日同二の後日の壬生秋の念佛、かやうのけいせい事かぞふるにいとまあらず、又其頃每年七月に曾我を出せり、是は春二の替りに傾城事致せし故、一年の內に二度はかゝとおもひ、大磯の虎とかはらん爲也、かやうの事を思ひえはせば、凡一代の間傾城事を致せり、藤十郎は得手成故なるべし、見物ゆるしてよく見て居たり、尤今實事師は一代實事を致さるゝたぐひならんか、然共藤十郎ごとく同じ狂言を度々致さるゝ事まれなり、京右衞門曰、藤十郎は名人にて我得たる狂言いたさるゝ、我に得たる狂言なし、とかく藤十郎は名譽の藝者也と、藝噺しの折ふしいつとても此事のみなり

一林九兵衞といひて花車形の名人あり、藤十郎二十餘りの時分、九兵衞方へゆき狂言の仕樣をならひ度よし申されければ、九兵衞曰、我は花車形なる故

隨分女子のまねを仕る、貴殿は立役成程に男のまねを致されよ、今の立役を見るに男はすくなし、もとより女形にてもあらず、何やらわけなし、今よりして隨分男のまねを致されよとなり、此詞を工夫して少し藝を仕習ひしと也、やゝもすれば右の咄を仕出し、杉九兵衞は二ケ津に有まじき名人とほめられたり

予つたなき耳につもる塵の言葉書あつめたれば
おのづから耳塵集とも思ふべきなりし

耳塵集下之卷終

續耳塵集

民屋四郎五郎 名俳江音 撰

一山本京右衞門は下がゝりの事をいふて毎度あたりを取り、坂田藤十郎はいはねばかなはぬ塲にても、それを底につゝみて當りをとられたり、元祖三右衞門は見物に、さし合の人も一所にゐ給ふ事有べし、其まへにてけいせい買をして見せる程さし合なる事はなし、狂言なればこそさし合ある人見ても居たまへ、仕内を風流にして、言葉にさし合はいはぬはづと申されしよし

一藤田小平次常にいひけるは、刀のそりを打つ時は、左のひざを引、相手の目の内をにらみ付てうたざれば、立派になしとぞ

一或人坂田藤十郎に、切狂言を別に出すときの、役者の心もちはいかにと問ひければ、初の狂言とは其人が生れかはりたる心にて、切狂言に出べしといひけり、何れ名人の心づかひは格別とみへたり

一坂田藤十郎説に、女形はやわらかでわろひはいつぞには能成物也

一元祖澤村長十郎旅行の時、道中にて枝ぶりよき並木の松を見て曰、直をすける人、此松を植おかば一しほの詠と成べし、此並木の中に交りあれば、枝のみ邪魔になるとて切とるべし、たま〳〵其長に至る藝者ありといへども、此松のごとく却而下手の爲に惡名をとらん事、殘念なりといはれき

一今の敵役にめりはりの差別なく、つゝこんで狂言するのみにかゝわるゆへ、立役も又敵役にさそはれてするどきを表とす、たとへば蟷螂の友喰ひといふ事あり、たがひにあらそひ手を出してはくはれ、足を出してはくはれて、終には其身をはたすの道理なり、古片岡仁左衛門狂言の序びらきの後々には、我か巧みのさまたげになるものと知つて、小柄をしゆりけんに打しを實形の立役是を見あらはして、其意趣を聞かんと思ひかけなく、彼小柄を仁左衛門に見せけるに、仁左衛門色めにも出さず、扨扨見事の細工かな、隨分大切になされよとほめて歸しければ、立役も仁左衛門しわざと心得て出せし小柄なれども、其色め少しもなければ、相手の仕内いろ〳〵工夫ありて、大出來にてありしなり、まりをけるに上手より渡せば請取やすしといふがごとく、敵役は仕内なくとも、此心得第一なり、さればこそ仁左衛門舞臺の仕内は、千石取とみへたりとかや、小佐川十右衛門は七百石取と見へ、音羽次郎三郎は三百石取とみへし

一元祖澤村長十郎狂言に、長持のうちに忍びの者ゐるをしつて、鑓にてつく仕内ありて、長十郎袴のもゝだちとり、思入してつか〳〵と行、なんのくもなく長持をつきしに、坂田藤十郎其時いふやうは、扨扨長持のつきやう心得がたし、ちと〳〵工夫せられよといひければ、長十郎其夜工夫して、翌日袴のもゝ立ちを取、長持の傍へつか〳〵と行、又跡戻り袴もおろし、そろ〳〵とさし足して長持の傍へより、耳をたて、内に忍びゐる樣子を考へて一ト鑓につきければ、藤十郎手を打て、さて〳〵驚き入たり、後々は其一人たるべしとほめられけるとかや、はたして三ヶ津に名人の譽れ高し

一音羽次郎三郎が曰、坂田藤十郎せりふのくせとして、かわいや〳〵おれじや〳〵などゝ詞を二ツづつ重ねていへり、是は大入の時よく聞へさせん爲

又口拍子にもよりての事也、然るを後に伏見藤十郎といふ役者、よく似たりとて坂田と名のり、勤めし狂言に相人地藏何の佛と問へば、彼伏見藤十郎答へのせりふに、六道能化の地藏ぼさつじや／＼と、長き詞を二ツかさねたり、是非に二ツはいはねばならぬ事と覺しにやおかし

一番羽次郎三郎は上手のうへ狂言立る事も達者也、太平記五日替といふ狂言をかんばん出し、五日めに新狂言を替へて出せり、又大坂歌舞伎四軒ありし時、角の芝居にて篠塚次郎右衛門大石宮内の役、万菊は力彌の役にて、外題は鬼鹿毛武藏鐙といふて四十七人の狂言を始てしたる時、大當りせしかば、中の芝居も又取組、西の芝居は榊山親小四郎棠崎林左衛門三軒共に同シ趣向なりけるに、番羽次郎三郎は東の芝居に勤めし所、人まねをせず格別に木曾義仲の狂言を作り出し、評判よく當りし也

一番羽次郎三郎は、淨るりに仕たる事をつるにせず、其故は凡操上るりは元來歌舞伎をまねて語り人形もかぶきをまねして行ふ事也、然るを歌舞伎とより操をまねぶる事かぶきすいびのもとひ也といへり、澤村長十郎も其心にや、上るり事を勤る事嫌ひなりしに、銀主より望つよく國姓爺始めて竹本座に出せし時、新四郎和藤内にて役合ず、長十郎かんきの役也、元より心に入らぬ故にやあたらず、中の芝居竹島幸右衛門希有成役にて大當りせし也

一以前は親父方にも、花車形にも名人有て、一場を受取よく勤し也、今はよき役なれば、立役よりつとめ、又花車方を若女形も勤むる本意にあらざる事也、小勘太郎次といへる花車形、三十ばかりの女房の姿、ひらりぼうし著て付舞臺より、替前に向ふ棧敷の下に立ゐたりしを、其初日同座の役者も向ふへまはりし時、彼太郎次が女姿の風情よきを見て、誠に見物の女と思ひ尻をつめりしとかや、太郎次はかゝる名人ゆへ、元祖芳澤あやめ太郎次をまねて、極上上吉の惣巻頭の女形となりし

一むかしの役者は揚まくより出端を大事にせし事也、出てむかふを切るに名その風情流義あり、其替時は其名人と思はれ、其狂言もしつかりとおもしろく有しとかや、三原十太夫といへる敵役は、小男

成しに長き大小をさし、出端にきつと表を切り、扨ねりてあるく所大きに見え恐しかりし也、今は出端に流義なし、これも時にしたがふ故ならん

一むかしの役者は肌を見せる事なし、大はたぬぐ心のときは上著をぬいて白むくになる也、刀を腹へつきこむといふにも、白むくごしにつきまはす、此事は今もあり、然るに白むくごしに腹を切るは無理也と難する人なきは、是白むくを肌としてむかしよりつたへ見なれたるゆへ、自然と見物不引するは、又自然なりけらし

一役者の尻をからげる事、いにしへは稀也、立合のときは上褶を帯にはさむ計也、それゆへ江戸詞に尻をはしよるといふは、端折るといふ詞にて侍る、音羽は褶を右へ引上はさみ、櫻山庄左衛門は褶を左へはさみたり、誠に尻からげする事は、小佐川十右衛門より始る、片岡仁左衛門との出合にて、兩人ともによき男にて見事也、白縮にて三里紙をあて、足のかざりとす

一狂言の中に太刀打立入する事、只少し立まはり計にて、今の役者の宙返り事水車かりそめにも立入する事なし、宙返り事とんぼうがへりの類は、輕業仕のまねにて嫌ひ、とんだりはねたり太刀打する事下作也とて立者はせず、近世音羽次郎三郎澤村長十郎親大和山甚左衛門などは、尻からげる事太刀打は稀也、只狂言の致かたにてよく當たり、其前荒木與次兵衛非人敵討の時、手負の身ぶり太刀打はじめてこなしありしゆへ、珍敷あたりし也

一立合あるひは太刀打の時、かげを打とて大きなる拍子木にてぐはた〳〵とたゝく、むかしは加様の事はなし、或は龍をつかふか、鬼神など出合ふ時には、たゝきならせり、始には物蔭より打ならせし故かげ打といふならん、今はかげ打者、舞臺へ出て打ゆへ、田舍人はあのやかましく打人は何の爲じやと心得ず、當地の見物夫に咎へて、アレハ役者のはたらく音の心也といへば、役者の手足がはたらくとあの様に鳴はいかなる事とて、いよ〳〵がてんせざりけり、されば今は聞なれたれはかげ打ねば、役者も見物も淋しく、同じくは見物に隱して、物かげより打たきもの也

一金子一高日狂言末になれば、役者ざれ笑ふ、我は末

に成ても大事によく勤む、その故は東國西國數百里あなたの人、今日の見物の内に有、其遠方の稀人は、又と見る事なし、名ある役者のざれて見せるは、殘念の事也、藝者のたしなむべき義と、同座の人におしへけり

一櫻山庄左衛門はせりふ付に便有ゆへ、古歌をよく覺しとて、此人三千餘首古歌をそらにて覺たり、それゆへ庄左衛門はせりふ付上手也と、役者よく用ひたり、俳名は鷲山と申せし也

一片岡仁左衛門曰俳諧を仕習ふべし、神祇釋教戀何にても役にしたがひ、心も詞も文盲ならず藝のたよりとなるは、はいかい也とすゝめしと也

一ある老翁曰、役者に五德あり、貴き御方の前にもゆるされ出、諸人に賞せられ自然と古語を覺へ、又勤めて腔脉をめぐらし嗜て年若く見ゆ

一凡新狂言相談きはまりて後、一ト場づゝしぐみ立る時、其役人を呼よせ、圍碁して、せりふを口うつしにをしへ、一旦はゐる時まで立、又小かへしとて再遍けいこし、又次を作者せりふ工夫して口うつし立る事也、其座の立者出る場は、其立者狂言を仕組し也、中興狂言趣向むつかしく成てより、執筆頭書せよとてせりふ付のいひ出しを、一くだり程づつ書たり、狂言本とてくわしく書事は、金子一高よりはじまりける也

一立役女形等何役にもあれ、出端に舉詞あり、又見渡はやしに景色をつらねせりふはやりけり、わか立役を女形の舉詞に云○よう／＼立髪姿に伊達風流股だち袴すそ高く、たつたの川にあらねども紅葉の顏にうすげしやう、淺黄羽折の紐きやしやに、結びとめたる戀のくゝり、目はありはらのなりひらも、あんまりよそにはござんすまい、やりたい命切たい小指かはるなかはらじ、二世までと、かはす枕ににくまれて、浮世も後生も後の日も、思ひの淵に身はしづむ、扨も／＼見事な御器量ではあるはいな○又若衆せりふ○むかふに見へまふしたはくらま山でござります、あの山へ心不淨なるもの參りますれば大小の天狗いかりをなし、惡風魔風しきりにして、にわかに引さき梢にかけ、おきまする、まつた心有侍は僧正坊に願をかけ、これをいのるともがらは、異國のはんくはい張良も、あざむく程の

いせいあり、なんぼうおそろしき御由なれば、これよりはるかに御拜禮なされまして然るべう存ます、かやうのせりふにて大當りせしとかや、其外數多聞傳へ覺へ侍れども、ことしげければこゝに略す

一中川金之丞といふ立役は、おかしき事天性の上手也、ある狂言に使者奏者物語の所へ、金之丞茶の給仕役にて出、茶わん差出し引下り、傍にある内ふとてんがうに茶臺を左の手にさしこみ、使者用事言付る所に、金之丞かの茶臺手におしこみし故、俄にぬけずいたみ難儀なるをかくし、うちたいる思ひ入、見物ことの外面白がり、どよみをつくり擧たり、かゝる事にて大當せしとなり

續耳塵集終

賢外集

東三八述

立役染川十郎兵衛聞覺へし事をはなせしを東三八（狂言作者也）書置る一冊にして賢外といふは十郎兵衛法名なり

一坂田藤十郎はけいせい買の名人と、もてはやされたる稀人、ある年夕ぎりの狂言に、ふじや伊左衛門役を勤る筈に極り、今度の狂言には上草履いるなれば、早々あつらへ然るべしといひわたしける、扨ざうり出來あがりたりとて見せければ、藤十郎見てこれは大き過たり、仕なをすべしと云付ければ、男申けるはおまへのお足の寸を取誂候へば、違ひ申さぬはづといふ、それにても大きなりとひたすらいひければ、買物方の者これにいか程ちいさく致さんと尋ければ、一まわりちいさくと申より、すぐさまあつらへ直し、惣稽古のせつ彼ざうりちいさきゆへ、指にはさみ出られたり、初日にも同じく指にはさみ出る、樂屋口に居たる役者名はわすれたり、若ざうりへお足が入りませぬかと、氣を付

ければ、其返答は仕ながら、其儘にて舞臺へ出たり、ある人此事を不思議におもひ尋ければ、藤十郎いはく、此度の草履は揚屋の庭にてぬぐ事あり、舞臺にぬぎ捨たる時ざうり大きければ、諸見物藤十郎はさてもきつい鍬足なりと見出されては、重てけいせい買の狂言はならざりしと、答へられし、すべてか樣な事までも氣を付、狂言仕ける名人の心得は格別の事なり

一坂田藤十郎心安き祇園町料理茶屋へ行、これほどの座敷に茶所なきは如何といへば、亭主されば の事でござります、何とぞ年頃望ますれども、ちつと左樣のならぬいはくがござりますといふ、藤十郎いかほど入候やうと尋ければ、五十兩程かゝり候と答ふ、それはいと安きことなり、其金子は此方より遣し申べく間、急圍(きつにかこひ)を御建あれといひかへり、夫より藤十郎懇意の方へ金五十兩借用申たしと、手紙にて申遣しければ、早速先方より調達して、手代持參しける時に、藤十郎とてもの御世話に、步(ぶ)に被成下かしとたのみ、殘らず步判にして奉書の紙二枚出させ、ひんねぢ持參して、件の茶屋へ行、亭主に逢ひ右の步金五十兩袂より出しあたへけり、右の金子調達せし人、一兩日して藤十郎方へ來り、件の譯をありのまゝに咄す、時に用達せし人、左候はゞ步にてなくともくるしかるまじといふ、藤十郎云、袂より出し、人に遣す金子小判にては下卑てよろしからぬと存、それ故步にかへ遣候といひけり

一坂田藤十郎稽古の節は、いつとても藤十郎方へ皆皆行ける、ある時替り狂言の稽古に、相手の女形水木辰之介、山本歌門、金子吉右衛門同道にて、朝飯後行けるに、いまだ床あがらざる故、次の間に待ゐる、程なく起たるや、戸の明く音又は手水の流るる音など聞、やがて座敷掃いて、暫有てこれへお通りあれといひければ、やがて皆々座敷へ通りてみれば、どんすの鏡ふとんの上に座し、茶せん髮にて提たばこ盆をひかへ、扨一禮すむと、此度の替り狂言は中々よう出來たるとの噂、どのやうな趣向と狂言の筋を聞かれたり、毎日相手の女形に終日の馳走をして歸されけり、此稽古の間毎日の獻立を自身好み、常の女の喰よきやうに取合、女形の

あしらひも、やはり女同前の心得にて、はなしなどもあり、甚深切行義なる事ともなり

一坂田藤十郎高給銀をとり大坂へ抱られし時、京より水を樽詰にて取寄、飯米を一粒ゑりにさせて用ゆ、其事を見聞人々、扨も藤十郎はけふがる奢ものかなと專ら噂ありし事誰いひ聞するともなく、耳へ入たるが、ある人に逢ふていはく、私飯米を一粒ゑりにさせ、水を京都より取寄候事、我がこゝろしらぬ人は、定ておごり者なりと沙汰もあるべし、全く奢にあらず、當芝居主、拙者を抱らるゝに、大切成金銀を出し置れたり、米に砂あつて若噛合せ歯を損じなば舞臺にて、せりふ洩て聞えかぬべし、又年ごろのみ付ざる水をのみ若腹中など惡く成一日にても舞臺を引なば、芝居主へ義理濟ず、加樣に身持養生心を付て、此うへ身分に故障出來ることは是非なし、よつて斯は申付るなりと語られし

一中村四郎五郎若ざかりの頃山下京右衛門一座に居けるとき、京右衛門大イに出來たり、見物ほめける其夜坂田藤十郎京右衛門に逢ひ、今日の初日見物にゆきたり、貴樣はいかゐ下手なりと云、京右衛門諸見物の評ばんとは大イに相違したるにより、肝をつぶしながら、左候はゞ二日めも見て給はれといふ、心得たりとて藤十郎二日めも見物に行たり、京右衛門樂屋に入ると藤十郎の棧敷へ人を遣はし御苦勞ながら樂屋へちよと御出給はれといひやる、すぐさま藤十郎がく屋へ行、京右衛門に逢申けれは、貴樣御賴ゆへ今日も見物致たり、其元はとかく下手なりと、昨日にかはらぬあいさつに京右衛門も大きにこまり、芝居果より、我家に歸らずすぐさま藤十郎宅へ行、藤十郎に向ひ初日の御批難により、今日又工夫にて致たりしに、やはり其元御氣に入らず、此上は我力にも及はず、御指南うけたしといふ、藤十郎左候はゞ申さう、中村四郎五郎は今若手には日の出の役者なり此度の狂言、其元は四郎五郎よりさきに役あり、あれほどに當られては四郎五郎次へ出て何をかせん、なぜ若手をたすけるやうには心がけせられぬと敎訓仕けるに、京右衛門手を打てかんじぬ

一右近宇兵衛といふ役者、旅にて所作事の上手、後に京本舞臺へ出たり、澤むら長十郎も元來旅役者を

修行して、勢州の芝居より京本ぶたいへ出、二ばんめを勤、精出し上手に成たり、中古まで二番めは中通りの役者習たるを、近來は脇狂言同事に、二ばんめも小詰より勤る也、これらとても古實なく成たり、江戸は今に餘風ありてゆかし

一坂田藤十郎曰、歌舞妓役者は何役をつとめ候とも、正眞をうつす心がけより外他なし、しかれども乞食の役めをつとめ候はゞ、顔のつくり著物等にいたる迄、大概に致し、正眞のごとくにならざるやうにすべし、此一役ばかりは常の心得と違ふなり、其ゆへいかんとならば、歌舞妓芝居はなぐさみに見物するものなれば、隨分物每花美にありたし、乞食の正眞は形までよろしからざるものなれば、眼にふれておもしろからず、慰にはならぬものなりよつてかくは心得べしと常々申されし

一坂田藤十郎、金子吉右衛門と連立、芝居より歸りがけに高瀨の橋の上に立とゞまり、水の流れをつくづく詠め居て、漸時を移す、金子氏思けるは、何ぞ下へ取落されしか如何と、共にのぞき、或はふしぎに思ひ、供人云く何ぞおとし給たるはと問ふ、答なし、暫あつて扨も清々とした物かなと、高瀨川の流水を感じて、夫より歩行し、其比の宿元河原町四條上ル町へ歸られしとなり、

愚按、儘ならぬもの、加茂川の水双六の簺と申傳へ侍る、此事思ひ合され侍る歟、元來坂田氏は生得やくにたつのたゝぬの差別なし、物事を麁略に見ぬ人なり、ある日河原町四條下ル町に、いにしへ豆腐屋あり、最中豆腐をこしらへゐるに、ふと眼が付腰もかけず、見せ先に立盡し、とうふといへるものはいかやうにすれば喰やうには成やらんと、くわしく尋熟得して、扨もと感心して立さりぬ、とかくかりそめの事にも、麁略にせざる氣質信實なる生得なりと皆人沙汰しあへり

一坂田藤十郎、祇園町ある料理茶屋の、くはしやに戀をしかけ、やがて首尾せんと思ふに、件の妻女、おくの小座敷へ伴ひ、入口の灯をふき消たり、時に藤十郎すぐさま逃げ歸りけり、其翌朝右の茶やへ行、妻に打向ひ、御影にて替り狂言の稽古を仕たり、此度の狂言は、密夫の仕内なり、つゐに左樣の不義

を致たる事なければ、甚此仕内にこまり、此間太夫元よりはやく初日を出し申度と、再三せがまれ、日夜此事にあぐみ、密夫の稽古を男に出合もらひては、其情うつらねば、ひとつも稽古にならず、我願ひ成就致けいこ仕たり、今朝太夫元へ、初日明後日御出しと申遣はしたりと一禮申されし、一座の人人扨々名人と呼ばるゝ人の心がけは、凡慮の外なる事と手を打ぬ

一坂田藤十郎、鳴物御停止にて、芝居休みの間、心安き一座の内の女形二三人供人引具し、江州石山へ誘ひ行、酒盛して居ける、向ふに武門の御歴々とおぼしき御方、御忍びに御參詣遊ばされたるや、御近習打まぜ若殿原五六人、其外附々上下十二三人御酒宴あり、暫有て、若き侍來、それなるは藤十郎ならずや、酒一ツふるまひたしと、旦那の仰を達す、有難仕合と速に御幕の内へ伺公して、御盃を頂戴仕、さま〴〵の咄しなど申上、殊なき御機嫌にて時をうつす、日も西にかたぶきければ、明日より又芝居始ますれば、追付歸宅仕申度と御暇を乞ひ、元の同行の氈の上へ戻る、程なく若侍かけ來り、何成とも望あらば申べしと承る、何も所望に無之候へば、宜敷仰上られ下さるべしと申せば、それにてはかへつて御機嫌よろしからず、是非何成ともと達て而との事ゆへ、左候はゞ御幕の内の邊なる松の樹拜領仕たしと申、其儘皆々駕籠に打乗京へ戻りける、夫より日を經て表に大勢人聲、何事やらんと勝手へ尋ねければ、松の木の來りしといふ、門違ひなるべしと思ひしに、坂田藤十郎方はこれなるかと、松の樹の宰領這入、いつぞや石山に於て約束せし、松の樹送り遣すとの口上、夫にてやう〳〵思ひ出せり、日外拜領申上し、御歴々の賜物なるべしと存當り候へども御名も承らず、ありがたき旨を宰領に申かへしぬ、我等執心かけし松の樹と思ひ贈給はりし段有難き事かな、御大身とは見請ぬれど、ちいさき木にてもあらばこそ、大木といひ猶以一山へ届なくては、理不盡に掘る事叶ひがたく侍らん、扨々有難き御こゝろざしかなと感心し、早々庭へ植べしといひ付ければ、路次口殊の外さはがしく、いかなる事とたづねければ、先刻の松の木、塀につかへ路次口へはいり申さぬよし答ふ、藤十郎聞て、

さて〳〵埒もなき事かな、つかへてはいらぬならば埒をこぼち入べし、跡にて塗りおけば濟事と男共をしかられける、此事金子吉兵衛居合せ、上手の名を得し人の心は別なりと、ほとんど感じ、此事を人々にはなしけり

一中村七三郎は元祿年中、江戸にて諸人に譽られ評ばんをとりたる、やつし方の名人、元祿十年卯霜月京四條山下半左衛門後に京吉兵衛門といふ座へ上京し顔見世は坂田藤十郎方、大イにはやりて七三郎甚不評判にて、よからぬさたのみすくなからず、馬の跡あしといふらくしゆまで、人々諷ふほーどの仕損ひ、一兩日して追々藤十郎方へ一座の役者共來り、少長七三郎俳名也さん〳〵のとり沙汰あり、又江戸より登り、京にてやつし事をせらるゝといふ事、大きなる了簡違ひ、そこが下手のしるしなんど、少長をそしりける、藤十郎申けるは、成ほど下手なり、京の見物は大イに下手なり、七三郎は先近來の上手、此人の上に立もの當時一人もなし、少長のぼられしゆへ、我等も精出しなば、今年中にはちと藝もあがるべし、顔見世は此方仕勝けるゆへ、二の替りは大きなるこはもの也、けつして二の替りには仕つけらるるならんと、顔見世なかばに申居られしが、はたして翌辰正月廿二日より、二の替りにけいせい淺間嶽といふ狂言を出し、少長ともへの丞の役、ごばん縞の羽織をしき、茶碗のわれにて、ひとり碁を打、太夫奥州とのくせつの段、いやはや外に、まねの仕手なき仕內、京中の見物うへをしたへかへし、顔見世とは打て替への大當り、さても七三はきつい上手かなとの大評ばん、此狂言百二十日興行仕けり、隣芝居の一座、さてこそ藤十郎に申されしごとく、扨々上手の胸中はおそろしき事とかんじぬ、藤十郎金子吉左衛門をひそかにまねき、顔見世より申すごとく、今年は少長といへる大敵あれば、一座の役者は勿論、先狂言に骨をおらねばならず、貴樣狂言を作らるゝ故、油斷もあるまじけれど、一座の者よりも隨分貴樣勢つよく、狂言工夫あらねば、芝居の爲にならず、顔見世を仕勝しものゆへ、作者の氣ゆるみ出る物ゆへ、わけて申とくれ〴〵內意ありける、さて替りめ度毎藤十郎七三郎が仕內を見物して、天晴の上手なりと云、又七三郎は、藤

十郎が藝を見て、さて〳〵藤十郎といへる役者は、聞及びしよりも、いたつて上手なり、我等是までに、藤十郎の仕内を見て工夫つけなば、藝をあげん物を、何をいふても今はかひなしと悔まれし、藤十郎は七三を見て、先舞臺の行義はなはだ正敷見え侍る、嘸かし不斷の身持よろしからんと、心底床しく、それよりちかづきに成、互に心安く度々出合申されし、七三郎元祿十一年同十二年二とし山下座をつとめ、同年の暮に江戸木挽町山村座へ下らるるに相續きはまり、七三郎より藤十郎方へ置みやげを贈りたり、藤十郎餞別に何ぞおくらんとかねて思へども、あの方より置みやげを贈られたるに、はなむけを又送りなば餘りしつぺいがへしにておもしろからずと、何も沙汰なしに暇乞に行、心よく見立別レぬ、其暮極月廿九日に七三郎江戸の宅の門口に、歩行荷六人して持こむ、少長此よしを聞、添狀を見れば、坂田藤十郎よりとあり、其荷を見れば、わくに入たる大壺を出す、少長肝をつぶし、何を送られたるぞ、藤十郎の送りものなればさぞや、心をこめられたる物ならんと、書狀を急ぎひらき見れば、加茂川の水一壺しん上仕候、大ぶくに御遣ひ被下べくとの文躰、少長ほとんど我を折、さてもさても我在京の内出會、多方こゝろを知りたると思ひの外、此度の送り物にて心の底深き事、はかりがたしと、家内は勿論人々に語り申されし、さしもの少長だに送り物にて、藤十郎の心底ふかき事量りかねたり、其餘の人、藤十郎の事など一向論じがたし

一山下京右衛門曰、歌舞妓芝居のせりふは、隨分言葉にさし合がましき事、これなきやうにこゝろがけ肝要なり、其故は親子兄弟一所に來る見物人まゝあればなりと、若き役者への敎訓尤なる事なり

一坂田藤十郎曰、舞臺にてけいせい買の狂言を勤るさへ、さし合なり、然れどもこれは是非に及ばずと申されし、しかるにいつの頃よりか、次第にさし合のせりふおほく、近き頃は舞臺にて二人寢る狂言など粗あり、かやうの趣向を作る作者、古人の示敎をしらず、たとへ作者いかやうに作り出すとも、其仕內を呑込勤る役者も同罪なり、藤十郎申され

しごとく、二三十年過なば、やくしやの行儀大きに亂ぬべしと、未前を察し申されし事、日々に思ひ當りたり、狂言に差合の躰あらば、其場に及ばぬうち、いかやうにも仕様あるべし、近來のきやうげんは、親子兄弟一所に見物成がたし、扨々にが〳〵しき事なり

一坂田藤十郎曰、歌舞妓やくしやといへるものは、人のたいこをもつ氣しやうにては、上手になりがたし、そのやうに心降ると、後は役者同士の出合も、はなはだ疎遠になる物なりと、若き者どもに毎度申されし

賢外集終

佐渡嶋日記

蓮智坊著

一六法といふ風俗は、むかし信州歴々の武門より出たる人、伎藝を好てつゐに浪人し、上京しける、其頃名古や山左衞門といへる、武士の浪人もの、出雲國の巫女、於國と夫婦に成、京北野にて芝居興行仕けるに寄、彼山左衞門とひとつに成、江戸さんちや通ひの風俗をして見せけるより起りけるとなん、江戸にては丹前とひい、大坂にては出端といふ、それより傳り、其後立役、荒木與次兵衞、右の六法をふり入を取たるなり、それまでは今の六法のごとく、擧を廻し、振し事はなく、左右ともに眞直に振たり、今も江戸に古風殘りあり、與次兵衞より元祖嵐三右衞門請續是を工夫し、いまのごとくを仕はじめけり、其のち古人大和屋甚兵衞ちんばにて、六法を振る工夫をして當りを取たるなり二代目あらし三右衞門、三代目と相傳して、毎度勤しなり、其のち予又工夫しけり、其振筆には書取難し口傳

一予始て六法ふりたるは、大坂道頓堀芝居にて、座本より顔見世に六法ふりくれといふ、是まで三右衛門甚兵衛など振たる跡にて、我等など中々思ひ寄らずと辭退せしに、ぜひといへるにいなみがたくて、衣裳の切付も物數寄して、初日の夜の顔みせ、六法ふる半より、見物おけやい〳〵と、聲々いふより、半疊の五六枚打こむといなや、追々ばらばらと爰かしこより、半疊數多打こみける、夫もかまはず勤仕廻、樂屋へ入たる時、惣座中首尾能〳〵手を打たんといふ、予は甚其こゝろなきゆへ手を打たず、二日目三日目までおけよ〳〵といひ〳〵七日つとめ、拵畫に成ても、やはり見物さん〴〵に打こむゆへ、こは口惜く當かほみせ六法にて仕損ひては、後々まで耻を殘す事、無念やとなほ〳〵しんぼうして精を出し勤ければ、いつともなしに評ばん大イに立直り、よいや〳〵のかけ聲、それより日々に取沙汰よくなり、端々の評判よろしきと聞し、とかく工夫をこらすしんぼうが肝心なり、しかし初日より仕様替ることなきに、評ばんなをりし事はいかゞと、尋し人あり、此事我に問ふて我はしらず

一予五歳の時より、親傳八所作事をおしへ、東武へつれ下り、碁盤人形と名付、ごばんの上にて我に舞をさせしに、あなたこなたより召され、春より九月までつとめたり、表御方の御機嫌に入、毎度召れ碁盤の上の所作を勤ける、御きげんの餘り、肥前國唐津へ、予がごばんの上に座しゐる人形を燒につかはされ、三ッ出來して御とりよせ遊ばされしほど御興に入たり、其としの十月京都へ登る道中筋ごばん人形の所作を聞およびし、宿々にてこれを望む、のぞみ次第に此所作事をつとめたり、九歳に成りたる時、最早ごばんの上に乗かぬる時節より、傳八工夫仕出して、七ばけの曲といふ事を案じ出し、おしへ込し、後長五郎が七ばけと我仕出せしやうに成たり、親の厚恩筆に書つくしがたし、思へば一むかしと成にき、所作秘傳奥に附す

予出家して、建仁寺御門前に住し、法花經讀誦朝暮おこたらず、佛の道を願ふより他事なし、ある時三條新地頂妙寺へ日參の折柄、ほとりの古道具やにて、彼五歳の時勤しごばん人形の唐津燒、

店に出あるにおさなこゝろに見覺し人形なればさっそく速に價をきはめ、求めたりけり、先年御前御氣に入の御側仕の衆、一つ拜領仕ける、定て其行すへならめ、これをつく〴〵見るに付ても親の粉骨碎身せし事をおもひ出し、涙をとむる事とは成けらし

一ある年勢州の芝居へ下り、はやし方など殊外無人、勿論道具等不都合にて、小鼓一挺あれども大鼓なし、是にあぐみ居けるを、予細工に竹を切り付け物をして大鼓をこしらへ、それよりの工夫にて、一人して二挺鼓と名付、はやき事など打たりしに、二挺鼓といひならはし、何とやら一曲と成りたるもおかし

一澤村宗十郎江戸にては、長十郎と成、後に助高屋高助と改、俳名を訥子といふ、此人元來は京都御醫々より出、若年のみぎりは仕官して由緒ある血脈なれども、生得心和らか過て、身を持崩し、歌舞妓芝居の役者とは成たり、初のほどは左もなく流浪して、あちこちと漂泊し、抱らるゝともなく、他國めぐりの芝居の笛吹、又何かの助けなどに賴まれ行、夫より勢州の芝居へ出にける、其時は澤村藤五郎といへり、予勢州へ下り、はじめてちかづきに成、仕內つく〴〵と打見るに、餘の旅役者と違ひ、全躰面白き藝ぶりあり、後々には立ものと成かねまじき者にてもなしと心を付けるよりある夜ひそかにまねき、役者にて終らば、江戸へ下り精出すまじきやと申ければ、答に我身も其望なれども、心にまかせずといへるより、當所の事は此方引受申べし、せひ當暮江戸へ下らるべしとすゝめて、其年の冬下しぬ、程なく宗十郎と名を改、次第に評判よく、つゐに海老藏に次ての立者と成たり、予其後に江戸へ下り、一座に住ゐたりしなれども、今は此方より手をついて挨拶する程の立もの、以前の事は尋思にも出さず居たりし、樂屋にて大勢聞ゐる前にて訥子いはく、扨々めづらしき事かな、其元樣と一座致事、思へば一むかしなり、先年勢州にて御世話に罷成、御蔭にて先今日これほど迄に、立身致たりと、予に一禮をいひ、扨海老藏其ほか立ものゝ役者に向ひ、拙者はいかゐ恩を請し者など、ふいちやうしけり、その時思ふに名をあげる人は、了簡格別

の事なり多くの人いにしへの事など、いさゝかもあらはさず、今よき身分になれば、禮を失ふものなるに、大勢の中にてかくむかしをあらはす人おほからず、其のち大坂へ來り、上手と評判をとり、其暮京都南側の芝居へ十日が間、京見物へ目見へに立けり、棧敷の直を上るほどの大評ばん、大入にて近來の賑ひ、江戸へ下り、其暮又上京し在京の間、上手〳〵と賞美せられ、其のち又江戸へ下りたり、在京の間女形の心得に成る書を編みたりこれを訥子四十八條といふ

一近年所作事をする役者、おびたゞしう衣裳を著かさね、所作の間々にはやし方の並ゐる方へ向ひ見物をうしろになして、件の小袖をひとつづゝぬぐなり、所作事に上著をぬぐといふ心は、見物長事を見詰て居れば、なんぼう面白き事にても、すこしは眼にそむものなれば、其ねふりを覺さんがために脱ものなるに、中古より餘慶著重ねるを全盛にして、餘りさい〳〵ぬぐゆへ、せわしなく却て眼のさまたげに成なり、はやし方に、向いて衣裳を脱だり、衣紋をつくろへば、其間見物の眼あくなり、とかくさまあかぬがよきなり

一大坂竹田出雲、子供に六法ふらせたきと、予を頼みに越されたり、所望に任せて下りければ、出雲殊の外悦び、扨子供に指南仕けるに、振やう首の遣ひ様思ふやうにゆかず、時に卽座に工夫出來、六法のふりやうの程拍子は、鷄の首のつかひやうに、ひとしと申聞せければ、忽に合點して、稽古滿たり、物はたとへ程よき導はなし、しかれども是とても賢ならでは用に立がたし、扨六法の指南の跡は、さまざま古人のはなしなど仕けるに、此時節竹本筑後芝居には、淨瑠理かたり目にて、竹田家内は、道具立其外萬事、こしらへ最中にて、あまたの人數銘々役々を相勤ゐる、道具立あつらへ方の者、ちよと御出あれと次の間へまねく、出雲こたへに何の用なるぞと尋しかば、柳の樹出來致候、御覽なさるべしと申、それを此方が見るには及ばす、正眞の柳に似さへすれば濟む事と申されし、さすが竹田家相續せらるゝ人ほど有て、不斷の心得かくべつなりと感じける、芝居は萬端藝の仕內道具立等に至るまで、正眞をうつすより外なしと、古人のおしへ尤な

る事かな、善惡とも不斷の事あらはるゝ物なれば、人は常に心得が大事なり

一非人敵打の狂言は、中古姉川新四郎此仕内を始て、仕出せしやうに、若き人は思へども、非人かたき打の狂言は、むかし荒木與二兵衞といへる立役仕始たり、其時のすがたは、病かづらにて、隨分くろぐろとあぶらを付、顏のつくりも白粉濃くぬりうつくしく、衣裳は白小袖の無地、大廣袖紅絹うら、花色の丸ぐけ帶を前にむすび、手足も隨分白くして出立せられしよし、是予が親傳八はなしにて聞つたへたり

愚按、元祖坂田藤十郎申されし、非人の心得やはり自分の考にてなし、古人申置たる事此荒木與次兵衞のせられし非人かたき打の出立にて、藤十郎申されしと附合せり、これをおもへば、姉川致されし非人の心得は、雪と墨ほど違ひとは此事なるべし、新四郎非人の仕内よきゆへ、人々毎度申出すなれど、こゝろへは甚つたなし、是姉川を譏るにはあらず、古人の說と合しての論なり、仕内も古へとは甚野卑なり、ためしものに來りし加村宇多右衞門がせりふに、敵打といふは命おしさにいふと、さん〳〵せめかける時、竹に仕こみし刀をぬきさし付、靑江下坂二ッどうにしきうでずんとよう切れます、へ………と笑ふ、荒木氏始てせられしは靑江下坂二ッ胴に敷腕といひ聞せ、さし付たる刀を両手に持ながら、左の方へ引寄、調子を低く、ずんとよふ切れますへ…………とゑしやくする、此善惡は後の藝者かんがへ見るべし

一親傳八予若き時つね〳〵いひ聞せしは、藝者といふ者は金銀に眼をくれる物にあらず、一生涯の内名をひろむるが、肝要なりと、毎度耳かしましき程さい〳〵堅く申付たり、此事子供のじぶんより年來聞こみ居しゆへ、予何國より相談に來りても、つゐに給銀の相對は致さず、賴なれば何方へ成とも二言となく約束極めたり、銘々業相應に給銀のわかち有て抱ゆる程の者は、夫々に相當のせるなるべし、しかれば給銀相對におよぶ事にあらず

一年中芝居ふあたりにて、年中勘定ふそくに見えけ

れば、此方より給銀をまけ、了簡付ヶ出たり、芝居主は役者と遊び名を上る事はいらず、第一金銀をまふくるが、其身の肝要といふ物、役者と芝居主との心得は、格別なり、夫に近年は、少しの給銀のあやにて、相談不濟方多しと沙汰を聞侍、此心底いぶかし、いにしへの役者中途に、出よの出まいのと、もめる事は皆役或は仕内に付ての申分なり、近來は金銀の事に付て、もめ粗おほしとかや、双方持なし惡敷は成たり

一地狂言は勿論所作事など、人の工夫して付たる事、後に又すべからず、近年は向ひに出すなんど聞ゆ趣向を、又こちらにもまけじと急に稽古などして、張あひ仕ける、見物同事を二軒見て、何なぐさみにならんや、官女などいとみやびやか成風俗にてせば、骨を負へる山賤の老たるさまなど然るべし、一日の狂言にても、堅き武士の詰ひらきあれば、けいせいの意氣地などの事、又はおかしき事など、とかく同じ事のならばざるやうにすること、此道の專一なり、むかしの當り狂言、佛原、淺間嶽、門松、嫁鏡などにてみるべし

一ひとゝせ備中國宮内といへる所の芝居へ罷下り、不計宿所にて死去せし、古人金子六右衛門が吉左衛門の師なり古墳に參らんとこゝろざし、少しのよすがを求めやう〱方角を知て、叢の中に分入、ちいさき石塔あり、花をさし水を手向、それよりほとりにて、人をやとひ塚の前の薄など刈とらせ、ほそき板をひろひ得て、矢立の筆にて金子六右衛門墓と書つけ、さしおきたり、天地は萬物の逆旅といへど、取わき役者は一所不住にて、何國にて終をとるやらん容しき身の上にてぞ有ける

一近來所作事をつとむる人は、所作の間々に右左より扇づかひさせ、又は湯をのみ、休息する人多し、これはいかん、見物へうしろを見せ居るうちは、正面にて舞より猶大事なり、此間のぬけぬやうに、心遣ひなを〱苦しきものなりと、古人もいひ置たり、さすれば湯を呑、扇つかひなどせねば、勤まらぬならば、所作事をせぬがよし、近來の人を、自畊責するにあらず、古人の敎訓を用ゆる人なき故に、書しるし侍る、親傳八子におしゆる時も、此湯など呑事、五歳の時より堅くいましめたり、近年所作

事、執心なる人々、物事爾に來る人に、先所作事の間に湯を呑む事、左右より扇つかひさする事を、最初にいましめ置たり、石井のなどの所作事を、舞終り、舞臺に打ふし、後見の人々寄てかいて樂屋へ入、此事一圓其意を得ざる事なり、先見物に對して不禮、そのうへ歌舞妓といへる物は、あれほど野卑なる物と、其身一人にて、此道の人々をさげしまるる事、芝居道のかきんなり、元來歌舞妓といふもの、左様なる不行儀の物にあらず、古實を能知たる人すくなく、近來年々に持なし惡敷成たり、坂田藤十郎云、元祿の末寶永に至り、今二三十年も年立たらば、芝居大いに衰と成べしと、その時分より、歎き申されし、夫にたがはず、享保年中より段々持なし違しなり、一向今は論に及ばず、今たま〳〵古人の教へを守る者あれば、あればあほうのたはけのと譏りのゝしる多かりき、藤十郎存生のうちさへ、役者不行儀に成たるとて、毎度歎申されし、いはんや今におゐてをや

一人形芝居にては、大坂石井飛驒といへる者、寄合の申きねばならぬ事也、元來は人形は、首ばかりにて持物を打きせ、手も足も遣ひ人の手にて仕たるもの、近來まで子供の翫びに、でこのぼうといへる物是なり、此石井氏、おとなの手を、人形の袖へさし込遣ひ申故、甚御見とむなしと工夫して、人形に手を拵付たり、夫より是に習ふて、足をつけ手の指をうごかし、眼を遣ひ眉を動すなど、近來はさま〴〵自由に作るなり、これ石井氏工夫の根元なり、今は飛驒の名は、讀芝居の名代計に殘たり

一元祿寶永年中まで、初の狂言して居る内に、替り狂言の稽古して、もはや申分あるまじと、替り看板を出したり、それより諸々役柄の工夫して、さあこれではよいと、おもも役者二三人心得すむと、來ル何日よりといふ初日のはり札を出したる事なり、近來は替かんばん出し置、假にかんばんをかけ置、外の狂言に替る事、折節にあり、是は何ゆへなれば、次の替り狂言の稽古も出來ざる内、先替り看板を出す、扨相談に懸り、役割りなど打寄り申合見る時、何か萬事差つかへ多く、一決ならず、夫故に狂言替り看板を又出し直す事有となん、初日二三日前より急に稽古して、誠に是本より急ぎ立しい

はん計に惣座中甚さはぎなり、此頗末成事、古今の相違をかんがへべし

一今時の若き役者衆のいへる事をきけば、誰が仕内は古風なり、あれにては當世人々のみこまずなど、毎度人事に付ていふ人多くあり、此事一圓其意を得ざる事なり、狂言の仕内は、老若男女貴賤の人情をうつすに、古風當流もわかつ事、呑こみがたし衣裳の物ずきは時分の流行有ものなれば、其時々を用ゆべし、心持に古今の風といへる事あるべからず、すでにかづらに諸分あり、老人あたまは、古風なりとて、皆黒髮計にても成難し

一役者の仕内に、あるひは功者根生名人などさまざまに號あり、しかし古今稀なる物は、市川海老藏なり、予此人を妙人と號たり、中々餘人のうつす事も及ばず、玄妙の役者なり、予江戸在住の時、柏莚海老藏俳名也申されしは、そこもと太夫本をなさるゝならば、いつにても登るべしと、いひける事の有し故、一とせ大坂道頓堀にて座本をせんと思ひ、柏莚を相談に、書狀下せし時、返狀に給金二千兩にて、手付金五百兩下さるべしと申來る、歌舞妓芝居始りて以來、給金二千兩取やくしや聞も及ばず、稀になる事を申越されしと、甚おもしろく、手付金五百兩調達して差下したり、あの方にもよもやと思ひしやら、大坂へ來りて其うつり挨拶をせられし故、予答曰二千兩の給金取らるゝ役者古今になし、夫を押出して申越さるゝゆへ、定てそれ程に格別の事、有べしと存るなりと申けり、予も物數寄なりと思ふのみ、顏見せは、ういろう賣のせりふ、先めづらしく、大入にて二の替曾我を出せし所、さん〴〵不當りにて、予息團十郎病氣を幸に、十日餘りにて相休、扨三の替の相談何をがなと樂屋おもてども、彼是申合けれども思案おちず、時に柏莚申けるは、此次は鳴神を出さんといへり、予も鳴神なれば、狂言案じるにも及ばずと、古き狂言を序へ繼合せつゞり、四番め鳴神上人をやつこがころす事あり、詰に鳴神の亡靈、雲のたへまに、つきしたがいがいこつの所作と思ひ付たり、柏莚生得狂言に切殺さるゝ事を忌てせず、予是をさせんと思ひ、四ばんめのがいこつの所、影法師にて拙者勤べしといひければ、左候はゞ殺され申べしと相談出來て稽古云合濟、

初日出せし所に、久米彈正といふ侍に成、使者に來りての仕内、あつぱれ誠の武士と見えたり、外に此まねをする人なしと大坂中の評判、扨も上手なりと感心し、四番めは二役鳴神上人の段、家の藝なれば手に入たる仕内、鳴神のひゞき近國は申に及ばず、遠方よりもいざ海老藏が鳴神見物せんと、わざわざ大坂へ來る人、數を知らず、押も分られぬ大評判大入、京の數寄人は大坂にて見物したる人多し、然れどもつゐに京出勤なく、是のみ殘心なり、顏に藝あるは奇妙の生得也、いづれ妙の字は遁れがたし、しかし歌舞伎役者の殺さるゝ役を嫌ふも、いか成事か是とても妙なるべし

〇しよさの心得

一ふりはもんくに有、もんくの生なき時は、品をもつてす、又もんくなく、ふしにてのはす時は、ひやうしにのる、なすわざはしよき成が故にふりに誠を本とす、何によらず其しよきがらのこゝろを、わするべからず

一しやうぞく大口事、たれら大かた能をする心持にて、風のくづれぬやうに舞ふべし、くだけたる風はあしく候

一侍の弓矢をたづさへておどりさはぐやうなるは見苦し、此しよさにかぎらず、すべて謡など入たるか、能がゝりのしよさを、諸人一どうにどよめき、譽るはあしく、只一言二言はむるは、ゆかしくてよし

一柴かりなどのやうなる、下々の親仁のしよさは、ふりの間に、むかし若き時の風を年よりて叶はざるふうの心持、あいだ〱に入これもしよさがらをしほらしく、するを第一とするなり

一婆々の所作、若き時のだて者の品を、年よりてかなはざるふりの間々に入、しほらしきを第一とす

一翁、老女、申におよばす其心持

一女形風は申に及ばず心をつくべきなり、立身に成り候時は、わに足に成べし、腰ほそにすそびらきよし

一鑓おどりは、隨分足を、片わにゝして、ひらけるがよし、身をそりおもたくと、ひやうしにふりを大きう、又間をせわしくして、鑓のまわるがよし

一きつねはかりう人、又は犬などに、おそれるやうにすべし、獅子は王なれば、こゝろたくましく持事、かんじんなり、一さいどれともに、頭をつかふべし、ふりのしなにより、たまかしく又は大間にもすべし、頭をつかふを第一にすべし

一著ながししよさは申に及ばず、其身著のまゝにて、それ〴〵にしよさの仕わけ見へ申やう肝要なり、すべて男のしよさに女のふりをする事、又はをんりやうの中にて、おどりいむべし、諸人ほむるとも、其所作の事わざより外の事すべからず

一ふりは目にてつかふと申て、ふりは人間の體のごとし、目は魂のごとし、たましいなき時は、何の用にも立ず、ふりに眼のはづれるを死ぶりといひ、所作の氣に乘てふりと眼といつちにするを、活たる振とは申なり、夫故ふりは目にてつかふと心得べき事第一也、はてしなき故、筆をとめぬ

佐渡島日記終

役者論語終

古今いろは評林

陳眉公的評ニ西廂記ハ、李卓吾的評ニ琵琶記ハ、千古揺當、後人尙且有ニ紙鶴泥龜之㦯ハ、是个甚麼緣故、謂ニ其翅不レ施足不レ縮也、原來院本的評論、世人唯知ニ介做レ乾扮做レ坤、未レ知ニ凍暖蒸寒之趣意ハ、是故到底、不レ免ニ膠レ柱鼓レ瑟之見識ハ、噫嗟、瞽子無レ眼、知情有レ僻、是个古今通病、遂入ニ膏肓ハ、況且後世灰飛煙滅不レ見ニ一個扁倉ハ、平安自笑主人、原是揷趣的元帥、其論ニ俳優ヲ眞個似ニ擔尹君平的善レ卜唐擧子鄉的善相一般、些寸花嘴、說レ綠談レ紅、遇ニ人所レ喜、登塲子弟縱然、做レ套做レ圖、能彀得ニ青龍擬ニ白虎ヲ麼、件々有ニ君眼中ハ、如今這忠臣藏院本、生則上從ニ澤都訥子ハ、下至ニ尾上芙雀ハ、三都四十餘次捣攔、一座之旦淨丑渾、論ニ其本事ヲ、頗盡其明辨當論誰入レ彀麼、啊噫、恁地的咱、自笑主人的才、却在ニ陳李二公之右ニ者可レ知、俺於ニ自笑ハ、一路友班、故人所レ謂酒見肉弟也、譬道羅子打レ鼓、猫子舞、得レ不レ爲ニ左氏ヲ作ニ玄晏ト麼、春レ勸當今趣レ情步レ趣的徒、死心搨地、熟讀ニ這書ハ、他日做ニ那知情的掌盤ヲ者、不レ待ニ七十三八十四ヲ呢、于レ時天明乙丑之冬日書ニ于淨蘆門前一條衕衕之寓居ニ

平安第一風流才子宿レ花眠レ柳幇襯主者　呂生子

發端

己を發して自盡すを忠と云とかや、其心を盡して欺ざる也とは自然の字論、忠を躰として義を要となすの作意々々どう取なしても、當らざるといふ事あらず、抑元祿十五癸午年、東武なる俳諧師賞晋齋其角のもとより、浪華の何某へ來りし文中に

此程の一件も二月四日に片付候て甚噂とり〳〵花やかなる說も多く候て無上忠臣と取沙汰此節其事計に候境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致候て十郎に少長五郎に傳吉いたし候へども當時の事遠慮も有べきよしとて三日して相止候前後略

但し少長は元祖中村七三郎、傳吉は二代目宮崎也

是ぞ此趣向の始として、大坂にては寶永七寅年、篠塚庄松座におゐて、吾妻三八作にて、則篠塚次郎右衛門大岸宮內の役、力彌には中興までつとめし佐野川万菊、若衆形の時これを勤しが、歌舞妓狂言にての始として、此狂言大當りなるよしとて、中寺町正法寺日親堂へ、繪馬に此圖をあらはし、次郎右衛門悅びの餘りに、是を奉納なし、今に殘れりとぞ、京都にては同じく寅年の秋、二芝居共右狂言を出す、一方は大岸宮內に山下京右衛門、一軒にては小佐川十右衛門、此役をなす、小佐川跡より初日出たれども、大にあたりを取しとぞ、其後享保二酉年、大坂にて古澤村長十郎大岸と成りて、姉川新四郎寺岡平右衛門の役をぞ勤め、大あたりを得て、同十一午年の秋、大坂嵐三右衛門座にて、又も澤長此役をなせど、此時は狂言少し、替りて不破數右衛門に嵐勘四郎勤し也、享保廿卯年四月、大坂にて中村十藏則座本にて大岸宮內の役をなして、此時堀部安兵衛に藤川平九郎、夫より後狂言いろ〳〵とかはり作る、或は大岸に姉川新四郎などの勤し事もあり、後延享四卯年、京都中村粂太郎座本の時、大矢數四十七本と外題して、澤村宗十郎後ニ訥子高屋高助元祖訥子大岸役にて、六月朔日より初日出して大入を取し也其矢聲大坂にひゞき、同じ外題にて市山助五郎、宮內の役にて狂言勤たり、今の假名手本七ッ目は、此時澤村宗十郎が形と成りて、凡其傚を手本と成來れり、其後歌舞妓狂言にも

寶曆十一年巳十二月廿二日　大坂角ノ芝居座本中山文七
泰平（たいへい）いろは行烈（ぎやうれつ）續十段

明和八年
小袖藏いろは 配 七册物　京北側西ノ芝居 座本尾上粂助

安永六年酉十二月八日
日本花赤穗鹽竈四十七段續　大阪角ノ芝居 座本小川吉太郎

是等も追々出て、各當りを取るといへども、兎角忠臣藏出て後は、此狂言を第一として、仕内も是にこそ、工夫物好を入、大きに委しく成たり

一操淨瑠理狂言にては、其比近松門左衞門作にて、寶永三戌の年五月五日より、竹本筑後掾の座に、兼好法師物見車といへる切りに碁盤太平記と外題し、此趣意を出したり、尤此淨るりには、高師直、鹽谷判官、また大星由良之助と出し初たり、又豊竹越前少掾の座にては、享保十八丑年十月朔日より、忠臣金短冊と外題を出したり、此時は小栗横山の時代にて、大岸由良之介の名で出たり、夫より後寛延元辰年八月十四日初日として、同竹本座にて初て假名手本忠臣藏と名題を出して、大當りの評判つよく有しが、其比太夫かたのもめ合出來て、此太夫嶋太夫など半にして豊竹座へ入替りて、大和掾初内匠太夫後有隣軒 上總太夫入來りて、しばらく勤といへども、自分の節付ケなせし程にもあらねば、おのづから勢ひうすく成りて、思ひの外に其年十一月中比迄して、蘆屋道滿にぞ替りたり、されども始に云ごとく、此狂言のほまれつよくして、始の大岸宮内の名は、是にて消て、是よりして大星由良之助にぞあらたまりたり、故吉田文三郎此大星の人形を遣ふも、彼澤宗訥子が風儀をあらはし、並木宗助の作意に、丸にて七つ目を其まゝにて用ひ入たりとぞ

一操淨瑠理にて同趣向の狂言の外題其年記をしるす

竹本座は
碁盤太平記 上下 寶永三戌年五月五日初日
假名手本忠臣藏 十一幕 寛延元辰年八月十四日初日
太平記忠臣講釋 十一讀切 明和三戌年十月十六日初日
躾方武士鑑 十幕 明和九年辰四月廿八日初日
いろは藏三ッ組盃 續十幕 安永二丑年七月廿八日初日

豊竹座は
曾根崎新地芝居にて 座本 竹本染太夫

忠臣金短冊（ちうしんこがねのたんざく）　五段續　享保十八丑年十月朔日初日

難波丸金鶏（なにはまるこがねのにはとり）　五段續十三段　寶暦九卯年五月十四日初日

此狂言の大序夜討の討果せて墓前に首を手向る計也

いろは歌義臣鑑（いろはうたぎしんかゞみ）　十一冊物　明和元申年壬十二月十七日初日

忠臣後日噺（ちうしんごにちばなし）　上下　明和九辰年四月廿七日初日　堀江市の側座本[illegible]此書

合詞四十七文字（あいことばしじうしちもじ）　十段續　天明二年寅九月廿三日初日　堀江市側座本[illegible]此書

太平義臣傳（たいへいぎしんでん）　十冊物　天明四辰年十二月二日初日　堀江市側座本[illegible]此書

忠臣いろは實記（じつき）　續十一段　安永四未年七月十五日初日　江戸豊竹肥前掾座

其外女ゆらの介になしたり、又は中将居處はあやつりなどにても、其傍を端（はし）くれに加ふる事有といへども、今是を略して、彼忠臣蔵の各社内のかはりめをしるし、それに評を付て、古今いろは評林と題する物ぞかし

一寛延元辰ノ年より、今天明五乙巳年まで年数三十八年の間に、假名手本忠臣蔵を三个津の芝居におゐて四十一度興行也、其役割残らず左に記す

天明五年乙巳霜月吉日　八文舎自笑誌

京都 忠臣藏 役割	北側芝居 中村松兵衛座 寛延二年巳三月十五日ゟ	北側西ノ芝居 嵐三右衛門座 寶曆二年申四月十七日ゟ	南側芝居 澤村國太郎 染松松二郎合座 寶曆十三年未三月十二日ゟ	北側西ノ芝居 尾上久米介 尾上紋太郎合座 明和五年子三月十五日ゟ	北側東ノ芝居 三桝德次郎座 明和九年辰正月廿九日ゟ	北側東ノ芝居 姉川千代三座 安永二年巳二月十一日ゟ	南側芝居 中村万勝座 安永四年未三月三日ゟ
大星由良之介	古 中村十藏	山本京四郎	山本京四郎	尾上菊五郎	坂田半五郎	市の川彦四郎	藤松山十郎
加古川本藏	古 嵐七五郎	榎山四良三	榎山四良三	中村歌右衛門	嵐七五郎	江戸坂京右衛門	市の川彦四郎
天川屋義平	二代目 榊山小四郎	山本京四郎	山本京四郎	尾上紋太郎	坂田半五郎	市の川彦四郎	坂東滿藏
寺岡平右衛門	古 嵐七五郎	榎山四郎三	今 中村十藏	中村歌右衛門	坂東滿藏	江戸坂京右衛門	市川才藏
鹽谷判官	二代目 榊山小四郎	澤村言治	嵐吉三良	尾上紋太郎	尾上新七	澤村宗十郎	市川才藏
早野勘平	竹中兵吉	古 染松七三良	尾上紋太郎	嵐三五郎	姉川みなと	市の川彦四郎	嵐七五郎
桃井若狹之助	竹中兵吉	中村正藏	富士松山十良	嵐三五郎	澤村宗十良	市川辰十郎	小佐川加賀藏
石堂右馬之丞	古 中村四良五良	古 染松七三良	尾上紋太良	嵐金才	市川友藏	江戸坂京右衛門	市の川彦四良
原郷右衛門	坂東助三郎	澤村清十良	嵐藤十良	坂東彌介	嵐藤十良	嵐藤十良	小佐川加賀藏
千崎彌五郎	太和山甚兵衛	水木吉三良	松屋新十良	嵐金才	大和山林左衛門	山下幸四良	市川權十郎
與市兵衛	坂東助三良	中村正藏	嵐藤十良	市川宗三郎	嵐藤十郎	松本友十郎	篠塚惣三

役							
てつち伊五	坂東助三郎	嵐彦三郎	今 中村十藏	藤川山吾	大和山林左衛門	江戸坂正藏	玉川此藏
高師直	古 嵐七五郎	古 今村七三良	桐島儀左衛門	市川宗三良	坂田半五良	嵐七五郎	古 淺尾國五良
斧九太夫	古 笠屋又九郎	古 笠屋又九郎	桐嶋儀左衛門	大谷友右衛門	嵐七五郎	坂東満藏	坂東満藏
斧定九郎	篠塚磯五良	古 今村七三良	藤川半三良	中村熊五郎	嵐武左衛門	山下俵五郎	古 淺尾國五良
藥師寺次郎左衛門	篠塚惣三	山本七藏	藤川半三良	松本友十郎 かはり	嵐武左衛門	松本友十良	山下俵五郎
鷺坂伴内	篠塚惣三	山本七藏	山中平十郎	松本友十良	山下俵五郎	松本友十郎	山下俵五[illegible]
大田了竹	篠塚惣三	笠屋又九良	桐嶋儀左衛門	松本友十郎	山下俵五郎	松本友十郎	山下俵五郎
與市兵衛女房	竹中兵吉	澤村吉次	富士松山十良	大谷友右衛門	坂田半五郎	山下幸四良	山下六三郎
となせ	中村八重八	中村富十郎	中村喜代三	尾上菊五郎	澤村國太良	佐の川花妻	藤松山十郎
おいし	淺尾元五良	淺尾元五良	山下六三良	桐の谷秀松	姉川みなと	姉川みなと	姉川みなと
おその	淺尾元五良	中村富十良	中村喜代三	中村粂太良	三枡德次良	姉川みなと	姉川みなと
おかる	中村松兵衛	嵐富之助	澤村國太郎	中村久米太良	澤村國太郎	姉川みなと	山下八百藏
かほよ	中村喜代三	山下金作	嵐松之丞	生嶋菊次良	澤村國太良	姉川千代三	山下八百藏

小なみ	大星力彌
大和山仙介	三代目 榊山四良太郎
山下岩之丞	嵐三右衛門
嵐松之丞	澤村國太郎
尾上久米助	市川吉太郎
藤川山吾	三桝德次良
澤村宗十郎	姉川菊八
中村萬勝	中村八重八

京都忠臣藏役割

京都忠臣藏役割	大星由良之助	加古川本藏	天川屋義平	寺岡平右衛門	鹽谷判官	早野勘平	桃井若狹之助	石堂右馬之丞	原郷右衛門
南側芝居 三升次郎吉座 安永八年亥三月十六日ゟ	中山文七	山本儀右衛門	中山來助	中山來助	中山他藏	中山猪八	淺尾豐藏	中山來介	尾上宗九良
北側東ノ芝居 山下八百藏座 天明二年寅三月十七日ゟ	嵐雛助	柴崎林左衛門	嵐三五良	嵐山十良	嵐三五良	淺尾汶藏	中村京十良	淺尾汶藏	嵐山十郎
北側東ノ芝居 名代都万太夫 座本布袋屋 天明五年巳九月廿五日ゟ	尾上新七	嵐雛助	嵐雛助	嵐雛助	嵐三五良	嵐三五良	尾上新七	嵐雛助	中山榮藏

千崎彌五郎	中山他藏	中村京十郎	嵐染七
與一兵衛	尾上宗九郎	柴崎林左衛門	中山榮藏
てつち伊五	中山猪八	嵐音八	嵐染七
高師直	淺尾爲十良	嵐雛助	嵐七五郎
斧九太夫	淺尾爲十良	中村東藏	嵐七五良
斧定九郎	淺尾國五良	嵐雛助	三國富士五郎
藥師寺次郎左衛門	山本儀右衛門	嵐音八	中村岩藏
鷺坂伴内	澤村國十郎	桐山紋次	坂東岩右衛門
太田了竹	淺尾國五良	桐山紋次	中村岩藏
與一兵衛女房	嵐菊次郎	嵐三五郎	尾上新七
となせ	澤村國太郎	嵐雛助	山下金作
おいし	嵐菊次良	姉川みなと	山下八百藏
おその	澤村國太郎	澤村國太郎	山下金作

役							
おかろ	山科甚吉	澤村國太郎	山下八百藏				
かほよ	山科甚吉	山下八百藏	山下金作				
小なみ	澤村千鳥	山科甚吉	嵐直藏				
大星力彌	三升次良吉	嵐三右衛門	嵐村次良				

江戸忠臣藏役割	森田座	市村座	中村座	森田座	森田座	中村座	市村座
	寛延二年巳二月六日カ	寛延二年巳五月五日カ	寛延二年巳六月十六日カ	寶暦五年亥五月五日カ	寶暦十二年午閏四月二日カ	明和二年酉五月五日カ	明和三年戌九月九日カ
大星由良ノ助	山本京四良	坂東彦三良	澤村長十良（後助高屋高介）	助高屋高助	二代目 市川團藏	二代目 中村七三良	尾上菊五郎
加古川本藏	坂田藤十郎	今エビ藏 松本幸四良	古 市川宗三良	澤村音右衛門	富澤辰十郎	今エビ藏 市川團十良	富澤辰十郎
天川屋義平	四代目 岩井半四郎	古二代目 大谷廣治	古 市川海老藏	古雷藏 市川升藏	二代目 市川團藏	古 市川雷藏	今 大谷廣治
寺岡平右衛門	四代目 岩井半四郎	古 津打門三郎	今勘三郎 中村傳九郎	鶴屋南北	今長十郎 澤村喜十郎	今エビ藏 市川團十郎	今長十郎 澤村喜十郎
鹽谷判官	花井才三郎	今羽左衛門 市村龜藏	松島八百藏	松山三十郎	今市川八百藏 中村傳藏	今幸四郎 市川高麗藏	今 大谷廣治
早野勘平	嵐小六	尾上菊五郎	二代目 中村七三郎	古雷藏 市川升藏	古 佐の川市松	今 市川八百藏	二代目 坂東彦三郎
桃井若狹之助	富澤辰十郎	古二代目 大谷廣治	歌川四郎五郎	古 さの川市松	古 坂東三八	古 市川雷藏	なし

役							
石堂右馬之丞	澤村藤三郎	水木九十郎	市川新四郎	市川新四郎	坂東磯五郎	市川團五郎	富澤辰十郎
原郷右衛門	富澤辰十郎	古 津打門三郎	古 市川宗三郎	桐の谷藤十郎	坂田左十郎	市川伊達藏	今長十郎 澤村喜十郎
千崎彌五郎	荻野助三郎	八代目 市村羽左衛門	市川金三郎	坂東伊三郎	中村七五郎	坂東鶴五郎	坂東吉藏
與一兵衛	古 嵐音八	鶴屋南北	市川團五郎	市川新四郎	岸田東太郎	市川團五郎	佐川新九郎
てつち伊五		中村八十太	北國屋京五郎	北國屋京五郎	澤村字十郎	市川久藏	古 嵐音八
高師直	大谷龍左衛門	古 中村助五郎	古 中嶋三甫右衛門	古二代目 中嶋勘左衛門	澤村音右衛門	今團十郎 松本幸四郎	なし
斧九太夫	市川勘十郎	古 中村助五郎	古二代目 中嶋勘左衛門	市川勘十郎	今三甫右衛門 中嶋三甫藏	今 中嶋三甫右衛門	坂田左十郎
斧定九郎	大谷龍左衛門	今ゑび藏 松本幸四郎	今長十郎 澤村喜十郎	中島虎藏	中島虎藏	坂東又太郎	中村仲藏
藥師寺次郎左衛門	中島虎藏	古三八 坂東又八	今 市川庄五郎	澤村嘉十郎	澤村今藏	松本大七	澤村今藏
鷺坂伴内	大井川又藏	今半五郎 坂田左十郎	中村平十郎	中村櫨次郎	坂田左十郎	中島三甫藏	坂田國八
太田了竹	大谷龍左衛門	宮崎十四郎	市川團太郎	市川勘十郎	坂東磯五郎	宮崎十四郎	松本藤十郎
與一兵衛女房	花井才三郎	八代目 市村羽左衛門	澤村源二郎	松山三十郎	富澤辰十郎	市川團五郎	富澤辰十郎
となせ	嵐小六	嵐富之助	今八十介 澤村小傳次	嵐和歌野	姉川大吉	今里好 中村松江	尾上菊五郎

江戸忠臣蔵役割	おいし	おその	おかる	かほよ	小なみ	大星力彌	大星由良之助	加古川本藏	天川屋義平	寺岡平右衛門	鹽谷判官
中村座 五段目七段目計 明和五年子四月十六日ゟ	嵐吉彌	吾妻藤藏	吾妻藤藏	嵐吉彌	山本岩之丞	岸田幸太郎	二代目 中村七三郎	なし	なし	今エビ藏 市川團十郎	なし
森田座 明和六年丑四月三日ゟ	尾上菊五郎	尾上菊五郎	古 さの川市松	玉澤才二郎	嵐松五郎	古 さの川市松	坂田半五郎	坂田佐十郎	坂田半五郎	坂東三津五郎	今八十介 森田勘彌
市村座 明和六年丑五月五日ゟ	二代目 芳澤あやめ	瀨川菊二郎	中村久米太郎	古雷藏 嵐玉柏	瀧中富瀧	菊川大吉	古 澤村宗十郎	古 市川團藏	大谷廣次	古 坂東三八	市村羽左衛門
中村座 明和八年卯四月七日ゟ	吾妻藤藏	さの川市松病氣 荻の小才三	吾妻藤藏	澤村歌菊	三條龜太郎	都小富士	今幸四郎 市川高麗藏	中村仲藏	市川八百藏	古 市川團藏	市川八百藏
市村座 初段ゟ九段目迄 安永二年巳九月九日ゟ	古 さの川市松	古 さの川市松	今里好 中村松江	三條龜太郎	今里好 中村松江	坂田吉之丞	尾上菊五郎	坂田半五郎	なし	大谷廣次	今團藏 市川團三郎
森田座 初段ゟ九段目迄 安永三年午五月五日ゟ	吾妻藤藏	吾妻藤藏	二代目 瀨川菊之丞	龜谷十次郎	今岩井半十郎 松本七藏	今門之介 市川辨藏	澤村長十郎	中村十藏病氣 中村[illegible]右衛門	なし	市川八百藏	坂東三津五郎
中村座 初段ゟ九段目迄 安永[illegible]年申五月五日ゟ	中村秀松	荻野[illegible]吉	尾上松助	今市松 坂東[illegible]	中村富[illegible]	澤村菊湏	中村仲藏	市川團藏	なし	大谷友右衛門	市川[illegible]

早野勘平	今 市川八百藏	尾上松介	大谷廣次	岩井半四郎	尾上菊五郎	市川八百藏	嵐 三五郎
桃井若狹之助	なし	嵐 小式部	坂東又太郎	今 市川團十郎	大谷廣次	澤村淀五郎	中村助太郎
石堂右馬之丞	なし	岸田東太郎	中村勝五郎	今 市川團十郎	市村羽左衛門	笠屋又九郎	嵐 三五郎
原 郷右衛門	なし	富澤辰十郎	今團藏 市川友藏	市川昭右衛門	山科四郎十郎	山科四郎十郎	松本小次郎
千崎彌五郎	市川文藏	坂東鶴五郎		坂東鶴五郎	市村龜藏	市川春藏	尾上紋三郎
與一兵衛	市川團五郎	岸田東太郎	古 坂東三八	市川團五郎	富澤半三郎	山下門四郎	市川團五郎
てつち伊五	なし	澤村宇十郎	中村傳吾	今 嵐 音八	なし	なし	なし
高師直	なし	坂田半五郎	中島三甫右衛門	市川團十郎	中島勘左衛門	尾上松助	中島勘左衛門
斧九太夫	今 中村助五郎	坂田佐十郎	今 中島三甫右衛門	山下次郎三	坂田半五郎	大谷廣右衛門	中村助五郎
斧定九郎	中村仲藏	鳴川三左衛門	古 澤村宗十郎	中村仲藏	鎌倉長九郎	三國富士五郎	中村仲藏
藥師寺次郎左衛門	なし		今三八 坂東又八	市川昭右衛門	今 坂東三八	中村津多右衛門	中村津多右衛門
鷺坂伴内	中村此藏	中村大太郎	中村嶋五郎	中村此藏	尾上松助	坂東善次	大谷友右衛門
大田了竹	なし	中村大太郎	富澤半三郎	松本大七	なし	なし	なし

江戸忠臣藏役割	與一兵衛女房	となせ	おいし	おその	おかる	かほよ	小なみ	大星力彌	大星由良之助	加古川本藏	天川屋義平
森田座 安永八年亥八月十六日ゟ	なし	なし	なし	なし	二代目瀬川菊之丞	なし	なし	市川門之介	三代目市川團藏	市川團十郎	中村仲藏
森田座 安永十年丑十一日ゟ	坂田半五郎	今八十介 森田勘彌	嵐小式部	尾上松助	岩井半四郎	亀谷十次郎	岩井半四郎	亀谷十次郎	市川團藏	中島勘左衛門	市川團藏
中村座 安永九年子九月九日ゟ（かなで本忠臣藏名題ト外だい替申候）	古 坂東三八	吾妻藤藏	今 さの川市松	吾妻藤藏	今里好 中村松江	中村秀松	山下京之介	今 澤村四郎五郎	尾上菊五郎	市川團十郎	坂田半五郎
中村座 天明三年卯九月九日ゟ	中村少長	芳澤崎之介	山下金作	山下金作	今里好 中村松江	山下金作	市川門之介	山下八百藏	市川團十郎	市川團藏	市川八百藏
市村座 天明三年卯九月廿三日ゟ	尾上松助	尾上菊五郎	吾妻藤藏	なし	中村里好	嵐雛次	瀬川吉次	今 坂東彦三郎	松本幸四郎	中村仲藏	大谷廣次
森田座 天明三年卯九月	山下門四郎	山下金作	中村富十郎	なし	中村のしほ	山下秀菊	瀧中岩之丞	森田又次郎	森田勘彌	中村勝左郎	森田勘彌
中村座 天明四年辰十七日	山科四郎十郎	中村里好	山下金作	なし	瀬川菊之丞	中村里好	瀬川菊之丞	坂東彦三郎	澤村宗十郎	市川團十郎	市川團十郎

寺岡平右衛門	中村仲藏	坂東又太郎	坂田半五郎	市川團藏	大谷廣次	二代目江戸坂京右衛門	市川八百藏
鹽谷判官	澤村淀五郎	市川團藏	市川團十郎	市川門之助	尾上紋三郎	澤村淀五郎	市川八百藏
早の勘平	市川團十郎	尾上紋三郎	市川門之介	澤村宗十郎	松本幸四郎	小佐川常世	市川八百藏
桃井若狹ノ助	坂東又太郎	坂東又九郎	中村介五郎	市川八百藏	市川高麗藏	嵐七三郎	尾上紋三郎
石堂右馬之丞	澤村長十郎	坂東彦三郎	市川門之介	市川團藏	松本山十郎	江戸坂京右衛門	松本小次郎
原郷右衛門	中村津多右衛門	山科四郎十郎	大谷廣右衛門	松本小次郎	山科四郎十郎	嵐七三郎	中村勝五郎
千崎彌五郎	坂東又九郎	坂田佐十郎	尾上政藏	市川八百藏	市川高麗藏	坂東三木藏	市川升五郎
與一兵衛	山下又太郎	市川團藏	音羽次郎三	中嶋三甫藏	中山清次郎	大谷團八	中村勝五郎
てつた伊五	松本秀藏	大谷德次	仙國彦介	中村傳五郎	大谷德次	大谷團八	大谷廣八
高師直	中村仲藏	中島三甫右衛門	尾上松助	中嶋勘左衛門	中村仲藏	三國富士五郎	市川宗三郎
斧九太夫	坂東又太郎	中嶋三甫右衛門	中村介五郎	坂東又太郎	中村介五郎	市川宗三郎	嵐音八
斧定九郎	中村仲藏	市川團藏	坂田半五郎	尾上松助	中村仲藏	三國富士五郎	松本小次郎
藥師寺次郎左衛門	中村仲八	市川友藏	尾上松助	中嶋勘左衛門	坂東熊十郎	澤村喜十郎	松本大七

大忠臣蔵　阪役割

芝居・日附	鷺坂伴内	大田了竹	與一兵衛女房	となせ	おいし	おその	おかる	かほよ	小なみ	大星力彌	大星由良之助
嵐三五郎座 寛延二年巳十二月一日より	中村此蔵	中村津多右衛門	市川團蔵	尾上多見蔵	小佐川常世	尾上多見蔵	小佐川常世	尾上多見蔵	坂田菊の井	坂東米五郎	二代目嵐三十郎
市村さの八座 寶暦四年戌二月十三日より	大谷徳次	坂東三八	中島勘左衛門	市川團蔵、	中村粂次郎	小佐川常世	中村粂次郎	中村粂次郎	中村萬世	山下松之丞	山本京四郎
北ノ新地芝居 中村八平衛座 九段目まで 十月十五日より	中嶋三甫蔵	松本大七	尾上松助	尾上菊五郎	山下金作	山下金作	岩井半四郎	中村粂次郎	山下萬菊	瀬川吉次	山本京四郎
角芝居 姉川菊八座 明和三年戌八月廿八日より	中嶋三甫蔵	中嶋勘左衛門	松本小次郎	三代目瀬川菊之丞	岩井半四郎	岩井半四郎	瀬川菊之丞	岩井半四郎	市川岸之介	瀬川三代蔵	中山文七
北ノ芝居 嵐松次郎座 安永三年午十二月三日より	市川叢蔵	大谷徳次	山科四郎十郎	四代目芳澤あやめ	中村里好	二代目吾妻藤蔵	中村里好	中山富三郎	芳澤五郎市	芳澤三喜藏	尾上菊五郎
中ノ芝居 三桝松之丞座 安永四年未十二月二日より	坂東嘉十郎	江戸坂京右衛門	江戸坂京右衛門	二代目小佐川常世	中村粂次郎	小佐川常世	中村粂次郎	山下松之丞	山下松之丞	瀬川徳次	嵐雛助
東ノ芝居 中村十次郎座 安永四年未十二月七日より	大谷廣八	嵐音八	尾上紋三郎	岩井半四郎	中村粂次郎	中村里好	岩井半四郎	中村粂次郎	中山富三郎	岩井喜次郎	[illegible]松山十郎

役名							
加古川本藏	片岡仁左衛門	藤川平九郎	櫻山四郎三	中山新九郎	中村歌右衛門	三桝大五郎	市の川彦四郎
天川屋義平	姉川新四郎	山本京四頁	なし	藤川八藏	藤川八藏	三桝大五郎	市の川彦四郎
寺岡平右衛門	山本小平次	藤川平九頁	櫻山四頁三	藤川八藏	嵐吉三頁	嵐吉三頁	坂東滿藏
鹽谷判官	市の川彦四頁	市の川彦四頁	竹中兵吉	松山三十頁	嵐吉三頁	澤村宗十頁	嵐三十郎
早野勘平	二代目 嵐三十頁	坂東豐三頁	山下又太郎	中山來助	嵐雛助	嵐吉三頁	中村喜代三
桃井若狹ノ助	山本小平次	坂東豐三頁	藤井長九頁	市の川門三頁	藤川柳藏	嵐文五頁	中村十次頁
石堂右馬之丞	姉川新四頁	坂東豐三頁	山下又太頁	中山來助	藤川八藏	嵐吉三頁	市の川彦四頁
原郷右衛門	山本小平次	嵐藤十頁	澤村[illegible]五頁	藤川龍左衛門	市山助五頁	嵐文五頁	市川滿藏
千崎彌五郎	ヤサマ十太郎ニテ 市の川彦四頁	坂東幾藏	中川正五頁	市の川門三頁	坂東市松	桐山紋治	芳川音五頁
與一兵衛	市村三甫右衛門	嵐藤十郎		藤川龍左衛門	市川宗三頁	市川宗三頁	藤川東九頁
てつち伊五	嵐勘三頁	大松百助	大松百助	岩井春五頁	坂東市松	桐山紋治	嵐七三郎
高師直	市村三甫右衛門	桐嶋儀左衛門	染川此兵衛	淺尾爲十頁	坂東岩五頁	坂東岩五頁	中村歌右衛門
斧九太夫	二代目 片岡仁左衛門	桐嶋儀左衛門	桐山紋治	淺尾爲十頁	坂東岩五頁	三桝大五頁	中村歌右衛門

大忠臣藏	角ノ芝居 芳澤いろは座	中ノ芝居 嵐他人座	角ノ芝居 藤川菊松座			
斧定九郎	二代目 民屋十三良	藤川入藏	藤川半三良	笠屋又藏	藤川柳藏	三枡他人	中村歌右衛門
藥師寺次郎左衛門	二代目 民屋十三良	三名川彌平二	染川此兵衛	桐の谷拾十良	市川宗三良	坂東岩五良	坂東滿藏
鷺坂伴内	二代目 民屋十三良	三名川彌平二	藤川半三良	三名川半五良	中村友十良	桐山紋次	中村武十良
大田了竹	二代目 片岡仁左衛門	桐島儀左衛門、	なし	桐の谷拾十良	坂東岩五良	坂東岩五良	中村歌右衛門
與一兵衛女房	二代目 片岡仁左衛門	市の川彦四良	竹中兵吉	松山三十郎	嵐七三郎	嵐雛介	嵐七三郎
となせ	富澤喜代崎	二代目 芳澤あやめ	岩田染松	佐の川花妻	尾上菊五良	姉川大吉	藤松山十良
おいし	三代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	二代目 芳澤あやめ	姉川大吉	三枡德次良	市山七藏
おその	二代目あやめ 芳澤崎之介	三代目あやめ 芳澤崎之介	なし	三代目 芳澤あやめ	嵐雛介	尾上久米助	中村喜代三
おかる	吉田萬四良	市村さの入	岩田染松	澤村國太良	尾上久米介	尾上久米介	市山七藏
かほよ	小野川龜菊	山下六三良	桐の谷秀松	佐の川若松	三枡德次良	三枡德次郎	嵐雛治
小なみ	山下六三良	芳澤萬代	桐の谷秀松	花桐豊松	今 市川吉太良	市川吉太良	中村樋五良
大星力彌	嵐三五良	生島金藏	中村小才三	姉川菊八	生島柏木	三枡松之丞	中村十次良

阪役割	安永八年 亥十一月廿七日ゟ	天明三年 卯正月十五日ゟ	天明四年 辰正月十七日ゟ
大星由良之助	三保木儀左衛門	尾上菊五良	市川團藏
加古川本藏	中山文七	三保木儀左衛門	市川團藏
天川屋義平	中山文七	尾上菊五郎	三保木儀左衛門
寺岡平右衛門	今藤川八藏	三保木儀左衛門	中山他藏
鹽谷判官	小川吉太郎	嵐三五郎	三保木儀左衛門
早野勘平	嵐山十郎	嵐文五郎	染松七三良
桃井若狹之助	藤川八藏	中村京十良	中山他藏
石堂右馬之丞	中山文七	三保木儀左衛門	加賀屋歌七
原郷右衛門	芳澤十三	嵐文五郎	今村七三良
千崎彌五郎	後坂東豊三郎	山下又太郎	三枡松五郎
與一兵衛	藤川十良兵衛	嵐七五郎	加賀屋歌七
てつち伊五	嵐新平	嵐文五郎	中村次良三

高師直	山村儀右衛門	嵐七五郎	市川團藏				
斧九太夫	山村儀右衛門	坂東岩五郎	中村次郎三				
斧定九郎	三升松五郎	加賀屋歌七	市川友藏				
藥師寺次郎左衛門	中村次郎三	嵐七五郎	大谷廣右衛門				
鷺坂伴内	三升傳藏	嵐三八	中村次郎三				
大田了竹	中村次郎三	坂東岩五郎	今村七三郎				
與一兵衛女房	嵐新平	嵐三五郎	姉川大吉				
となせ	中村富十郎	三升德次郎	三保木儀左衛門				
おいし	山下龜之丞	姉川大吉	山下金作				
おその	中村富十郎	山下八百藏	山下金作				
おかる	よし澤いろは	山下八百藏	芳澤いろは				
かほよ	藤川山吾	嵐三右衛門	山下金作				
小なみ	中村のしほ	嵐三右衛門	芳澤いろは				

大星力彌	芳澤いろは	嵐　村次郎	染松七三郎			

古今いろは評林巻之上　藝品定

假名手本操(あやつり)にてにぎはひし其翌年、寛延二巳の春、江戸森田座に此狂言を出せしは二月六日也、大にはんじやう有て大入を取しは、山本京四郎由良之介を勤たり、時に市村座五月五日より初日出せは、中村座つゞいて六月十六日に初日出す、三座共評よく賑ひし也、京都は中村松兵衛座本にて、同年三月十五日初日出す、大坂は其幕間の物にて、十二月朔日より嵐三五郎座本にて初日出す、此五軒いまだ人形のうつしのみにて、銘々の思ひ入少しづゝ替りし計にて、さのみ思ひ入性根などゝいふ氣持事はなかりしに、近來次第〳〵に仕内こまかく成て、見物人も少しにてもわきめなどすれば見はづすゆへ、氣苦勞に成りしもおかし、先最初に三个津にて、五軒の興行の役を、始に評して、次に其役々の次第を記す

高の師直役

森田座は 大谷龍左衛門、 市村座は 古中村助五郎、 中村座は 古中嶋三甫右衛門、 京にては 古嵐七五郎 大坂にては 市村三甫右衛門

すべて此役は高位の姿にて、底意に戀をもつて意地をふくみ、言葉しつこう憎がらるゝやうにするを本意とする也、さるによりて、江戸にては素袍にて、斯る次第見る事もあらねども、聞はつりし事もあらん、上に右の心持を以てなすゆへ、取合ひ凡宜し、別して中嶋三甫右衛門などは、功ありて其中にしても沙汰よし、勿論龍左衛門助五郎共其頃上手の部なれば、心持よきゆへ見よくも有しとぞ、七五郎至て上手にてもあれ共、其上手にて實惡の役の押のつよきを専らとして、殿中の俤は思ひ量る計也、三甫右衛門とても左のみ仕内はかはらず、其後は江戸にての此役

二代目 中嶋勘左衛門、 古五粒 松本幸四郎、 坂田半五郎、 後 三甫右衛門、 市川團十郎、中村仲藏、各二度三度も勤しなり 澤村音右衛門、 尾上松助、 市川團藏、 三國富士五郎、 市川宗三郎、 京にては 古今村七三郎、 桐嶋儀左衛門、 淺尾國五郎、

坂田半五郎、嵐雛助、嵐七五郎
（大坂にては）淺尾爲十郎、坂東岩五郎、中村歌右衛門、（今の）市川團藏
山村儀右衛門、

思ひ〳〵に少しつゝ性根といへる物を用るは、序はさしてかわりし仕内も見えず、三つ目本藏にまいないゝ仕られし所の悦びてのそゝり、次に若狹之助に出合ふて、急に誤まる次第など也、右に云ごとく、凡江戸役者の方が此役にては見よし、素袍にてもあまり大なるを好まず、しとやかにてそゝりを付る事多し、鹽谷を云ほぐす仕内などは、只同じ事を幾たびもいふばかりにて、さのみ是ぞとかわり目もなき也

頭書 諸役甲乙之次第

師直役

古舍丸　眠獅　古魚樂　今市紅　岩子
龍左衛門　歌七　魚山　五登

其外論ずるに不及略之此已下諸役同斷也

師直　舍丸

評に曰、嵐氏は花うすく實を專とする藝風にて、衣裳など物好せぬは、仕内に手丈夫の覺ある故なれ共、少し花やかなる出立有も可成べし、大序師直の役は、赤地の錦の口付も、ちとうそよごれてきのどく、かほよにぬれの場、少し入事有て古歌などひき、歌のかうしやくなどの物好ありて、夫よりのぬれはうつり有てよし、三つ目本藏にまいないゝ受てからの仕内は、あまりざつとして有ふれたる仕樣にて、平敵めきたり、大序の仕樣とは、きついちがひ樣、こゝは位高うして、ついしやういふてこそおかしみあり、ちやら過て面白からず、工夫有べき所也、鹽谷に惡口の所は赤城の鹽竈の僞を立入ての仕内なれど、是は眠獅の仕て置し跡ゆへ目立ませなんだ、全体ににくみうすし、大切夜討の段も、夜著をかぶりふるふてゐるも小口なる案しかた、西の芝居にて、忠臣講釋狂言なれ共、師直に五登勤たれど、此方にはにくみ有て、大切りなどは落付てよく、由良の介をだまし打にせんとする所は見よかつた、是は大坂にて岩子のせる近年の出來なり（以上頭書）

桃井若狹之助役

（江戸三座にては二代目）富澤辰十郎、大谷廣治、歌川四郎五郎

京にては竹中兵吉
大坂にては山本小平次

此役はすべて大名の氣持をはなさず、小身にて無念成るを底意に置て、師直に惡口せられてより、初一念の短氣を專らとする也、江戸二代目廣治、至て氣持よくありし故、殊外評よく、小平治などは中々先人品にても負る也、其後は

江戸には佐野川市松、古坂東三八、古市川八百藏、嵐小式部
坂東又太郎、今ノ團十郎、三代目廣治、澤村淀五郎、
今中村助五郎、後ノ八百藏、市川高麗藏、嵐七三郎、
尾上紋三郎
京にては中村正藏、富士松三十郎、嵐三五郎、今の澤村宗十郎、
市川辰十郎、小佐川加賀藏、淺尾豐藏、中村京十郎
尾上新七
大坂にては坂東豐三郎、山下又太郎、市野川門三郎、藤川柳藏
嵐文五郎、中村十次郎、中山他藏

此役も凡江戸の氣持すべて宜敷、御膝元にある事ゆへ、萬事心いきよろし、されども上方は又上方の風儀有といへども、坂田半五郎上京の時、今の澤村宗十郎勤しは、至て評判よくぞありて、本藏今一度顏を上げい、最うあはぬぞよといふてはいる仕内に、大になみだをうかめさせし也、其比いまだ年もいたつて若輩なるじぶん、其仕内のよろしさは、まつたく江戸の氣持を見およびし物とぞ、其餘相應に出來るといへども、師直を殿中にてたづぬる間などめつたむしやうに短氣にて、喧嘩もすべき仕内まゝある也、近比江戸にて中島など宜きといふも、其心持を考し故也、新七至て役によくはまる上に、彼二代目廣治をよく呑込まれて、一しほ見よくぞ覺ゆる也、され共是までにも有事ながら、奥にもよそながらいとまごひせんといふ心持は、大名にしては少し憶したるにも似んやと申せど、只相應の位有る男にて、情をもつて無義道なる方に仕内あれば、誰にても勤る時、いつとても評よく、仕榮へのある役ながら、先此三人をよしとす

頭書桃井役

古十町、芙雀、三升、今訥子、梅車
素桐、今魚樂

若狹之助　芙雀

評に曰、近年めき／＼と仕上られ、別して武道事の仕内よく、さつく／＼となして、其内に味はひをこめて、黄金鯆の齋藤たつおきの色情をしらぬぬれ事にて大に評を取、此度の若狭之介役は、しごく持まへによくはまりたり、大序さしたる事なく、二つ目我がやかたへ歸る、出端も衣裳付も、上下の幅もせばく、小みじかく著たるはさすがに、江戸にて武士風を見なれたるしるし有て、物すぎよし、力彌使者に來りし時、返答の仕様もかくべつ腹立てゐる様にもなく／＼てよく、本藏にうつぷんの事を物語聞より、本藏のお覺の刀といふ、すらりとぬきはなしたる仕様りつぱにてよし、それよりおくへ入らんとして立もどり、おくにもよそながらいとまごひせうかと、本藏にたづねは、ちよと思ひ入ちがひ成さし、おくをはじめ、其方も兼て短慮なりといへ共、我遺恨計ならず、師直の我がまゝは、諸人の難義世上の爲ゆへやむ事ならぬといふほどの武士が、おくにもいとまごひせう歟と、家老にさうだんは手ぬるふきこえたり、夫より又ちよとおくへ入らんとする心持有て立もどり、本藏もうあはぬぞといふてはいれ共、最初おく方の事いふた跡故、主従の情見物へのこたへうすし、此所は今の訥子つとめし時は、大いに諸人に涙をふくませたり

（以上頭書）

鹽谷判官高貞役

江戸三座は 花井才三郎、市村龜藏今羽左衛門、松嶋八百藏

京は二代目 榊山小四郎

大坂は 市野川彦四郎

此役勿論姿に諸侯たる所專らとし、始隨分しとやかにて、後こらへ／＼、こらへ袋の破れる思ひ也、四つめは銘々仕内のかはりめあれ共、出端に優美をもつて心中に無念も殘念もこめて取みださず、うれひを付ての切腹をするが狂言の本意なれば、さのみと思へど上手の入役也、又桃井の役とは前後心持ちがふなり、八百藏一入よく勤たり、小四郎人形のうつりを一入とせし也、其後江戸にて松山三十郎、中村傳藏後八百藏也、市川高麗藏、大谷廣治、森田勘彌、市村羽左衛門、市川八百藏、市川團三郎今團藏也、坂東三津五郎、澤村淀五郎、

今ノ
市川團十郎、市川門之助、尾上紋三郎
京大坂にては
澤村吉次、嵐吉三郎、尾上紋太郎、尾上新七、
澤村宗十郎、市川才藏、中山來助、竹中兵吉、
松山三十郎、嵐三十郎、嵐三五郎、三保木儀左衛門
小川吉太郎、

彥四郎三度、嵐吉二度、嵐三五郎三度なり、三十郎は切腹の水を結びて座に直りし也、江戸の高麗藏三津五郎との團十郎門之介などしとやかにてよし師直に惡口せらる所、聞ながしする思ひなどおんわにて三五郎能見へし也、四ッ目の始、黑羽二重羽織同じ姿也其外は凡縫もやうなど多し、由良之介來りてより、物いひがたく無念を告る思ひ入、後は言葉すくなく見よく、彥四郎吉三郎迄は淨るり文句の通を言ひしが、今は數すくなくて、見物も合點すれば、三五郎功ありて、一しほ宜し、吉太郎は思ひ入もなく、宜しかるべく思ひしに、存の外此役あしかりしぞ

頭書 鹽谷役

來芝、元祖八百藏、里環、二代目中車、小太

鹽谷判官　來芝

評に曰鹽谷判官役は、度々勤られしゆへ手に入た物ながら、三つ目勘平と早がわりにて、見物に目をおどろかさん爲に、師直へくわし箱を持て來る時、ゐぼしすほうにて出立が、あまりしほたれ見すぼらしうて見ぐるしかつた、切腹場はこれまでいろ〳〵思ひ入あつて、狂言長く成、見物たいくつの來る所なるを、狂言のすじは諸人がしりぬいてゐる事ゆへ、長事のせりふをいはずに、むねんなりといふ氣味を見せて、切腹をみじかくせしはさすがの手だれ、功者のほどがあらはれしなり（以上頭書）

石堂右馬之丞役

始メ江戸は
澤村藤三郎、水木九十郎、市川新四郎
京は
古中村四郎五郎
大坂は
姉川新四郎

此役擒使にて、人品專らなれば、隨分落付て得と切腹を見極め、其後一家中の愁情を察して、ことばをのこし、心をこめてかへるまで猶更優美の係入る也新四郎不相應と思ひの外、功つもりしだけ甚以しとやかにて思ひやる風情、至て感ぜさせし也、後

江戸にては
坂東磯五郎、市川團五郎、岸田東太郎、富澤辰十郎
中村勝五郎、今市川團十郎、市村羽左衛門、後笠谷又九
郎、嵐三五郎、後澤村長十郎、二代目坂東彦三郎、市川門之
助、今市川團藏、松本山十郎、嵐七三郎
京大坂にては染松七三郎、坂東豐三郎、尾上紋太郎、嵐金才、市
川友藏、江戸坂京右衛門、市野川彦四郎、中山來助
古藤川八藏、嵐吉三郎、三桝木儀左衛門、加賀屋歌七
中山文七、淺尾汝藏、嵐雛助
わるう心得たるは、めつたに子細らしうて見にく
いかだ多し、なんでもない樣にてはまるとはまら
ぬ塲、此役など一入多し、江戸は凡此にはまる事多
く、見聞事も多くあれば、仕内にさのみかはりめな
く、優なる所の專ら也、依て仕損じすくなし、上方
にては仕こ見る事多ければ、仕損する事こゝ有る
也、され共古八藏思ひの外に仕内ありて、判官切腹
にかゝる時に、床几をはなれ、傍によりかしこまつ
て、おごそかに勤めしは至つて珍らし、左も有べく
思はれたり、文七儀左衛門などははなはだよく・はま
りたり、來助團藏は餘り子細らしくして見にくし、
雛助しとやかにてよけれども、人品家老位に見へ
たり、彼・家中の心を察し、我も涙を思はずも、催
して別るゝ花道にて、それをかくさんため、涕をか
みて入りしは、知行にはふさうおう也
春藤次郎右衛門にて、此斯を當られたれど、夫とは
直勤倍臣のわかりもなくて、心持ちがひし歟とも
思はれぬる
案るに、此後由良之助勤し役者、此役に廻る事あら
ば年恰好の見合せ有べけれども、必竟此塲は由良之助
の役がシテなり、同じ年頃にては、由良之助先きへ
出たる樣にては、後の見榮へなく思はるれ、心得有
べき事

頭書 石堂役

古新四郎　由男　素桐　古八甫
右馬之丞　眠獅

評に曰、石堂役最初姉川吉四郎勤めたれども、其後
さして立者のせぬ役乍ら、近比は歌七、由男、素
桐などが勤たり、此度の仕樣ずいぶん落付て、何も
物好なく、五十計なるきれい成仕立故、見物・ど

うに悦びしなれど、先年大星役も勤めしゆへ、其うへ當座の大立物ゆへ、どふか由良之介が先へ出た樣に見へたり、鹽谷腹切を見とゞけ、此通り言上せんといひ、立歸りしなに花道へ少し行て立もどり、諸士へ用事あらば申越されよと、こんせつのあいさつ、是はやはり立もどらずと歸りさまに、直にあいさつありたきもの、立戻りて申ては思ひ出した樣で、諸士も不滿足ならん、夫より一家中のしうしやうを思ひやり、落涙するをかくさんため、涕をまぎらかしかんで立かへるおもひ入は、「箇違に見へたり、先見物に涕をかんで見せるといふは、大いなるぶしつけことに大名が袂より鼻紙を出し、はなをかみ、又たもとへ入立かへるもおかし、逸風が東鑑の朝比奈の時、扇にてはなをかみて、大いに落を取し、眼獅も朝いなを勤めし時、其おもむきをしたり、是とは役がらのちかひもあり、すべて此やうな思ひ入事は工夫有べき事也(以上頭書)

藥師寺次郎左衛門役

江戸にては
中嶋虎藏、坂東又八古三八なり、市川庄五郎

京にては
篠塚惣藏

大坂は二代目
民谷十三郎

此役石堂と同格にもあらぬゆへ歟、淨るりにても敵を專らとして、さがなくとりなすは、判官との喰違はすを、意地としてさして思ひ入の有べきやうもあらず、其後江戸にては

澤村嘉十郎、澤村今藏、松本文七、坂東又八今三八市川昭右衛門、中村津多右衛門、中村仲八、市川友藏、尾上松助、中嶋勘左衛門、坂東熊十郎、澤村喜十郎

京にては
山本七藏後藤川半三郎に成、松本友十郎、嵐武左衛門、山下俊五郎、山本儀右衛門、嵐音八、中村岩藏

大坂は
三名川彌平次、染川此兵衛、桐野谷權十郎、市川宗三郎、坂東岩五郎、坂東滿藏、嵐七五郎、中村次郎三、大谷廣右衛門

頭書 藥師寺役

岩子 五登

藥師寺次郎左衛門 虎岩

評に曰、藥師寺役は、誰もさして大出來といふ塲もなし、あるべかゝりにずいぶんにくていに、有

さへすれば、女などの見物はにくがるゆへよしとす、此度は立者ぞろへの中へ出ての出合、おくれもなくつゝこんでせられしは氣丈にてよし（以上頭書）

かほよ御前役

江戸始は嵐吉彌、玉澤才次郎、嵐玉柏古雷藏也
京にて中村喜代三
大坂は小野川龜菊

大序尊氏の兜を撰るに、少し仕内もありて、師直にれんぼしかけられ、耻しめ、次に四ッ目のうれひにさま〳〵有計ながら、さかなくせぬやう、餘り若過るもあしく、御前樣らしきを專要とする、其後江戸は

澤村歌菊、三條龜太郎、龜谷十次郎、坂東愛藏、中村秀松、山下金作、嵐雛次、山下秀菊、中村里好、尾上民藏、中村粂次郎、岩井半四郎、中山富三郎、山下松之丞
京にては山下金作、嵐松之丞、生嶋菊次郎、澤村國太郎、姉川千代三、山下八百藏、山科甚吉、山下金作此度又も勤む

大坂にては山下六三郎、桐野ミ等松、佐野川若松、三枡德次郎嵐雛次、嵐三右衞門、山下金作、藤川山吾、山下六三郎大聲の愁よくこたへしと噂する、其後佐野川若松後姉川千代三とて、京大坂にて勤し時も、腹切後上使の歸るを待出ての愁、至て張込し聲也と、後々迄も評せり、其餘さしたる仕内もなけれども、程々の思ひ入あり、江戸里好龜太郎半四郎など、姿と共によく入、上みがたにては、金作國太郎至てよし、金作乘物に付そひ送る所、女乘物にて女六尺にて付行しが、京にては只泣々葬のごとくして行に、始には引かはりて襲も著ず行しはいかゞや、初の程は三都にて、此役此人程よくはまりしは覺へす

頭書かほよ役

里虹　棣不　古同

かほよ御前　里虹

評に曰、かほよ役は少し花やかなる仕立にて、きりやうもよき女形ならではうつりあゝし、もつとも里虹見おとりはなけれども、よほどの年功ゆへ、其上病後とやらにて、うき立かねたり、大

序師直にぬれかけられ、なん義の所は仕内に難はなけれども、年功故師直に色情がうつるまいと、見物の方から思はるゝ也、夫より若さの介がいきどほりてゐるをなだめる所、手にて拜みとかく了簡なされ下されませといふ仕樣ながら、あれは茶やの花車が客のかんしやくおこせし時わびごとする樣にみへつた、大名のおく方には似合ぬ、下作なる仕樣、四ッ目鹽谷せつぷくの後しうたんのおもゐりうつとりとしてゐて、夫より上使お立と聞、はしりよりしがいのそばへよりなげき、大聲を上てなかんとして、諸士の手まへを耻せりふ計にてかなしみ、後ゆらの介が燒香せよといふ時、のり物のそばによりて、夫より大にとりみだして、泣かなしみてのしうたんは、きつと功者の程が見へたり(以上頭書)

斧九太夫役

江戸にて初は古市川勘十郎、中村助五郎、二代目中嶋勘左衛門

京にては笠屋又九郎

大坂にては片岡仁左衛門古藤川半三郎也

老人姿にて、大に取合ひを好みて、始末とも惡に程らい入て、成程取締りも有べき姿でなければ、城わたしの相談にさからふ場も取合ず、七つ目尤猶其心保多くぞあらん、江戸にては其後も又

市川勘十郎、中嶋三甫右衛門、中嶋三甫藏、坂田佐十郎、中村助五郎、山下次郎三、坂田半五郎、大谷廣右衛門、後中村助五郎、坂東又太郎三度、市川宗三郎、嵐音八

京にては其後も笠谷又九郎、桐嶋儀左衛門、大谷友右衛門、今の嵐七五郎此度も勤る、坂東滿藏二度、淺尾爲十郎、中村東藏

大坂では桐嶋儀左衛門、桐山紋次、淺尾爲十郎、坂東岩五郎二度、三枡大五郎、中村歌右衛門、中村次郎三、山村儀右衛門

四ッ目善心と見せ、御金配分と聞て立もどり、本心を顯はし這入が此役の情、七ッ目幕明から意地わるき言葉をつかふて、獅子廻しの不調法を專らとし、蛸をはさんで喰ふにあきれるなどはおかしみをふくむといへど、餘り仰山なるはわろし、由良之介との取合ひ、一方拍子過たれば片方は不拍子と歟、喰ちがひにて、面白さも增やらんと思ふ事まゝあり

頭書九太夫役

古茶谷　魚樂　一光　奥山　歌七

今魚樂　今舎丸

九太夫　舎丸

評に曰、鹽谷切腹の間は、よほどてらされたる藝也、上使立し跡にて、シビリの切レしちやりはさも有べき思ひ入おかし、城わたし相談の内も、しつくりとしてよし、七ツ目さわぎの間も大ていのぶびようしの物好はよく入たり、とかくにくみがうすく殘念〳〵（以上頭書）

斧定九郎役

始江戸は大谷龍左衛門、松本幸四郎後の海老藏也、澤村喜十郎父長十郎也

京にては篠塚磯五郎

大坂にては民屋十三郎

四ツ目はさしたる事なし、五ッ目追剝の場は、浄るりの文句にしたがひて、左のみ是ぞといふ事もあらね共、幸四郎は又何となく、仕内のなきにもあらず、其後江戸にては

中嶋虎藏二度、坂東又太郎二代目訥子、中村仲藏以上六度此役を勤る鴨川三左衛門、澤村宗十郎、鎌倉長九郎、三國富士五郎、市川團藏、坂田半五郎、尾上松助、松本小次郎

京にては今村七三郎、藤川半三郎、中村熊五郎、嵐武左衛門

大坂にては山下俊五郎、古淺尾國五郎、嵐雛助

藤川古八藏、藤川半三郎、笠屋又藏、藤川柳藏今の八藏也、三枡他人、中村歌右衛門加賀屋歌七と成ても勤む

市川友藏、三枡松五郎

始にいふごとく、初の程は只の追剝にて、大嶋の廣袖にて、夜著の樣なる物を著て出しが、古訥子など身を捨て出せし故、少しづゝ物ずきもかはりめも出初て、仲藏二度目あたりより、黑羽二重の古き著物に成やぶれ傘さして出るなど、仕はじめたり上み方も東武の傚うつりて、其姿にて仕内至てこうしやうに憎い事を專とせし也、仲藏至てよきにつき、友藏などさへ大坂にて、其うつりをなして當りを取し也、雛助も此形を聞て勤るといへ共、すこし取合はず、不評判にありて、鐵砲にあたり、死やうまでも奇妙也といはすは此役也、此役におゐて、三都にて只仲藏一度〳〵に妙ある仕内を增て、大に評判を得たり

頭書　定九郎役

秀鶴　五粒　友藏

定九郎　鬼洞

評に曰、定九郎役は、江戸にて中村仲藏大當りせしより、京大坂にて折ふしは立者も勤たれどさしてかはりたる事なく、近比大坂にて、市川友藏評を取たり、是は江戸にて秀鶴が仕内をよく見覺へゐしゆへ、其趣にて當りたり、此度も定て仲藏が仕内を取ませての仕様ならんと思ひし所、始終五ッ目狂言不出殘念、江戸仕入が見せ度もの也(以上頭書)

鷺坂伴内役

大井川又藏、坂田佐十郎、中村平十郎
京にては篠塚惣三
大坂にては民屋十三郎

是もさしたる事はなけれ共、いづれもあたりめを取る役也、本藏に賄賂せられてより、そゝり出す間が仕内也、後勘平が戀をさまたげあふはいづれ共凡同じ格なり、それより後江戸は
中村權次郎、坂田佐十郎又勤る、中嶋三甫藏三度、坂田國八、中村此藏三度、中村大太郎、中村嶋五郎、尾上松助、坂東善次、大谷友右衞門、大谷德次、市川幾藏、坂東嘉十郎、今大谷廣八
京にては山本七藏、山本平十郎、松本友十郎、山下俊五郎、澤村國十郎、嵐音八、坂東岩右衞門
大坂は三名川彌平治、藤川半三郎、三名川半五郎、中村友十郎、桐山紋治、中村武十郎、嵐三八、三枡傳藏、中村次郎三

此役に付て咄しあり、中村武十郎は歌右衞門弟子也、同座にて此役を受取し時、不承知の顏なりしと作者歌右衞門に告るによりて、歌右衞門武十郎を呼びて、伴内の役不足也と思ふは言語道斷の事也、よく思ひ見るべし、鹽谷判官短氣にて、師直に殿中で手疵を負せしゆへにこそ、此通りの狂言につゞり來れり、若師直が短氣にて、判官に手疵を負せなば、師直館斷絶すべし、其時は主人の敵をむくふは誰がすべきぞ、伴内ならではないか、さすれば大事の役ならずや、といひしもおかし、さすがは歌七也とも、それにて得心せしも又おかしくもありしと聞傳へたり

【頭書】作内役
鼠顔
其外いづれも大ていに出來たり
伴内　高岩
評に曰作内役は誰がつとめても、それ〴〵におかしみありて、落を取りし也、岩右衛門京初舞臺ながら、中村次郎三を手本として、顔つき口跡身ぶりまでよくうつす故、まづ愛敬ありてさたもよき方也、地にて見れば、きれいなが男ぶり立はきついもの（以上頭書）

原鄉右衛門役
江戸にて初は富澤辰十郎、古津打門三郎、古市川宗三郎
京にては坂東助三郎
大坂にては山本小平治
是は鹽谷の用人役にて、仕内よりは人品を專要として、おだやかにあまりやかましうないやうに勤るを可也とも、尤城わたしの場、さして役もなくてらされたるものにて、引はり計りゐる役也、それより後江戸にては桐野谷藤十郎、坂田佐十郎、市川伊達藏、澤村喜十郎又も辰十郎勤む市川友藏今の團藏、市川昭右衛門、山科四郎十郎四度、松本小次郎三度、中村津多右衛門、大谷廣右衛門、嵐七三郎、中村勝五郎
京にては澤村清十郎、嵐藤十郎三度、坂東彌助、小佐川加賀藏、尾上宗九郎、嵐山十郎、中山榮藏
大坂にては嵐藤十郎、澤村科五郎、藤川龍左衛門、市山助五郎、嵐文五郎二度、市川幾藏、今今村七三郎、芳澤十三
さして仕内もあらねど、初にいふごとく、此役相應すれば、一ト切おさまる程の事也、勘平の内にては、此役さはぎ方也、何程小利口によくするといへども、文五郎にては姿はまらず、始の古市川宗三郎などを、先第一ともする、嵐藤十郎度々ゆへ少し言葉數多きともいへど、役に係はまりて見へたり

【頭書】鄉右衛門役
古和尉　呂久
鄉右衛門　榮藏
子共の時分、榮藏とて竹田につとめ居られし事をおもへば、近比の樣にありしが、其後大坂中芝居へ中山榮藏として出られ、京大芝居は此度が初上り、男ぶり請よくお仕合

評に曰、鄕右衛門役は、是はといふあたりめのなき役、年若ゆへ年配が取合かねたり、此役は嵐藤十郎度々つとめし故、家の藝と成て、今に諸人が云出す事になりぬ(以上頭書)

矢間重太郎役　千崎彌五郎役

竹森喜太八役　大鷲文吾役

小野寺十内役　不和數右衛門役

堀邊彌兵衛役

是等の役は鹽谷切腹の時、由良之介到著と聞て、各ばら〳〵と出て、普代外樣分りて、力彌もろとも光明寺へ送り、或は隨身の諸士は殘りて、屋敷わたしの相談などありて、次に勘平に、途中にてあふは、大かた千崎彌五郎也、依て次に勘平内の場へ、金子を戻しに來るは、原鄕右衛門と彌五郎、同道する筈ながら、役廻りによりて名のかはりめあり、又は七ツ目、三人づれにて平右衛門召連出るも同じ、役廻りによりてのちかひめあり、誰にても仕廻ふ所は段々あやまり入ましたにて、其場はすむ、天河屋の場へ、捕人姿にて來りて、いどみ合ふは小野寺を先として、凡來れども、由良之助儀平二役の時は、鄕右衛門或は堀邊彌兵衛長持より出る事もあり、又大鷲文吾にて出しも有る也、凡中通りより勤る事多し、依て最初の江戸は、千崎彌五郎役

京にては萩野助三郎、八代目市村羽左衛門、市川金三郎

大坂にては大和山甚兵衛、市野川彦四郎、其後は略す

今の團藏此役ともに七役つとめあたりを取し也

江戸にて森田座にて坂田藤十郎、市村座にて松本幸四郎後の海老藏也、中村座にて古市川宗三郎　加古川本藏役

京にては嵐七五郎

大坂にては片岡仁左衛門

二ツ目主人に金打して見せて、言葉を聞て驚かず、心を察しておくれさせぬ、心をはけますため、松を伐て見せていとまごひをなす風情より、主人入て後賄賂の思ひ立に、いろ〳〵仕内あり、三ツ目猶更陰ながらの案じと、師直の機嫌をはかる仕内、九ツ目虚無僧にてのつとめ、鑓で突かれてより、師直やかたの繪圖を渡す仕内迄也、其後江戸にては澤村音右衛門、富澤辰十郎二度、二代目海老藏也市川團十郎、坂田佐十郎、二代目古市川團藏二度、中村仲藏二度、今坂田半五郎二度、市川團十郎二度、中嶋勘左衛門、市川團藏、

中村勝五郎、今の市川團十郎
京にては櫻山四郎三郎つゞいて二度、中村歌右衛門、今の嵐七五郎
江戸坂京右衛門、市野川彦四郎、山本儀右衛門、柴崎林左衛門、嵐雛助
大坂にては藤川半九郎、櫻山四郎三郎、中山新九郎、中村歌右衛門、三枡大五郎、今の市野川彦四郎、三保木儀左衛門、中山文七、市川團藏

右團藏團十郎半五郎仲藏など、各別よく出來たり、藤川半九郎至て宜しく、中山新九郎手づよく見へて、九ッ目は至て沙汰よかりし、歌右衛門大五郎など至極宜しく見へたり、文七万端相應せりとも、其中に思ひの外さくら山此役評はよかりしが、師直にまいないすると、師直ついしやういふと、おつとよしといふ顏を仕たり、是物好違ひ也、三ッ目もよく取合ふたり、九ッ目は早く終りをとげ、切落して早替りの由良之介はよくもせしかど、早がはりのみにて見よきとも申がたし、雛助九ッ目はさほどにもこれなきながら、二ッ目は主人に刀を持せながら、草巾著にてねたばを合せ、松を伐て見せ、別れて後小浪にさゝやき入らせて後持出る、釣臺を改め見よき程に持來れといひ付、衣服上下を改め、花道の口にて轡の音させかけゆかんとするを、女房袖をひかへ、いづくへと問ふに欲にふけりし師直、まいないをもつてつくろひ見んと行くをとゞめ、それで行かずば、殿に御手を下させるまでもなくと趣向を顯はし出る幕、しほ、此場は芙雀里虹三人の出合は、又見る事も希ならんかし

頭書 本藏役

一蝶　茶谷　和尉古今丸　五粒　由男
眠獅　秀鶴　歌七　三升
本藏　眠獅

評に曰、本藏役の仕立は申ぶんもなくありしが、二ッ目若狹之介が無念の次第を云出し、まぶたをしばたゝく時、本藏も泣たり、本藏はよほど丈夫なりといふ、狂言なれば此所にて泣心持はよろしからず、後に松の木を切る時、カケを打たせスリ足にて松の木のそばへより切しが、是は何事もなくつか〱と寄て、切てちよと刀を見て主人へもどしたきものなるに、大工のさしかね

でものをにらむ時のやうにしられたは面白からず、いつも馬にのる所をくつわの音をきかして、馬にのらぬ工夫は大いにできたり（以上頭書）

古今いろは評林巻之上　終

古今いろは評林巻之下藝品定

大星由良之助役

四ッ目　鹽谷館之段

江戸森田座は山本原四郎也、黒小袖に小紋の上下、印籠巾著迄も提て、大小ともに帯し、兩手をふつてかけ付、花道の眞中程にて、急度見やり、大小抜捨、本舞臺の末座に、平伏して、言葉を待てにじりよるなり

同市村座は坂東彦三郎、此役、たび辭退せしよし、達て乞はれてしからばと、初日の姿上下大小勿論さはやかにして、もゝ立を取、三里紙迄も當て、後に馬鞭をさし、樂屋にしらせを待つを見て、いかゞといひし人もあれ共、先づ受取候からは、まかせよとて頓て出て、花道切幕を出るより、鞭を捨てもゝ立を引さげ、馬より飛下り直にかけ付し體にて付舞臺の口までかけ付、大小を抜すて遙下で平伏する

中村座も兩家とも出せし、此藝元來仕内は古訥子を立にして作りし淨瑠璃なれば、此方にも出ざればとて押てすゝめられ、此狂言を出すも、大星にむかひて也、勿論此役澤村長十郎後に助高屋高助といふ元祖訥子此時此人の狂言大星由良之助に改めて、忠臣藏四ッ目を其まゝにつとめる、茶小紋上下に脇差計をさし、刀計手に持て袴のひもむすび〳〵出、花道の中に平伏する

京にては中村十藏、大坂にては嵐三十郎、凡同じ出立にて、操の俤を守りて勤む

元來此場が由良之助の本體也、されども狂言なれば七ッ目を見所となすものか、萬事物がたく魁ずして主人の無念を察し、我が心におさめて見ぐるしからず、心靜に此場をおさむるを專要とする役也、よつて物を云はず、鹽谷の顔をながめ、死後九寸五歩を取納めしなに、或は血を手にひたし、舐るなどは古新水是を仕初めしとぞ、可中など此事なく、其外もあらずとも、上使を見送るまでを先一ト切として

其後江戸にて是を勤るもの續て助高屋高助大に當る、二代目市川團藏、明和三戌年に始て尾上菊五郎二代目勤て大に當りを取事、以上三度、夫より中村七三郎、澤村宗十郎、坂田半五郎、市川高麗藏松本幸四郎に成て又一度勤、澤

村長十郎、中村仲藏、今の市川團藏、今市川團十郎、松本幸
四郎、森田勘彌、澤村宗十郎
京にては山本京四郎二度、尾上菊五郎、坂田半五郎、市野川
彦四郎、藤松由十郎、中山文七、嵐雛助、尾上新七
大坂にては山本京四郎二度北ノ座共三、三條木と成、中山文七、尾上菊五郎二度、嵐
雛助、藤松由十郎二度又一度、今市川團藏

古調子の狂言といへど、是は七ッ目をさしていふ
なる事、先花道に出よりの端もありて、家老職の格
ほと位を号へて、菊五郎を最上ともいふなるべし
茶の裂斗目にて、かちんの上下、手をこまぬいて出
て、花道の中程に平伏する、石堂のいるしからず近
うとの言葉を待て、主人の右ににじりより、しかと
顔をながめ入、とかう申上るに詞なし、御心中の程
推察申、唯此上は御心靜に御生害を計、後腹切
刀の中程を爭ひ納しは、柄手の程也、後に出して血
を手のひらにてなのる事あり、上使を見送り哀
を乗物に納め、燒香などの仕儀靜に嚴重なり
半五郎は比八ッ時分と覺ゆる、少しよごれたる空
色の袷人、けんぼう小紋の上下の上へ、もすその腹
帯くる〳〵巻にて、大小とも柄袋引はたし其かけな
がら出て、花道半迄に引はたを抜、柄袋を取りて直
にかけ付、にじり寄顔をながめ入、湊川の引言など
聞き〳〵、腹帯を平伏仕ながらとく、後短刀を見も
めんにつゝみて懐に入れる
文七なども、花道まで柄袋をかけ出半ばまでにと
り捨る、彦四郎は、上下の上へ馬簾をさし込出る、
雛助および海幸の顔あへて見よし、新七大小の下
緒を、口にくはへ袴しごきむすび〳〵かけ付、花
道の半ばに平伏する

雖此狂言端よりの思ひよりの工夫有なん事、此狂言にか
かる樣に成たり、尤に殘りて城渡しの相談、可申物幸
其諸士の口々いふを聞く間伏伺ひ取あへず、九太夫
にいさめられてより頭を上る、始終は彦三郎十藏三
十郎など、萬事堅き事計にて人柄よく、其儘に取合
ひよくも、柄手梅幸大がい同じ形にて、少しづつの思
ひ入ちがふ計、彦四郎は城わたし評定の内も目眼りて
ゐたり、九太夫が心を引見んための思ひ入れとおも
へども、一向やくたいなき成物ずき、すべてかくのごとき
心得ちがひまゝある也、九太夫歸て後、本心を明し、

九太夫をさみし、藥師寺に惡口せられ、屋敷を明わたす迄は人柄多く入場也、小男にては役取合ずして、物頭以下共思はれては此間至て わろし、成ほど訥子梅幸を最上とする事尤ぞかし

諸子光明寺より歸り來て、討死せんといふを制するところ、銘々仕内心持かはる也、文七など大音上で怒り、刀を閂の如く横たへ持て押へるなどよくこたへたり、又中へ押わりて入て、短刀を出し見せて、是こそ主人の御かたみ、此血が目にかゝらぬか、何足利殿に恨有て、討死せんやなどゝ、ふせぎなだめるなど、梅幸といへど度々の事なれば、毎々其姿かはれり、新七子供のじだんだ踏やうにわざとして、はや各は我が詞を用ひられぬやうに成し歟、とくやむもおかしく珍らし

跡に一人殘りて、遠く城を見かへり〳〵、館の名殘ををしむ風情にて、そしほれて幕を切るは梅幸より始れり、團十郎宗十郎今の宗十郎など、此術にて大に評よくぞ聞ゆ、京四郎人品至てよく見へたれど、此場に成ては少しぬるし、十藏三十郎時分只見かへりてはつたとにらみといふ、三重に合はせし計也、上方は梅幸いろ〳〵工夫ありしともいへど、半五郎登りてより、此役銘々工合ある事ども也、半五郎が此幕は、彼にらみての三重にて幕を切、幕の外に獨り殘りて、短刀を出して 無念の相をあらはし、又元のごとくおさめ、何やらつぶやき指折などして、花道へ入りし也、其外銘々いろ〳〵あるといへども、右にいふ年ばいと功と、其知行の程々を第一として 前後の心配りの行とゞくこそ首尾するともいはんや、但し團藏江戸にて鹽谷と大星との二役は 格別也、よくも取廻し出來たり

案るに評して見る時は、梅幸熨斗目を著て出るも、屋敷の閉門の場所へは心なし共いふべき歟、半五郎案じ過たる樣ながら、取合はさもあらんとも、されども引はたまで上使の御前迄はいかゞ共、幕前は梅幸別れの情多くて感ずる事深し、半五郎がつぶやき、指折などは早速過たりと覺ゆ、其餘是に准じてしるべし

七ッ目　祇園町の段

發端にもいへるごとく、此場は古澤村宗十郎 大岸宮内にて、仕内を當たるを、此淨るりに取りて作り、古

吉田冠子、則吉宗十郎の形を以て人形をつかひし也、去によつて、竹本此太夫かけ合にて語りしも、むかしの澤村長十郎の係にて、青海苔もらふた禮に、太アイ太神樂打やうな物とも語り置し也、人形の衣裳紫ちりめんの著付羽織なるゆへ、大方其色を用るとはいへども、又銘々の思ひ入にて、京四郎は黑ちりめん、菊五郎は茶ちりめん、半五郎はもへぎちりめんをこそ用ひて、羽織片肩(かたへ)ぬぎて取締なき姿の生醉にて、めんない千鳥の出端は、京四郎一入不拍子にてよきとぞいへり、梅幸は少し拍子利過たりともいふべし、彥三郎は至てかたく見へてあしゝ、三十郎はとかく人形をまねびたり、十藏は所詮此場は取合あしきとや思ひけん、此一場は書かへて此通りはせざりし也

由良之介の本意は四ッ目にありといへども、心を亂して本意を崩さずなま醉の心持もとより歌舞妓狂言の趣意にては、此場を第一の見所とする也、後には性根と號る思ひ入は氣のかはりめともなれり

梅幸數度つとめて、居つゞけの醉ごゝろ、平右衛門に相手になる間一入、此間は見よく、京四郎は常に茶屋にあそぶも、凡此係にてうた〳〵とせし姿、自然によくはまりたり、半五郎雛助新七等少し堅き方にぞ見へたり、次に力彌來て、刀の鯉口を鳴らして、目さます間一入思入ありたり、手にてしらして、切戶の外へ追ひやりて、そつと起て手を鳴らし、中居を呼び廻り、或はかくれんぼをうたひ、謠などにて踏次下駄にて、何となくけしきをかくす仕內、文七など一入思入多し、梅幸始は其有さまながら、後は力彌來ると寢入し顔にて、我が方より鯉口を鳴らしての仕內は、少し思ひ入過しともいふべしや、大きな聲をするやつではとの言葉にて、いづれも聲をかけられたり、次に九太夫の出合ひ花やかに、場を引立るといへども、是も拍子すぎては家老の場を失ふも又あり、とかく其仕內姿ともに、梅幸よく入たり、京四郎は只地を用ひて不拍子の程よくはまりたりと、かへす〳〵も其事のみ殘れり、見立或は獅子廻しのおかしみをそへて、引立〳〵し所、蛸の肴に本意を顯はさぬ仕內は、梅幸至て和らかにてよし、此間に京四郎は九太夫に、足もたされて怒る相を顯はして思ひ直す仕內あり、是は大に誤れるならん、思ひ入のみにて、是にて此場の自然と此男にあひしを思ひやるべし、夫より燈籠の灯

にて又よむ所、三保木は此所にて、道具引分させて、數寄屋の模樣なる、間を突出したり、半五郎は羽織の肩をはずし、其中へ入てよみたり、思ひ入尤とやいふべき、笄の落たるにおどろき、左の手のよみためたるを取落せし思ひ入よし

おかるを梯子よりおろす仕内、何となきわるじやれの思ひ入、少し錆なかはりめあり、洞庭の秋の月さまを拜みにゐることばに、古長十郎の傳をいづれも殘せり、受出さんと約束して、鯉口をぬきかけなどする、仕内に思ひ入過る事多し、夫よりおかるが自害をとゞめ、平右衛門に供をゆるすといふ事、九太夫を下家より引出してよりは、いづれともかはらず、由良之助殿、だん／＼誤り入ましたといふ、三人を押しつめるに、扇をひらいてちよとなだむる風情、團十郎など和らかみの功者氣持尤よし、仕ケエといふ幕を輕くなすは、其功／＼の程にこそあるらめ

九段目　山科の段

此場に大星、さして仕内はなけれ共、朝もどりの風情ゆつたりと好所、後本藏鑓にて突とめられしを、力彌を押とめ出るは、羽織ばかりにて出しは、其始めよりの出端也、近年梅幸一ト度は袴羽織にて出、後又縁上下にて出る、半五郎團藏等も同じ、梅幸雨戸をはづす工夫の言葉、本藏が耳の根へよつて、小さ聲にていひ聞かせ、矢聲にて本藏殿と呼活る仕内などは、近重性組敵ともいはんや、我は若狹殿の、このみ若我すがたと、虛無僧姿になる所は、或は九寸五分を懷へ裏にかくしたるを、お石にとらせなどすこし心得あり、雛助今の宗十郎など、さしたる仕内もなくして、此所見よきとぞ沙汰せし也、半五郎は爰に力彌に云付け、草鞋をはいて後をあづまからげにして、絹勸進ともいふべき姿になしたり、異樣ながら珍らしくも見へたり、新七など尺八よくまはりて、爰にて拍子のよきもかへつて目立てよろしからず

十段目　天河屋の段

天河屋の内に長持より出る所、宗四郎半五郎近年皆五郎等、天河屋と二役にて外役よりつとむるといへども、雛助此度の新七など至てへり下りての仕内、さしていづれともかはり目なく、論ずるにも及ばす

十一段目　敵討の段

至て菊五郎、此場見へよく、力彌が右の手にともし火をもちたるを、呼かけてとがめ、敵に出合ふて、左に持かへる歟と噂りし思ひ入など、格別に感じさせたり、其外かはりめきしたる仕内の有べきやうもあらず

近來すべて、衣裳物好爲端本間事を用ひ初たり、甚面白からざる事、至て上手の好まぬ所なり、元祖訥子大矢數の狂言に、はじめて大岸役を勤めし時、白地の上下に縅のさいゝきもやうの衣裳を著たり、是にて見物事のかゝる狂言といふ事をはづさぬ上手名人の塲を知るべし

顔見由良之助役

元祖訥子　梅幸　可中　吉新水　少長

吉市紅　眠獅　二代目獅々咀　杉曉　三升

市紅　來桐　訥子　由男　今訥子

秀鶴　錦江

由良之助　實雀

評に曰、前年梅幸三回忠臣藏として忠臣藏を出し、由良之助役は近年追々工夫思ひ入を付ての仕内ゆへ、此度は何もせず、正本の通りを勤めんとありしを、眠獅それも然かるべき歟、しかし忠臣藏狂言、毎々大入りを取、大當りなるは、役々色々と物好あるゆへ、此度はどふするぞといふて、諸見物くんじゆする事なれば、やはり新意をくわへたる方も然るべしと、相談ありしよし聞傳へたり、是は實雀の心得もおもしろし、又世[illegible]は新らしき思ひ入は、宜しからざる事をしりながら、芝居はんじやうを精る志ありて、いやみを知つてする所は、英雄人をあざむく、塲有て、此丁簡も可感るべし、扨初日には、四ッ目かけ付の塲、大小とも下緒を口にくわへ、待い緒を結び結びの出端、ちと歯ぶしのつよき大星なるとの評、鹽谷切腹の間、上使もあれば大に平伏してゐねばならぬ所なるが、ちと頭が高かつたなどとのさたもありし、鹽谷しがいをのり物へうつし、燒香をする塲に、白身最初に香をつぐはよけれども、一炷して又炷する時、いたゞきてのり物へすぢかひに向ひてせられしは、かほよよりさきへ燒香する樣に見へてきのどくなるもの、夫よりかほよに燒香なされといふ時、御燒香といふ

て舞臺をとんとたゝかれたが、是はかほよ役しみ付てゐる故、氣を付ん爲かしらねども、ちとげうさんにてひれつに見えたり、其外諸士大せいに焼香させたり、しうしやうをかくさんと、鼻をかみし事もあれども、眠獅が右堂にて、同じ思ひ入ありし故か、後にはやめたり、扨かけ付の出端も一通りにて出、焼香もかほよ一人計にて、何事もせず思ひ入事をいこらずぬかれしゆへ、甚見よく有しが夫だけさみしきゆへ、場の請はさもなく、是にて最初開つたへたる、芙雀眠獅の談話相當せり、城わたしの跡、諸士いきどをるをせいせんため、わざと大聲上て、我いふ事を用ひぬと、花道にて子供のする様に、じだんだをふまれしが、是もあまりつたなくありしが、後にはせりふばかり早口にいふて、さはがれなんだもよし、七ッ目ぎおん町の場、平右衛門にあふて、扇をつかひ〳〵ゐねぶり扇を落しながら、ひぢが張つてあつたが、是はがてんの行ぬ仕やう、全躰ちと遊び様が下に入、粋過て見えたり、おかるを身うけせんといふ前、すこしぬれ事を用ひ、たき付ての仕様は、身請せうといふうつりよし、大詰かも川で水さうすいをくらはせといふせりふの時、水の字をわけて、かも川で水くらわせと、平右衛門にがてんの行様に云はれしは、耳立てよろしからず、諸人がしりぬいてゐる事なれば、たゞやすらかにせりふをいひたい所なるを、平右衛門ハアトいふて、顔にて幕を切、由良之助顔を横へなして、平右衛門が幕を切りしは、眠獅おとなげない仕様、是はやはり由良之助が幕を切らねば、工合宜しからず、九ッ目本藏せつぷくを見とゞけ、大丈夫といふて、工夫を是ならば見せ申さんと、庭におりるはちとはがねがうらへ廻りし氣持なり、雪の五りんを見せる時、本藏に突込ありし鑓の柄先を持そへ、後むかすはきめこまかに氣が付過て面白からず、すべて是に限らず、かぶき狂言と云場を、取はづさぬ様にして、こま〴〵したる性根事は、やめたきもの也、こゝも僧姿にならんとして、定紋付の衣裳に氣が付、上著をぬいで下著の上へけさかけて、尺八をふき、淨るり文句に合し花道へはいるは見物大に悦びたれど、

餘り人形の身ぶり過てうつとしうありし、十段目大切まですべて、師匠梅幸の趣をよくのみこみつとめられたり、由良之介にはちいさいの何のかのと沙汰もあれど、是は人間の大小によりしものにもあらねば、新七よりからだのちいさき嵐文五郎が勤めても、仕内がよければやつぱりよいといふ物なれど、しかし先見物するものなれば、少しは見えも入る物なれば、可中の梅幸などゝいふかつこうが至極せりと思はるゝ、惣座中の手柄といへど、先此度の大當りは、きつと師匠の追福にも成べし(以上頭書)

大星力彌役

江戸三座に岸田幸太郎、古佐野川市松、菊川大吉

京にては三代目榊山四郎太郎

大坂にては嵐三五郎

是はたゞ見へた通りの役にて、いかにもしとやかに見えよきを専らとし、場によつていさぎよく見へる事計也、佐野川市松よろしきとぞいへり後今門之介也

江戸郡小富士、坂田吉之丞、市川辨之助、澤村菊治、龜谷重次郎、澤村四郎五郎、山下八百藏、今の坂東彦三郎、森田又次郎、坂東米五郎、山下松之丞、瀬川吉次、瀬川三代藏、芳澤三喜藏、瀬川德次、岩井春次郎

京大坂にては四代目嵐三右衛門、澤村國太郎、生嶋金藏、中村小才三、市川吉太郎、三桝德次郎、姉川菊八、生嶋柏木、三枡松之丞、嵐村次郎、中村八重八、染松七三郎、嵐三右衛門、三枡次郎吉、芳澤いろは

二ッ目は人形の次第とも、四ッ目由良之介の來る迄に、心ばかりの仕内、七ッ目ちよとながらも、はげしきを専らとし、九ッ目さのみ仕内もあらね共、全體見えを好む役なり、彦三郎國太郎門之助德次郎柏木などの評尤よし

頭書力彌役

其答　漁江　柏木　古三右衛門　市松　門之助

力彌　龜丸

久しぶりにての上京、先年のあいごの若の事を思ひ出す計、力彌役さしたる事なく、大切の鑓の仕合ひなどはりゝしく見えました(以上頭書)

早野勘平役　市村座に　尾上菊五郎 同女形之時

江戸にては[illegible]　[illegible]小六 森田座 女形
中村座には　中村七三郎
京にては　竹中兵吉
大坂にては　嵐三十郎

小六大にあたりを取し也、菊五郎若盛りの時にて至てきれい也と噂す、七三郎もとより上手のやつしの部なり、兵吉少し堅過しども、三十郎も凡同じ、三ッ目おかるとの色事より、伴内と互にだまし合、後御殿の騒動を聞て、裏御門をたゝいて様子を聞、腹切らんとするを、おかるにとゞめられ、其場をあら事めかして立のく所は、和らかみを專らとする也、五ッ目持人の場は、さして仕内もなく、我内へ戻りかゝり、女房の賣られ行をいぶかしがりて、後親十一兵衛を、我が手にかけしかとおどろき、[illegible]右衛門彌五郎に[illegible]しめられてより、腹を切る所仕内さまぐ、又母に恨らみらるゝ間など、何となく見所有役也、されば此狂言中、此場はしゆみし場にて見にくき一ト場也、依て姿にてうつきりとさゝねばめいる様也、爰に心得もある事、是によりて女形の方にあたりの多くある也、其後江戸にて

市川升藏、古佐野川市松、市川八百藏七四代目、[illegible]東彦三郎、尾上松助、大谷廣治、岩井半四郎、後又[illegible]郎立役にてつとむ、今嵐三五郎、市川團十郎、尾上紋三郎、市川門之助、澤村宗十郎、松本幸四郎、小佐川常世京にては染松七三郎、尾上紋太郎、嵐三五郎、[illegible]前髪にてつとむ、市野川彦四郎、嵐七三郎、市山[illegible]八、[illegible]汝藏

大坂にては坂東豊三郎、山下又太郎、古中山來助、嵐雛助女形の時、嵐吉三郎、中村喜代三、嵐文五郎、後の染松七三郎、嵐山十郎

始江戸にて小六[illegible]にて[illegible]ながら、とんぼうかへりして大にあたりたりとぞ、腹切る迄に[illegible]總かせりふを聞てより、其[illegible]なきをしのぐ間が狂言也、只和らかみを第一とするのみ、嵐五郎彦三郎、[illegible]藏半四郎門之助三五郎、古染七みなしと豊三又太郎ひな介吉三郎など至て宜と評せり、其中にも喜代三

仕内共ひこ〳〵して、目立てあしく覺たり

頭書勘平役

古魚光　[illegible]　梅幸　古盃府　二代目薪水

勸平　來芝

評に曰勘平役は度々勤めしゆへ、四ッ目おかるとじやら〳〵は下に入たもの、鹽谷との早がはりは背我を揃へました、段切の立はお骨折ながら、御商賣違ゆへどつともいわなんだ、おかるがかゝへ帶を二ッに切て、ほうかぶりにして立のくは、心中の道行めいて氣のどく也、五ッ目六ッ目不出は殘念、しかし鹽谷にて切腹して、勘平にて又腹切も重ね〴〵の物なれば、ぬけたるはけつく氣がぬけてよいとのさたもありし（以上頭書）

おかる役

江戸にては
[illegible]藤藏、　古佐野川市松、　古中村粂太郎

京
中村松兵衛

大坂に
吉田万四郎

一體の此狂言一日のつもりして見ては、戀をするものは師直と勘平計也、堅い狂言といへども、趣向に愛を持て、七ッ目の和らかみに、戀なくて戀の情をふくみてのみ、戀の有無を覺ぬ計の出來狂言也、市松粂太郎松兵衛万四郎共其比の情ニ入深し、其

後江戸にて

又も
藤藏、二代目瀬川菊之丞二度、中村松江里好と改むともに五度、又尾上松助、岩井半四郎三度、中村野鹽、小佐川常世、中村粂次郎二度、今の菊之丞二度

京にては
嵐富之助、澤村國太郎三度、中村粂太郎、姉川みなと、山下八百藏三度、山科甚吉

大坂にては
市[illegible]、[illegible]山[illegible]、[illegible]太郎、尾上粂助二度、市山七藏、山下八百藏、芳澤いろは二度

三ッ目文箱持出る所、或は其備の時もある也、其前に大きに戀の情にもたして、幕前は勘平と共に少し計立をしまへ、六ッ目身うりの場、戀とうれいに意味合を持、七ッ目筆を落してより、由良之助とのせりふには、少しおやまの姿をあらはす、じたい其功次第にてわつさりとさす役也、平右衛門に親夫の死たる時を聞て、癪に取つめられ氣をうしなふ事、大かい今では同じ樣に成たれども、六月晦日と

聞て、母の狀其出し目を見合せて誠にせぬ事などは、今の菊之丞半四郎などより出て、芳澤いろは、此情をうつす事甚見よし、又由良之介の言葉を聞て、扨はと思ひて後に癩をおこす事も、近頃のわざごと、はなれり

頭書おかる役

其虹　鯉長　元祖盛府　其答　杜若　古路考　今路考　巴江

おかる　其虹

評に曰、此は評もなくいかゞと案ぜし所、大坂へ下られてより、あの地にてめつきりと仕上られ、大立者と成ての上京、當時の花方いや又めつきりと仕上られたり、こせついたる事なきゆへ、大芝居の立者らしく、末頼もしう存る、おかる役は三ッ目ふり袖にての出端、ちとゑつくろしいとわる口もあれど、先美しいにて取かやし、きつと色氣有てよし、七ッ目は成程やしき出のこしもとの新嫂にて、ぎおん町ぜんせいの素人と見へ、おぼこでもなくなめすぎもせず、其程がよく入ました、ゆらの介とじやらくらも花やかにてよし、身請と聞悦びわらをでなどの所も、しやらく過ずして、夫より悦びの餘り、狀を認め親里へやらんとして、平右衛門にあひ、とうわくしてかんざしを多くさしゐるをぬき取てかくす思入は、まへどもせしかども、此度の其虹の仕樣は、甚實情に見へてよし、親與一兵衛死たりときゝ、ほんまかへとおして尋ての おどろきの仕樣もよく、勘平もさいごと聞、びつくりして氣を取うしなふも、近比は誰々もすれどみじかくしてよし、嘸あいたかつたで有ふにといふ時、ひしごき帶をくひさくもあしからぬ思ひ付、平右衛門がこゝろさんといふ時、大におどろき、花道の方へかけ行、夫よりこわがつて、大小ともにあづかつてより、つか〳〵とよりて平右衛門にしがみ付、兄さん用は何じやとせり立いふ物ずき至極できました、始終此度の樣に出來る物ならば、上上黒吉の代物ぎおん町の段計は、鯉長も其答も及ばさる出來、先此度の忠臣藏第一の出來といふは、其虹のおかる成べし(以上頭書)

與一兵衛役 或は十一兵衛とも

始江戸にては古嵐音八、鶴屋南北、市川團五郎
京は坂東旳三郎
大坂に市村三甫右衞門
娘の不便さに娘を賣て、夫の役に立んと思ひ、其金を持て通る、山中にて定九郎に殺さるゝは、さして性根と云場もなく、物哀れ計なる役也、其後江戸は
市川新四郎、岸田東太郎二度、市川團五郎四度、佐川新九郎、古今坂東三八、富澤半三郎、山下門四郎、山下又太郎、市川團藏、音羽次郎三、中嶋三甫藏、中山清次郎、大谷團八、中村勝五郎
京にては中村正藏、嵐藤十郎、市川宗三郎、松本友十郎、篠塚惣三、尾上宗九郎、柴崎林左衞門二度
大坂にては嵐藤十郎、藤川龍左衞門、市川宗三郎二度、藤川東九郎、嵐七五郎、加賀屋歌七、藤川十郎兵衞
評するにも及ばねども、よき役者よき程に殺さるるに惜みあり、尤情を持計也
頭書 十一兵衞役
いづれも相應

十一兵衞　榮藏
評に曰十一兵衞役割はあれど、五ッ目不出、是はさしたる役にもなければ出ぬかたもよかるべし
（以上頭書）
與一兵衞女房役
始江戸にては花井才三郎、八代目市村羽左衞門、澤村源次郎
京にては竹中兵吉
大坂にては片岡仁左衞門
是もさして評する迄もなけれども、聟をあはれみ娘を不便がるより、親のもどらぬ案じと娘のいとま乞のかなしみの中、聟のおどろきし、けふりよりうたがふて、親を手にかけ、殺したる恨み泣、元來見物はよく知りて、役者はしらずにする仕内なれば、情すくなうして厚くするゆへ、親父の役よりは仕内深し、後江戸にては
松山三十郎、富澤辰十郎二度、市川團五郎、坂田半五郎、古坂東三八、中村少長、尾上松助二度、山下門四郎、山科四郎十郎二度、今市川團藏、中島勘左衞門、松本小次郎、江戸坂京右衞門、尾上紋三郎

直藏
大坂 芳澤万世今の四代目あやめ也、桐野谷秀松、花桐豊松、市川吉太郎二度、中村槌五郎、嵐三右衛門、中村野鹽、芳澤いろは

頭書 小浪役

松之丞　五嶺　今訥子　路考　杜若

小なみ　直藏

嵐直藏殿は是迄子供芝居の立者にて、評判を取て、去春は薄雪姫などは甚しほらしくよく仕たり、此度大芝居へ初舞臺、小なみ役はおぼこらしい娘なるが第一の所なれど、此度の仕内はとかくりこうに見へて、かしこ過たり(以上頭書)

おいし役

江戸三桝は 嵐吉彌、尾上菊五郎、二代目春水あやめ
京は 淺尾元五郎
大坂は三代目一鳳
あやめ 其比崎之介也此人此役其後も二三度も勤る各評判よくぞ聞えたりさして仕内もあられ共からうの奥方の涙人しての係なよく取合せたり
其後江戸にては 吾妻藤藏、古佐野川市松、中村秀松、嵐小式部、後の市松、山下金作三度、中村富十郎、小佐川常世、近い比は中村粂次郎三度、今の岩井半四郎二度、中村里好
京にては 山下六三郎、桐野谷秀松、姉川みなと三度、嵐菊次郎、姉川大吉、山下八百藏
大坂にては 姉川大吉二度、三桝徳次郎、市山七藏、山下金作、山下龜之丞

此役操淨瑠璃の通りにて、仕内なくして恰好取合ひにくき役也、凡由良之助妻の樣に見へるもの多く引こなしての仕内多し、姉川大吉調子といひ、口姿共に至て見よし、とかく二代目あやめ元五郎などを可也といふべし、幕前に成て祝言の取結びさせたりなどいそがしき中にての思ひ入多きのみ也、襲著て出る所になれば、各よく見ゆれ共、幕明のすがたは大方おやまの受出されて、入られてゐるやうに見ゆる方多し

頭書 お石役

春水　一鳳　淺尾元五郎　桐の谷秀松　讃
多　古薗枝　杜若

おいし　其虹

評に曰、おいし役はうつくしきより、ちと年増なる一鳳などの趣ある方よし、ちとはしたなくもありしが、みなとよく取合たり、此度其虹もやしき風の趣にて、かづらもふくわけにして、飛色ちりめんに黒じゆすの帯の物好ながら、兎角うつくし過て妾宅めきし也、となせとあいさつの間、地向の調子にて取合わるし、やはりてうし高くどこまでもせりふの聞ゆる様にありたきもの也、祝言さゝんと云て立出る時、著物の上へ又著物を著て、帯せずうちかけにて出られしは、何ぞ故實をしられて、わけの有事やいかゞ、もし急なる場所也とて、帯のしられぬ間は有まじ、後にうちかけも上ぎもぬぎてしまはるゝ時、下にきてゐる著物に、帯も最初とはちがふて有しが、夫ほどの間もあらば、まんぞくに著かへて出たきもの也、扨となせに本藏が首もらはんと、三方を持てつめよせる時、あまりつよ過はしたなき仕様、どふかねだれものめきたり、すべて此一段は氣持違にて、全體役が合ませなんだ(以上頭書)

大田了竹役

江戸初三芝居にては大谷龍左衛門、宮崎十四郎、市川團太郎京大坂は篠塚惣三、片岡仁左衛門藤川半三郎事也

其比は平敵の仕内にて、左のみ是ぞといふ程にもなき役の所、近年は色々と敵に道外を取交りての思ひ入つよし

其後江戸市川勘十郎、坂東磯五郎、松本友十郎、中村大太郎、富澤半三郎、松本大七、中村蔦右衛門、坂東三八、中嶋勘左衛門、大谷德次、江戸坂京右衛門、嵐音八京にては笠谷又九郎、桐嶋儀左衛門、松本友十郎、山下俊五郎、淺尾國五郎、桐山紋治、中村岩藏、大坂にては桐野谷權十郎、坂東岩五郎三度、中村歌右衛門、中村次郎三、今村七三郎

此役貧乏醫者を情にして、一たくみ有て道外にて無理に去狀書す計が趣意なれば、至て貧なる體にて、藥の紙袋たばこ入を持、もめんの居士衣にても出る、又四枚肩で來て、皆雇人と見せる仕內、思ひ思ひに有る、門口へ儀平に投出されてより、狂歌をしたりする事は、岩五郎より初る也、此役は凡此岩

五郎に越す仕内は有まじ、敵を情にして、至て貧乏にて能行□の思ひ入ありて、甚手に入し事を感ずる計

【頭書】了竹役

岩子　九十　　了竹　虎岩

評に曰、了竹役は近比色々工夫付て、此度も口のり物にのりて出、とかくりきみすぎて せわしなくて、見物もいきどしくあるし、是は大坂にて岩子がせしが第一ばん也、しかしながら此度の□立こしらへはよし（以上頭書）

了簡伊左役

姫江戸にて森田座は芦役なし、市村座中村八十太、中村座は北國屋京五郎
京にては坂東助三郎
大坂にては嵐勘三郎

此役さして仕内もなし、すべて芝居のあほうは、地にかしこき所顯はるゝ樣子多し、根からの あほう上着てする事專らならん、おそのゝ相手になる間をここそ、狂言其思ひの外、身をしめやかにせぬ事の考有るをここそよしとて

其後江戸にては澤村宗十郎、市川久藏、嵐音八、中村傳吾、松本秀藏、大谷德次、仙國彦助、中村傳五郎、大谷團八、大谷廣八
京にては嵐彦三郎、中村十藏、藤川山吾、大和山林左衛門、江戸坂正藏、玉川此藏、中山猪八、嵐音八、嵐染七、
大坂にては大松百助、岩井春五郎、坂東市松、桐山紋次、嵐七三郎、嵐文五郎、中村次郎三

【頭書】伊左役

吉和孝　助三郎　今舍柳　伊左　嵐染七

評に曰、此度はあまりちやり過もなく、あつさりとしてよし（以上頭書）

大河屋義平役

江戸森田座は岩井半四郎、市村座は二代目大谷廣治、中村座は吉市川海老藏相勤
京にては二代目桐山四郎五郎
大坂にては姉川新四郎

此役打揃ふて立者の勤し役也、半四郎は功者なが

ら相應せず、廣治取合よし、海老藏仕內は各別なりと評判ありし、さして仕樣に替りめもあらねども、名人故に一器量ある俤なり、京での小四郎もよきとはいへど、新四郎又役に相應せし也、元來操人形にても、少し男だてめきし俤も有るといへども、義心のみを丈夫にして、後妻がもどつてよりのせりふに、地狂言の情を專らとする也、其後とてもつよみを專らとする事、凡新四郎を形ともなりしもの也、其後江戸にては

市川升藏（雷藏事）二度、二代目市川團藏、今大谷廣治（今の）二度、坂田半五郎、市川八百藏、中村仲藏、市川團藏、森田勘彌、（今の）市川團十郎

（京にては）山本京四郎二度、尾上紋太郎、坂田半五郎、市野川彥四郎、坂東滿藏、中山來助、嵐三五郎、嵐雛助

（大坂にては）山本京四郎、藤川八藏、三升大五郎、市野川彥四郎、尾上菊五郎、三保木儀左衞門、中山文七

升藏半五郎などは海老藏の俤を殘せしとも、仲藏今の團十郎等、功者の思ひ入まゝありて請よくも有し也、初の團藏手強くして當りを取し也、京四郎尤相應せり、彥四郎袴を付しは、實意の役柄の約束を合せしものぞとも、其後菊五郎町用を兼て出品に、袴を付て行し也、其後捕人の相手に成所、存の外手丈夫にて和らかみをふくみて甚見よく覺へし也、其後お園が戻りしより、去狀をもどす所のせりふ、尤客あるゆへながらも、茶を焙じてゐてのせりふは、性根ともいふ歟、機轉の利たる樣には見ゆれども、手に持をもたねばならぬやうにて、少し狂言の仕內うすき俤も見ゆる、勿論半五郎も大根と大根おろしを持てせりふをしたり、其樣子きれいにて見よくもあれど、何も持ずに同じくばせりふしたきものなり、彥四郎尤仕內和らかにてよし、八藏は手丈夫ながら長持の上へのりし所は、立派は此上もなけれども、少し男作めきてよきともいひがたし、文七は其中に和らかみありてよし、儀左衞門小兵ながら、功者に取廻したり、雛助尤男相應して、仕內丈夫にてきれい也、尤極りし通のこしらへにて仕內萬端をなしたるは、かへつて新意にて上手の程を顯したり

【頭書】義平役

古新四郎　柏莚　古十町　古市紅　梅幸
可中　可慶　眠獅　柏車　十町　三升
秀鶴　杉曉　舍柳

義平　眠獅

評に曰、此度は何も思ひ入なく、上るりの通の仕立にて甚宜し、、長持の上へ上りし所のりつぱは、さすがの大立者と見えたり、先年古八甫せしが、是も長持へ上りし所見えは此上もなく見事に有しが、ちと男作めきたる方多く有し、此度は四役の内の出來なり、色々工夫の付た上を、此一役計何もせず正本の通をせしゆへ、かへつて新らしくてよし（以上頭書）

義平女房お園役

江戸始は　吾妻藤藏、尾上菊五郎、瀨川菊次郎
京にては　淺尾元五郎
大坂にては　芳澤崎之助

菊次郎至てよくはまりし仕内也、菊五郎其比若手にて、尤請よく元五郎藤藏は相應とも、崎之助は姿とともに役甚相應せり、此役もとより伊五を阿堵にして、子をしたひ來てかなしむ、中におかしみを持、其後のせりふにて、夫婦の情を專らとする事を、、入とする役也、其後江戸にては

萩野小才三、吾妻藤藏以上三度、萩野惣吉、尾上松助、山下金作二度、尾上民藏、小佐川常世二度、岩井半四郎、二代目吾妻藤藏、中村里好
京にては　中村富十郎、中村喜代三、中村粂太郎、三桝德次郎、姉川みなと二度、澤村國太郎、山下金作
大坂にては　三代目芳澤あやめ二度やはり初の崎之介也、嵐雛助、尾上粂助、中村喜代三、山下八百藏、中村富十郎、山下金作

各立者の仕内なれば、銘々少しづゝ思ひ入も無理に、内へはいる仕樣、親の惡をうとみ、夫の機嫌をはかりかね、子にあひたがるの情、功次第のみにてかはりめも見えず、相應不相應にて見よきと見にくきとある也、古市松今の金作など又は喜代三雛助みなと八百藏などは、甚姿相應せり、慶子功者にて情あるといへど、形夫程に取合ずともやつぱりあやめ、其中にてのよきといふべし

頭書　お園役

仙魚　一鳳　一幸　里虹　古園枝　今盛

府

おその　里虹

評に曰、年配かつこう義平女房に甚よし、取合たり、しうたん申ぶんもなく、さのみ是はとかんしんする程の事もなく、持まへ一通の事にて有し、久々にての上京故、京中一統大イに待かねゐし所ゆへ、何でも目ざましき事あらんと思ひし所、大塔宮以來さのみの事もなきゆへ、どつとしたる沙汰もなし、慶子一鳳をよくのみ込し仕内にて、手あつき所もしほらしき所も兼備したる藝成しが、近比はちとせりふなどには、花曉のおもかげをうつさるゝゆへ、折にはつよ過たる所あつて、女の情うすくなりし、此所は工夫有たきもの也(以上頭書)

寺岡平右衛門役

江戸始は岩井半四郎、津打門三郎、中村傳九郎
京にては嵐七五郎
大坂にて山本小平次

半四郎天河屋とはちがひて相應せり、門三郎しごく當りを取りし也、傳九郎も相應の評を取たり、七五郎尤よし、小平次は人形をうつすのみにてさのみよきともいひがたし、此役は甚むづかしき役也、五兩に三人扶持の足輕にて、しかもよほど浪人してゐての俤を作るが專也、其後江戸にて鶴屋南北、澤村喜十郎二度、市川團十郎二度後の海老藏也、古坂東三津五郎、古坂東三八、古市川團藏、大谷廣治二度、市川八百藏二度、大谷友右衛門、今の中村仲藏、坂東又太郎、古坂田半五郎、市川團藏、今の江戸坂京右衛門

京にては櫻山四郎三郎、今中村十藏、今かゝや歌七也中村歌右衛門、坂東滿藏、江戸坂京右衛門、市川才藏、中山來助、嵐山十郎、嵐雛助

大坂にては藤川平九郎、櫻山四郎三郎、藤川八藏、嵐吉三郎今の二度、坂東滿藏、三保木儀左衛門、中山他藏、藤川八藏

團十郎廣治形はまり評判ありて、ふたゝびもつとむ、古團藏功者專ら也、八百藏奇麗にして評を取た

り、三津五郎前後のしまり、上方の愁ひを持込みて、役はまりて請よく、仲藏半五郎など尤評よし、櫻山彼足輕の風情をよく心を込たれども、凡此役にせうぶ革のはつぴを著て出るが人形の通り也、されども足輕とのみ氣が付て、しばらく浪人してゐたる足輕と心の付ぬ風情もある歟、平九郎黑加賀の單羽織を著て出しなど、思ひがけなくよく取合ひしともいふ歟、しかし衣裳の物好は、二段の事なればやつぱり有ふれた通りの人形の著たるせうぶ革染のものを著て、仕内を足輕の情の專らと有る樣に仕たきものなり、當時のならはしとは云ながら、近年すべて衣裳物ずき過て、歌舞妓狂言といふ場うすく成たり、由良之助寢入たるを見て、三人を鎭め置、一人のこりて枕をあてがひ、ふとんを著せはいる所に、いろ〳〵あり、ちり紙を枕にあて、入は平九郎仕はじめたり、八藏吉三郎ふとんの表をかへし著せて入る、尤吉三郎錆刀をぬいて見たるは大に了簡違成べし、儀左衞門は中居を呼て來てふとんを著せさせしはよくぞ入たり、今の八藏大がいとといふべし、他藏思ひの外に此所よく仕こなしたり、雛助も中居を呼ふとん著せさせて、もしや寢入たるはうそにてもやと、幾度も同じ事いふて見て、得と寢入たると見て案じ入し風情にて、刀をそつとよせて置所、又工夫付たり、八藏は願ひ書を手にもたせはいるは、少し行過たり、夫より妹おかるにあひて、忠義に身を賣られたるをほめて納得させ、由良之助の心をうたがひ、勘平が女房ともしらず、請出すは誠に性根のくさりし歟といふ時、おかるが御臺よりの文を見た咄しに、一圖に忠義にこつてのうたかひゆへ、それと聞て思はず嬉しがりて、おぼえず奧を拜してそうとせずに、忠義に妹の事もわすれ、思はずしらずうれし淚をながして、奧にゐる由良之介のかたへ向ひ、辭宜する仕内は、雛介工夫よくなしたり、輿一兵衞勘平の死たるやうすを語り、あるひは癪の介抱などせしは凡一通り也、供をゆるすと聞て、椽よりおどろき落たるなどは、平九郎が俤をうつしたれど、場當り過たり

頭書　寺岡役

古舍丸　逸風　門三郎　五粒　古八甫

眼獅　市紅　三升　古平久　古中車　是
業　秀鶴　杉暁　十町　南雅　舞鶴　今
市紅

平右衛門　眼獅

評に曰、場の見物一統に悦びしが、ちと場あたり多く見えたり、おかるをころさんとする場、最初は思ひ入事度々なりしが、後はみじかく成て見よくありし、ゐりもとをつかまへ、さしころさんとするは出來たり、後由良之介にあふ所、椽より落んとおもふ思ひ入あるゆへ、そばに平伏してゐるはつまらず、はるか下り平伏有たきもの也、さい初の由良之介を、うやまふ様にては、ちとそばちかく出過たりと思はるゝ、由良之介が九太夫をちやうちやくする内、はがゆがり、にぎりこぶしにて、九太夫をくらはすまねは、場當りを好たり、此七ッ目まくを平右衛門が顔にて切て、芙雀に切らさぬは、シテワキノ了簡うすくありし（以上頭書）

古今いろは評林巻之下　終

其外尾州名古屋、伊勢の山田、高田、松坂、桑名、讃州金毘羅、備中の宮内、或は宮嶋、南都、堺、紀州などはよく芝居を見極めて、役者の位相應の評をなす事、誠に三ヶ津の見物も恥るは、是等にとゞめざれども、事繁ければ、三都を以て其差略を記す而已

諸國にて芝居興行の内にも、名古屋にての忠臣藏數多度ゆへ、役割を附録にしるす

假名手本忠臣藏　役割

寶暦十二年壬午三月廿四日ゟ

大須芝居　座本　坂東菊藏

一千崎彌五郎　大星力彌　千崎評に及はず　力彌大てい　小倉山百助

一若さの介　原郷右衛門　若さ之介大てい　郷右衛門甚よし　芳澤市十郎

一ばん内　やくし寺　了竹　論に及はず　榊山次郎三

一小なみ　大てい　萩野六三郎

一おいし　よし　豊松かもん

一となせ　大てい　佐の川宗吉

一師直　九太夫　定九郎　師直不出來九太夫よし　定九郎大てい　津打門三郎

一おかる　おその　二やく共よしおかるはおとなげないとの沙汰　三保木七太郎

一由良之介　與一兵衛　宗吉もあれば二やく共大てい　評はよし　藤川金十郎

一はん官　かん平　三役とも大てい　今五郎事　嵐三四郎

一伊五　おかる母　平右衛門　二役とも大てい　佐川今右衛門

一本藏　義平　本藏大評判尤出來たり　義平役不合　坂田藤十郎

一よし松　座本　坂東菊藏

今村七三郎

尾州名古屋にて興行之部

寶暦十三癸未年八月廿四日ゟ　座元　富士松民之助

大須芝居

一與一兵衛　郷右衛門　郷右衛門甚出來　嵐助十郎

一直よし　十太郎　評に不及　中村笛藏

一律内いこ花　一力大わし　やくし寺　いづれも大てい　嵐多賀八

一若さの介　伊五　勘平母　評に不及　今八百右衛門　富士松八百藏

一竹森　おなじく　嵐兵次

一師直　九太夫　義平　九太夫相應師直大てい　義平役不合　松本友十郎

一千崎　了竹　大てい　杉本國藏

一女郎小まき　かほよ　女郎しげの　評に及はず　大和山定助

一となせ　大てい　嵐仙次郎

一定九郎　平右衛門　十内　定九郎平右衛門二やく共大出來　中村吉十郎

一石堂　本藏　大てい　藤川金十郎

一小なみ　同　嵐此松

一力彌　おかる　二やく共出來　評よし　佐野川若松

一おその　おいし　同斷　三保木七太郎

一かん平　はん官　同斷功者　大和山甚左衛門

一大ぼし　勿論古今稀成ル大當り　山本京四郎

一よし松　座本　富士松民之助

明和九壬辰年二月廿一日方

稲荷芝居　座本 嵐雛松
一千ざき　三升善五郎
一矢間　杉本忠次
一竹もり　市川小傳次
一おかる おその　大てい　榊山四郎太郎
一おいし　同　嵐小ひな
一力彌　同　桑名谷八重松
一若さの介 一鄉右衛門　同　坂東藤藏
一伴内定九郎 一やくし寺伊五　同　中村丑右衛門
一九太夫 一師直　九太夫出來 師直大てい　山本京藏
一はん官 一かん平　二やく共出來 評よし　尾上紋三郎
一平右衛門 一儀平　二やく共 大てい　大和川元藏
一大ぼし 一となせ　評よし大ぼし相應の出來となせ存之外よし　市野川門三郎
一本藏　功者　大谷廣八
一右馬之丞　功者　坂本豐三郎
一かほよ 小なみ 中居とみ　大てい　座本 嵐雛松

安永三甲午年二月廿四日方

稲荷芝居　座本 姉川千代三
一勘平母　大てい　山下嘉六
一鄉右衛門　同　六三郎事 松屋新十郎
一竹森　中村折藏
一一力　染松かん太
一力彌　大てい　桑名谷八重松
一やくし寺 十太郎　同　市川升藏
一伊五　同　江戸坂正藏
一千ざき　櫻井喜代藏
一石堂　評よし　林左衛門事 大和山甚左衛門
一師直 與一兵衛　大てい　市川佐十郎
一了竹 はん官 定九郎　了竹定九郎よし 伴内大てい　山下新五郎
一小なみ 一おかる　二やくとも きれいのみ　藤川山吾
一本藏 一九太夫　本藏よし九太夫功者　大谷廣八
一おその おいし かん平　のみにくみうすし おそのの大出來かん平 評よしおいし大てい　姉川みなと
一平右衛門 大星相左衛門 はん官　いづれも大てい　市川才藏
一義平 大ぼし　義平よし大星相應 評も大てい　市野川彦四郎
一となせ かほよ　大てい　座本 姉川千代三

安永四乙未年四月六日ゟ

大須芝居

一郷右衛門
一十太郎
一直よし 竹もり 力
一はん内 小なみ かほよ
一大わし
一おいし おその
一千ざき 若さい介
一石堂 おかる母
一やくし寺 與一兵衛
一定九郎 九太夫
一了竹
一本藏 伊五 寺岡 [illegible]
一となせ
一大ぼし かん平
一りきや おかる

小なみ大てい かほよよし
大てい
もいのゐ 大出來
石堂ふでき 母大てい
二やく共功者
大てい
同
寺岡思入過悪し本藏江戸風作りにて判官出來伊五さて相應
かん平大てい大ぼし存之外出來評は大てい
力彌よし おかる大てい

座本 松山小源太
松屋新十郎
染松勝藏
淺尾万藏
大和山善吉
山本岩之丞
小佐川勢藏
嵐菊次郎
今染松七三郎事 嵐玉とく
松山三十郎事 松山屋山松
大谷廣八
大谷さ三郎
竹十郎事 中村竹右衛門
市川幾藏
佐の川花妻
嵐三十郎
座本 松山小源太

安永七戊戌年五月五日より

稲荷芝居

一十太郎
一竹もり 力
一伊五 與一兵衛
一力彌 こしもと
一師直 やくし寺
一おいし
一小なみ
一ふんや おかる母
一郷右衛門 若狹之介
一千崎 九太夫 ばん内
一定九郎 了竹
一かほよ
一となせ おその
一石馬之丞 かん平
一本藏 平右衛門 義平
一大ぼし
一おかる

力彌よし
評に不及 大てい
大き過候
大てい
同
いづれも相應
同
大てい
石堂よし かん平大てい 本藏よし平右衛門大てい 義平ふうつり
大てい 評も不勝
大てい

座本 中村千藏
中村吉藏
中村松之助
小倉山三千藏
嵐菊四郎
中村吉太郎
傳藏事 三升國藏
桑名谷事 荒木八重八
今澤むら 中村龜きく
中村富三郎
中村正五郎
藤岡瀧五郎
中村吉十郎
山下吉三郎
尾上小三郎
中村京十郎
山村義右衛門
中村十藏
座本 中村千藏

天明三辛卯年四月十四日ゟ　座本　澤村德三郎
大須芝之居

一　直よし　大わし　竹もり　　中村喜藏
一　十太郎　　　　　　　　　　嵐熊右衞門
一　力てい主　　　　　　　　　桐山紋治
一　ばん内　やくし寺　　ばん内功者出來　やくし寺大てい　　嵐房次郎
一　かほよ　小なみ　　きれいのみ　　今の八甫弟のこのし　藤川柳藏
一　伊五　千ざき　かん平　　　　　淺尾豐藏
一　石どう　おかる　おいし　　二やく共大てい　　山下龜之丞
一　　　　　　　おかる出來大評はんおいし七段目迄也跡不出切狂言　　中村瀧藏
一　鄕右衞門　　　　　　　新五郎事　山下新四郎
一　定九郎　了竹　　大てい　　　中村歌右衞門
一　義平本藏　九太夫　　九太夫大てい本藏二段目計先は出來義平しやう不出七段目迄也　　澤村竹十郎
一　與一兵衞　　　よし　　　中村喜代三
一　力彌　　　　　　　　　嵐此松
一　若さ之介　おかる母　　二やくともよし　　嵐三十郎
一　はん官平右衞門　還部安兵衞　六ツ目鄕右衞門替り　　いづれも相應其内平右衞門よし大ひやうばんなり　　姉川みなと
一　おその　となせ　大ぼし　　病氣故不出夫故か七段目迄也　二ツ目迄にして色子より勤る　大ぼし大てい評も同斷　　嵐雛助
一　師直　　師直に各別の事　　座本　澤村德三郎
一　よし松

其他は略之

右凡に筆するもの歟、あまたゝびの事なれば、思ふ程に盡しがたし、此狂言にかぎりては、濱の眞砂ともいふべきや、其次第〳〵は若俚諺抄とも拾遺ともいはんや、由良之助京四郎都鄙かけて生涯廿三度勤しとは自身の物語也と聞傳ふ、梅幸息らずも數々勤る度毎に當りを取て、其功をあらはす、されども古宗十郎が佛を寫し、それを頭とせし風情多し、左あれば先古訥子を最上とするもの也、さりながら次第〳〵に殘れるを拾ふ處は、もだしがたし、たとはゞ芙雀恰好由良之助には少し弱(され)たるといへども、前後は梅幸を題としての仕内、夫が中にして屋敷渡しの幕際にて、手を組ながら伏向て花道へ入は、則梅幸が姿ながら、半までもあらずして入相の鐘に、見物に思ひを察しさせ、うつとりと仰向て見るとなく、見ぬとなくふと遠く屋敷を見かへりて名殘をおしむは、又梅幸が城わたしの見返り〳〵、後足に二タ足三足あゆみての名殘の情よりは増れり、かく思ひつゞけ見れば、いつまでも其情の盡る事はあらじなきも、又立者らしきといへども、次第に其思ひ入を見んと思ふ、見物計にてなきも、又物さびしからんとも、只情の厚きを考あら

んもの歟、誠に忠臣藏の狂言いつとても大當りならぬ事なきは、全く實は實情の忠臣の功ゆへならんかしとも

天明五年巳霜月吉日

東都　つたや重三郎板
浪花　いづみや卯兵衛
平安　八もんじや八左衛門元

芝居乘合話

過にし春のことなりしに、長閑なる空にまかせて、予年頭信仰なせし、下總國千葉の妙現へ、參詣せばやと思ひ立しが、誰誘引人とても、酒と餅とのわかち有て、彼是として心よからぬ、旅行せんよりはと、年々參り馴にし船路なれば、小網町より野夫と船に便船と心ざし、彼地へおもむく船人を頼みて便船なせしに、いづれ何方の人やらん、四五人の乘合ありて、一夜の友と挨拶し、燈火の影さへもなき短夜の夢も結ばぬ物がたり、はや明近き鐘の音とともに、もやひの綱ときて、船は川口をはなれて、佃の海に鹽まちす、程もあらぬに、鳥の聲實に春風の音も靜に、滿來るしほと諸ともに、出行船に乘合の、顔と／＼にしるもあり、しらぬ人のみ多き中、かたへの人こなたの人とは、兼てしたしき人にて有けん、これは／＼と手を打て、何かたへ參らるゝやと問しかば、こなたの人われら事はしらるゝごとく、佐倉出生ゆへ親類どもかたへ、年頭やら用事かた／＼、とりまぢへての思ひたち、そなたには何かたへと尋ねに、されば我等事はしらるゝごとく、家業場にて成田山の不動尊信仰ゆへ、大勢にて月參講を初めしに、その月參に當りし故有がたく、成田山へ參るよし、それはよろしき折からとて、しばしの内と言ひながら、心置なき能道連ばなしのうち、船ははや沖の方へと走り行、浪靜に風も程よく、是やまことに四海波、しづかなる御代の御惠み、海原を打詠め、心ゆたかに行折から、佐倉へ行と言し人、成田へ參る人にたづねしは、御身家業いたさるゝ芝居、また役者などいふものは、いつの時代に初りし事にや、猶又今も御江戸三芝居と定りし事、且又歌舞妓といふは、外にならぬわけはどふしたる事にや、はなし給へと問しかば、成田へ參へる人答て、是は／＼おもしろからぬ尋ね事、くわしき事はわれらもしらぬといふものゝ、見馴聞覺えし事どもは、噺し申べきか、われらとても人のはなしに聞覺し長もの語り、跡や先とも成べきが、心に浮みし有たけを、船の著まで噺すべしと、既にはなしに掛る時、予も好る芝居ばなしの聞耳し、其あらましを聞書と、やたてとり出し書付るに、先役者のはじまり芝居の最初、役者大全といふ書に有事ながら、又その上に古老の好人に聞て、覺へし事のみを、誠に是ぞ聞とり法問、茶、の呑て

芝居乘合話一

芝居の初の事

上代の事にや有けん、南都南圓堂の前に、大き成穴出來て、其内より煙り夥敷おこり、天が下に覆ひ、其氣にあたるもの、ことごとく疫癘におかされける、是によつて、南都の芝の上にて、翁三番を舞せ、その邪氣をはらひ退けしより、芝居といふ名は始りたり、今に至て南都の能は、故實にまかせて、芝の上にて行ふ、名古屋三左衛門お國歌舞妓の初は、北野の芝原にて興行し、また出雲のお國、織田信長公の免許を蒙りて、則北野にありし人升（是は陣立けいこ場也）を拜領して興行せしより、芝居といふなりとぞ、又甲陽軍鑑にいはく、仕塲居は勝軍ならでは、ふみとゞまられぬものなりと、高坂彈正の述られたり、何れも芝に居るの意なり、其後祇園の南ばやしにて取行ひ、また其後五條河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公伏見より上洛い時、かならず此橋を通り給ふに、見物群集しさまたげになりしにより、四條へ移されしと也、男女うち交りの狂言、亂りがましく相聞し故、御停止となりしより、京都にて村山又兵衛といふ役者、數度御願ひ申上たてまつり、承應二年三月、歌舞妓ものまねづくし、若衆交りの儀御高免被成下、明暦二ひのへ申の年、四條河原中橋にて興行、今寛政十二年まで百四十七年におよぶ、さすれば上方芝居役者たるべきもの、此村山氏の丹精を尊むべき事なるべし、又大坂の芝居は、寛永のはじめより若衆歌舞妓とてあり來りしに、道頓堀九郎右衛門の裏下難波領に、そのころは傾城町ありけるが、此所の傾城どもを多く集め、舞臺へ出しおどらせなどして、是をお國歌舞妓と云ひし事にや、此芝居は則鹽屋九郎右衛門芝居にての事なりしとぞ、女歌舞妓の事ながく御停止となりける故、其後度々御願ひ申上、前々の通若衆歌舞妓の芝居の再興相叶ひ、今に興行す、今の角の芝居は大坂太左衛門といひしが、福永屋新十郎是なり、又大和屋甚兵衛といふ名題ありしが、元は鹽屋名題故元へ歸り、今の中の芝居也、斯のごとく京大坂の芝居は、有來たる芝居名題を金かた宜敷輩は座元から請て、いづれの役者にても、名題を勤める事也、さるによつて、名題誰座元誰と印す

也、三芝居は又格別の違ひ、三座共元祖より大夫元一名にして、役者までも主人と稱す、江戸三芝居の事は末にしるす、

役者の初の事

漢に趙飛燕が名曲あり、唐に至て散樂數十種、みなもつて奏覽す、其部に戲優ありて、古今の治亂を狂言綺語にあやつりて、其發頭を盂優と號し、明の代清の代にいたりても、狂言會を催せばこそ、繪番付折ふしは渡れり、我朝の昔神代にては、火の酢芹命、御弟彦火火出見命と御位をあらそひ、海上に惱されて、さまざまに苦しみ給ひし躰を舞にこしらへ、其子孫の隼人等、大隅薩摩より都へのぼりては、禁庭に舞かなでたるを、續日本紀第七三十四に、風俗の歌舞妓とも、又は俗妓共遊たり、猿樂方の能には、面は著れども直白粉丹を顏にぬる事なし、火酢芹命赭といふて赤土を掌にぬり顏にぬりて、神代の巻に見えたれば、今の役者の濫觴なるべし、中古もふるき合戰などを取組、狂言にしたるさへあれども、是等は士林のなぐさみの藝にして、役者の事にはかゝわりがたし、室町家の御時、斯波殿におゐて天笠左衞門といふもの、六七人の能者を集めて、佛廟にて狂言を盡したる番組六、今に傳はれり、近くは永祿の頃にあたりて、江州の住人名古屋三左衞門といふ人、京都北野に於て小舞を覺へたる女を集め、說經に合せ舞せけるが、出雲のお國といふ風流女と夫婦と成、歌舞妓と名付、男女立合の狂言を始じめ、その子孫お國といふを太夫として、五條の西にて興行す、難波にては、太夫藏人といふもの、是も男女入交りての狂言也、抑此お國といふは、出雲の神子にて女踊を始め、其後嶋田方吉といふ女名題をはじめ、又六條の遊女も、芝居能として興行しけるよし、山城名跡志に見えたり、此遊女におしへける家筋を佐渡嶋と號す、然るに男女入交りの狂言、みだりになりしにつき、御停止と成、其後御免許書前に記す、御當地にて、歌舞妓芝居の始りは、猿若勘三郎也、元祖勘三郎といふもの、生國は山城の産にて、幼年より此道を修行して、御當地御繁榮につき、元和年中御當地へ下り、歌舞妓芝居を御願ひ申上候、則寛永元甲子二月十五日、忝も天下泰平國家長久の御吉例として、中橋におゐて、初めて歌舞妓芝居太鼓櫓御高免なり、其後中橋は御城近きに依て、引地を被下置、芝

居引移るなり、其節の地所を禰宜町といふ、今長谷川町横町なり又其後上堺町へ移る、上堺町といふは、今の葺屋町の事なり、昔は堺町上下とて二町ありし、葺屋町の所上堺町といふ、下堺町は今の堺町なり、上堺町は後に葺屋町と改りし也、上堺町には猿若勘三郎、村山又三郎と芝居二軒南側に有て、下堺町には彌之助芝居、操芝居又は小芝居のみにて、上堺町ほどには賑ひかねしより、両町とも同支配の事ゆへ、町内相談の上、大芝居一軒づゝ上下へわけ度旨、是又御願申上たてまつりて、猿若村上鬮取して、勘三郎は下堺町の鬮にとりあたり、今の所へ芝居を引移りし也此節堺町名主は帯刀にて近藤喜兵衛と言ひしよし此節勘三郎といふは、元祖勘三郎猿若の名人ゆへ、猿若〳〵と呼ならはせし故に、猿若を名乗る也、又中村といふは藝名にして、勘三郎本名は三間氏、家の紋は抱澤瀉也、しかるを此もん所を用ひず、角きりがくに銀杏を付る事は、元祖勘三郎歌舞妓芝居御願ひ中、ある夜夢に木具の上に、銀杏の葉を乗せ、鶴是をくわひて富士の嶺より、勘三郎が家の内へ舞入しと夢見しゆへ博士に是を問ふに、正に大願成就の瑞夢なるよし、將して願成就す、依て中橋にて芝居を建し折から櫓幕に舞鶴を付、木戸幕には角切がくに銀杏を付來りしが、恐れ多くも上樣に御名の憚有て、舞鶴のもん所を改め、櫓幕へもすみ切がくに銀杏を付る事と成し、元祖勘三郎より當勘三郎まで十一代、年數は寛永元年より、當寛政の十二年まで百七十八年相續、寛永年中御城樣へ被爲召、猿若を御上覽被爲遊、其節金入の裝束を頂戴被爲仰付、今に此家に拜し傳ゆる也、

同寛永九壬申年、伊豆國より阿武丸の御船、御當地へ御入津の折から、元祖勘三郎へ金の麾を被下置、則此麾を持て御船の艫先に立て、櫓拍子船唄の音頭をとりし也、其節の金の麾も、勘三郎家に持傳へ、寶とするとかや、此節御船手御奉行は、向井將監樣にて候、御指圖を以町御奉行樣へ御禮に罷上る、此例を以て今に於て、年頭幷五節句等に御禮に罷上る也、但市村森田ともに勘三郎願にて勤る慶安四辛卯正月より四月迄の内、御城樣へ被爲召、諸藝相勤め、鳥目六百貫文幷青地の金入、猿若の衣裳を頂戴仕る、此又此家に今に拜し傳へるとかや、

扨また明暦三丁酉年正月十八日、江戸大火の砌、芝居

類燒に依て普請の內、五月中忰を召連て、久々打絕し生國の親類を弔はんと、山城へ罷登り、京都に暫逗留の內、忝も吾妻の猿若在京の趣勅聞に達し、おそれ多くも內裏樣へ被爲召寄、其日御樂屋は日野大納言樣御とり持にて、既に猿若の所作事を奉入叡覽の折から、猿若の上帶をわすれたりしに、聊時うつらんとせし其由、日野大納言樣聞せられて、此事なるかと御簾のあげまきとつて下しおかれし故、則是にて相勤る、しかるに叡慮殊にうるはしきあまり、恐れ多くも黑きびろふどに三ッ柏の紋付たる羽織、又紫裙濃の衣裳、金糸と銀糸にてすゝきに露の玉縫ひたるを下し給はり、又勘三郎一子は、新發智太皷といへる所作事を相勤るに、幼年の子としてけふかる舞を舞ふ事、猶更天氣おかしくおぼしめし、見るにあかぬ御心にや、明石といふ名を勅定下され、恐れ多くも有がたき事どもなり、右下しおかれし猿若衣裳、御簾のあげまきともに此家に代々拜し傳ふるとかや、さればこそ此勘三郎家にて、、子出生し、惣領に限り明石と名づくる事を規摸とす、又下しおかれし猿若の衣裳に、三ッ柏のもんありし故、家の紋所をあらため、三ッ柏にすべきか、是又おそれ多く家に秘して、則家名を柏屋といふ也、扨京都首尾よく同年九月御當地へ歸府し、相替らず大夫役、三十四年の間相勤め、万治元戊戌年に死去す、

○元祖中村勘三郎　本名三間氏山城產　猿若名人

二代目　明石勘三郎　元祖勘三郎子

父と共に上京し、恐れ多くも明石といふ、名を拜受して家相續、十七ヶ年の間、大夫役相勤る、此時弟子市村竹之丞、ふきや町にて芝居相續す、依て勘三郎方より、鶴の丸のもん所を讓る、これによつて勘三郎、市村座にて諸見物へ、竹之丞を引合せ、口上を勤めし也、是又鶴の紋所は、憚る事有て、竹之丞家の紋橘に改る、今におゐて年々顏見せ、入替りの新役者付のやぐら、臺輪に中村座は舞鶴を付、羽左衞門方にては、鶴の丸を付る事は昔の遺風なり、

—中村勘三郎　明石ノ子
此勘三郎五ヶ年ノ間大夫役勤ル
中村上旁恐院三代目ノ

四代目
—中村勘三郎　三代目勘三郎男

此勘三郎は、延享（正寶なるべし）より貞享元年まで、大夫役相勤め、後に隱居して、傳九郎と改め、藝道の名人ゆへに、在々舞臺を勤めて其名高く、ことに奴丹前朝比奈役の元祖なり、今以朝比奈を勤る役者は、紋所鶴の丸を付る事は、勘三郎隱居しての紋所にして、中村の中といふ字を、四つ合せしもんにて、世の中のよしとしゆくして付しと也、朝比奈は和田氏なるがゆへに、紋所は三ッ引なるに、今の世までも鶴の丸を朝比奈のもん所のよふになり行しは、全く傳九郎藝術のいさほしなる也、

五代目
—中村勘三郎　四代目勘三郎男貞享元年ヨリ元祿十四年迄八ヶ年ノ間大夫役相勤

—中村仁右衞門　四代目勘三郎男狂言作者舞臺のせり出し廻道具を始る

—中村重助　同三男表仕切場其外芝居ノ權ハ仕法重助ヨリ定ル外芝居ニ順之

右四代目勘三郎隱居して、惣領へ大夫役讓る、五代目の勘三郎是也、此勘三郎家は、元祖より代々淨土宗にて、寺は本所押上大雲寺にて、勘三郎代代の石碑あり、然るに此傳九郎は、至て日蓮宗信心なるによつて、本家勘三郎は、淨土宗にて建、隱居家は日蓮宗にさだめ、寺は本所妙源寺として卒、則妙源寺に傳九郎石碑を殘せしなり、尤隱居家は三男たる重助に讓る、是によつて傳九郎、名前は重助より讓るなり、

六代目
—中村勘三郎　五代目勘三郎男俳名冠子

七代目
—明石勘三郎　六代目勘三郎男俳名雀堂

此勘三郎の時、三芝居申合せ、芝居を瓦葺土藏造りに仕度、殊に十一ヶ年以前、繪島一件に付、芝

居棧敷一ト通りに相成候義、何卒下棧敷御免被成下候樣、享保九年辰ノ三月廿六日、御願申上候所、同四月十八日願之通被爲仰付候、

八代目
中村勘三郎　七代目勘三郎弟幼名勝十郎
後傳九郎俳名舞鶴

　├女　十一代目勘三郎
　│　　冠子妻
　└女

九代目
中村勘三郎　實は二代目中村七三郎孫八代目舞鶴
勘三郎聟養子に定家相續之所早世

十代目
中村勘三郎　九代目勘三郎早世に付熊吉を縁類より聟養
子として家相續之所病身に付大夫役隱居し
て弟傳九郎に讓る

十一代目
中村勘三郎　幼名傳藏後に傳九郎と
改俳名冠子

當勘三郎實は二代目市川八百藏一子也、八百藏妻は舞鶴勘三郎、內縁有によつて、一子傳藏幼年の砌より、八代目勘三郎養ひ置て、傳九郎の名跡とす、然處十代目勘三郎病身に付、大夫役勤り兼候故、傳九郎へ大夫役を讓る、これによつて、八代目勘三郎娘に娶合、十一代目相續之所、數年來之內、度々の類燒等、又は狂言不當り之節の損毛相重り、大借に及び、興行差支に相成、無是非去る寛政五丑年より、休座致す所、勘三郎芝居之義は、御當地において、數年來相續之儀株中絕を相歎き、諸金主一同格別之情心を以、無借同樣の用捨有之、同寛政九巳年九月十二日、芝居再興相叶、今日において相替らず芝居相續す、尤芝居休座より、再興までの內、當人勘三郎之心配、言葉に述がたきよし、殊に再興之上、芝居も新規に普請し、間口十五間の大芝居、實に中興といつつべき也、

市村羽左衞門由緒

元祖村山又三郎

右又三郎、生國は泉州の產にて、御當地御繁榮に付、藝道指南の爲罷下り、歌舞妓定芝居を御願申上、御高免の上、かみ堺町に於て、初て芝居興行す、元祖勘三郎芝居より十一年後なり、はじめは踊子供五六人、其外能の間の狂言などやつし組勤る、此又三郎は、承應元壬辰年に卒す、

二代目
村田九郎左衞門元祖又三郎聟也

右二代目九郎左衛門は、元祖又三郎聟にて、又三郎卒後家相續す、しかしながら九郎左衛門は別家業にて、芝居の事にはかゝはらず、手前名題を持て、座元名前をかしてぞ興行せし事也、是に依て明石勘三郎の弟子、市村羽左衛門ならびに彦作といふもの、相座元にて芝居興行す、此節上方より踊小唄三味線の藝者罷下り、一切づゝのはなれ狂言を勤し也、猶又右近源左衛門といふ役者、上方より下りて、練緒の染ゆかたをかむりて、女の形を始て、此芝居にて仕初しよし、元祖又三郎男子なきにより、聟九郎左衛門、芝居名題相續せしが、藝道の子として、瀧井山三郎といふを養子せしが、此山三郎も子なくして、玉川主膳といふ役者を養子として、宇左衛門と相座元を勤し也、是まで芝居は九郎左衛門名題にて、座元は追々替りて、興行は出來しと也、

三代目市村祖
市村羽左衛門　座元　名題は村田九郎左衛門にて彦作といふものと相座元又瀧井山三郎といふものも相

右羽左衛門は明石勘三郎弟子也

四代目
市村竹之丞　宇左衛門養子實は宇左衛門妻の弟也先は村田名題にて玉川主膳と相座元

此竹之丞も、明石勘三郎弟子也、玉川主膳といふ役者相座元勤し所、寛永慶安の頃、御城様え被爲召、狂言づくしを仕、鳥目百貫文またた御時服頂戴仕候由、此竹之丞事實は明石勘三郎弟子宇左衛門妻の弟ならしが、宇左衛門養子として、藝道を仕込しに、至て器用、殊更すぐれての美少人にて、諸見物の贔負つよくして、金方の倖情を以て、村田九郎左衛門養子と成りし、四代目より市村竹之丞、一名の大夫役となりし故、此節明石勘三郎より、鶴の丸いちん所を遣はし、櫓幕に付し所、後に鶴を憚る事ありて、竹之丞家の紋所、橘にあらたむる、右の通竹之丞大夫役となりしに依て、諸見物へ竹之丞を引合の口上を、日々明石勘三郎勤しと也、然る所其後竹之丞を改めて宇左衛門とし、又後年羽左衛門と書改る、

六代目
市村竹之丞

七代目
市村長三郎

八代目
市村竹之丞　實は菊屋某の男菊屋六代目竹之丞の近き縁者なる故に家跡相續俳名何江

右竹之丞は、元祿十三年より大夫役相勤め、元文二年に宇左衛門と改め、又羽左衛門書改、寶曆十二年五月六日卒、

弟
市村茂兵衛　別家を建

弟
市村善三郎

市村羽左衛門　八代目羽左衛門男幼名滿藏延享二年より龜藏と改寶曆十二年より大夫役相勤る

女　名石善兵衛妻

市村善藏

市村善五郎　三代目坂東彦三郎と改

右九代目羽左衛門俳名家橘は、和實所作事の達人、近代の拍子聞にして、其上古人柏莚の風をよく呑込て、既に寶曆八寅の三月、柏莚一世一代の狂言に、矢の根五郎の神異を勤し時、舞臺にて柏莚家橘に矢の根を傳へし故、翌年古人柏莚追善として、則矢の根五郎を勤しに、大入大出來成し事、又元祖文字太夫の淨瑠璃の振事、古人楓江の唄にての所作事、いつも大出來なりしは、古今奇代の名人なり、

市村羽左衛門　九代目羽左衛門男幼名七十郎後龜藏と改る俳名龜全

女　九代目森田勘彌妻

十一代目
市村

元祖村山又三郎より是迄十一代年數百六拾七年に及

森田勘彌由緒

元祖宇奈木太郎兵衛　萬治三子年木挽町に初て歌舞妓芝居を建る

右宇奈木太郎兵衛といふは、小うたもんさくの名人にして、所々の御やかたへ召されしが、木挽町へ歌舞妓芝居を御願申上、御免許の上、万治三

子年より芝居興行すといへども、役者ならぬ太郎兵衛故、坂東又九郎と言し、どふけ所作事名人たる役者を、萬の相談相手として、芝居興行せしが、太郎兵衛事實子なき故、すなはち又九郎の次男又七と言しを養子として、これを二代目森田勘彌として、大夫役とす、其後芝居を坂東又九郎に讓りし也、依て又九郎も、一子へ名前を讓り、大夫森田勘彌座本坂東又九郎と兩名にて芝居相續、右のごとく兩名なれども一體は兄弟也、元祖太郎兵衛、本名は森田氏にして、宇奈木といふは異名なり、然るに後年享保の頃、兩名を改め勘彌一名になりし也、

二代目
森田勘彌　座元坂東又九郎

三代目
森田勘彌　座元坂東又九郎

四代目
森田勘彌　座元坂東又九郎
幼名富松後に又次郎

五代目
森田勘彌　座元坂東又九郎
幼名鍋太郎地所の事に付九ヶ年休座假芝居河原崎權之助相勤る俳名眞鳥

弟
藤川平九郎
四代目坂東又九郎妻は藤川武左衛門娘也、依て母かたの名跡相續して藤川と號、

女

女
七代目勘彌妻

六代目
森田勘彌　四代目勘彌母方の内緣あるをもつて九ヶ年休座の上芝居再興して大夫役相勤る俳名杜光

此勘彌幼名金藏といふ、六代目大夫役相續之内、病身に相成、大夫役勤り兼るに付て、五代目勘彌の娘へ元祖中村重助一子小傳次と娶合、大夫役讓り、隱居して又左衛門といふ、

七代目
森田勘彌　俳名殘杏

此勘彌は、三代目澤村長十郎後に助高屋高助弟

子にして、初は瀧中重の井といふ、又小傳次と改め、後に七代目勘彌名跡也、

├八代目
│森田勘彌　七代目勘彌男幼名勘次郎　後に太郎兵衛倖名千蝶
├女　元祖坂東三津五郎妻死後　に三代目中村重助に嫁す
└九代目
　森田勘彌　八代目勘彌弟幼名又次郎　後坂東又九郎倖名眠舍

此勘彌に見の八代目勘彌早世に付、九代目家相續之所、去る寛政元年より九ヶ年の間休座せしに、跡假芝居、河原崎權之助然所當寛政九巳年芝居再興す、

├女
└又吉　九代目勘彌男

元祖太郎兵衛より九代、年數當寛政十二年迄百四十年に及ぶ

右江戸芝居、往古は四座なりしが、去る享保元丙午三月、御城女中繪嶋殿一件に付御詮儀之上、木挽町山村長太夫義、遠嶋に相成之居斷絶、是によつて此節より三座に相定る、然所時節として三座共休座致せしは、中村勘三郎四ヶ年、市村羽左衛門以上十ヶ年、森田座九ヶ年、右之内假芝居左之通相勤申候、

中村勘三郎休座跡假芝居　都傳内
市村羽左衛門休座跡假芝居　桐長桐
森田勘彌休座跡假芝居　河原崎權之助

右之通暫くの内、三座共に休座致候得共、先年より江戸三座と御定ありし故、休座内も芝居一件の御糺事に是ある事には休座ながら被召呼、御尋之筋書付を奉差上候事なり、尤年頭御禮は申に及はず、五節句御禮相勤る也、假芝居のものは此儀におよばざる事なり、

芝居乗合話二

芝居年中行事

君が代は、千世にやちよをさゞれ石、いわほと成て苔のむすまで、斯治り御代長久と、かぎりつきせぬ有がたさ、士農工商ともに去年の掛け乞も、一夜明れは初霞、扇々の聲もさへ、ゆめ違ひ寶船、そのたからさへつきぬは花の江戸むらさき、先新玉の元日には、年々かはらぬ三芝居のはつ舞臺仕始の賑ひ、座元は式三番叟を相勤め、大夫の翁、恐れ多くも御代萬歳を祝し奉る、此式は正月三ヶ日、霜月顔見世朔日より、三日迄は同様也、其勤かたに座元別火にして、身を清め愼みにつゝしんで相勤る事ぞかし、扨正月元日三番叟過て、子役の花かとり賑し、其年の役者、一座の座頭たるものより、立役若女形まで、上分のもの、廉上下にて舞臺に居ならび、則座頭たるもの、座付の口上あつて、春狂言名題ならびに役割をよみあげ、當正月十五日よりとか、其節の芝居成行次第、日限を定め披露致事也、尤昔は正月三日より、例年曾我ものがたりの狂言いたし來りしか、近年は其年の座組の振合によつて、曾我にも限らず、殊更日限も二日より興行致す事なく、先は十五日と成行、當日より相始め、狂言の出來不出來、また見物の氣に叶ひかぬる、當り不當にて、早々二番目を出す事也、しかし其狂言の摸様にて、當り狂言は五月迄も、春の名題にて相用ひ、ふおたりにても其名題又は後日として、跡新狂言を出す事也、如何様に當り狂言にても、三月節句よりは新狂言を出し、其狂言のもよふに依て、さらがへと號して、新狂言をあらためて致事もある也、其狂言も見物のうけ悪敷おりからは、是非なく操狂言を取組事、年年いづれ替らぬ事ながら、狂言にて操狂言をする事は、至てはぢらふ事なれども、昔と違ひ近年は、江戸生立の役者より、上方生立執行の役者多きゆへ、兎角操狂言に成たがる事とはなりし、上方にては、年中の狂言新狂言よりは、操狂言のかた時行ゆへ顔見世過てあいの物といふ事ありて、十二月の末に至り、芝居興行いたす事有て、其狂言思はしからぬ節は、初春早々操狂言いだす事故に、年中操狂言かた多く、夫ゆへ上方役者は操のかた手覺有て、勝手よきと思ふ心から

は、江戸生立の役者、むかしは操狂言珍らしき事也しが、近年はまたしても年々に操り狂言に立さわぐが故、上方役者程には手覺もなきよふに思ふに、また今の若手の役者は、心得もさとく天晴に見え、諸見物の目にとまりて、かけよきは器用なる事也と、芝居見巧者の賛嘆いたせしなり、扨又春狂言の節、三座共に一體に衣裳の御改めは、御見分被爲入候事、公の御事故、おそれて是を略す、此御改めは、顔見世と春と是非新狂言ゆへ御改めなり、役者衣裳は、古來より絹つむぎに限るべきの御定の也、春狂言の曾我の名題にて、新狂言を出すにも、右の名題を用ひて、曾我後日とするは子細有事なるが、是も御改め事にかゝはる也、扨五月にいたり、年々春狂言曾我もの語りの狂言取組事故、曾我の兩社を祭り、五月廿八日を祭日と定め、五月中旬より曾我祭りと名付、惣役者かつらかけず、素顔にて揃ひのゆかた、又は染帷子を著し、子供の花おどり、夫より段々と仕ぬきの狂言、俄のおもひ付、はては雀躍、手踊、女形は花笠おどりの賑敷、曾我兩社の御輿を留塲口より本舞臺へかき出す、役者のこらず神いさめをして、先今日は是切と打出しの太鼓を打事成しに、過にし假芝居都傳内座の砌にや、此曾我祭りを大そふに取組、役者の外に芝居掛り合のものまでも、美々敷衣裳にて、本祭同樣に芝居の町内表裏をはやし歩行し、大形のいたしかたに付、御咎めを蒙り、今はその事相止む、しかし芝居内の曾我祭り躰のけやうげん、其模樣によつて御差搆なき事にや、扨五月も終り、六月に至り、牛頭天王所々へ御出輿の頃には何れ兩座共に相休むなり、是より暑中休みとて、惣役者のこらず相休み、七月十五日より秋狂言に定める事也、しかるに其年の座組によりて、土用芝居といふ事近年はありて、重達し役者は休て、中立ものにて狂言いたす事あり、古來は役者一ヶ年極めの事ゆへ、六月休みといふ事もなく仕來りしに、いつの頃よりしてか、土用中休むよふには成行し也、勿論故人市川柏莚に限り、土用中相休みし事なりしに、今は一體の休みとはなりし也、扨この夏中顔見世入替りの役者、あれ是と相談いたす事、是は芝居の支配人、金主との相談にて極る事なり、しかし時として評判よろしき役者、きゝものゝ部は、春中より内々相談に掛る事也、扨また秋狂言も七月十五日より初る事も

あり、殘暑つよき折からは、八朔よりはじむる事也、秋狂言も九月にいたれば、あらまし更替りの新狂言に成事ぞかし、扨又九月十二日を、來る顔見世の世界と名付、三座共に顔見世に相定りし座頭、ならびに狂言作者、大夫元、帳元、頭取打寄て、顔見世の狂言を相定むる事也、此世界といふは、先顔見世の狂言太平記、平家物語か、伊豆日記又は鉢の木かと、狂言の躰を極むるを、世界定めるといふ也、此九月十二日を、三芝居共に世界と定めし事は、昔寛永年中猿若勘三郎、御當地に歌舞妓芝居を御高免有て、中橋におゐて初て芝居を建、狂言の相談を極めしは、九月十二日なり、夫よりして此日を吉例とせし故に、外座にても定日となりしよし、右の當日は夜に入、座本宅にて致し、また茶屋にてもいたす事也、其節は表裏町の茶屋、又裏々の小茶屋までも祝して、挑灯を出す事也、扨顔見世も、近年より段々と座組もとり極るに付、それ〳〵に手付金を相渡、十月上旬までに、芝居も打納むる也、尤役者手付證文の事は、其座〳〵にて、少しの相違はあれども、あらまし左之通

手附證文之事

一金

右金子之儀は當何ノ十一月より來何ノ十月迄貴殿御芝居え相勤め可申義定仕候に付爲手附金慥に請取申候所實正也然上者無異變相勤可申候尤壹ヶ年給分之儀は別紙極書之通に相定申候上は外芝居は不及申田舍芝居等決而相勤申間敷候爲後日手附證文仍如件

年號月日　　誰　印

何座

帳元誰殿へ

右之趣にて年々相定る事也、扨新役者付の下繪等取掛るに、此役者附は至てむつかしく、古來は座本帳元狂言作者にて、下繪等定めし事なりしに、近年は時の座頭たるもの、彼是と差圖して、猶更にむつかしく、此役者付の事は、依怙ひゐきなきよふにすべき事也、役者付初摺出來の上、板元より大夫元帳元方へ内々にて差出す事也、扨配り出し、定め通り相濟て、其翌日賣出す定めなり、前々は役者付出せしは、十月十日前後の樣に極りなりしが、今は彼是と引延して、日限も定らず、十月十七日は三座共に、囃初とて惣役者庫

上下にて寄合事也、それゆへ寄そめともいふなり、尤重年の役者は羽織袴也、その寄初のいたし方、三座共に同様ながら、堺町は芝居の三階へより合、ふきや町木挽町は茶屋へよる也、此當日は極り役者手付金の外に、渡し金の事あつて、帳元かたにて金子出來、不出來によつて、六ヶ敷日なり、役者給金一ヶ年極め之事は、例へば金三百兩の給金たる役者に候得ば、三分一の割にて、顔見世に金百兩相渡、殘り金貳百兩を來年五節句拂に、五つに割一節句拂ひ金四拾兩づゝと極めしものにして、金三百兩の役者、顔見世に金百兩わたすは三度なり、其渡方手附金に三拾兩、十月十七日寄初に貳拾兩、十月晦日に五拾兩と定め、渡し方致す事也、右の極めにて、中役者又は詰はやし方に至る迄、此割合のごとく也、扨寄初當日は、暮時より大夫元、麻上下若大夫同様に、緋もふせんを敷て、上座して片かわへ座頭二枚め三枚めと、段々座ならびす、扨又片かわへは、中二階若女形の座頭上座にて、是又立役同様に居ならび、三階中二階兩かわへわける也、三階といふは立役の分は三階に居て、女形の分は中二かひに居る事故に、三階中二階といふ、また下立役ははやし方のものは、下家兩側に居る故に、おした又兩側ともいふ也、扨又寄そめの席に出るは、下立役の頭はやしかたの頭出る、中役者も頭分一人出る事なれば、此寄初の席へ出る事を願ふ事也、斯座も定りて、頭取たるもの、大夫元の前に盃持出て銚子熨斗こんぶを持參して、頭取は羽織袴にて罷出、先づ三階の座頭より、大夫元と杯事ありて、大夫元座頭への挨拶は、來年中萬事を相賴のよしにて、頭取銚子を持、大夫元座頭と盃事ある其節、はやしかたの頭罷出で、小謠あつて肴を頭取はさみ、夫より順々に盃をする、斯のごとく殘らず相濟と、狂言作者次第あつて、中役者下立役の頭、はやし方の頭まで惣殘りなく盃も相濟と、狂言立作者裏付上下にて罷出る、其跡より狂言方のもの袴羽織にて、白木の三寶へ顔見世の大名題を乘てうや／＼敷持出ると、立作者大夫元座頭へ挨拶して、右の大名題を明年の惠方へ向ひてよみ上る、小書大名題小なだい迄もよみ終ると、二枚の狂言作者罷出 、惣役者役人替名をよみ上る、是迄は狂言の大名題、役者も初て聞、其役々も承知する事なり、かくのごとく噺初までは狂言を秘して、外へ洩れぬよふにするを第

一とする事也、近來はなき事ながら、古來は右のごとく名題替名をよみあげて後、狂言の筋を立作り噺に致せし故、噺初といふなり、此噺初には、阿答打といふもの有て、三立目よりの狂言正本を持て、其筋〳〵を殘らず噺時、役者の內より古老のもの罷出、其狂言の噺を一々挨拶する事を阿答打といふ、近來は此事もなく、役者役々の替名計にて、狂言の義は追てと申斷、其夜は日出度、皆々手を打て、それより本膳出て、給仕人は棧敷番の者勤る也、中酒あつて膳も引ると、立者の役者の分は、上下を改めて羽織袴にて打くつろぎ、大夫元若大夫挨拶有て退座あり、夫より座頭より、段々と退座する是を噺初とも、寄そめともいふ也、扨十月廿日は、ゑびす講、此日は入替り、新役者の分ならびに、狂言作者下立役はやしかたに至るまで、紋看板を出す也、勿論其年の役者は、紋看板出さぬ事也、尤紋看板にも、三尺二尺五寸の高下紋所にも、紺上緣靑の品々ありて、一體紺上をねがふ事なれども、上分ならでは紺上はならぬ極め也、夫より狂言の本讀にかゝる、此節は役者はその役に出勤のもの、ならびに衣裳かた、道具かた、小道具方のかゝりのものまでも、狂言を聞事也、此本讀の節、役廻りあしきものは、彼是不承知を申て、狂言方と相談におよびなをす事もある也、しかし此事は、一座の內一兩人ならではいふものなし、扨段々に本よみも納ると、はや稽古にかゝるも、はや十月廿五日には、三芝居ともに大名題を出す事也、これよりは大道具方掛りのものは舞臺にかゝりて大道具方のこしらへ、看板は鳥居へ走り、小道具方は夜を日にかけて小細工する、衣裳かたは染物のあつらへ、幕廻り小紋の衣裳、加役の間合せいろ〳〵と日數にかゝり、限りある事故、中々少しの隙もなきこと共也、尤衣裳の事は、一體に立ものはいふにおよばず、中通とて三階に居る役者のぶんは、衣裳にはかまいなく、いなり町とて下立役のものへは、座元より衣裳をわたす事也、又三階の役者、立役、敵役にても、女形を勤る役有か、また婆々形を勤る時、また化身變化其外片袖切落すか、血に染り打擲されて著類を破る事なれば、引ぬきとて此類は衣裳方よりわたす、右の外に藏衣裳とて、狩衣白張も、引類あれども、三座それ〴〵に風儀替りてわたすもの極めある事也、此藏衣裳といふは、昔は樂屋內に藏をこしら

へ置て、數々の衣裳ゆへ持運びも日々の事故に、則此藏へ入置きし事故に、いつとなく藏衣裳といひならわし來りしなり、勿論右にいふ加役事、其役を勤る役者によつて、至て渡しものに甲乙ある事也、扮稽古の内は、其役々有て、中通の役者は立仕とて立をよくするものは、立ものへも立に付る、振付はうた淨瑠理に合せて振を付る、立三味線のものは、新唄のこしらへもの、めりやすの節付する、扮大小の鳴物太鼓すりがねの稽古何れ隙あるかたもなく、あらかたに稽古出來て、中ざらいといふ事あり、同廿八日には、表惣看板出る、茶屋にては思ひ〳〵の餝りものをして、小の月は廿九日、大の月は晦日、芝居町の賑ひ、誠に目をおどろかす計り、夜の更るもしらで茶屋〳〵の酒盛、三味線の根じめおもしろく、長唄役者の聲いろ、けん酒の聲かまびしく、芝居の木戸前、山に山こす人の山、押合ひおしおふ有さまは、餘國に稀の賑ひにて、晝七つ時過れば、木戸前にては言立の聲をあげ、狂言の名題役者の役人替名をよみ立、終りには役者のこわいろ、仕切場には靑すだれかざるや花の臺のもの、打や拍手いさましく、樂屋は稽古鳴物人の大ざらへ、

役者の家々には入來る客のもてなしやら、手打連中への挨拶して、見事にかざる衣裳の數々、はや一番の太鼓の音、木戸には一同の聲をあげ、二番太鼓に程もなく、座元式三番をはじめ、是また正月三ヶ日同樣にして、別火に身を清めて、つゝしみをかさねて勤る事也、斯のごとく顔見世三日の内は大夫元相勤め、四日めよりは下立役より勤る事也、問て曰、芝居といふものは、一ヶ年何程の仕入金高にして、何程ぐらい上り金是あるものにや、答て曰、芝居の凡見積は、當顔見世より來十月迄を二百日と見つもりて、其時〳〵の役者の座組に寄る事ながら、大概一ヶ年七千兩位、内外の積りにて大入中入不入をならして、興行一日を金四拾兩あがりとならして、二百日にて二四八千兩と定しもの也、尤顔見世大入の節は、八九拾兩程も揚るものにて、一ヶ年の内三替り大入あれば、金主の損毛は是なきもの也、しかしながら金主の仕合不仕合にて、是又定めがたし、芝居にては大金を損毛もするよふに皆々心得たる人もあるなれども、是又定りたる事にてもなし、大金損毛致されし御仁もあれば、其中にて仕合せよくもふけられ、芝居ゆへにてはある

まじきなれども、抱屋敷の十四五ヶ所も出來されし仁もあり、尤それを殘らず、芝居にて德付られしといふにはあらねども、時として折よく運もよく、人の損して捨たる跡にて相談し、其狂言が大入大繁昌して、夫か拍子のちから金、かねが金よぶ道理にや、段々と仕上られしといふ噺もあり、一體芝居といふものは、一ヶ年の出入の積りは、隨分引合勘定のものなれども、其支配するものまたは、金主の心得と上運不運もあるべき也、芝居は金主一人か二人にて惣くゝり能する事ならば、利潤のわかちもわかるべき事なるに、大勢の金主寄合にて、持寄同樣に致さるゝ故、利潤もわかりかね、損毛も多く引合かねる道理也、先一ヶ年の芝居六千兩高のくらひの見積ならでは、引合かねるものなれば、役者給金を金六千兩の積にしても、一ヶ年の內新狂言の替りめ、道具看板藏衣裳、芝居地代等あらまし金千兩と見積りて、都合金七千両也、此七千兩を三つ割の勘定にして二歩一、金二千三百三拾兩餘を顏見世拂にして、殘り四千六百七拾兩餘は、來年中五節句拂にして五つ割、五節句一拂ひが金九百三十四兩餘になる也、是にて一ヶ年七千兩と成、扨一ヶ年興行の日數、凡二百日の見積にして、右のごとく拂ひ切勘定ながら、五節句の拂にも五月九月の拂は、分をかけて拂ふ事、役者ども方にても、年々心得し事故、談し合により分を掛けて拂ふ事なり、扨また一ヶ年の入金は、右の趣にて、興行日々揚り高の事、其月其月に多少ある事にて、顏見世は三十日と見切、一日のあがり金六拾兩ぐらいの見積、三十日のあがり高金千八百兩とする、扨正月は十五日より初めて、二月晦日迄が一拂ひ故、此興行の日數凡四十日と見て、日日のあがり金三十兩のならしにして金千二百兩、扨三月節句より晦日迄一拂ひ故、此興行日數五十日と見て、三月は顏見世同樣の月にて、格別に入も有事故に、一日金四拾兩にならしては、金高二千兩と成、又五月は節句より六月五日六日あたりまで、興行の日數三十日故、一拂ははらはぬ事、夫に順じて揚り高も一日金三十兩ぐらいの見積にて、あがり金九百兩、扨また七月十五日より、八月晦日迄、興行の日數四十日、一日の揚高金四十兩ぐらいに見て、金千六百兩となる也、扨又九月八九日よりの日數にて、十月十日頃迄の興行にして、三十日の見積り、揚り金一日に金三

拾両ぐらいの勘定にして、金九百両あがり也、此九月の一拂ひは、昔より居なりの役者と、外芝居へ行役者との差別有て、たとへば居なりの役者へは、一拂を六分位出し、行役者は七分位と高下して拂ふ事なり、右のごとく一ヶ年七千両の芝居にても、その年の振合、五月九月のわかち有て、詰る處六千両位の芝居の高に成なり、凡の仕入金、また興行日々の揚り金を、高平して見る時は、七千両の芝居にてあがり金、内羽に見積りて金八千両餘となる、勿論興行日々の入用、また臨時事ながら凡右之通を定式とするに、格別の違ひ有まじき也、是故に役者の事にても、一ヶ年金三百両の給金とる役者も、五月九月のはらひにならす時は、正味貳百五拾両内にあたる割合なり、

右乗合噺一二卷以河竹新七藏本自摸了
以下三四五卷者去冬金藏所寫也
乙丑花朝　　反古張庵主

芝居乘合話三

問ていわく、芝居一ヶ年の出入金高のわけ損益のよふす、あらましにわかり候、右の内揚り金の高下三座とも同樣に候や、

答ていわく、三座ともに一體の揚高に候得ども、少々宛の違ひ是ある事也、先堺町中村座は、再興後新規に普請仕置して、間口も廣く外芝居よりは格別大きく、尤興行は三座とも町並替りなく、葺屋町は其次、森田座は市村座より少し手せまく、素人かたの見積にもたとへて見る時、堺町百兩にて、葺屋町九拾兩、木挽町八拾兩ぐらいの相違はあらんかとの噂、夫ほどには違ひも有まじきか、少しき違ひはあるべき也、しかし見物人入かたの事、いろ／＼と手練有て、其芝居の支配帳元心得にて、格別違ふ事也、是ゆへに金主方の氣に叶ふ帳元は、茶屋または芝居掛り合のものあしさまにいふもの也、

問ていわく、芝居にて帳元といふは、至て重役に聞へ候が、何樣に六ヶ敷役がらに候や、

答ていわく、帳元といふは芝居の惣支配人の事にして、芝居一式の重役にて、古來は短才無智無筆無算下根のものにては、一向に相勤りかね候由ゆへ、此人を撰しに、近代はまた左のみ夫に限りし事にてもなきよふになり行て、無筆無算の上、芝居道もふたんれんのものもよろしき也、其下役有て、相應に間に合す事也、先此役義は、芝居一式を引請て、萬事我心得を以て取計ふ事ゆへ、一々座元へ聞合するにもおよばす、成程外目より見る時は、下賤匹夫此上もなき、下々の身分ながらも、芝居道にては、皆々尊敬して恐れおそるゝ身分也、大金のこしらへかたゆへ、座元にても何事によらず聞合せには及はずと、萬事帳元任せと、大夫元より帳元へ威を付て、冠を著せる心持ならねば、芝居の大金は出來ぬ道理にて、今の芝居の有樣、古來とちかふ事あり、先大夫元は、芝居一體のつかさにて、茶屋は申におよばず、掛り合のものまでも、主人とあがめる事ゆへ、其大夫元帳元へ位の付よふに致し來りしもの、左樣になければ、芝居一體の事取極り兼るものなるに、近年は支配人位を大夫元よりくぢきちやう元を度々取替る事故に、此末とても能帳元

は出來ぬの道理也、先以帳元といふ役は、六ヶ敷役にて、古來は其人を糺し見て、其役とせし事なりしに、今のていは金子の少々も働くものあれは、早速に其者を帳元にもする故に、物事のとりしまりあしく、芝居出かたの者どもの行儀などあしくなる、是また種種わけ有べき事にや、芝居の事不鍛練無筆無算の帳元ならば、その下々を働く役の者どもには、よろしき事も有やらん、くわしき事は其人ならねば知れぬなり、しかし三座ともに芝居掛り合大勢の中、其渡世する身にては、一度は帳元をして見たきと思わぬものはなきよふに見ゆる、然れども至て六ヶ敷役にて、第一に金主のおもひ付あしきものは出來ぬ役、其上芝居興行の日々金主の手前よろしき樣、萬事を心付して、揚り高能よふにせんと取計ふ時は、茶屋掛り合の爲あしく、又茶屋掛り合のものよろこぶ樣に致す時に金子あがりあしく、金主かたの手前あしくなるの道理にて、中々六ヶ敷、そのほど能よふにとりはかろふ事、双方よき樣には參らぬもの也、年々の事ながら、芝居興行の内よりも、來年の座組の心がけ、内々にて、手附金の心懸、九月ころに至て、あらかた座組も出來、十二日の世界もして、程なく十月十七日寄初にもなると、跡金才覺してよふ／＼噺初もすぎ、役者付も出し、廿日の紋看板大名題惣看板も出して、早晦日にいたりて、明日の金こしらへ、限りある日とりゆへ、言葉にも述がたき心勞にてやう／＼と金主方より金も出る、鷄の聲をもまたずして、一番太鼓打込までの其苦しみ、いふにいわれぬ事にして、此心遣ひ、金主への氣がね、金主も心々あつて、一同ならぬ人心、それ／＼に氣を配りての心遣ひ、誠に此役義を勤る思ひをして、外々の勤致ならば、いつかとよろしき親方、主人よりして、元手のふれんをも貰ひ、相應の店持ともなつて、老を養ひ申へきに、夫には引替、此義を勤しものえ、末のよろしきわかれせし者を見ず、是ゆへにこゝろあらんものはせぬ役、誠に情も氣根もつゞく事にてはなくと思へども、根を糺して見れば夫程くるしき事をわきまへながらも、是を捨かねてよろしからぬ役をするも、此道のすきよりおこりて、古來より此役勤しものに、終りに金銀をたくわへて、身退きし者一人もなし、すきの道とは言ひながら、心遣ひの渡世して、子孫へも讓られぬ事、能々あ

しき世渡りと、心には思ひながら、すきよりおこる心の苦み、興行の日々迚も、毎朝未明より茶屋〳〵にせめられて、棧敷土間を割渡し、是又依怙ひゐきなきよふに氣を付ての心遣ひ、其棧敷土間も割渡して後には、仕切場へつめ、跡口〳〵の場所のあがりに氣を配り、または出入の行儀等までも、心にあらぬ目に角立て、萬事を改め、少しにてもあがり高能よふにして、金主かたの都合よろしき事の心掛、兎角大勢のものの的となりて、にくまるゝ事大かたならず、一體芝居といふものは、役者の外給金を取ものなく、興行日々の渡世人、二百四五十人宛の出入有て、其内日々拂錢とるものは、幕引髮結衣裳まで、小道具方道具方にて十四人ならではなく、みな〳〵無給の渡世人ゆへ、見物人の入かたの事に付、いろ〳〵のわけある事、その役々に預る役人掛りあれども、請る所は帳元一人にとゞまる事故、その程々を見はからひ、渡世人も相應に家業にとりつかるゝ樣に、目こぼしもなくてならぬ事也、扨また芝居打出しの太皷につれて、諸金主がたへ引金の割に掛り勘定して、一日の揚りしめあげ役者へも引金として金配る事有て、金主方へも夫程夫程の割をして、納めかた専一とする、此金主の納にも、新古の差別ありて中々六ヶ敷ものにて、一日のあがり金にては、さばきかぬる事故、彼是とする中へ、諸拂かたの足不足、金主方よりは割金の大小にて是又足不足の言ひわけ、又有時は見物人の喧嘩口論、打捨ならぬその事まで何一つ耳に入らぬ事なくして、漸々に夜の九つ時頃には、先暫し休息と思ふ中に、はや茶屋〳〵より、あしたの棧敷割にかゝるなり、先此棧敷といふも、上下にて六十間餘づゝ有事ながら、上下の中によろしき場所廿五六間ならではなきゆへに、茶屋〳〵我がちに、客大事と能場所へ入らん事、願ふ事なれども、依怙ひゐきに決してせぬ事を、第一とする事故に、此割かた至て六ヶ敷、大入の折からなどは、此割には枕をくだく事なり、扨漸々割かたも出來、少し心のやすんずる折からに無據かた、金主よりも頼みの棧敷申來る、是をけじやうといふ、役者のかたよりも頼みのありて、此事には三座の帳元至てめいわく致す事、今まで種々として割付し棧敷を割直すゆへ、六ヶ敷割の上、猶又六ヶ敷、これにも筆を捨て、いかゞせんと思ふ事日々の事にて、此時穴なしと

いふことをして、朝の内帳元かげを隠す也、棧敷帳とて日々の割帳は、割元といふ役人あつて、帳面を帳元より受とり、割揚といふ所にてひらき見て、手前〳〵の名前の棧敷、善悪にとつて客の手前、申わけ立がたき棧敷遠ふして、茶屋は帳元をうらみ、又割元は棧敷のよしあしを繰合する役ゆへに、彼是ともみ合ひ押合ひ事なれば、舞臺は三立目の幕明ごろまでも、棧敷へ見物は片付ずして、茶屋は客の申譯、戸をしめるやら混亂してもみおふうち、舞臺は幕あき、拍子木につれて聞ゆる鳴ものに、見物人は心も空、先棧敷の悪敷も打捨て、夫なりに成事は是もおかしきならわせかや、棧敷に限らず、土間引船いづれ大人の折からは、我人ともに能場所へ我客いれんと心がけ、帳元一人を目あてにて、其日〳〵のせりあふを、聞にきかれぬ事なれば、暫くかげを隠し、漸々見物も居付し時分を見て、又仕切場へ詰る事にて、憎まれ役とはいふものゝ、外目より見る時は、掛り合のものどもには敬ひかしづかれ、金銀もつかみどりもするよふにみへて、うらやましくも思ふ人もあらん、なれども中々左様の事にてはなし、糺して見る所が、すきからかゝるにくまれ役、短才無智下根無筆無算なるものにては勤まらぬ役ながら、今更思ひば人の目に立役がらゆへ、夫となくに何か善悪を構わず、上根にてぐにや〳〵とわからぬ方よろしきかと存らるゝ也、其中にも古來は、此帳元役を九年十年勤めしものもありしなれども、世がらもせちがしこくもなり、金主とても今の金主の如くにてもなく、また第一は座元の心持による事にして、久しくも勤る事也、大切の役がらゆへ、一度此役にせしならは、座元より其帳元へ威を添るよふにするならば、芝居掛り役大勢のしめしも聞道理にて、座元より帳元〳〵と威を添るならば、金子の出來かたもよく、芝居の行儀等も正しくなる、夫故芝居滞りなく打續くなり、夫を近年は帳元支配人の威をおさへおくよふに成行し事故、帳元の身分かるくなる故、芝居も大や敷なる也、とはいへ帳元の心持と、いろ〳〵にて根を糺して見れば、元が一夫の事故に、人の指図するに任せて、我をわすれ心のおこり、身分もあらぬ事のみ多く、遊興に長じ、金主方の思ひ付もあしくなる事あらば、其節は座元の心得にて、何様にもいたしかたあるべき事ながら、よろしからぬ

渡世ゆへか、大勢の寄合家業にて、一トくせなきものは一人もなく、親のおしへし商賣を振捨て、此道に入事ゆへ、人氣あしく、我また人をねたみこばむ心からは、金主へ手を入付添て、人の善惡をもわきまへず、また座元へ諂ひ昔をその跡部長坂を習ひて、座元金主の心をまよわし、帳元の心をあしくする事は、全く座元の愚よりおこりて、年中芝居むつかしく、度々支配人替り故に、終に芝居も休みがちになりて、大勢の人の家業のさわりと成事は、なげかわしき事ならずや、去ながら此渡世する身分のもの、一度は帳元を心がけぬもののなきや、いらざる事とて、昔より帳元の子帳元と成しものを見ず聞ず、子に讓らぬに極めてつたなき役がら、利發のものゝする役にてなし、只すきからとはいふものゝ、いらぬもの／＼、近年の事にて聞覺へしは、此帳元役勤めし人も數々有が中にも、珍らしき人物にて、今に茶呑噺にも出るは、木挽町森田座の帳元たりし、平田初丸とやらんいつしもの、元は心もあら／＼しく、若き血氣にまかせて、あらぬ身持して心の儘の世過して、車五郎と仇名してあらもの成しが、風と森田座の木戸番となりしが、少し役者のこはいろも心得し故に、言ひたてといふものを勤めしが、一度芝居渡せいするからは、芝居惣頭たる帳元とならんと心懸し所、運に乘せしや、よき金主の目に付て、段々と取立られ、終には芝居の帳元となつて、滯なく芝居も打續て、四五年は相勤めしが、此役いついつ迄も久しく勤るものならずと思ふ心から、顏見世の座組も出來かね、身退しといわれんも口惜しき事、何卒來る顏見世の座組をして、心能跡役え讓らんと心掛て、追々役者へ相談して、手附金の渡かた首尾よく、手付證文とり極め、座元へ申込には、病身に相成に役義勤り兼る趣を相斷、跡役をも見定め置て、跡目の帳元權兵衛とやらんいふものに役義を讓りし時は、九月十三日なりしよく割金主かた初め、座元仕切場惣茶屋／＼を呼集めて、相應の料理を出し、盃の上帳元を跡役へ讓りしが、其砌床の間へ一軸をかけて、其前に役者手附證文を乘たる三寶を直しおき、其節みな／＼其掛ものを見しに、軍配團扇を畵て

また照れと軍配わたす波の月　　初丸

斯如にして、帳元役を人に讓りて、我身は隱居して身終るころには、谷中日暮里に石碑を殘し、今に申出す

近代の帳元、其外今まで見聞するに、斯のごとき人物稀にして、中々及びかたき事とも也、是や誠に巧成遂名て、身退くの道に叶ふかや、此末かゝる人物もあらんや、能金主ありて、芝居もどん〳〵打續くならば、人情として身退きかぬるもの成に、彼の初丸の心はづかし、

問ていわく、芝居にて仕切場とて、大勢きらびやかに出立てなみ居るものは何役のもの、また何程の給分とるものにや、大勢なくてならぬものにや、

答ていわく、成程御尋のごとく、仕切とて大勢是あるは、惣體三芝居ともに、座元の手代にて、給分といふもなく、興行に少しづゝの事あれども、中々一通りにては勤りかぬるものにて、外目よりは至てよろしきやふにも見ゆるといへども、内證は六ヶ敷出續きかぬる事にて、數年來久しく勤るものは、彼是と暮し行なれども、新參ものは浮氣半分にして、思ひ付ていろいろと手筋を頼みて、此道に入て見て、初めて驚くばかり也、素人目からは、おもしろき渡世と見ゆるも無理ならぬ事なり、尤此仕切場手代の中にも、段々高下役ありて、其役付になるよふに迄辛抱すれば、暮しかた渡世にも成るもの也、其中にも新參ながら、能金主にても手引すれば、其手筋より古參のものより、早く役付ものも有也、此仕切場は兎角金働が專一にて、その事ならねば出世は出來かぬる也、今の仕切場も昔とちがひ、殊の外身姿も見ぐるしく、昔の仕切場は仕切場男とて、人品も相應の上、物書算用等も夫々になるものならねば出さぬ事、殊更浮氣の渡世ゆへ、物事花々しき樣に仕立しものなるに依て、年丈しものは仕切場へは出さぬ事なりしに、しかし年寄て勤るは前々より勤め居るもの故にあらためず、新參に年寄を遠慮せしと也、夫に引替今の仕切場は、年寄無筆の差別もなく、仕切場の風はどこへやら、自身ばん同前のなりかたち、其心からは、外の商賣に思ひ付方がよろしからんといわれし人もありしと也、

問ていわく、扨また其仕切場手代の内に、當ばんといふもの見へ、此ものは萬事にたちさわるよふすに候が、何樣のものに候や、

答ていわく、是は仕切場の内にても、帳元の下役として、帳元替りを勤る役ゆへ、至て六ヶ敷役にて、芝居の成行六ヶ敷時節に、帳元を病氣にして、萬事をとり

さばく役人にて、多くは脊より帳元にも成る事也、此外に仕切場手代の中にも、夫々の役柄の高下ありて勤る事、まづ當ばんより表方、高場抔其外にも其芝居芝居にて設しも有事也、是にても昔のさまとはことかわりて、今は振合も違ふ事なり、先當番の役は、其時々の帳元の善悪によつて、至て心遣ひなる役、しかしながら其時の帳元、芝居道ふたんれんか、無筆無算なるものならば、下役のもの勝手よろしき事ありや、その役ならねばしらぬ事なり、昔はちやう元の役至て大切の役柄ゆへに、其人物を見定て、座元金主相談の上、帳元と極めしことなるに、近年は少しの金口をちからに、其器量ならぬものにても帳元とする處に、樂屋表方ともに、芝居一體のとりしまりあしく成行事也、其帳元の下を働く當ばんのものども、勤かたに格別のちがひ有事ぞかし、去ながら俄帳元の方がつとめかたよろしき也、又勝手にも成事やらん、是にても是人ならねばしらぬ事なり、先は出來合の帳元とあつらへの帳元とは、差別あるべき事ならんか、扨又此當ばんの役々は、日々順ばんに帳場を引受けて、棧敷のとりしらべ、代金の集かた、其外には立者役者を二三人宛ゝ割ふりして引請、給金の取引等は、此役にて致す事、是等の事にはいろ／＼の手段もある也、是また其役ならぬ事故に、委細は言聞がたし、

問ていわく、芝居は口々にわかりて勤る事、其口々に高下ありや、

答て曰、芝居口々とわかる事は、仕切場、木戸、留場、棧敷、表働き、はん疊、させる賣、樂屋かゝりとわかりて、先仕切場を萬事の改め所としてとりしまりかたする事故に、仕切場を重んじ、其次を木戸と極め、夫より留場、棧敷ばん、表半疊と夫々にわかりしもの故に、口々と唱る也、往古より芝居は、木戸ばんにて萬事のことを世話せしよし、さるに依て、帳元を木戸ばんを話人と云しとなりぬ、又此木戸ばんの役かゝりは、毎朝芝居初る前より木戸口へ詰て、一ばん太鼓三番叟より聲をあげ、一幕ごとに聲を揚る、扨第一番目の大詰には、言立といふ事有て、人よせのため、狂言名題役人替名をよみ立其次には役者の聲色をつかひて人寄する事、第二ばん目の幕明までに仕舞ふ事也、扨又此木戸を勤るもの、其日／＼のばん／＼にて、木戸の入口へ口ばんとて、兩人宛居て、仲の間また一幕

見の人を入るゝは、木戸口より限る事にて、少しづゝの渡世あれども、其身分ならねばくわしくはしらず、勿論木戸のものは、一幕見仲の間の見物計りに限り、外々へ見物を入るゝ事はならぬといふ事にてはなく、棧敷土間切落しなりとも、いづかたへも見物を世話して入るゝ事也、木戸ばんを勤るものにても、年久敷勤め居るものは、馴染の人も多く有故に、隨分と渡世にもなる事也、何方の口々を勤るものにても、馴染の客なくては、渡世にならぬ也、尤此木戸を勤るものとても、種々の手くだも有べき事やらん、なれども人の時また性は道によつてかしこしと定らぬ家業故、其日〳〵の仕合不仕合もあるべき也、

扨又留塲役といふものは、若手の者計にて、見物人の酒狂人なるか、または喧嘩口論などのとりしづめをする役にて、年寄ては勤りかぬる塲所故に若手を撰む事也、是とてもその日〳〵に急度何程づゝと云拂ひ錢とりといふ事もなき事故に、馴染の客なくては出つゝかれぬこと也、此口々の役々、舞臺ばんといふて、狂言の内舞臺に居て、見物の非道をせいして、狂言へさわらぬ樣にするが役、其外一ヶ年に一度ながら、顏見世役者の入替り、十月十七日寄初の節、當年まで手前芝居に勤居し役者を、外座へ送り届る留塲の役にて、其節は羽織袴にて送る事也、尤送る役者は、立ものに限る事にして、三座ともに同樣也、扨また顏見世入替り濟て、役者立もの一人へは、送りと定めて留塲一人づゝ差添ふこと、是又三座ともに同樣にして、役者樂屋より花道へ出る折から、棧敷下より上ヶ幕に掛る時、棧敷下の人をはらひ、また早替り有時は、なくてならぬ事ども也、其外に外芝居祝儀事、不祝儀等の節は、此口より勤る、其役々を割付るを役あてといふ、是は小頭の下役にて、始終は小頭にもなるべきものども也、此外に切落し札の上かた、切落見物の人かたの事には、種々の事どもあらんか、昔と違ひ切落といふ物少しにて、殘らず土間繩張となりし故、切落も少分の事ゆへ、留塲の出入もむかし程はいらぬ道理ながらも、出入は多く成は如何なることにや、此留塲口を勤るものは若手故、外口よりは手あらくも成事ゆへに、興行中は酒を禁じたる事ながら夫までも行屆きかぬる事にや、一體に芝居の出入の定りは、むかしより同口へ出入に、親子兄弟を出さぬが

極めにして、其外帳外ものならびに宮地芝居、又はさかり場見せもの鑼張の芝居等へ出しものは、相糺して決して出さぬを第一の定めにて、三座ともに是を吟味する事なり、とりわけ留場を勤るものは、とし若のもの計にてなければならぬ事ながら、若手故に兎角手あらになりて、見物等へも手あらに取扱ふ事は、高場役仕切場よりして、其人を見定め置て、家業をさし留べき事也、扨又此口にも口ばんといふ事ありて、毎日〳〵替りばんに、兩人づゝにて勤る事、當ばんの日にあたり、其日見物人のせいし方の事か、又は傳房といふて無錢の見物有て、兎角見物人共また留場のものども、口論抔ある事、無錢の傳房を押とめ、彼是に付口論あるか、何様の事にても、疵人等ある節には、此口ばんのもの相手當人となる事也、かよふにあぶなき渡世ながらも、若き心からはおもしろくもおもふや、兎角此口へ出たがるもの多し、此口とても定りて拂錢給金といふもなきが、何様の事にて家業にも成やらん、目立著類をかざりて、ぶら〳〵して居は、何か種々の手くだもあらん、なれども是またその人ならねばしらぬ事ながら、尋ねて見たらば、穴さがしの様ならんとひかゆるなり、

芝居乗合話四

扨又棧敷番の役も、昔は兩側の棧敷十五六人ならでなき事なりしに、いつの頃より兩側にて四五拾人程つゝある事のよふになり、尤此棧敷ばん勤方は、用向多き事にて、中にも折ふしは芝居御掛りの御廻り方御出のせつは、麁相これなき樣萬事大切にいたす、上棧敷に御入被成候事ゆへ、棧敷の者御大切に氣を付る事也、此口にも、小頭役當といふものあつて、夫々のしめし方を致す事にて、先日々の遠使、または祝儀事、不幸の名代等は、いづれ此口より勤る事なり、扨また芝居休みに相成ても、用向此口のみ多く、夫故に番割をして、日々小頭方へ詰ること也、其外寄初はいふに不及、何事の寄合に有ても、給仕人等も皆此口のもの勤る、勿論家業あるせつ、何方の口々も同じ事にて、客なきものは渡世に成かぬる故、年々出る人あれば引もの有て、大勢家業する事にやしらず、芝居定りといふは、棧敷土間ともに一間のかし切百文はね、切落は土間札詰、棧敷の札詰までも十六文のはねといふが定り也、しかし大入の折からは、夫相應の高下もあるべきか、夫は札詰見物に限る事にて、棧敷土間は何程に大入にても、直段は定り通りより外上る事なき也、右の通りにて、わづかのはねせんにては、渡世にも成まじきか、年久敷ものは客も多くある故に、其餘情にて過行事もや、また此外にいろ／＼と手段もあつて、其日／＼家業にも成事ありや、はなばんならねば夫をしらず、表半疊の者といふは、興行日々に早朝より出て看板を出し、また打出しには看板を取仕舞、また夜に入ての遠使、金主方の送り、其外役人にの事を勤め、扨また狂言のせつ闇中に成、せり出し廻り道具、其上にも狂言初日前には、荷物の持はこび、種々の使を勤る事にて、是にも小頭役當といふもの有て、夫々に役を割ふる事也、尤此勤かた、三座にて少々宛の違ひあれど、大概斯のごとし、此もの共の家業とするは、興行日／＼表東西南北にわかれ立て、見物人を遠目より呼かけ、合羽からかさ其外の座帳あつて見物をすゝむる、是を仕切るといふ、勿論此仕切方も一幕見、又は張出し向、正面抔といふて、札錢下書の場所をすゝめ、尤切落土間の札詰等へも仕切事

ながら、兎角田舎人抔をば格別の札錢をとり、居所も定めで、其人にめいわくさする族、折々ある事のよし、此義は仕切場より、せんさく吟味して、急度差留る事なるよし、かく少ぶんの渡世ながらも、年久しく出るもの澤山なるは、如何して渡世とするやらん、又半疊方者は、一幕見の半疊錢をとり上る役にて、是又少分のはねにて、中々渡世にはならぬ事ながら、是も見物を仕切事もあり、其外には種々の手くだあらん、相應に妻子をはごくみ、暮し行はふしぎなる渡世也、扱またきせるといふは、火繩賣の事にして、是にも小頭役當ありて、その役々を勤る事也、先口の役といふは、役者出這りに聲をかけ、淨瑠理所作事の相の手毎に、其役者〳〵をほめる、其外幕毎に、道具立の手傳、またきやう言初りかた前、普請道具拵へのせつは手傳ふ事が役として渡世とするは、切落し見物、土間札詰の見物へ、火繩を賣事にして、是も定りありて、少分の割合を取事也、其外には馴染の見物有て、相應の家業にも成、また込合節は、見物を近き所へ割込をして、先より居付し見物にしかられながらも、是を渡世とする也、其日とてもいろ〳〵の手段有べき事ながら、其仲間ならねばいさいはしれがたし、

扱また樂屋を勤るものは、前書に印せしごとく、幕引髮結衣裳著せ、小細工がたに興行、日々仕切場より拂錢あるなり、其外の者はなし、樂屋口番といふものあれども、昔は年ひさしくしばいを勤めしはたらきのもの抔を、此口ばんとせし事なるに、近年にさかんのわかもの勤るは、時代の相違いろ〳〵と替りし事なり、尤樂屋定番といふもの兩人有て、是は拂錢の内にて、日々の用事をたし、打出して後夜のばんを勤る事、芝居休日の折からも樂屋のばん人也、扱先衣裳かたの役は、頭たるもの久しく勤居て、役者へわたし方の衣裳の事、いろ〳〵と定り有て、夫々に見わくる事也、扱また新狂言本讀の節も、狂言の筋を聞て、子役の衣裳立もの丶加役の衣裳等を心得て、その役者役者へ掛合て取極る事、いたつて六ヶ敷役がらなり、扱又興行日々にて、役者出るまでに寄て長上下、すほふの付かた、上幕より出る役者は上まくまで持運びて、すほふ長上下をきる事、其外何一つ手のかゝらぬやくしやなく、いそがしき役也、是等の外引ぬきのぬひかた、泥入の洗ひかた、種々の事書盡しがたし、打

出しには衣裳の改め取仕舞て、數多の品々ゆへ、うせもの有べき也、其事にも心を付て取入り能いたす事、是とても少分の拂錢計にては、渡世もなるまじき也、扨小道具方のものとても、其幕〳〵に入用の小道具を預り、幕毎に入用の物さしつかへなき樣に心懸る事なり、此外鐵砲の玉、せうちう火抔、いふ事はこの役の者する事也、

扨かづらをする者を床といふ、此かづらも立者役者は一人〳〵手前にて抱へ置事ながら、中役者下立役の分は、樂屋に髮結有て、かづらともにする事也、若女形の分は又格別の事にて、三座とも寄親といふ者ある事にて、古來よりの定りなり、

右の外に、芝居人數多くありて、其役々あれどもあらまし斯の如く、此外に仕切場に定ばんあり、是は表働き役にて年中の定り人なり、又茶ばんといふものありて、仕切場入に用を達す、其外に仕切場の用向を、晝夜共ようを達するものありて三座共呼聲を違ひありて、中村座にては若衆といふ、市村座にては詰ばんといふ、森田座にてはおくりといふ也、此もの共はてうもと仕切場のつかわれ者にて、興行の日々拂錢有也此外仕切場の中に高場表かた抔いふ役々あれども昔とは違切落し少し計にて土間多くなりし故也此兩役ながら名ばかりになり行し也

土間事も昔は帳元にて、割付借付しものなるが、今にては土間番といふもの有て、日々の賣かたする故、此下役の者ありて、萬事とりさばく事となりし也、金主とても、昔の金主方とは相違して、芝居もの同樣に其日〳〵附居て、自身に取引するは、むかしと今とは格別に、人の高下して違ふ事にや、

問て曰く、樂屋にて小高き所に居所をかまへ、頭取と號して居るものは、何樣の役を致候ものにや、

答ていわく、頭取といふは、三芝居ともにいたつて大切の役がらにて、其芝居の大夫元、名代をも勤め、興行日々樂屋にて、御定の外の衣裳等著致す役者をあらため、早朝より役所〳〵へ詰て、萬事を司る役ゆへに、大夫元の弟子筋か、何か少しの由緣ある、古老の役者を此役と定むる事にて、樂屋一式の定例を心得しものならではならぬよし、興行日々掛り合はいふにおよばず、事によつて無用のもの、二階三階へあげざる事にして、興行日々差支なき樣に、萬事を改め、

日々役者への渡しもの、紅紙夫々に渡し方をして、役者または下兩側の不行跡をあらため、何事によらず古法を守る役にして、其上出がたり淨瑠璃ある節は、其淨瑠璃の名代または役人替名、大夫三味線までを口上にいふ役なり、此外役者病氣等のせつは、此頭取へ斷の人を以申來る、則座頭へ達し替りを立る事也、彼是と六ヶ敷役義ゆへ、依て其人を撰み頭取とすべき事、昔より定りなり、然るを近年は此役もいつとなく見くだして、段々役がら輕くなりし樣に思われ、おのづから樂屋もふとりしまりに成行は、先此頭取を年々替る座頭の依怙ひゐきにて附たがる事も有故に、その座頭が外芝居へ行時は、頭取も連て行、其芝居の頭取とする、有まじき事なるに、夫を座元よりならぬと申斷はる事ならぬは、大夫元も昔より輕くなりし也、又帳元たるもの、器量なき彼二つ成べし、頭取といふものは左樣に輕くしたるものにてなし、座元迄も禮儀正しく重んぜし役なりしに、いつともなく斯くなり行しは頭取のかたよりも、いろ／＼と我身を安くする事ある故に、斯くは成行しにや、

問ていはく、役者の給金千兩取八百兩と申事、誠に千兩とるものにや、

答ていわく、成ほど役者給金の事、段々と高下ある事にて、座頭の立役女形の座頭となれば、千兩取と申事もあるなれども、一體役者といふものは、顏を賣る渡世ゆへ、とらぬ金も取よふに、人に聞ゆるかたよろしき故、是には種々の口傳あらん、

問ていわく、役者の心持はいろ／＼、外人とは替りものゝ樣に聞へ候か、如何樣のこゝろ持にて、暮しかたも何樣に暮し候や、

答ていわく、是はかわりし尋事にて、役者もいろ／＼にて、是も定りし事はなく候儘、此答へにはこまり入なり、しかし役者大立ものと成しもの、素人より座頭になりし者は、昔より稀にして、多くは立ものゝ子中立者の子、幼少より舞臺を勤て、段々と成長して大立もの、座頭にもなる事故、十人が九人迄世間をしらず、人のおもひやりなく、氣儘氣隨のもの多きゆへ、是には芝居世話人、仕切場の者こまるよし、是等は幼年より立ものゝ子にて、人の下に居る事をしらずして、芝居中にては上みぬ鷲の生立から、立もの座頭とも成事故に、持まへの氣隨のみにて、人中をしらぬ族

まゝ有が中にも、行わたりよろしき立ものありて、誰人にかぎらず芝居世話人、帳元または仕切場、手代にても能人といふ役者あれば、役者仲間にて夫をゑすみ、あしざまにいひなすは、全く我身の善悪が見へぬから、其人をあしき様に思ふ事也、芝居道には、種々の事あつて、しろうとかたに噺はならぬおかしき事多く、能しりし人にたづねて委敷き事は聞なるべし、扨また暮しかたの事は、其仁〱にて違ふ事ありや、しかし近年は役者の身分を女房まかせにして置やから多く、是は損のゆかぬ事故、勝手よきゆへ、第一女といふものはおろかしき生れなる故、我連れ添ふ夫の人に尊敬せらるゝ身分ゆへ、夫に乗じて我身も高ぶり、もの毎に差出、男まさりを働らきたがる故に、都てわが夫の顔のあしくなるをしらぬ族ありたがる也、役者立ものと成ては、金はとれる人にはもてはやさるゝ客はある、芝居よりは給金はこすり付て持かける事なれば、縦令のごとく、寳さかつて入時は盛て出るの金言むべ成かな、入目おほきものにて、年々大金を取ても衣裳に大金を入、相應に人には遣わしする事故に、家屋敷を持て、身を退きし役者多からず、しかし役者の身分として、素人商人の心掛しては、年長じて紅粉を顔にぬられぬ筈なるべし、其中にも若き役者は身持あしく、酒色をすごし、舞臺にては肌をいためる故に、長壽ならずして、身を果すもの多し、隨分と身持を大切にいたしたきもの也、また役者たるものゝ暮し方は、とりしまらぬも道理ならん、此渡世するものゝ、棧敷ばんや火繩賣の女房が髪結ひに髪をいわせる事故、役者は隨分暮し方、下手がよろしきかしらぬ、

問ていわく、役者の心持もあらかた分り候、今上かたはしらず、江戸にては、女形上手立ものといふは、濱村屋也、大和屋、綿屋、大見屋など此上こす女形もなきよふに思われ候が、上方には上手の女形あるよふ承及び候が、江戸へ下りしならば、今の四人と引くらべし時は、甲乙あらんや、江戸の目からは、ひゐき目ありてわかりかね候はん、

答ていわく、御尋のごとく、當時江戸上手の女がた無人にて、此段その地その地にて、江戸にてよろしきも上手にて請あしき事もあり、又上方の女形とても、江戸へ下りて請あしきも有事にて、いづれ四五年も居

なれし上ならではわけがたきものなるや、一體に昔より申ならわせしは、女形は上方の生立がよく、立役は江戸がよひといふ事にてありしが、江戸生立にも名人の女形もありし故、是に限し事にもあらねども、先は女形は上方のかた、能見ゆるぞかし、昔今と違ふ事、女形には多くありて、役がらの損とくをしらぬよふ成事折々見ゆる也、先女形は、假初にも男らしき事をせぬが心掛ゆへ、平生とても其心持にて暮す事なるに、又しても菅原の狂言に、女形より覺壽役を勤め、景清が妻あこやの役にて、景清の仕うちある時は、平井權八の役を勤むる事、折としてありたがる、是等は心得違ひとやいわん、仕手かたの大き成損なるべし、先ひやうばんよろしければ色を失ふ事、またあしき時は惣座中の疵となりて、其身の損たる事はしれたる事なるべきに、夫に心の付ざるは、外目からは一向にしれかぬる事ども也、善惡ともに損を捨て、持まいの女形の方宜敷事なるべし、元祖芳澤あやめは、若女形の名人として、三ヶ津に其名高く、今に今にあやめ仕置きし事いろ／＼ありて、人のゆるせし名人なりしが、年長じてより女形はつとまらぬと心付して、元服の上芳澤權七と改名して、立役と成しが至て不評判にて、漸々一ヶ年勤めしに、翌年には抱へてもなきくらひにて、また／＼思ひ直して、元の女形と成て、芳澤あやめにて出勤ありし所、大評判にて誰續くものもなき大立もの、自然と色を含みての仕うち、昔に見増程にして、見物の請よく、是身終るまで評判替らざりしよし、古き人の物がたり、さすれは女形はいつまでも若女形の方よろしきか、女かたの躰をくずさぬがよきと思ふ也、又近年にては、尾上梅幸女形より元服して立役となりしに、評判よかりしに、上方にて元服するならば評判もいかゞにや、其地其地にての違ひも有べき事にや、立役も持前が宜敷、敵役は愛敬をとらぬものゝよし、實惡はすごきかた宜敷と、芝居見巧者な人申されしとかや、さればこそ昔より申傳へしにも、時代狂言は江戸がよろしく、世話狂言は上かた役者が手に入たるものといふが、中にも女形は上方仕人がよく、立役實惡敵役は江戸仕込がよひといふ、其中にも江戸根生にて、二代目瀬川菊之丞といふ稀もの有しに、世をはやふして極樂の舞臺へ行事、今に／＼申出しぬ、是近代のわか女形お

しむべし〳〵、扨又役者にも、上運下運もあるや、いろ〳〵にして思ひの外早き出世あり、またいつ〳〵までも出世の出來ぬ役者あるは時節もあしく、座組よき芝居へすみ合せ、役廻りもよく其役をでかす時、段々と見物の目にも付て、出世も早い也、折として下役者なども其下る時節によつて、大に違ひありて、損徳も有べき事にや、縱令堺町へ我に類する役者下る時に、役廻りあしく、江戸氣に合ぬ狂言などするならば、不評判にて取かへしは六ヶ敷もの也、下り役者にさへ時節ある事なれば、江戸に居付の役者は座組を心得べき事なり、近き事にて、上方にて名人の聞へありし淺尾爲十郎、ふきや町へ下りし時、堺町へは四五年も待にまちし中村仲藏下りし事なれば、江戸根生のひゐき強き秀鶴の下りし故、奥山上手ながらも評判どつとせず、是折と時節のよしあし、下り役者のくだり下手ともいわんや、扨其中に片岡は弟子ながらも、折よき時節に下りて、おしや正月屋が死去せしも歎きの中によろしき評判、夫には引替淺尾の評判、芝居見巧者の人申されしは、隨分下手にはあらず、舞臺のていい藝のいみ合、成程立もの上手のしなしながら

も、下り時節あしく其上役廻りあしく、おしや評判どつとせずして、上手を空しくのぼられし事よと咄されしと也、役者といふものは、至てむつかしきものにて、上手名人と呼れても、其役者狂言の摸樣によつて、不評判を請るもの也、しかしながら役者といふものは、藝道の中にも、其身に花實とも揃はねばならぬ事のよし、其花實とも揃ひし役者は稀にして、花はあれども實すくなく、實ありて花なく、花實そろふ役者はなきものなる由、其花實と揃ひし役者は、年長じても老込事おそく、花ばかりの役者はしまらず、また實計の役者はきみしく、是につれて舞臺もはやくくず折るもの也、扨狂言に目のきく役者は、顏に狂言を持故に、心にはなをさらなるべしとは、いゝ目がきくとて、舞臺に出ると白眼廻ることにてはなく、狂言を心に持て、目顏でする狂言は、いくらも有事也、心がけあしき役者、出世は成がたし、役者の立役實惡によらず、病氣に是ある節、中役者より替りをして、其替りを出かして、見物の目にとまれば、自然と出世の小口となる也、昔より此類數々見聞したる事なり、其外に役者も心ごゝろにて、種々さま〴〵の心持ありて、お

かしき事もある也、氣持によつて、舞臺も夫に應ずるもあり、又平生の人付あしく、狂言にかゝりて、けん物に愛敬ある者もありて、定りし事ならねども、多くは平生の心持と、身持にしたがひたがる者なれば、役者のつゝしむべきは、身持なるべし、平生は心持が多くば、舞臺へ出る事ある者也、古人の噺しに、ある時秋の狂言の相談に、古人澤村訥子高助事宅へ、古人市川柏莚、元祖坂東新水三人寄合て、暑氣の時分たる故、物干へ出て夕涼みながら、狂言の相談して居る折から、夕立雲おこりて雷しきりに鳴出せしに、柏莚には兩人え斷り例の雷嫌ひと急ぎ宿許へはせ歸ると直雷鳴わたる、其時彦三郎には、自我經をよみ出す、亭主訥子は、夕立のけしき心のすゞしさと、家來を呼て、是々ぶつかけを百があつらへてこいと言ひ付しとなり、是等は藝道の事にはあらぬ事ながら、役者の心こころを思ふに、心持は夫々違ひて、舞臺も其心持に隨ふにや、扨又役者の覺よきあり、覺なきものありて、これには相手になるもの至てこまる事也、夫に付ても古人市村羽左衛門家橘といつしは、若大夫の節は龜藏とて、和事所作事の名人とよばれしものなりしが、いたつてもの覺へあしく、淨瑠理の所作事または長唄の所作のけいこに、いつも〳〵覺へあしきゆへ、手前宅へも招きて、けいこしても兎角覺へかねしが、大夫元の事故に、樂屋にてけいこの外にも、手前宅へも囃子のもの、淨瑠理大夫を呼てけいこしても、兎角覺かぬる、其内に外役者は、けいこも熟して、はや中さらへ大さらへといふ折からにも、相手になる役者は勿論、そば〳〵のものまでも氣のどくに思ふ程覺へかね、翌の初日を氣遣ひあんずる事にて、早初日にいたりて、本舞臺にかゝり、はや淨瑠理所作にいたる所に、けいこの節とは違ひて其間拍子のよさ、見物はよねんなく、相手の役者はいふに及はず、淨瑠理大夫はやし方のもの迄もきもをつぶす事度々ありし事、今に〳〵言ひ傳へし、誠に名人といふべき也、

芝居乘合話五

問ていわく、狂言作者といふものは、至て博學ならずとも、諸事讀かぬる事にて、作者はならぬ事と思ひの外に唐詩選もよめぬ族見請候が、いかよふなるものにて、狂言をつゞり作者を致事にや、

答ていわく、成程作者の事はあらかたにも、儒佛神の道をも辨へ、軍書をもよくそらんじたるものならではならぬ事といふものゝ、あながち夫にも限らず、此狂言の作意は、古來より狂言作者の名人と呼れし近松門左衛門、近來にては津打治兵衛などゝいひし名人、文才のものもありしが、兎角書籍にかゝわる事にてもなきとはいへども、赤本のむかし物語のみにもあらず、神祇釋教戀無常のわかちを第一と元とりて書事ゆへ、一通りには參らぬもの、殊更に役者〳〵の人物を見計ふを專一にする事なれば、文才よりは時の作意、景樣をのみとせしものゝよし、昔より名人の作者の物がたりを聞つたへ見るときは、その作意の心持は大きに相違せし事のみながら、是も時につる事ゆへ、是非もなしとはいへ、此程にては名作者は出來ぬ道理也、昔は三座ともに顏見世座組に掛るには、先第一に狂言の立作を拵へて、其作者相談の上にて、役者誰をざがしら女形敵役誰々と相定りし事也、しよじまた狂言も、其作者の思ひ付をあんじて狂言をつゞるも、誰へ聞合もなく書上る事なれば、名作も出來しと也、今は夫に引かへ、座頭女形の手引をもつて、作者の身分極候、誰が座頭ゆへ作者は誰といふ樣になり行、扨又狂言の事とても、座頭若女形の座頭へ、當顏見世の狂言に、何ぞ思召もあるやと、狂言作者より役者へ尋ね、其役者いろ〳〵好み事ありて、當春はかよふの役、また秋は此役たりし儘、此顏見世は目の替るよふに、是をあれをと役々のあつらへ有て、中々狂言出來ぬ筈、夫故近年の狂言、二ツ目より打出しまで、一幕〳〵切の狂言のごとくに相成て、見物には一向わからず、夫は何故なれば、作者の意味とんとすたりて、幇間同樣に立ものゝ、役者の袖にすがりて仰せ書にする狂言故、一向にわかり兼る、又其中に上方より、數代の古狂言本を買出し、此狂言は誰がしたの、古人中山新九郎と三枡大五郎、女形は二代目よし

澤あやめの仕置し役、是を誰にしあれを誰にしてと、狂言を作らせし類する族もあり、是等は狂言作者ではなく、古本の買出し、看板屋、板附には狂言作者とあるは笑ふべき事也、其作者を高金にて抱へ、古本の狂言に企をこしらへ、芝居する人もあり、是等の役者よりは、江戸の幇間作者のかた少しはとりへあるかと思はるゝ、しかし今狂言の名題なども、輕薄のみ聞へて、大名題に座がしらの名をあらわし、又は女形の名をしゆくし、見物の思わくにも搆わず、此名題といふものは、狂言の躰をふくみ、又はあらわすものゝよし、中昔顔見世の大名題に、木毎花相生鉢木といふ名題、梅櫻松をあらわせし名題、狂言作者のはたらきと、今に咄し傳へるよし、狂言の事よりは我身の上を大切にする事にや、座頭の名を片取し名題故か、今の有形にては、名題もよくは出來ぬ道理也、役者を名題にとなへこむは、あまり／＼輕薄らしく聞へるど、芝居見巧者の人いわれしと、その上新狂言上りても、先座頭又は女形の座がしらへ、内よみを聞せ、あしき所はあれこれと差圖を請、直し／＼した上にて、惣役者へ讀聞する事ゆへ、二枚目三枚目の役者は、氣に入ぬ役ながらも、それなりにすます事故に、座頭の外役がらあしく、見物の目にも氣にも叶ひかね、不評判の元と成事、とかく餅屋はもちやのたとへのごとく、狂言の事は作者に任せ置は、其役者の持まへ又はなりかたち相應に役をふりわけるが作者のもちまへ、我つらの惡敷をしらず、なりふりにも應せぬ事を作者にあつらへ、狂言に取組ゆへ狂言までさん／″＼になる事、我身にはしらず、いつも／＼狂言の好む事、そばからは輕薄に興そやせば能く心得、又しても／＼狂言あつらへ能事もあらんが、先は我身の事は作者まかせにしたきもの也、是も根を糺してみれば、作者より此樣に役者にくせを附しもの也、全く作者の本意を失ひし時代の成行、今更いふてかへらぬ事ながら、作者の威おとろへしは、昔元祖柏莚團十郎迄いひし時座頭たりしに、作者の立は津打治兵衛とて、其中合よからず、顔見世前本よみの當日に至て、先一ト通り本よみいたせし所、團十郎氣に叶ひ兼し樣子、其時又本を一通り本よみせしに、またもや團十郎心に應せさる趣、其節津打氏少しもいからわず、三度目に又候や本を出して讀みかゝらんとせし時に、さすがの團

十郎感じ入、誠に名作者かな、一通り二通りと本よみ納りかねしに、少しもいらわす、一通りさへなか〳〵ならぬ事成に、二タ通り三通りの心がけ、外人のおよばざる所也、此上は貴樣思召の狂言、いづれ成とも差圖有べき也、其狂言早々けいこにかゝり度よしにて、早速稽古に取掛り、其狂言大當りなりし由申傳し、さすれば其時分も座頭へも相談の上、狂言を書しとは見へず、今にては人もさかしく、先我書あげし狂言をつかれぬよふに突そふ成所へは、聞合〳〵して氣に叶ふ樣に書事ゆへ、狂言もよくは出來ぬはづ也、扨又近來にては、淨瑠理の文句は、堀越菜陽ふしぎに珍らしき文句を書出し、文字太夫さかんに時行しも、文句の書出しよろしく、其上文字太夫の節付おもしろく殊には仕手かたにも、家橘慶子二代目露孝、抔の拍子きゝの名人、三拍子揃ひしとはいふものゝ、一には淨瑠理文句より出て、堀越氏の手がらなるべし、當時にても段々上達の作者多き中にも、淨瑠理のもん句は櫻田左交なるべし、狂言作者も堀越金井までは少しは昔のかたち殘りて、作者らしくもありしに、いつしか時として狂言作者立もの役者の筆取同樣になり行し、しかれば昔の躰に打過なば、時代につれて芝居を浪人するよふに成べき事、ぜひもなき次第也とはいへ業さへよくば、人もうち捨てまじきや、ア、おしひかな時節いたらず、秀才の作者隱れて、此末名人の狂言作者出來まじきや、はかりがたし、

問ていわく、芝居にて座頭と成役者は、至て重く取扱ふものにして來りしは、何樣の譯合にせしものにや、又年若にてもなるものにや、

答ていわく、座頭といふものは、樂屋一式惣役者を支配する役なれば、藝道の功を積で自然と此役に至る事にて、芝居道にての重役にして、狂言の事まで心得て相定故、役者はいふにおよばず、芝居掛り一體に重んじらるゝ身分にて、此座頭たるものゝ心得にて、芝居も六ヶ敷なり、興行も續きかねる者也、扨また年功もなくして座頭に居る事は、當時江戸にては市川團十郎の名前一人に限ることゝ也、此市川團十郎といふ名は、御江戸根生の名にして、京大坂にても役者の惣巻頭たる事誰かいなやあらんや、當市川團十郎も、若年にして座頭の位に居りしが、おしいかな花の盛を無常の嵐に吹ちらし、廿二才を一期として、極樂の芝

居へ趣き、しばらく團十郎の名前中絶せしは殘念の事ども也、其外當時座頭の役者、彼是とあるが中にも、師匠の名を繼、又は内緣によつて大立ものゝ名前を讓り請て、猶又藝道執行の功を積み一座頭とも成事也、然るに近來先中村仲藏は、舞鶴勘三郎の弟子にして、藝術執行の力を以て、中役者よりの名の其まゝ、座頭まで經上りしは、當代には此一人なり、先中役者といふは、一ヶ年の給金三十兩ぐらい迄とりあがるには、藝道をはげみ心がけねば、其くらいにいたらぬ事なるを、其中役者より段々と經あがりて、給金八百兩の座頭にいたる事は、中々一通りにてはならぬ事也、其外にも、中役者を勤めて、今座頭に成し役者もあり、其役者は昔の事を思ひあたりて、いま座頭の位に居ても、萬事に行わたりて、芝居の事も支配人帳元とも相談して、一日も多く日數を興行するよふに、芝居掛り合大勢の事をいたわる故、其心からは大金の入芝居、あたり不當りによつて、金子の調達出來不出來の節は、我取給金は跡へ廻して外役者へ渡させ、其上にも高金の役者へは、帳元とも〴〵無心をいふて、興行の初日をはづさぬやうにする、座頭の心入とする事にて、兎角座頭が惡敷芝居は興行六ヶ敷もののよし、役者とても藝道の事、かりそめにも金銀にかかわらぬやうに致したき者也、座頭まで經あがる中は、大給金をとりし身分故、心あるべき事ぞかし、たま〳〵に右のごとく、芝居の爲を思ふ座頭あれば、却て役者仲間にてあしさまにいひなす族、心に恥べし、近代にての座頭は、木場の柏莚にとゞめたり、此人の有し内は、芝居もおだやかにてありし由、いまにいまに申出しぬ、扨又近來はやゝもすれば、座頭たる立役をかきのけて、女形たるもの萬事を作略して、思ふままの振舞、かりそめにも女のかたちを寫す身すがらにて、夫とたとへし立役を尻にしき、時としては身にも應せぬ役がらにて、立役の事を仕、また有時はかげ淸が妻あこやにて花道へかゝり、六法振ての引込、打出しに先今日は是切をいふは、女がたにはあるまじき仕内ならずや、むかしは女形の身分にて、立役なりの役をして、當りをとりしを恥と心得し由、斯あるべき事也、此外にも座頭たるものは、狂言の事にも我弟子または引立てやりたきとおもふ役者たりとも、依怙ひゐきなく、作者にまかせ、至て仕がたき役廻り等

あらば、其節狂言かたへ差圖して、その役者の役立よふにして遣したきもの也、狂言の事とても、作者に任せ置よふに、手前より仕て見せると、役者も其心入にてなるものゝよし、狂言も若手又は見物の請よき役者に、役を廻して我仕打は、狂言のしまり〲を引請てする事、また狂言ふあたり等の折からは、座頭の役一幕引ッかゝへてすべき事のよふに言し人も有し也、又舞臺にても不入の節、外役者の狂言をなげやりにする事も心を付け、大入は格別不入たりとも見物を大切に思わば、きやうげんをする事は有まじきと、古人名ある役者は言ひしとかや、夫に引かへて、當時の座頭は、九月前にはあらかた出替りの定る故に、我身分重年ならねば腹あしくか一ヶ年は惣樂屋を預り預り身分を顧ず、彼これと少しの事に難澁をいふて、九月中より病氣と號して、舞臺を引て心あしく、其座を別れる族も儘是あるは何事ぞや、夫きりにして役者をやめるといふ身にてもあるまじ、又來年は勤る事もある、江戸三座の事まわり〲しても、又勤ねばならぬ芝居を、あひそふわるく一生もつきあわぬよふに別るゝは、ざがしら迄上達したる身分には、有まじき事ならずや、來年外芝居へ極り行身也とも、定り月までは其舞臺を大切に勤て、狂言舞納には口上を述て、きれいに別かるゝが座頭の身の行といふ所へ、氣を付たらば、ならぬ事はあるまじ、何事も役者の風儀古來とは大に相違せし事なり、江戸根生の役者は、其身計りにあらず、師親ともに此三座を勤執行して、段々と立身出世して、大給金をもとるよふになりし、全三舞臺と思ふ心からは、大切に心掛ヶきれいに別れたき事なり、たま〲にも其心掛ヶある役者あれども、是を稱美する座元帳元もなきや、おしむべしおしむべしと、芝居物巧者の人、若かたられしと成、聞ていわく、當代の役者は昔の役者より巧者にて、上手のよふに思はるゝが、我等見違なるや、

答て、成程御申のごとく、當時の役しや、むかしの役者より物事器用にて、上手にみゆることはむりならぬ事也、しかし其事には、いろ〲と差別ある事にて、芝居巧者の老人もの語いたされし事、一ッ二ッを御咄しいたさん、まづ昔の役者と當代の役者、藝道に違ふ事はあるまじきか、藝をこまかにするは當代の役者にて、心で藝をするは昔の役者、是ゆへに内外に

藝道の違ひあれども、當時は人氣もかしこくして、自然と見物の請るより、はやく見物の見た目のよろしきかた見物の氣に叶ひ、聲も掛る事ゆへ、損とくにはまづ近頃の方をとくと心得、譽らるゝやうに心づく役者おほく、また昔の役者は、一流を心がけて、名人の仕置し事にても、人の眞似をせず、立役は格別、和事師などいふ年長じても、拵へをすりはがし抔にする事なし、今も其事を守る役者もある昔の風を崩さず、善惡ともにむりにこぢつけのあたりを思わぬ故也、古人中村少長は、年終るまで色事仕の躰を崩さぬ心持の藝、古今の相違ある事のよし、先年堺町中村座にて、二代目木塲の柏莚、顔見世狂言に本名秩父の庄司次郎重忠にて、假に梶原が家來あねわの平次となりて、秀ひらの屋形へ上使に來り、よし經の首請取のひら敵にて、かろ〳〵としたる敵役にて、則義經の身替りの首を請取て、花道の中程まで來り、尤一人舞臺にて、上下衣裳其姿もかへずして、本名重忠となりし所、誠に心持の仕うち、是やはらの中が重忠と見物へ見ゆる仕打、みな人感心して、今に申出す事也、此仕うちは中々外にする人はあるまじ、あねわの平次の形にて、姿をかくす心の重忠、藝術の裏表名人ならでは出來ぬ事なるべし、又古人中村慶子は、娘道成寺またば七變化の所作、其外種々の所作を勤ても、舞臺におゐて見物を後にして、湯茶を呑し事なしとかや、夫はいかにといふに、所作事に掛りても、心のあらたまらぬ故に、いき切も格別にもなしと言ひしとかや、また古人中村秀鶴は、舞臺の心がけも格別のものにて、縱令ば狐の狂げんを勤るにも、終りには狐をあらはさぬ狂言にても、肌には狐の形の縫ぐるみを著て、本體きつねの心持にてせしよし、近代の名人にて、中役者より段々立身して、既に先年木挽町森田座にて、安達が原の狂言の節、八幡太郎の役を出來せし砌り、四十兩の中役者たりしに、其翌年葺屋町市村座を勤め評判よく、夫より堺町ふき屋町つとめて日に増の出世にして、九ヶ年目に森田座初の座頭と成、八百兩取となりしは人の知る所、其後上がたへ登り、評判よろしかりし名人、此秀鶴中役者の名のまゝにての大立もの、先中村魚樂兩人のみ、外々はよろしき立ものの名を繼てより、段々と出世して、座頭にもいたりし事也、しかしながら、能名前を請繼し役者も多くあれ

ども一體の下手ならば、出世は出來ぬ事、名前よろしきを、其人によつてけがす族ありたがるもの也、

或役者、古人訥子へ尋ねけるは、色事仕といふものは、いたつて六ヶ敷、仕がたき役に候が、如何いたしてよろしからんとたづねければ、其時の訥子の答には、どふけがたの心持よろしきと答へし由、古人嵐雛助、和田合戰の狂言にて、則雛助板額の役たりしに、門破りの段におや嵐小六見物して居たりしが、打出して宿へ歸り、今日板額の門破りの仕うちいかゞ心得たるや、門を破らんと押勢ひ見ぐるしといふてかゑりし儘、其翌日心を付ていたしけるを、則小六見ぶつして、又打出し雛助に向ひ、門破りの所いかゞぶ得しや、きのふより見得あしゝといふて歸りしまゝ、其夜いろ〳〵とこんたんして、門破りをいたせしに、またた〳〵見物して宿へ歸りて、今日の仕うち初日よりなを〳〵惡敷、如何心得あるべしといふて歸りし儘、其夜は寐もやらず、いろ〳〵と工風して、第四日目に門破りの幕、心を附て勤、宿許にて小六にむかい、今日の仕うち御心に叶ひしやとたづねし時、小六答るには、こん日の仕うち至てよろしく、定めて見物の氣にも叶ふべしと言しが、はたして大評判にて、大入りなりし由、其仕方を親小六もおしへず、又眠獅もその仕うちをとわずに、工風をこらし、こんたんせしは、板額にて門にかゝり、上著の裾をつまとる樣に持添て、片手は込し手にて、長刀をかひこみ、其長刀をかひ門を押たるよし、今に〳〵思へば、少しの事ながら、門にかゝり押破るに、女子のちからを入る心得にも至て能みへなり、斯のごとき事どもは、役者道にはまゝある事のよし、見巧者たる人申されしよし、

又昔古人市川柏莚、大佛供養の景淸にて、重忠は古人助高屋訥子にて、景淸法師武者の出立にて、長刀をかひ込で、本舞臺より花みちに掛るとき、後の幕をしぼりて、訥子重忠にて立出、くせものまてと聲をかくると、景淸柏莚本舞臺へすら〳〵と立もどりて、何がなんとゝいふ仕内の所、初日景淸本舞臺より花道へかかりて、重忠の聲をかゞるかとおもふに、聲をかけずもはや聲をかけそふなものと思へども、兎角聲をかけぬ故、是非なく花道をあげまくの方へ行しが聲をかけず、いかにや思ふうち、はやあげ幕際にいたり、

最早あげまくへいらんと氣をいらち、今一足にてまことに入らんとせし折から、後よりくせものまてと聲をかくる、其時景清思わず振かへりて見へある、おなじく〳〵本舞臺にて、平家の侍惡七兵衛景清までと聲をかくる、其時柏莚花道より、本舞臺へ來りて、訥子重忠に詰かけて、何がなんとゝ言ひし勢ひ、すさまじかりしよし、今に咄し出す事、これ訥子の心持、我役重忠よりは景清に氣のはづみ譲りてのし内ゆへ、柏莚の振かへりし身ぶり至て勢ひをまし強くみへし故に、景清の出來よろしかりしとかや、役者の仕内には、いつも〳〵有事にて、我より相手の役者仕よきよふにせりふ廻しまでも、心を付て渡したきもの也、せりふ廻しのわたし様にて、相手の役は格別見物のうけよくなるものゝよし、上に立ものは下の役者を出來させたきもの也、兎角人にはかまわず、我のみ聲のかゝる様に心掛るは、下手のうち成べし、昔は敵役はにく〳〵敷、少しにくみもおかしみなきよふにせし故に、どふけがたといふものなくてならぬ事なりしに、近年は敵役よりおかしみをおもとする故、どふけがたはいらぬ様に成し、どふけはなくてならぬといふは、昔の狂言にしうたん事の筋、長々とありて、見物の氣めいる時には、どふけがた何かおかしき事をいひちらして、見物の心持を引立る事なりしに、今は敵役よりおかしみをする事とは成しと、時につれていろ〳〵替り行事、むかし大評判大當りの狂言も、今は見物の請あしく、折節助六又は鳴神の狂言、何れとも毛貫の狂言は、今の人には請けぬも道理、昔の赤木金時朝比奈地獄めぐりは、今の子供には氣にいらず、景清が善玉惡玉の手に葉、左交が狂言の和らかみと、年々に替りゆく事なれば、役者たるものもむかしかたぎ計りにても參らぬ也、その心〳〵にて、くわしき事は好人に尋ぬべし、

長ものがたりを聞せし折から、少しは風の吹出て、思ふみぎわに船も著きかねし故、船人帆を廻して、名良中嶋とやらんいふ海邊によつて碇をおろし、暫風待せし儘、猶ゆる〳〵とのものがたりのありし、其内に風心よくなりし故、思ふかたへ船も著しに、よのものがたりも聞書も、己がさま〴〵に別れ行、乘合の咄さへ、跡と先とに書文字も、假名遣ひさへしらぬ、身の耻を思ふ也、夢になれ、其夢噺を書集め、夢ばなし

乗合船と題して、唯他見を耻る、もしや見る人あらば、笑ひ給へゆるしたまへ、

芝居乗合話終

作者店おろし

凡例

歌舞妓寛永元甲子年中橋、同じく九申の年に禰宜町へ行て、慶安年中に堺町へうつる、今天保十三寅年に、淺草新地猿若町三丁に櫓をあげて、御恵みの芝居興行と成る、かわる世のならゐにて、昔の狂言作者はいざしらず、寛政の頃より、我したしみのもの〻み、業は捨置て其人物おかしみなど、數々のはなしを殘し置んが爲にしるす者、由縁ある人見てかならず腹たつ事を免し給へ、高下は年々の番附にあれば評さらに云ず、其物がたり其まゝにのこし置も何の爲にもならぬむだ書は、天保十四卯のとし五月雨に筆添ふる事

初代櫻田の門に入て四十歳の間
噺しるす者は

三升屋の翁

作者店おろし

櫻田治助

東都歌舞妓作者、近年の高名櫻田氏として名を治助と呼び、俳名を左交堀越二三治の門人榮陽の跡をしたひ、世話狂言名題の書物抔に、當世を加へ古今の稀ものなり、四十年來達者作者勤て、中にもまた豐後節淨瑠理の文句に妙を得て、筆に數る冊の青表紙に殘す、柳嶋妙見の境内に淨瑠理塚を建て、其碑名に發句辭世を殘す

花淸し散ても浮む水のうへ　　左交

左交は松本幸四郎錦江をしひて、幡隨院長兵衞などせりふの口合に妙を得て、世話狂言の時代違趣向を取組んで面白し、春狂言曾我物語の名題は、五月迄幾して、一番目より四番續を出し置ねば、心に叶わぬ人なり、古來の謎を專とす、

曾我まつりの句に

神祭る皐月を曾我の世界かな　　狂言作者 左交

この老人、度々店がへせし事を好む、淺草花川戸に住で、老後辨天山にて卒す、花川戸の宅に柳の井の隣故、柳井隣といふ、

法名　默了院左交日念信士　文政三丙寅年六月廿七日　七十三歳 左交

下谷わら店法養寺に送る、

左交門人いづれも達て作者勤る、

笠縫專助　米夫
村岡幸治　鶴玉
木村園治　園夫
後に紅粉助又ゑんふ
曾根正吉
淸水正七　左曉
松嶋半二　調布
後に田川章助

又二代目
櫻田治助　左交
又其後
松島てうふ
其餘の門人は略す

一代々嘶しは口分をしるして其名の跡へいたす、

附ヶ文の事

左交はよし原好にて、夜毎に這いらねば寐られぬといふ人、中の町を[illegible]ん通りて、両側の茶屋女房呼かけるのを嬉しく思ひ、江戸町より二丁目京町の格子で噺して、なじみの女郎あそこからも、爰からも、左交さん〳〵といわれたく、新造禿に仇口いふて、中にも鶴屋の見世でいまだ知らぬおいらん一人有て、どうかしてアノおいらんに物を言かけられたゐと、こころに思ふて趣向して、其春の正月に作り花の梅の枝に文を書て、くゝり付、けそう文の心にて名宛をして、こま〴〵と認め、格子から梅の枝を内へなげ込み、あしたの晩また格子へたつと、その女郎立てモシエゆふべの御返事をといはれて、逃出せしはなしもおかし、

木挽町歸り船

顔見世に、花川戸より木挽町へ行歸りとて、江戸橋から小船に乗、船宿へ錢を出して、炭、俵買ふて、台の炭を火鉢へ入、火をわつ〳〵とおこしてあたゐ、小あみ町通り行合ふ家根ぶね、深川通ひの客など、アレ小舟に炭をおこして櫻田が乗て居る、あつたかいいい思ひ付、きついさくら田じやアねへかといわれるを、是評判の第一とする趣向なり、

かぼちやの噺

葛西のせんざい賣、かぼちやを籠に入、長屋へ賣に來る、内より左交立出て、モシかぼちやをみんな買ませうといふて錢を出し、のこらず買取て其内のかぼちや二ッ殘して、コレ〳〵この二ッはどこぞへ持て行、賣ッて行なさいといふ故、商人びつくりして、なぜ又二ッ殘してお買被成ませぬと云、イヤその二つは酒手に進せませうといふ故、この商人嬉しく、夫は有がたふござりますと、荷をかつぎ又町内の長屋へはいり、今殘らずかぼちやを買ッた内は、何商賣か聞たいと、路次口に立て居たかみさんに、モシあそこの酒屋の東の三軒目の内は、何御商賣でござりますと聞ヶば、其女房三軒目の内なら櫻田治助といふ狂言作りの内だといふ、是にて葛西の商人田舍へ歸り、村中へさくら田の噺しせし事、まつたく〳〵かぼちやの惣仕舞にて名を賣し工風なり、

米櫃(びつ)

淺草の地内、辨天山の池のはたに住し時、戸棚の内に後口へ穴をあけて有、いかゝと問へば、この内の米び

つへ米を入るとき、貳朱が米見ぐるしく、前の戸棚の戸明た時、米屋が來た事人にしれる故、後ロへ穴明ヶて米を入るこんたん、至てみへぼうと知るべし、

門人正七ガ異見

北山先生は、數冊の書を日々に見てひまなきゆゑに、雪隱へ行時は義太夫本を讀しといふ、貴樣本をよむ事嫌らひにして、心掛あしく、兵書をみれは心に和らげ、歌書をみれば心にかたく持て、俳書をみる時は心に風流を用ゆべし、このこゝろにて狂言を考へて、せりふ付べしといふ、この異見は正七我が師匠におしへられたる事、人に語りしをしるす、

金井三笑

近代三ヶの津の歌舞妓作者にして、江戸狂言の仕組、作者の詮、其異風誰あつて及ぶ人なき、古今の稀者なり、世に三笑風と殘せし人、櫻田も學たる事聞及ぶ也、尾上松助小詰の頃より、取立たるはこの三笑にして、家名を井筒屋といふ、與風亭と名に高し、

增山金八

達テきく者にて、白銀の半四郎金太郎三日月おせんに名をのこす、豊後節淨瑠璃を數冊書て、安永天明の頃さくら田と肩を並らべし作者なり、

並木五瓶

寛政の末大坂より都下へ下りて勤る、宗十郎座頭らの顔見世閏霜月に有て、園雨子名歌の森といふ名題、小町の世界前に嶋原の世界はふ人にして、閏月に狂言かわる、翌年春江戸砂子吉例曾我、二ばん目に宗十郎源五兵衛、下り仁左衛門三五兵衛、菊の丞の小まん五大力のはじめ、是村伊三郎のいつまで草いあらやす、今に殘りし五瓶の名高し、是より年々手柄ありて、數多狂言いだす、瓦園方作の門人にして、上がた狂言江戸へうつしたるはこの人より始る、風流人なり、

五ヶ條の詮

第一氣てん　第二きまゝ　第三上根
第四大たん　第五愛きやう

作者は此五條を守るべしといふ、

名題の辨

江戸の作者は、名題の書物に流義有て、おもしろく作意を取交、かたりといふもの筆に顯す、上がたの作者、名題の書物はさらにかゝはらす、土地風俗と新てし、或年中村座達作り櫻田冶助、並木は二番め、左交

一番目の名題に、富十三升春曾我、幸四郎團藏と不和にして立別れ、五瓶は團藏の作者故、櫻田並木にいふには、五瓶さん二番めの名題は如何といふ、五瓶ハイ二番目は幡随院長兵衛といふ、櫻田又いふには、イヤモシアノ名題はなんと申ますといへば、五瓶また幡随院長兵衛といふ、櫻田は恟りして手をうち、さすがは五瓶大人なり、中々江戸の作者に向ふて、名題なぞは付られぬもの故、斯幡随院長兵衛とばかり付しは、適れの作者なり、並木を譽る兩人名人にして、後の噂さに殘る、五瓶は作者仲間を我が宅へ呼集め、かほみせの顔寄せといふ事を始めしは、此五瓶より今に殘しぬ、

天神祭

二月廿五日は北野天滿宮菜種供にして群集する、五瓶毎年其自宅にて、菜種供を催し人を馳走する、此日の客に酒宴して、菜種の飯を出す、菜種飯といふは玉子のきみをこまかに粉にして、飯へかけしたじで喰する、其いろ黄にして菜種に似たり、作者はいふにおよばず、役者一座の衆中呼、當日天神祭行ふ、又作者の部屋にて近年天神祭行ふは木挽町より始る、

風流

並木五瓶は並木舍といふて、江戸座の俳諧を專にして、日比樂しむ附合に、

兩國の二人り禿は柳橋

この句通り句にて人よく知る處なり、附合至て面白し、

横店藥見世

並木といふ名から思ひ付て、横店に表間口二間の藥見世を出し、淺草雷神門の通りに、雷神風神の門、破風作りにして敷石とみせたる半疊のたゝみを敷、雷香といふ丸藥に、風の振出し藥をあきなふ、門人に並木陸六を雷次と改、また高柳宗次を並木風治と改め、雷風の神兩人弟子にして、己れは觀音の芥の心にて商せしは心奥ゆかしく、五瓶が噺奕に略す、横店住宅にて死す、

法名　善丘淨巧　寺は下谷池の端正光院
文政二己卯年七月七日

村岡幸治

俳名を龜屋幸四郎、錦紅の甥左交の門人にして、寛政の末江戸町中にびいどろひよう草のかんざし流行する、此年の森田座の顔見世、太閤記の世界にて八百藏

座頭の大名題に、八百八町ひさごのかんざしと云を出す、師匠左交この名題を聞て、迚もの事にひさごのさし物とすればよい手強いてよしといふ、さすがは櫻田と擧る、其頃までは外座の芝居名題出る時は、作者みな見物に行しものなり、

木村園治

同じ櫻田の門にして、園夫といふ俳諧を好み、松花堂を書、この人至てそゝかしくさしてせわしなき産れ、面躰口先鳥によく似て、仇名を鳥といふ、淨瑠理の文よくして歌道を學び、達作者勤て常世に付て、其後園藏の下り年より、三河屋付と成る、紅粉助と改名の年に、赤の口付赤か羽織揃へて、新宿へ女郎買に行、道にて人赤ィ形をみて、人々指さし笑ふ、赤ィ姿は紅粉助の名故、實は六十一の賀といふ、

役者付

紅粉助木挽町に勤て、其年の内故ありて首を切られ、身上を失ひ、翌年の顔見世に割こみ、跡より這いるもはや役者附にかゝる頃なれば、箱少さく、名前出て三枚目四枚目の作者よりもほそく出て、番付ははや配りとなる、是を紅粉助見て大にいかり、立服して常世へ欠こみ、一分立ぬ譯と成り、大もめにもめる、此時の地口「紅粉助さんはなぜほそひといふ、

道具見世

園夫女房お八重といふて、高輪路考といわれたもの、至てよきおんなにして、女房自慢故、お八重から思ひつきて、芝口へ道具屋をいだす、此邊はやしき近く、御國侍多く女房をみせへ出して、道具を商ふ、後に住吉町にて死る、門人に松六改名して出來嶋松壽といふ、湯島天神前に住て、角力の行司を勤る、紅粉助の至つて愛臣ゆえ、爰に記るして餘は略す、

鶴屋南北

元文の頃の役者元祖南北、孫太郎といふ、寶暦年中鶴屋南北の娘お吉といふ、初名勝俵藏の時分より女房と成る、今の南北よりは年號多くして、俵藏の始は乘物町にて、紺屋の源さんといふは南北が幼名なり、近來迄此紺屋海老屋といふて、材木町に殘る、俵藏改名して女房お吉が親の名を起して、大鶴屋南北の家を立る、近代きせわといふもの、世話狂言の手柄多くして、中にも半四郎杜若女清玄、七役のお染、幸四郎棠賣足駄の齒入、三津五郎白藤、團十郎田之助など其外

評判の狂言数多あれど、俵藏の昔しはおかしみの狂言を書て、徳次をつかふて、其後坂東彦三郎に付て、その子鶴藏を新水の弟子にして鶴十郎と改める、此悴を相手として工風せし狂言のからくり、親の南北に書せて、役者を納めさま／＼の狂言を出す、尾上松緑夏芝居大入、ゆうれい早替りに松緑と共に、相談あいてにして手柄多し、年々評よく、後々には南北三ヶ津の一人大作者と成る、古今の稀者今に此人の狂言、年の内に一度か二度は出ぬといふ事なし、深川黒船稲荷の地内にて死す、

表札

南北は、本所龜戸村植木屋清五郎の隣に借地をして、表に小門を建、表札に南北とばかり印す、龜戸村は在かた故、近所にて表札を見て、どこから越してござつたおかたなど丶いふ内、このとしはやり風にて、村中醫師を頼むにも、龜井戸橋の向ふまで行ねばならず、幸ひ此頃おらが村へ、よいお醫者さまが、引越して來たと悦ぶもおかし、

火難水難

同所引越早々の秋、出水して疊を上たり、道具をはこぶやらつかれたる所、筋向ふの内より出火して、わら葺の家根へもえ上り、それ火事だ／＼と村中の騒ぎ、こいたご持て水を入るやら、こいのひしやくにて水をまくやら、その匂ひ鼻をつらぬく計りなり、此年は水火の責に逢ふといふ噺し、

女郎買

南北年六十餘の年の頃、鶴龍屋新道に住、女房お吉は南北より年かさの老婆故、よほくれて日には何度も同じ事ばかりいふて、殊の外老ぼれと成り、しかし多年の夫婦合いたわり居りしが、いまだ男の事故少しは色氣もあり、ある時ひそかに辨天女郎買に行、しらぬ顔にて暮がた内へ歸り、夏の事故帷子の汗しみて其儘そこへぬぎ捨る、女房かたびらをたゝまんと袖に手を入れば、やはらか成紙手にさわるを出してみれば、みす紙なり、是を見て老人同士夫婦喧嘩となるもおかし、

芝あたごの市

十二月廿四日、あたごの市にて、ふじうらの草履裏の付たるを、貳百廿四文にて買求め、歸りてその晩内の角に置て、翌日みれば草履の裏殘らずなし、いかゞ不

思議とよくみれば、するめのまゝ皮にせしゆゑ、内の猫のこらず喰ふて仕舞し事こそ殘念なり、

蚊屋

俵藏のむかし、高砂町に住時、机にむかひ書物にかゝりいるとき、女房の釜の下を焚付て、モシ湯がわきましたが米はどふなさるといふ、此事聞つけずやはり書物にかゝり居る故、又女房米はどうなさるといふ、此さいそくに俵藏じれて、今少しまてといふ、薪がむだに成升といふゆへ、又むつとして、いま〳〵しいやつ、ドレとつて來よふと、筆を捨て立かゝる、秋の末の頃なれば錢はなし、戸棚をあけて蚊屋を引出し、そのまゝ抱へて下駄をはき欠出して、横店の大黒屋へ行く、四ッ角にて知りた人に出合、俵さんどこへ行なさると呼かけられて、その人俵藏が顏をみれば、顏色かはりかん癪の躰ゆゑ、又もやふしんにおもひ、どこへ行なさると問へば、ハイ殺しに行ますといふ、是にて其人は猶更惘りして、マア待なさい、ころしに行とはどふいふ譯で、俵藏イヤサ今蚊屋をころしにゆきますといふ、

文字の相違

勝俵藏見習に出た始めより追立に隨ひ、金井三笑を師とたのみ、三笑風を專にして、出世立身して大作者と成る、高名もまつたく三笑が影なり、此人文字のはたらき見えず、俵藏の昔より「その噂渡世といふせりふをかくのに、其畑をわたせと書、旗と畑との文字違ふ、又打出しに待ッ、今日は是ぎりと書く、是らまづといふ事待と書も不思議、此事誰もいふ人なし、斯覺へしも大人にして稀者なり、

福森久助

始玉卷惠助の門人、後に喜字助、久の字憚る事ありて斯改る、本所の生にてたちまち出世して、三津五郎の取立にて、中村座今助引請の時分、始終此座を去らず、達作りを勤る、玉卷といひし頃、木挽町へ通ひける時、中橋南傳馬町左側に福守といふ筆屋あり、今に其內に殘る、福盛久次の頃ふと思ふには、此うちの名こそ福守の文字を書替て、福森と苗字改て名のるべしと、久助自らの物語聞しよりあらわす、門弟に吉助喜市兩人ありて、狂言かた勤る、喜市後に中村を名のる、久助並木櫻田と同じ、作者と成りて三座に別れて、達作者勤る、寅年大火に淺草中代地へ別宅して、

本宅は本所安宅にあり、其頃吉原藝者おこよを連て來て代地に住、一人の出生を七郎兵衞といふ、或顏見世に、田名亦八を筆取にして、書物にかゝりいる、又米助といふ見習有て、七郎兵衞が守をして路次口に遊ぶ、亦八筆を（脫字あるべし）路次口の七郎兵衞が尻をば思入つめる、七郎兵衞わつと泣出す、此事二三度にして、久助夫婦其度毎立て我子をだます、亦八米助はおもしろがり、後にはこの事顯れて、兩人の者家を追出されける事こそおかし、

焼キ印

楓森俳名を一雄といふ、詩歌連俳に心なし、一雄といふ文字を焼印におこして、手桶たらいへ焼キ印したるも、無風流なる男と察すべし、

松井幸三

初名渴三と書、出勤の間もなく兩三年の内に立身して、瀧之助宗十郎の取立にて作者と成る、元は出家出にて佛學をして、江戸狂言にさそくよく、南北にしたがひ後々おのれが才智にて、適れの作者と呼れる、元祖幸三本町の新道に居宅して本町といふ、

二代目幸三

囃子の内より出て、若年に三味線を彈はじめ新幸といふ、本町の門弟なり、近來の出來作者なり、南北直江屋に隨ふ、まつたく鶴屋の影とおもふべし、酒を好み藝よくありて、座敷を勤るに妙を得たり、吉原揚屋町に住んで、たいこ持專にして、作者の業にはあるまじき事、しかし二代の幸三と云れし男なり、

本屋宗七

初武井藤吉、後豐嶋大東、豐嶋は豐嶋郡にして大東とは大作者といふ心、日本一と自名乘故に宗七を日本と人々いふ、元は龜井戸天神の社家より出たる人物なり、氣性たゞましき男故、一寸見に恐るゝなり、

天國の劒

宗七社人の若年の頃、吉原通ひに差支て、或夜の頃ひそかに寳藏へしのび入り、天國の寳劒を盜みいだし、中の鄕の質屋へ持行とて、道にて俄に空曇り、雨降て來り、大雷して足元へ雷落る故、宗七は寳劒を抱へて、業平橋に立チすくむ、コレハ天の御咎めありしか恐ろしき事とて、劒を持て元の道へ立歸り、其儘寳劒は元の如くにして、寳藏へ納奉る、

清水正七

櫻田の門人、三立目書にて、一度淨瑠理も書たる作者、三立目まで出世する、始めは高麗藏錦升に付て、高麗屋釜といふ、中村座表手代奥役天王寺屋治右衛門が聟と成り、清水は本よみ、ひやうし幕の銘人にて、納らぬ狂言も正七が本よみにて納る、又拍子幕も幕に成らぬ仕組を、チョンと頭らを入てキザミよく、引ッ立よふに拍子幕にして打ッ事は古今の銘人、其頃の役者拍子木をうつ者は、此正七に聞合、差圖を請て拍子幕打つ事三座一人と名を殘す、其後閉幕に付て、ひやし幕を打ッ、市紅幕のあんばいよく、心にかなひ氣に入となつて、拍子木にて外座より、身分買に來る者は此人一人にかぎる、

里蝶の噺

清水日頃三味線を好みて心を寫し樂む、或とき上るりに、鳥羽屋里蝶出勤、舞臺にて後ロより、正七里蝶が糸卷をまきて、モシ里蝶さん、三が下りておりますとてうしを上てやる、さすがの銘人里蝶も、此すうなしにはおそれ入ッたといふ事、

山門大道具

市村座五三の桐、山門大道具の時、長谷川勘兵衛名代のがんどう大仕掛の始りにて、幸四郎石川五右衛門にて、山門の上にてながせりふ有りて、高欄へ足を掛て恐れ入、鳴物成りチョン〳〵としらせに付て、次第次第に此道具せり上るとて、此時下より出る、山門のひさし少しこだわり、ぎつしりと道具とまる、正七扇を抜て、右の扇にてひさしをチョイとつく事、是程の大仕掛竹田の口上じやが、からんだよふに、扇でつくとはおかし、此つゐた心を正七に問へば、大道具のつかへた故、扇にてあしらふに此場の景よふなりといふ、

拍子幕

ひやうし幕の銘人と名を取し始は、仲藏宅間玄藏といふ役勤たるときのせりふに、婚禮のト拍子木のかしらチョンと頭を打こむ、仲藏いろ直しと白刄をみる思ひ入のキザミにての此拍子幕なり、正七ある時、持たる拍子木そゝうして一ッ落す、落たる一ッの拍子木とらんとする内、仲藏は婚禮のといふ、是はしたりと持たる一つの木にて、大盞柱へチョンと打かける、其頃は柱けやきなり、此音よくして仲藏振かへりみれは、やはり右一つの木にてキザミを合せて打た

る故、人々擧てこれより拍子幕の、古今の銘人といわるゝ、昔は拍子幕一日の内一つか二つ有てたま〳〵事、役者も大達者でなければ、ひようし幕に遣はぬよしの掟と知るべし、

柳川忠藏

増山金八の出にて、福森並木の取立同樣にして、忠藏は書物うとく、業にかゝわらず、不斷遊所に居て遊ぶ、卜賀といふ、久助卜賀を頼み、世の中の人に交る、卜賀久助をたのみて、父芝居家業を任せる、後に此業を引て、淺草茅町二丁目へ、柳川左司馬といふ菓子店を出して、しばし繁昌する、卜賀は人を遊ばせる事古今の銘人、おかしき大鼓持にて、少しにくみ有て、ひとに嫌らわれるなれども、世の中の通り者は、卜賀を連てしやれる事とはなりぬ、專ら流行して、卜賀〳〵といわれし人なり、一代の噺し多あれど、作者にかゝわらず事故爰に略す、

篠田金治

元は御武家野々山大膳樣御子息なり、上方の狂言能覺知りて、並木にしたがひ出世して、二代目五瓶と成る、二三年立て死す、江戸にてはさのみ手柄もなく、三枚目の内新水に付て評判よし、いつたいおかしみの仕組書て愛敬ものなり、和泉町裏越後屋長家に住で歌川豐國の子ぶんなり、

蓮の葉

御籏本の御次男、本所割下水に屋敷有、七月盆前には吉原の揚代につかへ、いかゞ工面も出來ず、ふと隣の屋敷を伺ひみれば池に蓮咲て葉見事にあり、是幸ひの蓮の葉と、ひそかに塀を乘越、蓮の葉を盜み賣ならば二分や三分は盆前の助けに成べしと、十一日の宵月に頰冠りして、鎌を口にくわへて忍ばんとする時、隣りの中間侍ひ見つけて、曲セ者なりと立さわぎ、早速からめ捕らへてよく〳〵みればお隣屋敷の御次男樣にて、悔りして此趣を殿樣へ申上る、まづ其儘濟けれども、野々山にては隣家へ濟ざるよし、金治は早速屋敷を追拂はれ、是よりぶら付と成りて、作者とはなりぬ、

忍ばんと思ふ今宵の月明り
　捕らへられたて人か寄蓮

斯狂歌して家を立さる、

松嶋半治　後ニ櫻田治助

笠縫専助米夫の手から出て、元左交にしたがひ、尾上松助音羽屋に付て大坂町に住、櫻田年老て始終苗跡は半治に譲ると言傳ふ、後其名を繼て、櫻田死後は後家おりせを引受取て老母とする、二代目治助左交と改、三津五郎付と成、日本橋三嶋屋敷に住、櫻田の流儀覺へて、名題書物至て面白し、數多豐後節は師匠の跡をしたゐて三家に名をのこす、中にも常盤津の源太、清元のくわいらい師、又はうさぎ、歌右衛門三番叟とばへなど高名し、半治のむかしより、至て正直者にして、左交元祖に恩を受、出世して丑年大火より呉服町にうつる、芝居も殊更昔にかわりておどろく半二の氣に叶わず、亡師の後家引受て送り物して届かざる故、後々櫻田の後家と不和に成、櫻田治助の名をかへし、松嶋てうふと改る、元より半二の律名を調布といふはでつくりといふ心にて、左交より付たる名なり、後の出火に櫻田呉服町にて類燒して、次第におとろへ、市ヶ谷本村町門弟松嶋陽助の介抱にて、本村町へ假宅して、てうふは氣うつにて病に伏て、終に市ヶ谷にて死す、むざんなる行末、谷中瑞林寺へ送る、作者も爰らあたり迄なり

半二の由來

半二が親は、ごみ船の株を持し人ゆゑ、ごみ半といふ、若年の頃は御留守居寄合有て御給仕を勤たる者故、行跡能キ近代の作者、世の中の噂中三などの座敷見た事ないものばかり殘らずなりさがりにて、なり上りはなし、此二代目までは作者らしき人にて、始の名は陽助といふ、二代目を化され陽助、後に半二と改る、三代目の半二晋助、今三代目櫻田治助左交と名乘る、深川仲町山城屋なり、四代目市ヶ谷の陽助、五代目半二は下立役市平といふ、鳥半二今櫻田の門弟なり、半二の名爰に殘る、なれども二代目櫻田の心に叶ふまじ

田嶋齋助

御馬屋別當を勤る、二枚目の作者半四郎杜若の内緣有て、女房をもふくといふ、杜若の兄弟なり、田嶋書物に馬を出す事好ゆへ、悪口に馬作者といふ、深川六間堀に久しく居て、難波町新道にて類燒して、假宅扇橋にて死す、妻子散々と成て今は跡絶てなし、

槌井兵七

南北の弟子にて、八九年の間出世して、宗七か口添に

て師匠の名を次せる、増山は大和屋の由縁あるゆへ、同じく兵七を杜若紫若を頼み、増山金八と改名させる、旅行にて死す、元来兵七は木挽町樂屋口に勘次といふ者の世話にて拂取にして、大道具へ出して勤させる、力業つらく思ひし故、勘次また小道具方へ出す、初日に小道具の出物多くありて部屋取こみゆゑ、此道具は此幕のアノ道具は跡の幕と、一々書分けて半切へ書認め、張出しにしたるを、南北見て、この度の小道具方は中々氣てんの利たる者、そのうへ手跡もよくしておしいもの、小道具へいだすよりは、仲ヶ間へ出して見習に遣ふたらよかろうだといふ、早速勘次へ噺をして、翌年の[illegible]へ狂言方に出す、幸三正七まで當番の槌屋へたのみ、出勤させるには名を付る事第一、なんと付やうと皆々相談して、マア槌屋の子分にして、槌、井は松井の井をば用ひて、兵は兵藏の兵、七は正七の七がよかろうと、四人の名を一ツに寄て、名たいる名にこそあらねど、槌井兵七と名跡を殘す、しかし一代男と知るべし、

田名圓八

エンパ〱といふ故、大王と唱る席びらき書の銘人にして、趣向有てせりふに地口おかしみ有て面白し、見好者の役者に至る迄、初日に見物する氣どりの達人福森はこの人ならでは筆をとらせぬなり、机の上にて作者たいくつの時は、思ひ付などいふて氣をなぐさめ、二ッには心に考させ、そのまゝちきやうげんせりふなど出る事有、是一つの妙を得たる男、六十近くなれど年の事聞のを腹を立、さらに若き者の通り大酒にて、居酒屋へばかり這入、至て風流の男なり、

銀の香箱

兼てあつらへ置たる銀の香箱、いかゞの事やら此よふな品を好み、初日の給金を取ると、此香箱へ二分入て、その夜早速本所安宅の切見世へ泊り、酒の上にて女郎にねだられて、その香箱のまゝ、金をやりて歸りし親父なり、

朱鼻緒の塗下駄

大嶋の袖を留めたるどてら著て、塗下駄に朱鼻緒、肩へ手拭かけて、あたまは奴本田に髪を結、端手成姿にて木挽町出勤の時も、淺草村木町の髪結床迄通ひける、たわけものなり、手跡は見事にして、酒のうへにて筆に俺相したる體にて黒をつけ、白紙のうへに落

し、この畧を直に文字に直して、本歌狂歌發句などの文字に直して讀せる、至て面白き筆の藝は外になし、

増山良助

大の酒のみ、しだらなきもの、唯酒さへ呑ばよしといふ故に、二代の圓八と改る、元御旗本の御次男故、御ぜん〳〵といふ、此人死後に御屋敷より、迎ひの侍來て、乘物にのせ引取行何〻何樣やらといふ事聞かしていわず、至て重き御方の御次男樣と跡にて噂する古今の噺、

穗住勝助

元祖櫻田より出て、二ッ目迄書たる作者、元の身分は淺草元町の御書替所の手代にして、中頃作者と成こゝ、身を引て剃髪してタンスイといふ、江戸座の執筆と成、今江戸宗匠の一人、深川永機なり助作者を思ひ止りし後、砂村毛利公の御抱と成、御隱居御かゝれ遊ばして後、今にても宗匠の名高し、下谷中おかち町に庵をむすぶ、

松井由輔

金井三笑の男、後に金井を松井と改る、狂言淨瑠理に名を殘す、元祖由輔なり由輔と名乘る、大和屋兄弟の取立にて作者の數に入、ふくろ半二といふ、あたまの髮の風ぶくろ、付かづらの如くゆえ、斯は名づけし者、むき腹立の大野暮人なり、三笑の血筋、おしいかな〳〵無學俗物なり、

音羽助

初代羽介は梅幸の門人、始めあんましたる男故、羽介をあんまとよぶ、堀江町に住で、音羽屋の影にて身分能してもなしに終る、二代目羽助は澤田屋利助と改帳元となる、

二代目
重扇助

同音羽屋の出にて、八丁堀杉浦何がしの子息、芝居好故此道に入る、日頃そゝくさしたる氣性故、梅幸にしかられて度々しくじり、少も恐れぬ大丈夫なり、居候のうちらうばをはらませて出生出來て追はらはれ、夫婦立退て、深川靈岸寺の裏門にて、[illegible]西寺をしてかつぎ商ひ世をおくりける、後に音羽屋へ出入出來て、一兩年相立本宅へ歸り病死しける、至りてをしき人物なり、

立川焉馬

狂歌大人世の人知るところなり、白石噺シ七ツ目に名を発し、一代の内一ト度歌舞妓に入、作者勤度願ひによりて、市川家が由緣有故、男女藏の手引にて木挽町え出勤する、顔見世の浄瑠理書て振袖山姥の富三郎金時の男女藏、此時出て早速引込み、歌舞妓の作者あきらめし噺し、中の作り物よみ本と違ひ、焉馬先生程の人さへ此業ばかり出來ぬといふ、山東京傳先生は始より見切りて思ひ止まる、烏亭泉次といふ門弟を出す、

二代目焉馬

右に同じ、一ト度出勤して戯駒や山姥の浄るり、木挽町忠臣藏八段目の道行、納升の出もの書て、出し始の出納めとする、其昔鬼武近來桃花園など出勤して、左のみの事なし、たへて此道あきらめし事と知る、

二代目 勝俵藏

南北悴鶴十郎、今深川櫓下に直江屋重兵衛といふ役者出故、狂言に目が屆き、仕組入組おもしろし、筋は屆かぬ事あれど時代遣を組合る事上手にして、親の片腕に役者の内より、さま〴〵の狂言工夫して、筋書を出してあたへる、筋書の銘人是にて、役者をだまして納る、中にも半四郎七役のおそめ、早替り女清玄など工風して、松緑夏芝居ゆうれいの仕掛物は、悴鶴十郎の相談趣向至てよし、工風を増して考へ、いろ〳〵のこんたん外の人には及ばぬ事、一年三座の達作者一人にて勤しも、餘の人の是又及びがたし、其上仕組にかゝり、早き事早手廻し、夫故七代目團十郎の相談手助かりして、めつぽうかいの思ひ付、又は悪る思ひ付有て不評を受た事あり、作者の業をかゞせしは、此親子なり、キゼワの書物しみつたれの狂言、昔の狂言は南北おぼへて居て是を加へ用ひし故に、狂言にあらずそ出づ、まつたく親南北の三笑風を用ひたるとしるべし、

勝兵藏

初め龜山爲助の頃より、出情して正本を能書、舞臺の事書物一式狂言方の業は近代の祖なり、南北の聟となりて出世を待、業を止めて素人と成り、富の札賣をして、後にむざん成かな奥山の芝居へ手を出しむなしく終る、今南北の養父なり、至てむづかしき人物なり、

奈川本助

初め元助と書く、上がた篤助の門人、嵐德三郎に付て布子一つにて、篤助の女房の供をして下る、開運して冠十郎取持三津五郎より立にて、二代目櫻田死後に達作者と成る、歌書をよみて、風流ある噺多くあるうへ江戸を擧て頼母しく大人に成べき者なり、ある時本助の噺に、七代目海老藏のひたいに、少さき空あり、是を見ていふには、扨恐るべき事あり、三升さまの額の疵は後々に正しく公難を請て身に障り出來て、尤今の事ではなし、五七年も相たちなば、身にさわりできて、家々も疵の付事ありと語りぬる、はたして天保度にいたり、御咎蒙りて、江戸より十里の御搆と成る、本助の一言思ひあたり恐るべし、この相見た事は餘人はしらず、三升や爰に顯はす、

寶田壽助

初て出しは松川寶作、神田の質屋の息子にて、義太夫の文句を書てぶら付、品川に遊ぶ、二代目幸三連て來て見習に出す、元來操の作者をしたるもの故、歌舞妓の道もはやのみこみ、早速四五年の内立身して、寶田壽助と改る、寶田は元神田より出たる名、昔關の戸の淨るりを書たる寶田壽來カンガといふ、沙門自阿彌壽助と改めさせる、自阿彌も神田の住人なり

三升屋四郎

始は上方の太鼓持にて、江戸へ來て狂言方へ出、半四郎の出内と成、早速とり入て又木場の人と成り、初名は井筒屋彌助、井筒といふ苗字上がたの井筒といふ茶屋より出たる名、白猿旅行の時、加賀の國にて筆取して、忠臣藏の裏表筋書を江戸へ送る、たいこ持ゆへおかし、その噺たつぷり有、後三升屋我よりあたへて、白猿門人となる、深川寺町の正行寺に墓を建る、

紫の女胴著

彌助といひし頃、上方より下りたて身の置所なく、我が娘におどり踊らせて、女房に三味線彈かせて、口上をいひ、駄鳥といふ見世物觀音の奥山へ出た時、前狂言に娘の踊り勸めさせ行通ふ道、名にしあふ御藏前通りを、紫ちりめんの女胴著を著て、下駄がけにて出合よく、みれば此彌助なり、尤其頃より言こみの有し男ゆへ、もの言かける、扨々けしからぬ端手な姿といへばわしは大坂者故、人の目に付爲には、此位な姿で歩るかねば人にしられぬといふ、人をば馬鹿にしたる男にぞ、後には名を出す、

奈川篤助

大坂よりはじめての下りには、堺町にて半四郎歌右衛門の三勝半七、後に三津五郎十次兵衛の二ッ蝶々の書直し大手柄ありて、又後に金主京橋今助篤助を呼び、此時は鰕十郎に付て顔見世、どうやらこうやらやらかせども、三月に至り御所櫻の操を出し、鰕十郎辨慶の大しくじりより、ふ入にして今助立腹にて、早早上がたへ登らせる、京都にて小芝居の作者となり坊主あたまにて一洗堂といふ、後に都まくづが原へ茶店を出して、往来の人に茶をあたへて、爰に身を送る、通上がたの大作者なり、

奈川七五三助

篤助の師匠、奈川の家也、寅年江戸へ下りて、間もなく大火有て住吉町にて類焼する、此出火のとき机を脊負、福森が代地の宅へ逃て來る、希世の姿おかし、後に圓富地に居て、給金取留の衣服諸道具出來て、ふきや町がしかづらや友九郎が土蔵へ品々預ける、此友九郎火事を出して火元と成る、此噂聞て七五三助あしたの朝ヤレ嬉しやと、早速欠行みれば、友九郎が土蔵の戸前ひらく、近邊の人々來て、火元のうへに我藏を助けしと人々悪みて火をうちこむ、七五三助はおのれが衣服助かりしと悦ぶ甲斐なく、見て居る前にて火をうち込れ、かなしき聲をいだして泣ながら、わしが預けたつゞら計は、どうぞ助て下され〳〵と大音上て泣ければ、傍の見物始七五三助といふものしらず、うぬ迄がふといやうだと棒鐵など持て打かかる故、早々逃て立去り、扨も〳〵情無き、せつ角火元でも土蔵が助り、わしが運の強さと思ひの外、助りた藏へは火を入れられ、みす〳〵見る前でおのれが衣裳道具を焼拂ふとは、運に盡た事と、其年はう〳〵逃、大坂へ登るこそあわれなり、

二代目 福森久助

初名成田屋助、七代目團十郎の出内、後に木挽町へ出勤の節、すしやの娘と色事有て、成田屋を取上られて足守彌助と改る、夫よりあちこち役者のうちに居て、引負取逃など有て、諸々へ居候がへして、高麗屋へ道入、松本幸二と改る、又子細出來て高麗屋を立去りて、大和屋へ道入る、三津五郎女房おでんに付て、後に菊之丞に付て人と成る、此男度々名をかへ、出たり引込みたりして、二代目福森久助に成て終る、元祖

福森さぞかし我が名を付しを恨みつらん、

勝井源八郎

勝浦周藏といふ、中仙道浦和宿の生にして、江戸の氣性受て作者に成たく、南北の弟子と成り、こつけいの有る人にて、席ひらきを書時分手柄あり、師匠の心に叶ひ、次第に評判よく〳〵して取立られ、作者と成て松緑などに付て重兵衛、南北の片うでと成て、淺草日應院地内にて終る、

故へ作者近年の中村重助故へを始めとして其外下下迄數多あれど、愛といふ噺是と云事更におかしき物語なければ記さず、又當時の櫻田今南北てうふ作助周藏その若年の者は、行末久しければ後の噂として、役者立身の評はいわづ、遠慮して餘は追追考へて、第二冊の操りを待たまへ、

作者店おろし大尾

並木正三一代噺序

今年如月中の七日は當正軒正三が十三回忌にして、わなみも共に庭神樂の寄合、金毘羅講の文彌ぶしになつみ、席キにすゝみし交りの深きをもて、何を泉下の手向にとは思ほゆれど、生キ世の風流に導かれながら、今更何の觀念もなく、はゐならぬ折柄、何人の著作にや、友なりける人、幸に此草を得させしかば、机上に閲みするに、其ぬし戲場に勤仕のはじめより終焉を異にせざるの操は、篤實にあやしからず、物くるおしからぬさへのたくましきを、そこはかとなくねもころにあかせしはくきやうの追薦月日にはおくれながら、燒香ひを櫻木にものしなば、古しへをこゐざらいかものいれ首、強力躰の作意の數を四方にふれんは、牌前の下緒納めにまさりなんと、書肆のもとめに應するも、大きなる洒落にして根にかへる花の塵塚はき捨る箒目にもれぬ言くさ、かき集めし狂言攫(さらへ)と號せし趣き、爰に斷り侍らんと、あめあきらけきいつゝの年、皐月雨のつれ〴〵に、我茅屋にふり込られ

題　入我園主人

正

一

並木正三一代咄

並木正三狂言擾

嗚呼おしいかなおしむべし、おしてる難波の江南に育ち、よしあしのまこな事を書集め、伎藝の作文を顯はせし中にも、古今に獨歩して此道の流れを汲る輩は、孫子呉子が肺肝に入しかとうたがひ、諸葛亮がいさおしともおもはゆるほど、功名をとげ身まかりし正三といへるは、おふけなくも往昔慶長御治國の惠を蒙りたてまつり、名左衛門太左衛門など櫓を道頓堀へ御赦免あり、下し置れし以來、多くの狂言作者にも事かはり、一流の譽れをのこし、あまねく古今の俳諧歌、史記の滑稽にひとしき作意を、又當世に滑稽せし作手とやいはん、準縄理に門左衛門、歌舞妓に正三とならべいふとも耻しからず、其父もとは雲州の仕官にて、いさゝか仕へを辭する事侍りて、大阪堀江へ漂泊し、諸木あるひは草花金石などより油を取法、南蠻の秘傳を鍛練し、いやしからぬ家業をいとなみ、正兵衛と呼れくらせし内（奴正兵衛とて人の知たる男なり）道頓堀元堺町、扇子屋方の遊客と成しも、しかるべき値遇にや、扇子屋の娘に契り、正三をもふけ、幼名を久太と呼しに、其後故ありて正兵衛、右扇子屋[illegible]いもうと、いづれやといへる芝居茶屋へ入聟して、連子の久太を養育せしゆへ、襁褓の内より櫓太皷の音を友とし、竹馬の頃は歌舞妓の樂家をあそび所、又は操芝居へ入込[illegible]のたすけに成、からくり芝居の下屋へ遣入、[illegible]積りものゝ糸どりを見おぼへ、其節親正兵衛、出[illegible]芝居世話せしとき（今の角丸芝居の向ひに有し）若水千歳[illegible]といふ、手づまからくりの水船のしかけは、久太十四五歳の工夫なりと聞及びぬ、夫より後元服して正三と改め、はたちにたらずして大西の芝居にて（今の[illegible]）中村喜代十郎といへる女形、中ゥ芝居を興行せしとき、中橋筋大寶寺町西がは帽子屋の隣、鍛冶屋の娘子をおひし時を、三番續の狂言に取組、寛延元年辰八月右喜代十郎芝居へ出せしが、正三歌舞妓狂言の書はじめ也、則其時狂言作者泉屋正三と名前を出し、同年霜月角の芝居坂東豐三郎座へ出二、冬籠妻乞軍の顔見世狂言おもしろく、二の替りは其節の時ものかしくをとり組、戀淵血汐絞染といふきやうげん、笛十

と共に拵へ（これ高田瑞庵といふ醫師也）巳の春中大入をとり、四月がはりの與作の作りかへは、笛十計りのよし評判たゞならず、同七月には正三男作養老瀧といふ水狂言を出し、黒船忠吉放駒長吉を故三桝大五郎、鐵門の庄兵衛野干の庄兵衛を歌右衛門にて（今の歌七事此本にては前［illegible］右衛門といふなり）此兩人の早替り、又はんじもの、喜兵衛を、親仁にて豐三郎にさせし事其大きに當り、巳の霜月より大西三桝大五郎座にて、［illegible］黄金勝軍といふ顔見世狂言、故岩井半四郎江戸より登りて評判よく、二の替りに大和國井手下紐、これ又大きにはづみ、午の四月まで大入其つぎに若翠結相權現松、これは梅由屋心中の一夜づけ也（何にもならず急に仕組て初日を出すを一夜づけといふ［illegible］是也）これも大がい入をとり、其跡がくり返しもの、同じく七月より作り替の薄雪遊撰案、水狂言にて爭も評よく、其内芝居相休當暮より淨瑠璃作者故並木宗助の門弟と成（これあまはんへ並木角字の元祖にて一名千柳）此人に隨身して、豐竹操座へかゝえられし所、未の七月より中村歌右衛門座、角の芝居へ豐竹より、正三をスケに借受け、則（早川又兵衛［illegible］新介［illegible］右衛門）三人組染貫模様の狂言當り、其後おりく十兵衛の一夜づけ、雨防紅（あまやどりくれない）莞薩大きに評判よく、九月かはりは藤川平九郎、京より江戸へ行、暇乞に三十日のスケに成り、織田軍記紅葉登これ又大入、しかるに宗助當十一月中旬、一谷嫩軍記の三段目を書ながら病死致し、師の遺命によつて、申の年は豐竹を離れず、同年霜月心にそまぬ事ありしや、角の芝居故三桝大五郎座へ仕、並木正三と姓を改め、藤川平九郎江戸よりのぼり、名護屋［illegible］錦の顔見世よろしく、二のかはり三河國照田雛昔物語おもはしからず、酉年二月より高臺橋斂鳥、らいでん源八喧嘩のきやうげん大きにはづみ、四月には西東合見臺、これは竹田の三切ものをうつせし趣向にて、舞臺道具を奇麗に仕立はり込みしゆへ、これも請よく、跡へ河堀口の心中、冥途の里塚とて又切狂言をつけしより、六月迄持越七月替りに、金比羅御利生幼稚子敵討、雛助故他人子役の姉弟にて豐三郎をたのみ、故大五郎を力に、敵平九郎をねらふ狂言、嵐小六の仕内など、みなく大々當りにて、跡はくり返しもの酉の霜月大西三條定助座へ行、顔見世泰平木曾譜中村十藏（後に吉右衛門といふ）能登守にて氣違水こぼさすのつかひ方大きによく、同暮疫病の咒に門々に張札せし、キノニノヤノハノモノといふ事を思ひより、二のかはりけ

いせい天羽衣といふ狂言を出せしが、正三一代名をあげし根本にして、大切に三間四方のせり上を工夫仕出し、大坂町中を悦ばせしも、全く幼き時より竹田のからくり、積りものゝ糸どり、万端見おぼへ置し發明ならん、尤其以前寛保三年癸亥年の暮、大西故中村十藏座へ、江戸より故澤村宗十郎登り（後に助高屋高助といふ）齋藤山城にて、油計りの狂言の時、二階座敷を一面にせり上しは、故並木永助作りし狂言なれ共（これも元祖宗助弟にて）其時のせり上ケは、幕明よりかざり付の二階にて前どふり椽がは高欄の兩方へ摺柱をこしらへ、上に立しは故宗十郎計り、おもさはいつも下家より一人前のせり上ケに、椽がは高欄つけし同然、今度キノニノせり上は、飾り付揚屋の道具を引て取り、奥より三間四方の板ぶき屋根を突出し、上にて故中山新九郎、大勢と立有て追込み、一人殘る所へ、中山文七松嶋喜代崎出て、故新九郎をいさめ、腹を切り自害する内、これなりに三人一所にせり上る、下の家臺に故十藏、歌右衛門、定助、故四郎五郎立ならびて、定助へ文七、喜代崎が流れ落る血汐を呑し猪を直す趣向なれば、此七人をせり上る前には、大ぜい屋根での立故、宗十郎一人が長袴のすつくり立を、椽がは計り上しとは何ほど重さ違ふ事ぞや大工棟梁のさんだんも有ふなれども正三ならずして万力の仕かけ、眞綱の取やう、此工夫が付べきや、凡人の及ぶ所に非ず、此とき春正月中の上り銀高を書顯はし、樂屋の鎭守の繪馬に上ケしは、前代未聞といひし事也、此狂言戌の四月まで大入し、其跡へ（三荘太夫、守護若、小栗、苅萱、隅田川）を一ツにして五説經といふ看板出し、狂言本出來せしに（後に此本をうつし取正三死期に新狂言として京都にて出す）其時故有て不出、其跡へ（七條河原）茶湯の釜入と外題して（これも後に浄るりに出されし事後にしるす）看板出しかど、これも初日不出、座中もめ合くり返し物に成り夫より五月に中の芝居、故嵐三右衛門座へうつり、丹波屋助太郎館（今年東の芝居にて女大學と出したる是也）此狂言も故あやめ平九郎大きに出來され、其内又角の座本故大五郎親友にて、據なく頼まれ奥州遊行柳の四九次郎塲を仕組つかはし、七月替りは此塲で大入を取らせ、九月に中の芝居にて休ばなしを出し、下福嶋の人ごろしを持込んで大に當り、此時の上り銀を以て、亥の霜月顔見世を、銀主より取立、同芝居故三右衛門座本にて天照太神宮岩戸曙と神代の顔見世狂言評判よけれどはねめなく、二のかはり、道

中千貫樋故十藏平九郎の出合めづらしく、螺貝わりの場受よく、勿論切りには大道具見へもよろしく、夫より芝居伊勢へ行、亥の五月より皆々歸りておそめ久松戀の盂蘭盆、七月よりはくり替しもの、子の霜月よりやはり中にて坂東豐三郎座本、顏見世時代世話黄金榮といふ狂言座附終りに、盛衰記の役割を、役者に富にて突せ、とんつな役にて仕込し顏見世甚だ大入、尤此年は一方の作者の立者永助と正三同座にて、二のかはりには定めて目ざましき趣向有べしと、みな／＼こぞり居たる所、鳥邊山の心中に、茨木屋幸齋を取組村烏郷音聲（むらからすさとのねじめ）といふ二のかはりを出し、大キに評判あしく冬の内三四日相勤め、正月初芝居よりもめ出し、一向出來かね、三月を待ず座中伊勢へ行し也、正三も四月中頃より思立、參宮して念頃成中なれば、故三右衛門部屋に逗留の內、故三右衛門淫性の傷寒を煩ひ付、他事なく正三介抱すれ共次第におもり、五六日の內に死去いたし、泣々其跡取置遣はし、五月の末に正三大城へ立歸り、其七月は角姉川大吉座をスケ、草津小女郎の水狂言、跡は古物、寶暦六子年霜月より大西芝居を取立、切かはつた座本の名前、大松百助 壽（たんぜん）六法（はふ）と顏見世狂言大きに當り、二のかはり天竺德兵衛開出往來、極月廿八日大いれの惣稽古して、丑ノ正月二日より初日、是又大入大評判故新九郎文七ともに當りを取り、同年四月より、四天王寺伽藍鑑、此狂言は新淨るりに取組、舞臺に手すりを操り同然にこしらへしゆへ、又々町中の氣を取て、大きに評判よく、はじめて大字七くだりの正本を出し、七月迄も持こしたるに、芝居出來かね殘念に、其年を送りし內、京都扇子屋孫八芝居より抱へに來り、丑の霜月京都へ登り、大社結納三番續、此顏見世大當り、則染松松次郎座本にて、あいのものは其頃豐竹の新淨るり、祇園祭禮信仰記、これ又うけよく、三月より二のかはり、けいせい飯綱八文字、正二月前びろに仕組の手つがひよく、故十藏、故大五郎、豐三郎、嵐小六、ひな介、など大にあたり、五月かはりは西陣織物屋の心中、一夜附ケ、夏紅葉血汐紅といふ赤い盡の外題を出し、入を取り、七月かはりは業平、東下向大入、その跡はくり返しもの、其霜月大坂へ歸り、豐竹より角芝居を取立、中山文七座本にて稀藤原系圖の顏見世狂言を出し、文七川太郎と成、大吉と掛合の口合せりふ大きに入

をよろこばせ、板に彫りて町中を賣りたる事隠れなし、其うへ、故中村喜代三郎、江戸より登りて受よく、二のかはりは三十石艠始、古今の大々當り、文七故大五郎始ての出合はなく／＼しく、大切に砂ぶたい共一面の廻り道具を工夫し、芝居は極月上旬より下屋をほりこの大仕かけ、法善寺床の前なるたら／＼おり、又濱千日角のたら／＼おりまで、皆此土にて平地となし、破風口の大臣柱を取置に差圖して、序の御殿の引道具、切の淀の大廻りは、誰しらぬ古た卷たる手段、此時も銀主大きにたんのふして、其跡くりかへしの信仰記、夏かはりに錢屋の噂を持込て、伊勢や日向の物がたり、めづらしき地獄のせりふに膓をよぢらせ八朔からが大坂神事揃、文七故大五郎の取合よく、無筆の女房が書置を稚子に覺へさせ、死後にいわせる趣向あたらしく、うれい見物によくこたへ、こつずいの涙を流させ、九月より大吉、故喜代三郎が暇乞、これ又評よく、卯の霜月よりやはり文七座本にて、中村富十郎、市川升藏、江戸より登り、顔見世は鶴源氏壽卷大入にて、二のかはり、九州釣鐘岬の狂言、文七鯨つき灘八にて、鐵砲をひらい耳をふさぐ幕にて、氣を取り、升藏が死骸の腹なる勘合の印を取出す趣向、面白く、大切には富十郎娘道成寺の所作事、つゞいてぶたいを破風ともに東西へ引分ケ、山門を突出し、故大五郎文七たての内よりせり上て目を驚かせしに、辰の年正月十日頃までは、さのみ入もなかりしが、十二三日ころより大入して、後にはぶたいに棧敷をかける程の大當り、尤富十郎久しぶりの所作事ゆへとはいひながら狂言わるくては中々もてる物にあらず、正三手がらはいふも更なり、四月の頃まで大入して、跡富十郎吉三、金作お七にて戀の緋櫻のくりかへし、七月替りは樂屋より注文有て、江戸風の曾我の狂言、これはおもはしからず、八月より戀女房のくり返し大きによく、顔見世前までつゞき、霜月も又文七座、生如來金顔見世大ていにて、二のかはり急に出來かね漸巳の五月十五日より、霧太郎天狗酒盛の狂言、これも大きにあたり、切に惣二階座敷の引道具、後には舞臺を突出して又大廻り道具、かれこれ此場は道具動請にして、富十郎彦四郎道行も受よく、故新九郎壽太郎の仕内に我折らせたるも、此人の遣ひかた著作に秀でし故の事也、其御居宅は吉左衛門町にて、親正兵

衞に孝心深く此夏剃髪して法名正朔といふ隱居の座敷をしつらひ、又は二階へ庭をつき、植込飛石などを置、井戸をすへて下の板もとの窓とし、釣瓶をおろせば酒さかな、煙草盆までくみ上るやうに仕かけ、料理茶屋を企て、活氣なる親の心をいさめ、芝居の銀主をすゝめ、夏祭りの折からは、役者中をねりものに出させ所を賑はし、其七月より富十郎くずの葉又は文七、故大五郎二人の奴見事なりとて、ますく大入、秋の末江戸より市村龜藏、上方見物に來りしを頼みスケさせ、おはつ德兵衞富十郎と出合にて、切は鎗權所作事あまりたぎらず、其跡もくり返しもの、寶暦十一年巳の霜月、同文七座惣追補使鎌倉館には、故藤九郎を顏見世より謀反人につかひ、二の替りは暮卒いろは行列、中村吉右衞門吉十郎事由良之介にて忠臣藏の作りかへ、次の女鳴髪にはひつぱら卿をくらひて人間馬と成おかしみ七月には竹篁太郎怪談記、不景氣にて、次に國姓爺のくり返し、切が梭屋襠噂の一夜づけを、大經寺に取直せし此仕組の評判よく、跡はくかり返しにて、午の霜月京都へ登り、顏見世は川太郎のくり返し、二のかわりはけいせい花城山、七人の片袖を一度に引ちぎる序の幕よろしく、狂言も花やかに、大入してそれよりは大坂の古物をくりかへして、餘り新物間及ばす、癸未のとし子ぶん松之丞を座本として顏見世、源平通寶丸二のかはりに所作事させ、則けいせい熊野山の狂言大きにあたり、跡は又くりかへしもの、或は敵討仙臺訛などにて入を取、申の霜月は尾上紋太郎座、其後祇園林の心中の一夜づけより、松之丞病氣にとりかかり、程なく死去せしより、大坂へ立歸り、酉の正月より竹田芝居へ出て、おどけ狂言曾我最負惡方果報とて、七福神と矢の根五郎の出合に腹をかゝへさせ、外にけいせい十二鐘、闇取二代鑑の三切りもの、故三枡他人巳之介立合の引はりよく、酉の七月には惻り浦嶋、天上返りのおどけ狂言、そんでんびるのせりふをはやらせ、外には小栗と川山の肝取、いづれも故他人巳之助の仕内に合より、趣向を立て出來させ、同年八月に竹本芝居にて、投頭巾北濱育といふ淨るりの外題出しかど、さはり有て看板を引、急に新淨るりの取組を頼まれ、正三永介其外の淨るり作者打込に相談して、姻袖鏡を拵へ、倶々書立達者をあらはし、同年霜月中の芝居にて、二座本中村歌右衛門故三桝大五郎隔晩の顏

見世の内、三枡座の方にて娶しのだ妻の狂言を當、それよりはくりかへし物數々出て北へも行、戌の四月惟喬親王魔術冠を出し、是二座打込に成り、道具も大形にて、大てい七月より男作後日帷五郎八と瀧川の行衛を、故吉右衛門小六にてうれいの仕組評判よく、夫より又古物を出て、戌の霜月より角の芝居雛助座へすみ、往古大坂村在所由來、此顔見世大當り、其次ぎ合のもの、亥の年春の二の替り、世話料理鱸庖丁、看板出るから噂よく、初日二日目は大入人の山をなせしが、障り有て相やめ、夫より義經蝦夷語を出しけれどもつゞかず、芝居も有なしにて、漸八月より大坂日記譚の長次郎を出し、十月には竹本へスケに出て、石川左右衛門一代噺を出し（これ先年かんばん出せし七條河原茶釜入なり）亥の年霜月角にて、中山來助座の顔見世、男女相生鑑座付の跡にて、緣引の役割を定めけいきよく、谷のもの千本櫻故芳澤あやめ（はじめの名崎之介これ三代目のあやめ也）忠信の受よく、明和五子年春は京都中山文七より頼まれスケに登り、二のかはりけいせい桃山錦を出し、秋は大坂へ下り竹田芝居にて宿無團七時雨傘、其頃の噂いわ井風呂の一夜づけ尤大入、九月に龜谷濱芝居跡にて（相合橋南つめ東へ入る所に有しなり）淨るりあやつりを取立、子分正吉名前にて連管三番叟、壽館狐馬懸姿競、唐上噺、鬪取二代勝負附、其外古物合して六切の淨るりを出し、太夫三絃操り方の一座をかゝへ、夫のみならず、芝居の向ひへ新宅の茶屋を組立、妻に勝手を計らはす、二階座敷に又々積込中庭こしらへ、大きに端手なる仕かけ成しがたもちがたく、芝居と倶に立消して丑の年夏より思ひ立、菱屋といへるに内談して、座摩の一座を阿波へ引越させ、其身も弟ぶん三勝其外昵近の者を引連て阿州へ立越、看板に大坂歌舞妓芝居惣頭取と英名をあげ、又々故來助雛介其外の役者を呼下し、秋の末に立かへり、夫より父が吉左衛門町に居て、丑の暮より角芝居にて、富士松山十郎（今は三保木儀左衛門也）座を取立、顔見世遲ければ、納めの庚申待と外題して暫らく初め、寅の二月上旬より二のかはり、阿波みやげの心にて、東山殿女狩大きに町中評判して夏までつゞき、其跡正德年中淀屋橋の喧嘩を出し、此時分より難波へ引こもり居て、富士松座の七月に夕涼蚊追店とて、夏衣裳の座付をさせ、同霜月より中の芝居小川吉太郎座へ行、眞一文字魁評判の顔見世、難波にての思ひつき骨つぎのお

かしみ當り、夫より又布袋町へ宅替して、小川座二のかはりが桑名屋德藏入船物語、切に面影六歌仙とて、故中村条太郎所作事まで古今にすぐれ入つめ、跡は追々くりかへし物、卯霜月はやはり中にて、市山助五郎座顔みせ、中睦妖藏宮嶋臺、歌右衞門猩々の役、これもおかしく、二のかはり三千世界商往來、三月末より近江源氏鎔講釋、皆々大當りにて辰の秋頃より正三胸痛みの病症、時々おこりけれ共たじろかず、まへ廣に江戸表へ人をつかはし、來ル顔見世に故尾上菊五郎の相談成よし通達有て、中の芝居へ中村歌右衞門名前を上故菊五郎前かんばん出せし所、俄にへんがへ故かゝりの者ども大きに廢亡し、術計つきたるに病中ながらもつ共ひるまず、頓智の外題を思ひ付、尾上菊五郎不登噺と顔見世狂言のかんばんを出し、坂田半五郎を呼寄せ、出來にくき、難義の所をわかやかし、思の外大入して、合のもの新うす雪も相應に入たる內胸痛日々に增長し、此頃は腹中にてやぶれ皷を打ごとき音を出し、眤近の內に醫心ある輩も有ば、養生に如才なく、病氣の內にも二のかはり、狂言に心をつかへば次第に重るといふ迚もかゝるふはならず、

時々は堺の醫家へ導引の療治にかよひ、打臥とはなしにぶら／＼せし內に、漸二のかはりの時候世界を思ひより、夫より日もつまりあれば、せり付て三ッ目四ッ目を相定め、序二ッ目もあらかたにきはまりし時惟安永二年癸巳二月十六日、いつにかはりて甚病氣こゝろよしとて、眤近の者をよせ、四方山の咄しの內にうかみしや、日本一和布刈神事と外題をしたゝめ、脇付までもたま／＼と書付、病氣もいとはず座本中村歌右衞門方へ持行けれども、折ふし富市（道頓堀名代のりやうりや也）方にて御屋敷の振舞の座へ立越しと留主の樣子を聞き、明日迄も延されぬ急なる家業づくなれば杖にすがり、富市の勝手へ行（是使にても事濟べきなれども大事の外題の內談なれば直に行し也）歌右衞門を呼出し、密に外題を見せたりしに大きに氣に入ければ、看板あつらへの手つがひまで、其座にて內談し、こゝろよげに立歸り寐たりしが、其夜八ッ時分に、俄に心痛取詰たりしや、妻をおこして水を乞により、打おどろき親正朔七三郎共に（三勝元服して七三郎後に新平と改名）近所の知音へしらせしうち、伊勢屋又右衞門、大村屋九八、中村歌右衞門、市山助五郎皆々多年の親友なれば早速かけ付、醫師も彼是其外眤近の輩まで思ひ

思ひに介抱すれ共相叶はず、さのみ苦痛の體共見えず、大喝一聲南無三寶と一句を殘し、ねむるがごとく息たへ畢ぬ、ア、此夜いかなる時ぞや、凡三十年來道頓堀京都に及んで、狂言戯作の譽れ高く、一生の述作七十餘番、其外濱中ゥ芝居の作文、又は一夜づけ、顏見世など數多ければもれもやすらん、剩へ京都の出勤、伊勢部のさき〲にも急なる替りに望んでは見捨る事なく、筆作に助られし端本なども多かめれど、是を記すにいとまあらず、ことばの花筆の林のしげしげ成、並木の主も狹火のせり上にせまり、ふさぎしぶたいも廻り道具と目くるめき、四十四歳の春秋におしまれ、一期の夢の幕をさらりと引とりしかば、是を傳へ聞役者はもとより、かの迦羅双林に佛をうしなふ涅槃會より間もなければ、女形も立役も羅漢のごとく取まはし、天のたすけの藥はふれども中(チウ)のりしかけの針がねに引かゝりて、此座にいたらず釣看板の人形も俄雨にあふたるごとく、木戸手代場廻りは極樂の通り切手をさゝげ、半疊うりは蓮臺の丈夫なを吟味し、世を宇治山の賣子ども、みづからをけまんにむすんでもち運び、日頃大入大あたりをさせられし恩とくをしたひし月日も立やすく、むかしを戀ふる面影は法善寺の石牌に朽ざる机おしむべし〱

緒を斷て手向とせばやいとざくら

時天明乙巳年二月十七日

以上は「並木正三一代噺」の小冊子に載する所なり、次の本讀は十三回忌當時の刷物に、「異本南水漫遊」に出たるを爰に附することゝしたり

並木正三述作之狂言 追善之本讀

廿三日 廿四日 兩夜番組

外題		役
井戸の下組	本よみ	並木十輔
三十石	同	並木翁輔
天羽衣	本よみ	惣作者かけ合
鵺講釋	同	竹本三郎兵衛
ひがし山どの	同	奈川七五三助
幼年敵討	本よみ	惣作者掛合
天竺德びやうへ	同	奈川龜助
しつへい太郎	同	爲川宗助
天狗酒盛	本よみ	惣作者かけ合
まつりぞろへ	同	近松德叟

桑名屋德藏　同　並木五兵衛
よどやばし喧嘩　本よみ　惣作者掛合
めかりの神事　本よみ　惣作者かけ合
右之外懇意の衆中手向として
三曲　琴　雲霞
　　　胡弓　白綾、
　　　尺八　萬象
所作事　富山捲足
管絃　近松東南
浄るりふしこと　市山志山
右本讀に歌三絃（三絃）鳴物はやし相加へ幷に諸藝南夜
共相替外にスケ罷出來御覧に入候以上
巳二月吉日
千穐万歳叶

弔
並木正三之十三回
父に別れてのくり言まだ乾かざる間に
はや　淺尾正三
指折はあらまた若よ草に露

朋友のしたしさを思ひ出る事の
あまたゝひに　加賀屋歌七
琴の緒も梳や返さんかつら艸
年回をくり返しつゝも　奈河龜助
道そ法ぬるむに甲斐ものほり舟　吉田屋宇兵衛
つく／＼と弔ふや顔鳥かほよ鳥
當時追善　亭主

因云、本よみ會の權輿は、寶暦十二年午之春、東武之作者堀越菜陽淺草の寺内におゐて興行す、其後明和四年亥の秋深川汐濱にて興行、大坂にては天明の初め奈河龜助、かぶき講人と名付て本讀を興行す、(此の註は「南水漫遊」に載する所なり)

上 大山寺のきやうげんは町中への名殘
井にやくし如來もいしやぼん〲

中 わかごけよとぎのはなし
井に浮世のみおさめかゝ松が弐三番

下 ごくらくの道まつすぐに行實方
井にわつさりとしたまた二代のかほみせ

岩井半四郎（いわゐはんしらう）
かりの世をかえすやことし四十八

さいご
物語

上久寶寺町
三丁目
正本屋
九左衛門

岩井半四郎さいご物語

〔上〕大山寺のきやうげんは

町中様への暇乞

難波のはまに座木として、名も四しばいの高やぐら、あふぎくるまのあかねぞめ、名は三國にはいくわいして、いくひさしく岩井半四郎と、山がの山の山がつまでしらぬ人なく、名いみのこしてかうせんのたびにおもむきぬ、おしやいとしいと聞人涙ひまなく、たもとしぼらぬあかつきもなく、せめて此人の物語してゑかうをせんと、にわかに一冊をこしらへ、日のもとのあらゆる國までやり水の、ながれよる手にふれ給はゞ、一遍のゑかうのみたのみ上り〳〵以上、すなはちかいみやうは

一浄譽宗甫　俗名岩井半四郎　當年四十八　一　念佛宗寺は下寺町　源正寺

正月二十三日より當春二の替、播州太山寺薬師如來開帳三ばんつゞきと、やぐら太こかしましきにみゝおどろかせ、なん女くしのはをひゐてけんぶつに行あしのはやさ、時は五つに木戸をうつ、是あたりきやうげんのきつさう、一座の役者がくやにてよろこびのたけ、かんなをすにひまなし、つゞき前に文左衛門がふれ、役人替名の次第迄つまびやかに、左様にお心得なされませうといふしたより、しのつか次郎左衛門はかまの折めをたゞしかめ松をつれ出し、又〳〵口上、右大山寺三ばんつゞきの内に、わだのみさきの舟ぬす人をさしこみ、おめにかけませうと存、まへよりかんばんにも出しましたれ共、さるかたよりぎよゐなされますは、大山寺かいちやうのぢぶんと舟ぬす人は、時代ばつくんのちがいあり、是をやめて、只まつすぐに薬師の御事ばかりを、いたしたがよかろうと有おさしずにまかせ、にはかにしぐみをかへ、如來の御ゑんぎのことをうり、とりもなをさず仕ります、座本半四郎罷出、おことはりを申上ますは、ふなれ共役まへ、殊に此程ぢびやうさしおこりましたに付、若太夫岩井かめ松おれいのためやら、おことはりやら、なにやらかやらに、たこうござりますれど是からお願申あげます、先是より大山寺のかいちやう、三ばんつゞきのはじまり左やうにお心得なされませうとがくや

にいる、それよりじよびらきのせりふすんで、中入、座本半四郎は玉水いなばの助が下人又左衛門になつて、しゆじんにあほうめといわれていゝわけ半四郎せりふ申だんな様、私もむまれつきのあほうでもござりませぬ、久々のびやうきにあらしやうねをとられ、殊に口もとおらずきやうぶかなはねばさだめしうつけましたでござりませう、いぜんは私一ぶんの口上など、さうおふに申かねはいたさね共、何を申てもやまいにはかたれませぬ、おまへにかぎらず、御けんぶつ様がたもさぞおめまだるうお思召ませう、おなじみとあつて、あまたおいしやにかけられ、やうじやうを仕り、此間はすこしげんきをゑました、其うへりよぐわいをかへりみず、ぶたいでかはたびをはきます事、一つは此身を大じにぞんじます、其段はおなじみ御ひいきの又左衛門と、ながくめんどうをごろうじくだされませと狂げんのつゐでに、けんぶつゑのいゝわけ今おもへばなをあはれなり、町中いよ〳〵評判よく、きやうげんはできる、半四郎が尤なる口上、みねばたまらぬ、そなたもいきやあのかた様もいかしやれと、となりからむかいをさそひ、二月十五日まで雨ぶたいに人をあげ、ごてんさじきを口口うつて、ゑいや〳〵のこゑやまず、其明十六日に座本半四郎、玉つぐり石楽師のかいちやうにさんけいし、かゑるさの道むすめかたにてのもてなし、ぐわんらい病氣にて心すゝまずたか枕して只ふすことのみなり、され共しばゐのつとめは一日もかゝさずがくや入もかごにのりて行歸りぬ廿日より心地あしきとて床にふしぬ、半四郎かはりとして西國兵内、是も役あさうおうなれ共下地名人の半四郎がつくしたるうへには兵内ぐらいにてはおもしろからぬとてか、それよりけんぶつ一日〳〵とおち、あたりきやうげんのこしをおる事、かうした不仕合のまはりとしなり、但し二のかはりにははやいことといふ人あれば、いや〳〵さうでもおりない、京のほとけの原も、正月廿四日がはりなれ共、はやれば今迄もはやるぞかし、とかくしぬるほどのとしなれば、きよねんおとゝしあたりなき事もつ共もつ共人云ころ此きやうげんのまなこは半四郎役目一つにきはまりしを、此人つとめずんば、いかではんじやうすべしと、かたいじにいふ人有もおかし、半四郎びやうきおもきにしたがい、難波にてゆびおるほどの

いしや、かど口にのりものたへず、あるひはきよぶん、又はしゆどく、いや〳〵はいきよ口口かたなんど、いづれかおとるまじき見たて、いやといわれぬりやうじ、のこるかたなくつくしぬれ共、命のかぎりはぎばふつき、やくし如來のへんさましまし、ほつきやう道悦になり來り給ひても、いかな〳〵いしやぼんぼんかなはぬうきよと其身のたんめいをうらむよりほかなし、もと半四郎くわほうなる身にて、あまたの子をもつ、そうりやうはかめ松町中御ぞんじの若衆、弟とら松女子ふたり、一人は太左衞門橋筋ききやうのがくうつたる所ゑやうしにやりぬ、其つぎはひんがしのかた、山より出る月のかほ、只丸かれといゝなづけして、ふたりともに花もみぢ、おとこたる子は梅かさくらか、びやうかさらにはなれず、いともかしこくつかへまつるもとをはなれず、よとぎひとぎのひねもすにも、びやうきへいゆうじゆみやう長おんと、日本六十餘州の佛神にりうぐわんひまなく、かけたてまつる御ほうぜんに、あふぎぐるまのちやうちん、是半四郎つね〴〵しん〴〵おこたる事なきしるし、いはねどしれた事なり、かねてふもんぼんの心して

ほけきやうをどくじゆし、いゑのうちには三百五十四ヶ日、とうみやうのひかり日夜にたへず、其心よりかみをおそれ、しもをあはれみ、情第一にして出入ものにも小心やさしく、じひをほんどするしるしにや御見まい人まくらもとにたへず、きぶん次第〳〵にあしおもくなりけるにぞ、我と身のかくごうをきわめ、百八のじゆずをくびにかけ、しやうめうのこへやまぬうちにも、しばいの事をあんじ、作り津打治兵衞、とうどり岡本七郎左衞門を枕もとによせ、きけばけんぶつおちたるよし、何とてゆだんめさるゝ、新狂言はか〴〵しく出ずば京都へ人をのぼし、半左衞門座の狂言にても、當地のかくにあはゞとりにのぼられと、今をかぎり迄しよげいの事をわすれず、それより作者京都へのぼり、山本座のきやうげん名古屋山三をとり、そこ〳〵じぐみをかへて、けいせい八丈が嶋とげだいあらため、三月十六日を初日とする事よしなし、其夜かねおやかたより扇子ばこ一つに文そへてもたせこしたり、半四郎書狀をひけんし、何となくおしいたゞき涙をながし、女ぼうかめ松、其外一もんまくらもとに近付、かの狀をよみきかせ、かめ松に

いふは是は我借用したる金子二千兩の手形なり、然るに我とても本ぶくする事あるまじとあつて此手形をくださるゝ、御心ざしのせつなる事をおもへば、今一度命をのばわり、此おんのほうじたきねがいなれ共、とゞまらぬ命はぜひにおよばぬ、かまへて御おんのわすれず、ながく出入こそおやゑのかうなり、たとへていはゞ今のあらしを手本にすべし、たゞしよげいに心をくだき、けいこゆだんすべからずとま事有いけん其心より大ぶんの手形をもらいぬると、町中にさたしてしらぬ人まで佛神にきせいし、命ごひする人いくたり共かずしらず、人げんにむまれて是ほどまでおもわるゝ物やと聞人かんじけるとなり

〔中〕若後家夜とぎのはなし

しばい過て一座の役者、びやうきいかゞと見まいけるに、次第よはりに只何となくうなづけるばかり、あるよ高嶋おのへ、今村くめの介、玉川十三郎、夜とぎせんと四つ打ころより來り、枕もとになみいて、おのへはくすりまいらせければ、十三郎くめの介は、手あししづかになでまいらす、女ばうかめ松はしぢうそばをはなれず、ようきくかた手に、もしもの事もあらんかとむねせくるしく、よもすがらとのいする物がたりに、みなさまきいてくださんせ、ま事に人の身ほどしれぬものはござんせぬ、こちの人ほどまめな事はなかりしかど、いつのころよりやみ付、それからほつこりとした事がない、かりそめながら座本をめされ、ことしまで十年かと覺へぬ、十二年いぜん「たつのとしは、京万太夫座に有つかれ、坂田藤十郎と、けいせい玉手箱と申ました狂言に、みやこ人をなづませ「みの年當地にて、大和屋甚兵衛座本のとき、三百兩のきう銀とつてなにはにくだり、いせ御せんぐうにめをおどろかせ、又々うしころしのげいなど、申さぬとてもかくれのない事、およそじつがたきう銀三百兩のとりはじめ、其あくる「むまのとしより座本にとり付、村山平十郎中川金之丞上むら吉彌などかゝへ、かほみせのきやうげんふぢはらのはる姫、あたまからの大あたり、正月にはさかばのわうじは村山平十郎殿のお手がら、梅のよし兵衛こそ中村かづま、三原十太夫どのゝあたり「ひつじの年は、平十郎坂田藤十郎などかゝへ、角のしばいで、さかい大寺にて町中のぜにをとりこみ、又そがなげしまだの大いり、其あけ

「さるのとしは、役者ぐみあしく、おとは次郎三郎、杉山かん左衛門殿などかゝへ、やう〳〵佐太のらいくわうじ一つがあたりもの「とりのとしは杉山勘左衛門殿いなりに、又村山平十郎をとつて、二のかはりまや山のかい帳、百五十日のきゝもの、それのみかかのの雪姫にてつゞけどり、其時だんなどのは、さゞめのせんわうと申たとねりのやく、うしをとめんとせしとき、ふとけがをしられ、それよりぞんびよづかれました「いぬの年は江戸ばんどう又太郎、おの山うだ右衛門などにて、さい寺のかいちやう、としのくれにまた〳〵ぜんくわうじのかい帳、ざいしよのばゝかゝたちのせには、こちのしばいとぜんくわうじ様にみなおさまりました「いの年も坂東又太郎、おの山其まゝかゝへ、かほみせよりはるなつ迄一つもあたりなく、六月より村山平十郎をかゝゑ、やつぐら長者といふきやうげんが、其年一つのきゝもの、其ぢぶんきしよくあしいとて役をひき、かわりにはる川庄左衛門がめされた「ねのとし江戸より市川だん四郎をかゝへおもはしからぬとしなりしを、杉山勘左衛門、花井あづまふたりして、三かつが心中、ふゆきよりはるまでもちこし、百五十日のあたり、それよりほかなんにもなし「うしの年きをかへ片をか仁左衛門をかゝゑて、杉山勘左衛門は其まゝいなり、此年も酒天どうじと、ふじ川ほたる見がしばらくはやり、かいくれひくれ「とらの年には山下又四郎と、藤川武左衛門、是もはかどらずして、やう〳〵せみ丸ばかりがきゝました、當年のしばいはかほみせと、大山寺があたりにて先は中といふものなり、とかくぬしのやまいゆゑ、町中のおもひいれもちがい、しよじきのとくにおもひますと、半四郎が出世ものがたりしけるに、半四郎よろこび、おもへば此身の出世大かたならず、其うへうしの年此家迄もとめし事、これわがちからにあらず、町中のごひいきつよきゆへなり、もはやおもひのこす事もあらねど、たゞかの松が事のみなりと、いゝのこすことばの下に、しばらくまどろみけるに、ふしぎやまくらもとに白こあらはれ、としごろしん〳〵するいなり大明神の神ちよくなり、しかるになんぢがびやうきひゞにおとろへ、今をかぎりとみゆる、かねて長命とまもりしかど、しするやまいは神のちからにも叶はず、かぎりなきやまひはとゞむる事やすし、

たび／＼しなんとせしを、今までとめ直事是神りきなり、もはやうき世のかぎりとおもへ、そちこそしするとまゝよ、かめ松が行すへめでたくまもるべし、心やすかれさらばよと、いふかとおもへばあけがたの、鳥のこへ／＼ほのきこへけるに、半四郎めをさまし、一ねんはつきし只何となく、廿六日には申置事有、一もん一座の役者衆、のこらず参り給へとくわいぶんまはしけるに、何事やらんといづれも相つめけるにぞ、半四郎きよくろくによりかゝり、先一家にはひそかにいゝ置、次に村上平十郎、櫻山庄左衛門をまねき、此ていにては近日相はつるにきはまりぬ、それゆへかめ松にげんぶく致させ、すなはち私が名をゆづりました、けふから私じやとおもひ、ふびんのかけてくだされ、又弟とら松には、兄かめ松が名をとらし、私になりかはつて、ひとりの弟をひきまはしてとらせと申事じや、又おの／＼にも心かはらず、私より猶大せつにおもひ、つゝがなく座本を致やうにたのみます、べつして平十郎殿庄左衛門殿をくれ／＼頼申ぞかし、扨津打治兵衛殿には、かりそめながら久／＼のなじみ、申はくだなれ共きやうげん万事に心を付、いつ迄も念比して給はれ、今生のいとまごひに、いでさかづき仕らんとめん／＼にさし、扨かめ松げんぶくのしうぎに、しき三ばそうを一さしみん、もししゝたらんにはうきよのかぎり、千に一つながらへなば、我身のきとう、はや／＼とのぞむにいぎなく、おきなに若太夫かめ松、三番叟はむら山平十郎、せんざいを櫻山庄左衛門と定、にわかにしやうぞくをあらため、はやしかたのこらずぢうたひ、皆／＼どうおんに今日の御きとうなり、ちはやふる神のめぐみに今一ど、命ながゝれ、千秋ばんぜい／＼と、先はしうぎをおさめけるかな

〔下〕いわゐかめ松二代の座本

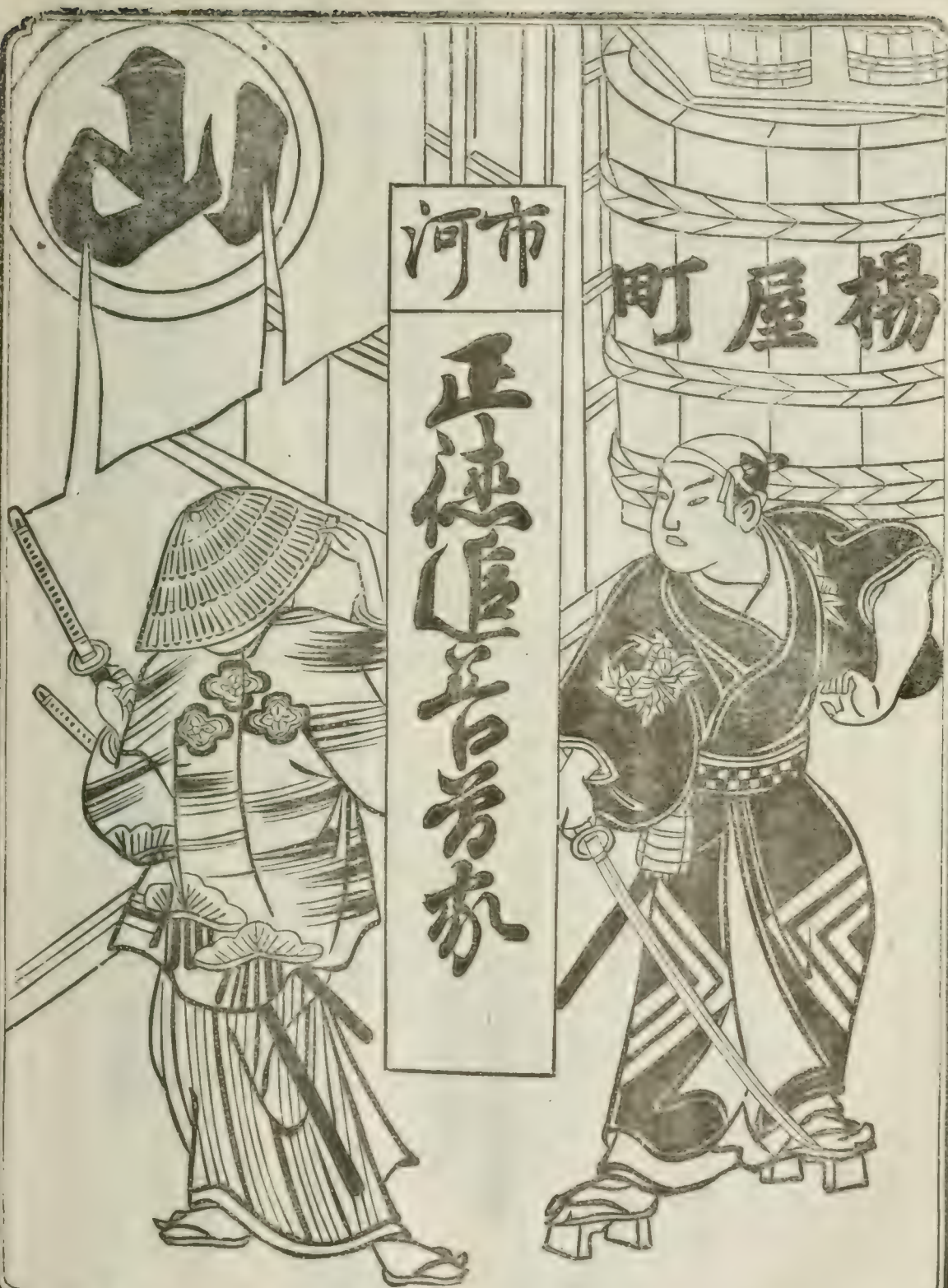
廿七日のあけがたよりびやうきいよ／＼おもく、卯月三日に佛前なるとうめうのひかりをまし、西にむかいてがつしやうし、今日こそわがわうじやうのときなりと、ねんぶつ口にやむ事なく、たつどきちしきをたのみ、りんじう念佛ごくらくの道びき是ならん、みぬ人此おもかげみたくば、過つる大山寺のきやうげん、又左衛門となりかずへが身がはりにたゝんと、我とがつしたる有様さらなり、いづれかわうじやう

する人あまたあるといへ共、身のとりおきかくべつにして、あいじやくりんゑのきづなをはなれ、かのきしにいたる事をわすれず、さいご今なりとみゆるまで手をあはし、卯月三日を此世のかぎりとし、ついにむなしくなりしとなり、皆〳〵はつとむねふさがり、せんごとりみだしけるは、あとにのこりしつま子なり、いづれも是にちからを付とても返らぬしでのたび、あけなば卯の日、こよひにしがいをほうむれと、其夜八つぢぶんにそうれいのいとなみ、ゆいげんにまかせゑびすばしをわたり、しばいのまへをとうりけるに、これしるとなく〳〵四座の役者、ひとりものこらず六道のとも、どうとんぼりがはにはいゑ〳〵よりちやうちんいだし、只につちうのごとくかゝやきぬ、おしや四十八さいの命を、千日寺のけむりとなして名のみのこしぬ、しばいのならひせひなく、明五日よりしばいを取たて、二代の座本、かの松とら松を、古今新左衛門かいはうし、物あはれなる口上、心なきものまで袖をしぼらぬものも、なく〳〵やかたにかへりて、よそならぬゑかうに、いよ〳〵あとめを頼みり〳〵、南無あみだ佛〳〵

岩井半四郎さいご物語終

追付はやり歌古今集と申本出し申候
但し古今新左衛門しやうがのこらず直之ふし付口傳こまかに致當月中に出來仕候　御評判〳〵

大阪上久寶寺町三丁目
正本屋九左衛門開板

揚屋町
市河
正徳追善曾我
山

追善曾我序

明六つからたゝく櫓の太皷は與藏が夢をやぶり、五日の風聞に芝居の沙汰止む間なく、十日の雨にぬれの仕組を評する人更に絶ず、今市川が去年うつくしき虚無僧姿は江戸中男女の心に叶ひ、正月より七月迄入一盃の大當り、それより打續たる模樣身振りに、親團十郎亡魂枕神に立て、我身は不幸にして凡にかかるといへども、汝ともに天を載ざるの德により、今衆人愛敬を得たり、いで〳〵我往昔討れたる意恨、汝が幼立のあら〳〵語聞すべし、筆に止て卷となし、追善の三部經ともなせかしといふ聲耳にとゞまりて、夢さめ聞ばほの〴〵と明はつる鐘もかすかに、はや十三年忌となりぬ

正德六ツの年丙申五月　　綿繡堂序

市川正德追善曾我一之巻

發句　市川の孝おとなしき花の兄

げいは名を潤す、富貴屋町は身過をもよをす、若女形よき木挽町を、家々のみしこ、見物に行ものは、かたのごとくか晝夜をわかたず、役者ごとに逢をするものを、野良ふらす子じやと言、以何者よく内外を見すかすとにやあらん、折に觸ては、彼をまね來て役しやうわざを問ひ爲に、役者雀囀りけるは、古しへより今に至る迄、名人の名を取たる者、是多しと申せども、吹直しの新きんだい、市川程なる者はまれなり、上を申さばうば玉の、夜の錦のしとねのうへ、下を申さば親の讓の、あら金を遣ひ捨て、非人と成、蚤飛で頭ちやうてんに至り、風懐におどる、小屋の隅迄、または割付飛脚も、事をわすれて、終立寄て圓天地の間に知らぬ者もなく、扇子うちわの風流繪にも、見しりごしならざる人なし、かやうに名を發る事は、親に孝ある印なるべし、市川常々父母に、孝成るしこなしをみるに、とうまるちやぼ、初て鳴かぢやの仁藏、豆腐とうじが水道の水汲ころ、くちすゝぎ手あらい、持佛堂に打むかい、念佛數遍あみだ經、心にかのふほど讀じゆし廻向過ぬれば、直に貰茗瓮に火を入、父母の寢屋に行靜に起奉り、ぬれがましけれどもなごや三郎が萬燒或は手作燒飯の茶菓子など奉る折も有り、それより手をこまぬき、今日も勤に罷出候間、留主の内うちの者に仰付られ、御心まかせに、何事をもあそばされ候得、晩ほど御目にかゝり奉らんと、次の間へすさりて、ふさいに向ひ、留主の内、隨分我に成替りて、御心に入候やうに勤られよと、日々〳〵に新に、日に新に、孝の勤を言ば、昔々も御座た堅凍を、力をも入ずに、くだいて、魚を取り、深雪に手もぬらさず、足にあかゞりもきらさず、魚を取り、鍬入らずに穴を掘て、金の釜を見付取る、たゞより安物はなし、舜子はべいべい言葉の土百姓の土座を離て、きんら羅りやうのしと褥にて、しかもがこうぢよゑいの兄弟の、およねを愛、遠他の國より大和な國まで、かくれなき孝に、おさ〳〵おとらぬ程の孝第市川に一、常々身躰はつふを、父母に受て、敢て損破ざる孝の初と、二月二日の灸を遠慮して、勤のためぞと、それさへ聞ねば、す

へぬほどの勤者に、此度の及はどうした因縁ぞ、問たけれども貳千餘年前に、涅槃の密雲隠おはしませば、今時のあかい衣や馬の尾の蠅、拂持衆に問たぶんでもしれぬ、付てもなを〳〵佛法ほど、有難事は御ざるまい、我等が時愚痴愚鈍な奴抔は奉存候畢

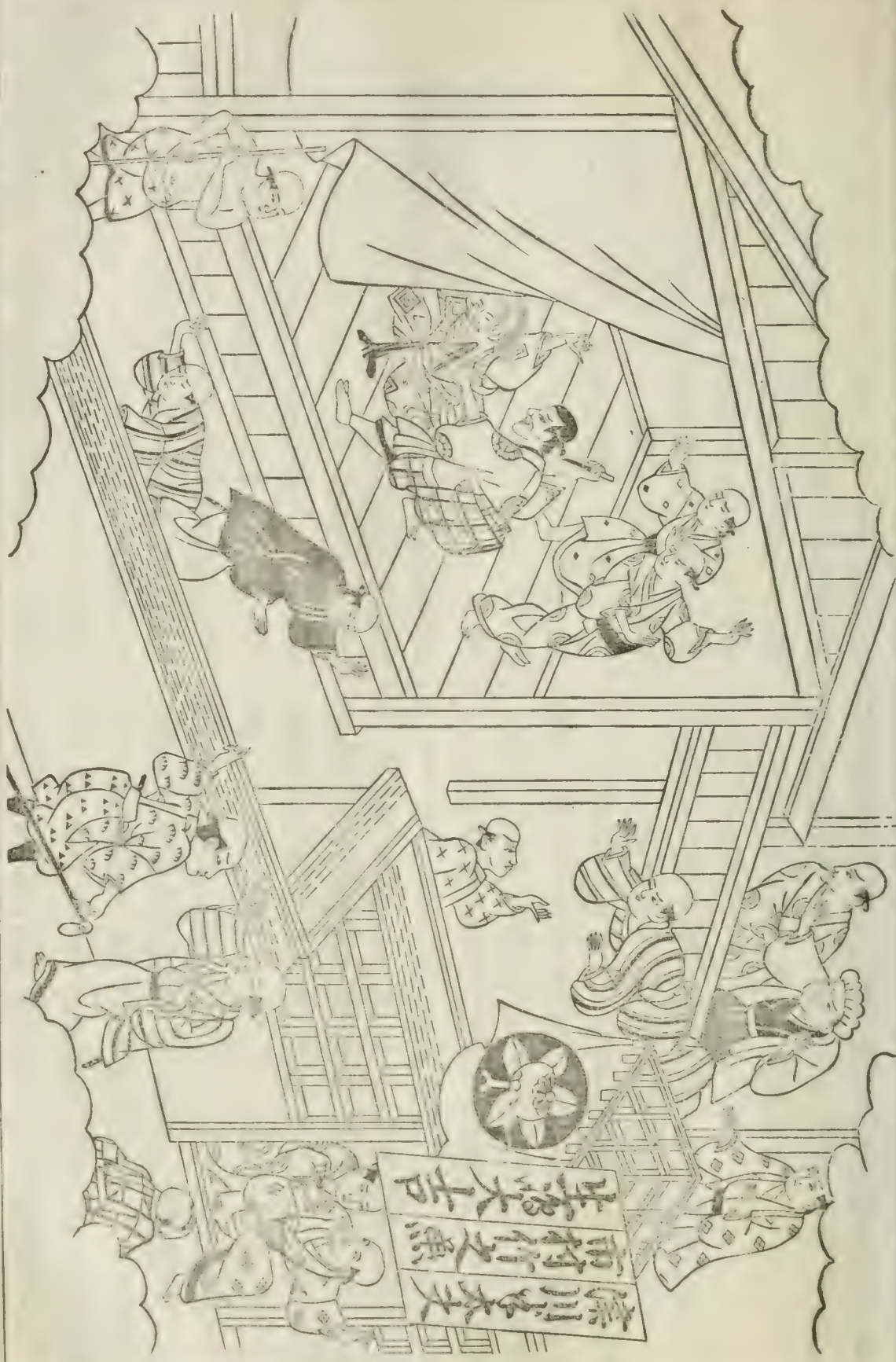
陽にさそわれうぐめく虫の色〳〵さま〴〵成に飛ではおごりを知らざる蚤の終爪の爲に市川の底深因果はどうじやうわばしりに因果經をうなつきて

昔蚤爪をつぶせし報にや今又爪につぶさるゝ蚤

脇　鶯判も盃に飛

つれ〴〵なるまゝに、ひとり住家を立出て、心のうつり行方へ、そこはかとなく歩行ば、堺町に至りぬ、あやしう社物澡けれ、出や此所に浮れ來て、おもしろからん事社多かんめれ、見物のお客衆は、目出たし、竹之丞が芝居は、末々の役者迄、人間の業とは見ゑんぞかし、市川が藝は、殊更稀なり、賓人の棧敷抔の、野郎まわしを召れ、肴に貳朱判下さるゝきは、ゆゝしと社見ゆ、船頭馬形などは、あぶれ來るとも、かまわぬぞ能、其外下つ方は、藪入の時に逢嬉し顔成も、鼠木戸の口におしおふ法師計、浦山敷おらんやうにはすれども、人に見らるゝを、氣の毒さうに思ふと、せんせうものゝ言けんも、實にさる事ぞかし、と口ずさみながら、鼻紙袋を内懐に入、腰の印籠に氣をつけて、繪看板の見居たる所に、竹之丞が芝居に何事やらん殊出來ぬと見へて、見物の貴賤、鼠木戸を猫脊に成て押破り、缺出、年寄たるものは、棧敷よりつき落され、女童子は、踏たをされ、茶辨當の湯にて身を燒、火繩の火燒指にて、羽織著物のすそをこがし、螢なんどの飛にひとしく、飛ありく有樣、輿覺て何事と問ども、其分知たる人なし、かゝる處へ三十歳計成男、かい〴〵しく見えにしが、月行持と言者にや、金棒をかまひそしく、挽來る彼を招て、ひそかにいか成故ぞと問ければ、彼者申様は、意趣の次第は未知れず候得ども、樂屋にて市川の團十郎を生嶋半六指ころして候と語捨て、いそがしく行ぬ、偖は三國市川上手と、ひい〳〵ふく口にもかたことを交りに、ほめ言葉付、紐に木太刀横たゆる童士、團十郎が風俗を眞似人々、我市川に三升の紋所付ぬはあらぬ、下部水師の族まで、江武に言あへるほどのはやり役者なれども、そねみを得たる物

か、または顔を紅にて染たる色事でもあらふか、彼まどひの止がたきは、老たるも若も、知有も愚成も、貴となくせんとなふ、替事なし、神さへおくら子、ほとけにもやしゆたら女、近代はぼう主殺、戀の山には孔子も引るゝと、むらさき式部の口すざみ、其外三國數多にして、筆にまかせるにいとまあきあらず、されば女のつかひ捨し紙ゝふには、鼠も能巣に引込、また或書には、女のはける草鼻緒の足踏雪踏をば、犬も能くわゆると、言傳はんべる、實謹可恐は、此まどいなりと、つぶやきながら。人の心の我がちに、商人のすまぬ穢、ゑど橋の方へ歩行ば、時しも後の藪入の頃なれば、やうがんびれいの女郎花の、袖をつらねてかりの匂ひなんど、すり違ふ色にむげなる親仁も、廻向院へ日參しよさくりじゆずを落し、手代の平兵衛を疑、自身米買出しの見きも、米指をうつちやる、隔夜道心の夏念佛は、前のいたこのかねを打そんじて、しもくにて金玉をなやまし、目を廻して、所の世話に成たり、むかしは父母愛孝のために、當時は戀慕愛著の爲に、家をなくし名を流す耳、つれなや〳〵と、思ひながら行ほどに、しとみ下頭に我家に歸ぬ、ちしもんに、土産ねだる袂より、編笠燒、丁子燒抔とらせ、草臥をはらさんと、湯あみ抔して、ともし火かゝぐる頃、友とする人、ひとりふたり來かゝりて、四方山の咄なりて、亭主申されしは、今日堺町にて、市川生嶋か果事、擧世おしまぬ者なき世の、野邊のおくりの通町も狹く、店下迄もこみ合おし合、知るも知らぬも佃のなみ越す沖の石佛となして、手向の水はかわく間もなしと語ければ、其中に市川と同國の人有りて、徹細に出性を咄ける、彼が父某とかやは、四十歳に餘迄、子なき事を歎て、夫婦諸に、所の氏神成田不動へ、一七日參籠して、子種を祈に、七日滿曉夫婦の者の枕神に立給て、汝ふうふが前生は、ある國の米藏奉行成が、我知ずも藏の内のねづみ、また米虫を多く殺因果にて、子種さら〳〵なし、然れども、前生菩薩をたいせつしつゝ、今もまた後世心是有、多年我を念づる故、子種を今度授といへども、成長に隨て、劔の災難のがれがたし、一度歎のかゝる事有也と、仰有て大小の升三つ重、女房の懐に御入有と夢見て、得てし子なればとて、幼少時は升之助とぞ申ける、扨また役者に成因縁は、御夢さうに劔の災難有べき御つげをおそれ、他

市村竹之丞
生島大吉

の手に渡し育てんと、花のお江戸へ越けるに、何が不動の申子にて、器量こつがら人にすぐれし故、少智をも取ほどの事耳、數多なりしかど、きうせん災難をいとひおそれて、武士の業をよけしに、因果の業のかんずる道理のかれがたく、此度世上にまた蘂市川と名をとり、夢そうの三升の紋所、所々の神せんかしこの佛前、かみなが下に至る迄、付ふらしたるも、夢現とぞ四十歳に過て及にかゝりしを、おもひあわすれば、佛神のかご權者の傳記、疑べからずと、兼好の書れし事、誠に神國なれば、すきかへしの淺草紙をも、不沙汰に遣ひ捨ぬぞ宜しかるべけれと、重口のどうけ交りの輕口咄がしゆんて來て、團十郎が生死のいしゆ、口々に我知り顏に、慢勝に娘の色事さわり故と言へば、いやそれではない、內々蘂の威勢あらそいで、果たせうことには、此度の狂言に、八嶋だんの浦の仕組思ひ合ば、やしま生嶋丑浦、團十郎是兩人にたゝりたり、市川は次信役にて、幾とせ過しよしつねならぬ世の中、あんだ辨慶が力も落て、生嶋が手にかゝり平家の大將のどぶへ、大脇指にて突され、御てんやくの藥、菊王丸も入は社、かめ井は終になくなりぬ、ならび居たる役者は、生嶋をくまひ太郎、外面の者は、ひたちぼうをふりまわし、お見物はひよ鳥ごゑを立て迯行、讃岐圓座半疊錢仕切札錢は、かいぞんに成ぬ、なつたら大事か市川程の名を得者も、浪の泡と消ぬ、かりの浮世に、鶴龜の齡ほども、いくしまの身でもなし、のめやうたゑやざゝんさと、濱松の音聲々に、さいた押た、あひ引に、ひく鹽かげん能者、大和にあらぬとうがらし、醬油のなみもむれ高松、奴豆腐の崩喰ひ、砂鉢淋しき杉箸に、橫雲かゝる明方に、順の肴につまりつゝ、蘂なし猿屋の大黑舞、扇子追取立上り、一に市川末繁昌、二ににぎあふ富貴屋町、三にさんじき明間なし四つに四座に入多く、五ついくしま名も絕ず、六つむさしの大盃、七つなんぼものみ次第、八たり堺町、大黑舞は是まてと、乾の隅をてう／＼と、打治給へば、國も動ぬあらがねの、つちの車の我等まで豐に住る嬉しさよ

第三　懷の中杉白き雪解て

かくて團十郎がうわさ咄もさる者は日々疎、一日二日と過ぬ窓の前の北面は、雨封じて寒空ながら二月

廿六日、彼岸名殘りぞと、四方の寺々に佛事の鐘の音、念佛の聲も聞えて、俗も法師も飛ずはね題目の、太鼓は耳にふれ次で、おかしく、神明の神樂なんど拜し、眺望して水茶屋藥賣に、増上寺のにぎわひ時しに、常念佛の御寺へ頃日珍敷佛の來て、にぎ合候と言より早ふ其所へ行ぬ、誠に說法の會座につらなつて聽聞せん、諸人の心ひとしくして、蟻の如くに集り、東西に走る南北へ行、高き有り賤き有り、老たる有り若きもあり、彼慶安賣藥師が告し、今日は團十郎が一七日成とて、皆ねん佛堂へ參詣の人々多し、思ずながら立寄指のぞきて見れば、おびたゝしき群集居ならびたり、住寺高座に上り給ひ、發願と鐘打ならし、廻向まします亡者の團、十念も過ぬ内に、四十歲計りの女性、下には雪の肌を惡む、白無垢春の空のほのめきたる、淺黃縮緬の上著、あけをうばゐる、紫糸にて、誰を回の五所紋縫たる、小袖を著、白沙綾に墨繪の帶、今やうにむすびさげ、參詣の人中を押分かきわけ、高座の前へ立寄て何やらん一卷をなんさゝげゝる、住寺取上げ給ふ、誠に佛在世に八歲の龍女が、法花の會座にて寶珠をさゝげしも、かくいちはやくや有けんと思ふ所に、住寺彼卷物を押ひらき、聲うち揚て讀誦なされける

誤て申諷誦紋之事

夫倩おもんみれば、朝に看板を出して、井籠の花をつむといへども、夕べには肉骨にくだき、腹中に入て朽ぬ、うゐてんぺんの堺町、正直大ちやくは江戸のならひ、狼籍不出來は浮氣のならはし何國の人かきぬがれざらんや、今弔所の門擧入室學榮、頓性菩提の爲なり、俗名は和國無雙の藝、市川團十郎素性は、下總國いへども、上手の藝者に、成田の郡のそだち、後刹の頃より、遊藝を好、其道に達し事、誠に孔子の食事に、そとうをつらねられしも、かくこそ、和國にては、彼楠庄五郎が竹馬に、むちを打しに事ならず、わづかの星霜の中に、四座の大黒柱として、役者の衣裳を、打出し鹿子、辨才天の笑顏、もゝの木挽町につらなり、ゑびす三郎殿の、釣針に見物いとめでたいを、鹽干の浦堺町の棧敷に釣揚、四座の富貴町の、布袋屋が菓子はもうせんの上に滿、五番續の長狂言は、福祿壽の頭にかゝやき、また有時は舞臺のはりだし、かきの根の貴增上、見物を寄太鼓の、なるかみ上人と成て、「差

しやらくさいにんにくのぢひの相形をあらはし、其心法の十界をとり出して、修羅事にはのりつめたる、坂田が常に數寄なる、大武藏或は、極貧乏なる曾我どの丶まへ、時宗鷲貧前の、せき面したる顏色、四股を紅に染、大太刀を帶し、そのがうせいを眼前に、あらはす、荒事を以ては、天地をも動、目に見えぬ鬼神をも鎮、しうたん事は猛捻髭の武者の兩眼に、涙の雨をもよをさせ、吹ばとぶほどのかる口には、老若男女の心を浮かし、種々の遊藝、實を虛になし、虛を實についしこなして、人の心を慰るは、皆是かれが諸作によれり、折に觸ては、花の都に上り、京わらんべのそしり口を閉させ、讃言葉に逢、また關東に下りては、武士の人々の氣を延、樂と成、然といへども生有ものは、一度は滅穢土のならひ、初有者は終をゆるさず、されば佛靈鷲山のきやうげん八箇年御世話やき、種には、二じきにして　川の流て早さ月日を忘、藝の鑿昌を樂、威勢は四座の舞臺に餘、見物ははめをはづして提重の煙たへず、所々の毛氈は、夕日に映じて紅葉のこどし、貴賤の吸貢茗は、榮る民の、竈はいそなり、芝居の繁昌爰に、喩は山崎千軒寶寺、大津の浦花の都の、花盛と言はん、されば易に亢龍有レ梅、佛經にも師子身中の虫ついばむ、源氏の友喰とやらんで、生嶋半六市川をそねみて、時を兼うかごふ、出其頭の仕組鞍馬の僧正化して忠信四ばん續の中手中ばに半六兼て打べき意趣を立て、四日ごろしに打と死生の、二つ川渡り名代をあらそふ、竹之丞座の、ふし有る石をさらふかと、うかごふ、眼の白黑の磯馴貝する狂言の、他波も引幕の影に、しちやうにかけてちしごを待て、一刀に突市川は木太刀なれば、ぬき合にせんぞなき、是ぞまことなきを實に仕なした報ならめ、矢さきにあらずして、五十四さいにて息たへ、生嶋が手にかゝり市川野邊の露と消おわんぬ、嗟無下なるかな狂言のならひとて日々に死を致すといへども、夕べには宿にかへり、妻子とおしのふすまに、秋の夜の長枕をかわし、また朝には藝をつとめしに、冥途黃泉往て二度かへらぬ仕組、面白からぬ廿五菩薩、柏子聞もいやかなおしいかな、百年の半ばに、人間の油火夢と消へ、今生の榮花忽に散て、ながく本來の道に歸る、ひくわらくやうの風の前にはうゐてん〳〵の了、でんくわう石火の聲の内には、生死のきようらいを見ると言事、

今更初ておどろくべきにはあらねども夫婦恩愛の契り、人間八苦事成といへども、逢別離苦に越事なし、殊にはきうせんにかゝる事、非業の致所か、定て定業の印にや一七日彼岸今日に相當の、折を悦て、一通を授せうだいにぎするものなり、經に曰、極重惡人むた方便、ゆいせう彌陀とくせう極樂といへば、いま弔所の功德にこたへて、九品淨性に生、すせん、蓮花の上に座せん、歸命阿彌陀佛、むひの樂にほこらん、誦文依如件、年號月日前に同じくと讀もあへず上人かんるいを流し給へば、參詣の貴賤袖を絞らぬはなかりける

追善曾我一卷終

寶永忠信物語二之巻

發句　あかの水一時に來る石佛

黒鬼とは謂とも、後生願とはいわるゝなと世の世話に言ぬれども末世に成ても、朽てもすたらぬ金揃の大小にて中もくだ、鍔に桐の大狭箱持せらるゝ方は、愚なり唱名念佛、或は御たすけの御恩御さいそく〳〵にと、一向にかたむき、あみだ様に身をまかせ女犯肉食を表へつき出し願やから、或また修多羅の經さうにかかわつて月をさす、指にて黒大豆座禪の茶請にくうくう空を了て、俗も出家もおかしいぬり笠にて、わそくとやら、かごぬけとやら、かね太鼓にてはやし立て、分別くさいもの、烏ののまぬ水そこぬけだるまの添状にても、門より内へ入ぬと、石の看板、臼好みの六藏が、家督取の様な顔をして、團十が荒事の、顔のあかいけさ衣を貴愚痴やおろかのと、他力の宗旨をうつちやりすてゝ、十露盤粒か巾著の、緒締琥珀の十八粒の、念珠げにとは愚に見へず、武士の、のちの世の事わすれぬ、便りには脇目よろしく、きやまち〳〵なれば、後生はねがひがち、頃日は女順禮、胸に木札のたゆるまもなく、爰い開帳かしこの社の、緣日しやみせんに乗ぬ計、つれふし歌、後生願ひのひる中、俗も坊主も秋ならねども、松虫の鐘を少しもくにて、手の内に鳴せ伍四郎節のねんぶつ滿々て、後生願のさかんなる時なれば、此寺の聽受の多、にぎやかなるも、斷とかくおもひつゝけるうちに、說法も過ければ、聽受の人々、團十郎が墓所へとて、念佛堂の後へ皆參ぬ、我も人なみに行て見れば、きのふにさやうは引かへて、誠に一休とやらんどうけ法師の

佛にもなりかたまりていらぬもの
　石佛らを見るに付ても

と詠じられけるなん思ひ出て、團十が墓の立ふる鮮の仕成も、苔むす石に何のせんか有、春の風は墓の頭の松にこたへ、ひとり苔の下に聞らんといと哀を催す、つかの上には他人あらぬ、内輪よりそとばを立、一念發起の氣をあらはす、參詣の諸人立置たる、しきみの花恰も森林のごとく、手向の水にては、陸の海となし、二町立ならんでは、はよふ立寄かだし、其邊木々のこずへを見れば柳櫻の植交に、引さき紙のし

きしたんざく、はては品川松右衛門や、紙くず買の氣ゑんとなるてふなどと、惡口交には追善にもと寄て見れば

波やうつ生嶋かけて引鹽の　　　　　　　　　祥風堂

流たへけり市川の瀬に

またかしこのつかのほとりには、さすが名を得し程是有て、唐の大和書ども見給ひたる、人のなすにこそ七言四句八苦のうれいのけんとにや

高名流迹市川藝　有實有レ忘口上叙
畢竟無常生嶋劔　世間皆惜九藏獻

きのふ見し花の姿はきやう散て

はかなく殘る松風の音

かしこにはまた俳諧發句

散花は發願の氣のいろはかな　　　易螢

よしともに散身は花の山風　　　一巴

霞とも白道苦なし不動心　　　司夕

なきあとを幾日に問や呼子鳥　　　議螢

此中の櫻むにする嵐哉　　　細吟

世の哀日の櫻香の山の散り　　　翼珍

春の雪消て一字不明の雫かな　　　某

また爰にも

花散不レ還人死塋　秩滿評判呼二其名一　　　紅喰
市川流去有レ何處　轉變堪レ看觀二覺榮一

およばずながらそれ、是どれあれ見るうちに、右の詩歌取交て、覺ぬ我も年もいまだ經ねども腰折歌を曲なりに

思ひきやひゞきも高き市川の

流の早くたへぬべきとは

と三十一字を、ならべて、立あがりて見れば、永棄じ致けるにや、日も丸山の五重の塔の、影にかたむく、本堂の入達は、地の底からしんぞうめき渡る程に、驚て立出宿に歸りぬ、光陰矢のごとし、羊の歩ひゑの駒、つなかぬ日員重りて程なふ上巳の祝儀取行頃に成ければ、家ごとに雛立ならべ、蛤吸物あさつき膾にて、桃のさけ祝ふ、氣儘に妹のが果ゑてふほどの、貧家にても内儀の張箱の底をはたきの草の餅、おも白酒など燗鍋に買取て、子供の心をいさむ、ましてや莘兼ざる娘の親は、乳母にひそうをいだかせ、芝邊の葷

は神明前の店、節句も頓ておわり町へも行て、高々金銀の費をいとわず、買取て、歸る族多き事なり、扨々子故には欲をも忘、斯事もしつべきものなれ、子を持ざる奴の無下に思ひ謗は、ひが事なりとひとりうなづき、表を見れば品川浦の鹽干とて、諸人袖を連治る御代の殿作り、二階三階四海なみ靜に、天地くれを動さず、やたけ心の武士の弓は袋に、刀に伽羅の皮づめ、ぐそく櫃には錠をおろす、好時代に生相て、白米をも洗せて喰、黒小袖のよわきをもいとわず、著こなすは皆是君のごとく厚にきすと、舌打ならしうつむき居たれば、門に物もふと言聲しぬ、誰成らんと見やれば、古しへ春は花の根にて連俳せし人よ、秋は月のまへにて交好で新酒をのみたりし朋友成が、二年も見へざる人の來られ、倩珍敷事や、命あれば海月も骨に逢とかや、是々と座敷へ請じ、心のおよぶほどもてなしぬ、それより何角四方山の咄終ば、一樂申されけるは、けふ參事よのぎにあらず、それがし今生に有ながら、六道四生地獄の有さま殘らず、一見致、久敷の友頃日みまかられたる人々に深相なれ候へば、其射得のために、俗名戒名をしるし、明日高野山へ罷登り候、貴公にも心ざしふかききうゆうのよしみ、また越べきも知られぬ命、飛鳥川の常ならぬ世の中なれば、今生の名殘りを惜ために來りたりと申されければ、是は不思議の事を承者かな、善知識ならではなきやうに聞およびたり、いかゞして一樂には六道四生の有さま御らんあそばされしやと申ければ、其時一樂きせるの吸口がらりと打すて、膝立なをし扇子追取說法のごとく、疊に煤拂のやうに火焔を立て足引の、山鳥の尾のながき日に、猿猴の手をのべたるやうな長物語をぞ初られける

湯　迷ばかすむ六道の辻

そもく此一樂と申は、源は四面のさわがしきに立て、渡世を業然といへども、常に靜なる事を好、一寺の閑居而已心がけ、四十歲に不足頃身退て、世のはかなき事を悟、一跡を手代仁兵衛に讓、其身は武藏の國にして、かたくならずかたよらざる中野とかやに、居住して一樂と名を改、山笑ふ春の野にひばり囀り、雉子鳴殘の雁の求食頃、かわづの聲を便りに、孤燈の下に書を開て、見ぬよの人を友として、あかしくらされけるが、此ごろ世間のありさまを見るに、玉

の盃の底へぬけて、代は皆醉り、予孤つく〴〵物を案ずるに、吉田の隱士が、つれ〴〵の筆にまかせし、言葉にも鴨の祭に、小法師が大樹の枝に、眠るを愚かと人の笑しに、我身にもおやまりあり、生死の至來、いまにもあらんに、かくゆうきやうの見物は、油斷成と書たり、唯兎に角に、樂を餘所に見なせる、かつらぎの峯の白ゆき身にふりて、つもる老木の予なれば、若木の枝に交て、花見に行もおとなげなし、または鹽干は殺生なり、夢の浮世を春とても、長閑に思ふは愚かぞと、持佛堂に閉籠、座禪衾を引かぶり、浮世の無常を觀じつゝ、むねんむそうに成ければ、夢ともなく幻ともなふ、廣き野原に出にけり、いづちともなく歩み行ば、娑婆にてなじまぬ大川有、扨はしにても有るやとて川の上下見渡せども、渡べきはしもなし、みぎわに小船一そう浮めり、見れば渡もりもなく、定てあまの捨舟ならんと、ちいさき舟なれば手づからさほざしてをし出す、川の中ばにて、上のかたを見ればかざりたてたる舟の有り、指寄是をながむれば、觀音勢至二十五ぼさつなみ居給ひて、狂言きぎよの遊覽、娑婆にては三股、あの代此代國さかひ成る、兩國橋の花火

見る、夕すゞみかと思ふに、是なんぐせいの舟にてぞあるらめと、いととうとくおもいながら、乘たる小船を押ほどに、彼岸に著にけり、それより陸に上り、二端ばかり歩み行ば、道のちまた六筋に別、其まん中に自身番か中番か抔のごとくなるちいさき小屋有、立より見れば、破菅笠など著たる、月行持打見へて、金棒持たる御僧六人有り、一樂かのそうに問けるは、極樂へはどう〳〵參と申されければ、御僧申されけるは、されば六筋のちまたは、六根表して六つの道、汝が心に尋て、行度かたへ行べしと、おふせられければ、一樂兩眼のふさぎ心に觀念し、迷が故に六つの道、まよわざる則ば、たゞ一筋ならんと、うなづき眼を開て歩に、道筋一つ成橋の欄杆より下を見れば、紅の水みなぎり落流是社、血の池より、餘て落川にてぞ有けらし、あらおそろしやと哀に念佛申行ば、まちの中程に、やねの上に大きなる看板あり、打あをのきて讀は、冠前句付と見へて、古今の秘事の三夕宿と書れたり、さてはうたがいあらじの、しやばにての俳友なれば、嬉しくて直に案内こへば、うちよりもびんが玉子に聲立しごとく、三夕よろこび座敷の障子をあく

るをおそしと一樂が手を取り、互に是は〳〵と計りにて、跡に聲なふ奥へともない、色々のもてなし咄に成けり

第三　誹諧の花に契りを二世かけて

朋友は信を以て交、三夕一樂二世迄の緣深き事三途も及ず、何のかの茶話過て、一樂申されけるは、何と冥途にてもはいかいや繁昌かと問ければ、三夕答て、それがしみまかりし頃まではさもなかりしが、頃日地獄の衰微立なをりし故、いかんとなればしやばに後生願多がなす所なり、尤年毎に開帳の功德故、ぢごくの鋏札朽て、淨玻璃の鏡くもり、誰有てとぐ人もなく、鬼達も金棒を盜出し、賣代かへし故に、ゑん王よりたゝり有て、血の池へどつと奥の嶋ものと成しも有り、虎の皮のふんどし質に置しよりせんき町々にて、質屋の惣札取あげられしも有よつて、鬼ども露命つなぐべきやうなきが故なれば、あみだより黄金のはだへ、澤山に拜借しける、好時節には吹付るやうなる事、皆世間のならわし、爰に荒井の閻魔は、しやばにて其身燒づり乍ら、火宅を出來られしに、大王殊外悅給ひて、荒井の閻魔を世に立て、其御身は死手の山の奥に草庵のむすび、白樂法王と名を替、行なひすましおわします、扨また荒井の閻魔樣高座を請取評談これ有、何角に付て鬼どもゝ身代を皆々なをし、拜借の黄金にて金棒虎の皮のふんどしなどの質物請かへし、嬉涙こぼすによつて、鬼の目にも涙とは申なるらん、新王の判談に、鬼どもを召れ、ぢごくの罪人これなきやう子問せらるれば、ごくそつどもまたは九望人何れも一同に申あげられしは、罪人とも今まで住なれし所々にて、もろ〳〵のさいなんに逢、こと〴〵く所々にて、生ながらさきへとりこして來る罪人なれば、つみなすべきやうも是なくと、答申せば、責べき罪人なければ、鬼衆達隙明て、數年骨折どき至りて、休みにぞ定し所に、また〳〵あみだ如來の方より、觀音菩薩を御つかいにて、おふせ下されやうは、此度のみしな、罪人つみをまへに請し故、つみなしとはいへども、女順禮多くして、十二大から蓮花に人事なれば、蓮臺ふさがりたり、今度ぢごく〳〵のよき地を新極らくにしつらい、指置鬼どもの苛責を止よとありければ、新王悅佛勅そのい奉と、御受申あげられければ、觀音は白雲に打乘て、西のそらへかへられける、いよ〳〵

鬼達隙明ければ、いざ打寄、おもい〳〵の慰事あるみぎりなれば、宜敷時分と互にうなづきて、冠付を出しぬ、殊外はやりて、今程は一蓮の十万億西方にあまりて是あると、咄もはてぬに一鬼切紙持參しぬ、さんせきひらき見れは

以手紙申入候今晩六道之辻地藏菩薩新王申請候につき貴殿を宗匠に願度候あいだ御出可被下候則發句脇第三迄致出來候惡所有之候は加筆いたされ可被下候必々御出待入候也

三夕返事

卽答におそれながら穢土より客來得候是も誹友に御座候間此仁をともなひ追付伺公可仕候間左樣御心得可被成候已上

それより一樂同道にて葬頭川さしてぞまいられける

忠信物語卷二終

市川正德追善曾我三之巻

發句　入逢に三夕來や花の友

俗の世話にも逸物の猫は出家もかわひがり、はやる上郎は親方の白鼠、一げいに名あるものはあげられずと言事なし、娑婆に名にあふ三夕冥途宗匠とよばはれ時得顔成出立かな、十德のゑりを揑でさつと著、右手印籠巾著ゆうせん扇子、指まゝに、一樂をともなひ、三途川へ參られ、案內をこひければ、姥樣はよろこび給ひて、何も奥へ請じ、大王二十五菩薩、ぢぞうぼさつも、御列座にて、三途川の珍物ぢごくどの菓子を調、新王をもてなし給ふ、其時新王おふせけるは、九聖人文臺に向執筆いたさるべし、穢土の客來もし三夕も遠慮有ては、おもしろからず、出がちに句付られ候得と、打とけおふせられける、まことにたつとからずして、高位に交は歌の折の、只とくとかや

王ませば地獄も花の都かな　　御
みつ瀨の川にいさむ若鮎　　地藏
修羅の太鼓聞も長閑に道の記に　　姥
劔の山は娑婆のふじ山　　三夕
淨玻璃の鏡に見立月のてい　　一樂
紅葉を疊む血の池の波　　筆

表六句も終ければ、大ぐれん氷こんにやくの、にしめものなどにて、盃など出ける所に、幽に太皷の音しければ、いつもの修羅の、太皷柏子とは違ふたりと、銘銘外面へ立出ぬとし給ふに、太皷近よるに隨て、一樂三夕耳なれし娑婆のふれ太皷に、高々と呼聲を聞ば、市川團十郞坂東又太郞兩人の新芝居、さいの河原に於て、大狂言明日よりつかまつり候と、ふれながす、新王申されけるは、その市川とやらんは、我娑婆の淺草へ出し頃、さかい町のあら事上手な、役者と聞つるがと、仰有ければいちらく申けるは、なるほどその團十郞にて御ざ候、近きころこゝもとへみまかり候に付、新芝居取立、申にこそ候らめと、こたへければ、その時三夕、貴おうおふせられ候ごとく、しやばにて名取の藝者にて御ざ候間、明日そう／＼、御一覽しかるべしと、申あげければ是はゆゝしき、見ぶつなれば、そう／＼まいりぬ、さひの河原の事なれば、さじきは、ぢぞうぼさつを御出し是有るべし、辨當破籠は、

姥どの丶御もてなしに、預かるべし、諸事世話なが
ら、言事これなきやうに、十王十體勤らるべしと、其
座は過ぬ

脇　地藏の袖につれて舞蝶

扨またさいの川原には、ひだのたくみと、たけだの番
匠かりもやうをし、一百三十六間四面にちぎやうをき
づく、さいのかはらの川口より、地ぎやう土をば血池
の、上下の女中、もつかうで、さしもちにするもあり、
極らくじんの隱居は、蓮臺にてはこぶも有り、餓鬼ど
もははすの葉笠にて、一荷六道錢にて、是を運ぶ、さ
いのかわらの子供は、また小石を拾て、つちにまぜ古
錫杖の柄を持て、千本づきに出るもあり、とうば五輪
石佛に、素麪の繩をつけ、三十六地ぞうはあまくだら
せ給ひつ丶、どうづき木やりの其聲は、朝もなんば日
もなんば南無しよきらいちやときとゑい、ゑいや／＼
あみだ樣、ゑいいくとう音にはやし給ふ、さればいそ
ぎのふしんなれば、夜に入時はきりこ折かけ、高どう
ろ、丸てうちんの數々は、只まんどうのごとくなり、
舞臺のはしらや構の板、その外丸太材木に至まで、死
手の山路の奥よりも、畜生道の牛馬に、さいりやうな
しに付て來る、或は十二因緣の大八に、御用の小ばた
さしつらね、またはぐせいの船につむ、千石船の入こ
んだ、万石船のみなと入、三升もいらず見ではかる、
釘金物はかぢやの地獄三藏が、そのほんやくの因果
經、通に付て取つかふ、ぜんつくし美盡して、きやう
は罪障吉日とて、舞臺の棟揚、とうしみにてほりたり
ける竹の弓、はやぬのを引はり、おがらのかりゑた、
矢をはげて、せがきの色紙幡さいはいけそくやたら
ひに、四十九の餅を、山より高く盛揚て、血池諸白は
や桶に、なみとくみ入て、棟梁の鬼は、虎の革の上下
著して、西方に打むかい、あいづち三度打ならし、六
道錢に白餅を追取交て、東西南北鬼神の上へ、雨あら
れとなげちらせば、餓鬼がひろへばくわゑんとなる、
さいの河原の子供ども、鬼の孫子につきたをされ、な
くよりほかの事はなし、地藏菩薩は御らんじて、ひろ
いゑざる子どもには、極らく淨土のもりもの餅を取
寄て、菅笠にて下し給ふ、さてまたぶたいの場面、生
靈ござをしきならべ、はやぬの丶四方大まくうちは
りて、二十五の菩薩の客來には、はすの葉にこわめし
盛、もみ大根の汁のみに、ひうのあひもの干瓜や、な

すびの香物、御くわしには、割(きざみ)なすびに焼米入、かんなべには、またみそはぎを結付て、水向酒もりてうじつゝ、銘々そのやく／＼の鳴物をしらべさせ給へば、地藏菩薩は錫杖追とりたちあがり、さかなに舞をぞなされける、そのかみしやか太子御説法の折節、かたじけなくも如來のこがねの御手を指のべ、地藏坊がつむりをば、せんざいなれや、せんざいと三度まで、さすりて今より後の衆生を、地藏にあづけおくなりと、おふせを罷かうむれば、此度慈悲の心にて、此新芝居取立て、一さい衆生の罪人を、うかめなぐさめうれしさに、五斗かわらけにだぶ／＼と、一つたべ二つたべ、縁日にまかせて廿四盃のむだれば、こうじの花が目にあがり、右のかたへはよろ／＼、左の方へはよろ／＼、よろり／＼と、よろめき悦ぶ地藏が棟あげの、いわひをいわふたを見さいなと、舞治(まひおさめ)給へば、亡者の役者餓鬼菩薩たちに至るまて、三世不可德の、御取なり、拍子聞の、御肴と、ざゝんざしばしやまざりける、千秋万歳さいの河原に住む龜、劔の山のひな鶴の、巣を喰つるゝ、松が枝の政木の葛(かづら)、長居はおそれ、有るとて菩薩は此雲に打乘り給へば、餓鬼ともははすの葉笠ひつかふて住家／＼へかへられける

第三　若鮎の吸物鬼の丸喰に

それ娑婆も地獄も、世は似たる事、新王仰けるやうは、義理とふどしはせねばならぬとの世話の有なれは、太儀ながら我等方より團十郎かたへのはなには

一　源平両家之太刀　十フリ
一　無間の金　百枚
一　血之池諸白　壹樽

右之通つかわすべくと仰られ、兎や角と言中に明がたに成ぬ、直にさいの川原へ一たにどう／＼しかるべしと、御出なされ、道すがらの貢物、數多く相見へける品々に

一三瀬川流の五文取四十九之餅　有り
一血之池之上諸白　有り
一三瀬川之鮒鮎の鮓　御酒之肴色々
一とうしみにて掘し竹の子のあへものあり
一なむあみ豆腐のでんがく　有り
一木魚之たゝき
一うなぎのかはやき　有り
一六道錢盛のそうめん

賽の川原屋

右之通御望次第早速仕候　隱居地藏坊

此青板の底をさしのぞきて見れば、鬼ども無間の大釜、とうくわつの火を燒立て、顏をまつかいにして、鬼が味噌するやせ鬼が

一はすの葉のかしあみがさ　　色々

一邪けんどん新そばなら茶　　有り

一魚類御料理御のぞみ次第

一うゐらうもち
一さんせうもち
賽之川原二條通角

一地獄土御菓子所
一ぎうひあめ
一あさぢあめ
冥途屋鬼助

扨また芝居の其搆、事もおろかや娑婆にては一世いちだい、四座の能にもまさるべし、三界無庵のきんしきをあげ、一枚かんばんには、万日惣廻向の大そとば、しゆ羅の太鼓をやぐらあげて、餓鬼どもにおからのむちにて、うたせらるゝ、既に三番そう初まりければ、新王地藏三夕、一樂ともに銘々、大夫さんじきへあがられつゝ、右のはな抔出したもふと、がくやより進物持參して、一禮拜申あげ入ぬ、かくて狂言初まりぬれば、東のかたの引幕のうちより團十郎又太郎、花井才三郎、猿若三左衞門、その役々勤に出る、また西のかたより、伊藤小太夫玉川千之丞荻野澤之丞、岸田小才治とうけには、してゝん孫太郎坂東又九郎、生嶋半六なかむらかん三郎、森田勘彌交に出揃、淨瑠璃大夫はとらや永閑、説經大夫には天滿八太夫、長歌源右衞門その外、三味線はやし方、並居たり、かくて團十郎、一二三となく一文字に大刀を帶、四方の目くばり、五法破り六方七難、卽滅八文字ふつてくゞもり聲にて、大口明十唐は知らず、二世の金平事

團十郎せりふ

娑婆よりも地獄のとをるひと芝居、雨ふらば風にはもろき白露の、身はうき草をさそふ水のなあらぬ事のかいさんさんごく市川初きやうげんの顏見世、あかいはめいぶつあほうらせつにものかぬ中、鬼のむすこに山姥が孫、朝敵や扨はいろある所の鶴を見付て、金平六道がよい、血の池にぬれにぞぬれし腰より下はあかいがすぎて、色にそまぬは是さない、さんぜ諸佛いんにの色、いわずと御ぞんじからだせんの地藏も、錫杖を質に置て忍び菅笠此里の鬼樣も、節分の夜娑婆のいろ毎に、ひらぎおほそのかしらのそのかげ

の、偖わけいやとは言れまい、鬼様の目にもなみだほつろいは色のわけ和つちが朋輩(ほうはい)は石の吸物よりも堅屋の竹綱も色には同氣もとむる燈心で竹の根掘とぬれの沙汰名はひとりむしや二人寢の枕も聞よ夜こそねられね、とつぶやくいろさだかげ事ではござりませぬ、契る中行(なかゆく)すへ竹と名がつきや紫竹(しちく)もいとしまして、四道四生の流の色、竹に首竹はまつて、ぢごくの太皷質に置て、とうくわつぢごくの どらうつこんてるまとほゝつんでるこんだ

追善曾我三之卷終

市川正徳追善曾我四之巻

發句　世の夜見せ地獄も花よ晝の色

過去現在未來三世の色事には、忍ぶにあかぬふかあみがさ、ともをもつれずひとりむしや、よせいにつくや細しちく、竹綱すぐな末宗も、曲道筋かよひ來て、ふすませうじや、びやうぶのさだかげで、諸らちがないとうたいのゝしり、四天王其外地獄の色男、とんとはまつた血の池の、下にこがるゝどろ町の、にごりてしまぬどうてつが、爰でも土手の歌念佛、地獄の惡所と言ながら、娑婆の名をかる吉原と、その名は地獄にあげや町、ほう八町にかこいをなし、三つば四つばは礎、百千万億また屋形を立のきば、ひよくのはをならべ、あまたの女郎かこひ置、浮世の人をなぐさむる、いか成かうしのつめのはし亦しやくそんの孫弟子も、うわきの友にさそわれて、一度通輩は、ながくさんやに氣を引れ、車のしじに通わる、四書や五經や文選も、易なき事と打捨て、古文をやめて眞實に好色の道に入、庭鳥初てなく頃より、湯あらへ口すゝぎかみけづり、びんをなでほうをなで、父母の前をばいつわりの、その數々をつくしつゝ、屋敷の内を忍び出、くまかへ笠にて顔かくし、小六にあらぬ竹のつゑ、白むくきむく淺黄むく、黒縮緬にもみの裏、はつばの大小七所、あみだやすりのてつじんは、寺小性とや人言わん、扱御供の太鼓衆は、おで入のとり賣なばばやりのやふくすし、浮氣の風をつよく引、ひやうきんの無理に落て、いけんの脉もきれければ、やくたいなしの樂箱、蜘のいとにからげさせ、我金銀のつきぬれば、人のおひげの塵とりて、扱今日の御首尾は、てんとひやくらい日本へ、ほくしうの千年も、命おわれは夢ぞかし、一日の樂は萬日の榮花ぞと、千里もかけるとらやが船、松ち山を吹おろす、浮氣の風にとんてきの、ほうあげたればば程もなく、土手の入江に著にけり、船より上り詠ばに、互に忍ぶしの笠、面計はつゝめども、姿は人目にあまるらん、子にふしとらの朝がへり、土手のほそ道右は田のあぜ、あぶないがてんじや、あぶのふてならぬとうたいつゞけて、行も歸るも是や此の、互につくるゑもんざか、知るも知らぬも大門口、是ぞ誠に好色の、とくに入の門なり、諸人欠落

をする身代をつぶすべきもの、みな此邊にてそんするによれりと口ずさみつゝ、すぐに上やへ著のれんのかゝげうちに入る、女房立出ひさしぶりにての御出、先日の御首尾はいかにといふ、過し頃の首尾はさんざんであつた、内のひいらきにつゝかれて、めいわくをしもうした、これのひげはまめるとて、すぐに座敷になをる、てい主立出色々にもてなし、すぐに大小をもぎとらるゝ、あほうばらいのずいそうとは、後にぞ思ひしられたり、それよりも女郎の方へ、つかいを立つるやゝあつて彼まれものやりてかぶろに、そへの御ともにて、ごらいかう有ければ、彼客人九品淨性に生れたる心ちして、悦の眉をひらく、此女郎のおん姿、日々新にして亦珍しき心ちぞすれど、つみもむくいもかんどうも、忘れはてゝ面白や、其時太夫盃をとりあげ、たぶ〳〵と引うけ、すこしすふてざつぷとあけ、ひさしぶりにてござんすと、大人の方へさす、貴人高人より、下さるゝ盃よりもありがたく、謹而(つゝしんで)ちやうだいし、引うけさし請のむほどに、くだをまき繪の大盃、いけぬくせつも初(はじまれ)ば、上やがかゝは罷出、いかやうに入くんだくせつの埒も、私が腰のかぎにてあげますと、出來口上の高笑、そばより大皷にはやされて、女郎も、三味線の糸も、たへなる聲をあげ、どうした事の縁じややら、忘るゝひまもないわいと、はやり小歌をうたひつゝ、其時客のみこゝろは、がもうよりもかろく、とんでひやうきんとぞなられける、法師は衣を屏風に懸、武士は袴をぬぎすてゝ、えのあたり成るぶれいかう、すいきやうのあまりには、やりてぎうを召出し、さす盃には肴をはさみ、治る手には花をにぎらせ、千秋樂には遊女をやしなひ、萬歳らくには鼻げをのばす、老風の二丁立、さつさの聲を樂、やつさの聲ぞたのしむ

　脇　高東風さまさす化夢の春

されば三世の人心、死に変ればあかき成顔、はちわうじの炭やきは、黒くなる誠なるかな、色にそみてはあほうと成る、藥師もともに舟ゆすり、ぐせいの二町立、いかな新狂言ききよの、たわぶれおもしろいとは神の出來口と、佛も薩たも同音に、歓喜涌やくの頭(あたま)をたゝき、南無阿字〳〵とのゝしりて、一蓮宅生のさんじき、ゑんざよりすべりこけ落て、悦ぶ折節、俄に修羅の方より、大皷せめつゞみ、時の鐘をつく、北のさ

んじき打たあみ、あれはあれはと言うちに、三階にかけたる、棧舗の見物のうへたをれかゝる、新玉ぢぞう姥様も、ともにあわてふためきて、はしごよりころびおちながら、やどや〳〵へかへり給ふ、三夕も一樂も漸々に外へほふくして出ると思へば、夢はさめて、寢屋の莚、座禪ふすまの下に、もくねんと一樂は夢さめて、たゞぼうぜんと聞つる、役者の聲は、坪の内なる袖摺の松の音、舞臺さんじきと見へしは、持佛堂の繪像木像ふしぎなり、はかりがたしや、能々ものをあんずるに、是皆浮世は夢なりと、さとりぬ、さるによつて、冥途にて逢なれたる、人の戒名俗名過去帳にかきあつめて、高野山へ登り候也と語ければ、夜はほのぼの明渡る、鴉鳴て月は入る、殘こんの雪庭の枯木も白妙也、何事も妙なり〳〵とて、立出ぬ、我も鈴の森まで送らんと申されければ、それがし團十郎と一所に成田不動を、常に信心致候へば、此度夢の中の世の中なれば、道中にてみまかり申べくもしれ申さず候間、目黒不動へ參詣致、それより山傳に品川へ出候得て、登り申べくとの心がけにて候と申され候間、其時ていまも春の名殘りに、御同道いたしせめては、戻りに高野屋鋪成とも見物致申さん間、まづ〳〵ふどうへ御ともせん、それ〳〵とてやき飯など、わりごやう子わらべにたづさへさせ、もろともに出られける

第三　目黒道なすびの二葉詠らん　愛宕より目黒道行浄瑠璃也

頃しも春のそらなれば、霞の關を跡になし、愛宕の山の朝まだき、高き御顔をふし拜、變ぢやじき屋形町、道知る人は存ぐゞめとなる天德寺、知るも知らぬももろともに、皆身のための神もふで、東からして西の久保、長關にめぐる春の日に、ながなが敷も出ほうだい、口にまかせていゝぐら町、獨つぶやく言葉は、物がついたかいなりの宮、何れ願ひをかけ的場、雅上の水の底清く、流れ絶せぬ新堀の、橋のうへより詠ば、人の心は丸山の、五重の塔は美つくせり、右手は麻布一本松、めてはあらたの門前に、民のかまどは賑わひて、誰松もとの町とかや、遠くも來ぬるか四國町、はじめて三田の春日山、ならの都の八重ざくら、さかりさかんの江戸ざくら、うれしき御代のひじりさか、萬代かけてかめづかの、かしらに授て女意寶珠光を運ぶ寺の塲、春めきながらさいかいじ、つねのともしび明らけき、月のみさきをながむれば、のぼりくだりの

ほかけぶね、海士の仕業のつり小船、波にたゝよふその風情、どうともかうともいさら子の、魚籃の南むや觀世音、りしやうあまたのそのかずを、ゆびをれむすび員をれ葉ひとふた三つや四つ五つ六まる殿の御長屋、前は海水漫々と、萬里波濤に打つゞき、晋高輪の眺望は、天竺れんだん三國一、二本榎のふしんいみ、彼術法師の御ゑひ堂、諸事世話ながら疑ひの、心の濁り猿町や、名を聞もいや地獄谷、おりて田のもの纏しろの、水にあされる鷺の森、雷電の宮あれとかや、氷川の鎮守これもまた、本地は小六ついた竹の、杖を便りに日吉坂、のぼり〳〵て白金の、うてなに座せんずいしやう寺、けんせう成佛ちきしゐん今はむかしのあとふりて、此世をはよふゑんり穢土、ごんぐ増上寺の下屋しき、むぢやうのけぶり横をれて、よそのあわれに袖ぬれて、南無めうゑんじ八軸の、法花めうしや福知まん、岩屋のせんじゆ觀世音、子やす八まんなにし逢、子をおもふかやきじのみや、元三だいしの道しるべ、心のうちにねんじつゝ、よきときしもにあふさきむら、ながみねといへど、みじかき六間茶屋、しづかしわざの世わたりの、阿部川流の五文どり、御家のごきとう、それごきとう、行人ざかの常ねんぶつ、かねの聲そへて橋本の、茶屋のよび聲たへまなく、田もに殘る雁の文字、ついて思閑しく狂歌仙

　九品佛の道祉あなれ思ひ入る

　　身の奥[一字不明]も鹿そなく成る

紅葉の茶屋、蜀のゑせいのたのしみの、夢をさませしあわもちや、木毎に花の呉服もち、いづれねがいは色ふかき、きみにいつかはおふとりの、みやいはことにかけまくも、りしやうあらたといふだすき、けんどん茶屋のもてなしに、さけのさかなか蛸藥師、かけし繪馬はとり〳〵に、鶏や小がらや四十から、つくね人きやう六尺の、水打花やかけねなし、僞商賣あらとうと、頭北面西ねはん像、安養院の念珠のつぶ、くりから不動瀧前の、川口ちかき下部奴のみやげの飴、治る御代はあら金の、土の車のわれらまで、あゆまでめぐる百番の、觀世音のふし拜み、幽に笛の聞ゆるは、彼ほろ〳〵の風呂といふ、尺八ふくとの縁ならめと、口すゝぎして一休、腰かけ松にそ著にけり

追善曾我四巻終

寶永忠信物語巻五

發句　山笑ふ大黒てんや呉服餅

唐土の虎は皮を殘す、和國の熊は胃を殘す、團十郎は三升の紋を、繪馬に殘して名をさゝむ、御前を立てうしろ當、諸佛菩薩は後の世の、まよひを願ふ道心者、かくやつこめの印の堂、爰ぞうき世の品ものを、見もらさじとは色のよく、深くふかいぞ三面の、大黒天の女坂、おりて向ふの山のうち、さみのしゃらの糸による、ものならなくに小びくにの、小歌さいもんしやれ聲色、聲おかしくて拍子とり、うたいかむたいか尻つゞみ、松の枝には孔雀鳳凰、四季折々のそめ小袖、やゝみはあやなし、梅の立木の朧染、霞たな引そら色に、きゞすなく蝶足引の、山は淺黄に東風吹て、花色薫るや春過て、夏來にけらし白むくや、卯の花垣根ほとゝぎす、しげり此まの夕立に、秋こそかよへ水色に、月のかけかも石餡や、桔梗かるかや われもかう、錦かさ見るもみうらに、冬は時雨のぼろ〳〵こぼり、はん女が寝屋の戸、あふぎながしに水ぐるま、あみの手菊水八丈嶋、羽織ましりの當座幕、うちより匂ふ伽羅の香に、あらそい立々酒の間、さいたおさいたざざんざこ、濱松山の夕景は、心言葉もおよばれずと、詠やればいつさなふ、首の骨かいだるさに、連誹の浮世法師が發句、おもひやられたりと、つれの清兵衛に打むかい、もだへのちくと計の樂を、ひらき給へと言ければ、あたり成茶屋に寄て、酒なんどのみながら、一樂やたて取出し、茶屋の柱に一首

立別れ登る雲井はへだつとも
　月の目黒にまたもかへらむ

その言葉のかわかざるうちにつれの清兵衛も

あきらけき月の都のまた爰に
　めぐり〳〵て歸れまつ山

脇　田がへす男鍬で案内

かくて一樂に高野山への心ざしなれば、山また山を直道に、品川さして出こそ、一歩よりして千里まで、行かんものかわ世の中の、竹の林にはなけれども、さらやが前を打過て、旅の出立のきつきやうや、のむ盃の猩々舞、つぼやの庭の裏ざしき、入來る客はにぎあひて、伊勢屋日向の物語、よさく丹波屋馬追の、咄に知

るゝや德藏寺、内神佛の觀世音、いま此里にぢげんして、所のためのあんらく寺、花有は則入て、小ぞうに花の名を聞ば、あみだの御手の糸ざくら、名木成と答ければ、その時一樂

花の雪見よからかさの糸櫻

またつれの清兵衛も

歸るさのもすそをつなく糸櫻

とつぶやきながら、きせるくわへて行道の、案内しらねばそこはかと、野七里山里、田がへす男の袖引て、爰をは何と言なると、とへば男は聲高に、べい〳〵言葉のつかふどに、我知り顏の言やうは、爰はそなたにあふさきむら、あれに見へしは大佛、下高輪や二本榎、こずへをつとふ猿町や、こなたに見へしはうつわに口の、元三大師、うへのほこらは雉の宮、やうすは茶屋におたづにやれと、霞ともに見へざりける、敎にまかせ兩人は、茶屋がさしきに揚つゝ、男はくちをやき豆腐、酒など呑てそれよりも、きじの宮居の由來聞ければ、茶屋の隱居と打見へて、米の守を出す頃、過し親仁か珠數操、緣起とても是あらず、われらわきあけ後ひぼの頃ならん、其節の風聞位も高く威もつよく、天下をしろしめすほどの、その御方の鷹狩に、御こぶしにかけられしに、きゞす此のみやに逃込ば、御鷹はそれて飛さりぬ、里もい人々は狩出さんと立よれば、そのきじ狩出べからず、定てきじの宮ならんと、御言葉もはてざるに、また鷹は御こぶしにたちかへる、それよりも此里のわらべのよびし名を、今に言傳て雉子のみやと申ならりと、言ければ、清兵衛貫さしのくちをとかんと手をつくれば、一樂清兵衛に打むかい、やみなん〳〵とくべからず、此ほうより拂べしと申されければ、清兵衛うそばかりと言てざしきを立ば、一樂みけん眞實に四十四文豆腐さけのわけ立て出ぬ

第二　舞遊ぶ蝶屋の座敷一樂に

一樂清兵衛兩人茶屋を立出て、雉子の宮へ詣て信心にかしわでなど打て拜み奉りて、神前の出、諸方見はらしちいさけれども、景よき山かなと一つ二つ言うちに、いちらくさいせん少し紙に包て

此度はぬさもとりあへずたちながら

もみ手のさいせん紙のまに〳〵

と言ながら、品川の出口の山のそば、細道をつとふて

行に、清兵衛も精出してあゆむ、清兵衛我が袖さ言ければ、いちらく追付はゞき帶にて、ごてん山のこし、めぐり〳〵のぼり〳〵て、つい品川くちへいづれば、はれ〴〵さして面白や、爰にも茶屋多く、のふれん家名の印有さ言ば、いちらくれいの口拍子、まかせて、春は先咲花屋の庭、木陰に蝶屋遊らん、知る人有て、一樂が袖をひかゆれば、さすがうわきにあらざれど、心よわくも立よりて、座敷へ通り座を組ば、三五よりしもまだあかひ、盃臺に小盃二千里響く手を打ば、子どもの手毎に持出る、肴なに〳〵ゑびごしに、なりしさしまのざぜん豆、さされば玉子の輪切形、己が衣の角のくわら、かまぼこ本來朽木さて、喰てつけさし何盃も、のむおんしゆかい、やぶれかみ子の袂より、朝倉山升取出し、人目忍びてつみけるが、むせてぎく〳〵言ながら、目を白黑さして見まわして、つれの清兵衛がはげあたまにかぶりつく、あね女郎も新造も、是はいかにさ立さわぐ、それよりてう水を目にかけて、ゑんがわにはしり出、ひしやくにて水をいゐ、ぬからぬ顏のあし拍子、御家の御きさうそれ御きさう、夕べも貳朱判はりこんで、それではだか

のだいまいり、いかいたわけの三年忌さ、ざうけ交の大さわぎ、かしこを見れば角かづら、つくり髭なざかけて有り、さいわい也さはづし取り、家來の門助呼出し、一樂女郎へ御ちそうに、此道具にて市川が五郎の眞似をさ皆一同に所望あれば、ぢたいはすきなり御意はよし、それよりかづら引かぶり、おめずおくせず罷出「その時朝比奈ずんご立、相の障子をさつさ明け、扨こそ〳〵貧乏あふれの荒五郎、さかおもたかの大よろい、五尺八寸候へける、我まゝづくりの大刀を團十風にこねまわし、たべぬ料理の高楊枝、そらうそ吹て立たりしは、持あつかふたる客來なり、其時朝比奈ぎよつさして、心よわくてかのふまじ、なんでもきやつめはぢやくはい者、そゝりこがしにもてなして、小歌ぶしにてやつてくりよ、なんぼかくいても五郎殿は知る、心こみじこでざつこいそつこい、長刀、面はあかふ聲高なり、ざこの田舍の御若衆ぞ、ひらに一座を賴むにさ、じやきやうになして引出す、時宗につかりさもせず、や、たあ〳〵びやくゑに候、御免あれ、いかさまきやつめはなにしおふ、大力さうけたまわる、ついでに力をためさんさ、する〳〵さ はしり

寄、くさづり三枚かいつかむで、ゑいやつと引ども、ちつともさらにはたらかず、箱根別當はとりちき、あけし下本は百六つ、小うたい合て十六番、されども師匠の恩にきず、すつへりかやしてなんにもない、あとに殘るものとては、力こぶに千人力三枚のくさつりの、はや緒かきれて水のむか、ゑんの板をふみぬいて、三里の灸を摺むくか、二つに一つはじやうのものと、びつくともせず立にける、其時朝比奈身姿をかく、胸にはへたる力毛は、ごばんの面に銅の摺針、ならべたごとくなり、扨又五郎はいちつはり、きうちうの藤かづら、松をからんで小からしに、もまれてたつがごとくなり、朝比奈とらの威をふれば、五郎は獅子のいかりをなし、互にゑいやと引力に、三枚の草摺切、そうへばつとぞのきにけりと、勝手をさして迯入けり、是を座しきの興にして、うたいさわげば鳥なく前の鐘のおと、分能頃と角文字戴く男出て、ふすま障子を立てまわす、それから後はゑ申まい、早白雲に成ければ鴉の聲もさらはかと、旅の寒さをしのげさて、手づからわかす名殘酒、子どももてこいてうしやの、さす盃の數そへて、くめどもつきぬ和泉屋の、夏はすゞしきあふぎやの、そてつのかぜの夕まぐれ、君が手にふる團扇やに、おてきごんご、車屋の、秋は菊つた桔梗屋の、つゆの玉屋をふみわけて、くりのいかやをひろうらん、冬は大和屋雪ふりて、みな白妙に篭屋來て、たれを待やら井づゝやの、うへに桐屋の花さきて、千代萬屋の龜の齡に重點を、いくつもかけてかわらじなかわるまいとの、たかいちん／＼ちかいの御手打違ひの御手枕、いや木枕は木毎にて、鷺女郎の雪の肌も春くれば、下紐とけて、流のうき身の末になれかな、目をすり／＼の朝まだき、旅人あまた喰ひちらせるを、洗みかくやたくあんでう、あさのふきんでぜんふく寺、橋のほとりの其みやを、とへばうき世の人心、ゆかみ文字のふたつもじ、神の心はすくなもじ、いたゞきまします午頭天王、或詩に二月中旬、瓜すゝむと是あれば、時節違ふはうぬがまゝ、まくわ瓜はなけれど、さわらばひやしそうめんや、切強飯に大和にも、とうがらし味噌のでんがくや、豆腐串餅やきだんご、うなぎのかばやき、こんにやく、くわねばならぬとは、ばかな吸物、煮賣あへもの いもがしら、何に菊田の賣藥、萬よしなの御ざるとて、知るも知らぬ

もおしなめて、よれのはいれの念頃に、親子のごとくまねく袖、いやといわれずたわむるゝ、よそにも色は有明の、日月のはんせいくもりなく、御影をうつせ水月の、觀世音は是かとよ、むかひはるかに詠れは、あわやかづさや、いづのうら、かすみにつゞく入舟は、ゑんほのきはん爰なれと、ひつじのあゆみひまのこま、いざむかしのすゞの森、八幡宮につきにけり、いちらく心靜にふし拜み、つれの清兵衞に申されしは、是よりもかへられよ、さらば〱と有ければ、清兵衞申やう、せめていつかわ大もりまで送申べしと、鳥ゐを打つれ出ければ、一樂茶屋に腰掛て、茶碗に一盃かうの池、暇乞じやとのみてさす、清兵衞酒をひかへつゝ、申迄はなけれども、うそにあらず本宿泊りしたもふべし、道をば急せ給ふなよ、いそげばまわるものといふ、川々にては錢をおしまず、錢をたいきにはなれやの、神のやしろやほこらあらばぶ禮をなさず、節角無事に豆にても、でかさぬ様に霜文、足にあぶらをぬり給へ、やがて下向をまつの葉のくはせにて候と、でんがく餅を調て、いちらくにもすゝめつつ、古しへ今の物がたり、つきぬ涙をおさへつゝ、別れになればいち樂菅笠を引かぶり、ひら包をせおふて、あゆみ行、清兵衞しばし見送りて、なく〱宿所へ歸りつゝ、只何事も夢のうちの樂なりと、されば經にも、女霽亦女電とかゝれたり、夢の内に怪しくも、此物語を筆にまかす、市川夢の浮はしも、夢の間の言葉なり、狂言きぎよの道すぐに、三佛てうのいんならめと、ふりくらしたる春雨に、反古の裏にそこはかとなく、書あつめたるもしほくさ、

御可笑草の種とも成なん力を思ひかくは
そめまゐらせ候めでたくかしく

寶永二乙酉歳正月吉辰
江戸芝神明前
山田屋三四郎版行

晋子が淡顔の雉子とよまれしは、家祖才牛の遠行をいたむる元祿の昔語也、のち正德六申のとし遠芳忌なれば、ある人追善曾我といふ五部の書を著作せられ、世に梓行成も、其書一三四部は愚が手に入て珍藏せしかども、殘る冊はいづ方にあるとも響も影も所を得ず、尋もとむるうち、石塚豐芥君の文庫に表題は替れど、同じ道のしるべして寶永忠信物語と名づけ、小祥をいためし書一二五之部ひめ在との事、二蝶君の由縁にをしてねがひて是を合せ見るに、誠や百三四十年前のありさま眼のあたりおもひ出て、且は嬉しく又悲しみに數行の泪袂をしぼりぬ、今泥中の玉を得しこゝちなれば、少しも傍をはなるゝ事くるしきを、石塚君の御恵みに板本のかたはゆづり遣すゆへ、氷の下なる魚を寫し取て其書をもどせとの有難き仰をうけ、影はかげ象ちはかたちと分、こゝに譯書をするは牡丹の末葉七代目白猿

かけ法師に祖のかけにあり盆の月

天保九戊戌魂祭る秋

此忠信物語の寫本を四冊、石塚氏へ海老藏が贈りしは、則跋に記せし如く、天保九戊戌年なり、今を去る事四十八年、其頃已に五代目なる鶴屋南北の門に入り、作名を勝諺藏といひ、河原崎座へ見習ひに出し折柄、海老藏の賴みによりて寫せしが、計らず四十八年目にて今見る事の耻しく、顔さへ赤く染るにつけ、思へば平家の直盛といふ狂言の有りし年にして、夫より廿餘年の間古本盛んに行はれ、豐芥文庫の珍書と成しも、浮世に夢の浮線蝶沒後書籍を乞ふ者が彼錄引同様に引張合ふて求られしも、都落の瓦屛此方他へ讓られて年久しく、八島の礒の此處彼所此書暫く漂ひしが、源氏に因みの白紙の間丸楯崎君の黄書となり、己が寫せし故よしを記しくれよとお賴みゆゑ、筆は採れどもせはしき街は年の市川に組入升や海老を售る、華萌ましき十七日、觀世音の御縁日に、以前に替らぬ悪筆兵衛が、五條坂の名にかへて、三疊の間の机に向ひ、傘に時雨の音ならで、ぽつ〳〵書に記すになむ

時明治十八年十二月年の市の日

河竹默阿彌

梅幸集

大宮人は何といふらむ、此んめの噂、それ優伶のこのかみとは、花實のさかんなるに、顯はれ侍るともいかなる歟、此凋年明ぬれば、叔氣其霄の價だに一刻にちらずとは、惜い哉梅香、惜いかな梅幸、外山の霞とたたずらあらなんに、軒端にたくる霄飾も、物悲しげならずや、八文字自笑、その生涯の 伎功を擧筆しあるに、夫に端書せよとぞ乞はるに、比することもおそれみ申ながら、名たゝる信者、又一情の追福ともならむかしとて、

飛梅の跡もやかくそこつもこり

天明よつたつのうるう初春

浪華二斗庵下物述 印

江府 坂東薪水画

梅幸集

追悼

解脱院信士とあらたまる事を

寒梅の飛行かたそ安樂寺　浪華 巾絲

涙しく梅にも雲のたへま哉　泉明

木枯の吹すはちらし冬の梅　心午

逢坂の關や年越え梅に雨　ふらん

梅か香や西へ送れる四極東風　銀獅

○

涙にて氷りしかさね扇かな　雷子

何となく胸にこたふや寒替　其答

悔言は盡せす盡し三冬哉　里虹

誠に三十餘年の師弟の名殘もおしつまりて癸卯のとしの廿九日は

跡とふや西へ師走の一つ鉦　芙雀

はかなさよ經帷子の衣かはり　幸朝

きのふにかはるけふそ翌日よりは何をたよりとも同し事をくりかへし〳〵つゝも

この年を聞悲しさや手向水　小梅幸

梅幸を悼に數句を申出すもくた〳〵しけれと渠か名譽一句に盡すへからす就中秀たることの三つを擧て是を手向とす

寒けに凝たる雲のたえま哉　西宮 青魚

大石か忠も名のみの雪かな　同

かたみには葵下坂とし暮ぬ　同

追悼

梅に來て經よみ鳥の手向かな　花洛 呑獅

なきからを總の煙や夕かすみ　德笙

○

おとかけや名のみのこんの雪佛　心頭

古夜半翁はになく梅幸を愛せられしか物故の後日あらすして又菊五郎もなくなれり

呼かけよ道筋同し年の暮　晉明

○

おしや只名のみ殘して雪の梅　慶子

年浪の流をひたす手向かな　眠獅

文のたよりに言贈られけるを

一枝の梅や手向のおしまつき　東都 文魚

梅か香や見しを記念の後影　心牛

あくる名も西の舞臺や二の替　秀民

なきと聞紙鳶の行衛や西の空　萬輅

西へとて梅の浪花や身の行衛　阿能

來る顔見せは必同座せんと約せしも

まつ甲斐もなき正月のたより哉　三升

線香の匂ひも梅の手向かな　訥子

程隔たる別のいとほいなし

殘る名の梅みるたひやおもひ猶　十町

年玉の殘る扇もかたみ哉　三笑

師の恩の余寒身に染寺參　三朝

積る高恩を振捨て東都に歸往て

雪の山去年の別や目に殘　薪水

追加　さし足らぬ者の外艱にこれるあはれ

さに　香園

こと業に親にはなれてなく聲は

はるともいはすものうしの介

ことしはいかなる年にや有けん、去年の四極廿五日は、年比したしみ交ける蕪村には別れ、悲しみの泪に暮行年も忘がたく、とやかくとあら玉の春をむかへし折から、四日の初たよりに梅幸身まかりぬと告こしぬ、只かりそめのいたはりとのみ聞へしに、永き別とはなりぬ、

梅ちりし浪花たよりや夢の春

と口ずさみて、心ならずも夢人の伏見よりして、舟にうち乘到るに、過し年太宰府の聖廟へ詣てたりし時は、舟を諸ともにせし事など思ひ出られ、いとゞ老の腸もたゆる心地し、猶妻子を見るだに胸ふくれ、きのふは野邊に送りしなどかたり出て、更に袂をしぼりぬ、

終に行年のねがひか酉の空

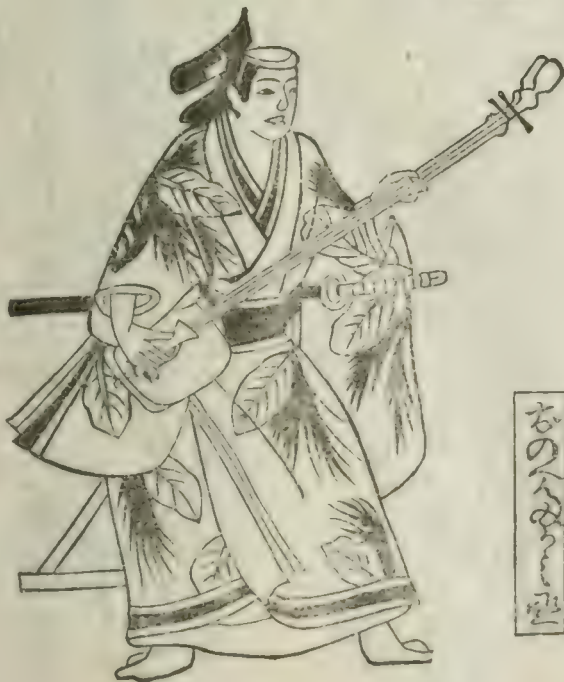
と彼が日頃の存念を手向、追悼の吟を人々より言贈られけるを、其儘に反古となしなんもほゐなしと、白笑にあたへて梅が香を櫻木にうつし、世に廣ふせば、せめて亡跡の追福にもなりなんか、且生涯のよしあし等とは、八文舍が筆に書あらはせば、予はた何をか云ん、四十年來因深、我洛に遊は彼も洛に棲んて相か

たらひ、しらぬ火の筑紫の旅さへ再たび舟を同じうし、今一たびは又もやもふでんと、日比約せしも甲斐なく、あな卯の年も暮行名殘とはなりぬ、

天明四甲辰正月　　花洛不夜庵五雲識

附録

○尾上菊五郎一代狂言記

抑尾上といへる苗字の紀原を尋るに、京都宮川町に丹波屋杢右衛門といへる人あり、其子美麗なる生れ付にして尾上多賀之丞といひて、貞享の比若衆形に名高く、しかも三絃の達者とこそ聞つたへたり、則其比評判記の畫を摺して爰に顯はす、

右多賀之丞弟子に、尾上右近といふありて、其弟子左門といへるも、生れつきあてやかなりとぞ聞へたり、今の尾上菊五郎俳名梅幸は、此左門の弟子にして、すなはち宮川町音羽屋半平といひしひとの子なり、

◎享保十五庚戌年酉霜月顔見世京榊山四郎太郎座へ、色子の部に入て出しが始にて、翌十六亥年都万太夫座へ、江戸より佐野川万菊、中村新五郎に、中村富十郎俳名慶子連られ歸り來りし時、梅幸も若衆形にて同座也、夏の頃傾捨山を立入し狂言に、古澤村長十郎、二挺鼓にて女房に万菊當眼の擒使役に新五郎にて、若殿に慶子二人の子兒は水木辰之助、弟は梅幸にて、慶子の身代りに、切腹せんと肌を押脱たる時、格別に膚の色の白かりしと沙汰せしと、古老の物語りも殘れり、夫より三四年過、同廿一辰年、嵐小六座へ出て、始て若女形の部に加はり、翌元文二巳年、水木竹之助座にて上上の位と成り、顔見世傾城小大部の役、殊の外はしかき住内といひ出、同三午年は芳澤玉妻座にて上上吉と成り、二の替り心中狂言染松七三郎相手にて甚評よく、其暮姉川座へ出、同六申年、さの川市松座にて顔見せ花子の役、間の狂言に十二段に、常盤御前と冷泉との二役とも受よく、

◎同七酉年は、大坂中村富十郎座の顔見世に、始ての下りに万菊菊之丞との一座、作り氣違ひにて、烏帽子長絹にての所作がゝり市野川彦四郎笠谷又九郎相手にて、發端より沙汰よくして、其秋久松の役富十郎おそめ大きにでかし、翌寛保二戌年は、佐渡島長五郎座にて、江戸より市川海老藏俳名栢莚登り來り、同座にて鳴神の雲の當麾はなかんづくの大評判にて、其暮海老藏江戸へ歸る時、ともに付添行しが、江戸への初下りなり、

◎寛保三亥年戌霜月顔見世江戸吹屋町市村座へすみ、顔見せ振袖信田妻に、白拍子なにはづと葛の葉の役ともに噂よく、上上吉の位にすゝみて、此年瀬川吉路考、女鳴神をして吉例といひて、若衆形にての當麾の役に、めつたに評よく成りて、其暮同座居なりの顔見世、石居太平記においとの役、いよ〱沙汰よく、瀬川菊次郎俳名仙魚下り、同座して上上黒吉と成り、仙魚と釣合して評したり、同四の春、七種蜷曾我に、あこやと吉三郎役菊次郎お七實は時宗也との狂言受よきより、其頃はやゝもすれば、若衆形を専らとして、其方にてはあたらぬといふ事なきによりて、芝居よりも又自分

昔より女形の立役と成て、成課せたる者すくなし、早川初瀬も嵐三郎となりながら、程なく又若女形に立戻る、玉澤林彌、藤村半太夫、元祖芳澤あやめ、近くは山下古金作なども、一度は又四郎と成りて、間もなく昔元の役に立戻りし也、梅幸は誠に天滿宮信仰の沙汰高き奇特にや、成課せる傑こそ見えたりと悦ばせ、されども此月元武者之介、人品相應して薪水の傑を第一として、所々訥子の和らかみを加へ、甚見よくはあれど、願はくは今少し申ぶんありとは、巖流にあてこすられ、無禮を開流し切かけたる刀を、扇にて打落し、きめ付る武功の仕内、成程見へはよけれど、物にたとへて見れば、兎角長短の評入べき也、引つまんでいはゞ、今一兩年立役の執行足ての上にて致されなば、坂東の仕内共午角とやいはん、惜い哉此一段に成りて、遙に見劣る所ありしと、其頃の評記にも、序に又申事とてあれど、少し言葉遣ひあしく、せりふのしまりすくなく、聞えかねると頭取やら、所々のふしふしも、今一ひいき強きによりてや、次第に狂言せりふともに快くかたまり、其一兩年は、只梅と宗ばかりいふても、町々を悦ばす色取男と成り、其暮の顔見世は、和黒主に賴風役殊の外でかし、同庚寅の春、愛護曾我に、始て工藤祐經役をしてより、ほた〳〵と評判よく成り、其冬顏見世吉例曾我に、曾我太郎、同六年の春、狂言一葉曾我に、再び工藤の役いよ〳〵沙汰よくなり、大當りを取り、此冬顏見世は　中村座へ再勤して、將門に俵藤太役、至て大入にて、翌七丑の春、鷄音曾我に工藤と佐野の次郎左衞門役もよく、其暮同座歸陣屋敷に賴朝、佐々木三郎と盛久の二役、いづれも皆できるとはいへど、一人賴朝の仕樣大に見所ありて、上上黒吉と成り、次の替り入船曾我に、八幡三郎本名京の次郎にて、平野や德兵衞の世話事も大出來にてありしが、いかゞしてや、其七月より出勤なく、其冬顏見世又々市村座への出勤、鉢の木狂言に、秋田城之助本名さの〻源左衞門役までは、ます〳〵沙汰よかりしが、翌同九卯の春、梅幸の役にて身うち眞赤にぬり、角(すみ)かづら黒褌にて見物の方へ、尻を突付し見へは、大十町の形とは見へたれど、梅幸には似合ぬ事をすると、諸見物の受あしく、尤其節三役にて、白き顏にての角かづらで、櫻丸の仕内はかはらね共、梅王の見にくきには替がたしとて、上上吉と評

記になしたり、其次の春狂言篠田十郎にて、吃の又平と成り、梶原に手疵を負せ逃來り、急難をすくひ下されと工藤が乘物見掛〻て賴み、祐經が乘物にかくまはれ、大勢追手來て、彼乘物を取卷あやしみし所、乘物の中は工藤壹人也と、早替りにて頭を出せし所など、殊の外見よきと悅び、次にまた又平にて打擲に合ひ、後女房が三味線にて、奉頭を舞しなど、よい〳〵との沙汰もあれども、顏見世の赤尻に、黑褌の評判戾り兼て、少しは噂も薄やぎたり、其比しも、舅古新水も過行しを見送り、忘記念を養育して、古名を繼せ、万事營の事も奇特にせしと聞へたり、其冬阿國歌舞妓に細川勝元、翌十辰の春末廣源氏に八幡三郎、當六月に團三郎よきともいひ、又大ていとも、町々の沙汰もさま〳〵なりし、此冬顏見世伊達大木戸にかつた次郎、同十一巳の春、根元曾我に鬼王、此暮顏見世故鄕錦に手塚の太郎、同十二午の春、河津の亡魂と鬼王の二役、次に佐々木の盛綱にて、鹽燒兄弟に對面の塲二人祐經の思ひ入レ、至て評よく成りて元の上上黑吉と成り、此冬やはり同座にて、小町の狂言によし害宗貞よく、同十三未の春、紫曾我の工藤は大て

いともいへど、八幡三郎にてお七吉三の取持して見物によだれを流させて悅ばせ、すべて近年色々の役廻りもあるとはいへど、只一統古新水の形こそ、此人にあへば、是ぞ見たき〳〵との取さたの所、當暮は珍らしくも、十七年ぶり立役と成ては始て○森田座にすみて、顏見世伊豆入船に、曾我の太郎と梶原平三役、大きにでかしめつたに取沙汰つよく成り、七つ前より切落しをせり合ての見物、彼梶原にてふし木の傳大塲との問答に弓矢に狩衣かけかたげての出端、ノッ〳〵其女性に申べき事のありといふを珍らしき出端とてうれしがらせ、とかくに人を取ゝ事に奇妙を得たる仕合男とて、專ら受よく、芝居の福の神也ともてはやさせ、同十四申の春、粧曾我に京の小次郎とまんこうと十郎祐成と工藤祐經の四役、工藤はもとよりの事、十郎と祐經との役を、一人にて勤るものは、當時にはこれなしなどゝて、女中の見物迄も悅ばせ、當八月戸棚硯に、道風の役も評よく、此壹年にて當暮又々○市村座へ歸り、新參顏見世須磨の初雪に、おがたの三郎と熊谷次郎の役ます〳〵よく明和二酉の春三組曾我に、小栗十郎と工藤祐經、并にひたちの

小荻にて、女形三役に大當りを取りて、末張りに入つよく、此年も續て評よく、當冬顏見世同座にて二代源氏に仲光と三條宗近、同三戌の春狂言相生曾我に曾我の老母と鬼王と矢の根鍛冶畑右衛門三役、是又揃ふて受よく、老母にて工藤屋敷へとりことなりしを、鬼王にて其よしを聞、犬坊丸が供の鑓持がもちたる鑓を奪ひ取、髭を作り、生酔の程にて入込み、朝比奈と成りて、兄弟を屋敷へ引入れ、對面さす仕内、仕にくひ所をよくするとて、至て評判高く、兎角に入を取が音羽屋の徳にて、此秋久し振にて、京都へ登る相談あるとて、江戸一統に殘念がりしが、程なく談合極り、暇乞狂言は假名手本忠臣藏にて大星由良之助と本藏、女房となせとの二役、何が彼殘多がるのと、狂言の仕内と、近年めき〳〵と沙汰よく成り、する程の事を、よい〳〵といはるゝとを合體しての、大入のすさまじさは、たとへるに物もなき程の事、元來此由良の助狂言は△去ル寛延二巳年、江戸森田座へ山本京四郎俳名可中下り來て、此狂言大に當りしが始也、其已前古澤村宗十郎後助高屋高助といふ大岸右内にて此仕内ありて、京にても此人此狂言を出せし也、其仕内をよく覺へ、大坂操芝居竹本座にて、人形に名を取し古吉田文三郎俳名冠子此忠臣藏をつゞらせ、彼助高屋の姿をよく寫し遣ひしとは、芝居好見功者のよく覺へ褒たせし事也、其頃江戸中村座に、彼訥子住居たり、大坂より可中森田座へ來りて、此假名手本にての大當りを取し事也、根元の訥子に、此狂言をさせなば當りを取らは極めし事なれば、張合て同じ狂言を出すべしと、ひいき連中のすゝめにより、一座一決して出せし也、其時に至り、市村座に古新水珍らしからんとて、此座も相談極りて、江戸一統此假名手本にて三役とも勤めし、もとより薪水由良之助役は、少し堅きとはいへども、堅き所に摸樣を工夫付て、此由良之助狂言は、坂東彥三郎に團を上たり、此時梅幸はおかる勘平二役されども訥子の和らかみに理屈あり、薪水の堅き中に風情をこめ、可中の醉中の仕内に差別もありて、此三つを合體して、梅幸彌工夫をこらし、今十七八年の後に、あしきとよきを身に合せ、勿論人品に據を得、狂言の榮合もよく、もとより已前の持前の女形に、屋鋪風俗のりゝしき取合もよく、今此時に至りては、此梅幸が狂言とも成りし程の事にて、九月節句より十月廿日前迄は、

十日も前に場の吟味もせずしては、見物のならぬこて、見ぬを耻さぞいひいはれして、首尾よく大入續きにて、連中の見立もます〳〵賑ひしは、きつい大手柄〳〵、

○明れば明和四亥年、京（市山山下）合座本の座へすみ、女形にて大坂へ下りしは廿七年ぶり也（戊霜月顔見世）大坂より中山文七（俳名由男）上り、珍敷出合の同座にて、大に賑ひて曙入船東海こいふ外題にて、田原武者之助にて、初の小幕の場に著付紫地に繻、上下白地にて八ッ藤の繻もやう、先出た所に大に落をこり、贋勅使を見出し、しめ殺して衣類を脱せ取りしを、家來が見付し所、挑灯を叩き落しての幕、是上方にて近世なき人品にて荒肝を取りて、次の場は公家の姿、もこより贋勅使にて田原の屋敷へ入込み、思はずも古主に出合ひ、恨られて機嫌を取り、公家の儘にて、主人の肩をもみ、きせるを通しなごして其場を補ひ、主人の懐の子を取りこすかしなごして、時代世話辛抱一時にして見せらるゝ和らかみ、久しぶりにて訥子の俤を思ひ出させ、切りに玉取の謠に合しての花やかみ、誠に久しく東武に放さゞるも無理ならずこ、京中一統に悦びし故、位大上上吉こ改め、二のかはりけいせい大内櫻にて、山名が家來竹垣勇助こ成り、先年大坂にての今織大貫島の狂言に、古中村十藏（俳名子吼）の役△其時の姉川新四郎の役は、中山文七にて（しもは佐五右衞門と云）當二のかはりは、由男へ狂言を讓りての仕内、誠に立物らしくして、倶に面白きを顯はした、嵯峨大井川にて船中饗應の場、佐五右衞門兄弟の難義をすくひての引張り甚見よく、後手燭を持出て、曲者見付し體へ手裏劔を取上、親甚五平が殺され居るに驚きの幕、花やかにてするごく、後掛助島狂言の客招待の場も受よく、奥にて勇助が急難をすくふは、山名左京大夫にて乘物の内にての早替り、二役も前に江戸にて出せし工藤の仕内なれば、もこより次第に沙汰よく、此次物ぐさの不破の伴左衞門の實惡は、珍らしくはあれご仕内は大ていこもいひ、ぬるいこもいへご、此暮は尾上久米助座にすみて顔見世、名古屋山三の狂言にて、歌舞妓狂言の和らかみをしかこ見せて、大に出かし當りを取、翌同五三の替りに、忠臣藏を出して、彼暇乞の時の二役の儘にて、大に當りを取、訥子よりは姿見よきこて、京にても同じ取沙汰、此年千本櫻

に、梶原平三と狐忠信役廻りの新らしさに入を取、此幕中村歌右衞門、江戸下り暇乞に巖流の役にて、梅幸は月元役、誠に大出來といふものは此事とて、町も川東も、翌明より肝を潰せし事成しが、時分あしくして入もかひなきを、一統に殘念がりし事也、其幕中村松代座にすみ、翌同六丑二の替り、けいせし金花山に、今川男之助にて、長袴著て椕笄さしてのせんだく狂言、切は油賣正九郎にて、古訥子の油はかりの仕内、何はともあれ花やかにて、花實をこめたる役者也とて、立子ゐざる子迄も、菊五郎〳〵との取沙汰のみ、此秋江戸へ歸るとの噂も程なく極まりしとて、暇乞として秋田城之助にて二挺鼓、彼むかしの澤村古長十郎の役にて、古老の人迄も杖に肩にすがりて見に行て、殘多がらせし事也、慶子相手にてむかしを思ひ出て、大夫のとりなりに倶にうかるゝ、兩人の仕打、又此出合で此狂言、誠に見る事は再び叶はぬ事とての、大當りも尤ぞかし、首尾よく、京都三とせの勤の其内、菅相丞は勿論、松王丸が憎みの味はひ、菊水卷の宇治の當悦、一の谷の六彌太、北條の時賴役、雪の段奇麗にて見へよく、薄雪にては園部の兵衞など、兎角思ひ入レ過た所も有ルとはいへど、始終が人品と奇麗と、彼花と實の所を專らにして受よく、又世話事にては、桂川の心中に長右衞門役、出入の湊にて五郎八が兄八木孫三郎などは、とり分て見心よく大に出かし、薄雪の井藏の五平次なども、輕うとつく〳〵して、海老藏の形ありと江戸しりの人の評ありて、先此三年凡當り通しに入を取、誠に芝居の福の神といひしも無理ならず、されども其内、月元武者之助こそ、就中見榮ありしと、跡迄もいひなせり、

○明和七寅年、江戸市村座に三年ぶりの歸り新參（廿八年霜月）顏見せ、外題も則梅の顏見せに、泉三郎の役に、衣裳先裏付の長上下に大小、江戸にて此取形の所謂なしと咎ぬる人もあれど、上方より歸りし時なれば、其儘の姿も尤ぞかしといふもあり、されどもかはらぬ花やかみに、ひいきも馴染もかはらぬ思ひ、春狂言もかはらず、京の次郎と常陸之助もかはらぬ、工藤の姿の花々しさ、當六月一の谷にて、熊谷も大でい當、暮伊豆著錦に、祐信時政の二役も評よく、同八卯春和田酒宴にかはらぬ祐經の役は、兎角見心よきといひ、殊更横山に調伏せられ、いざりと成りて車にて

出、次に朝比奈と三男の三郎が取持にて、曾我兄弟小栗主從に對面の場、上段に吉田少將と範賴、十人の女形を高欄の上にならべし、其餝付の花々しさは、近年に覺へぬ仕立、始終のきらびやかに我を折し、舞臺付の端手さと仕内に評を取り、此冬顏見せ世嗣鉢の木に佐野の源左衞門と、青砥左衞門二役ともに受よく、同九辰正月二日より、菅原傳授にて菅相丞の役は、善惡の評まち〳〵にて、當二月瀨川菊之丞出勤に付、衣更著曾我に又も祐經、大に出來ましたが、二月晦日より芝居類燒に付、此年休みにて、其暮市村座顏見せ、綱坂狂言に渡邊綱と仲光受よく〳〵翌安永二巳春三月、名所曾我に祐經、勿論祐成の和事大に沙汰よく重忠の三役に、切にかさねにての所作事も評よくありしが、此前年辰の暮、大坂中村歌右衞門座へ登らるゝとて、看板も出たれどもいかゞ間違ひしや、市村座の居なりと聞て、大坂も力を落せし計り、されども顏見世外題に、尾上菊五郎不登斷と出して、間違ふたるゆへ趣向となる程の聞への勢ひ也しが、漸此巳の暮大坂登りの相談かたまりしとて、先例に任して暇乞狂言に、又も忠臣藏にかはらぬ二役に早野勘平との三役、やつぱり沙汰よくて、前年にかはらず、大に入を取り、名殘もいよ〳〵惜まれつゝも旅立て、

◎安永三午年大坂へは三十二年ぶり、十月廿六日の乘込の勢ひ花々しく、川船のかざりも幟おびたゞしく、牽頭持并に所の若手〳〵も叫舟にて出迎ひ、迎ひ出る船は前以て云ひ合せ、船幕の染立艫には吹拔幟などかざり立て、はやし物して賑はひしに、船陸とも人群集いふもさら也、此後大坂乘込の迎ひ船に、凡此幕幟なども用ひて、是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし、兎角此仕合男とも云ひ立、やぐら太鼓の勢ひも高々とひゞきて、三番も鳴やならず、待兼山の人群て大木戶のヱイトウ〳〵、顏見世狂言は京へ來たりし時にかはらぬ田原武者之助、始の小幕の間拍子には大に手ごたへし、次に公家姿にての世話事の混雜も和らかにて、はつきり事のあざやかに分かりし仕內と、人物のよいに大に受よく、續上上吉に成り、次の狂言表方も、町方も、待兼しすゝめの忠臣藏を、聞ィの物として、由良之助となせの二役、江戶京をならして洗ひすゝぎも足りし、此藝幾度でも

飽のない狂言に、人品仕内にいひ分ンなければ、末の敵討迄も抜目なくて、何度も〳〵見に行が、又大坂質氣にて、二のかはりは今川男之助にて、彼櫛笄の見事さ、切に油はかりは訥子程にはないとはいへど、又も歌右衛門相手にての巖流にて、月元武者之助に棧敷も塲も一統肝にこたへさせしは、いかさま此事ぞかし、次に九月より菅相丞と松王の二役、松王は少し泣過しともいへど、菅公の年比といひ、位高き所申分ンなく、是を暇乞として當地殘多くも、只一年にての上京も、十月廿八日迄入通しは、きつい手柄者との取さたにて、

◎安永四未年、京都藤川山吾座午霜月顔見世は、津守常陸之助、やつぱり和らかみを専にして、しつかりとし、武道に和事仕の衣裳のゐるは、此人ならでとて悦ぶ事もかはらず、愛を以て花實對したる役者也と京中の悦び、殊更當年此座は、尾上新七尾上松助倶に登り來りし、同座各弟子にて、補助心も有りしや、間の物久米寺彈正使者之塲から、鳴神上人もよく、二の替りはけいせい鐘鳴渡に、築地多門之頭と成り、夢殿にこもりし塲、姿を見せず障子の内より聲計にて幕を切りしなど、新らしき物好にて、下手のとんとならぬ所とて嬉しがらせ、次に尼子一ぞく難儀の塲へ、乗物にて來り出し、人品立テ髪に上下姿は、先指のさし人もない事と、手を打てこぞらせたれども、二役七艸四郎にてのむほん人は、ちと持前に合ぬとも、大役ながらはつきりめかぬ評判も有りて、次の替り双蝶々に、南與兵衛と長吉が姉おせきは又沙汰よく、此度はつくし諧とやらにて出勤なく、宮嶋を助られたとも噂し、歸りて又も巖流出て月元の役、其次の替りに、菅原傳授仕内は、前にかはらねども、同じ出物にて珍らしからぬ故歟、何とやら評も少し薄やぎたり、都て芝居方は、とかく先年出て沙汰のよかりし物は、馴染たる狂言のあたりめママ見へてよきとてくどうにすゝむるもの、頼まれて異義なきも又立ッ者のならひにて、據なくも珍らしからぬ役續きにて、此人の科にもあらねども、此頃は只取沙汰のみ、此冬顔見せ同座にて佐野源左衛門にて、紙子仕立に手籠提て出し所、さりとは見へよく、此一段隨分受よく、同五申春狂言に壇浦兜軍記に景清の役、殊の外よく、三段目あこや役尾上松助梅幸は重忠の役にての琴責などは、手に入

し物とて大に出かしたれども、二の替り新狂言は、けいせい柳鷄鳴に、かけや茂三郎と成りて、珍らしくも幸抱事にて、嵐七五郎相手にての泥仕あい、若手の仕内を年ばいにての苦勞程に見物も見心よからず、何とやら氣のごくともいひしが、二役の細川勝元は、持前のはんなり、捌もゆつたりとして見よく、殊更此度は牛之助始めての出勤にて、からくり人形に仕立の少計り所作事有りて、末に至り舞臺にて、大字に一行物を書し見事さ、大に受よくて嬉しげにも見へ、たり、次に戀女房に、定之進役と重の井との二役とも大ていともいひ、色々の沙汰ありし內、此冬大坂下りの相談に、暇乞は又も姉搶由、二挺皷、先年も此藝を以てとて、是もそこ／＼の噂のみ、前後只狂言に若勞多くて、夫程の當りめも見へざれども、只花やかみは失せず、

◎安永六酉年、大坂小川吉太郎座にすみ（中霜月）顔見世は東儀要之助にて、取卷し相手の首を切、引さげ出し上下姿、先はかはらぬ嬉しからせやう、木蔭に鐵炮にてねらふ者有るを知りて、百姓六作が持居る藁苞とつて筒先をよける仕內、兎角花やか也、此出端去々年、京にて津守常陸之助と同しく、後（小川吉太郎 澤村國太郎）相手にて六作に肩もゑせ居るうち、後ろに立し妹の戀をさとりし和らかみは、二人ともにさりとは申分もなく出かし、春狂言は新薄雪物語りに來國行の役、小川と二人淸水の出合にて淚を流させ、園部兵衛と正宗との三役、殊更正宗湯加減を敎へ、得ノと覺へたる轉といひて、風呂へ水打込などの思ひ入は至極／＼、夏替り鍋祀に、田上三左衛門にて茶の湯の傳授の前、殊之外の出かしにて、ぐつと取沙汰よく、切に弟十內にて、關所を守る處、さつ／＼いさぎよくてよく、次に千本櫻の梶原至ていさぎよく、江戸仕立とて悅ばせ、四段目義經の役（雛助 忠信）大に受よく、此冬同座にて顔見世は、恩地左近の役はさしたる事なし、同七戌の春、日本花赤城鹽竈に、大星由良之助役は、兎角身に應じ、狂言かはりても由良之助といへば、斯々こそ有ゝ男ぶりならぬと思はるゝ思ひ（雛助 力彌）にて注進の役、我子の性急なる場を示し、矢を折て見よと投出せし二人の仕內は大に感じさせたり、仁木多門頭と與茂作が妹にて、振袖娘にて小川との拔參りの道行、ひねくろしき娘にて、振袖姿はわる口の評も有しが、只

何となく奇妙がらせたり、次に山門五三桐にて、眞柴久吉役は甚よく、二段目木村常陸之介にて、久次に諫言の仕内手づよく、後唐人妻にてのむほん顯はれし仕様は、同じむほん人といへど姿かはりて甚取沙汰もよく雛助五右衛門にて、此狂言大に當りを取りし也、次に勘介嶋狂言、渉し守三十郎の辛抱、狂言世話事甚見よくて我を折らせし也、和田合戰にあさりの與市雛助にんがく大に評判よく、此暮又も江戸へ歸るとて、久米寺彈正と鳴神上人、切に不動明王の三役も大ていにての旅立、

○安永八亥年市村座へ歸り新參戌霜月顔見世梅幢樂に安達左衛門とあさりの與市の二役、仕内はかはらず悅ばせたれども、いかなるや當顔見世不入にて、春狂言わかやぎ曾我に、工藤祐經は誠に不易の仕内、二役十郎祐成の役も、此度は夫程にもないとの事ながら、當八月に薄雪出て、園部兵衛と刀鍛治正宗二役、是も評うすく、此暮同座顔見世、榮楠に正成と備後三郎役、同九子春狂言曙曾我に、まんこうと工藤の二役、四十二の年恰好もよく早がはりの所など、別て下り後の仕内とも申たが、五月より女伊達浪花帽子といふ外題にて、黑船狂言に八木孫三郎役、隨分沙汰もよかりしが、いかゞしてや舞臺にて障り出來て舞臺を引、自分の申分もさわやかなる噂も取〱にて、五月廿五日より芝居も休みとはなれり、依之其秋京都への思立ありて、九月九日より改て中村座におゐて暇乞として、是も吉例の假名手本に由良の介となせの二役、皆人名殘をおしみ、先年にましてかはらぬ繁昌の大入にて、十月十七日迄首尾克勤メ、

○安永十丑年、京都山下八百藏座へすみ子霜月顔見世も五年ぶり、其時菊旗擧といふ外題にて、楠正成にて雪ふりの傘さし上下の出端、若黨文助奴國平兩人召連し姿、さりとは見倒ぬとの取沙汰、後文助が紙子ふとんの吟味の間甚おかしく、次に女房を文助に近付にせんと呼出せし所、文助が已前の夫おつととさとりし所など、格別の仕内と、五年已前登りしよりは先は取沙汰もなく、此勢ひによつて眞黑極上上吉と進み、二の替り都濱荻に細川勝元ながら、左官と成りて雷子との出合、いよ〱受よく、三の替りは赤城鹽竈にての由良之助は、やつぱり我をおらせ、娘お光は大坂の評と倶に色々と申計り、次に和田合戰のあさりの與

市、非人の高市武右衛門は少し思ひ入の違ひし所も、存の外なる事ともいへど、秋替り鍋祀に、田上半左衛門役は、大坂にかはらず出かし、ひらかな盛衰記二段目にて、延壽の役（源太雷子、千鳥貝笛、平次眼鏡）少し年寄ッせ過たともいへど、四人が四人とも揃ふての出來に見て置べきこて、大坂よりわざ〳〵と登る人の多き程の事、三段目重忠は、万才烏帽子、小素袍にての股立に、武者草鞋に源太の歸りし所も凡同じ姿、少し仕内にも心得違の有やうにも申たが、何は格別打揃ふての大入〇當暮も在京にて天明二寅年は、中山猪八座にて顔見世、富貴礎に尼子左衛門と成り、同じ様なる俤の出端、仕内も兎角見飽ぬとの沙汰、其上珍ら敷當年は慶子同座にて、春狂言は妹脊山の大判司役、何は格別出立つた所に大立者同士の出合、當暮大坂へ下ると有りて、暇乞かた〳〵、鬼一の三段目、鬼一の役花畑へ出る姿から切迄申分ンもなく、二役四段目の口、大藏役は思ひ入違ひもありしが、息子丑之助相手にての物猿、おとなげなひといへど奇麗にて、猶切に成てすつぱりとした仕様にて年功を顯はし、

○天明三卯年、大坂嵐他人座にすみ引（寅當）顔見世は伊勢祢清にて、雪の傘さして、若黨奴連出しは、去々年京都にての楠正成と同じく、猶雷子嵐三右衛門など同道にての同じ役、當地にてもかはらず、此上下姿を皆悦ぶ事にて、春二の替り、又雷子相手に、細川勝元にて左官に日雇の狂言、當地にては少し俤堅過るともいひいかゞや、此狂言不繁昌にて不入故、間もなく替りて假名手本、由良之助はいつとても申迄もなき事、此度は珍らしく天河屋儀平役、甚手強くせられての其中の和らかみに、揚屋敷とも一統誉を上て悦ぶ事日々、次に競伊勢物語にて、いかるが藤太役に赤づらにての立ッ髮、江戸作りの若々にも年功つもりし仕内顯はれ、三段目紀の有常は例のさはやかにて、時代世話の取交にも嬉しがらせ、非人敵討治郎右衛門役、前後色々といへど、何かはしらず人を取り、次に布引瀧にて、木曾の義賢役、始は甚見よく後は少し道具過て思ひ入も鬱しけれど、續ひて鬼一の三四は京にての二役受よく、次に小いな狂言に、いなのや半十郎は大てい、次の替り秋葉權現に玉島逸當と、同幸兵衛兄弟の二役（先年古三升大五郎役）是も始はよく、後

の幸兵衛役は少し合ぬやうともいへど、日本駄右衛門に人油さらるゝ所の辛抱は手ごたへさし、當暮も居なりの相談にて、息子丑之助を若女形になし度とて、揩物など出されて顔見世は、蘭菊女夫狐の序に膏藥賣と成り、誠ははくどう仙人にて、加茂の家を守護するのみにて、さしたる仕内もなく、めでたく顔見世の日數も濟み、間もなく間の物とてひらかな出て、京のごとく延壽と重忠の二役のさた、增々よく（源太に雷子千鳥其答、平次に淺尾爲十郎俳名奥山）打揃ひし顔の大當り也、元來此人の僻として、道具にもたるゝ事多し、又一つには首筋にてしやくりあげて、愁情つよくて、時代事も世話事のやうに見へ、只泣ゝ過ると見物の思ふ事多し、或人心易せりと遠慮もなく、此人に問ふに近年ばたばたと舞臺こまかくなりて、何となく大手に見へぬやう也、工夫ばし有ッての事にや、算ふれば更なれども、其一二條を申さん、定之進乗物に逆様に乗つて、幕際と成一ッ二ッしやくりをして終る仕内、或は薄雪の園部の兵衛に、幸崎より送りし刀の切尖の血と、我腹を切て其血を合し見る事、又云京にてありしひらがなの重忠に、我家來が樋口捕たと廻るを、拔打にして紙を出して其刀を拭はせ、素袍の袖を切て駒若に敷かせ、敬ふけしきある事、是等は見物にしらすにもあらずして、狂言の趣意とは却て背ける樣にも見へんやといへば、有難しとて落涙の體こそありて、左も有る事も御座あるべし、後の海老蔵（俳名五粒）我を引立くれて、其方は兎角舞臺に永く居ぬやうにせよ、永くせば沙汰あしかるべし、其かはりには、舞臺に居る内は隨分心を剩して、狂言をせよと示し呉られたるゆへ、思はずも用ひ過す事の有ならんとぞ、いひし事實も記念とはなれりと、爰に記し斯筆し侍るかたはらに、又一人有りて、追福ならば其人のよき事計りをこそ擧てこそといへど、譏るも譽るも其人の實情を賞美ありての事、さればこそ都て京都に有りし間、樂屋入の行義といひ、棧敷の客を見舞ふ事はいふに及ばず、惣稽古足揃へなどにも下袴を著し、人の場の仕内を見るにも、謹で寒暑に姿を崩さずなす故、其出入にも心を付る人こそ多し、平生諸事を學ひ、鞠は無地の格濃作ら、誰ゝ友と云事もなく、夫婦連にて垣有ゝ方を尋ね求めて、休みなる日は蹴て遊び、誹諧も少しづゝ學び、將棊は下直りを定め、

茶は石州流と見へて折々は釜もかゝりし、亂舞は勿論、折しも聞へる事多く、誠に物に嗜みて、しほらしき生れ付也、手跡は拙くも有りしと思ひしや、息子丑之助へ幼稚の時より敎へ込しとぞいひなせり、立テ者といふものは、斯こそ有たきものともいふ人ありてや、其ひゞきにていひこそはあらずとも、自然と上方役者の行義もよく成りし事也、右せいすい記狂言、舊冬より出て今を半なるひらがなの重忠は、本文のごとく陣羽織にて、何の事なくせられしは年増といへども、心のすなをなる所の顯はるゝ事正やと、今更いひし人も耻て淚を流しぬ、惜い哉師走の廿日過、時季に障られて病臥、十日とも立たで醫療盡ていかんともする事を得ず、つゐに此小つもごりなる日、黃泉の旅立も余りといへば、思よらずもして、息子丑之助の爲に、せめては今三四年もあらばとも斯も、殘るも心の程ぞ思ひやり、且は當時ならび人もなき三ヶ津にての大立テ者に、名殘を惜む計り、行年六十七才にして法名すなはち解脫院淸譽淨薫信士とぞ、往事江戸を勤めし事年數、中村座に三年、森田座に二年、市村座に已上廿五年の勤、合て三十年、始め古薪水聟と成、後大十町（始め大谷廣治事）娘に緣を組、依之此二人の緣を以て、東武に有し間は日蓮宗旨にて、淺艸大專寺に妻と倶に逆修の石碑を建置たり、此戒名撥院永持日實とぞ聞へし、右にいへる京地を古鄕として、親音羽屋半平の宗旨なれば、京大坂に在す間は淨土宗也、是にて生れ付の直をなる事も推思ひやりつゝ、誠に三佛乗の因緣ともいはんもの歟、

附録終

如是我聞、不夜庵五雲叟と梅幸とは、鳥が啼あづま路より交り厚く、筑紫の果までも杖を同じうし、或は匂欄のいとまには、不夜の扉を月の爲に訪らひ、雪の朝にはいざさらばとて、蓑笠に姿をかくし、あるじの病耳を打おどろかしなどして、むかし〳〵の名家大家の古言などを討論し、深く狂言の眞如海の底を探り、優戯の奥儀を極め侍ぬ、去りし卯のとしは、浪花の戯をつとめしも、日頃信し奉る大慈大悲をいのりし應護にや、千手のひいきも多かりしが、聊か風の心地とて、病に臥して終に年のたそがれに、音羽やの瀧の音もたへ〴〵しき、尾上の鐘の聲を菊五郎といふ、名ばかりをのこしぬ、嗚呼痛哉優道の響はとんと絶ぬといふべし、ことし不夜の翁、渠か冥福のためにとて、小册子を編て予をして梓にのぼさしめぬ、予やそのよしあしの名とげて、身退きしむかし、今のことをおもひ出し幸か、生涯狂言のあらましを、願以此功德に、八文舎自笑これを書記侍りぬ、

梅幸集終

中山文七一代狂言紀

予とし頃、三都に來往して劇場を好む事久し、或日浪花に遊びて、一冊子の寫本を得たり、是を庫中に秘め置て、蠧魚の餌となさむことのほいなさに、いさゝか彫刻の費を補ひ、櫻木に鏤め、世の好士に與ん事を希ふ、もとより書林の家にありて、世に鬻ぐものにはあらずといふことを、初めにことはり聞ゆものならし、

尾陽不二本氏某施印

序

梁塵子嘗稱二中山氏之戯術一曰、寔惟中原之人龍乎哉、咨厥辞之偉哉、予於二于茲一有レ感焉、夫龍也者、生物之神而不レ可レ測者也、厥見也、或雲、或雨、或雷、厥潜也、爲レ虛而無レ迹、倏忽乎、以變、影響之不レ實、繄其神者也矣哉、今且有レ言二於此一、大藩所二鬱浡一生二人龍一、蓋夫謂二中原一而已、中山氏之於二戯術一也、起レ雲、則吟聲頻焉、降レ雨、則風色動焉、鼓レ雷、則電光霹焉、有レ時乎飛、有レ時乎揚、變化之自在、亦得而不レ可レ測、則果梁塵子所謂人龍者非耶、其友某葉修其術數、而弘二於中原一、厥業亦不レ偉哉、予於二于茲一有レ感下龍吟起雲之言上、請龍乎、龍乎、舍レ龍獲レ龍、竊見龍乎、潜龍乎、飛龍乎、臥龍乎、予稱下以レ龍喩二龍之非一レ龍不上レ若下以レ非レ龍喩中龍之非上龍也、而彼膽下望於人龍之潜見上云爾

武昌　　無點居士題

由男

中山文七一代狂言紀

頭取扨今日各樣を御招き申ましたは、御なじみの中山文七殿、此度一世一代のなごり狂言を出されました所、古今まれなる大あたり、何樣妓道の冥加にかなふたる人と存るに付て、此人幼少よりの狂言をかぞへ、よしあしの品定をいたし、時代違の御方樣までも、一同に御噺のたねに成りまするやうにと、去御かた樣の催ふし故、廻狀を出しました處、大勢樣御寄り被下、頭取催主共大慶に存升る、各樣にも御存のほどは仰られ、御助勢下さらば忝う存升る、芝居ずき先頭取開口なされい、御たのみなうてもだまつては居ますまい、文七びいき頭取早うはじめておくれ、頭取しからば左樣仕ませう、ヱヘン〱、凡物に始ある人は多けれども、其終りを能する人は少し、然に此文七殿と申は、故中山新九郎一蝶の子にて、誠は松屋來助といふ狂言作者の子をやしなひ、スイガクフウ役者大全にも、新九郎先妻の甥をと有た、樂やしりいでヽいや左樣では御ざらぬ、新九郎の妹を泉川千之助方へ嫁らせました、千之助と松島兵太郎二人は、上手とよばれし女形にて、作者の來助と兄弟なる故、此緣から文七丈をもらはれましたのじや、頭取てもくはしう御存、即おさな名は與三郎と號け、元文二年巳のとし、大坂子やくにて、妹脊の舞扇といふ外題にて、三かつにいづみ川千之助、茜屋半七に嵐新平で、此人はおつうのやく、懷にだかれて出られしが初舞臺、延享元子のとしより色子の部、同四卯のとしは、市川龍藏座にて若女形、上上の位が評書にのせし初かと存升、ガクヤシリ夫はたしか由男丈十六七才の時じやとおもふわい、頭取寬延元辰のとしは、京あらし座へ登、角前髮にて中山文七と改め、眞田與市のやく、妹とやつし櫻山四郎三郎とつれ立出られしが、大に評判よく、同二巳のとしは男作、牛の尾の文七やく大出來、同三年午のとしは休み、同四年未のとし、都座のつとめ、元服して親新九郎と二人、與勘平やつしにて沙汰よく、間のかはり玉藻の前に、非人大六大出來にて、すゑたのもしき若ものとほめられ、戀女房の一平が弟六藏にて、孝行塲をでかし、申のとしは北がわ東の芝居にて、座本となり、大峯ざくらに山上治

郎大出來、大ともの王子は別してよろしく、好人達に
ほめられ、上上吉となり、カクヤシリ此人十八か九の時
かで有た、ぜにかけ松の仲秋は、やくがらあはぬとて
上上白吉にもどり、シバイスキ其時分は、評書もきつし
りとしたもので有たじや、頭取同三年酉の かほみせ、
和歌山と改め、大坂三條定助座へ下り、相合枕にはな
れ駒長吉、ことの外の評判、又上上吉となり、同四年
かほみせ、伊達の二郎大に 沙汰能く、二のかはり天
の羽衣に今川仲秋と、あほう與五郎大あたりヒイキ秋
は五說經に、小ぐり判官となへ三郎大出來、同五亥
のとしは、大坂の 初座本か ほみせ、うごろもちの與
五郎、里の子故若殿と成て扇で鍬遣ふ仕內など、こま
かに氣のつくといひ出し、三木之丞の大あたり、同子
のとしは、元トの中山と成り、坂東座明神丸のとみ藏
にて、松右衞門といふ仕內を出かし、するほどの事に
ひいきあつくなり、同七丑の としは、大松百助取の
つとめ、頭取長事御くろう千万、さらば御かはり申ま
せう、二のかわり天ぢく德兵衞に、將軍よしてると紺
屋四郎九郎、ふちべ六郎の 三やく大に 出來、同八と
らの年、姉川座にて 草津小女郎に、火の玉の 源五郎

大あたり、スキこれ〱丑のとし、みろくの五作にて、
すへ物切もあたりましたぞや、頭取ても能う御存、出
し下されたひめ 小松のかめ王丸、東下りのりやうし
やすがた 大評判、同九卯のとしより、角の 芝居の座
本となり、かほみせは河太郎のおどけ大吉、相人にく
ち合、段々のせりふ大に はやらせ、二の かはりに三
十石の 大入、爪長屋權九郎にて、見物の 腹をよぢら
せ、スキ神道源八にて劒術の段にはて、こぶしをにぎ
らせ、大五郎文七と 一對のあたりやくしやと 嬉しが
らせ、上上吉となり、コトシリ兩人よりはみるものが、
双方のよし あしをいふて、せり合ふ たほどの事、今
におもひ出しますぞ、江戸衆嶋原の泥仕合は、もとゞ
りの觀音を立入たで、つがもなく落が來たて、頭取三
のかはりに、いせや日向の惣がたり、磯八のむすこや
くおかしく、同十辰のとしも、座本二のかはりに、か
ねの岬の獅師なだ八にて、てつぽうのまく宜しく、慶
子の兄と成り、しつとの意見をでかし、女鳴神筆坂城
之助をでかし、九月より 戀女房奴一平 大出來、同十
一巳のかほみせはあみだ 如來にて笑はせ、一のかわ
り天狗酒もりに、キノ平とひろえ大出來にて、上上吉

となり同十二年のかほみせ あたかの關の 奴ほど內スキ一風とはじめての出合、關所の段はどうもいへぬおもしろみ、頭取二の替りいろは行列、大わし文吾早の勘平も能く、こゝさら 鹽谷判官、見功者師直に切つけるに、疊に爪づきころぶなどの仕內かんじ入た事で有た、頭取いかにも町中一同に、其沙汰で御ざり升た、次に磯馴松にかぢや太郎七、めいどの飛脚にはりまや喜兵衛大出來、末のとしもやつぱり座本かほみせのくづの兵內、双てう／＼のぬれ髪は、故八藏と男くらべの花やかさ、八わたの段のしうたん大出來、大上上吉にすゝみ、スイガク夫は よしお丈三十一二の比じやが、其時に足をいためたと 此度の口上書にも 大ぜいそのやうな 脇事をいはずと 早う 藝評 頭取いや私も息休め、折々は御助け下されませ、扨此としは大入大當がつゞき、和田がつせんのあさりの與市、菅原の松王、スキ其時中の芝居でも同じ狂言、松王に歌右衛門で有た、これは家の 物極て能いで あらうとおもひの外、實に成てのうれい、文七方が大出來、コヤカイズキ傘躰松王といふものは、おもてににくていをみせ、內には 親をうやまふ心より、菅相丞に 誠を

盡し、時平には主從の禮をなすもので、大ぜいいらぬ筋沙汰、おかれい／＼、頭取東西／＼小ぐり判官に横山太郎、かしくのふく清、皆あやめとの出合にて、するほどの事大あたり大入にて、明和元申のとし至上上吉にすゝみ、かほみせ 妻鹿孫三郎にて二王のやくいさましく、二のかはりは天の 羽衣に北川宗左衛門のやく、すこしにうわにてはまりかぬるといひながらも、大入大あたり、かさねの與右衛門大出來、夏かはりのたけ綱評能く、雷天源八花々しく、非人かたき打の春藤治郎右衛門、スキ御しかりなされな、又申さう、其時中の芝居にては三枡大五郎、姉川のいきうつしにて、治郎右衛門役よかりしかど、文七はこゝろに新四郎をふくみ、仕內は我ものにしてせし故、うつとしみなく、張合の狂言も十日計、文七の方長くつとめしは手柄で有た、フルイスキ奴の みち行八甫と兩人見事な事で、高市武右衛門は獅々吼と角は可慶、場より これ／＼ いらぬむかし、扣て ゐやつしやれ、カノモノマハリ宇田右衛門に 歌七と、大ゼイおけやいおけやい、頭取東西／＼ 西の年は、白極上上吉となり、桃太郎に小兒より中年老人、三段の仕分ケも能く、戀女

ぼうに一平のやく、大あたり、スキ上方にてならぶものなき大立物となり、此人を引かぬ人はあほうのやうにおもふほどの勢ひ、スイカクあきなひみせでも、きれもの丶手代をみては、あれがあの店での文七じやと、世間一同にこのやうにひいき厚く、コトシリ其折ふし、何か芝居にさはりが出來て、翌戌のとしまで引こまれ、いかゞならんと案ぜしに、頭取四月十五日よりの出勤、なつ祭に團七のやく、久々引込みし身のうへを、團七出牢のすがたにて目みへの口上、大坂中の悦び、初下りのかほみせ、同前の大はづみ、あつさもいとはず大入にて、仕内もともに大出來、盆がはりの神原三左衛門も能く、九月より忠臣藏のゆらの助は、年配にはちと不相應、いかゞあらんと思ひの外大出來なりし、スキ城わたしのまく切より、一力の搗刀の鍔音文の見やうなど、都てゆらの助にこまかい仕内の初りしは、凡この人がはじめかと存る、江戸の人いかにも長十郎や京四郎、彥三郎が仕たまでは、一通りの事で御ざつた、既に其とし尾上菊五郎も京都のぼり、暇乞にはじめてのゆらの助をつとめたが、右三人の仕内の通り、其のち京にていだせしゆらの

助は、早仕内がつき、力彌がしらせ、城わたしなどのまくつがもなう、細かひ事をしましたて、頭取左様な事でも御ざり升ふ、扨文七丈ゆらの助、彌大あたりにて、京のぼりの暇乞も別に出さず、口上ばかりで濟すほどの繁昌、明和五年いのとしは、京都山下座へ菊五郎と同座のつとめ、扇子紋のほうかぶり出ておとはやの先生が登られたで、さしもの宇治屋もうぢ〳〵で有た、スキいやかほみせの櫻井新兵衛、仕内は隨分よけれども、何が此六七年、大坂にてあたりつゞけの此人、どのやうなもの早う見たひ〳〵とまちかねて、評判過たのと、菊五郎方は前の噂、夫ほどになうて見た所花やかに、所の氣に叶ひたるに、内のり外のりの違ひが御ざるで、スイカクそりや大佛は大い物とおぼへて、初て見たときにおもふたほどにないと同じ事さ、大ぜいきつと〳〵、扇組何でもきく五郎におされ、よしをもあしをで有た、キリノトツほうかぶりあほういやんな、其かはり小舟入の由兵衛にて、梅幸もへいかう、頭取つゞいて物ぐさ太郎、一の谷の熊谷ぶんぶく茶釜の躶身のうれひなど、さあ上手じやといひ出し、菊水の巻のまりかせ秋夜、かくべつのあたり、

秋がはりの黒船もよく、スキ此三四番の狂言、由男にのみ評判有て、外に役者はないやうに有た、スイカクみる度／＼に、大佛の大うなると同し事さ、ヒイキどうで御ざるの扇さん、頭取同五年は菊五郎退座にて、親新九郎上京し、信仰記に此下藤吉、奴より唐冠迄の出世姿も能く、ムダモノゑんま樣／＼といふて、來るものが有たが、大ゼイ何の事じや、譯もないすつこんでいやれ、頭取二の替り桃山錦にて毛利元成大出來、小の丶道風のかわづ塲、二の切のうれいなど、仕内ほどにあたりめなく、盆かはり團七九郎兵衛、京中一同の評判大人にて、白極上上吉の處きつと見へたとなつとくさせ、こしごへ狀にて五斗兵衛、忠臣かう釋の十太郎、いづれも／＼大出來にて、功者いとま乞の惟茂、曲水の所作事など、いかにも是迄、大坂でほめた所があらはれ、珍重致した、スキあふみや治郎右衛門といふ所も、外に仕人はないぞや、頭取同六丑のとしは、大坂三枡他人座へ下り、金作相人にやつはり曲水うけよく、間のかはり双てう／＼、叶のほうかぶりいで丶おつとひな助がぬれ塲に、おもひの外のうきあし、功者ひな助は女形よりめづらしき役廻り、殊に口上書も文七をたて丶の事で有たに、おとなしうないといふ氣どりの、必竟芝居師のあやまり、よしをの難といふでもないてスキいかにも左樣、所詮文七の仕内の能い事はしれた事、二のかはりさごの金山にあたけ仁平、をだ卷のまく切けしからぬおもしろさ、今に申出しておる事で御ざる、頭取忠臣かう釋の石屋五郎太は、表方よりの望にて、若かへりの役大出來、十太郎は元よりの事、夫よりほり江の淨るり、黒舟の作りかへ忠右衛門のやくもよく、戀女ぼうの一平大出來、同七年とらのとしは、子息與三郎に座本をさせ、横山太郎かぢや太郎七あしや道滿、丶の谷の熊がへ、いづれも前かどよりは工夫有て、ひさしほの大出來、秋つしまは故八甫、故清兵衛とおとこ揃への大あたり、スキおにが嶽と秋つしまは、八十島とならびての立引の出合、此のちみる事も叶はぬ事、頭取同八年卯のとしはやすみ、コトシヤいせの芝居へ行かれたれど、御かげまいりのさわぎ最中、ムダ太神宮におされて、文七八藏も御秡ばこ脊負たわい、頭取何さ譯もない、同九年辰のとし、小川座眞上上吉に改り、スキ此譯はなにらやら評書にあれど申に不及、三拾石に爪長屋、已

前より又々おもしろく、けんぼうの束帶姿も、能く切の立は家のもの、二のかはりの味方が原に、嶋むら彈正大出來、ワヂロ切のむほん人といふ、おとこではなひ、功者仕內に置ては申分なし、狂言すぐれず、全躰にくていな事させて、其氣にのらぬといふやうなもの、頭取夫より千本さくらに狐忠信、カクマシリ此みち行格別のおもしろみ有しと、相人の鯉長に承つた頭取九月より親新九郎一世一代に、伴左衞門を出して大入、此人は例の物ぐさ太郎と、切狂言奴蘭平けしからぬ出來やう、スイカクフウ今度の舞臺納にも、物ぐさ蘭平を出されたは、此吉例と聞へたわいの、頭取安永二巳のとしは、京よし澤座へ登り、コトシリ此かほみせのつみ物は、前後おぼへぬ仰山な事、繩手もいしかけも通りのならぬほどの事で有た、頭取かをみせは一鳳とうつぼ猿の狂言評よく、二の替をた卷のまくにて、目をおどろかし、三のかはりかぢや太郎七大當、スイカク其春は高だい寺のかいてう故、京登り多く、古今ないほどのはんじやうなりし、頭取次に國性爺に和藤內、かり金備に文七やく大出來、近江源氏の佐々木も能く、暇乞の蘭平大あたり、ガクヤシリ此時向ふさんじきにかけ出しが出來、棧敷の直段の上りしは、京地にてまれなる事、全く此人の手がらと存る、頭取同三年午には、大坂小川座間のかはり、やはづの紋日にかぢはら源太、叶扇の二へ出ておつと此大臣姿は、キリノトウいふな〱、其代りにひ口の治郎を見なんだか、スキ何樣源太は同じ座に小川といふやつし形をのけて、持まへにあはぬ事をしられしゆへ、功者又して見るも器量かい、扇ヅミ全躰はおさはやの忠臣藏に抑れて、九州細見もついやすみ、スキくはんねう門兵衞は、少し譯の有ての事、此人にかゝはらぬ事、三のかはりむつの玉川に、うき世渡平と秋づか帶刀にてうちかへしたる大入、こしごへ狀に、キリノトウ後藤におされて、梅幸の三曲油はかりもついやすみ、頭取盆がはりかり金染に文七のやく大出來大入、久米の仙人、守彥やく、此人計は評判よく、同四年未のとしも同座のつとめ、かほみせのかつこほうろくも能く、万歳の姿より楠正成となのる仕內、かくべつの所有とかんじさせ、ガクヤシリ此せつ家をもとめ、故一蝶へ孝行の噂も高く、つゐに一蝶を老の入まひ能く終らせ、野おくりなどのけしからぬ事、スイガク太

左衛門ばしが、二間程へこんだ計の仰山な迸り人で有た、頭取夫よりいもせ山の大判事は、はじめての白髮かつら、しうたんは家のものとて大當り、二やくふか七の丈夫さ、かさねの輿右衛門大入大當り、在はらけいづにむら雨の女婆もめづらしう、蘭平はいつもの事とて嬉しがらせ、布引の實盛大出來、千兩幟の千羽川、角力おとこに應したる仕内大評判、忠臣かう釋の十太郎までかはりめごとによろしく、同五年も小川座間のかはりのぬれ髮、故八甫と久しぶりの出合も大入、筆水の卷にて刎川主膳評判能く、信長記の花子、松下やくの半白かづら、一蝶其まゝと受能く、秋かはりの水滸傳小平治大出來、また北川宗左衛門も出來、同六酉のとしは、あらし七三郎座のつとめ、かほみせの大ごくに目をさまさせ、二のかはりは伊賀越の新狂言、冬より大入大あたり、ヒイキこゝはおれにいはせて下され、此時角の座組は、梅幸眠子淸兵衛其外英子などの花方より、小つめまく引までを撰でかゝへ、當座は歌七とおく山と中山兄弟計にて、しかも世界一同にひゞきわたるほどの大當、諸國を廻る商人いかにも其年はせんだいより、長崎まで芝居といへばいがごへで御ざつた、ひさゝせほりへのお染がはやり、諸國一同にお染をいたしたと同じ事、扇より夫はかめ助がつくりのよかつた故、叶おく山がよかつた、カハより合柳が内記があたつた、ムダ新平が石森慶安もよかつたぞや、スキ東西〳〵惣ぢち合とは申せども、第一座がしらの出來がにぶうては、久しうたもつ物ではないて、リヤウリ人なんぼ庖丁に手を盡しても、立ものゝ魚鳥がよからねば、ほつこりとせぬ物、ムダ本にいがのし、スイカウ伊賀曲、ワレシヤリ其春のいせ參りも、伊賀越がはやり、かたき打の有た上野の寺は、どこどこやと、孫八が石塔までさがしたほどの事、ヤシキ衆政右衛門の鍵傳授、此方共もおどろき入た、功者妙なる事の手ごたへをさせたもの、むかしのあら木又右衛門も、まづかうあらんと本ンの事に思はれた、京の人いかにもすさまじい評判、故新七儀左衛門が此うつしを仕てさへ大入りで有た物、頭取續いて三の替、仙臺萩にしげ忠の芝入婆、かたくらの武道、鐵之助の荒事、三やく共大出來、スキ二の切廊下の下にて大立入、四段めがんつ坊を打殺す氣味よさ、又かつら川の長右衛門も評能く、功者しかた講

尺の佐々木は先達て、故八甫のやくで有しを、又々手だれの小手きゝ、格別な所が有たぞ、頭取 其冬京都へのぼる暇乞に、田はらの又太郎にて、頼政の執心うつりての物狂の能仕立も能く、同七年戌には、京三枡座のつとめ、顔見世頼政間の替り、布引の實盛評よく、二のかはりはかたおりに小平治大出來、つゞいて伊賀ごへ大入、スキ 此狂言などは崩るゝほどの事で有うとおもふたが、儀左衞門新七が前のとし仕たと、同日の論ではなけれど、殘念は出しが早うてうつとしいといふもの、藥やいで、本家根元の功能は有がたい處がござる、とくと味うて御らん下されい、見功者 違ふたものといふもくだかい、頭取 ひらがなの松右衞門は御家の事、いへぬし鹽太おかしく、盆狂言の土佐又平、此人計は評判能く、仙だい萩の三やく又々大入、スキ 大切の對決場が出いでのこりおゝい、頭取 しかたかう尺の佐々木もやつぱり嬉しがらせ、同八いのさしかほみせ、國太郎とこたつの立入おもしろく、此とし元トの白極にもどり、遠國の人 我ら芝居が大好で御ざるが、少しふしんが御ざり升は、かやうにいつもあたりまする人を、久しう眞の字にしておいたり、漸に白極にもどしおくなどゝは、スキ 御尤の御さつと、いかにも先年白極にすゝめた時分までは、評者と世間の眼一同せし處が有たが、近比は此人にかぎらず、十目の看る所と、功者 成ほどちがふて御ざるが、唯世間の眼が鏡、まことの上手といふは此文七丈、ガクヤシリ 見物よりはがく屋方の請とる處は、又々かくべつで御ざるとの事、ヒイキ 何でもかでもおもしろがらすが證據、外事なしに藝評〳〵、頭取 問ィのかはり、信長記に花子の段にてかんじさせ、二のかはり外題のはじまりにながいや山左衞門やく大出來、つゞいてかさねの與右衞門大入大あたり、ヒイキ まつたり頭取さん、五月がはりに雷天源八大あたり、六月芝居にめづらしき大入、頭取 いかにも前後仕りました、忠臣藏のゆらの助もなにかといへど大入、蘭奢待の伊賀守はきつと仕内をみせ、其後あしのいたみとやら引込れ、大坂へ下ルいとま乞に後藤、功者 これは打わるほどの入で有うとおもふた所、初日延引で拍手ぬけがして、かくべつのあたりはなかつたが、當時此やく外にまね人のない事とかんじ入た、頭取 同九子のとし大坂いろは座へ下り、かほみせ奴熊平にて足を

いためて、鴛を借る狂言にて大當、間ィのかはり忠臣藏、スキ久しぶりにて慶子との同座、石堂のやくも能く、かこ川本藏のやくいかゞあらんとおもふた所、故一蝶ふたゝびあらはれ出しかとうたがふ計のてつゝりさ、序の中九ツめ、慶子と兩人くらんでもつやうな味ひ事共、コトシリ天川屋のやくは、これまでかぶきあやつりにて四十八度せしうち、隨一の義平にて、町人の節儀を守る仕内、見込でたのんだゆらの助まで、あつぱれの知者なりと おもはれるほどの事、スキ二のかはり、大内言葉に 胴帥彌助にて、我子をもしらでころす仕内しうたんにて、一同に泣かせ、二やくよしの三郎は、きつね忠信の立入、評書になにかといふたれど、外にいらい人のない事、大切慶子が立やくのあしらいやうまで、小手の利たもの、頭取次に衣紋かゞ見に、角力取孔雀三郎、スキこれはかぶきにて、古今獨歩ともいふべし、功者このやうにはまつた役は有まい、頭取からだのこなしかつこうまで、おらが中間にもめつたにない、きつとしたかみとりじや、小角カトモおいらがからだとかへてほしいなア、ヒイキ仕内の事は、功者いふに及ばずしれた事、頭取ぽんがはり渡海屋銀平のすごみ大評判で御ざり升、切狂言戀のぬきがきに、伊東杢兵衛の世話武道、スキこれは又格別の大出來にて、地髮地がほにての辛抱狂言、功者家內にて丸ごしの內も、きつと武士のうつり宜しく、麻上下にてうれひ、墓目の傳授の塲のすること、狂言の眞といふは此事、スキ女中衆やおとこ連も、目の赤うならぬ人はなかつた、コトシリ隨分の此人ぎらひも、芝居ぎらひの衆迄も、本ンの淚をこぼしたぞ、ヒイキたまらず立上りなんとかういふ處もするじや□□る上手名人外には有まい、頭取其次に行ひらの太郎七も能く、同十丑のとしも、同座のつとめかほみせの斧屋鯛介は、惣八もごきの事をして笑はせ、二のかはり由輪文章に、すゞ木喜多頭も、しつかりと出來、反魂香のどもの又平、手水鉢の塲は一同に泣せ、サンシキ幽靈の段は凡をはなれたるといふものにて、慶子奇をあらはせば、由男妙を盡すといふもので有うかい、見功者の老人出むかし姉川新四郎、瀨川元祖の菊之丞と兩人が、此狂言を見てから、たれがしてもおもしろうなかつたが、スキ今度のは何と御らうじたぞ、老人其時の兩人よりは、スイガクごふじやな〱、老人慶子よし

をの方は、大ゼイ何と〳〵、老人二段も能いかとおもはれ升じや、ヒイキア、嬉しい、いづれも御聞なされたかな、スキさあ能い事には魔がさすとやら、人のおもしろがる腑ぶくら、芝居の類焼ふしんの間は、曾根崎にて同じ狂言大入、次のかはりかしくのふく清、又又前かごよりは功のつもりし處有とほめられ、南へもどり ひらがなの松右衞門と いへぬし二やく共出來た、内三段めは舍柳と二人、きつしりとしたもの頭取次のかはりに いもせ山、二段めの芝六ざんぐりとしてうれしいに手ごたへさせ、三段目の大判事、前年の役から見ては拔群のうまみ有て、スキ相人さだかは慶子、久我之助に巴紅、ひな鳥に蘭耕にて、姿かつこう仕内まで打てつけた同士、四方髪慶由龍虎の術をなすといふものかい、場より又してはちんぷんかん、夫よりは其前の雷天源八きみがよかつたぞい、スキ慶子いとま乞の最中、又々足の痛み有とて引かれしが、てぶ〳〵噂するは、もはや役者を止らるゝの、いや新九郎に成て出るのと、とり〴〵の風說、力をおとしてゐた處、とらのとしは名古屋へ下り、ひらがなの松右衞門大入 大當り、次にあたけ 仁平と、雷天も此人計は大出來のよし、是では又々大坂へ出らるゝよと、たのしみゐるうちヒイキ大坂も中の芝居は休み、角も不繁昌にて有かなしのやうにめいつた所へ、九月九日より一世一代狂言のかんばん出しかば、京大坂はいふに不及、近鄕他國なり渡りての評判、スキ見事な摺物が出るやら、盃を配るやら、前狂言は、頭取即物ぐさ太郎、大切は蘭平にて、初日からくづるゝばかりの大入、日にまし夜にましての大評判、功者蘭平は每度の事ながら、ひとしは手に入たる大出來にて、とかう申に不及、物ぐさの一の口、姿いやしく心雲上なる仕こなし、屋形物がたりなどは、皮肉のはれた事、頭取三の口のめつたぜりふ、スキ山下金作助として出勤、かつらきの役、兩人共に拍子有てそゝらず、かへつて見物の尻が、ひよい〳〵とうくやうに有た、頭取三の切の上使やく、かこひの内にて姿をかへ、千の利休となのる姿の古び、スキいかにも大德寺に姿をのこせし、木像と云處が有、功者切のうれい、金作と二人無言の仕內、ほめるに詞のたらぬほどじや、ヒイキ大切のらん平、大丈夫の仕やう外にまねするものは有まい、功者後日狂言はかたおりに小平治

やく、我弟に異見の段、又よのつねならぬ處が有て、見るにむねのふさがる様な、塲よりかみなり塲の立入、大切の雀おどり、もうこんな姿は見る事成まいと思へばのこり多い、他國の人あしの痛いの、多病なのといふは、うそであらうとおもはれるはいの、叶組物ぐさ三の口切、共に山下が相人に成て出來たのじや、ひとり當テとは思はれぬ、塲組夫々はかたおりは、奥山がはこの藝故大入じやわいの、スキさやう仰らるゝは、筋ちかいと申もの、いかにも里江丈大出來でかづらきしがらみ共におもしろう有たが、去年已來中の芝居にて、さしたる事もなかつたに、此度は江戸のぼり此かたの大出來と申は、全く由男の相人に成た故、カクヤシリおく山が毛剃九右衛門も、はるから出したふても、此人を平がたきにして、遣ふ程の立物がなかづた故じや、ヒイキ角の芝居も、去冬已來ほつこりとした入もなかつたに、これほどの大入も、功者最前伊賀越への塲で申た通り、一人して引立るとはこの事、先物ぐさは作りあほう、利休に成ての向上躰のしうたん、蘭平は大丈夫のむほんがかり、もぎだうなる似せ物狂ひ、小平治は世話事の實儀藝、扨これ茂の所作の雲上なるぬれ事の和らかさ、はげしき立入に二挺つゞみの手に入たる武道の忠臣、所作しうたんやつし、道外おとこ立、時代の向上世話事の仕内まで、夫々にわかれたる縦横自在、妓家の一大家、天然の上手といはむに憚有べからず、各いかゞおぼしめすぞ、惣一同ちつとも申分シない、名人〳〵コトシリ次手ながら申ませうは、凡かぶきあやつりにて、一世一代と申事、寶永五年子十月、京榊山しばゐにて、坂田藤十郎一世一代とかんばんを出せしは、藤屋伊左衛門の藝の一世一代なりし、延享三とらの歳、大坂市山助五郎座にて榊山小四郎、つりふね三ぶ、一世一代と申て、五六日つとめて休たり、又豊竹越前一世一代の女はちの木、延享丑の十一月より出し、大入なればまたなき事にもてはやせしも、聲からも老年に及びし故、人のおしむ心もうすかりし、寶暦七丑のとし、豊竹筑前一世一代はた揃へをかたりしもかくべつの評なかりし、安永四申五月、大坂中の芝居にて、嵐・小六一世一代、山姥の狂言つとめたれども、日數少しの間なり、同末のとし、豊竹島太夫一世一代をつとめしも、所々にてかたりし故、なにかと人の噂もあり

し、同京にて加太夫ぶしの大和も、一世一代をかたれごも、久しひものさいひふらしけるに、明和九年辰九月故中山新九郎一世一代大入にて、なごり狂言の親玉ならんさ思ひしが、此度のやうなるは、むかしも今もならびないかさ存る、スキいか様、仕内もおさこぶりも、今を盛に人のおしめる年配さいひ、ムダ人のほしがる物も大分持ていらるゝさいひ、ヒイキ書はよし、文才も有、氣質はよし、小事フルヒえらひ油じや、由男から何ぞもらふたかい、ムダいや又めつ□□□人でもな□□、頭取東西〳〵九月九日より十一月四日まであたりづめ、さんじきうり高、スキまつた〳〵、めいめいおぼへた通りをいふぞ、九月九日より十三日まで、さんじきのぼり、千十六軒のうり高、せんば同十八日まで五日の間に千二十一軒、中のしま同廿三日まで千廿七軒、シン町同廿七日まで千廿九軒、ザコバ廿八日より十月二日まで物ぐさ太郎、六日より後日狂言、此間三日の休み、都合五日の間千三拾二軒、スキいかにも左様、七日より十一日まで、千百四拾五軒、上町十六日迄が千二百八拾五軒、堂シマ廿一日迄が千三百五十四軒かい、北バマ廿六日より廿八日まで、千四百三拾壹軒、かやうに段々入のつめるは、殘り多さがかさなる故かい、遠國の人しかし十月の末では入りもゆるみ、霜月へ延したが、不評判で有たやうに申ましたが、コトシリ夫はあんまりはやつた故、よしをぎらひの衆がそねみての風說さ、芝居茶屋もいそがし過て、奉公人の息する間がなかつた故、むりむたいな惡說、スイ論はむやく、現の證據は十一月二日まで千五百八拾九軒のうり高、伊達もかざりもいらぬうれた處が、本ンの事さ御らうじ、田舍人ウナツキさやう有さふなもの、ロリノ人最前からの千軒のぼり、〆て見ましたれば、五十一日の間に、一万千九百貳拾九軒さいふ事は、これがはじめのおはりで御ざろふ、スキ中の芝居へ梅幸雷子が、久ひさぶりのかほみせ初りしにかまはず、夜半過から見物がおしかけ、スイガク是まで芝居さいふさ、目玉をむきしかた親仁も、文七さやらいふものゝ仕廻の能さ、奉公人共へも出精のため、下本にみせむさ出してやり、內儀娘のかくして見て仕まふたるをもしらず、かはり〴〵に見せにやり、ウレシガリ芝居茶やは、さんじきの手に廻らぬを、ほね折て草臥るやら、小女郎ごもはねぶたがつてぼやくや

ら、ガクヤシリ江戸の役者からは、あやかりものとて、いろ〳〵の物をおくるやら、スイガク評判所からは、目をさまして至極の二字をおくるやら、ヒイキ揃藏他藏が連管の三番叟、咲藏が白びやうしがゝりの翁やく、其外太四郎金七小三郎榮藏新七なんど、中山をなのる者は殘なくはやしかた、ムダ中山の觀音様も、何ぞしやうかと仰られたほどの事、大ぜいハアミヽ、頭取狂言の時大入のにぎわひ、此人の事を千々の夜咄し、彭祖が菊もふたゝび匂ひ、和淸が鶴もこゝに來て、悅びの舞をやかなづらんかしと、評判すでにみつる比樂屋のごろごろねとりの笛とゝもに、かけいづるは天冠かけし中山咲藏、水干に大口姿、金幣うちふりのう〳〵と上座に直り、善哉〳〵、我は是いづものお國が神靈なり、今度中山文七が、一世一代、芝居冥加に叶ふたる道の名譽なれば、妓道をつとむる末々まで、文七が終にあやかり、妓家の正道を守り、芝居繁昌の基をなせよとおもへば、神去て、ガクヤ方大ぜい行する守れと、其神詫の告をしらする大皷も、拍子木も、久しき芝居ぞめでたけれ、

天明二壬寅冬十月

作者浪華蘆陰軒

跋

舞樂てふものは、もろこしの堯の御代にはじまりて、我朝にも上古より、雲上の御遊には行はせ給ふとかや、中古にいたりて、猿樂なるもの、室町殿の比より世に弘く行はれて、武門以下の翫ものとなされけり、これに續て、能狂言てふものあり、さるは漢土の俳優朱儒の類ひなるものにや、こゝに歌舞妓狂言といふ事は、亦其後に發りて、もつぱら世に流行す、これまたもろこしの地にもありて、勾欄戲塲などいへりとかや、其趣猿がくは、四拍子謡曲をもて、これがために加ふ、舞奏る事其曲々の文段章句により、髣髴として風姿あるを堪能とす、又歌舞妓といつぱ、喜怒哀樂の情を實にうつし、しかも風姿風情を備へ、人をして感歎せしむるをもて、此道の上手とも名人ともいふとかや、所謂中山文七なる戲子、其ひとゝなり清白大音聲爽にして、其業におけるや、實を捌く時はよく喜ばしめ、恩愛節義に沈ンではよく哀しめ、怒る時は猛虎も恐れ、笑ム時は嬰兒もよくなつき慕ふ、はた兵術角力の所業をなせば、見るもの左袒毛髪をそらにす、復タ俳優談笑の戲におゐては、万人腸を蕩かして大笑す、さは此業に妙を得たる堪能の一人にして、いまだ知命の壽を殘し、功成名遂身退き、去秋一世一代の舞臺納をつとむ、こゝに好事の人ありて、渠が一世の狂言記を編て予に跋を乞、全編預從來の狂言を集め、年月時日を委す、されば芝居を好むものゝ爲には、臥遊の袖寶ならんかしと、かの好人が需に應じて、しりへに筆を採ものならし、

天明三年癸卯仲秋望日　平安巨通道人書之

中山文七一代狂言錄終

眠獅選叙

雛は仕干の切にて、鳥の子の生せしをいふとぞ、しほらしくこそきこゆれ、獅は猛獣にして、虎豹を食さす、其やさしさにたけきを和して、身の自由をなすやらん、眠が師佐渡島が所作の傳に云、狐は出るに狩人或は犬の恐ありて、頭をおさめ居る事をなさず、獅子は物におそれぬものゆへ、臨眠に首をつかふとぞ知るべしとや、其一睡の夢の間も、金毛の光をまふくる、榮花の工夫も齢も、五十年の歡樂も、極位になればさとるべしとぞ、示さんものとは、

安曇散人

云々

ゆたかなるまつりこともふたとせの春のあした

眠獅選卷之上

八文舍自笑著

或人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ、師の云、初心の人ふたつの矢をもつ事なかれ、後のたのみて始の矢に等閑の心あり、毎度只得失なく、此一矢に定んと思へと云、わづかに二の矢、師の前にひとつをおろかにせんと思はんや、懈怠の心みづからしらずといへども、師は是を知る、此いましめ萬事にわたるべしとは、兼好法師の筆まめにまかすも、習ふ身のしめしには、有がたくも聞得ぬべし、今の役者の馴しにまかせて、役の數々受とる時は、ひとつを捨てひとつを大事にすれば、一日を見飽かず、數毎に大事にすれば、其一日に鬱しさをまして倦ともいはんや、むかしと今とは斯ばかりのかはりも又ある歟、眠獅は此心をしるやしらず、俤は化粧ひを以て替れば左も有ぬべし、氣持のかはり時代と世話、序破急のわかり所は及ぶものもあらじ、其中に立役、實惡、平敵、老女、親仁方、若衆形、且若女形は寶暦より出て、安永迄の年數、凡二十四年の生と立なれば云にも及ばねども、此部も又其内の功に應じて、立役となりての夫に對せしを引上て、其位を正して書ならぶるも、各其位に合体して、今大至極上上吉の、嚴重なる事を知るべし、

○立役之部

極上上吉　春藤次郎右衛門　つゞれの錦

幾度出ても、正月の場の情のはまりよく、立役の俤の極るを以て、此役を卷頭とす、

至極上上吉　竹中官兵衛　狹間合戰

狂言と姿との取合より、軍師の丈夫の俤より出て、無念と愁ひの取廻り、古今此上や有べくとも、

大上上吉　鷺坂左内　戀女房

捌役のいさほしとても、奇麗にして情深く、

至上上吉　福島屋清兵衛　八重がすみ

世話事の輕く取なしで、男氣の愁の付かた、此餘は是にて可知、

大上上吉　武藏坊辨慶　堀川夜討

大上上吉　齋藤太郎左衛門　大塔宮

至上上吉　放駒長吉　双蝶々

上上吉　濡髪長五郎　雙蝶々
上上吉　朝比奈三郎　東かゞみ
上上吉　安部貞任　安達原
上上吉　天川屋義平　忠臣藏
上上吉　毛谷村六助　眞顯記
上上吉　小野道風　靑柳硯
上上吉　鬼一法眼　三略卷
上上吉　かげ清　娘景きよ
上上吉　菅丞相　菅はら
上上吉　大星由良之助　忠臣藏
上上吉　和藤内　國性爺
上上吉　安倍保名　あしや
上上吉　千羽川吉兵衛　千兩幟
上上吉　帶屋長右衛門　かつら川
上上吉　唐木政右衛門　伊賀ごへ

〇實惡之部

大至極上上吉　藤原時平　菜種御供
極上上吉　石川五右衛門　金門
大上上吉　石川五右衛門　釜ヶ淵
上上吉　石川五右衛門　狹門合戰

上上吉　かぢや團九郎　新うすゆき
上上吉　松王丸　すがはら
上上吉　やつこ佗助　鍋まつり
上上吉　印南大膳　播磨巡

〇敵役之部

極上上吉　高師直　赤穗蘆竈
上上吉　梶原平次　ひらがな
上上吉　梶長兵衛　かしく
上上吉　稀世　すがはら
上上吉　ひぬかの八藏　戀女房
上上吉　ごくもん庄兵衛　出入のみなと
上上吉　石川惡右衛門　あしや
上上　斧定九郎　忠臣藏

〇道外形之部

大上上吉　一條大藏卿　鬼市
上上吉　物くさ太郎　十帖源氏

〇花車形之部

大上上吉　覺壽　菜種御供
大上上吉　岩手　安達ヶ原
上上吉　みめう　近江源氏

上上吉　覺壽　菅はら
上上吉　山姥　鶯塚
上上吉　岩ふぢ　かゞみ山
○親仁形之部
上上吉　鮮屋彌左衛門　千本ざくら
上上吉　竹村定之進　戀女房
○若衆形之部
上上吉　大星力彌　赤穗鹽竈
上上吉　捨若丸　兒ヶ淵
上上吉　鬼若丸　鬼いち
○子役之部
上上吉　怪童丸　嫗山姥
○若女形之部
大上上吉　板額女　和田合戰
上上吉　閻淵角右衛門女房おくら　嚴柳島
上上吉　たそかれ御前　愛護若
上上吉　繁の井　戀女房
上上吉　はかた小女郎　けいせい鐘嗚渡

此狂言は、女形の名殘りに評よかりし故跋に記す、凡衆人の見物の沙汰よきさ、又役のそれしさを爰に出す、されどもあそこか爰かとの論は、絶ずもあらんかし、

夫ゝ春藤は、はじめより眼の定まる、正月の塲あまたたびくり返したれども、かはらず、大安寺堤も次第に評よくありしといへども、只正月の塲程よくもあれば、外になく○狭間合戰は京都にては（齋藤道三）來作（官兵衛）五右衛門四役、後來作の役は片岡仁左衛門へ讓りて三役を勤める、又大坂にては齋藤道三を讓り、來作との三役を勤める、各其役々の氣持よく、五右衛門の若々しきも、一入よきとはいへども、竹中は前後此役を、是程に勤むるもの外に仕人なし、

或人問て曰、京都にては大淸の役嵐來芝、大坂にて芳澤巴紅なり、來芝誠に此上もあらんといへば、巴紅よく間を合すといへども、見物一統來芝ならば、又一入よくもあらんと思へば、下地よき相人有りて、少しは甲斐なくもあらん歟、眠答て云は、當時來芝程の者無之あれば、狂言には上なくもあれども、いろは女形より勤る、時に應じてよくせり、相手になりては、此役は來芝は、計略に落し兼ぬ所

あり、いろはの計略には掛りがたくもあれば、欺されたる時の無念さは、百倍にして向ふへのこたへよく覺へて、いたしよく候とぞ、かゝる次第も、上手となりていへば、唐木政右衛門は由男當り狂言にて、爰に出すにもあらねども、此狂言二度出し時、眠獅此役を勤、しかし故障ありて初日の夜より暫く引しが、假に中山他藏是をつとむる、大に評判よく、しかも師の流義を守り、見付たる仕うちに大に悦ばせし事、凡十四五日もありなん、眠獅よりも能するとぞ沙汰せり、程なく再勤有て、此役をつとむるに、中山の一流を用ひず、鎗の傳授も品かはりしとて、其風儀と係の別なる事、由男に障らずも、感じさせし思ひの評多かりし故、立役の部の殿に居たり、

一眠獅親父は、世にしれる通り、嵐小六の事也、此小六事往昔吉田小六といひし、小兒の時より諸芝居にて名をとり、後には上手に可成仕打ともいはれて、享保十二未霜月、京戎屋名代芝居にて、則師匠後に新平と云ひし、二代目嵐三右衛門後見となりて、座本をつとめしが初舞臺にて、段々立身、元文四年より上上黑吉となりて、三ヶ津にて名の殘る狂言多く、無類黑極上上吉となりて、山姥、重の井、岩手の女非人、きばのお才、土手のはる、春藤次郎右衛門女房お町、是等の狂言にては、外御利生民谷新左衛門女房お春、金毘羅の役者のねぶつて見る事もならぬ仕打、もとより所作事にはしかく、石橋などは菊之丞、富十郎の風儀にかはりて評よく、やごとなき御方よりとして、鋏細工にて叶と云字を紋に彫り給はりしより、叶の丸を紋に付來りしが、寶暦十四年より、角に小の字に戾り、明和六年丑霜月、大坂山下八百藏座にて、嵐三右衛門と名乘、立役にて六法を顔見せに勤め、其年の夏より休み居たるが、安永四年未十月より、京都にて子息雛助元服の舞臺にて、一世一代に山姥役を勤め、則先年逸風と勤られし快童丸は、雛助勤て大入をとりて、其暮大坂へ下り、翌年秋大坂にて、又も京の通りにて暫く山姥を出し、彌沙汰よくめでたくも引て、其後雛助益繁昌に付て、隱居〳〵ともてなされ、法名是心と自ら唱へ、毎度物詣のみにて、ゆたかに暮せしも、老ぞつもりて天明六丙午年七月廿三日、遠國の客と成しとぞ、舞臺勤めし事四十一年、行年七十七歲、

一眠獅父母に孝心深くして、付添ふ事三十四五年、凡同座瀬實暦十三未年、中山由男 謡髪長五郎勤めし時一座有て、其時傾城あづまの役を勤めし時、其年親小六、京都に別れて勤めしばかり也、さあれば彼叶と云字苗字に改、門人各苗字を分るといへども其禮嚴重也、爰に記す、

關　三十郎
嵐　小六
柴崎林左衛門
嵐　源之助
嵐　新平
嵐　菊次郎
嵐　龍助
嵐　權三郎
片岡仁左衛門
中村　仲藏　名付て白万と呼ぶ

此仲藏は、元中村岩藏に續くといへども、當中村苗字預るに付て、眠獅門葉となる事、奥に委し、

一　中村十藏二代目、元は京にて振付にて、上手と呼れし小倉山百介と云し人の子にて、小倉山千太郎といひて、寛延の始より出て、京染松七三郎座にて、黒船忠吉となりしより沙汰よく、寶暦十辰年より、實父にはなれ、中村吉右衛門の子分と成て、中村十藏と改、暫く江戸に居て、又大坂をつとめ評よく、歸參して猶沙汰よくも有しが、江戸に由緣をもとめし沙汰もあるなり、大坂をつとめ、天明八年申の夏比、不圖病ひ付て弱りながら、赤穗鹽竈の由良之介役を勤、終りて病に臥、自分覺束なくも有しや、眠獅を病床に招きよせて、師父と家名を見立賴むよしを賴み置、其年六月十二日に終りをとりぬ、眠獅是を受て、門人の内にて、其名を續さん事をなす事、一度に及ぶといへども、事ならずして、ことし一周忌に及ぶといへども、其相續ならぬ事、跡のくり言に聞かねて、據なくして其時に及びて、叶秀之介改名させて、小祥を弔ふ、よつてもて其弟子中村の苗字を、當時三代目中村十藏秀之介事これを預る、今十藏若年なるを以て、眠獅是をとり計ふ分、

中村　岩藏
江戸　中村　竹藏
中村四郎八

江戸
中村吉三郎
中村初藏
中村市松
中村重吉
中村大三郎 今嵐吉三郎兄也

時に眠獅、所作事に扇の手を習ひ得んを勵み爭ふ事をはやらせり、依て其中にして、直弟子又弟子なる事の恥辱をや遂る事有なん、我ーと直弟子にならんの流行も、都會の一流一興にて、素人の門人となる所を又書加へぬる、

大坂之部
洲濱屋幸八
京扇屋つね
あづま屋此松
山もとや春野
ふじ屋菊八
つるや權八
日野屋しゆん
きせるや又八
大和屋市松

京都之部
大まつ屋くま
かぎやりく
西枡屋たつ
桑名屋琴井
かぎや友ぎく
万幸
桑名屋小大
桑名屋たく
富田屋卯の

多田屋呂間
大黒屋八重
きくやもと
播磨屋忠藏
さかい屋音吉
いづみやもと
壺中館榮樂
山もとや小なつ
いわた屋せう
ゑびす屋今藏
松屋や東吉
あふぎやいそ
富田屋虎吉
あふみやべん
たけやいわ
すはまやゆら
はりまや小作
京扇屋小傳
あづまやみや
ゑびすや春次

かぎやわい
西枡屋ため
内田屋いま
八百屋若大
内田屋こと
大まつ屋みね
桑名屋萬代
大まつや小いそ
松幸おくに
富田屋來葉
西枡屋多がの
西枡屋あさ
桑名屋左近
八百屋そりやう
伊勢定右衛門
橋野良助
奈屋丸
鳥羽屋忠八
大津屋淀吉
大津屋多吉

世話人 洲濱屋幸八
同 きせるや又八
大坂惣門弟預り 近松軒

鳥羽屋大八
大津屋濱吉
鳥羽屋友八
鳥羽屋卯八
世話人 伊勢定右衛門
同 鳥羽屋卯八
京惣門弟預り 富田屋善四郎

此人初舞臺より、黑木賣後ロ面に名高くして、女形の内に度々所作を出し、石橋などもつとめたれども、立役になりて猶あまたゝび所作をつとむ、其中に扇の手に妙を得て、やさしくも自由をなす事に愛て、斯のごとく素人の門葉多しとしるべし、

一　去年寛政元己酉の九月九日より、浪華の一世一代として、角の座にて所作を出す所繁昌なして、廿九日まで勤め、次に中の座にて、顔見せの助として、澤村其答招き下して、十一月十一日より、大切に所作かけて、顔見せ狂言を取交て、大に見物を悦ばせ、十二月三日までの大入にて、目出度千秋樂をうたふ、其次第、

角の芝居中山福藏座にて、
大切景事 山伏攝待忠臣旗揃
大切り所作事 化粧六歌仙 大坂中の芝居淺尾獺太郎座

康秀戀づくし　三下り

小野小町　澤村國太郎　官女　山下金作
官女　吾妻藤藏　同　市山太次郎
同　淺尾獺太郎　同　嵐源之助
同　坂東岩五郎

戀に様々有明の、月になんどのあふせこそ、ソリヤしれたこと月がこい、はづかしいやら、こはいやら、うれしいやらのにゐ枕、其おぼこいも又命、誰かれなしの情しり、やはらこいぞと浮名立、一世一代みてこいの、叶みんしがお目見へは、あたしつこいと云事か、姫ごぜ獨を大勢が、百万べんの數取は、念佛こいと申也、四でう半でのしつほりは、夫をかこいと云ならめ、きうじのいらぬすへぜんは、くはぬがそんじや持てこい、呼だす門口又しても、しれたせりふので丶こいか、雪は白ふてお月様はいつでも、いつでも〳〵まん丸こいじやないかいナ、コリヤ又ゑらい、ゑらしこ

い、ちよつと盃いたしましよ、てうしもてこいで有ふがや、おなごのおいどはひやこい〳〵、鳩にはさしよりこい、烏はさんでこい、からすはかつてこい、くいなはくいなじや、くいなは、〳〵

業平小町所作事　本てうし

深草少將	中村京十郎	左近國經	山村友右衛門
仕丁	市川八百藏	同	三枡大五郎
同	關三十郎	同	姉川新四郎
同	山村儀右衛門	仕丁	叶雛助

梓弓、引ば、元末、我かたに、よるこそまされ、戀の道のにも山にも、「春霞、たつな、いとはじさりとては、なびき給へと有ければイヤくもらじ胸の月、「我はれんぼの、やみ〳〵と、戀しなん身は、おしからじ、「アラうたての御ことやと、拂ど猶も離じと、「袂を取て、引留ル、引く袖も、ひかふる袂も重きがうへのさよ衣、重て來らせ給ふなと、「ふり切ルてには、思ひのたけ、心餘て、詞なく、「よみ人しらずとかへらるゝ

詠人不知と歸らるゝ、

喜撰ちよんがれ

く僧が、住かは京の辰巳で、よをうぢ山とナ、人は云也、ちや〳〵くちやちやちやゑんで、咄こいちやがゑんの橋姫、夕べのくぜつの、袖に移香、花立花のナ、こじまがさきから、一さん走に戻てみたれば、内の內義が、りんきの角もじ、牛も涎をながるゝ川せに、くごけばおちあゆ、我からこがるゝ螢を集て、手くだのがく文、唐もやまとも里の戀ぢは、山吹ながしの水でてりそふ、朝日のおやまは誰でもかれでも、二世の契を平等院とは、さりとは〳〵、うるさいこんたよホヲ、

○所作事之次第

其答を小町として、初めに仕丁となりて、姿を替て口說き落さん事を請合て、後五役の早替り、

始時代　僧正遍昭　二世話　文屋康秀　三時代　在原業平
四世話　喜撰法師　五時代　大伴黑主

此姿にて末に實惡の役あり、所作にして所作にあらず、其姿と氣持のかはりめに妙を顯はして、就中處の所作事に肝を潰させり、夫凡所作にて評する時は、

第一　業平　雲上　　第二　喜撰　柔和

姿のかはりめを評して云ふ時は、

第一 喜撰 黒衣の詫しさ　　第二 康秀 懸盡しのうかれ
第一 康秀 老の懸衣　　第二 業平 梓弓のおさなしき立ふるまひ

氣持のかはりを論する時は

引ぞわづらふばかりなる取沙汰に、遍昭の俤の殊勝さ、黒主の威有て猛き、傍者の粧ひ至て强きも、心のいさほし、次に論するは始に出せる山伏攝待にて、佐藤の老母役、初め靜御前、江田源藏夫婦と知ての狼藉よりも、其姿そなはり、深く奥に旗揃のおだやかさ、此役は先年京都にて、親小六、此尼公の役をつとめ、娘と成て旗揃ばかりを勤めしとぞ聞たるが、功をつみてやしさやかさも、又同じ扇の手と膝のはたらき、頭の切りあんばいの、雲上さを見せておどろかす、凡所作事といへるものは、後〻に花やかなる衣裳にて居並び、笛に大小の皷より、太皷三味線胡弓鉦鐃鐘などに至る迄も並べ立て、拍子を合すものなるに、此一世一代の二度の亂曲に、其沙汰なく、漸く業平の所作に、鈴木万里が歌の出語りの風情にて、三絃と二人のみ、其餘は床〻の一ふし、樂家のめりやすのみ、且は攝待より旗揃に至るまでも、若太夫ぶしも床〻の一曲にて、是はどうもと譽方をさへも、耻らふ計り、ひそまつて、見聞の感心も、自然の備にて、耳目のこたへは誠に前代未曾有のほまれは、他になくも思はれて、此二說は格別なるべくも思へど、其評をなすも、又彼素人弟子衆への寄り添ひも有べければ、時の所作を又評して書並ふる、

其次第

無量　化粧六歌仙

名譽　忠臣旗揃

上手　鐘入之段まゝたき女

自然　千本櫻道行忠信役

器量　七寶濱眞砂

天明五巳正月、曾根崎新地にてつとめ、同年十月京都にてつとめし所作事にて、椀久在所娘、土佐繪奴面賣女、融大臣、切に梶原にて、箙の鐵姿の所作、

風勢　梶原平次

安永七戌、顔見せ、源平たとへ盡しの中入、敵役姿にての扇流し、道服にての扇の手、

功者　武勇萬歳

天明四辰秋、京にて大塔宮序無禮講にて、相手嵐來芝土岐藏人にて、眠獅は村上彦四郎役、翌年大坂堀江市の側にてつとむ、

修行　蟻通し

安永八年十月、小川吉太郎座、京暇乞に嵐三右衛門と勤、

優美　小袖物狂ひ

安永八亥七月、嵐新平追善、角の座にて所作事を勤、

風流　おしなべて引や袖褄

天明六午十一月、京四條北側西の芝居にて、顔みせに來芝其答ともに、狐釣りの所作、又同十二月に堀江市の側芝居にて勤、

手練　道行對の花かいらぎ

寛政元酉七月、京四條芝居にて、伊兵衛來芝佐兵衛眠獅勤、

勇勢　關帝靈像

天明九酉正月、大坂中の芝居、二の替りに勤、

立身　花筐(たがたみ)晛石橋

明和五子九月、瀨川菊之丞追善として、反魂香狂言、又平女房と遠山の役、大切に是をつとむ、石橋は元早川初瀨といひし女形、輕業にて獅子の戯れをなせしを濫觴として、其後享保十七年、江戸猿若座にて、元祖瀨川菊之丞工夫して所作となし、石橋とぞ號け、度々出して譽れを得る、中村富十郎是を習ひて、瀨川代々中村を繼もの、皆是を勤める度毎に當らずといふ事なく、雛助親小六も、是をつとむるといへども、かたち同じうして、又一流ありしとぞ、其息子なれば雛助も父の流義となす、其時はいまだ二十六七歳なり、左はいへども、元所作事は佐渡島長五郎弟子也、此長五郎は元祖佐渡島坊より續て、傳八といへる役者の子にて、所作事は凡此長五郎より始まる、此家に傳ふ七小町、或は挪鄲の四季拆とて有り、其四時の情をつとむる事とぞ、是等より六歌仙も工夫の付たるもの歟、今の澤村國太郎も、同じ長五郎の弟子にて、常に中よくして、此度一世一代のワキを勤む、眠獅をシテとして、小町一役にてあいしらふ事、又外になくぞ覺へて、倶におさなしき仕方の許、高くして沙汰よく、其自由猶前後にたぐふる役者もあ

らじとも、所作事其餘また色々有るといへども、大略
して出す而已、

眠獅選卷之上終

眠獅選卷之下

抑嵐は前巻にしるせるごとく、嵐三右衛門三代目新平より續といへども、故有りて近世叶にぞ改める、雛助は寶暦元未年 冬霜月より 大坂にて 三桝大五郎座へ十一歳にて 出初しが 初舞臺也大坂中村十藏座にて慶子二度めの石橋の年也○顔見せは黒木うりの所作事、少しながら 初舞臺より只ものならずと云 初られ、翌申年則金毘羅御利生の狂言有て予梅松をぞ勤、其冬同座の勤にて顔見せ、後面にて大に 評よく寶暦二江戸にて梅幸元服の年也、大坂へ喜代三二度目來る、岩見太郎左衛門狂言二の替りに出る○翌年同三酉冬も、同座にて八瀬のお熊にて、母の怨靈付て、傘の下にて付聲より所作に掛り、增々沙汰よく、後々は 出世すべきともいはれ、其年夏は遊行柳の狂言出て、柳の精魂はげし丶、寶暦三平九郎物くさ年也、定助座 寶暦四由良之介、京四郎定介座キノ二、寶暦三酉松島茂平次大坂へ歸る、松本幸四郎團十郎ト成、寶暦四戌二代目芳澤あやめ終、嵐新平終ル○同五亥年 冬より、北會根崎新地にて、山本 佐吉座にて、顔見せは平假名狂言にて、大序に判官義經の役、次に間の物に 蘆屋道滿出て、六の君役○松右衛門山本京四郎○千鳥嵐小六○道滿京四郎○くつの葉小六にて大當りせし花街蛙の年也○同六子年は姉川新四郎座にて、顔見せ夏姫にて、道成寺の所作事○此冬より京澤村國太郎座へ、父子とも住て、親小六六年ぶりとて評高しく、此顏見世雛賣の所作にて大に受よく、是より△若女形之部に入、二の替り 主膳之介子小太郎にての若衆形出立にて、乳母を殺せし仕打り丶しく、めきめきと沙汰よくなりて、二役君が 代姫美いと評判にて寶暦六子、助高屋高助終ル、中村仲藏立役に成、瀨川菊次郎終ル、角の座二の替、天竺德兵衛出す年 同七丑冬も、同座にて 時忠娘郷の 君にて、丑の時參り義經の云ひ號ながら、殿の病氣にて逢はれぬ悲しみ抔も、受よく、寶暦七丑大谷廣治終ル、藤岡大吉終ル○ 同八寅冬同京澤村國太郎染松松次郎 相座本の座に住て△上上の 位にて、顔見せは判官の妹みゆき、此比は澤村國太郎、染松松次郎、玉村辨之助三人と、此人互ひにはげみ合、前後を爭ひ、出世有りしなり、二の替けいせい花鳥にて、誰袖姫にて 女形同士の泥仕合ながら、情を崩さぬ仕打と譽られ、三の替りは津國鶯塚にて、淸少納言と、娘の白菊の二役ともに評よく○同九卯冬より同京都北側にて座本を勤て二の替り 通神廓曾我にては、五郎時宗と大磯の虎の役、此春日高川にて 淸姫の役、寶暦九卯 山下又太郎、芳澤崎之助、江戸より大坂へ歸る、角の座二の替り、三十石大に當る、竹田與市鬼若にて當りし年也、此春小六村上上吉と成○山姥小六○快童丸平九郎、角の座二の替り、三十石の

年也、中村十藏吉右衛門と改る年也 ○同十辰冬より、五年ぶりにての大坂下りにて、姉川新四郎座へ歸り新參、顔見せは三浦大助義澄娘玉琴にて、勘當の詫言の仕打先沙汰よく、奴糸平を朝長とさとりての戀仕かけ、後酒をのみて大力になりしよりの受殊更よく、當顔見せ古藤川逸風引まはしつよく見へて、翌二月一夜付狂言にて、鐘か鳴今朝噂の狂言にて、甕子のいろは、古祁の藤川八藏、新助の役にて心中出立大評判をとり、二の替りは八文字屋眞鳥實記にては、助八妹となりて、贋勅使より倭次郎に惚たる仕打、あつく手つよき取沙汰、寶暦十辰中村富十郎、市川升藏、大坂へ上る、角鐘が岬の始り、寶暦十一巳藤川平九郎終る、角二の替り天狗宴、此秋市村龜藏大坂へ上、又京へ行、所作事なつさめ大入な取 ○同十二午の二の替りより△上上吉となりて、秋葉權現狂言にけいせい花月の役、次に御所櫻堀川夜討討祕しのふの役、清水清玄にて櫻ひめ役、いづれもに見物を段々嬉しがらせ、寶暦十二午中二の替り、秋葉權現角二の替り、いろは行列山下又太郎終る、今村七三郎終る、染松七三郎終る、中村助五郎終る、岩田染松終る、佐野川市松終る ○同十三未冬は、始て親子別れて、此人は角の座文七座に住て、間の物双蝶々にはけいせいあづま役、次に菅原傳授にては梅王丸女房お春親小六京出勤角は長五郎文七、長吉八藏、おせき崎之介、吉右衛門南與兵衛の時○中ノ座大五郎八郎兵衛年也 ○同十四申冬、中にて三枡大五郎座へ小六下り來り、同座にて、顔見せは扇屋小萩の役にて、誠は敦盛と成仕打よく、間の物極彩色にて、娘おなつの役、兵助三五郎、朝比奈七五郎大切にまゝたきの所作事、おぼこ人形等、中村久米太郎との一日替り、勤めも共に評高き事、負ず劣らずとの取沙汰、此秋大友眞鳥にて、助八雜道の二役雲井御前小六主計吉右衛門ともに大に當り、此時より大立者のしるしあると評判寶暦十四申小佐川常世終る、山本京四郎終る ○明和二酉冬、同三枡座にて△上上吉と成て、顔見せは乙姫にて、秀郷とのれんぼに迷ひ、龍宮へ歸り雜る風情、二役こしもと夏花にて、純友屋敷へ入込揚も受よく、間の物新薄雪物語の大當りに、こしもとまがきの役、鍛冶屋娘おれんともに大に評判よくて△上上吉となり、次に夏祭に徳兵衛女房おたつ、此秋蘭奢待に娘のおこのにて、嫉妬沙汰よく坂東三八江戸より來、文七座間の物戀女房狂言に故障有て休み、明和二酉松本七藏岩井半四郎と改 ○同三三升大五郎中村歌右衛門相座に住て、顔見せは秩父重忠女房お梶と成、奴みかん平を義經の身代りにせんとはかり、よく／＼顔を見れば、兄景清なるゆへ驚き、後白狐通を得ての落合、所作めきたる仕打より△上上吉となり、間の物相馬太郎にては美女丸、後粧姫と替りての入組、次に本朝廿四孝に八重

垣姫にて、可愛らしき沙汰もよく増りつゝ、次に蛭小島にて誰袖役にて 相撲の行司はさも嬉しそふに見へて悦ばせ（當盃替りより、角の座へ中村歌右衛門座本分りて文七菊八座へ四月に出て此冬京行 夫に付出て適討三國一に、曾我時宗役に大に見へを悦ばせての奇麗さ、貫八娘おいしの世話事、次に蘆屋道滿に葛の葉の二役、あつぱれ出かし道滿歌右衛門保名三五郎〇同四亥冬角の座にて座本、顔見世は大坂村在所由來にて娘おひな、翌春二の替り、鱸庖丁出たれども、二日興行有て直に相休み、續てひらがな盛衰記出て、こしもと千鳥の役、無間の鐘の沙汰よく松右衛門古八藏、源太彦四郎、延壽小六次に 忠臣講釋出て 十太郎女房おりへと 平右衛門女房お縫の二役大体、次に逸風七回忌とて、夏祭り出たれどもやはり徳兵衛女房おたつの役、二度目だけの 面白さ増して〇同五子の春より、尾張名古屋へ行て、前髪にて反魂香の土佐の又平の吃役、大に土地を賑はせ、二役けいせい遠山にて、切に石橋にて、ここの外受よく、歸りて其年は遠方の勤のみ、子冬顔見せ、小六三右衛門と成、立役にて六法勤、京都へ二代目澤村宗十郎來りし年也〇明和五子鷺助小四郎終る、四代目女形小四郎終る、二代目坂東彦三郎終（同六丑年は 大坂 西竹本座にて、山下八百藏座本を勤、間の物に双蝶々出て、ぬれ

髮長五郎とおてるの二役、娘役のしほらしさ、夫には似よらぬ 長五郎の手づよさとの沙汰よく、此年の評判△白の[illegible]となりて大入、角も同し狂言出されたれども見古されし歟、おとなげないなどゝもいはれて、さ程にも入なく〇同七寅、冬は京尾上粂助座へ住て十年ぶり也とて受よく、顔見せは石橋やつしの所作よく △上上吉と成明和七寅澤村宗十郎京にて死、坂東三八終る、中村吉右衛門終る、松本幸四郎市川團十郎に名戻り）同八卯冬、京三桝徳次郎座にての、若女形の立者と呼れて顔見せ、けいせい靜原にて、後死靈の大力二役、浪の戸の沙汰もよく△上上吉と成る、此年菅相丞を勤め、次に近江源氏のみめう役の評判大によく、二やく四斗兵衛の手づよさより、秋は物くさ太郎の 四ッ目、不破伴左衛門役にて 奇妙がらせ坂東半五郎京へ來りし年〇同九辰冬も、同京にて嵐山十郎座勤、顔見せは舞子お組にて、馬士三吉に傘さしかけ出る出端より、始終噂よく、二の替り櫻御殿に、櫻戸と正助妹おすがにての嫉妬故、正助に殺され、大切に石橋をつとめて、次第に評よく是より △上上黒吉となりて彌立物となり、わけて此狂言など、慶子役の儘ながら、慶子には似ぬ一流の見所あるとて、眼をはなさぬ

やうになりて、其年女非人も出し、又は妹春山のさだかにても當て（安永元辰中山新九郎一世一代伴左衛門役勤、先市川團藏終る、二代目瀨川菊之丞終る、）○安永二巳冬は大坂小川吉太郎座へは四年ぶり、顔見せは白拍子雛鶴にての、うつぼ猿の稽古の仕打にて、贋勅使での外題盡の口上、間の物菅相丞と櫻丸女房八重の二役も大体、（市野川彦四郎彦三郎と改京へ出）二の替りは小栗宗丹の實惡、出來は大体ながら若女形から勤める實惡ゆへに、こぞつて見たがりての評判高く、立ッに成て、今少し甲斐ないと漸云ふ様に成て來て、次は雷電源八の作替にて、角力取妾に、引續て立役の仕打のみながら、次に大塔宮の三段目にて花園役、（齋藤大五郎馬ノ頭古來介）大に沙汰よく、やつぱり若女形がよいともいはせ、次に切狂言にお龜の役、小川英子與兵衞となりて、蚤の女夫とて笑はせ、心中妾も珍らしく、次に愛護若にてたそかれ役を當、次に反魂香にて又平女房お吉と、けいせい遠山の二役、切に石橋と出世故悅多く、（安永二巳松本幸四郎市川海老藏に改）○同三午冬は、中にて嵐松次郎座へすみ、顔見せは白拍子白菊役、梅幸同座によつて、間の物忠臣藏にては早野勘平役、（梅幸由良之助天川屋の二役）三ッめ六ッめとも、是はあまり沙汰も勝れし方にてもなかりしが、二役天川屋女房お園大に評判よく、二の替り梅幸油はかり狂言にては、象潟御前の役、次に近江源氏にては、宇治の方と母みめうと四斗兵衛女房との三役とも甚沙汰よく、夫より嚴柳島にて、間淵角右衛門女房おくら、是は格別にて春水・鳳に劣らぬ仕打と大に受よく、菅原にて松王丸、女房ちよの役もよく、（菅相丞梅幸、松王丸梅幸、白太夫歌七、）○同四冬京藤川山吾の座へ出て、顔見せは狂女さくら戸の出端、先年寶曆七丑の年、親小六の仕られしによく似て、又自分の持前ありて賴母しく、殊更其沙汰よく、間のもの鳴神上人は大体、二の替りけいせい鐘が鳴渡に、博多小女郎にて與次兵衛女房となり、後誠の夫に出逢ひての驚き、氣のごくなる仕打よく、二役眞弓御前にて、虛無僧出の見へよく、此年も若女形大立ものながら、立役狂言の次第に手づよくなるを、元トとして此末の秋を女形の名殘りとして、九月二日元服をなして、

「御贔負をかはらぬ色や松の色　　みんし

となしぬ、京都の御見へには、一の谷熊谷と岡部六彌太の二役ともにしつかりさせしと悅ぶ人のみ、切に親小六一世一代として、山姥の役にて快童丸となり

て、親子の情ばかりは、又逸風にもまさりしとまでも云はれ、其冬は大坂三枡松之丞座へ約束出來て、御暇乞こし、三浦大助の三石切、梶原仕打は立派にて見へよくも有ながら、熊谷にかはらぬ上下姿にて、どうぞ世話事姿で見たひ物との噂ながらも、

「冬の梅咲や變成なんしより　同

この摺物も出し、下りて大坂にての顔見世は、武田家臣鐵孫三郎にて、使者に來りての久米寺彈正めきし狂言、先仕打に申分はないが、今少し聲が落付かぬなどゝも云はれ、次に聞の物忠臣藏にて、大星由良之助と勘平が母、（勘平嵐吉三郎、角の座に双蝶々出る（東の座にて藤松三十郎にて忠臣藏出て、由良之介を勤）是は持前にて格別、其場の愁つよく、由良之助は梅幸で見た眼の間もなくして、色々の噂ながらも、此九月に立役と成ての、十二月の始元服にまだ三月立ずして、是程の仕打は、兼て立役になる志し深き故、氣持の替りは甚よろしとも譽られ、位もやはり女形の儘にて△上上吉、二の替り花岡大仁は少しばかりながら、次に黒船狂言にて、獄門の庄兵衛、世話敵を珍らしがりて悅び、只聲を而已悔むばかり、尻からげの仕樣までも嬉しがらせし上、次に團七九郎兵衛の役、四ッ目道具屋場、肴賣ざんぐりと奇麗にてよし、七ッ目舅殺しに、始て裸姿を見せて、夫々を先悅ぶ聲の賑はしさ、其夏親小六、又々浪花の一世一代とて、山姥にて快童丸をつとめ、夫より暑の間宮嶋へ下り、盆前歸りし所、留主中芝居もめ有て、座本もかはりて、嵐七三郎座にて戀女房染手綱にて鷺坂左内、竹村定之進、お乳の人の重の井とひぬかの八藏の四役に、大に我を折らせての大入、各其氣もちの替りめ、女形は持前のくり出しながら、次にうそきたなき馬士姿大に悅ばせり、夫より十月八日を初日として、つゞれの錦を出して、春藤次郎右衛門役、正月の物を大ひに當、非人の場は左程にもいはねども、甚六のせりふより、敵討に出るまでの姿の程よく、仕打に突張つよくと大評判、是を此狂言の初舞臺也、（安永四未江戸坂東右衛門終る、坂田半五郎大坂へ顔見せばかり出る）

（）同五申冬より角小川座へ移り、顔見せは伊勢海老の輕く和らみ、次間の物新薄雪物語に、秋月大膳は前評とは思ひの外、夫程にも云はず有しが、二役地藏の五平次の世話沙汰よく、二の替り國花万葉にて、若黨國平と石不動も大体、桃井市正は評よく、次に天滿宮菜種御供にて、左大臣時平の實惡には、以ての外我折

らせ、大に受を取戻らせ、今に時平の笑まくさ、狂言の名物さ成、二役伯母覺壽の役、又後室のうちにての出來物、土師の兵衛さの詰合幕までを悦ばせ、別して時平は格別の沙汰さも云はれ、大に人を取り、次にかしくの狂言に梶の長兵衛の平敵は、又去年の獄門さは又格別の出來、盆替りは鍋祀貞婦競に奴わび助の役にて、銀閣寺の仕打よく、後出世して梅幸さ關守の隣合大によく、九月より千本櫻にて渡海屋銀平さ鮓屋彌左衛門、佐藤忠信、狐さの四役、彌左衛門は始ての親仁さ珍らしく、知盛忠信大体さ、狐忠信先出端二重舞臺のせり上も、めづらしがらせて大に受よく、分て國太郎静にて、道行殊の外評判よく、すつけりさ沙汰強くなり、（中の座伊賀越にて、唐木政右衛門役由男大當り、澤井又五郎藥屋甲替り奥山大評判、次に先代萩、古舍柳うば政岡、女形にて當りを取○安永五申坂田藤十郎終る、中村七三郎終る、一安永六酉中村粂太郎終る、先中村のしほ終る、先市川八百蔵終る、先吉妻藤蔵終る、中村宗代三終る、二代目藤川八蔵終る）　同七戌の冬も同座にて、牛追の顔見せ、亥の春は赤穂鹽竈にて、高の師直の添削より、鹽次を科に落す大ににくみ深く、又も格別に出かし、次に大星力彌にての前髪より、元服しての仕打に奇妙を顯はして見せ、次に千崎彌五郎にてのうまい物やも大体、前の二役は別して出かしたる沙汰

より△㊅上上吉さなり、續て金門五三桐の石川五右衛門、是又格別の大出來、世に知る所なれども、五右衛門の狂言多き中に、始中終さも此仕打を專らさして、眼を驚かすばかり、此盆替り棹歌木津川八景に、勘助の狂言も評よく、次に和田合戰女舞鶴に板額の役、梅幸あさりの與市にて、二人さも持合て沙汰よく、是又大に出かし、切につゞれの錦にて、春藤次郎右衛門、續て正月の沙汰始にまさる、夫より左雁金に案の平兵衛さなる、是はあまり仕打水臭過るさて面白からず、（中の座三五郎、十一年ぶりにて登り、二の替りなり島より、小栗宗丹、物ぐさなさ續て出す○安永七戌二代目海老藏終）　同八亥年も同座にて△大上上吉さ成、顔見せ催原平次にて、仕立も牛にて病ふに狂はされての所作事甚だ見事、殊更立役になりてより、始ての扇の手奇麗、敵の姿にて、入（慶子座二の）替石井城女名和張に、浪人太郎左衛門さ成、俄立身して後、將門の餘類さ見顯はされ、慶子へむほんを殘し切腹し、一役良助にて、末に裸にて冠を著せしまでも姿よく入しさはいへども、入りも餘りすぐれずして、次に慶子葛の葉を出さるゝにあしらふて、石川惡右衛門、大鍔にて不調法らしきを笑はせ、三詰蘆屋將監はてつゝりさしてよく、

二ツめ小袖物狂ひ計新平追善として、しとやかなる所作事、夫より切りに東鑑の三朝比奈は、見えよくて評判をとり、大藤内芙雀、女房綾子、乙女前三右衛門此冬は京都へ約束極まり、暇乞として土佐又平にぼつとせい、鬘も思ひの外よくはまり、仕内は大体大切に大津繪拔出し所作、藤の花かたげた振袖にての、鐘に恨みの姿うかれ、座頭から蟻通しまでも、眼を驚かせて、首尾よくつとめての上京十年ぶりにて慶子登り來て同座なり同九子年、京染松七三郎座、顔見せ吉例として、鐵孫三郎にての使者、久米寺彈正のしとやかなる仕打、奥は釣鐘より顯はれ出て、道成寺のまねびばかり、二の替は金門五山桐、五右衛門にての大當り、いよ〳〵大立者に賞美せられ、此年菅原に松王丸と覺壽、稀世端役ながら、三役ともに受よくして、此夏秋の比より、江戸より相談に來るといへども出來がたく、漸く顔見せばかりの約束出來て〇當冬十月より出立有、廿六日乘込、十二月朔日より木挽町森田座へ出て、江戸行紋を〼に改、今の三升堺町にて兄弟の口上を云ひしなり丁七唱にて、鐵孫三郎の狂言の通りも見心よく、只ものならぬとの沙汰ながら、土地に合ふの合はぬのも無理ならず、江戸役者上方へ來ても其樣なもの、次に戀女房の一平と重の井の二役の氣のかはりと、これまで手練有りし女形風に申分なきに我を折らせて、只餘日なきを殘ねんがらせ、とう〳〵首尾よく年一杯の歸京故、顔見せは出ずして安永九子嵐吉三郎終る、三升大五郎終る同十丑、正月より京山下座へ出勤有て、二の替りは若黨兵作と三浦荒次郎の二役、大体の評にて三のかはり、赤城鹽竈にて師直と力彌と天河屋の三役、由良之介梅幸師直は別して受よく、次に非人敵討相かはらずも、正月場の沙汰のみにて、大に悦ばせ續ての大入、暑中は紀州の方より請招有りて赴き、盆狂言は鍋祭りにて、侘助にて田上半左衛門を殺して、女房お才の供して、敵討に出て、道にて無理に口説、聞入ざるゆへのなぶり殺し、夫より立身しての闘寺の隣同士に、敵の立合も皆逸風このかたの仕打と悦ばせ、天明元丑小川吉太郎終る、大谷友右衛門終る、三升他人大五郎と改る天明二寅年も同座にて顔見せは菜種御供も、大坂にかはらず三役ともに、評判ます〳〵仕當て、二の替り和田大八を當、夫より忠臣藏出て、師直と由良之助定九郎は今少し仕樣もあらんともいへども、由良之助も若きにしてはと大体評よく、師直は遙にまされりとの沙汰、續てひらがな松右衛門大体にて、梶原平次

は是までの外々の仕立ご違ふて、大名の二番息子の仕打を悦ばせ、（延壽梅幸、重忠梅幸、源太來芝、千鳥其答、○東の座長五郎八百藏、お關甚吉○西の座長五郎八藏、）（長吉儀右衛門、お關富松）双蝶々にて放れ駒長吉、ざんぐりご角力もやりかねぬばかりにて、角力取にてなき氣持、出來たれご人かひなく殘念、東鑑朝比奈評能く、物卿の作左衛門さたよく、千兩幟の千羽川すぐれず、猶も妹背山の深七を大に出かし、かしく、住吉の福清など存の外氣持輕く、何ごなく見ごゝろよく、近江源氏にては佐々木四郎左衛門、和田兵衛ご附みめう三役ともに沙汰よく、（佐々木三郎左衛門梅幸）ぐつご勢ひ月々にまして、（天明二寅中山文七一世）（一代な駒大に當り、坂東三津五郎終る、二代目坂田半五郎終る、）○同三卯年も、京中山來助座、顏見せ山岡惣太にて、安壽對王御臺とも賣わたす場より、二役角田川の追剝なども大體ながら、彼勢ひつよく此比並ぶものなく、二の替り粟の鳴渡に、家老山瀬織部ご成て、後幻術にて皆殺し後安田山城がはかりごとにかゝり、後網を落され、二役早替りにて、若黨洞八主人の最期の介錯せんご寄りて、玉兎集を受取て、忍び落ての仕打を當てより△極上上吉ご成て、するほどの事評よく、此秋大坂角の座助に下りて、鬼一法眼三略卷に、鬼若丸甚見へ仕打とも類なく、次に鬼一の役、少し手に合はぬごいへども、又是程にする人はないこもいはれ、四番目大藏卿は、四の口ざつごしてよく、切に少し所作ありて、勘由を殺してよりもよく、始終淋しからず、次に三十石にて、川浦瑞見ご神道源八の二役、奥山ごの出合に、寂しき其云はれても、苦にもならぬ持前の仕打、次に千本櫻の道行ご、四ッ目狐の場にて道行、其答ごの出合むかしにかはらぬ評にて、京へ歸り、（天明三卯尾上菊五郎梅六、中山來助終る、中山新九郎終る、嵐文五郎終る、市の川彦四郎終る）○同四辰春は四條に芝居なく、北野下森芝居にて、鬼一にて彼二役にて、北野芝居に斯入りし事、前代未聞ごまでも云はれし大入、四月より名古屋へ行て、（芙雀虎有甲虹同座）赤城醜寵にて大入ごの沙汰有り、此暮霜月より、勢州桑名に行て、千本櫻を出し、是も桑名には珍らしき大入　同五巳正月より、大坂北曾根崎新地芝居、坂東長吉座にて、戀女房染分手綱にて、江戸兵衞、鷺坂左内、竹村貞之進、沓掛村八藏ご、お乳人重の井五役とも、大評判にて、北一枚に直ばせにて、大に受よくなりて、次に非人敵討出て、次郎右衛門にて當、次に東鑑の朝比奈を添へ、又桂川の長右衛門添心中男ごなり、大切に濱眞砂の所作事、田舎娘

梳久は、親小六が工夫仕置るよしとて、姿よりは又しほらしく、次に土佐繪の奴大に當、次に面貴女夫より融大臣にて汐汲、末は簸に一・梶原源太で鎧姿にての所作珍らしく、大に當て首尾よく京へ歸りしところ、京にても其當りし沙汰のみ聞へ待し程の事少し、芝居に故障有りて暫く休み、夫より大塔宮旭鎧を出して、無禮講に村上彦四郎にて、（藏人三五郎、馬ノ頭新七、花園國太郎）武勇萬歳にて大に當、二の口齋藤にて、太皷の塲意地の強の突張り、手しぶくして三の切、音頭の塲とや角いへども若き所なく、三の口より手しぶさの張りつよく、段切まで大にこたへさせ、次に金屋金五郎狂言に、伊藤杢兵衛も評よく、當秋忠臣藏出て、加古川本藏、寺岡平右衛門、石堂右馬之丞、天河屋義平四役、大に沙汰よく（梅幸追善とし、由良之介役、奚雀勤、師直七五郎）同六午年は、子息嵐秀之助を座本として顔見せ、北條時頼記に三浦彈正役思ひの外面白からず、切に七寶濱眞砂の所作事に、奴の仕立大に受よく有しに、入のかひなくして殘念、次に菅原に覺壽と松王の二役、前に替らず甚評よく、（弓削大助新七、二階堂儀右衛門、原田大郎來助いく世國太郎、菅相丞山下八百藏）是より△至極上上吉となりて、大坂堀江市の側にて、正月より大塔宮旭鎧を出し、齋藤太郎左衛門役、（馬頭十岐藏人二役とも幸四郎）三塲とも大評判に、見物に肝を潰させ、四段目殿の兵衛にて、其容との所作少し、勿論序切万才も彌沙汰よく、次に秋葉權現にて日本駄右衛門、（遠州幸四郎、幸兵衛後八藏）かたり塲と宿屋塲も大体評よく、夫よりつゞれの錦にて、春藤二塲ともかはらず沙汰よく、夫より道頓堀へ積りても、釜が淵の五右衛門大當り、（藤馬之丞幸四郎是切にて江戸へ歸る）國性爺合戰、和藤内の役、二の口は茶の布子故、ちと和藤内めかぬともいへども、貝盡しの和らかみは格別、虎の塲より三の口切とも、古風を守りし仕打と悦ばして、次に博多織にて、船頭小平次由男役も大体の評にて、後山姥を出し、子息秀之助快童丸としての仕打、此年親小六隱居して、法名是心といひしも、八月廿三日に行年七十七歳にて、目出度黄泉の道へ送られし、其孝心いふばかりなくも、夫より金毘羅へ下り、（天明六午松本幸四郎、岩井半四郎大坂へ上る、姉川湊元服、新四郎と成、嵐小六終る、中村富十郎終）〇同七未冬坂東岩五郎座へ出て、顔見せは菊地金藤、次の和らみ梅幸の姿を顯し、間の物伊賀越狂言唐木政右衛門役、鎗の傳授も由男流ならず、一流ある仕様に我を折らせ、次に大切眞顯記に、序眞柴久吉の役、殊之外見へよく、取捌きの仕や

うさんぐりとし格別よく、毛谷村六助役、團太鼓の所作の間は甚出來たれども、今では何でもないやうにも思はれたり、一味齋母もよくはあれども、菜種御供の覺壽程にはなく、先三役ともに評よく、切に用明天皇の鐘入所作にて、後傾城姿も受能、夏は長州三田尻とやらんへ下り、夫より下の關の方を廻り、盆後より京都芝居へ出て、苗字も叶と改、眞顯記を出して、一味齋の役と四役にて大に入を取、土地のめいりしを引立て我を折らせ、殊更切の角力は、國五郎との裸の見事さ、次に釜が淵の石川五右衛門にて、又候大入めづらしき程の繁昌にて、太切用明天皇鐘入の所作（姉川大吉終る、二代目藤川八藏終る、中村仲藏江戸より角の座へ登る）○同八申年、布袋屋梅之丞座にて顔見せ、堀川夜討狂言にて辨慶の役、續て沙汰よく、切に其答來芝と二人釣狐の所作は、少しのあしらひばかり、同師走又も堀江市の側へ、凡一座下りて同堀川夜討の辨慶、又々大坂にての評判にて大入、四番目藤彌太は左ほどにもあらねども、若い仕打ばかりにて、切二人の釣狐の所作、夫より道頓堀嵐文吉座へ出て、ひらがな松右衛門と平次景高前にかはらず、（延壽十藏、重忠十藏、源太三五郎、千鳥國太郎）次に薄雪の腹切場は、幸崎伊賀守の役も大体、夫より赤城鹽竈にて、（園部兵衛十藏、赤城鹽竈に植木や場の狂言添こ五郎國太郎兩人大出來）師直と力彌ますます評よく、京にてせし五人切かんばんは出たれども、狂言は出ず、當末（二代目中村十藏終る、嵐七五郎終る）○同九酉年、市山太次郎座に往て顔見せは、例の鐵孫三郎の役なり、狂言の嚴重に極りしも、大立物のしるしを顯はし、次に間のもの物ぐさ太郎、扨看板が出ると、町中一統の案じも、是までおかしみは大藏卿ばかりにて、外にないがとの思ひも、上手になればば仕様はさまざま、由男流をさらりと流せし工夫は、さすが立物丈の事と、見物は勿論樂屋までも、初日の夜の安堵勿論、二の口の仕やうは輕くして、三の口はてつつりとした仕打、三の切に成て利休の仕打は驚き入つたと一統の受も、其安心と倶に云ひなしての悦び、伴左衛門役は、是まで度々つとめしゆへ、うまみをぬいてせし仕やうは、大に氣持は見上たれども、ちとさらり過る故、若手の見物は夫程にも思はず、次に加賀屋歌七、一世一代のもてなしに、薄雪に團九郎は、日本一といふても大事ない輕さとにくみに見へ、よく、てつつりとした仕打に見所多く、大至極上上吉と成、夫より小野道風靑柳硯三切まで、小野道風（駄六）

爲郎十二の口大に仕打を出かし、二の切猪場の淋しきを引立て、一入見心よく、次に大門口鎧襲に、齋藤庄九郎の油はかり、昔の訥子當狂言を其後梅幸つとめし故、今少しともいひ、夫より京へ登りて寛政元酉年淺尾爲十郎江戸へ初て下る、此冬三升德二郎元服して立役と成（ ）同九酉年又も市山座にてけいせい北國曙、柴田勝家役にて、大德寺燒香場にて恥辱を請、立歸る所は外に仕人はない程の事、二役奥方小谷の方は、大体見へ花やかにてよく、三役淺井新三郎はさしたる事もなく、關羽の靈像は見事ながら、顔が赤過るの、首がちいさいのとさたもあれど、今に繪姿をはやらせ、夫より又上京有りて、夏より安達が原にて安倍貞任ながら、桂の中納言の公家姿評よく、四番目一ッ家の婆は、親の記念とも思ひ出され、夫より木下蔭狹間合戰を出し、大に名譽の者ともいはれ、來作の役を片岡へ讓りて、齋藤道三を勤め、竹中官兵衛と石川五右衛門の三役、誠に古今の出來犬淸三五郎、千里八百藏、關路國太郎、久吉儀右衛門次に戀飛脚に、梅川に其答、忠兵衛に眠獅つとめたれども、不評にて五六日してつゞれの錦を替りに出し、則春藤次郎右衛門にてかはらぬ評判加村宇田右衛門儀右衛門、高市武右衛門新七後に市川團藏、出勤にて高市役なつとむ此度は不殘役割行屆きし故、

思はずも此役をせしとて、道行對の花かいらぎに佐兵衛の役、來芝二人の花やかさをあらはして（ ）同年九月より、大坂ばかりを一世一代を勤度と申も、親小六五十に成たらば引々よとの言葉、せめては三都の一つなりとも、其遺情を守り度とて下りしが、長事も御退屈とて、先其事なく、久米仙人の四ッ目五ッ目守彦役、大体ながら子供のわやくなるを見るやうなごともいはれ、五ッ目久米仙人にて鳴神上人の役、これも練の鼠衣にて淋しきとも云はれ、古海老藏の云ひ置し處をはつして輕くせんと思はれしが、思案の喰違歟、始めはあまり勝れし体にもあらざりしが、九月九日より右一世一代なる看板出し、木下蔭狹間合戰大切に、山伏攝待を出されて來作の役、成程ざんぐりとして見よく、次に竹中官兵衛は舞臺へ出、初めてよりの出來とて見へよくして意地つよく、後犬淸にはかられての無念の有様、骨身にこたへて軍師の格好から、手負の傍昔よりたとへる役者もあらじとぞ云はれ、次に石川五右衛門若ふ見せて手づよく、親子の情をこめて位官の姿よく入りて、御殿の場は左ほどにもなく、犬淸いふには、千里のしは、關路德次郎、久吉他藏切の所作事は佐藤の老

母の役しつかのしほ、江田源蔵來助、同女房いろはにて、先奇麗にて夫より旗揃の扇の手も、中々所作事といふにもなく、義太夫ぶしに合はしての雲上とにて淋しからず、誠に古今未曾有の役者なりとも云はれ、夫より口の場をぬいて、娘景清の三則景清の役、是又能仕立の出端の見へよく、切までも彼てつつりした愁にて、切に鐘入を付て、目出たく上京の筈の處、中の一座より角の座は稚き時の初舞臺のつとめ處ゆへ、一世一代も納りしが、中の座は又元服の舞臺初めに下られし一座なれば、中の座の顔見せの助として出くれよとの一座の頼みに、據なくけいせい兒ヶ淵を畫狂言に出す、是は先年天明二寅正月、京にて勤られし狂言、其時の相手なればとて、澤村其答を呼下し一座にてつとむ、眠獅捨若の役にて、兒が淵へしづめにかけられ、石地藏を脊負ながら、淵より上る幕見へよく、すごひとの評にて、後になぎさの中將となり、かたりに來る場の人品骨柄、さりとは奇麗な仕立にて、仕打も先年よりははるかに見増り中の座へ市川八百藏、吾妻藤藏、江戸より初て大坂へ來りて、所作事をつとめ大當り大切に化粧六歌仙とて所作事、小町小野小町國太郎を口説落さん事を頼まれて、五人の姿にかはりて、始僧正遍昭の時代の嚢、次に文屋康秀の少老ての戀事もざんぐり輕くせられ、次に業平小町二人の所作の和らみはねぶつても見る事ならぬ雲上に安らけく、次に喜撰法師の墨衣の所作事、氣持と姿のかはりめ、身の取まはり輕く、大ひに肝を潰させ、次に大作黑主にて、實惡の逸風仕立は常の事ながら、顔見せ狂言の仕打も輕く取納、目出度兩座共大評判の舞臺納め、小六在世にあらば、悦びもといはぬ人もなく、贔負連中始の見送りに、祝ひませうしやんしやん、

夫レ雛助稚名は岩次郎とぞ、寛延元辰年父に付て東武へ行、其年八歳古栢莚父小六懇意に付、岩次郎作立只ならず思ひ、雛介といへる名を付やる、小六暫く俳名となして、初舞臺より讓るとぞ、されぱこそ暫くの江戸逗留にも、木挽町を勤るを、堺町にて今の三升目上を云、叶の字を圓に取なし付しもかゝる故也、栢莚を名付親と崇て、元より父に孝深く、卒に海老藏の髭にとまりて、かゝる羽をのす物ならん共思はるゝとかし、

眠獅選卷之下終

むかしより歌舞妓役者の中に、坂田大和山はやつし形の開山と唱え、京右衛門は都の實事師に名高く、團十郎は東にて荒事の祖と仰き、藤川は實悪の名人、片岡は敵やくの上手、金子吉左衛門は道外に妙を得、杉九兵衛は花車形の達人、小野川は若衆形の手たれものとほめられ、權七姫は若女形にて惣藝頭と稱し、其後上手名人と よぶものかぞふるにいとまなく、中頃に至りて 栢莚訥子新四郎半九郎路考慶子など、皆それ〳〵の持前の役にて、見物に感心させしに、當時ひな助なるものは、若女かたより出て立役と成、その余の役々を何やくに一つもなし、世の人にたんのうさせ、所作事まで自由になすは、凡かぶき狂言はじまりしより、このかたの名譽の人と呼ものなりけるに、去年の冬親の遺言を守り、いそじに滿る春を待ず、浪花の舞臺の一世一代を勤めて本意をとげしも、時に叶ひし譽れといふべし、よて初ぶたいよりの役々の次第をしるして、四方の御好人の眠りの伽にそなへんと、寛政ふたつ春雨の頃筆をとるものは、八文舍自笑これを述る、

寛政二年

寛政二年庚戌正月吉日

書舗　八文字屋八左衛門板

傳奇作書追加上之卷目錄

西澤文庫

西澤文庫傳奇作書追加上之卷

西澤綺語堂李叟編

妻敵討狂言の話

享保二酉年八月竹本座淨瑠璃に近松平安堂が作にて、鑓の權三重帷子上下二段物は、妻敵討の書物の始と見へ、國は因州鳥取にて、藩中淺香市之進は、武藝の外に茶道を嗜み、一流の奥義を極め、眞の臺子の飾付は、印可の卷の認め一子相傳の外に傳へず、今度にて若殿御祝言相調ひ、お國に於て近國の御一門方を振舞に付、市之進の弟子の内に勤せさよと仰有、笹野權三郎は年若けれ共、好の道ゆへ此印可を受て役を勤めんとす、市之進妻お才は三人の子持にて、惣領娘お菊の聟に取たき望あるゆゑ、權三に印可を讓る、同家中に川側伴之丞と云は、かねて淺香の妻に心をかけ、妹お雪と權三とは兼てわりなき中なれば、權三をけのけ印可を受んと思へ共、權三の方へ役目仰付られ無念の余り、夜中淺香の茶室に忍び込、お才權三は數寄屋に入て奥義を傳ふに、お才妬ふかき氣質ゆゑ、娘にかはつて悋氣をす、深更に及び男女二人茶室に入ての事ゆへ、伴之丞兩人の帶をもつて不義密男也と、舅岩木忠太兵衛へ告ゆく、兩人詮かたなく此場を落行、下の卷市之進江戸より歸り、三人の子を舅に預け、妻の弟岩木甚平諸共女敵うちに出立して、伏見京橋の上にて首尾能權三お才を討とると書り、文中には昔噂の高かりし樣に書あり、此比有し噂ものと思わる、各の年數を文中にのせて、色情の淺深をのせたるは近松の働妙也、淺香市之進（酉年四十九才）女房お才（酉年三十七才）笹野權三（酉年廿五才）お才娘お菊（酉年十三才）と有、此狂言出たる事も酉ゆゑに然書たる物か、是は都てお三茂兵衛の昔暦の裏を仕組たると見へ、何ぶん作意には自在を得たるもの也、され共當嘉永四亥年迄に、百三十五年ともなる古狂言ゆゑ、川側伴之丞の妹お雪の行衛など立消となり、仕組足らぬ所も有、是より廿六ヶ年後、歌舞妓狂言に丹州笹山妻敵討と云外題、角の芝居春狂言に出たり、又重帷子より三十三年後、寛延二巳の秋中の芝居にて、高麗橋距躍念佛と云外題出たり、此角外題に享保二丁酉年七月十七日、今年卅三年に當妻敵討と記せり、然れば重帷子の年なれば、伏見京

橋にて妻敵討有し事明らか也、扨此高麗橋にての妻敵討は、役割重幡子とは變り、密夫は敵役なり、池田文治に民谷十三郎、夫政井宗昧に山本小平治、女房おかねに富澤喜代崎との役割にて、此余に紺屋吉兵衛片岡仁左衛門、谷羽屋九郎三に嵐三十郎と、二人の男達有て六段續の狂言也、是は此年に高麗橋にて、實に有たる事を鑓の權三の卅三年に當りしゆへ、ゐ敵討といふ事を、角外題に出して仮たるもの也、

伏見京橋喧嘩の話

伏見京橋の喧嘩は、いかにも古き事にて、里見伊助といへる俠者の狂言にて、延享四卯年春角にて伏見京橋彌生戰、又安永六酉の盆中の芝居にて、伏見京橋譚實錄と云外題を出す、此余此ごろ京橋の外題度々出る、享和元酉年の盆、攝州高槻の城下にて、盆跡の中にて人殺の有しを、名作切籠曙と外題して、中の芝居にて樽屋お仙里見伊助と役名を呼しは、伏見京橋の世界人名を仮りたるにて、事皆伏見にて仕組たれ共、今誰にても高槻騒動と通稱して、里見伊助は伏見京橋の人名なる事を不知、前に云鑓の權三は伏見京橋、寛延の妻敵討は高麗橋にて、然も兩狂言とも盆跡りの中にてなり、都て盆替りは昔は水狂言とて、皆水邊を遣ふものから、雷電源八の喧嘩は高麗橋、五ヶ命は安治川橋、出入の湊は新町橋、故人作者如才なく遣ひたる所感ずべし、されば扨て五條の橋といへば橋辨慶となり、瀬田の橋といへば俵藤太となり、淺始錦帶橋には陶全姜大内毛利の時代に遣へり、余戲れに東西花道と舞臺と携の中へ、四ッ橋を鑼上、世話狂言の仕組兼て腹藁あれども、いかに大道具好の芝居興行人も、頭をふるべしと思ひ捨ぬ、

扇屋夕霧の再評

夕霧の事跡は、前々の編に擧たりといへ共、もれたるを再び爰に出す、東都居館園の主人が作せしと云、夕霧文章といふ端歌あり、菊永撿校にさづく、菊永津山撿校につたへ、糸に合せて調ぶと云、何九年公界十年花衣氣儘に遊ぶ鶯の 浪端の辞に、稲津祇空翁の女達摩の贊也、近來東都より出版の隨筆に、吉原の金盛何業か方に假身せしに、九年の面壁は物かはといひしを、英一蝶も女達摩な畫贊せしといふは非也 梅に廓の戀風や、其扇屋の金山と、名に立昇る全盛が 鶯より梅に廓と賦したるに、難波津の廓新町ときかせたる也、扇や金山折屋夕霧と二人の名を混じたると云ふも附會の說なり、俗に扇屋の金箱と褒たる詞にて、霧は山より立のぼるなればなりとしるべし 松に擱らむ藤かづら、馴染て戀紫の曉の鴉もそれなりに 松にしがらむと作せしを、擱らむと思ひ誤るなるべし、爰より近松翁もあわいの鴨川の

藤屋伊左衛門を心にこめ、終の位の太夫に藤をかけたる文也 鐘も憎まず、寝乱れ髪のむすぼれて、好た同士の中さへも 鳥がなかこち恨むはきぬきぬの情なり、憎まぬといふには寛濶なるを褒たる詞としるべし 仇に別れて丸一年、二とせ越しに音信も 是も阿波の鳴戸、吉田屋餅つき段口話の文句、去年の暮から丸一年、二とせごしにおとつれなくと云 泣て明してかこちごと、恨を誰に夕霧が 明石の浦の朝霧にと古歌をかけたり 一世とかけしをつくじと、もたれかゝりし床柱 延寶六戊午年正月六日、扇屋座敷にて夕霧没、花岳芳春信女、下寺町浄國寺に墓有、此塚は椰なくても哀也、鬼貫の句有、夕霧病床の床柱、近年迄扇屋に遺り有、今廢してなし、日蓮大士池上本門寺にせんげの時、寄かゝりの柱有、同日の論なるべし 思ひを沈む、戀は浮世の何じやぞいな、達磨さん 發端女達の讃あれば愛にて結句にもとす文體也 色事しらぬ殿達は、玉の盃底がない 徒然草色このまぬ男はの文によりて也 お前の裾の本來は、滅てないので有そふな物を、しよふ事なしの戀しらず 文意明らなれば云す、おしきかな戀の文字四字有は少々拙なし 文政十丁亥年正月、夕霧百五十回の追善廓中扇屋にて艶み摺物として配るに、古代の遊女の圖を寫し、長山孔寅筆追悼の短冊に村田春門詠あり、

人ならはなげくをなごゝ眞木柱、よりそふ跡になくさめやせむ

夕霧自筆の文の寫（こゝには筆跡を示さず）

こゝもとこそのふかんし申候くしくは御めにかかり候上候べく候

御なつかしき折からよふそ御しめしあさからすなかめまいらせ〳〵いよ〳〵かわらぬ御やうす何よりめてたくおもひまいらせ〳〵此かたとてもおなしいろにいまいらせ〳〵されと此ころは口中いたみそれゆへつとめそこはかと成まいらせ〳〵とかくはるならではゆる〳〵とも御めもしなるましく候いよ〳〵すみもとにてまちわひ申まいらせ〳〵たつ三郎事なを〳〵せいだし申候いかふおとなしう成まいらせ〳〵あわれはるはさら〳〵御のほり候へかしおそく御こし候てきのとくにそんし候

十七日　きりな

八十様

参る御返事

此一帖の圖は、著作堂曲亭馬琴か蓑笠雨談に出す所、享保中余が板行の草紙物の寫し也、夕霧没後四十二年也、今迄百卅四年と成、延寶六年二月三日より、夕霧名殘の正月と云歌舞妓狂言を出し、藤屋伊左衛門坂田藤十郎 夕霧に桐浪千壽にて大に繁昌し、後寶永六年まで夕霧の狂言以上十八度出せしが、皆悉く繁昌せしと云、是夕霧は浪華第一の名妓、坂田は俳優中の名人なりしこと、是にてもしるべし、また淨瑠理にては、

夕霧沒し二三十三年後、近松門左衛門竹本座にて、夕霧阿波の鳴門と云狂言を出しぬ、此淨瑠璃世におこなはれて、今歌舞妓にも是をする、其口說の文句に

（原本『愛敬昔男』の挿繪一葉を摸寫したれども畧す）

去年の暮から丸一年二年ごしに、音づれなく、それは幾瀨の物案じ、それゆへに此病、瘦衰へが目に見へぬか、煎藥と練藥と針と按摩でやう〳〵と、命つないでたまさかに、逢てこなさにあまようと、思ふ所を逆さまな、こりやむごらしいどうぞいの、わしが心かはつたら、踏んで計おかんすか、叩ひて計置んすか、是死かゝつてゐる夕霧じや、笑ひ顏みせてくだんせ　おがんます、ヱヽ心つよい胴欲な憎やと膝に引よせて、叩いつさすつゝ聲をあげ、淚亂れて髮ほどけ、わけも性根もなかりけり、

右吉田屋の段、口說の文を東都六樹園飯盛和文に書て、栗田信充が夕霧伊左衛門の畵の賛にかへたり、因みに爰に出す、

いぬるとしのしはすより、かそへ見給ふにはや一とせになり侍り、こぞとしと年をこゝへ侍れど、おとづれをだにしたまはず、さるはいかばかりの物思ひかつもりぬらん、さてなんあいたさもまさりゆきて、かうさまにやせさらぼひて侍るを、わきみの御めには御覽じいれぬにや、せんやくと丹藥はさら也、はりのくすしはらとりの人々にたすけられて、からうじてはかなき玉の緖をつなぎとゝめて侍り、けふたまさかに見へ奉れば、あまえてよろづかたらひ聞へなんと思ひ侍るを、なか〳〵にうきめみせ給へるは、いかなる御こゝろにか、まろにあだなる心し侍らば、ふみにじりてのみおかせ給ふか、うちたゝきのみしてやみ給ふにや、今はたゞよはりによわりて、なかばはなきひとゝなりたるなり、ゑましき御顏をこそ見まほしけれ、きづよくおはすこそつらけれと、かきくどきつつ泣わぶるさま、袖たもとには空にしられぬ雨ふりいでゝ、衣にぬひたる玉あられに、さそひて落くるにぞ、こよなきいろをぞぬらしそへたる、

其磧自笑絕交の話　六樹園

八文字屋自笑江島屋其磧のことは、既に前集に出せしが、爰に正德五乙未年正月出板、三都芝居評判記三卷

のうち、役者返魂香京之卷の口に、口上評判作者其磧と書て、此返魂香の作者は、去春も目利講に印候通、八文字屋八左衛門方へ、去る卯の年口三味線と申評判を綴り候てより、年々八文字かたへ仕遣し、去々巳の年まで十五年が間仕候作者にて候へ共、八文字や身がち成仕形有之候に付、去年の春より此江嶋屋かたへ仕遣し候ゆへ、八文字方には去年ゟ素人の新作者をやとひ、右年來の作者のふりを仕、世間の人樣へかづけ申候、殊に去冬狂言本の口書に、めつたなる評判出し候とはいか成申分に候哉、去年御嘉例の作者の評判は、此返魂香と申本に御座候間、外題御吟味なされ御求め可被下候、尤八文字方ゟ出申評判本、其外風流本共に前の作者とかはり、素人の新作にて御座候、自今は江島屋と申本やの方は、御なじみの作者に紛無御座候間、珍敷趣向ども御よみくらべ被遊御覽可被下候、紛敷申者有之候ゆへ御斷申上候と有、是より六ヶ年後、享保五子年正月出板の評判記、都の花笠の序に、兩家睦せしと見へて、八文字自笑、作者江島其磧、と兩名並へ、いつもの判を押けり、次に自笑問、是〳〵其磧、一旦は世間の人樣もおかしう思召はど筆先でいさかふたが、今は墨と硯の濃中となつて、互の作は外へ出すまいと相仕の契約、嘘でない本屋の商賣をする身が、此比大和山の顔みせの本に、作者其磧と二色迄名の出た新板の外題が見ゆるが、ありや人おどしの犬、其磧か子細がきゝたい、其磧身にとつては嬉し悲しの無才の僕が述作の草紙を、世間にお尋ねなされ下さるゝは本望の至り忝ない、一度そなたと一ッ心になつた上に、又外へ愚作をつかはそふ筈がない、今つく〳〵思ひ出せば、前々書捨の反古共を置て來たが、其取あつめ物に書そへて、其磧作とあらはし、あの方の評判本くるみに紛らはしう見せた物じや、自笑と所に名書のないは、愚作と必思ふてたもるな、そなたの不審をはらそふ爲に分て斷を申ス、猶此以後も、外へとては山をあげた疱瘡と同じ事で、書てはならぬいひかはしがみつちやとなるはさて、子年正月吉日八文字屋八左衛門ゑじまや市良左衛門板と出したり、先の絶交の比の本は、嘉永四亥年迄百三十七年となり、和睦の本は百三十二年となる、近比の小說讀本の口上などゝ違ひ、昔の文には飾らぬ質朴なる事感すべし、

操年代記の拔書

〔操年代記は新群書類從第六中に全本を收めたればこの拔書は畧す〕

女鉢の木出語出遣ひの圖

操年代記下の卷に左の圖有、寫して其頃の容をしらしむ、圖は畧す)此比の出語りに、臺なく舞臺に氈を敷、木偶に手摺も見へず、平舞臺に道具飾付其上にて出遣ひと見へたり、シテ豐竹上野少掾のち越前ワキ豐竹和泉太夫、三弦野澤喜八郎、最明寺人形近本九八郎、白妙木偶藤井小三郎、玉笹人形中村彥三郎、此狂言にて數多の德分つき、北條藏とて土藏建たる事珍らしき當り狂言也、

北條時頼記大切女鉢の木　西澤一風述

行衛定めぬ道なれば、〳〵、こしかたもいづくならまし、是は、所不住の沙門にて候、我此程は信濃の國に候ひしが、あまりに雪ふかく成候程に、先此度は鎌倉にのぼり、ざぜんにこもり春に成修行に出ばやと思ひ候、やどりもがなと夕顏の、それにはあらぬ小家の軒、たる木まばらにかたぶきし、雪折竹のあげ簀戶や、主はひん女と思しきが年も三五の玉箒、ひさしの雪をかき落し、おとせばゑりに袖口に、首筋もとにひやひや〳〵、ア、つめたやと手をふくも、下主近ふしてなをやさし、最明寺殿まがきにたゝずみ申〳〵お女郎、越後より下總の檀林へ通る所化の僧、今日の大雪先へも跡へも參りがたし、すの子のはしに只一夜賴みまするト有ければ、ハア、おやすいことながら、主のるすに私がとゞめまするもいかゞ也、わきをお賴なされませ、おいとし樣やとあいきやう有、ムッ主のおるすとは扨はこなたは御内衆か、いゑ〳〵主はわたしが姉聟、此比他國いたされて主といふは姉樣、ナ、然ればこなたも主同前、江口の君がかりの宿に心とむなと申たは、それは色あるやさ法師すみのおれか木のはしかといふやうな此坊主、色好の用心ならば氣遣有なとの給へば、娘もにつこと打笑ひ尤色といふ物は、みめかたちとは云ながらとふやら時のはづみでは、鼻そげでもいぐちでも、油斷がならぬと走りこむ、天下をさばく御身にも、此返答に行暮て行ゑ給ふぞ殊勝なる、世の中は、何か經世が留主住居、妻は手足も土大根蕪ふぐなもつみ持て、歸る山路の白妙に、ァふつたる雪かな、いかに世に有人のさぞ面白

ふ見給ふらん、それ雪は鵞毛に似て飛でさんらんし、人は鶴氅を着て立て徘徊すといへり、されば今ふる雪も、もと見し雪にはかはらね共、我は鶴氅を着て立て徘徊すべき、袂も朽て袖狭き、細布衣陸奥の、けふの寒さをいかにせん、あらおもしろからずの雪の日やな、最明寺殿是こそは以前の女が姉ならめと、なふなふ主のお方に候か、御らんのごとく旅僧の身、お宿の御無心申せしかど、主のおるすと有し故、待もふけたる御歸り、前後をばうずる大雪、今宵計の御めぐみ、頼入とぞ仰ける、げに〳〵やすき御事ながら見苦しき賤がふせや、何とてお宿と申べき、いや〳〵旅と云三界の、家を出たる世捨人、草の莚も我爲の、玉の臺と有がたし、是非に一夜との給へ共、あれ御らんぜ我々夫婦兄弟さへ、住居かねたる躰なれば、とゞめ申さんやうもなし、是より十八町あなたに、山本の里と申てよきとまりの候へば、暮ぬ間に一足も、急がせ給へと云捨て、庵の内へぞ入にける、なら曲もなや、よしなき人を待つるよ、浮世の人の情なきも、我誤りと返りみて、あゆみつかるゝ計也、妹の玉づさ涙ぐみいたはしや御出家様、最前お宿と有しかども、姉様の心いかゞと存、外にたゝせ置ませし、かく落ぶれしも前世の因果、責て出家にちぐうせば、經世様の武運もひらけ、後世の爲にもわるい事、なされた様にはよも有まじ、とめてさへしんぜませば、別に馳走は入まいと、わしや思ひますと云ければ、チ、やさしやよふぞ氣が附た、是程の大雪に遠くはよもやと表に出、なふなふ旅人お宿參らせふなふ、余の大雪に申事も聞へぬよの、いたはしの有様やな、もとふる雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一ッ所にたゝずみて、袖なる雪を打拂ひ〳〵し給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや、駒とめて袖うち拂ふ影もなし、さのゝわたりの雪の夕暮、かやうによみしは大和路や、三輪がさきなるさのゝわたり、是は東路のさのゝ、わたりの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく侍へど、一夜は泊り給へやなふ旅の僧、旅のお僧と招かれて、それは嬉しき心ざし、かりの浮世にかりの宿、波初ながら値遇の縁、一樹の影のやどりも、此世ならぬ契也、それは雨の木影是は雪の軒ふりて、うき寐ながらの草枕、是へとこそはせうじけれ、いや是玉づさ、せつかくお宿と申ても供養いたさん物もなし、お淋しから

ふがごふせふぞ、姉様幸ひ粟のまゝ、さもしけれ共お慰さひつ取出せば、ァ、そんな物何のいの、折節わるふ九献もなし、お菓子はないかさ夕霜の、おかぬ棚をやさがすらん、是御兩人、旅にしあれば椎の葉にもるさかや、粟の飯さは日本一の醍醐味、御馳走に預りたしさの給へば、やれ〳〵それはお嬉しやせめては何もきれいにさ、萩の折箸かはらけも、よし有げ成もてなし也、耻かしやお僧様此粟さ申物、古へ我夫世に有し時は、歌によみ詩に作りたるをこそ承れ、今は此粟をもつて、命をつぎさふらふぞや、げにや盧生が見し、榮花の夢は五十年、其かんたんのかり枕、一醉の夢の覺しも、あは飯かしく程ぞかし、あはれやげに我我も、うちも寐て夢にも昔を見るならば、慰む事も有べきに、なふ御らん候へ住うかれたる古鄕の、松風寒き夜もすがら、ねられねば夢も見ず、何思ひ出の有べきさ、そゞろに涙をうかべける、旅僧も哀れに催されゝ墨の袂をしぼらるゝ、更行まゝに夜寒さまさりひへ渡る、何をか焼火に焼てあて參らせんや、思ひ付たり我夫世に有し時鉢の木にすき、數多の木をあつめ持れ侍ひしを、ヶ様のさまにおさろへいはれぬ貧の花ずきさ、皆人々に參らせて、今は漸三本殘て、あの雪を持たる梅櫻松、わきて夫の秘藏なれ共、今宵のもてなしに是を燒火さ立んさすれば、ァゝしばらくしばらく、是は思ひも寄ぬ事、御志は有難けれども、重て世に出給ひての御慰、無用になして給われさよ、いやいや、さても此身は埋れ木の、いつのさかりにいつの花、いつの時をか待べきぞ、唯徒成鉢の木を、御身の爲に燒ならば、是ぞ採果汲水の、法の薪さ思しめせ、しかも誠に雪ふりて、仙人につかへし雪山の薪、かくこそあらめ我も身を、捨人の爲の鉢の木伐共よしや惜からじさ、雪打拂ひて見れば面白や、いかにせん先冬木より咲初る、窓の梅の北面は、雪報じて寒きにも、こさ木より先さきだてば、梅を伐やそむべき、見じさいふ人こそうけれ山里の、おりかけ垣の梅をだに、情なしさ惜みしに今更薪になすべしさ、兼て思ひや櫻を見れば春毎に、花少遲ければ、此木やねぶるさ、心をつくしそだてしに、今は我のみわひて住家櫻伐くべて、火櫻になすぞ悲しき、扨松はさしも實枝をため葉をすかして、かゝりあれさ植置し、其かひ今は嵐吹、松はもさより常盤にて、薪さなるは梅櫻、伐く

べて今ぞ御垣守、衞士の燒火はおため成、よく寄てあたり給へや、なをざりならぬ御深切、寒さを忘れ、はだへは彌生きさらぎの暖氣にあたる梅櫻、花見る心地候ぞや、扨しもいか成人の御行末、男主の假名あざ名は何とか申候ぞ、自然の時のお爲にも、何か苦しう候べき聞まほしと仰ける、アヽ人がましやな古へを、名乘もさすがおもてぶせ、さりながら此上は、何をかさのみつゝむべき、是こそ佐野の源左衞門經世がなれる果、哀れと御覽候へや、扨も過にし建長四年、鎌倉は北條相摸守時賴公の御捌き、夫の經世は將軍の御供して在京の其跡の事、經世が父我爲には舅、さのの兵衞政經、故もなく人しれず、やみ討に討れ給ひしを聞とひとしく我夫は、取て返し下向の時、一族の讒によつて鎌倉へも入られず、道より直に御勘氣とて、所領しやうゐん召上られ、經世親子が累代の知行、一所も殘らず伯父源藤太經景に押領せられ、生がひもなき此有樣、親の敵も大かたは推量にまがひなけれ共、實否を糺し討ん爲折々他國に身をやつし、跡ふりかくす雪の庵、雪は春にも消殘る、夕べもしらぬものゝふの、身の上あはれみ給へやと、さめ〴〵とこそ泣居たる、實々それは聞及びたる物語、何迚鎌倉に上り其沙汰は候はぬぞ、さればとよ夫婦もさは存ずれ共、運の盡とて最明寺殿諸國修行に出給ひ、万機をいろはせ給はねば、天照神の岩戸にこもり、月日の光隱れしごとく、理非の別れんやうもなし、さりながらかく落ぶれては候へ共、取傳へたる梓弓八十梟ははりつめて、あれ御らん候へ、是に武具一領長刀一枝、又あれに馬をも一疋つなひで持て候、經世常々申せしは、只今にてもあれ鎌倉に御大事有と聞ば、此具足取て投かけ、銹たり共長刀かいこみ、やせたり共あの馬にかけ鞍置てふはと乘、女房に口とらせ一番に馳參じ、御着到につらなつて扨合戰始らば、敵何万騎有迚も一番にわつて入、手に立軍兵より合打合、ぶんどり高名譽れを顯はし、一方を責やぶり君のお馬のまつさきがけ、思ふ敵の大將とむんずと組でさしちがへ死んず身の、ヱヽ口をしや此儘ならばいたづらに、きかんにせまりしなん命、何ぼう無念の事さふぞと、兄弟かつばと伏しづみ泣くぞくこそ道理なれ、旅僧も至極のことはりに、衣の袖をぞしぼらるゝ、よしや浮世のうきしづみ、かくてははてじたゞ賴め、我世の

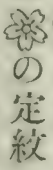
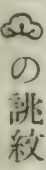
中にあらん限りは後の誓ひを願ひ給へやと、詞を殘し殘る夜も明方ちかく隙しろく、雪もおやめばさらば迚、いとま申て出給ふ、かゝる所へ佐野の源左衛門經世、古郷へ歸る錦の袖汗にひたしてかけ戻り、ャァャァ女房鎌倉にて敵源藤太に出合、首取て歸りしぞ、玉づさ諸共悅べといきをひ切て呼はれば、兄弟夢かと嬉しさの、そゞろうき立お手柄〳〵、僧を止めて供養せし、佛の方便神の力、共に悅び給はれと、旅僧に語れば、重疊〳〵、何をかつゝまん我こそ時賴入道最明寺道崇也、汝が慈悲心ふかきをかんじ、天よりさづくる幸有、こよひ寒氣をしのぎしは梅櫻松三本の、なさけにあたふる三ヶの庄、加賀に梅田越中に櫻井、上野に松枝合せて三ヶ三庄を、子々孫々にいたるまで相違なき條安堵の御判、三人はつと嬉し顏、中になを經世は〳〵、悅びの眉を開きつゝ、さのゝ舟橋取はなれし、本領に安堵して、お供の裝束はなやかに、さくら榮へる北條氏、末代迄も香ばしき、梅の花びら五代めの、君が歸館を松の色、千秋樂とぞ祝ひける、

豐竹越前少掾高弟豐竹筑前少掾と院本に奧書有、初編西澤の條に出せし、會稽雪後日鉢木の狂言は、天保八酉年九月中の芝居にて、故人中村慶子が盧生が夢の五十回忌の追善狂言によからんと、其盆替り北の新地芝居にて、紅桔梗女團七の狂言大當りせしゆへ、九月始當り振舞にと、能勢妙見宮へ詣、多田の温泉に浴し、兩三日滯留の內、此後日鉢木に書たる也、其の摺物に、

造り物平舞臺向ふ一面の石垣城の塀、正面に見事なる大手の門、都て鎌倉城廓の體螺の音、遠責にて幕開
ト右門の兩脇に又十郎左藏小手脚當陣羽織にてりゝ敷軍兵大ぜい隨がへ左右に立別れ陣床几に懸り居るやはり遠責生殺しあるべし
友藏何と二階堂信濃の助殿、我君時賴公にはどふい×

五十回忌の追福も實光院は矢車の紋所其緣による段書は
加賀の梅田に寄御馴染のの替紋
越中の櫻井に寄御存知のの定紋
上野の松枝に寄御贔負のの詠紋

將其時の着到にちぎれ具足の武者ぶりは思ひの外な焚火の返報情にこもる三木の其名芳し經世が忠臣

會稽(よせて)雪(ゆき)後(のち)日(の)鉢木(はちのき) 本領合三ヶ庄

扨其後の雪降に細布衣のやさ姿は以ての外な子ゆえの執着筐にのこす三人の其名懷し白妙が貞心

乍憚口上

さいつ比摺物にて御披露申せし元祖慶子五十回忌に何をがなと思ひよる家の藝の中にも北條時頼記は故人西澤一風の作にしてすでに淨るり外題角力の大關とまで世にもてはやされし名譽の狂言なれば此女鉢の木と定め侍りぬされど古めかしきもいかゞと今の西澤一鳳が増補をせられしも所縁盡せざる所にして先祖も嘸嬉しからめとさりあへずこたびの手向ぐさとなし侍るは身のつたなきをかへり見ずおこがましき業ながら初日より賑々敷御見物に御入らせの程を呉々もねぎ上奉るになむ

鎌倉御下馬先勢揃の段
佐野の庄經世屋敷の段

弓削の大助　中村芝翫
佐のゝ松喜代　中むら梅太郎
同　櫻之介　嵐吉太郎
同　梅太郎　嵐三津吉
原田六郎　中村歌七
佐々女小五郎　中村寅菊
二階堂信濃之助　中村又十郎
建部源藏　中村壽郎
伊具の十郎　淺尾大吉
安達彌九郎　淺尾友藏
河野左衛門　中村翫十郎
畠山重藤太　中村蘭九郎
羽山丹治　中村芝藏
三浦監物　中村東藏
源藤太経景　淺尾與六
北條時頼　中村歌右衛門

作者　西澤一鳳軒

ふるき家名をつぎて追悼をつとむる

一枝をたむける菊の白たへに昔をしたふ鴈の玉づさ　中村富十郎

今の慶子がけなげさをよろこびて

名をあげし佐野の常世が狂言の後日を弔ふも手柄也けり　中村玉助

×ふ思召にや、今日俄に陣鐘太鼓を亂調にひゞかせ、狼烟をあげて關八州の大名を、此鎌倉へお召被成るゝは、いかゞな義でムらうな又十郎是は安達彌九郎殿のお詞共覺えませぬ、都て治世に有て亂を忘れぬ武士の心掛、夫ゆへ太平の御代に鷹野猪狩の催し、殊に賢君と呼れ給ふ時頼公なれば、深き御賢慮有ての義と存られます、夫は格別先伊豆相摸の諸大名は、大半着到殘る六ヶ國はいまだ相見へませぬ 友藏いかにも〳〵爾

を廻して、けふの着到追付軍勢も揃ふでムらふ　ト遠貴打込に
て、向ふばた〳〵歌菊鐺かづら鉢巻りゝ敷なりにて、軍兵一人兜を持、旗持一人付そひ出て、花道能所にてしやんと留る　又十郎あ
れ見られよ、安達殿いまだ若木角髪亂れ出立ゆゝし
き花の武者、何人の御子息なるぞ、奥床しふ存ぞる
友藏誠に遖れの若武者、その名を承わつて着到に印さ
ん、何と〳〵　歌菊さん候某は、月の武藏の兒玉黨、團扇
指物改て祇園守も家の紋、旗の印も御存の、父は相州
桐が谷、ませたやつめとお呵りもかへり見ず、此着到
の數に加はり、何れも樣や大將の、下知に隨ひかけま
くも、神か佛か釋迦が谷、それに續た領分の、苗字も
その儘佐々目の小五郎吉晴といふ若輩者、宜敷御推
舉願奉る　又十郎ムゝ、扨は佐々目の御子息よな　友藏此彌
九郎も同じ氏、同じ流れの一族なれば、よろしく取
なし仕る、先城中へ早く〳〵　歌菊然らば御兩所後刻
又十郎、友藏ムれ　歌菊ハッ　ト又遠貴きびしく軍兵二人づれ門の内へ入　又十郎遖れ末
頼母しい小五郎殿ではムらぬか　友藏左樣でムる信の
の助殿、あれ御覽被成ひ　ト向ふ戸屋の内を見て　向ふへうたすは、懺
に常陸の御人數か、但しやはり鎌倉の軍勢か　ト此内又十郎橋懸
りを見て　又十郎こちらは上總下總の一黨、あれ〳〵きら星
の如く參着　又十郎誠にいさましい出立じやなア　ト又遠せめ打

込にて、花道より東藏芝藏吉三郎大場橋懸りより團九郎龍十郎播藏助六右四人づゝ、何れも陣立にて或は半切陣羽織銘々好の形り、旗さし物なざし、兩方一時に出て見へよく並ぶ遠せめ靜める　又十郎遖れ勇々敷何れもの出立、
御姓名を承り着到にひかへ、君の御前へ伴わん　友藏
各早く御性名を名のられてよからう　東藏仰にや及ぶ、
非常の陣ぶれ陣太鼓、聞とひさしくまつ先かけ、驅
參つたる某は、そのかみ當國衣笠の城に、武名をさゞ
めし平氏の一族、大助が末孫三浦監物義村　團九郎つゞ
いて當家恩顧の譜代、弓矢打物關東に、並び名越の出
丸より、眞一文字にはだせ馬、あをりかけたる畠山軍
藤太　芝藏鎌も知行も輕けれど、君にもしろし召れたる
小坂の郷に隱れなき、葉山の丹治直元とて、坂東一の
なくれ者　龍十郎元より拙者新參の列も末座に月影の、
照す武藏に名を得たる、河野左衞門宗貫　吉三郎連なる武
名も御存の、時に取ては矢つぎ早、夜討朝がけ　晝下
り、手習師匠にあらね共、建部源藏一騎がけ　播藏桃栗
三年豐年の、兆を爰に桐ヶ谷、矢倉太鼓の一番に、其
名も高き比企の時員　介六高名戰場十方旦那、拙者風情
も着到に、鯰の味はまだしらぬ、千形入道福造の兵丹
大ば扨ごん尻におくれはせ、名のるもおこがま獅子
が谷、ふちか谷なるさいそくに、大手搦手笹瀨の下

知、承つて一手柄、長尾の大部と帳面に 皆々何れも着到おしるし下され ト本舞臺へくる 友藏時頼公にもお待兼、追付御前へ作ふでムらう ト是れをきつかけに囃子入にて謠ひ「いそげ共〱、弱きに弱き柳の糸の、よれによれたるつかれ馬なれば、打どもあほれ共先へは進まぬ、足弱車の乘力なければ、追欠たり ト謠打上る向ふ方、玉助ちぎれ具足に錆長刀をかいこみ、躯馬の口を取出て來て、花道能所に直り、皆々をきつと見て 玉助ハテきらびやかなる諸軍の出立、人々にかはり某が物、その數にあらね共、所存は誰にかおさるまじ、今此鎌倉の御大事と、聞とひとしく欠付しに、いまだ軍勢着到ならば、息つきあへず駈參せし、其甲斐有て諸軍の中へ加はるも、弓矢神の加護なるか、ヱヽ悅ばしヤなア ト向ふを拜んで留る、本舞臺の人數皆々見て 東藏あれ見られよ、何れも東八ヶ國の諸大名、思ひ〱の鎌倉入、けふを曠との出立に、其樣見苦敷武者一騎、推參せしは何れの何人 園九郎誠にきたなきちぎれ具足に錆長刀、おめず臆せずかけ付しは、馬鹿者とやいはん 皆々但し亂心者なるか 玉介イヤ全く以て狂氣にあらず、我も北條譜代の侍、東八ヶ國の諸軍勢を、鎌倉へお召と承り、扨は一大事ござんなれと、とる物も取あへず、其儘是迄欠付し某 又十郎ムヽ譜代とあれば、同じ北條の御家來、拙者義は軍勢別當を預かる二階堂信のゝ助道秀、貴殿の御性名承り升せふ 友藏さやうでムる、此安達彌九郎も同じ役目、性名を聞て着到にひかへませふ、シテこなたの所領國は何國 玉介イヤその義はお尋御めん下さりませふ 東藏イヤ〱そふでない、同じ味方の性名を存せぬは我々が耻辱 皆々サア苗字は何と實名は 玉介イヤサ名もなき匹夫雜兵同前 新十郎雜兵匹夫といへど、名がなくては叶わぬ筈 芝藏たゞし名がいわれずは、領分所領は何國それ承らふか、玉介サアその所領は、伯父たる者に横領せられ、お羽打からし貧苦にせまる、無念のかいきやう 又十郎所領がなければ扨は浪人 皆々コリヤ名所を名のらぬ尤 東藏道理であのざま、頬の皮厚くよく〱も此所へ 新十郎着到抔とは身の程しらぬ素浪人 芝藏其浪人もさまざまあれど、てんつるてんの一錢目もないからけつ浪人、是天竺浪人のうつむけでムらう 園九郎殊に以て花やかなる、諸軍の中へあのざまは、悉皆黄金佛の來迎に、貧乏船が交つた同前 皆々貧乏神とはよくムるフヽハヽヽヽ ト皆々笑ふ 玉介大功は細きんのかへり見ず、斯淺間敷我身の上、いかやうに嘲弄有ても、さら

さら耻辱とは存ぜぬ、此上は何卒別當始、各の情を以
て着到の數に 友藏 罷りならぬ、譬へ諸軍の 執成でも、
貴樣のごとき見苦しい、家來が有ては時頼公の御耻
辱 玉介 サア我君時頼公の おめにさへかゝりなば 東藏
我君には先達て 勘當でもしられたか、追放にでも
あつたか、ごふで落度謨がなくては、素浪人にはなる
まい 駒十郎 イヤ何れもこふいふ貧乏神の傍に立交れ
ば、各や拙者が身の穢れ 又十郎 いか樣此上はいそひで
我君の御前へ 皆々 いか樣さやう仕ろう ト皆々立上る 玉介 何卒
拙者も諸共に ト共に立上るな 友藏 ハテ叶わぬ事を ト突のける 玉介 サ
サそこをごふぞ 芝藏 エゝならぬといふに ト又突のける、是方一人〳〵に
右の通りにて、玉助取付なけがれるのきたないのと出來合の悪口雜
言有て、段々と門の内へは入る、玉介門の内へは入ふさする、内方し
やんと門の戸なしめる、玉介思入有てはつと投首すると、又かすめた
遠せめにて、橋懸りより大八中つる菊五郎駒十郎同敷武者のなり、此
内人靜に一人〳〵出てくる、大八と玉介と向ひ合せ
になりて玉介會釋して、我なりの耻かしき體にて 玉介 是は〳〵
勇々敷武者ぶり、御名床しふ存られまする ト追従する、大八返答なく
ねめ付てすれ違ひ、上手へ
通る、又中つるに行合ひ ア、是も劣らぬ御出立、白金物
の打上たる、糸毛の具足ア、立派に見へ升る、定て名
作ものと存られ升る ト何なといふて取つく、中つるもがてんの
行ぬこなしにて入替る、又菊五郎へ向ひ
是は存よらぬ貴殿は、慥相州の 何某殿 ハテ珍らしい
菊五郎 イヤ身共は 相州ではないぞ 玉介 エゝ 菊五郎 そ

の隣の安房ぼう州、平郡の領主だ トにらみつけ上へ通る、
玉介見かへる拍子駒十郎
に行當る、玉介
ふりかへつて 玉介 是は麁相千万、御免下されい ト駒十郎ム ト反打、
一遍付廻して、すつと上手
へ通る、玉介こなし有て 各も着到の御人數と見受、拙者が
お願ひ四人の中へ加へ、城中へ 御同道下されまいか
大八 イヤ下されまい、見る樣子が殊の外匹轉武士、そ
れをめし連ては我々が名をれ 中つる ヤおれそなやつ、
此度の着到に目を驚かす身共が出たち、それに何ぞ
やちぎれ具足のぼろ〳〵鎧、一所にいては武士の仁
體がそこねるてや 駒十郎 見ればぼうろ〳〵きよろ〳〵
と、色青ざめし貧窮男、我々が雜兵でさへ升形に殘し
置たに、その方等を召連てよい物か 菊五郎 何れもごふ
か心得ぬ、あの者にお構ひなく共、我々は早く着到に
付升ふか 三人 さやうが よくムらう ト皆々門を叩き 大八 天野の
四郎 中つる 六浦左衞門 菊五郎 大野郡八 駒十郎 安田十郎
四人只今着到 ト内方是へと門をひらく、四人ばら〳〵とは入らふ
とする、玉助もまぎれては入らふとする、駒十郎エゝ
見苦しいと、外へほふり出して、又しやんと
門の戸を立る、玉助いろ〳〵こなし有て 玉介 チエゝ是義は金
鐵に思へ共、世に耻かしめらるゝ此身の拙なさ、アゝ
貧は諸道の妨じやなア ト長刀を杖に突馬の綱なひいてしいな
りと成る此見へ遠貴かすめチヨン〳〵
にて道
具廻る 送り物 城中陣立の摸樣、双方に 逆茂木の書割、
正面に小高き座を構へ、三ツ鱗の陣幕を張、此前に又

十郎友藏到着帳をひかへ居る、歌菊東藏蘭九郎芝藏
始返し前の人數、皆々並よく相引にかゝり、遠責にて
道具納る東藏二階堂殿安達殿、最早着到の人數相揃ひ
申てムるが又十郎今日君の仰によつて、關八州の諸軍
殘らず、觸を廻して召集め友藏性名印せし着到帳、是
にて人數揃ひし上は、我君の御覽に入るでムらう芝藏
それはそふさ、最前門前迄參つたちぎれ具足の侍は、
ありやマア何者でムらふな蘭九郎されば あれも少し
社領でも付ました、小宮の社家か何ぞでムらう東藏ま
づ當時の諸侍には、見うけませぬ者でムる、イヤもふ
見すぼらしい形りでムつたト此時橋懸りより
おなりトふれる東藏君のお
なりでムる皆々シイ〳〵ト序の舞に成る橋懸りより、歌右衛
門ちよつへい頭巾、大口直垂好みの
形りにて出る、跡から長刀の結搆成こ手箱を持、近習二人付出る、万六鷺
介富士五郎慶藏皆々陣立りゝ敷形りにて出る、万六敷皮を敷く慶藏陣
床几を能所へ直す、皆々平伏する、歌右
衛門敷皮の上に直り、陣床几にかけて 歌右衛門約を違へず早速
の到着滿足〳〵、最早性名記錄の通り揃ひしか又友ハ
ッ斯の通りでムり升るト兩人帳面を
前へもち行 歌右衛門祝着〳〵イ
ヤ何道秀又十郎ハツ〳〵歌右衛門そちに尋問ふべき子
細は、今日着到の軍勢の中に、ちぎれ具足を着し、錆
たる薙刀を持、欠付し武者一騎あらんが心付ざりし
か又十郎さん候その出立の武者一騎、いかにも着到に
はせさんじ御人數の中へ加へくれよさ、ひたすらの
願なれ共友藏イヤモあまり姿の見ぐるしく候ゆへ、
様々頼めご取あへず、やはり御門前にうろたへさま
よふておるでムり升ふ歌右衛門夫は幸ひ、その武者是
へ早く伴ひ來れよ友藏ハツあの見苦しい、ちぎれ具
足めを歌右衛門いかにも時頼直に對面せん東藏ムヽ君
の御賢慮、扨はまさしく盜賊か謀反人又十郎いで我々
が皆々召取つてト皆々立
上るを 歌右衛門やれしづまられよ旁、
夫に及ばぬ時頼對面すれば相わかる、佐々めの小五
郎、其方一人門前へ參り、右の武者を此所へ穩便に伴
ひ來たれ歌菊ハツ畏てムり升る歌右衛門いつそげ〳〵
歌菊ハツトりゝ敷向へ走り
は入る皆々顔見合 皆々何の事じや蘭九郎折角着到
に付た我々謀反人さ存たるゆへ芝藏召取こ手柄をあ
らはそふさ存たに菊五郎案に相違の君の御詮議ハテ
御對面の上様子が知れませふ皆々いか様さやうでム
るト此内ばた〳〵にて
歌菊出て花道より 歌菊仰の通りちぎれ具足を着した
る武者只今是へ歌右衛門それ待兼し、蘭九郎早くこ傳
へい友藏ハツト立上り花道付
際か向ふを見て 我君の仰ちぎれ具足に錆長
刀、隨分見苦しき武者、此方へ通り召れト向ふ戶屋
の内にて 玉介
ハヽアト大小入の合方に成り、玉介いぜんの形りにて長刀をかい
込、しつ〳〵出て花道能所にて思わず、本舞臺を見てハヽさ

跡すざりして、花道中程迄下り下に居る、此内始終相方、此内本ふたいの面々ゆびさし、玉介なあざけり笑ふ事あるべし 又十郎
我君仰の武者 皆々 只今是へ （ト歌右衛門花道の玉介なきつさ見て） 歌右衛門 ヲ、
源左衛門經世か、ハテ珍らしい 玉介 ハ、ハッ （ト平伏している）
歌右衛門 面をあげい、過し比宿りを求めし旅の修行者、
見忘れはせまいなア （ト玉介じつさ顔を上見て） 玉介 ハッ仰のごさく、
其折からは常の旅僧このみ心得、我君さも存ませね
ば、ぶ禮の段眞平御高免下さり升ふ 歌 イヤ不禮でな
い、其身は貧苦にくるしめ共、忠義を忘れぬその方が
誠心、感ずるにも猶餘りあり、其折我こそ最明寺時頼
也さ、名のり聞せんさは思ひしかざ、名を明さぬは其
方が心底をひき見ん爲、以前申せし詞の如く、當鎌倉
に大事あらば、早速に欠付んさ言ひしに違わず、けふ
の着到悦ばしう思ふぞよ 玉介 こは冥加なき其お詞、
經世めが骨身にこたへ有難ふ存まする 歌右衛門 ム、皆
の者、あれが咄しの源左衛門經世じやわい 東蔵 扨はあ
の者こそ、お家譜代さ承りし、佐野の兵衛經政が子息
皆々 源左衛門經世さな 歌 見れば 其折申せし ごさくち
ぎれたり共その具足、錆たり共其薙刀、關八州の大小
名の、見る目も耻ず花美を飾らぬ質素の振舞、武士
は斯く有たき物じやて 玉 落ぶれし面目なさ、先刻門
外にて性名を名乗ぬも、先祖の耻を存るゆへ、斯く着
到には駈付ながら、所詮御門内へは通されまじさ、心
いため歎きしに、御對面の上冥加に餘る君の御諚、何
れもよろしくお取なしを、願上奉り升る 歌 イヤ〳〵
一たんは其身を耻、名を名のらぬも尤、くるしうない
近ふ 皆々 御意でムるぞ 玉 ハ、ハッ （ト膝行して本舞臺へ來て下座に住ふ） 歌 今
日我催ふしは經世が心底探らんが爲、又當參の面々
は訴訟の旨を聞んが爲、理非によつて沙汰有べし、我
民を撫育せん爲、薙髪をなして諸國を廻り、今鎌倉へ
歸國して、再び武家の柄を取れば、その方が本領佐野
の莊卅余郷、伯父源藤太經景が横領せしを取返し、
改そちに與るぞよ 玉 こは重々厚き御高恩、いつの世
にかは報ずべき、旅僧を君とは夢にも存せず、優曇華
勝りのけふの拜顔、恐れながら命あればでムり升る
（ト歌右衛門も少々碎けたるこなし、好の合方に成る） 歌 ヲ、我もさこそ思ふわい、誠
に思ひ出せば是も又粟の飯の一睡の昔がたり、いつ
ぞや信濃路より下野へ通りし時、比は嚴寒山路も埋
も一面に降り積りたる大雪に、雲水の身も絶兼て、宿
りもがなさ夕顔の、それにはあらぬ小家の軒 玉 此經
世めが隠れ里、雪折竹の揚簀戸や、垂木まばらに傾き

し、雪に埋る〻あれ庇歌一夜の宿と求むれど、主のるすに婦人の斷り、我は悉皆木の端か、炭の折かの沙門の身なれど、男女席をおなじふせずと、敎の詞に是非なくも、山本の里とやらへ心ざし、數百歩あゆむ道筋、吹雪倒れに手足さへ覺へず玉其跡へ立歸り、御いたはしやと存るゆへ、其道筋を眺ぬれば、もと降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、袖なる雪を拂ひ給ふ有様は、定家が古歌に駒とめても思ひ當りてお跡より歌のふ〳〵旅の僧、御宿まいらせんと呼返されしその嬉しさ、思へば其日の雪景色、風雅の眺もどこへやら、ア〻寒かつた〳〵玉誠にその時はからずも、御宿とサア申もおこがまし白雪に、經世が六の花ひらく歌焚火にあてし鉢の木に、もてなされたる馳走ぶり玉草の莚のいぶせきも歌玉の臺に宿りし心地玉値遇の出合も盡せぬ御緣歌一樹の影も三世の因み玉先其時は歌主と玉旅僧歌げに懐舊の玉雪でムり升たなア歌いでその時の鉢の木は、源左衞門ア〻何やら玉恐れながら梅松櫻、某が秘藏と申せどさ〻いな麁木歌ホ〻其返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝合せて三ヶ庄の墨付呉ん玉何三ヶの庄を安堵の御

墨付下されんとな歌ヲ〻それ硯〳〵又十郎ハツ ト結構な硯な出す、歌右衞門さら〳〵と書印を出してきつと押 歌それ トさし出す、友藏受取行、玉助いたゞきよんで見て 玉コリヤ是君の トいふわさするさ 歌子々孫々に至る迄、相違なく安堵いたせ玉かさね〳〵の御厚恩、有難く頂戴仕つてムり升る歌經世その錆長刀是へ玉何此長刀を歌錆たり共經世が誠心、金鐵にも比すべき長刀、時賴乞ふて武士の錆を賞翫いたす、是へ〳〵玉ハ〻ハツ ト歌菊にじり寄て長刀を請取、歌右衞門の前へもち行、歌右衞門よく〳〵見て、万六にもたせたる長刀をとつてさし出し 歌此薙刀は先祖時政公より傳來せし神束と號し、一ふり取かへ道にす、守護して持傳へより ト玉介恟りして 玉何御先祖より御傳來の御長刀をハ〻ハツ ト玉介長刀を取て嬉しきこなし 歌皆々すりや神束の長刀まで玉是見給へや人々よ ト謡に成り「始笑ひしさもからも、是程のみけしき、嘸浦山しかるらん ト長刀を持定敷舞ふて平伏する 歌經世玉ハツ歌滿足なか玉ハツ ト長刀をいたゞく 歌皆見いなど ト屆らくチヨン さ、木の頭 よい侍じやなア ト思わずあほぐ、皆々共におも入、玉助じつと辞義する、此見へよろしく ひやうし幕

下の卷慶子追善、佐野の舘の場は、いさ長やかなれば卷をかへて次に出すべし、

西澤文庫傳奇作書追加上之卷終

西澤文庫 傳奇作書追加中之卷目錄

一後日鉢木の續佐野の場
一同大切雪女鉢の木の段
凡二條

此齣の役者替名の次第

一佐野源左衛門經世　中村玉助　一由解大助春行　中村芝翫
一同末子松千代　中村梅太郎　一伊具治郎義成　淺尾大吉
一同次男櫻之助　嵐　信太郎　一原田六郎兼貫　中村歌七
一同惣領梅太郎　嵐　三津橋　一源藤太經景　淺尾與六
一同　六ツ花　中村慶治郎　一經世妻玉章　中村富十郎
一同　吹　雪　中村松代　一雪女の精白妙　中村富十郎
一作　者　西澤一鳳軒

凡二條

西澤文庫傳奇作書追加中之卷

西澤綺語堂李叟編

後日鉢木下佐野の塲

造物三間の間二重見附金襖、上手落間網代塀、此前雪積りたる松の實木手水鉢、尤雪持下手跡へ寄て結搆成馬部屋、窓より口幕の馬休めあるを見せ、此前寒紅梅柴垣のあしらい、尤雪持にていつもの所に風雅なる枝折門、是にも雪積らせ、舞臺前一面花道にも白木綿を敷、屋根にも白木綿を敷、硝子の氷柱下りある、都て佐野の舘の摸様、美々敷奇麗に有へし、平舞臺の眞中に三ッ橋、おはこ、かつら、袴股立襷がけにて雪を束ね、胴切のためし物にて木太刀を振上搆へている、上の方に吉太郎同じく高股立襷がけにて竹刀をもち中腰にて控へいる、下の方に梅太郎芥子坊主同じ形りにて是も小太刀を持扣へいる、此後に松代慶治郎奴にてひかへ居る、右宜敷三味線入 白囃子にて 幕開く 吉太郎申々兄梅太郎様 胴切は都て腰の備へ腰の鹽梅と兼て爺様の敎、おまへは 夫をよふ 御存でムり升かへ 三ッ橋弟の小しやくな事、一ッでも兄に生れたゆへ 稽古もそれだけ早ひ、それで此雪を束ねて胴切の腕だめし、松千代その方もとつくりと 見ておきや 梅太郎面白ひ 兄様の手の内見た上、わしは又雪を人形にして此小太刀で、から竹割か大げさの 手の内を見せ升ふ 吉太郎此櫻の介は鑓の手の内、竹刀にて突留るはお望次第 梅太郎兄様はやう 三ッ橋合點じや拳を堅めてこう ト始終白囃子にていけころし、三ッ橋木太刀を振上ヶ身搆へして雪を胴切にする、仕かけにて兩方へわれる、直に吉太郎梅太郎走りよつて、兩方の切口を見て 吉梅 あつぱれ手の内 三ッ橋弟兄だけの手が有ふがの 梅太郎イヤ〳〵めつたに 兄様には負ぬ、わしも大げさの手の内 ト雪をすつぱりとはすに切はなす、此内吉太郎竹刀をりう〳〵としごき、上を突又下をきつと突て 吉太郎 是わしがけいこは 又格別、上段は乾の鑓、直に 下段の坤の鑓 三ッ橋ヲヽ出かした弟 ト木太刀にて打てかゝるを、竹刀にて受 吉太郎コリヤ兄様何とさつしやる 三ッ橋ハテ油斷する かためして見る ト又梅太郎にかゝるを 梅太郎爺様の敎、めつたに油斷はしませぬ 吉太郎お前は わしが ト是より白囃子烈しく、三人一寸立廻り有てごつこごと納る、此時上手ゟ富十郎駒下駄をはき、手に目籠に蕪ふぐな大根の入しを持出て 富十郎 是はしたり、三人の子供雪の庭で 稽古とはあぶない〳〵、もふよしにしやいのうけい二郎それ奥様がおとめ遊ばす 松代マア〳〵暫らく お休み遊ばせ いなア 三吉梅はゝ様今のを御らうじ升たか 富ヲヽ見たとも〳〵、兄の梅太郎が胴切、櫻の介が鑓、松千代が大げさ迄あつぱれの手の内、稽古の出精 夫經世様が 御歸舘なされたら 嘸御褒美で 有

ふ、また此母は奥庭の雪を掻わけ摘取て來た、是此大根蕪ゑぐなど、それ〳〵に民の辛苦をついやさず、手作りのはたつ物、是も昔の貧しき折を忘れぬ心の愼み、是そなたらはとつくりと知りやるまひが、此母が姉様、白妙様と夫源左衞門殿の中に出來たは惣領の梅太郎と二男の櫻の助、又此松千代は連合が鎌倉へ出府の折から、妼はしたにお手かゝり出來たゆへ、三男として國もとへ連歸つての御養育、その內姉様はお過被成、三人の子供は幸ひ血筋の此玉章、今經世殿と夫婦となり、三人共にわらはがほんそ子、義理ある中と隔もせず、母様〳〵と孝行にしてたもる心ざし嬉ひぞや、ヲゝ是はしたり、此つめたひに心もない問ず語り、是取わけけふは姉様の御命日、佛様へも備へたし夫への馳走ぶり、跡は皆に相伴させ升ふぞや、妼どもちやつと三人とも おみやを洗ふてやつてたもいのう 慶松代ハイ〳〵畏りましたト角盥に湯を入、三人の子役の足を洗ふてやる、此うち富十郎は二重へ上つて、火鉢を引よせ火をつくらひながら 富サア〳〵ちつと稽古も休み襷をはづし、奥へいて巨燵へでも當りやいのう 三ツ橋イヱ〳〵申母様侍は雪霜をいとはず、戰場へ赴けば常からめつたにかじけぬ物と父上のおしへ

吉太郎雪はおろか躶身で氷の中でも寐臥を致しておめにかけ升は 梅太郎わしやつめたい事も寒い事もない、稽古が面白ふムり升すわいなア 富ヲゝ流石は經世殿のお胤程ある遖れの心がけ、然しけふはもふ稽古をやめて三人中よふ遊んだがよいわいのう 三ツ橋イヤ遊ばふよりは試合のけいこをサア二人共 吉太郎兄様のいわつしやる通りサア松千代 梅太郎おもしろい參りませふ 三人そんなら母様ト双方よりおとなしく辭義する 富ハテつめたいにもふよしにはしやらいで、妼共けがさゝぬよふ氣を付てたもや 慶松代畏り升てムり升る 三人後程お目に掛り升ふ 松代慶サアかふお越遊ばし升ふト合方に成り、三人に付添松代慶二郎奥へは入る、富十郎はしか〴〵有て跡を見送りこなし有て 富本にマアあの子供らがけなげさを見るにつけ、思ひ出すは姉様白妙様の御最期、いにしへ此佐野のわたりに貧しいお暮らし、其折柄鎌倉の騷動とき〻、經世様にはちぎれ具足に錆長刀をかいこんでの御着到、此身は又用有て山本の里までいた跡で、留主の內何者ともしれず姉様を討て立退、大雪の夜に情なやお命消へし其悲しさ、今御出世のお身の上、浮世とは言ひながらわしが爲には現在の甥の子三人、他人の手汐にかけさす

まいと此玉章が養育の縁はいなもの、いつともなし
に源左衛門様と夫婦になつたも、縁にひかるゝ子供
が可愛さ、草葉の影の姉様、かならず呵つて下さんす
なへ ト愁ひの思ひ入、此時雪ちら〳〵降る、富十郎空を見て氣なかへ 本に又けしからぬ此大
雪、經世様には御領分の御順見、嘸おひへ被成れふ
に、女房のわしがあたゝかに、こふして居ては道にそ
むこふ、富貴にあつて貧しきを忘れずとやら、其いに
しへを思ひ出して、そふじや〳〵 ト面白き謡らへの合方に成り、富十郎こなし有て 手拭かけの手拭をつむりにかけ、庭下駄をはき手箒を取て、あたりて の雪をはき枝折門、また馬部屋の庇の雪を掻おこし、思入れ有て
もマアつめたい事ではある程にの ト手をふくむ思入、やはり右の合方の中也、出端の次第を打掛る、雪やはりちら〳〵降る、向ふ方與六鼠木綿の着付、破れ衣いが栗坊主にて雪もちのやぶれ笠、藁づとを脊負ひはだしにて足をつま立作出て來る 謡「行衛定めぬ道なれば〳〵、越方もいづく
ならまし ト此謡の內、本舞臺へ來て枝折門の外より富十郎を見て 與六 申々お上臈、是は
上方の胴樂坊主、子細有て下總邊へ通る者、今日の此
大雪先へも跡へも參りがたし、すの子のはしにたゞ
一夜明さして下さり升ふならば、忝ふ存升る 富 是は
是はお安ひ事乍物堅ひ屋敷の內、殊に主のるすに私
が留升るもいかゞなり、脇をお頼被成升せ 與 アゝ是
是そふもぎごふにいふて、浮世の人のつれなれば、我
誤りと爰を立、歸つた跡からアゝ是申お宿參らそふ
のふと、呼かへすは知れてある、むだにあちこちとゝ
ずと是非とも一夜と 富 イヤ炭の折か木の端かといへ
ど、やつぱり御出家情を商ふ江口の君さへ、西行法師
をとめなんだと 申升れば 與 ハテそれはずつと昔の
事、今ではかふしつほりとした、此雪降の物はしい時
分と見て、此愚僧が ト言ひ、ずつと內へは入、笠とわらづとを取、後より富十郎に抱つく、富十郎恂りして
富 エゝ滅相な何をするのじやぞいのう 與 イヤサ時の
はづみには猪口でも鼻そげでもと言ではないか、是
愚僧は少形りはむさけれど、顔の道具は揃ふてある
じやによつて、雪の降るのにお宿の御無心 ト言々又抱付ふとするを
富 エゝ穢らはしい、御出家だてら武士の妻をとらへ
て、慮外しやるとゆるさぬぞや トきつとなるな 與 ハテそふい
わずと雪の肌へに、此坊主めを 富 エゝいやじやとい
ふに ト兩人もみ合事宜しく有て、與六富十郎の顔を見て 與 ヤア〳〵そちや白妙
ではないか ト大に恂りする 富 何白妙とは 與 イヤサ源左衛門經
世が女房白妙は、日外身共が ハテめんよふな 富 イヤ
其白妙といふは私が姉様、こふいふわしは妹の玉章
與 すりやア妹の玉章、ハテ兄弟とは云ながら姉の白
たへに妹の玉づさ、てもよく似たなア トこなし有て シテ此家
は 富 慮外ながら佐野の源左衛門經世が舘 與 ムゝ扨は

姉の白たへが相果たる故、妹のそちを經世が女房に、兄弟ともにこりやしめおつたな 富がてんの行ぬ旅の僧、姉様の御最期をしつて居るといひ、殊に夫の身の上迄 與知らいでならふか、源左衞門經世が爲には現在の伯父、佐野の源藤太經景がなれの果 富すりや兼て夫が噂に聞た、伯父景經殿とな 與いかにも最明寺時頼公が計らひによつて、佐野一圓の所領を押領したる源藤太なりと、浪人の經世を贔負して鎌倉へ呼寄身共追放、源左衞門に所領をあたへし執權のよこしまゆへ、武士を見限り世を捨坊主、所に此度越後守時兼公の見出しに預り、一ッの功さへ立ば、元の身の上にと 則是（トわらづとの大小を出し、腰にたばさみ上手へ通る） 富ム丶一の功とは、扨は夫源左衞門殿を 與越後守時兼公の御吟味に 富エ丶何と 與玉章シテ甥の源左衞門は 富今日は領分の順見 與アノ此大雪にや 富我身をいとわず民を惠むと、生れ付たる夫の仁心 與ム丶ハテなア（ト思入有て、二重へ上る、雪ちらちらふる、富十郎思入て） 富十 富ア丶降るは〳〵、駒とめて袖打拂ふ影もなし佐の丶渡りの雪の夕暮 與それは大和路三輪が崎 富爰は名にあふ上野の、佐の丶わたりの雪の夕ぐれ 與ム丶誠に白妙が最後を思へば 富本にはかない姉様

のお身の上 與てふと此通りの大雪に 富雪にすゝぐの聲あれば、其時の悲しさ口惜さ 與玉章そちや姉の敵が討たいか 富女ながらも武士の娘 與ハテしほらしい心底（ト云ながら、ずつと下りてだまし討に切かける、富十郎突廻し、有合ふ手箒にて急度受とめ） 富こりや伯父様何と被成る丶 與イヤサ是は 富始て逢た經景殿、過つる大雪の夜に姉様の最期の様子、委しう知つてムると云ひ、今又此玉章を手にかけふとは 與イヤサそふではなけれど、白妙が最期は現在甥の經世が女房ゆへ聞傳へて居る、殊に姉の敵を討たひといふ、其方何ぼう武士の娘でも、日比の心がけとくと手の内見やうと思ふて（ト引はづして又切付る、な、始終立ち廻りにて） 富ハテ御深切な伯父御様、助太刀頼まぬ姉の敵は大方それと、雪の最期は雪であらはれ 與ヤ丶何と 富サア是も實否を糺した上（トトン〳〵と立廻りあつて、兩人共ツカ〳〵と二重へ上り、與六が刀をもぎとり、與六を追つめ胸ぐら取て、拔身をきつと突付乍ら） 何と是でも伯父御様、姉の敵は打れ升まいかな（ト與六ム丶と身をちゞめて思入、此時トヒヨに成り、向ふ方鷹一羽引糸にて本舞臺へ來てすぐに臺へひらりと飛向ふ方、ばた〳〵にて芝翫狱七大吉陣笠ぶつ先羽織一様の鷹匠好みのなりにて三人ツカ〳〵と出て花道に並び、中腰にて本舞臺を見て、鷹杖をふる、本舞臺の兩人も見へよく空にきつと目を付双方一度に） 芝翫紀の關守がたつか弓、白鳥と化して飛さりしはか七例も古き白鳥の關 大吉身よかたゞさき一物の羽つかひ 富それ鷹は三國に通傳して其來る

事久しいと夫の講釋 與誠にあやしき鳩と鷹との爭ひ 芝夫中春に 鷹化して 鳩となるとは 禮記に見へたり、また七月有て 元の鷹に歸る か七日本鷹狩の始りは仁徳帝四十三年 大吉依納の阿口古といふ 者怪しき鳥を奉る 芝百濟の王子酒の君、始て此鳥を 泉州百舌野の御狩にすへて 多くの 雉子を奉る 富是は 正しく 時の變、今鎌倉にて仁心深き時賴公には、都へおるすを幸ひに、若殿照時公を追退け、伯父御越後守殿北條家を横領ある 與それゆへ甥の源左衞門を味方に進める經景が計ひ、さすれば 此身の立身出世 芝勝べき 鷹の忽にか七群る鳩に 勇氣を亂す 大吉是北條家の 忠臣心を一致になして、照時公を世に あらせんと云前表なるか 富今鎌倉に羽をのす 越後守殿の逆意、天のしらしむ所か か七イヤ時賴親子滅亡の印 富何にもせよ 大事を告る 與此雪中に 芝鳥類のあらそひ 富ハテ怪しき次第を皆々見る事じやなア トごろ／＼にて鷹をけ落し、鳩不殘天井へ引上ろ、與六ム、とおこづく、富十郎引廻してとめる内、花道の三人ツカ／＼と入て か六芝 鎌倉方 御上使 富何思ひ がけない御上使とは 芝我々は北條家の家臣弓削の大助春行 か七原田六郎 兼貫 大吉伊具の 治郎義成 芝則越後守時兼公の上意を蒙り か大鷹野の 塲所より直樣當所へ 富鎌倉の御上使とあれば、イザ先是へ ト與六も出向ふて 與富お通りあられませふ ト合方に成り、芝話か七大吉すつと二重へ通る、富十郎となし有て 富雪深き越路に隣る此國へ、遠路の お入御苦勞に存升る 大扨はこなたが佐野源左衞門經世殿の御内方よな 富玉章と申升る 芝次にひかへし出家の身に似合ぬ兩腰をたばさみともに出迎はれしは何人 與イヤ愚僧は則經世が伯父同苗源藤太經景 大すりや先達て時賴公の御勘氣を蒙りしといふ か七イヤ／＼伊具の 次郎殿、大助殿にも御存ないが、所領にはなれ一たん出家なしたる源藤太經景なれど、主人時兼公のお見出しに預り、一ツの功さへたてば元の武士、其取次は此原田六郎、それゆへ血筋の 源左衞門經世が心底探らんと、我々より先へ 此所へ 與武士は 互ひと 原田殿の 御推擧にて、時兼公の仰を受た拙者、歸參をすれば御兩所ともに傍輩、以後はべつこんに 芝ハテ存よらぬ 源藤太經景、鷹匠の我われへ今の挨拶ノゥ伊賀殿 大誠に御歸參有たら、それが彼鷹も 傍輩犬も傍輩 ト芝話と顏見合 芝大ム、ハヽヽ トあざけり笑ふ、與六むつとして 與イヤ御兩所何と 云つしやる筋目正しい佐野の 源藤太を犬とは何事、今一言承らふか トきつとなる か七いかにもそふじや、拙者が 推擧の源藤

太、犬と有ては此六郎も武士が立ぬ トさもにきつさ成る 芝ハテこ
りやいな事がお耳にさはつた、今治郎殿が犬といわ
つしやれたは鷹匠からの思ひ付、是世の譬へさ 大ま
たまた譬へを以て言ふなら、足の裏に疵有物は、篠原
を得走らぬと申でないか、さゝいな事にきつぱ廻
す、御兩人もごふやら心に一物が かセイヤ譬盡し置
つしやれ、日比から世になし者の左馬の助照時に心
をよせる貴殿達、それゆへ今日の上使も身共が望ん
で是へ加役 與何わ格別、拙者を犬とのお見立は千万
忝ひ、犬の手の内とくと お目に掛ふか 大そりやこつ
ちに望む所 か上武士に似合ぬ耳こすりより眞劍にて
芝アヽ見事拙者を相手に 與かおんでもない事 芝大コ
リヤ おもしろい ト芝翫か七與六大吉相手迎ひに反打詰かける、此うち富十郎思入有て、此時眞中へおしわけ
て立 富何れもさま、こりや何事でムり升るな よかイヤサ
今の雜言 芝大あまりと いへば トやはり双方きつさ成る 富ハテ 伯父
御樣は格別、御二人は上使の御役目、その大切な御上
意の趣も仰聞られぬ其内に、聊な諍ひにつのつて
及傷に 及び、 お役目が 立まするか 四人イヤサそれは
富憚り乍大事は小事、此御麁相かと存られ升る 四人い
かにも ト銘々じつと下にいて 芝大誠に 珍事ちうよふ よか時のはり

合 ト四人顔見合せ一時に 四人失禮の段御免下され ト元へ直る富十郎會釋して 富シテ
越後守樣々の御上意の趣、仰聞られ下され升ふなら
ば有難ふ存升る 芝イヤ其儀は源左衛門經世殿に御直
談、去乍御内室の 心底承り たいはムヽ、幸ひ ト合方に成り、芝翫最
前の富十郎の持出し目籠を引よせ 是此目籠に 摘取たる 土大根は 取も直
さず時兼公 大成程大助殿の よいお見立、蕪ゑぐなは
是當時日影の御身たる照時公 かヲヽサ此蕪大根と二
ツの内何れへ心を寄るといふ、源左衛門殿の所存の
程 與連そふからは是玉章、知らぬといふ事は有まい、
その心底が聞たい〳〵 芝大何とでムる 是玉づさどの
ト是にて合方かはつて、富十郎めかごと蕪大根を前に置て 富いにしへ筑紫に 何某の 押
領使有けるが、大根を良藥として 朝毎に二つ宛燒て
食する事ひさしく、ある時敵不意に寄て來り四方を
圍み責入る所に、何國ともなく鎧ふたる武者二騎あ
らはれ出、命を惜まず 防戰ひ、むらがる 敵を追退け
る、時に不思議と其性名を尋るに、此年比我を賴みて
朝々に食せし 土大根の精也と、其儘消へて危難を救
ふかすりや 源左衛門殿にも、其大根にならふて時兼
公へ 富すは今にも 鎌倉に大事あらば、以前に替つて
さねよき鎧に五枚兜、最明寺樣より 預り奉る神束の

長刀かいこみ、丈なる馬に打乗て、此玉章に口綱とらせ、第一番に馳參す 夫の心底ょヲ丶其心底はわかつたが、照時殿に見立たる蕪ゐぐなを捨る心か 富ホ丶此蕪ゐぐなこそ、冬に育て丶春をまつ、靑陽の七種若菜鈴菜と和歌によみ、人の心は和らげど、又武に取ては蟇目に用ゆる、矢の根は則蕪のかたちなりや、文武を兼し蕪の矢の根に力をそへ、惡逆不道の大敵を、亡す事は夫の胸に 芝ム丶扨はやはり鎌倉へ、忠義を盡す經世殿の所存とな 富御先祖時政樣より時賴樣迄五代六代に至つて、照時時兼お二人の內、跡目定まらぬ執權職、是此ゐぐなも土大根も、同じ畑のはたつ物、何れに愚が有べきぞ、麁略に思わぬ 夫か心底、それゆへ 本國に 引籠つての 閑居同前 大すりや 何れへとも、心を決せぬ經世殿の 心底 富去ながら何事も 經世殿は領分を順見の るすなれば、歸られ次第御上使の趣承り、直々返答致され升ふ 與いか樣甥の 經世、他出とあれば 芝大歸りを待て われ〳〵も 富暫しは奧の一間にて 大芝長途の 休息仕らふ 與此經景は 殘り居て、源左衛門立歸らば おしらせ 申そうか七ヲ丶そりや幸ひ、何かに心を付てな、合點か 與心得ました 富さ

樣ならば 何れも樣 芝大思へば〳〵 ト又急度なるを、富十郎さめて 富イザ御案內 申上升ふ ト唄に成り、めい〳〵こなし有て富十郎先に奧へは入、與六ひとり殘りこなし有て 與六郎殿と兼て 言合した通、甥の源左衛門が 心底探つた上、弓削大助伊具の次郎めも、手次手にム丶よしよし トうなづき思入、合方に成つて雪段々降り出す、與六かぢけるこなしにて ヲ丶寒〳〵、首筋もとがめつたにじは〳〵さ、ヱ丶すさまじの雪ではある、どこもかしこも縮み上るよふな ト傍りを見て火鉢を取て來て、火をかきさがし ヱ丶こりや幽な火じや、こりや焚火でなけりやこたへられぬ ト庭を見廻し、雪持の柴を取て來て、へし折、雪を拂ひ火鉢へくべる此時向ふ 殿の御歸館 トよぶ、與六向ふをきつと見て 與何だ殿の 御歸館、ム丶扨は 源左衛門めが戻りをしらすか、ハテ御たいそうな、よし〳〵歸り次第心底をためし見た上、只一討 ト刀の鯉口をくつろげる、大ころ〳〵れさりにて、與六物の見事に二重にて扣ンと返り起上り乍悔りして ヨ丶丶丶ざいつもおらぬに今のはごふだ、ム丶扨は身か巳前手に掛た白妙の死靈めがなす業か、何を緒口ざいな トきつと成る、大ごろところにて與六死靈になやまさる丶思入にて、二重より下へ見事にかへり落、すぐに刀に手をかける、刀のぬけぬ思入にて連理引の心、始終ねさり大ころごろ下座の柴垣の前に燒酎火すさまじくもへ、與六いろ〳〵かゐき事さま〳〵有て、トヽ正面へ立直り、又見事にポンさかへりもんぜつする、是をきつかけにごろ〳〵ねさりシヤントやむ、直に雪の獨吟になる「花も雪も拂へば淸き袂かな、ほんに昔の昔の事よ、我まつ人は我を待けん、鴛のおとりに物思ひ、羽の氷る衾に 啼音も嘶なさな

きだに、心も遠き夜半の鐘ト此内雪おびたゞしく降る、向ふより徒士四人、菅笠紙合羽にて出ると、次に玉助りつぱなる上下高下駄にて、長柄の傘雪持ながらさしかけさせ跡ゟ紙合羽菅笠の供大勢付添出て、花道中程にて立どまり、四方をきつと見て玉助ア、降つたる雪かな、それ雪は鵝毛に似て飛て散亂し、人は鶴氅を着て立て徘徊すといへり、されば今ふる雪も元見し雪にかわらねど、我も今は鶴氅を着て立て徘徊す、又其古へは袂もくちて袖せまき、細布衣陸奥の、けふの寒さをいかにせんと、世をうらやみしが有難や、時頼公の御恵みによつて、世に曾稽の本領安堵、誠に誰憚からぬ佐野の源左衛門此經世、あら面白の雪の日やなアト思わず供廻りの方を見て思入有て家來共勝手へ參つて休息の致せ供皆々ハア、ト目禮して、玉介に傘をわたし向ふへ皆々引かへしては入る、此時又かすめて薄どろ〱ねとりにて獨吟「閨も淋しき獨寐の、枕に響く霰の音も、もしやといつそせきかねて、落る涙の氷柱より、つらき命は惜からね共、戀しき人は罪深く、おもはん事の悲しさにト玉介跡見送り向ふへゆかふとする、此時大どろ〱にて本舞臺に燒酎火もへる、花道付際へ富十郎二役雪女の拵、白妙の幽靈にてせり上る、玉介きつと見て玉ハテあやしやなア、次第に降つむ大雪の、跡る山路の白妙に、姿おぼろに行先を、さへぎるはム、扨は昔に聞たる雪女が怪異をなすかハテいぶかしのト始終寐とり、どろ〱富十郎じつと顔を上て富イヽヤなつかしや我夫玉ヤ、なんと富日暮れば淋しき物を、あそ沼の鴛鴦の衾に比翼の契り、二世の誓ひも世に落ぶれ、佐野の船橋降積り、あるに甲斐なき夫婦が身の上、さいつ比鎌倉着到の其留主に、氷の及淡雪と、命も消し妻の白妙、雪にこがれて愛着の、姿は爰に雪女玉すりや女房白妙、不便やそちや迷ふたなア富アイ迷はにやならぬ我子の身の上、梅櫻松三ツの木の、榮を祈る親心、中に一木は取わけて、義利の柵せき兼る、御身の大事と家の浮沈、此身の仇もろともに、はらす忘執おまへの心底、此世をされば うたかたの、満れば缺る私か疑念玉我鎌倉へ着到の、跡にて空しくなりし其方、今活計の身の上を、思ふに付て思ひ出すは、そちが最期佛事法事の暇はもどかし、子供の養育幸ひと、血筋を引たる玉章に、縁を組たる某が、戀慕と心得嫉妬の念に迷ふて來たか富イヽヤ色即是空、色には迷わぬ輪廻にも引されぬ、有難いとい吊ひ、今生を引たる私が思ひは源左衛門經世殿、御主人へ忠が重ふムんすか、但又親御へ孝行がおもふござんすか玉身躰八腑をわけられし、親の恩な須彌山に譬へれど、其親をはごくみ先祖の氏を輝かすは、全く以て主君の御恩、すりや言ずとも忠義が莫大

富そんなら嬭おまへは玉ハテ孝よりは忠義が重いは富ヱ、嬉しう厶んす、それ聞て落付升たわいなア「捨た浮世、すてた浮世の山かづら ト又獨吟にて富十郎正面へ居直る、大ざろ〳〵にて富十郎をせり下ろ、寐鳥燒酎火ごろごろちやんと止む、玉介思入有て 玉すりや某が心底を聞ん爲、ハテ迷ふて來たじやなア トこなし有て本舞臺へ來る內、與六心付起上り、おたりを見てため息をつき 與ハテ恐しい今のはいよ〳〵手に掛た白妙 ト言かけちやつと口に手をあてふりむいて、玉介を見て、怖りして ヤア源左衞門經世か 玉珍らしや伯父經景殿 トじつと睨め乍、入かわつてずつと二重へ通る 伯父と呼からは、血筋の身共を忘れぬその方、先は安堵 ト思入有て下に居る、玉介與六が顏を見て 玉君子は其罪を憎んで其人を憎まず、經景殿ハテよくいらつしやれたなア トこなし有て下に居る、奥方三ッ橋吉太郎梅太郎出て來て 子三人父上只今御歸館被成升たか 玉いかにもシテ奥玉章は何れにをる 三ッ橋母樣は奥の間に 吉太郎鎌倉より御上使樣お入り故 梅太郎何かの御心遣ひで厶り升る 玉ムム何御上使のお入り、扨は越後守時兼公より 與其方の心底探らん爲、弓削大助原田六郎、伊具の治郎三人共に此所へ、縫僧も倶にと仰を受て 玉すりやこなたにも 與一ッの功さへ立ば時兼公の御家來元の身の上 玉何にもせよ某立歸りし樣子早く申上よ 子三人畏りました ト三人は入、與六こなし有て 與イヤ甥の殿源左衞門、そちが世に出たゆへ此經景は世に落ぶれ、心に思はぬ今道心、又元の侍になるといふても此ざま、此大雪に領分の順見は、我身をいとわず民を惠む、そちが仁心と最前玉章が詞、他人を惠むそちなれば、現在伯父の此源藤太經景も、天晴見ついでくれるで有ふな〳〵 ト此內又雪ちらと降る、玉介思入有て 玉雪は豐年の貢物、民の辛苦を見て我身をこらす領主の禁め、今活計の源左衞門、現在血筋の伯父御じや物、アレ〳〵今降る雪も同前 與銀世界に黃金の山をなして尊敬する氣か 玉いつたん所領沒收の仇も打はれ 與親はなきより親のかたわれ 玉忠義は重いとはハテよく〳〵尋ねたよなア ト雪を見て急度思入、此時奥方芝賑か七大吉出てきて 芝源左衞門經世殿、七只今御歸館召れたか 玉是は鎌倉のお歷々承れば御上使とある先以て役目御苦勞に存升る ト三人を上手次に玉介座につく 七イヤ何大介殿伊具殿經世殿へ早く御上意の趣を仰せ聞られぬか 玉御上意の趣逐一に承知仕たふ存升る 大鎌倉方の仰余の義にあらず佐野の源左衞門經世義は最明寺時賴公のお見出しに預り今に本領安堵の 上本國此上野に引込病氣屆けもなく、參勤の懈りは所存有てか何にもせよ、其實否を糺せよとある、武將宗尊親王の上意を蒙り、則越後守時

兼公の嚴命芝察する所先君最明寺殿の御高恩を蒙りし源左衛門經世殿、時頼公には道崇と改、今都嵯峨の奥に閑居の御身、まつた御嫡子たる左馬之助照時公には御身持放埒と佞人共の舌頭を以て、秋田家へお預けの御身の上大舊恩を忘れぬ經世殿今日影の照時公をもり立北條家相續の思し召か芝但し又自分の逆意を企本國に引込み、時節をはかつて北條を討亡し、鎌倉を横領する所存なるかか何にもせよ、鎌倉の疑ひ立たる源左衛門心底篤と承らふ芝大此返答は如何でムる玉こは思ひよらぬ御難題、時頼公の御舍弟たる時兼公また照時公には御血脈、何れを何れと計兼本國に引籠れば、逆意なりと武將の御疑ひ是非に及ばぬ此上は、とくと思案を廻らし鎌倉へ申譯の仕らんか其疑ひ掛りし源左衛門に北條家代々の重寶神束の長刀は預置れず、某に請取歸れと時兼公が改ての仰與夫ばかりじやない、次手に三ゲの庄の御教書もノウ原田殿がいかにも二色とも請取ふ芝イヤそれも逆意に極つた上の事、未不分明なる源左衛門申譯さへ相立なば二品を受取には及び升まいかよシテ又武將への言譯はな芝源左衛門殿逆意でないと言

誓紙を受取升ふか玉何と仰らるゝな芝今笑の中に劔を振り、互ひに疑ふ時節といひ、殊に貴殿は武將の御不審逆意でなくば鎌倉へ、不忠を思はぬといふ誓紙を認め渡されよと、是とても拙者が差圖ではない宗尊親王がの御内意玉すりや誓紙さへ相認なば芝自然と申譯は相立道理大誠に誓紙を書は戰國にまゝ有習ひ玉そりや何か以て心安ひ義かイヤそふもあるまひ玉そりや又どふしてかハテ其誓紙を認るは只の事我性名を印せし下に肉身分しお手前が子息の内何れぞ壹人の首打て其血を血判にそへねばならぬかがてんかな玉すりや悴が首打其血判にハテなア與何ぼう大腹中に呑込でも是ばかりは出來にくからふ、何をするも甥子の爲だヲゝそふだトツカ〳〵さする玉介よろしくとめて玉待た伯父者人こりや何國へ與ハテ知れた事奥に居る三人の子供の内身共が見わけて、そつと首を打放してやらふと思ふてト又行ふさするを玉介きつと留て玉ハテ御深切な思召しかし肉身の悴でも切兼る經世でもムるまい、御自分の御世話にやならぬ、立騷ずとひかへてムれト與六よいとおこづきながら下にいる芝瓶か七大吉詰かけて芝か七經世殿彌々誓紙を認召るか玉いはひ致さば逆意のおとがめ、三人の悴の内何れぞ壹

人首打取誓紙にそへてさし上ませふ 芝すりや逆意なき條誓紙に認めお見事我子の首打て、渡すじヤまで 與ハテ澤山な子供の内、壹人は切ても大事あるまひ 大其刻限も暮六ッ迄に 玉先それまでは奥の間にて三人御返答相待申す ト歌に成り、互ひにこなし有て、芝翫か七大吉與六奥へは入る、跡合方に成り、玉助跡見送りこなし有て 玉今日本の賢人と、呼れ給ふ時頼公には、佛門に入て都の御閑居、照る日の神の岩戸に籠り給ひし如く、世はとこやみに侫人はびこり、照時公を追退け、越後守外戚のいをふるうがむやくさしさ、態と本國に引籠り、照時公へ心ざしをはこぶ某を、逆意と有て武將の疑ひ、此言譯には三人の悴の内 ト思ひ入有て、火鉢を引寄思案のこなし、奥より富十郎着流しにて、臺十能に火を入れ持出て 富是はしたり、御歸館の様子は承り升たれど、御上使のお入ゆへ、よふ／＼只今嘸お冷被成たで厶り升ふ、マア／＼是にて ト火鉢へ火を入るこなし 玉奥玉章左様な事は妼共に言付召れぬ 富イヱ／＼あなたが日比のお示し、富貴に有て貧しきをわすれず、兎角以前の憂を思ひ出して、此身の愼みそれで私も ト云作をつくらふて サア／＼よくよりて當り給へや ト火鉢をさし出す 玉ムム成程なア、拾年立ば一昔、浪人の身の夫婦兄弟、けふの煙りも立兼しが、其時は 奥玉章 富ヱヽ ト顔見合おも入

玉そなたの年もまだ三五の娘盛で有たが、今で思へばアヽきつふふけたぞや／＼ 富ふけた筈で厶り升、三人のこの母じや物 玉誠に春立は夏來り秋去れば冬に至り、光陰に關守なく、我身の上は目にもかゝらず子供が成人 富兄は拾一中は九ッ乙は七ッ 玉そなたが姉の白妙も 富てふど今年が七回忌 玉中陰の間は身共は鎌倉に有て、本領安堵の悦びに、いさみすゝんで立歸れば白妙が最期の悲しみ 富劒の難もあなたはしら雪、こふいふ宵に御最期と思へば、雪も恨めしい 玉雪は花より花多く 富むつの街に六道能化 玉降敷庭に雪の塔 ト是よりしつほりさした合方に成、又雪ちら／＼ふろ、富十郎庭下駄をはき、最前胴切の雪を石塔の心にて能所へ直し、二重へ上り合掌する 玉法名は眞月院花岳妙雪大姉 富俗名姉上白妙様 玉幽靈出離頓生菩提 兩人南無阿みだ佛／＼ ト兩人宜敷きある、奥方與六しろ目天窓一ッへついはでなる夜着を引かけ出かけいで 與身共も馴染の佛じや、回向してやらう ト前へ出る 富ヤア伯父御様いつの間に 與天窓も刺立此様に、ぬく／＼と成たも皆甥の殿の影、時に源左衛門疑ひ立た申譯は何とする氣じや 玉そりや拙者が胸中に厶るわひ 與甥の其方案じるは血筋だけ 富私も血筋姉様の敵を、申我夫ごふぞ打して下さんせぬか 玉ムヽシテ白妙を討たる敵は、それと相知れ

たか 富大方それと最前の詞のはし、憖に伯父御と ト與六の方へきつと成る、玉介富十郎を引廻して 玉ハテ事の實否もわからぬ內、伯父御に向つてたわけ者めが 與イヤ〱源左衞門若しうない、玉章も武士の娘姉白妙が橫死と聞ば、敵が討たいは道理〱、甥嫁の事身共が助太刀して討してくれふが、敵は何者じやサヽいへ〱 富サアその敵は 與よもやしれまいアヽ不便な事な 玉此源左衞門鎌倉の滯留中、先妻白妙を手に掛しは、おふかた道ならぬ橫戀慕、主ある女に無躰を仕かけ、聞入ぬ恨みとてかよはき女を手に掛しは、よもや常躰の武士でもあるまひ、しかも世に捨られし惡黨坊主の鉢ひらきか、人非人の乞食非人めでサア有ふと、推慮したなア玉章 富アイそふじやわひなア、そふでムんす、十が九ツしれて有のに、空々しいおいとしや、姉樣をヱヽこなたはのう 與アヽ是々そりや何をいふ、扨は此源藤太が白妙を手に掛たと存じて、それで最前から身共に向ひて白まなこか、伯父をにらんでひら目同前、源左衞門が手前もあるのふ、身共はしらぬヲヽ芥子程も覺はないぞ、しらぬ事をば、惡事災難いかに女じやと云ふて、ツイ推慮で姉の敵とは、コリヤ何とも迷惑千万な事だわへ トこなし有て下にいる、富十郎思入有て最前の臺十能に雪を一すくひ入て來て、玉助が前に置て 富申我夫源左衞門殿、此雪は白ひ物か黑ひ物でムんすかへ 玉ムヽ何見ても雪程黑い物はなしと、面白躰の俳諧にもかくいへば、水の體にて黑ひも斷り 富サア白ひはしれた雪なれど、黑ひと言が俳諧とやら、夫を察してお前の心は 玉夜を晝に雪の力や明り窓 富そりや宜士とやら云學者の故事 玉イヤサ其先妻の敵、そちが爲には姉の敵も、やがて討すは 富姉樣の恨み晴さいで置ふか 與アヽ討すはよひが、邪推は無用 ト立かゝるを、玉介がわつて夜着の袖を取 玉無用の用は夜着の袖、取ては形見苦しく、有ても兩手は通されず、是が則無用の用 ト立廻りにて 富敵は討れず見のがされず ト詰かゝる玉介とめて 玉女の手際しばしの辛抱 富丈を延して褄辻あはゞ ト與六の首筋を取る、與六夜ぎすつぼりぬける 玉ハテその時は名乘かけて 與コリヤごふやら此身の綻びが ト又ふり切立ふさする、玉介よろしくおさへて 玉是サ何事も皆推慮じや驚くまひ 與でも ト富十郎を見る、富十郎よらふとする、玉介留る、木釣がゝり暮六ツ打 富ありやもふ暮六ツ 玉鎌倉へ有無の返答 トシヤン 與降てわいたる雪空も 富曇りなき身は晴わたる 玉名におふ佐野の夕暮に 與じみ〱消る悴が命 ト立上る富十郎きつとなつて 富積る恨みの雪佛 ト與六へかゝる玉介突廻して 玉イヤ跡吊ふは出家

の役ト與六を下へ突やる 富何の あの 經景殿が ト與六ちやつと庭に向つて 與南無
あみだ佛 トなじろ、富十郎又行ふさするを 玉ハテ 仇を情に コリヤ 玉章
ト手を取富十郎ぎせいするを 玉マア奥へ參れといふに ト唄に成り玉介富十郎をつれ奥へは入、
跡本つりがれ殘つて、與六そつと跡見送りこなし有て 與今源左衛門夫婦が五音では、
身共が白妙を手に掛た樣子、ありや 推慮でないとつ
くりとしておるわへ、此上は何も角も 短兵急に佐野
の所領をせしめた上に、夫婦共に返り討 トきつとなる、又ごろ〱見事
にかへつて ア、情ない又なやますか、コリヤ困つた物じや
わへ ト二重にべたつりと尻居にへたる、此見へよろしく本つりがれ上るりチクリチヨン〱かへし

同大切雪女鉢木の段

造り物三間の 間、數寄家体本椽付、雪降積りし 本屋
根、上手落間連子窓付の塀柴垣のあしらい、此前に淨
瑠璃出語、臺下手落間にして風雅な塀、庭木石燈籠の
あしらい、皆々雪積り有、能所に鉢植棚に雪持の鉢の
木幾つも並べある、家体の前に 數寄屋障子一面にし
まり有、やはり雪ちら〱と降り、本釣鐘かすめて道
具納る 上「雪風にさ野の船橋音す也、手馴の駒の歸り
來る、道さへ雪に埋れて、遠寺の鐘の音も氷り、今は
そびへし庭の木の、梢を拂ふ吹雪さへ、身にしむ思ひ
源左衛門、常に動せぬ武士も、主家の爲と恩愛の、我
子の命わけ兼て、胸の氷も碎くる思ひ、始終を影に立
聞こ、夫の心白雪に、ふるふ足もとふみしめて、伺ひ
居る共白ま弓、矢竹心の張つめて ト能程に前の障子を引てとる、内に玉介衣裝羽織
にて、刀かけに大小をかけ、手を組思案の體、上手柴垣の間より、富十
郎襦をかいごりじつと伺ふ、上るりの跡床二挺のめりやす、雪おろし
の音 玉先刻不思義になき 妻の、白妙が 姿を 顯はし、忠
と孝とはいづれがおもいと、よふす有氣に尋ねしは、
合點行ずと 思ひしが、今ぞ此身に 思ひしる、鎌倉よ
りの逆意の疑ひ、此言譯には誓紙を認め、我三人の悴
の内、一人の首を討血判せよと上使の難題、さすれば
三人の悴の中に、もしや 彼若君の身の上を○イヤイ
ヤ加樣な事もあらんかと、玉章には 勿論先妻の白妙
にも、包み隱せし我子の素性、餘人のしるべきいわれ
なし、ハテその意を得ぬ 上「思案工夫の とつおいつ、
聞居る妻が身もわな〱、左程大事の若君の、御身の
素性今までも、包み隱すは 胴欲と、恨の 詞いゝたさ
も、じつとこたへてしめなきに、涙は氷と成ぬらん、
樣子聞付一間より、子は親に似て利發者、父がまへに
合掌し ト兩人別々に宜敷愁ひのこなしある、奥より三津橋吉太郎梅太郎出て、玉介が前に手を合せ 三吉梅サア
父上樣、私が首を早ふお討被成て下さりませ 上「首さ
しのべて覺期の體、女房ははつと氣も狂亂、留に出よ

ふかごふせふかご、おんじる胸は幾瀨の思ひ、父はほさ〳〵打うなづき玉ヲ、悴、そち達は先程のよふすとくと聞たな三ツさちアイ逆意とやらの申譯に、此梅太郎が首切て、お渡し被成て下さりませ吉イヤ父上の申譯にはこの櫻之助、サアとく遊されて下さりませ梅太郎イヤそりやならぬ〳〵、首切らるゝは此松千代、サア爺樣ぼんが首をころりと切て下さりませ三イヤ死るのは此兄じや梅イヤ弟の私じや吉イヤ中取てわしじや〳〵上「互ひにあらそふけなげなさに、父はひと敷ひきさゞめ玉三人共に出かしたなア、いづれ不便に甲乙はなけね共、ぜひ一人は首討て渡さねば、鎌倉への言譯立ず、もし此事を玉章の、耳にいらばなさぬ中の義理を思ひ、邪魔せんな必定、時刻移らぬその內に、父が直々手に懸る、冥途へ行共殘る共、かならず共に恨むなよ、覺期はよいか悴共上「南無あみだ佛と觀念して、刀すらりと拔放せば、是なふ待てとさんで出、そこと爰とに三人の、我子を圍ふ兩袖に、泣て居たのを顯はせり、夫もはつと思ひしが、態と突のけ聲あらゝげト此內富十郎ツカ〳〵と出てよろしくさゞめて泣落す玉ヤア玉章か、最前よりの樣子、定て物影より聞つらん、今改

て物語るにも及ばぬ、その方もしるごとく、忝くも北條時賴公最明寺殿と御名を呼、勿体なくも民の歎きをしろし召れんと、諸國行脚の姿と成り、遍歷し給ふ折こそあれ、降來る雪に惱され、北さのゝ渡りに行暮給ふを某御宿參らせしに、その比は貧しき暮し、何御供養申さんにも、あだでなく粟の飯を進め參らせ、更行まゝに夜寒さ增り、焚火にいさなむ物もなく、有合ふ庭の鉢の木の、梅櫻松を伐くべて參らせしに、その返報に加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝今三ケの庄を給わる、その緣を以て三木になぞらへ呼し、兄弟三人是皆時賴公の、御恩もあつき廣大無へん、せめては御嫡子左馬の助照時公を、御世にあらせんと、心を盡す源左衞門なりや、恩愛の紛なり共、主君の爲にはかへられぬ、あれ三人の悴共、君父の爲に死をいそぎ、首さしのべるけなげ者、父の手づから介錯する、妨げせずとそこのけい上「只一討と振上る、袖にすがつてさゝへる女房、サア〳〵ぼんをと欠よる松千代、母は引留いだきあげ、梅も櫻もちりいそぎ、イヤちらさじと押かこひ、我身をかせにすりより〳〵富マアマア〳〵待てたべ、お前は夫でも濟まふが、生先あ

る子を先だてゝは、義理もあるまだその中には、大事の〳〵育君の、イヤ育子を殺さす事はなり升ぬ、子の恩愛に引されて、お主を思わぬ此母と、思召なら御上使への言譯には、此母を手に懸て言譯被成て下りませ上「是手を合せ拜みます、拜むわいのと聲をあげ、わつと計に泣叫ぶ、なさぬ我子へ立る義理、過分と禮のいゝたさも、こたへる臓腑はずた〳〵に、さくる思を張つめて玉ヤア聞譯なき玉章、鎌倉よりの仰には、愛子の命されよとあれど、女のそちが首されよとの仰はない、なさぬ中の子をかばい、死したる姉に義理を立、此經世が逆意の言譯相立ず共苦しうないか富サア夫じやといふて玉さなくば悴を是へ出せ富サア夫は玉富サア〳〵〳〵玉なんと上「何と〳〵と押詰られ、我身を切らるゝ苦しみより、百倍増る憂涙、消入ばかり歎きしが、よふ〳〵心取直し富成程心得ました、さりながら親子は一世の別れといへば、此世ばかりの契りゆへ、せめて先立その子には、暇乞をさしてたべ、是のみお願ひ聞届てたべ經世殿上「涙ながらに立上り、襠とればその昔袂もくちて、袖せまき、細布衣身にまとひ、姉が筐のつゞれ帶ト此時富十郎襠をとる、いつもの女鉢の木の姿になる、立上つて昔忘れぬ此姿、こふした憂目に陸奥のけふの歎きをいかゞせん上「あらかなしさの雪の日と、又さめ〳〵と泣しづむ、經世も目にもる涙を拂ひ玉實にや盧生が見し榮花の夢は五十年、そのかんたんの假枕、一睡の夢のさめしより、まだ〳〵はかなひ躬が命富是を思へば身を富て、此悲しさを見んよりは、貧しい元の身の上には、なぐさむ事も有べきに上「松風寒き夜もすがら、寐られねば夢も見ず、何思ひ出のあるべきと、そゞろ涙にくれけるが玉ヲゝそれよ、更行まゝに時刻も移る、我いにしへ世にありし時、鉢の木をすき數多の木を集め持しを、いわれぬ貧の花好と、皆人々に參らせしが富今はそれには引かへて、是此梅櫻松と三人の子、わきて夫の秘藏なれど玉何是いまだ小枝の苧切、くべて煙となさんそれのゝ謠ゝりに成、玉助刀を抜ふとする、富十郎一寸さゝへて三津備ないばさふ、玉助ふり切て刀をふり上る、富十郎二重へすか〳〵と上り、上か一寸連り引の心にて急度とめる、玉介刀をふり上ながら、合點のゆかぬ思入にて上なふりかへつて急度見上る、一寸寐鳥にて富十郎直にちやつと飛下り富アゝ是雪打拂ふて見れば玉面白やいかにせんそれ上「先冬木より咲初る、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと木より先立は、梅を伐やそむへきト兩人よろしく、富十郎三つ襦を突付乍富見しといふ人こそうけれ山里の

上「折かけ垣の梅をだに情なしと惜みしに 富 ごふマ
ア是が 上「今更薪になすべしとは、かねて思ひきや
ト三津吉を作な廻して、吉太郎なさし付る玉介見て 玉 櫻を見れば春毎に、花すこし
遅けれど 富 此木や佗るさ心を盡し育てしに 上「今は
夫のみ佗てすむ、家櫻伐くべて緋櫻になすぞ悲しき
ト兩人よろしく愁ひのこなしにて切かくろ、さめろ、梅太郎此中へわけ入て 梅 父上ごふぞわしをわ
しを ト取付てせかむ、玉介じつさ見ろ富十郎又是なかこふて見へ 玉 松はさしもげに 上「枝
をため葉をすかして懸りあれど、植置しにその甲斐
今は嵐吹 ト梅太郎を拖作玉介を突廻して、上座へ直し、三ッ懂さ吉太郎な玉介の前へ突やりながら 富 松は
もとより常盤にて 上「薪となすは梅櫻、切くべて今ぞ
御垣守 富 衞士の焚火はお爲也、サア早ふ切給へ ト愁ひ作
三津橋吉太郎な突出す、玉介始終富十郎のそぶりにこゝろな付るこなしにて、ムヽさ切かくろ、梅太郎ツカ〳〵下りて 梅 イ
ヤ母様、兄様より坊を〳〵 ト取つく富十郎だきあげて 富 アヽ母様とは
勿體なひ若君様 玉 ヤヽなんと 富 是我夫三人の子の内
に、此松千代君こそ勿體なくも、誰有ふ時頼様のおた
ね、おなかは替れど照時様の御舍弟君でムんせふが
な 玉 ヤヽ深く包みし若君の御身の上、どふしてそち
は知たるぞ、サヽ子細を語れなヽなんと 上「語れ聞ん
と詰よれば、妻はつれ〴〵顔打眺め 富 知らいでなら
ふか經世殿、生ある内こそしらねども、此世をさりし

業通にて 玉 ヤヽなんと ト二重へごつかさかけてきつさなる、雛鳥うすごろ〳〵に成る、床にて修羅
よぶの相方に成る、富十郎玉助なきつさ見上て 富 ヱヽ聞へませぬ源左衞門殿、夫
婦は二世とさく物を、あの若君の御身の上、譬へお前
が胤にもせよ、生ある時は義理ある中、何のさもし
い分隔、麁略に思ひ升ふぞいなア、まして夫婦が大恩
ある、時頼様のお胤じやもの、此様子をば最後のきは
まで、私に包み隱すとは、日比に似合ぬ無ごく心、も
し恩愛にひかされて、いかなる不忠のあろふもしれ
ずと、假に妹の姿となり、詞かはすは二世の緣、お主
大事、夫大事我子可愛の愛着心、凝り固って今宵に、あ
らはれ出し我一念 上「是見給へと立上れば、今迄見へ
し粧ひも、忽柳の亂れ髮、花の姿もちり失て、身は白
妙の雪女 ト此時大どろ〳〵にて燒酎火もへろ、雛鳥にて富十郎引ぬきに成り、幽靈の姿となる、玉介急度成って 玉 ム
ウ扨は白妙が靈、妹玉章の姿となり、あらわれ出しは
我下借腹の悴と僞り、藁の上より育させしを、時頼公
の御胤と、此世を去りし業通にて知つたる故、影身に
そふて守りしか、ホヽウ生ての貞女死しての操、出か
したなア、左程迄に思ふ者、是まで包み隱せしは、我
誤り恨をはらすは則是 上「懐中より取出す錦の袋は
安堵の御教書 玉 始には三ケの庄の御墨附、終に印給

ひしは若君の御身の上、二階堂信の丶介が娘玉豊と
女云に、假の契りの御胤宿り、平產の上男子ならば、
その方が倅となし、養育たのむとある奥書、夫ゆへ連
そふそちらにも、深く包みしその子細は、御臺樣の嫉
妬といひ、又我君の御舍弟たる、越後守殿の積惡、照
時公を追しりぞけ、執權の職を橫領あらば、まさか
の時は照時公のおひかへと、人にしらさぬ我所存、樣
子といふは此通りじやわい 上「始てあかす松千代が、
素性はすぐに白妙が、常盤の松の色かへぬ、操のかゞ
み曇りなき、育柄とぞしられけり、閨に白妙疑ひの、
始てとくる朝日の雪 富ヱ 丶嬉しうムんす忝ひ、おま
への心底きく上は、未來の迷ひも晴渡り、又血筋の妹
に、此身の仇の經景を、討してもらへば恨もとけ、孝
と忠義は戀の重荷、首とせ過て未來はやつぱり、半座
をわけて經世殿 上「名殘りは盡じおさらばと、すがる
子供をかきのけ〳〵、姿は冥途へ雪女、かき消す如く
失にけり ト大どろ〳〵にて三人の子役とり付をふりのけ、下座のよき所へ富十郎なげす、かけゑんしやう雪けぶりばつさ
ちる子役三人うろ〳〵して 三大梅ヤア母樣が、どこへやら、母樣いのふ
上「わつと 泣出す三人を、なぐさめかねて 折こそあ
れ、始終を影に伺ひ聞、あらわれ出し源藤太 ト下手柴垣より與六着

流し、刀を持ッカ〳〵と出て 與 雪女と妖て來た、白妙めが今の噂、松千
代といふは時賴のたね、一ッの功はこいつのそつ首
上「討取呉んと切つくるを、經世すかさずぐつと引つ
け 玉ヤア血筋と思ひ用捨致せば、段々つのる惡事の
增長、女房白妙はこなたが手にかけたで有ふな 與ヲ
丶いかにも心に隨がはぬ 戀の意趣、しばり上て責
の苦痛を見せてなぶり殺し、夫婦は一體うぬも一所
に 上「我慢の切先切付る、ゑたりとかはしてしんのあ
て、心地よかりし 次第也、折から立出る 以前の上使
ト奥方芝翫か七大吉ッカ〳〵と出て 芝か 大經世殿誓紙 受取升ふか 玉 契約の
通り某が、血筋の 者の 血判を仕らふ か七ヲ 丶其血判
にはいで 此松千代 玉イヤ血筋の 者は則是に 上「伏た
る經景引起せば、イヤ夫よりはと六郎が、ぎせいをと
ゞむる春行義成、無法の經景心つき、何をとかゝるそ
の隙に、長刀引提玉章が、姉の敵と薙立られ、わつと
苦しむ經景が、血汐の穢れに池の 氷もとけて逆卷水
勢 トか七子役にかゝるを、芝翫大吉きつとぎせい、與六玉介に切てかゝる內、奥方富十郎もとの玉章役にて、前まくの長刀を持、ツカツカと出て與六をポンと切、運氣の合方にて與六の血汐前の池へ流るゝと、見事に水氣上る、二重には大吉芝翫か七と立廻り、皆々きつと
目をつけ 玉ハテ心得ぬ、今伯父源藤太が血汐、此池水に流
れ入るとひとしく 芝陽氣めぐつて 氷も碎け か七忽水

氣卷上るは 富ムヽ扨は江の嶋明神か、傳へ給ひし神
東の薙刀、血汐の穢れに此ごとく 大水氣を上る 長刀
の奇特 皆々ハテあらそはれぬ奇特じやよなア トきつさなる水氣
納る與六か七皆 與いでその長刀 か七此小びつちよ ト兩方へかゝ
る芝翫大吉はか七を取卷、皆な突のけて富十郎は與六と立廻り 富最早遁れぬ 姉樣の敵 芝大謀反
の一味の原田六郎 玉紛ごもには母の敵 よか七何を ト双方さ
んく／＼さよき見へにてごつこいさ納り 玉まづ今晩は是切 ト右宜敷打出し 目出度幕

西澤文庫傳奇作書追加中之卷終

西澤文庫 傳奇作書追加下之巻目錄

西澤文庫傳奇作書追加下之巻

西澤綺語堂李叟編

觀塲性根玉之詩

不是尋常非人齊、衒敵兄弟蒲鉾栖、一巻襤因辛苦破、
重代刀爲態物携、卑怯加村寐込伺、流石春藤途方途、
任敎後終遂本望、于今名殘大安堤、

右襤褸錦下之齣

漸定身替氣未平、撿使玄番勢縱橫、呑咳源藏刀欲拔、
見首松王眼不明、幡顯帷出文庫影、梅飛櫻枯門口聲、
有合乘物入死骸、舁送夫婦無限情、

右手習鏡第四齣

約束出入行不行、更使濡髮我屋迎、擲俵共盡相撲手、
扣戶時呼盜賊名、異見於鬪聲彌抖、律義長吉首堪傾、
誓言立處講中喜、事終遂結兄弟盟、

右双蝶々米家之齣

大星遊與日夜昌、面無千鳥手鳴方、斧九試剪生鮹足、
力彌竊渡密書箱、於芠釵自楷梯落、寺岡咄因愁歎長、
蜺籠計略終仕損、水雜炊飲鴨川傍、

右忠臣藏第七齣

曾共三太法眼隨、皆鶴戀慕身上知、已殺淡海豈云駐、
直名牛若欲與之、開襖忽現天狗像、取面卻驚鬼一妾、
六韜授娘早切腹、主從難別此墧悲、

右鬼一法眼第三齣

貧家渡世草鞋營、借錢乞來感孝行、乘馬三吉無餘念、
盛餅乳母祝誕生、八藏砥刀致言譯、桂政把杖立深更、
豈圖火鉢有金子、門口爲突慕跡征、

右戀女房孝行之齣

庭移致影金閣寺、久吉智謀此地與、軍平追立直信憫、
雪姫被縛大膳憎、拔刀共怪龍映瀑、畫花却驚鼠切繩、
借問慶壽何處在、更揚烟火三重登、

右信長記第三齣

盜賊事畢林未眠、鬧乎鬧乎菊之前、忠度已忍此家在、
在屋竊歸其由傳、比與梶原催夜打、仁義六彌近曉天、
可憐右腕終被落、戰死於軍一谷邊、

右一之谷第二齣

治世爲恨深編笠、欲來詠入蛙之爭、背顏老母異見勁、
又手盛長返答明、敎訓閒居源藏逼、去狀擲出女房驚、
更拾小石當鐘處、相圖大鼓分死生、

右古戰場第三齣

殺舅團七氣愈雄、女房愁歎知始終、葛衣縫共戀慕綻、
草履卯因親切同、結帶一寸拔恊指、袒肩三婦押屛風、
捕手役人來欲縛、貫緡掛首落備中、

右夏祭第七齣

手携燈籠花園囘、言是齋藤追付來、欲立身替衣裳揃、
爲取音頭踊躍催、覆宮出子夫婦意、拭目運眼上使方、
無端拔刀打搽首、天晴忠臣嗚老哉、

右大搭宮第三齣

長持切錠出於安、五人又手賴万端、誕生在處小辨告、
御運開初來現歡、把鏡委解島辛苦、擧顏漸語都愁嘆、
山上時戰血氣男、云是非爾龜王丸、

右姫小松第三齣

聞弟密通置霜驚、御訴門前嫁入聲、健宗難題含儕恨、
道風神文老因情、縱使野未軒端彳、莫必父上名字明、
毎手割竹被追卷、不知霑々指何行、

右靑柳硯第二齣

世營鍛冶夫婦親、誦咒行者毎日臻、愛戀思因狩衣盆、
離別爭爲荒神新、寶劔打處最後近、御經書終落涙頻、
高松時來刺脇腹、初驚老母顯其直、

右磯馴松第三齣

内侍曾伴六代公、尋來和州上市東、家來彌助雲井近、
娘之於里戀路工、梶原顯實羽織裡、權太直曲鮓桶中、
肝膽親父刺腹處、初語妻子共盡忠、

右千本櫻第三之齣

辨齋御供落鴉照、不知高定綠組虛、火摩猶遺兩家恨、
鞘破忽出一通書、上使藏人御殺害、覺悟千晴鷲躊躇、
紛失唐鞍雖取返、夫如無刀太刀何、

右愛護雅中齣

芝居意趣鬱不開、更待雁金緣川隈、欄干近赦鯉口伺、
下駄遠鳴橋板、一向誤入丈夫案、無息打殺强氣雷、可
憐角左武運盡、五人歌行相談哉、（此詩一字脫字あるべし）

右雁金安治川齣

（右十七回各書あれども略す）、

淨瑠璃難波土產

（右拔書及び「女鉢木の評註」「近松平安堂の肖像」はいづれも難波土產に載せたるものと同一にして、同書は「新群書類從第六中」に既に收めあればこゝに之を畧す）

冥途の飛脚の評註 附戀飛脚道行七役正本

近松門左衛門作梅川忠兵衛冥途の飛脚は、正德元卯三月五日より竹本座にて、前狂言新いろは物語、切狂言に始て出る、今嘉永四亥年まで百四十一年になる、此のち傾城三度笠、又戀飛脚大和往來なごと外題を呼ぶも、皆此冥途の飛脚より出て、少しの增補あるのみ、本文の舊本は余か撰當世榮華物語四編日中の卷に出せり、此評に云上の卷段切は、淡路町龜屋の場より、屋敷爲替の金をもち、堂島へ行をうか〳〵と、米屋町まで步行所、重井筒四ッ辻の段によく似たり、中の卷茶屋は、佐渡屋町越後屋と有て、梅川のせりふに太夫天神の身でもなしとあれば、店女郎なる事明らけし、丹波屋八右衛門は歌舞妓にて敵役に作したれど、冥途の飛脚の書かたを見れば更に敵ならず、道行相合駕に勝曼坂の事を述たるは遙に遠きより見渡したる心也、廓中の女郎禿まで、正月元日六月朔日勝曼愛染へ參詣する事、昔は今宮十日戎に同じく賑ひて、此日は門出も咎めず、出は入心の稀なりしも、中興絕て聞ずなりぬ、下の卷新の口村は博多小女郎波枕中の卷、心清町の段の裏を作せしもの也、是は梅川忠兵衛古鄕へ行、小女郎惣七の方へ父惣左衛門尋ね行かの逢ひにて、壁越しの愁ひ裏表の作意雙方とも本文を直見て感ずべし、扨此道行を享和三亥九月中の芝居にて、淺尾爲十郎一世一代に增補して、龜屋忠兵衛に淺尾與治郎、槌屋梅川に叶珉子、馬士江戶六、下女お辨、つるかけ斗治兵衛、針立道安、傳がばゝ、垂井村助三郎、新口村孫右衛門右七役淺尾爲十郎相勤べき所、病氣にて淺尾工左衛門代りを勤大當りせり、太夫宮薗美羽太夫、ツキ宮薗志津太夫、三弦鶴澤文吉にて有し、此七役は地狂言計にて所作事ならず、天保二卯年盆替り、中の芝居にて中村歌右衛門梅玉道行の中へ、七役早替り所作事を勤し時、余作せし其役割は、新口村孫右衛門淺尾額十郎、槌屋梅川中村松江、針立道安嵐舍丸、お影參り藝者路江瀨川路之助、忠三妹お竹中村梅花、傳がばゝ中村歌七、蔓掛とち兵衛淺尾國五郎、福壽屋長命中山文七、龜屋忠兵衛万歲才藏馬士仕合よし藏、大和屋法六、願人坊主道安、娘お福右六役中村歌右衛門相勤む、元孫右衛門と七役のつもりなりしを、額十郎にさせ役割には俳諧師唄玉の相手は、垂井村助三郎に小川吉太郎を出したれ共、所作多ければ略して六役にて果しぬ、其時綴本の歌淨瑠理出す

べき所出さず 爰に其正本を書、造り物淺黄幕、並木
の松雪降の体、在郷にて幕明 ト花道より順禮古手買西の通ひ道が節季いは二人出て舞臺にて行合ひ 節季いは節季候 同だい〳〵 紙屑てん 紙屑 順禮順禮に
御報謝 ト雙方窺ひ せきいは宅兵衛殿 順門平殿 古手彌藤治殿
せきいは傳藏殿 同我々かく姿をやつし徘徊致せど 古手か
の梅川 忠兵衛二人の者 せきいは一向に相見へぬは 三人
如何致した物でムらふ 順イヤ此大和は生國なれば何
れ一度は參るでムらふ せきいは然らば今一應尋ねて見
升ふ 古手せきさやふ仕り升ふ 順何れもぬかり召れな
三人心得ました 四人おわかれ申す トわかれ東西へは入口上ふれ出て直に上るりに成る
「落人の爲かや今は冬枯て、薄尾花はなけれ共、
世を忍ぶ身は跡や先、人目を包む頰かむり、隱せど色
か梅川が、なれぬ旅路を忠兵衛が、心細くもふたりづ
れ ト此内淺黄まく切て落す、向ふ遠見に在所雪ふりの書割二重のけごみ草手、松の實木、松の釣枝雪つもり有、此二重の上に歌右衛門着流し、一本差ほうかむりにて、手に三度笠を持、松江にきせている、松江着流しけいせいの形りにて居て 歌イヤのふ
梅川、そなたは廓より外へといふてはあるかぬに、雪
道といひ定めて草臥たであらふ、持病の癪でも起り
はせぬかや 松イヽヱ私より お前の心遣ひ、それを思
へばしんどうもムんせぬが、全体爰は何といふ所で
ムんすへ 歌ヲヽ爰はわしが生れ在所、四五丁ゆけば

實の親孫右衛門様の内なれど、不通といひ殊に今の
身の上では、おめにかゝるは大きな不孝、直に逢も面
ぶせ、其上そなたと一所に死んでは、師匠治郎右衛門
様へ義理立ず、又義理の親妙閑様や おすはにも言譯
立ず、そなたに科はない事なれば、どこへなりとも落
のびて、翌日わしが召捕られ、お仕置に合て死だれ
ば、一遍の回向香花をたむけてたも、是梅川頼んだぞ
や 松マア〳〵待て下さんせいなア 上「梅川もせきく
る涙、今こな様のその様な、憂めは誰かさすぞいな、
あじな一座の附合に、思われそめて思ひそめ、いとし
つかへに可愛が癪、逢たいが色見たいが病ひ、戀しい
顔が藥より、按摩様より灸より、氣合がよふなりや
惡ふなる、お袋様の御機嫌が、そこねて見へぬあけの
日は、ふみでくり出し口舌でとめよ、その揚屋の勤に
も、やく待宵の鐘を恨み、お前に逢夜の曉は、きぬぎ
ぬの鳥をかこち、笑ふてわかれ泣て待、流れの里の苦
をのがれ、身儘に成て儘ならぬ、同じ浮世におんなじ
花、吉野初瀬の常夏に、櫻がさこじや あるまいし、雪
は白ふてお月様は、いつでも丸ひじやないかいな、譬
へ掟にあふとても、ふたり一所に是此ごとく、手に手

を取てといだきつき、又とりかわし泣涙、袖の氷と閉あへり、忠兵衛もとも涙 歌そふいふそなたの心なら二人一所に死出三途、あれ〳〵ずいと向に見へる藁葺は、忠三といふて親達の家來も同前、久しぶりで逢たふもあり、今霄はむかふで夜を明し、たとへ死とも古郷の土 松アイ〳〵夫は嬉しふごさんす 歌何かの咄は忠三方にて 松そんなら忠兵衛様 歌梅川おじや上「いたわる身さへ雪風に、こゞへる手先懐へ、あたゝめられつあたゝめつ、石原道を足曳の、大和は爰ぞ古郷の新の口村へぞ着にける ト上手より雪もちの屏家を引出しとまる 歌是梅川爰が則忠三が内じや、どれ尋ねて見よふわいの 松わたしが居ても大事ないかへ 歌ハテ何のかもふ事、おじやおじや忠三殿お内か、久しふお目にかゝりませぬ上「おとなへばずつと出たる妹のお竹 梅花アイ〳〵どなた様じやへ ト梅花在所娘の拵、前垂たすき下駄がけ火吹竹を持出 どれから お出なさんした 歌ム、忠三殿にはお内義はなかつたか 梅アイ忠三は手前じやが、兄様は今の先庄屋殿へ、ごこからムんして何の用で わせさんした、わしや隣り在所へ奉公にいて、近比内へ戻つたゆへ、兄様の近付しりませぬが、もし大坂の衆じやないかへ、こちの親かた孫右衛門様の息子殿、大坂へ養子にいて、けいせんといふ者をたんと買ふて、人の金を盗み、その傾せんを手に提て「ヤア走つたとやら 迯つとやら、代官所からきつい御詮義、孫右衛門様は久離切て、おかみの構ひはなけねども 梅血をわけた親子なれば、いとしや年よつてきつい案じ、兄さんも馴染ゆへ、もし此あたりをうろいて、見付られはさつしやぬかといかい氣苦勢「庄屋からは呼に來る、ヤア寄合じやの印判じやのと、節季師走に爰らあたりは、傾せん事でにへかへる 梅ア、うたてのけんせんやのふ「しらねば遠慮もなかりける 歌成程〳〵、大坂でもその取ざた、わしらは夫婦つれで年籠の參宮、なつかしさによりました、ちよいと呼できて下さらぬか 梅ヲ、それは安い事、一走り行てきませふが、爰からは大ぶの道、是女中様、まゝが仕かけてある程に、出來そこなはぬ様に、是さしくべて「下さんせや、のと、かたまへ下りに水鼻たらし、おいとよぢらかし出てゆく、跡に夫婦がうつとりと、暫し詞もなかりしが、泪にまじる袖の雪 松あれまた雪が降るわいなア 歌忠三殿の歸らるゝまで、内でしばらく待合そふ「いひつゝはいる

西受の、反古障子を細めにあけ（ト窓より覗く、此時吹かへに成る）松忠兵衛様見やしやんせ、雪風で寒けれど、よいけしきでムんすなア「見やる野風の畑道、後しぶきの雪ふゞきかたげていそぐあみだ笠、道場まいりぞつゞきける（ト仕出し、下駄傘肩衣にて西の通ひ道方花道へはいる）西「梅川見や今向ふへいかれた衆は、在所の近付の衆じやはいの ツキ「お前の念比もムんせふなア 馬士歌「あいがねヱとふけりやナアヱ上「吾妻からげに頬冠り、腰に馬びしやく手に轡、こりなりしやんと鈴の音も、いさみて急く片手綱（ト直に大坂はなれての歌に成り、東手方歌はやし方の蹇突出す、西のかよひ道方、歌右衛門馬士にて路之助ゆかたがけ、ぬけ参りの拵、馬に三味せん箱をつけ、面三ツ四ツな付、跡方出て中程にて）歌いめ〳〵しい畜生め、一番〳〵立ずくみやアがる、何たばりでもこくかふん張め、箱根山でも通りやしめし、叩なぐられるなよ 路あれサ馬士どん、此雪道はすべるゆへじや、どれ〳〵跡足のわらんじがきれてある、マア向ふではきかへさせておやりよ 歌ヱヽいま〳〵しい 上「ヱ、こう腹もひる、さがり口綱引ぱりあゆみくる 歌サア姉さん、是からひら地だ、早〳〵乗て貰ひ鯛の目だ 路ヲヤ地口かへ、此三味線箱で乗悪いわいな 歌ヱヽ三味線かわつちや刀箱かと思つた、さみせん箱にしちヤアかわつたよふだ

路イヽヱこりやお客様に貰ふた、延棹じやわいな 歌ムヽそんなら参宮をするのに是がいるかへ 路サアそこが抜参りの女の事、路用といふては持て出す、此三味線さへ持て出りや、泊り〳〵でお客をつとめ、お参り申たその上で、馬士どんわつちや生れは江戸じやはへ 歌ハヽア道理こそ 路五年跡にこつちへ來てな、本に〳〵お馴味もなひ、ふつゝか者の道案内、うへうへの上町様が橋渡し、堂島せふか高麗橋かと、皆様の心はぼさつ米屋町、本町〳〵啌じやムりませぬ、もはや御禮の安土町を越升て、道修まちかこうせうじ、安治川な御縁から、御贔屓あまる尼か崎、沸がごさきの泉町、歸る鹽町心納屋町何順慶町な事いゝおる、唐物町へなと江戸堀へなりと、博勞町に久太郎町にいにくされと、平野町にいわれまして、ハモウ淡路町のお心かと、備後町の便もなく、御恩の程を大寶寺町、再び參りて會所町、いろ〳〵口に岩田町でも、木津川つよふいひ兼て、心の竹屋町をつご〳〵に、ざこばつとした口上を、隅から炭屋町まで、づいと申上まする 歌よふ濱村屋ア 時に駄賃がなけりや三味線で暇乞、駄賃に引たり〳〵 路イヤモだめのだめ迄お前のお世

話、そふして此馬に付た張子の面は何じやへ 歌是か
是はね煩腦〳〵こちの娘がみやげに賴んだ此安面、
近所のがきへも手みやげじやて ト面を取上る、歌 サア駄
賃がはりに一曲所望じや〳〵 路アイ〳〵合點じやわ
いなア 路歌「三味せんのなアやれ三筋の糸の三瀨川
ア丶ヤれ駒にひかれて花の浪花を暇乞ヤアあ丶れ
「下妻のナアア、やれ檀所の御所化の事づけにア、や
れお久せうはまめなかねねこそだつへヤアあ丶れ
「下むらのなアア丶やれ出店にかけし染絞りさア丶
やれ梅玉めとよくも染わけましたさなやアあ丶れ
ト路之助三味せん歌、歌右衛門うかれて踊り 歌コウ〳〵面白ひ〳〵、そんなら
一番餞別に爰でおれが、伊勢みやげ ト右の面を三方へつけ、四方めんに成て
踊り 歌「よいサこさしやお影で ヨイセ トコセイ 達磨さんもまい
る ヨイセ ハレハノセ 足がヨウないので ヨイ ソリヤ 施行駕サ丶ヤア
トコセヨイヤナハレハノサコレワノササ丶なんでも
せ ト是より路之助、曲ひき歌右衛門踊り有て 路「一行も送るもお影の歌、おつと音
頭ではやし立 ト是にて路之助なのせかけ、歌右衛門つまづく、路之助歌右衛門を馬にのせ、鉢卷して手綱をとり
路箱根なア八里ハナアンヨヱ 歌ヱ丶ぼ丶した報ひか
やらかせ〳〵 ト早歌に成り花道へ走りは入る 上「世の中に商人でなく職
でもなく、杖一本で世を渡る、瓜のつるかけ斗治兵衛

さて、年は八十はつたつしたる達者物、あゆむ跡か
ら炮烙屋さむさでふるひ御隱居と、聲かけられて立
留り ト西の通ひ道より國五郎、ほうろく頭巾、肩衣杖傘踏分國五郎 歌右衛門せわやつし、ほうろく、やの荷をかつぎ出て
ヤア誰じやとおもや、豆入丁の大和屋のほう六か、
師走商ひわ御苦勞〳〵 歌斗治兵衛樣おこしに似合ぬ
お足もと、御げんきてムりまするなア 國こりや茶に
してほうぢるか、年は八十歯も丈夫、耳も聞へる眼
は目がねかけず、現銀かけねなしじや 歌國ハ丶丶丶
丶上「笑ひながらにあゆみ行 ト本舞臺へきて 國時にほう六や、
此ママア土で拵た物を、その樣に澤山に持て、何ぼ程利
になる物で、ちと外の物でほねを折、もふらくやにな
るのがよいてや 歌ア丶勿體ない事いふて下さり升
な、今夢がさめての此商ひ、田畑かけ家屋敷殘らず人
に取られたる、もとを糺せばおやま藝子にうか〳〵
と 歌「赤い海道で巾着ひろたとなアズイ「あまり叩くと思ふな
たれば古札ばかりでなアズイ、あけて見
させる、にくてすわりよか吸くちをしよんが「さつ
まさつまとさしてはゆけど、いやなさつまのかな山
しよんがへおもしろや 國それで其身の樂じや〳〵
歌もふらくじや 上「らくじや〳〵と戲れて、急ぎ〳〵

て行にける（ト是にて兩人向ふへはいる）上「大女子骸へ月のさゝはりが、めぐり過たかほた〳〵と、牡丹餅腹ぶと名代もの細き野道を傘で出かねる傳が婆々、栗毛荒馬緋威、關取の噺の種や道草に、大和万歳道連にて、愛敬有けるあら玉道、いそぐ達者ぞ徳若き（ト西の通ひ道より、お七傳がばゝにて下駄傘跡より歌右衛門万歳の形りにて連立出て）七是目出たや殿、噺するうち見やしやれ、忠三が門まで來ましたわいの、イヤ又おいらの息子と違ひ、お前方は錢もふけして親を養ひ、大坂へいても目出たや〳〵と人にすかれて錢もふけじや、マア〳〵隨分達者で歸らしやれや　歌ハイ〳〵申婆々樣、その替り二月の末に戻る時には、みやげを買て來てやりやんしよしづかにムれや　か七ア〻是々才藏殿でもせわしなひ、マア門出の祝義に立舞りて行がよい、どれ〳〵餞別心で冬の內から春まつるんぎじや（ト財布より百の錢出して纔にひんねじて）サア万歲殿、內の清めをして下され　歌是は有難ひ〳〵、そんなら相手はいぬけれど、鼓も舞もひとりして、さらば爰にて始めよふか「万歲とや二人連なる万歲が、ひとりは峠でごそ〳〵と、跡にのこりし万歲は山の麓で友よふ調　ヱイすぽぽんのぽん〳〵すつぽすほ〳〵すつぽほんさ、打ては友を呼て候、べらべんのべん〳〵べら〳〵口をつかふごに、いふもお前のつらの皮、張と意氣地に二度の藝子を引眉、すつぺらほんのぽんとだまされて、三味線蛸の出來るまで、勤たわたしでムり升、野邊の小松のひくにひかれぬ事はない、なアそふじやないかないかそふじやないかいな、百万年の御長壽と、祝ひ申て通りける（ト歌右衛門先にか七花道へは入る）上「憂事のつもれば雪が積のたね、腹にでつかりて〻なし子、產月までもてうまんさ、おなかゞしく〳〵針立のごふおんじ、てもいかれぬゆへ、親が引立此道へ、咄も呵るもふくれ頰（ト西の通ひ道より、舍丸頭巾羽織相口さし[illegible]の拵、歌右衛門おたふくふり袖もめんやつし娘にて、傘をさし作つれ立出て本舞臺へ來て）舍丸扨々徒ら娘にかゝつて、霜月師走の果に、不孝不埒の爺なし子を孕んでおるを、親方が是は懷胎ではあるまい、ちようまんであらふちよふまんじや〳〵と、芝居果見る樣に身持をかくし、歸さつしやつたはて〻親がしれぬ故、全體おのれは誰とつるんで其樣な腹にはなりおつたぞ、サヽそれいへ聞ふサアぬかそふぞ上「腹立まぎれにのゝしれば、娘はとかうの詞さへ、たゞなくのはきるんがわるけれど、十四のとしに番太郞の四ツ兵衛さんに、あら〇〇を割ていふの

も身持ゆへ、それから横町の〳〵うどんやの二八さん、夜食のぶつかけふるまはれ、それがこふじて大道で、たび〳〵さしたる傘枕、こゝさんゆるして下さりませと、水涕垂し落しいる、道庵始終手を組て、覺へぬ針で多くの人の、腹へ針して殺した報ひ、針は立ねど腹のたつ程おこるは今まで藥代を、我等にしたかと思われて、いかり狂ふぞ道理なる　ト舍丸にらみつける、是より六段の合方、歌右衛門腹のいたむこなし悩りして　舍ヤアヽヽ扨はけが付たか、エヽ是途中といひ身共一人、コリヤ〳〵しつかりと心を丈夫にもて、のるな〳〵　ト六段段々はやめる、歌右衛門くるしむ、舍丸介抱して傘を見物の方へ直し、すてぜりふにて介抱する、木つりかれを打、赤子笛をふく　そりや出たは　ト悩りしてへたる、歌右衛門傘をとる、子役赤子のぬいぐるみにてひよつこと出る、歌右衛門舍丸悩りして、子役をとらえふとする　上「戀の重荷にやすやす安ざん、あとをしとふて　ト三重に成り、赤子すりぬけ一さんに向ふへ走りは入、歌右衛門舍丸跡おふて走りは入る、直に鳴物に成、歌右衛門願人坊主にて花道方出る　歌「寒の師走も日の六月も、暑さとさむさのなき坊主、奇妙ちよんがれとらづくし、白いゆかたに紅ひのふんどしごしと、雪道を寒紅梅のきてんもの、こなたへ來かゝる分限者は、福壽屋の長命といふ男、丁稚を打つれて行かいさまに聲をかけ　ト西の通ひ道方文七分限者の形り頭巾羽織一本差、丁稚の子役供して出る、双方本舞臺にて行合ひ　歌おつと旦那お物参りと見たはひがめか、願人が行て薄着の夏衣一文くらいはいが栗のちよぼくれ聞て下さりませ　文七扨もげんきな願人殿、ちよんがれといへど修行者殿、金太よ錢進ぜい　でつちハイ〳〵　トはやみち方錢を出してやる　歌エヽ有難ふ存升、さらば是にてやらかし升る　歌「腰の釋杖ふり立て、丑寅の御方には、御一代の守本尊、ほぞんかけたか時鳥、八千八聲なくとさく、森の木枯我からと、をはをからすの羽根ばたき、一文もなし梨子も礫もないお女郎、此方すこしもくいやいなし、襟袖口のふくろびも、綿さへ足にかゝりうご　文七ヲヽ願人殿ゐらい〳〵是着て寒さをしのがつしやれ　ト羽織をほつてやる　歌エヽ有難ふ存ます　歌「赤いらしいと名にたつとても、したがよいぞや緋ぢりめん、ちらり白いはだへに雪の中なる紅ばいのいふてたもるの、是のいふてたもるの、とふ〳〵來たりやとふきたり、鶴の毛衣げんけの毛衣、けれんとうち掛ぬつくりこつくり、くゝめる藏人ずつしり〳〵、粉米のなまがみこゝん粉糀の一歩金か、鼈甲〳〵共にひかれて聽てふや、万歳〳〵万々歳とつかり〳〵結こむ、大金はずつしり〳〵、向ふの小藏の小溝に鯲ちよつとによはり踊る拍子もおもしろや　ト文七もうかれて、頭巾きものも右衛門にやりでつちもはだかにし　歌

て、歌右衛門にやる、大太鼓相作入にて、歌右衛門頭巾を着て、文七釋杖をもちでつらもうかれながら、向ふへは入る、此時下座出ばやし引こむ、花道舞臺一面に白もめんを敷く〳〵よき程に窓の内ゟ松江歌右衛門がほを出して 歌あれ〳〵あそこへ見ゆるは親仁様、段々の不孝跡、おゆるし被成て下さりませ 松アヽあの紙子の肩衣が、孫右衛門様でムんすかいなア 歌お年もお足もとも よわつた、もふ是が今生のお暇乞でムり升る、随分お達者で お暮し被成て下さりませ 松本に親子は あらそはれぬもの、目もとなら鼻筋なら、お前によふ似た事わいなア 歌サア夫程よふにた親と子が、詞さへも得かはさぬは、何とした身の因果じやぞいのふ 松私もけふがお顔の見始の見納め、申わたしは嫁でムり升、夫婦は今をもしれぬ命上「もヽとせの御壽命すぎ、未來で おめにかヽり升ふと、口の内にてひとりごと、夫婦諸共手を合せ、むせび歎くぞ 道理なり、夫れとももしらず恩愛の、子ゆへに迷ふ親心、孫右衛門は老足の休み〳〵門を過、野口の溝の薄氷、すべるをとまる高足駄、花緒はきれて横さまに、どうと轉べは 南無三と、忠兵衛もかけご出られぬ身、梅川あはて 走り出 ト領十郎の出より本行なれば略す

西澤文庫傳奇作書追加下之卷大尾

傳奇作書追加跋

近世專ら流行するものは腰かけの料理家と諸家の隨筆なり、文花日々にひらけ、物事自由なる世の中に、此二事は感ずべき事也かし、矢大臣店との間へは安けれども、山海の珍味嘉肴を小皿に盛、酒は池田伊丹の印ものを飲せ、濕氣魚切の斷りをいわず、また讀書に万卷の書を集すとも隨筆となへ、神儒佛より詩歌連俳野史雜書に至る迄、我好む書を拔書して、世に弘む、是をよむ人は隨筆學文とて博識家には笑るゝとも、早學文の司なるべし、此西澤文庫傳奇作書と題せる書は、梨園の作者の傳をあげて、後のちの卷は編者李叟が隨筆也、かゝる戲場の事を書たるは、諸家の隨筆に見ざる所なれば、いと珍らしき心地せられ、既に卷を次で前集殘編拾ゐとあるうへ後集附錄續篇追加と七編に及ぶ、追々に書なば盡る期は有べからず、されど李叟は此七部にて筆をとゞめ、梨園の七書を唱へたき趣を言ひ越しぬれば、此ことわりを誌して聊跋にかゆる事しかり

時嘉永四庚亥初秋

皇都　西六條隱者　久貝老人

娘孝行記 付りいはいの國手かけか原

座本 山下半左衛門
都万太夫座
作者 富永平兵衛

上　女いしやのわたぼうしかはいらしきが命
　付りいやしけれ共わけよしのおとこ
中　女きやうしやのぬりかたしゆせうらしきか命
　付りわかけれ共心よしのおとこ
下　女むしやのはちまきいかつらしきか命
　付りおかしけれ共うんよしのおとこ

一とよをかのこうしつ　小かん太郎次
一とよをか右衛門の介　外山千之助
一こしやう八彌　若松かもん
一こしもとおきち　かつ山千之丞
一おなじくおなつ　さかたあいのせう
一おなじくおかめ　みつしまもしほ
一おなじくおふり　長をか六三郎
一おなじくおよし　山むら小かん
一下人久五郎　座本立役 山下半左衛門
一山ずみげんば　しか吉兵衛
一しそくけんもつ　くどう十郎左衛門
一おなじく弟市之進　三瀬左近右衛門
一いもうとふぢがえ　櫻田しのぶ
一こしもとわかば　あさゐ金彌
一おなじくしげの　きし川みよし
一いしやだうはく　いくた善六
一兵ご娘おはる　はぎのさまのせう
一弟松ら庄之介　山下才三郎
一はらだ源八はゝ　はしもと平すけ
一こしもと小七　いは井花のせう
一おなじく小源　きり山まさのすけ
一はらだげん八　あだち三郎左衛門
一おぢぶせん坊　藤木太次ゑもん
一でし山ふし　四人
一大むら彌三郎　山下又四郎
一きくち彦六　中川金のせう

娘孝行記 付りいよの國手かけが原　三番續

第一

たじまの國主とよをかゑもんの介のからう山ずみげんばが娘、ふぢがえのり物にのりやしきへかへり、侍共にむかひとゝさまの御きしよくは何と有ぞ、さん候今日はことの外御げんきにて、けんもつ様市の進様とおはなしをなされてござります、何兄さまたちのおそばにござるとや、やい侍共悦べ、とゝさまのきあひのなをる事をきいてきた、兄さまたちへ此よしを申せ、畏てかくと申せば、けんもつ市の進立出やあふぢがえ、父うへのきしよくのなをる事をきいてきたと有が、それは何事じや、さればとゝさまのおわづらひはかくしやうと承る、さま〴〵いれうをつくさせ給へ共さらにげんきなきゆへかなしう存、此間いすはらのやくしへ七日まふでをいたします所に、かくの病を七日が内にうけ取てなをさふと、はりがみに所を書付御ざ候故、やどへ侍参り候へば、則女いしやでたこくものでございますが、いかにもなをさふと申故、もんぐわいまでつれて参ました、けんもつ聞何といふ父うへのびやうきを、うけ取てなをそふと申とや、さやうにつじ〳〵へはりふだをしてやまひをなをさふといふは、まいすものでやくにたつ事でない、たとへば其藥でちゝうへのへゆ有にもせよ、左様なかる〴〵しいものゝ藥をしんずる事はならぬ、ふぢがえ聞それでも若父上のおはてなされたらば、こうくはいなされふ、ひらにしんせ給へとせりあふを、げんばしやうじの内にて聞、こしもと共に手をひかれ立出、誠に他國のいを入るゝは將のちじよくといへば、けんもつが申も尤じやが、ふぢがえが何とぞへいゆのためと、悦つれて來る心ざしの程もあれば、藥はのまず共先あはふ是へとをせ、ふぢがえ悦それもんぐはい成女いしやに御前へ來れ、藥箱持も來れと申せとあれば、畏て女いしやわたぼうし打かつぎ御前へ出れば、藥箱持のじやくはいもの、つかつかと御前ぢかくへ行ば、やいりよぐはいものしされしされとのゝしれば、はるかばつざへをしなをる、げんばみて女いしやといふはあのものか、いまだわかいが、いだうに心がけ有はきどくな事かな、してそ

ちはいづくのものじや、さん候他國ものでござりますが、かくのわづひには家につたはるめいはう御ざ候、此國は御はんじやうの地にて候へば、此所へ參ひろめのためはりふだを致候所に、お姫さまのお尋にあひ、御前へ召出され一入有がたう存まする、しからば先みやくを見よ、畏てみやくをうかゞひをしざり、お姫さまに承ましたは、中々大病のやうに聞ましたが、思ひの外おみやくはかるうござります、第一御きのむすぼれゆへ、かんねつとさま〲みやくはかはれ共、もとは一つにて候へば、お藥をさし上なばさつそくへいゆなされませふ、して只今迄はどなたの藥を上給ひしぞ、いしやだうはく聞されば拙者がお藥を上ました、則びやうはかくしやうと見まして、くはんしつたうを上ました、こなたの見たては何とぞ、私もかくと見ました、わうれんしゆくしやなどをかみ致上ふと存じます、是は尤に存る、げんば聞見立があふておもしろい程に、女いしやの藥をのふで見よふと思ふ、是にて藥をてうがうせよ、畏てそれ藥箱持こいへば、さいぜんのじやくはいもの藥箱を持出る、なふそなたも是へ出おめみへしや、あなたがげんば樣じやといへば、けんもつ市の進きしよくへんじ、やい〱すでつちめはそちが下人とみへしが、そのものにさいぜんよりのことばづかひ、がてんいかぬと思ふ所に、是へ出ておめみへを申せ、あれこそげんば殿よく見覺へよといふは、扨は父げんばにうたれしまつらひやうごが兄弟の子共よな、此國へ來り父上をねらふと聞しが、扨はをのれらにまがひなし、それもんこをうつてきやつらをのがすなと取まはせば、是は何をさはがせ給ふ、此ものは私がでしでござります、それ故今よりはおやしきへ參り、おり〱はおみやくをもうかゞひ申ためおめみへをねがひました、まつたく左樣なものではござりませぬ、おかへしなされて下されませ、いやさ何程ちんじても、のがしはせぬとのゝしれば、げんば聞やれまてぎやう〱しい、よしは其もの共にもせよ、此じやくはいもの共が何程の事があらふとをしづめ、さあさあ藥をてうがうせよ、女いしやは是あなたがげんば樣じや、重ておめにかかるためじやよく見覺へ給へ、扨はあなたが山ずみげんば殿か、ゑゝくはほういみじい有樣やと、うらむる心に思はず身ぶるひせし

をげんばきつとみてやいもはやのがれぬ、あのじやくはいものが身が名を開て、うらむるまなこに涙をうかめ身をふるはしたる有様は、ひやうごがせがれ共にまがひない、何程ちんじてもかくれはないぞ、せひなのらぬとがうもんするが時に女いしや是庄之介、そちは何がおそろしうて、涙をながし身はふるはしたぞ、ゑゝみれんな其心で、あのくはほうゆゆしきげんば殿がうたれふか、あね様は何を仰らるゝ、敵も是に聞てじやに、何おそろしうて涙をながさふぞ、こなたの仰らるゝはあれこそげんばじや、よつく見覺へよと仰られしゆへ、扨はあの人におやをうたせたがゑゝむねんなと思ふて、父上の事を思ひ出したれば、思はず涙がこぼれて身をふるはし升た、扨は父上の事を思ひ出して、それで涙がこぼれたか、おゝだうりじやと兄弟思はず涙にむせびつゝ、是々げんば何をかくさふ、此三年いぜん九月九日に其方がうつた、まつらひやうごが兄弟の子、姉にはる弟に庄之介といふ二人の子じや、去ながら今日是へきたは其方を討にはこぬ、きけば其方は病におかされ十死一生と聞、あゝ心もとないもしびやうしあらば、たれを敵じやといふて討ておやへはたむけふ、何とぞ病へいゆさせ、其後討はたさんため、さいはひかくしやうには家につたはるめいはうの藥有ゆへ、女いしやと成て今日きたは、其方が命をすくひにきた、げんば聞いやさいふまい、しからば女一人來るべきに、弟は何故同道した、庄之介聞さればおや兵庫が討れし時分、某はがくもんのためしのかたへ行有あはせず、それゆへ其方がめんていを見しらぬゆへ敵のおもてを見覺んため來つたげんば聞、むゝ身をたばかり討に來りなば、さつそく取まき討取べきが病氣を聞病をたすけ其いごにせうぶをせんため、藥をあたへに來りしと有ば、このたびは命をたすくる、やいじやくはいもの、何と只今でも身が相手になつたらばせうぶをせふか、何が扨相手にさへ成て下されば本望でござるおゝしからば心ざしがやさしい相手に成て、一き打のせうぶをしてとらせふ、けんもつ市の進是は御病中に何事ぞ、我らに仰られよつかみころし申さん、いやきやつらをころさんにはかごの内の鳥なれ共、じやくはいものをよびよせ取まき討たといはれては、此げんばが一ぶんがたゝぬ、其上某病中じやと有て、

あのじやくはいものが五人や十人は、かたうでにもたゝぬきづかひをするな、さあ兄弟のものいそいでよういをせよ、あねはる悦、かやうのばをねがひしにうれしやと、兄弟たちぬき立あがれば、げんばみておゝけなげな、子共侍共立上つて、けんぶつせよと、やりおつされば、けんもつ市の進侍一ごにはらりと立、此いろめをみて おはるは、先お侍なされて下され、一さ打のせうぶをなされて下されふと有はかたじけない、とてもの事に此しあひを、當月中のべて下されまいか、庄之介聞是あね様日比ねがふたる此しあひを、のべてくれひとはどうじや、さあ今我々がここで討はたした時は、あとでのこりおほがる人が有らふが、それはたれが、はて源之丞殿が、おゝ源之丞殿聞給はゞ殘おほふも思やらふが、今に行衞のしれぬ人がいつ迄またれふ、どうでも今打はたさねばならぬと聞入ずせりあへば、げんば聞さればそち兄弟の外に、まだねらふものが有か、おはる聞されば私がいひなづけのむこに、はらだ源之丞と申御座候、其行衞がしれませぬ、聞ば此近國にゐらるゝと承る、此人を尋出し一しよに本望がとげたう存まする、むゝ聞へたこりやじやくはいもの、此げんばが一ごんけいやくしてからはちがひはせぬ、當月中のべてさらせふ程に、其源之丞とやらが行衞を尋、一しよに來つてせうぶをせよ、庄之介聞いや／＼こなたは病氣のことなれば、あすの命も心もとない、是は尤じやしからば其方が家のめうやくをゝいてゆけ、其上藥迄もない、此きしよくで、まだ當月中などにしぬる事ではない、去ながら命にはさだめない、もし左樣ないろめになつたらば、此方よりよびよせ本望をとげさせふきづかいをすな、兄弟悦然らば當月中相のべ、其後はじんじやうにせうぶをとげ申さんとけいやくし、れいぎをなして歸けり、げんばは子供近付某も其間に、若殿へ御かとくゆづりをなし申さん、其ようい仕れといひ付おくへ入にける、こゝに右衞門の介のやかたには、こしもと共あつまりてみそをつきゐる所へ、下人久五郎はお使に行、うをかごと花いけをかたげ歸ける、こしもと共みてなふ久五郎、女計ではかゞいかぬちとすけてたも、こりやめをあいていへ、手には物をもつてゐる、あしでみそがつかるゝ物か、はてさういはずとついてたも、そんならついてやらふ程に

をれがいふ事もきけよと、きねを持ひやうしにかゝつてみそをつく、所へ又こしもと おきちおくより出なふ久五郎そちは おみだいさまのお使に行、お返事もいはずに何してゐやる、こしもとおなつおかめ聞、なふおきち久五郎にはこちらがたのんでついてもらふ、久五郎はそなた一人のうけもちでは有まい、あまりしかりやんな、おふりおよしは、あのはづが有、久五郎とおきちとはよい中じやげなみた事が有、おきち聞そなた衆はな立かましい、其やうな事いふてたもんな、何をみやつたぞといさかひて、きねはうきにてたゝきあふ、所へみだい出給ひ是はさはがしい何事じや、やい久五郎、そちは使にやつた其へんじもいはひで、こゝには何してゐる、いつがいつ迄いやしい奉公をせふと思ふ、をれが若殿へいふて、引上てとらせふと思ふて、馬にでものりならへと いへばあぶないといふて、何をするぞと思へば、女こしもとのへやへ行、まゆをたれてやつたり、おはぐろをあたためてやつたりしてゐる、それでやくに立か、どうで侍にはえ成まい、こしもとの内を女ばうにもたせ町人にしてやろふ、どれが女ばうにほしいぞ、久五郎こしもとがかほを一人〳〵打ながめ、あのきちに致しませふ、おゝきちとはきいた事も有、さうであらふとの給ふ所へ、小性八彌あはたゞしくはせかへり、扨も今日山ずみげんば御かさくゆづり致と申て、若殿をしやうだい申おく成ねまへつれ行、御供の人々をくもでゆひたる一間へをし入、何とやらげんばぎやく心のやうにあひみへ候、それ故先おしらせのため立歸ては候へ共若殿の義が心もとなきゆへ、あれへ參るといひすてはせ行ば、こうしつおどろき扨はぎやく心か、もしそれなれば此方にかくご有、其やうすがしりたいが、一家中は若殿の御供して行ぬれば、たれをつかはせふものもない、やい久五郎そちはみづからが見とゞけた所が有程に、げんば方へ行ぎやく心か又さもないか見とゞけてかへれ、此度若殿を御供してつれ歸らば、三千石のちぎやうをあたへからうにせふ、是ははなそぎ丸といふて大殿の刀じや、是をさいて侍に成つてゆけ、侍に成てもさきへゆきなばきらるゝであらふ、しんでからは三千石の地行もらふて何にしませふ御ゆるされませ、やい行ぬと手討にするが、すれば行ねばこゝできられますか、よいどこで

しぬるもおなじ事じや、參ませふとしづかにあゆめば、はてはやうこじてもつまげていそいで行、こしもと共立かゝりしりをつまぐれば、ゑゝ何をしをる、をれは風ひいてゐる、しにゝ行がよい事かあはうらしいと、いろ〳〵の事をいひ行かねるを、こしを押むりにつきやれば、久五郎せひなくげんばがかたへ行にける、かくてげんばは右衛門の介殿をしやうだい申、けんもつ市之進侍のこらず相つむる、右衛門の介の給ふは大殿のゆいげんには、某二十に成てかとくをわたせと有と聞しが、今年いまだ十七成にかとくをわたさふと有心入は何ゆへぞ、げんば開御尤成仰かな、おまへは御存じ有まいが、まつら兵ごと申ものを某が手にかけ討ました、其子共おや敵とて某をねらふ、此比其もの共にあふて、當月過ればせうぶをせふとけいやく仕つた、其上かくやまふの身なれば、某存命の内に大殿よりあづかりをきし、かとく家のてうほうを渡さんと存じしやうだい申た、それ〳〵たからのしな〳〵を物語申若殿へ相渡せ、娘藤が之承りて立上り、其しな〳〵を一々になかば程かたる所に、げんば俄にめをみつめ、くるしきこゑにて殿はいづくにござるぞ、あゝもはやおかほがみへぬ、なむあみだ佛〳〵とつゐにむなしくなりにける、人々はこはかなしやとしがいに取付なき給ふ、所へおはる庄之介兄弟やしきへかけこみ、げんば殿には心もとなきやうすを開かけつけ候といへば、右衛門開存、扨はげんばがゆいごんに申た、兄弟のものといふはそちたちか、げんばは只今むなしう成しごあれば、兄弟はなむ三ぼうとあきれゐる、庄之介はゑゝ口おしい、いせんの時討はたせば本望とぐるに、よしない人にへだてられ敵はえうたず、すご〳〵こじがいするになつた、無念やとはらをきらんとすれば、あねをしとめそちはしぬるか、おゝこなたのいひな付の男にほだされて、しあひをのばし給ひしゆへ、おやの敵はしにうせたれをうたふぞ、じがいさするはこなたがさする、おゝさう思ふは尤じやが、男に心が殘てしあひをとめたではない、尤げんばは一き討のせうぶをせふと口では申されたれ共、何とやら其ばのけしきが、取まいて討んやうにみへたゆへ源之丞の事をいひのばして下されといふたは、其ばのしほにいふた、其うへげんばしゝたるとは、聞た計でせうこがない、しがい

をみて其後のしあんにせよと、市の進にむかひうたがひをはらすためなれば、しがいをみせ給へけんもつ聞、只今かさゝゆづりの事がすまぬ、此方の用をしまふて後しがいを見せふ、長やへ行てまて、兄弟聞しからば待ゐ申ぞと、先ざじきを立さりける、扨けんもつは市の進にむかひ、さあ望じせつは今也と、さしぞへをぬきだいにのせ、右衛門の前にすへ是殿げんばがおんをきたるものにはおひばらをきらす、こなたの今殿といはるゝも皆げんばがかげじや、すればおんをきたまひしこなたなれば、いそいでおひばらをきり給へ、我々兄弟がかいしやくいたす、右衛門聞何といふ、けらいのおひばらを主にきれとはめづらしい、扨は内々ぎやくしんを思ひ立共、おやげんばが有内はをしかくし、只今しゝたるをさいはひに、身にはらをきらせ此國をうばはんとの事か、おゝよいがてんか程ぎやくしんじや、のがれはせまいかくごせよ、右衛門聞主を討て國を奪はんとはそこな人でなしめ、ゑゝ無念な是迄とじがいせんとし給へば、藤がえすがり付兄共はあくをたくむ共、私は一所でなし御じがいとはもつたいない、いやこゝをはなせとあやうくみゆる所へ、久五郎大小をさしはかまのもゝだち取、侍のすがたと成つか／＼とあゆみ來り、ゑもん殿の手を取何ゆへじがいなさるゝお待なされ、右衛門御らんじ其方は見なれぬものじや、殿には某を見わすれ給ふかふだいさうでんの、おゝ誠にそちは久五郎じやな、いかにも平のあそん久五郎のせう時かつ、けんもつ市の進聞けつかう成衣服をきて大小をさしたるゆへ、何ものぞと思ふたれば扨は下ろうの久五郎めか、はておかしいなりじやと打わらへば、いやさたとへきのふ迄はくつをとろふ共、其こうにより一國の大名にも成其れいをしらざるか、けんもつ市の進あざわらひ、下すのぶんとしてをのれが何のこうあらん、いやはやかたはらいたい、久五郎聞何某がゆいしよが聞たいか生れたる所は九州あそのこほり、じさいにてはりまの書しやさんへのぼり、しよがくのもんに入一じをならつて千じもんをさとり、十三ハ年おやのかんだうをかうふり、日本むしやしゆ行して、大天ぐ小天ぐこのは天ぐめらをはりまはし、ならひえたる兵法は、げんりうねんりう、しんしんかげ、かしまかんごりふでんりう、ゐあひやはら力わざ

心にかゝる事なければ、我ながら久五郎はあつはれきようもの、去ながら日本の内に某か主と頼まんものなければ、我と身をかくし下ろうと成、水をになひからうすをふんで、くたびれたる時は、一すいの枕にかいこけたる有様は、心有ものはせいじんけんじん共いはん、所に今日おみだいの召出しにあづかり頼むと有一ごんによつて、若殿おむかひに來つた某を、げす下ろうとはすいさんな、かやうにいふたるぶんにては誠共思ふまい、さいた刀は三尺八寸お家のてうほうはなそぎ丸、ぬけばくびちるかいなちる、ちと久五郎が手なみをおめにかけふかと、たちのつかに手をかくれば、けんもつ市の進きもをけし、左様のゆいしよ有としらいでそさう申た、此うへは成程はうばいでござるぞ、おゝさうなうてはかなはぬはづ、して殿には何ゆへ御じがいはなさるゝ、されば聞てたも、げんばが相はてたれは某におひばらをきれといふ、何げんばはしゝ給ふとや、それはいがいお力おとし、扨若殿へおひばらとは何事ぞ、けんもつ聞いや私らが申でない、げんばがゆいげんなれば、はらをお切なされまいかと申事じや、久五郎聞此ゆいげんはがてんがいかぬ、げんばにぢきにとはふと、しがいをふみつけこれげんば、殿にははらを召れとはそちがゆいげんか、なぜへんじをせぬ、大殿の御めがねにてしつけんをかうふり、國を預るものなれば、こんはめいどに行共、はくは此世にとゞまつて久五郎が一ごんをきけ、をのれは大不忠のやつじやなぜといへ、子をみる事父にしかずといふに、いき引取とぎやくしんをおこすせがれ共を、ぞんじやうの間にゆるしをいてやみ／＼とはてたは、なんと不忠ではないか、したが誠にしにはせまい、其身は死去といつはり、せがれ共にぎやく心をおこさせ殿を討て、其後そせいしたると世上にふうぶんさせ手をおろさす、お國をうばひ取んとたくんだな、なんとげんばへんとうはどうじやと、よぎ引のけみれば、しがいとみへしは米だわら也、是はげんばは米になつたか、たわらをつ取をのれら一々打ころさふか、いや／＼からうすふんだごとくにふみころしてのけふ、やいげんばいづくへにげたぞとのゝしれば、げんばおくよりかけ出、やい久五郎をのれはおそろしいやつじや、成程そちがすいりやうの通、もとかくのわづらひといふも殿を討

んためのいつはり、其うへ身をねらふやつが有ゆへ、病死したるといつはり、其者共にじがいさせ、身をらくらくと送らんためじや、此しあん我身ながらもあつぱれでかしたと思ふに、見あらはされしよな、をのれ打ころすはやすけれ共、なんぞのやくに立ふやつじや、向後身に奉行せよ、地行をあたへん、此久五郎に奉行せよとはいひにくい事をいふた、此うへはそちが詞にしたがい、右衛門殿のくびを切てみかたを申さふが、ほうびは何をくるゝぞ、おゝほうびはそちが望にまかそふ、さあらばほうびには、げんば一家の者共がくび取ぞさあ渡せ、げんば腹を立すいさんなあれ討され、承て大せい一どに取まはす、心得たりと久五郎たちひんぬききり立れば、おくをさしてにげ入を、をのれのがさふかとおひまはり、なんなくげんばを取てふせる、所へおはる庄の介は右衛門の介を手ごめにしかけ出、こりや〳〵其げんばを討と此殿を討ぞ、久五郎みてじやくはいなやつらじやが、殿を手ごめにしたはかい〴〵しいもの共じや、げんばがけらいでは何といふ者ぞ、いや〳〵けらいでないげんばは我々がおやの敵じや、そちに討せては討ふ敵がなきゆへ殿を手ごめにしだ、何げんばは敵とや、すればたがひにいしゆはない、して其方がけみうは何といふものぞ、庄の介聞おゝ此三年いぜん、かりばの遺恨によつてげんばに討れし、まつら兵ごが兄弟の子に身は庄の介といふものよ、すればそちはあねはるといふたものか、おゝいかにも、名をしつてゐる其方は何人ぞ、某こそようせうの時おやがいひなづけ有、はらだ源之丞といふものじや、やうす有て國を立さり身をかくしゐたれば、兵ごの討れ給ふもゆめにもしらず、しうとの敵としらで、此げんばを今迄いけてをきし、さわよつて本望とげよ、心得たりと兄弟はおやの敵覺へたかときりつくる、右衛門の介は國の敵覺へたか、源之丞もしうとの敵思ひしれと、さんざんにきりちらしとゞめをさし、家中皆一みなれば取巻れてはいかゞ也、若殿が大事じや先御供申立のかんと、ふしぎにふうふのたいめんし、右衛門殿の御供申立のきける、娘の身としおやの敵をうつことはけにかう〳〵のしごくなり

第二

ことをかのこうしつは女ぎやうじやにさまをかへ、こしもと四人御供にて、ぬりがさふかく打かづき、人めをしのびおち給ふ、然所へむかふより二十計の若侍、馬上ゆゆしく打て通る、折節川風はげしくして、こうしつのかさをふきおとせば、はつと驚ろき袖打かざして通らせ給ふ、かの侍きつとみて馬よりとびおり、あやしや人めをしのぶは何者じや、まつすぐに申せとやりを取ぎせいすれば、こうしつ聞召、いや我らはかうやさんけいのしゆ行じやにて候、あるひはしにんのしこつはつこつそりかみをことづかりかうやさんのこつどうにおさむる、しこつそりかみはけがれたる物成ゆへ天道へのおそれを思ひ、かさをかづき通る所に、風にかさをとられ候ゆへ袖をかざし通、それにふしんはなき所、いやさつゝむな其方達は、此度の國あらそひに付、人めをしのぶおちうどゝみへし、女の身としてかうやとなぜいふた、こうしつ聞なむ三ぼうよしない事をいふてあらはれた、何をかくさふみづからは、ことをか右衞門の介の母よ、源之丞といふものゝはたらきゆへ、我子はいよの國へ立のき有と聞、行ゑをしたひ下る也、かの侍とびしざり、私は其源之丞弟源八と申もの、兄源之丞が申付、おまへの行衞心もとなく存尋參る所に、是にて御めにかゝる段たいけいに存る也、こうしつ聞誠に源之丞母はまゝしき中と聞、それ故國をすて奉公に出られしと聞、此度右衞門をつれ國へ歸給ひしに、母ごのきげんは何と有ぞ、されば母も手がらをしてかへつたと申悦まする、いざ先右衞門樣にたい面なされよと、いよの國へぞ歸ける、こゝにこしもとのお吉は、久五郎といひかはしたる中成が、國のさわぎゆへおやもとこくらへ歸、きけばいよの國にゐ給ふと聞、やしきへ尋來りあんないこへば、こしもと小七小げん立出どこからござつた、私はこくらのきちと申もの、源之丞樣の久五郎と申て奉公なされた時の、はうばいでござんすが、御めにかかり申たく候、ちよつと御出なさるゝ樣にいふて下されませ、小七聞はてそさうな人じや、こなたのいはしやると云て、殿樣がここへ御出なさるゝ物か、それと只今は御ゐるすじや重てござれ、そんならおく樣にいふてあはせて下され、先いふて見よ程にそこにまつてゐさつしやれと、内へ入かくといへば、何こくらの吉といふ女が源之丞

様にあひにきたか、其女の事は内々おはなしできいた、あはふ程に是へ、こをせ、畏てかくこいへば、きちは悦び、ぼんをかゝり、おはづかしながら是はこくら島てござんす、みやげの印に上まする、扨私はいぜん久五郎様とたがひに心やすういたし、いつ共なうよい中に成り升た、所に承れば此所へお歸なされ、世に出させ給ひしと聞、久五郎様とはいひかはした事もござりますれば、おめにかゝり私が身のかた付も致したいと存じました、扨はさうか女といふ物は、たれしも男のこんせつにだまさるゝぬしにとはしやるまでもない、をれといふ女ばうがあれば、いづかたへもゑんにつき給へ、又をれがこなたより後の女ばうならば根らおふふが、をさない時よりな付の有た女ばうなれば、いはふならこなたはてかけのやうな人なれば、をれがはらを立るはづじや、したが御奉公なされてござる内、さびしからふにより こうした事は有まい物でない、お吉聞いかにもけつかうなお詞でござんす、去ながらおめにかゝり申たい事もござんす程に、どうぞ一夜あはせて下されませ、いや一夜はならぬ、そんならしよやからよなか迄あはせふ、さいはひ下やしきへ ごさつたほどに、よびにつかはさふとの給ふ所へしうとめ立出、あれはみなれぬ上ろうじやたれぞ、いや是はこくらのお吉殿と申て、源之丞様いぜん御奉公の時、はうばいでござんする、御國へかへらせ給ふを聞悦に参られました、扨はさうか、をれはこゝでかんきんをする程におくへ行給へ、やいこしもと共こゝへ出な、かんきんのじやまになるぞ、畏りましたと お吉諸共皆々おくへ入にける、時にふしぎや佛前のしやうじ四方へひらき、内にはふどうをさかさまにかけ、山ぶしぶせん坊だん上に上り、でし四人いらたかをおしもみいのりゐる、母みてなふあじやり、源之丞はまゝ子じやそれによつて、何とぞきやつをいのりころし、じつし源八に此家をつがせんと思ひ、弟のことなれば貴方を頼んだ何と印が有か、ぶせん僧聞されば それに付相談いたす事有、先だん上をおり申さんとだんをおり、扨ぺちぎてない、人てうぶくするには、よりと申て二十より内のいまだかせざる女をとらへ北へねさいたる山うつ木にて、しねしとこいふてたゝきころし、人しれぬのばらへうづみ、三日と申うしのこくにしがいをほり出し、其

女がくびをきつてほんぞんにそなへれば必命おはる、其女をたれ成共よつて出し給へ、母聞さればさいはひこくらのお吉といふ女がきた、此ものをよび出さふ程に打ころし給へと、こくらのお吉をよび出せば、何心なく來る所を、うしろよりでし山ぶし共山うつぎにてさん〳〵にたゝきふす、こは何事ぞとお吉上るを、母立かゝり打ふせ〳〵ぶぜん坊じゆずをしもみてうぶくの法をいのれば、お吉さん〳〵打ふせられ、さら〳〵身に覺へない何故か様にし給ふぞ、ぶぜん坊お吉を取てふせ、是は源之丞いひ付てころさするこゑを立なさけんを引ぬきむねへさし付れば、あゝこゑは立ませぬ、扨は源之丞様のおくさまを持給ふゆへをれをうるさう思召てころし給ふか、たとへころし給ふ共夜なか迄の命をたすけてたべ、おく様のお情で、こよひ源之丞様におめにかゝるはづじや、源之丞様にあふてころさしやるが誠かとはふ、母聞をろかなおくもそちをねたみて、夫婦してころすといふ所を、ぶぜん坊けんにて心もとをさしつらぬく、お吉くるしきこゑを上、扨は夫婦してころすか、やい山ぶしめをのれいつはつてころしたらば三日と過さず取ころさふぞと、あしはたゝず手にてはふてくるひあるくを、取て引上さしとをし〳〵つゐにむなしく成にける、それ〳〵しがいをすてよといへば、山ぶし共立よれば、しがい其まゝつと立、やいころせいか程ころしたとあつてたましゐはしなぬ、此やしきの内ははなれまいぞとにらみつめれば、でし共おそれにげのけば、ぶぜん坊きつとみて、扨々悪さうをあらはしてしゝたりな、やいでし共きやつはしんでゐる、じゆずにて打てみよ、おず〳〵じゆずにてうてば、しがいは其まゝたをれける、さあ〳〵人しれぬのばらへうつまんとでし共にしがいをかゝせ、まゝ母諸共立さりける、はらだ源之丞は弟源八と打つれ歸、何其方はおみだい様にあふてお供して歸しとや、でかしたといふ所へこしもと小七文を持おく様よりお使に參ました、今日こくらのお吉殿と申人がおまへを尋ござりました、はやうお歸なされませとの事でござりますと、文を渡しかへる、源之丞文請取是はもはややしきじやと、松にかけたるとうろうにて文をみる、所へお吉がゆうれいあらはれ出る、源八きつとみてたちに手をかけぎせいする、所に源八が手に持

たるとうろうをのれとこくうへ上る、こはふしぎやときもをけし、其儘せつじしたをるれば、お吉がかたちはうせにける、源之丞ふりかへりみて、やあ源八是は何とした、をさない時きやうふのむしがあつたが、てんかんになつたか、やれ心をつけよといだきおこせば、源八けしきかはつてあゝらうらめしい、こなたはよくもおくをもたしやつたなふ、おくをさりたまへそはすることはならぬ、やいそちはなにをいふ、むゝ扨はせけんでいふ通、よめとしうとめと中がわるい物じやといふ、ことにまゝよめなれば母と中がわるいにより、ぢきには仰られいで、そちにいひ付られてさういふか、そんならそれ程にいはひでも大事ない事を、いかにも相談づくでさらふは、おゝさらせいでをかふか、さらぬとそちもころす先女ばうめがにくいと、かけ出れば引とめたんきなさらふといふに何事じやと、扨女房をよび出せばおく立出、今もごらせ給ふかと、いふうしろよりお吉がゆうれいあらはれ女ばうに取付は、是もせつじしたをれける、源之丞みて、今源八がそちをさらせふといふを聞、女心ではつと思ふてきを失なふたか、そちとはをさないよりいひな付の女ばうなればさりはせぬ、たうぶん母の心やすめにさらふとはいふといへば、源八は何さるまいといやるか、はてさるは其やうにたんきにいふな女ばうつゝとよりおゝさらせいでをかふか、さあはやうさりやと、両方よりつめかくれば、源之丞ふしんをなし、むゝ扨は源八とふぎをなし某にさらせをれをもころしをのれがあとでそはふといふ事か、ちくしやう共めが、一つあなへかさねぎりにしてらいせでそはせふ、源八聞らいせでたれとそひませふぞ、こなたをらいせへつれて行ぞ、むゝふしぎや何とやらことばがてんがいかぬ、先そちはたれじや、おおをれはこくらの吉でござんす、われは又たれじや、私も吉でござんす、はてがてんのいかぬ、さき程おくが方より吉がきた程にあふやうにといふて文をこしたが、扨は吉がれうが両人についたとみへた、やい其吉が何の恨あつて両人にはついたぞ、さればこなたのいひ付じやと あつてころされ、しがいをむかふ成はらへうづまれた、其恨をいはふためについた、何ころされた、まつたく身はしらぬ、扨はおくさまのしわざか、むゝげに女はしつと深いものなれば、ねたみに

思ふてころしたこともあらふ、しからばせんぎをして敵を取てとらせふ、先兩人をのけと二人ハ取て引ふせ、たちひんぬきくはん念し刀をつき立れば、あゝくるしやのきまするゆるして下され、おゝさあらばのけよと刀をされば二人はさうへ倒れける、扨こしもと共をよび出し、源八にきぬをきせ、女ばうに水をのませよびいければやう／＼と心付、源之丞はやいこしもと共何と お吉がきたはじつしやうか、いかにも則私共と一所にやすみ給ひしが、どこへ行給ふやらねやにはゐやりませぬ、むゝ扨は外にころしてが有とみへた、せんぎをせんと 女ばうと打つれいらんとすれば、源八むく／＼とおき上り、あゝうらめしおくとつれ立、どこへ行給ふぞ、やあさいぜんのいたかと思へば、まだ源八に付てゐるか、急でかへれ、何かへれとは情ない、いひかはしたる詞の末、たがへまいとてあひたふてきたはひなふ、何のとがとてうらめしや、こほりのやう成つるぎをぬいて、むねのあたりをさしとをさるれば、きも玉しゐもきへ／＼と成時は、うらめしながらもそなたのかほがみたかつた、女心でたゞひとり、のこへ山こへたにみねこへて、くるはたれゆへそさまゆへと、ころされたる其有樣殘らず語、源八はおんれうに引立られ行んとするを、源之丞引とゞめ、やあ源八程のものが、れうにとられていづくへ行と、太刀ひんぬき打ふすれば、れうはのき源八やう／＼心付、むゝほんしやうに成つたかおゝうれしいと、右之樣子を語れば、誠に夢共なく恨をいふと思ふた、是はころさせてがござらふ、せんぎの致しやうが有先こなたへと、皆打つれおくへ入にける、かくてまゝ母弟あじやりぶぜん坊、三日過うしのこくにも成ぬれば、でし山ぶし共を引つれ、お吉をうづみしはらへ來り、それ／＼土をほりかへし、女がくびをとれ、畏てほりかへさんとする所へ、源八つゝと出、是は夜中に何ものなれば、はかはらへ來つてらうぜきはする、母みてやあさいふは源八ではないか、何母さまおぢの御坊か、やい源八してそちは此所へ何しにきたぞ、されば私はさうれいに參た、さうれいとはたれがしゝたぞ、してそれにとさまの者共はゐませぬか、あじやり聞是は身がでし計じや、むゝ扨御存じござらぬか、兄源之丞が死ました、それはけさまで內にゐたが、されば けふひる迄も成程そくさいにござ

つたが、何としてか物くるはしう成て、くれあひに俄にむなしう成ました、只今は右衞門殿を此方にみかた申、國あらそひの折なれば、兄源之丞がしゝたさいはゞ、みかたへ來るむしやも力をおとし、かせいも有まいと存、それ故ひそかに某計參つて、兄がしがいを只今うづみました、ぶせん坊は何と行力の程を見給ふたか、母聞されば女がくびをそなふる迄もない、法力故しゝたでござらふ、はてしぬるはづじやと悅べば、源八聞兄がしゝたる事を申せば、其はづじやと有ておなげきの色もみへぬが、しさいばしござるか、母聞お、是にはやうすが有、兄がしするからは今よりそちがそうりやうじやぞ、いかにもそれをねがひました、おゝ此うへはそちにつゝまふやうはないと、ぶせん坊がはからひで源之丞をてうぶくし、それ故お吉をころし此原へうづみし樣子、一々殘らず語れば扱は左樣でござるが、何と源之丞殿お聞なされたかといへば、そば成らんたうの内より源之丞夫婦つゝと出、ゑゝうらめしいおぢの御坊、某をてうぶくしとがなき女迄ころし給ふは何事ぞ、なふ母樣まゝ子はそれ程にくい物か、なさけない御心や、ぶせん坊聞ゑ

ゑ扱はたばかつたか、かくあらはれしうへはのがさぬと、山ぶし共やりのさやはづしつきかゝれば、源之丞夫婦源八は、心得たりとわたしあひ、こゝをさいごとはたらきしは、あやうかりけるはげみ也、山ぶし共はさんぐゝにきり立られ、かなはずしてにげさつたり、ぶせん坊是迄と、まゝ母を引立來り、是あねじや人そなたをさしころし、身もはらを切相はつる、かくごし給へところさんとする所へ、源之丞夫婦かけ付是をみて、なふ待給へ母の命をたすけ給はゞこなたの命もたすけ申さふ、おゝそれをたすくるならばべちぎないと、まゝ母をつきはなせば、源之丞はなふ母樣、今より惡心を思召とまらせ給へといへば、母聞誠にか程迄かうぐゝ成夫婦をころさふとした、みやうがの程もおそろしや、此上はゆるしてたべと、ほつきの涙をながしける、所へ源八かけ來りぶせん坊に打てかゝれば、源之丞みてやれれうじすな、おぢの御坊は母の命にかへてゆるしたすくるはづじや、きかずにうたばかんだうじやぞ、いやもと母を惡人にしたも、おぢ坊主めゆへなればのがしはせぬぞと、聞入ずなんなくぶせん坊をきりふせ、是迄こじかいせんと

すれば、源之丞をしとめなせしぬゑ、いやさかんだううけて何かせんしんだがよい、やいそれはおぢをころさぬさきのこと、何をいふてもころしたればせひない、ここに右衞門殿國あらそひのじせつなれば、そちをころしては身が力がない、それでもこなたのかんだうじやといやつたもの、さあかんだうはゆるす、たんきものいざかへれと、打つれやかたへ歸ける、手かけが原とは此所を申也

第二

こゝに大村彌三郎と申者、さく地彦六といふらう人の女ばうをつれ、なふおないぎ、又しても〳〵めうといさかひをして、なかうどじやといふてをれが所へおじやるが、ぐはいぶんわるい、皆こなたのがわるいであらふ、せんどもけんくはしやつたゆへ、をれが色色とあいさつし中なをしをした、其時彦六は念比なればこそあいさつをしてくるゝ、忝ないといふて、手を合なかるゝ、なくやうなしやうぢきな彦六が、なんのわるからふ、おかたのがわるいたしなめや、いやさうでござんせぬ、彦六の誠になきやるご思召か、あれはちやわんにゆを入てそばにをいて、其ゆをめへぬりて涙にしやります、私がちやわんへすみを入、そつと取かへて其せうこをみせませふと、扨彦六が内へ入ば、彦六はしちやうをつり、中から又女めがと、あしにてふみ出し、女がゐるとそこへは出ぬといへば、彌三郎女ばうにいひふくめ、かへしたぶんにてかたかげへかくし、さあおかたは先こちの所へかへしたこゝへ出られよ、其時彦六出るをみれば、すはだにぐそくをきて出る、是は〳〵なんとしたなりじや、おかたのきる物迄酒にのみ上るといやつたがぢやうやさいへば、彦六あんのごとくゆをのみに立ちやわんをそばにをけば、女ばうはうしろよりそつとすみ入しちやわんと取かへをく、彦六はゆと心得、あいさつをしてたもる心ざしの程はわすれぬと、すみをめへぬりなきごゑにていへば、彌三郎はおかしがりはらをかかへわらひつゝ、有しやうすをいへば、ゑゝばけがあらはれたと、扨夫婦中をなをり、女ばうはおくへ入、所へ庄之介來り、なふ彦六殿ねんらいの親の敵は討本望とげました、それに付一みいたすわけ有て、此度國あらそひ有右衞門殿のみかたを申、明日いくさば

へ出る、こなたとはいひかはした中なれば、さいごのさかづきせふためきましたといふ所へ、女ばう立出る庄之介みて、あの女は某がおやの敵、げんばが娘ふぢかえと申ものじや、此女を女ばうに持給へば、私も念比をきつてこなたへ手むかひもせねばならぬ、いや左様なやうすはかつてしら□□□□になつた、ふぢかえ聞いや私はおや兄と一所ではござらぬ、うたがはしう思召さば是にて相はて申さんと、じがいせんとすれば□□□□皆をともなひぢんしよへ行おみかた申さんと、打つれぢんしよへ行にける、かくて右衞門の介は源之丞源八をはじめ（此の所十餘字缺字）し給ふ、所へ庄之介は皆々をともなひぢんしよへかへり、やうすを申上る所へ、てきのせいをしよせ、兩方入みだ（缺字）ひけん、てきのぐんぜい皆々討れにげちれば、けんもつ市の進是迄と打てかゝるを、源之丞（缺字）しやうこそめでたけれ

八文字屋八左衞門新板

熊野山開帳たきもとせんじゆくわんおんの利生　　三番續

上　新宮付りけいせいはだしまいり
中　本宮付りけいせいおけぶせのなみだ
下　那智付りけいせいくわんおんのしやうご
第一　けいせい十かいのまんだら
第二　あさづまが身うけ千兩道具
第三　おぐらがなさけ末代だうぐ

一よこぞねかづま　座本あらし三右衛門
一同おさゝ富五郎　出來島小三郎
一かづまみだい　みづ木淺之丞
一こしもとさよ　うへむら吉三郎
一同　さわ　山もと玉のい
一同　しな　つまや市之丞
一いんきよ妙慶院　市彌源兵衛
一からう川ごへしかの丞　宮崎八郎左衛門
一同子　兵介　菊岡與次右衛門
一おの川けんぎやう　立役柴崎林左衛門
一しやもんしやうかい　坂田藤九郎

一みよし清六　立役は山おか右衛門
一さから忠左衛門　立役田代清左衛門
一らう人てづか傳左衛門　敵役高岡むく右衛門
一けいせいあさづま　女がたかも川のしを
一かぶろうげんじ　市村辰之介
一けいせいおぐら　女がた西川おかの介
一かぶろさのい　あらし鶴之介
一おもやごけおつね　女がた淺尾十次郎
一女郎や九郎左衛門　谷澤傳九郎
一ふかくさほうこうじ　あづまさん八
一から物や源三郎　音羽才三郎
一くまの新宮のねぎ　つ山平九郎

熊野山開帳 瀧本千手觀音

富永平兵衛作

上

いせくまのゑ月参りの道心しやもんしやうかいは、けいせいおぐらをつれ立、くまのよりげかふするはやきしうのほとりまできたりぬ、むかふよりおの川けんぎやう、下人にびわばこをもたせとうりしが、くまのもふでときくより、是々道心、毎月いせくまのゑさんけいめさるゝは、しゆしやうせんばんに存る、心ざしをいたさんと鳥目百文取出し、御らんのごとく雨がんみへぬそれがし、よく心ざしをほどこし給へ、道心うけとり是は御きどく、なるほどゑかういたさんと、南む大じ大ひのくわんぜおん、たすけたまへとおしいたゞきとうる、おの川しばしとおしとめ、何とやらなれ〳〵しき事ながら、おの〳〵がたにはくまのゝごわうのよけいなどはあるまいか、さもあらば一まいしよもういたしたい、おぐらきゝもうもくの身として、くまのゝごわうは何あそばします、定めしぬれといふやふなことで、きしやうにいるのでがなござんしよ、はてわけもないこうした事ではござらぬ、ちとやうすあるゆへごむしんの申、扨こなたのこゑをきけば女中じや御しゆつけのおつれか、いかにも左様でござんす、わたくしも心にふかいぐわんがござんすゆへ、京ふしみよりはだし参りをいたしました、かゞみのしたにひかふとぞんじよけいをこうて参りましたほどにおやくに立ませうと、くまのゝごわうを取出しまいらせ、申けんぎやう様、お前がたはほう〳〵のおやしきへおで入なされませう、今日はどれゑござんす、されば只今参る所は、よこぞね様のおやしきよりおめしなさるゝ、此やしきにわか殿大吉様といふが有、此間おわずらいなさるゝにつきて、此ざとうめを召よせられ、おなぐさみにびわことひいてきけまますれば、御心にいつて、おそばをはなるゝ事がならぬと、語りければおぐら涙をながす、しやうかいきゝ是女郎、今のはなしは道すからこなたの物語したのか、いかにも左様でござんす、おの川ききいづれもはおやしきの事をよくしつてそうな何にても御ようがあらば申たまゑ、おとりつぎおいたさんさりながら、おの〳〵がたの心ざしおかんじ、よほ

ごひまをいれた、ごゑんあらば重てさたち様にふみをおさしてかへりぬ、おぐらひろい取よんでみるに、此たびわか殿大吉様びうきの御やうじやうを御いんきよ様にてなさるゝしゆびをうかゞひ打んとかひてあり、おぐらけでんしさんで出る、道心おしとめ先またれよ、此うへはぐそうがちからと成わか君はとりかへさん、いや申御しゆつけ、げんざいわが子をうたんさいふものおみのがしにはならぬ、はなしてくださんせさかけ出る、しかふ道同せんとつれ立行所へおぐらがおやかた九郎左衛門、大じんみよし清六あげやのごけいづゝ屋おつね三人は、おぐらいづく共なくいでしゆへ、方々たづねまわりしが、此所にてみつけ九郎左衛門かごよりさんで出、おぐらをさらへ、やいこゝなおうちやくもの、いづかたゑかけおちする、おのれゆへ此ごさくくろうをするさ、さん〳〵にちやうちやくす、道心さんで出らうぜきもののがさぬと、しやくぢやうおつとりかけ出る、扨はおのれがつれのいたか、そいつ共にたゝけといふ、清六九郎左衛門がむなぐらさらへ、こりや九郎左衛門大夫がゆきがたはしれた身ははしらせはせぬ、扨此間それがしをさま〳〵あつかうした、ふたこしをさいた此清六が一ぶんはどこでたつ、おのれのがさぬかくごうせよ、やいそこな道心、おのれがつれてはしつたゆへ身が一ぶんはすたつた、これゑでゝ身がはしらせぬしさいを、まつすぐに申わけいたせ、道心聞是はめいわくぐそうは月まいりのぐわん人、此女は本宮よりみちづれになつた、まつたく此方にはしらぬ是女郎、これゑ出ていひわけし、しゆつけの一ぶんをたてくれ、おぐら立出申だんな様、私は心にぐわんがござんすゆへくまのへまいりました、あの御しゆつけのしらしやんした事ではござんせぬ、扨清六様おつね様はらのたちますはことわりでござんす、皆様もごぞんじの通、わたくしとかづま様とのなかには子がござんす、其子がさん〳〵わずらいますとき〳〵ました、あるにもあられず、さいわい清六様の廿日があいだあげてくださんした、うれしやとおもひましてくるわをしのび出、わが子のためにくまのへはだし参りをいたしました、申てもこれは佛参り、こゝをきゝわけてかんにんのしてくださんせ、つねきゝ大夫様だん〳〵こなさんにはうらみがあれ共、わけをきゝ

ましてはもつ共におもひます、なんと清六様こゝはごうぞ御りやうけんはござんせんか、清六きゝ成ほどきゝとゞけた、こりや九郎左衛門其方にうらみはやま〳〵なれ共、それを申ほど大夫がためにならぬ、身がりやうけんには大夫を身請がしたい、何と身に大夫をくれまいか、是はけつこうな御りやうけん、いか様共御心まかせと大夫にかたれば、おぐらきいてうれしうござんすれ共、身うけのさうだんはやめにしてくださんせ、わしにはかづま様といふふかいとのが有、たとへうけだされたとて、かづま様の事をわすれはいたしませぬ、すればおかしい事はない、ぜひにやめてくださんせと云清六きゝ、さりとは大夫申にくい事をよくいふた、それは心まかせ此うへは其方とあいさつをきつた、其かわりにはそちがあわせたい女郎にあおふ、かまへてにくしでのくとおもふな、つなきゝいかにもきこへました、しからば九郎左衛門殿手前は、清さまに三十日かわしませふ、さあらちがあいた大夫様かごにめしましませ、おぐら道心にむかい、申御しゆけ様、わたくしはふしみへかへります、お前を頼ます今の命をたすけてくださんせと、ひろいしふみをわたしける、道心うけ取心やすかれうけとつたといふ、清六道心に一禮し兩方へわかれける、扨もよこぞねのやかたにみだい、こしもと共をめし、大吉やうじやうのきうをする心みに、けんぎやうにすへてみんとおの川をよびこゝにておの川にきうをするしよさこしもとのとよ一人のこり、皆々おくに入けんぎやうめをひらき何と人はなきか、先以年頃のねがいがかなひ満足におもふ、さあしゆびがよいはんをせよ、とよきゝ、わしがかいてやつたはなんとさしやんした、それはけさおとした、大かたぶんはおぼへた故かいてきたと出す、とよふところよりあい口取出し、けつ判する所へ、からう川ごへしかの丞きたり、此由見てみ付た〳〵上へ申つけきつと法におこなわんと、ゆかんとするをけんぎやうとびかゝつてくむ、心へたりとしかの丞、おのかわをとつておさへ、さりとはおのれはもうもくのいさぎよい、あくじをみつけられとてもしぬる命なれば、此しかの丞をあいてにとりしなんとみへた、此うへはゆるす命のおんに何にても身が申事をきけと、ゆびすてゝおくに入、けんぎやうしかの丞がうしろすがたをつく〳〵みて、口

おしやもくせんあにのかたきを討そんじ、むげにかへしたるはらだち、さりながらくみとめられたる命助かりし事、是天道にかのうたりとよろこびおくにぞ入にける、ほどなくいんきよ妙じゆいんはしかの丞兵助、みだいこしもとにむかい、けふは大吉がきうをする、そちたちはわかい女の事、みるめもいぢらしかるべし次のまへいてみぬがましと、むたいにざしきをおいだしあいのとを立、其口に兵介ばんのする、其ひまにしかの丞大吉をだましはだをぬがす、いんきようしろにまはりくぎおもつて大吉がせなかにてう／＼と打ければ、二本にて打ころされ、あつと計をさいごにてついにむなしく成給ふ、此こゑにおどろきみだいこしもとは、あついやら殊外なかせ給ふ、大かたにすへ給へとこへ／″＼にのゝしる、いんきよしかの丞めとめをみやわせ、うれしやいきがないと、うつたるくぎのかしらにもぐさをのせ、ふとんにつゝみねどせおき、さあらぬていにてけんぎやうをよびこりや／＼おの川、わかとのきうを被成ておやすみなされた、枕もとにおりて、とのいをいたせと、次のまに立出、うれしや大吉がきうをした、くたびれたやらねている、めがあいたらしらせと三人はかへりぬ、かかる所へとみの丞みやこよりくだり給ひ、あね君にの給ふは、とのかづま様より大吉かたへのみやげもの此人形はわたくしがみやげといだし給へば、みだい悦給ひ、大吉はけふかゝ様にきうをしてやらしやんしたそれゆへくたびれたやらやすんでいるはてそれはよういたしました、先あいませうとおくに入おこしてみればむなしきしがい、とみの丞けでんし是は何ものゝしわざやいけんぎやうおのれそばにつきたるゆへは、しらぬといふ事は有まい、定めし是ははゝ様のしわざ、おそろしくもくぎにて打ころすといふ事が有か、それ先けんぎやうをのがすなと取まく、おの川めをひらき、まつたくそれがしはぞんせず今は何かつゝまんぐわんらいそれがしはかたき打、すなわちしかの丞こそ其があにのかたき、うたんはかり事に年比もうもくと成、此やしきへ出いる、かならずうたがい給ふなといふ、所へしかの丞来り、わかとのかたきはけんぎやうのがさぬといふ、おのがわきゝ、わかとのを打たしやうこや有、其時にせうをひろいし道心かけ出、しやうこはぐそうこれをみ

まさ、かの一札を出せばおのがわみて、是はさよさ心をあはし今日かたきをうたんさ、たがいにかためしきせう、是がしやうこにはたつまい、さみの丞みて、其せいしぞなくばかきやうこそあるべし、さかくけんぎやうこそ大吉がかたき、はやうてさげぢし給ふ、おの川涙をながし、ぶんていのまぎらはしきをしやうこにさられ、あさましいしをさぐる、あつぱれきしうにおいては、かめいの六郎左衛門がばつりう、淺右衛門が運めいこゝにきわまつたり、覺はあらねざせ。ひもなしよつてうてよさいふ、道心立より扨はおぢの淺右衛門様か、私はいおりの介よさなのり、おやのかたきしかの丞のがさぬさいふ、さみの丞きゝ給ひかたき打にまがいなし、両人をたすけてしかのせうをうてさいふ、其ひまに淺右衛門しかの丞をさつておさへ、あにのかたきおやのかたきさ打ければみだいさみの丞はさしぞへぬき、たぶさをきつて、これこれ淺右衛門いおり只今さんせいする、そちはみやこにのぼりかづま様ゑ此よしをかたり給へ、さらばさらばさ行方しらず成給ふ、かゝる所へ兵介かけ付淺右衛門のがさぬさいふ、心ゑたりさおつばらいながおいするないおりさ両人つれだち一まづみやこへのぼりける、此さうごうによつて一家中皆ちり〱に成、いんきよめうじゆいんには、大吉が一ねんさりつきさま〲五たいをなやます、其折ふしかづまみやこよりくだり給ひあくにんの母をくるまにのせ、さてみだいさみの丞が行ゑをたづね出給ひしが、ある山中にてめぐりあひ悦給ふ所へ、大吉かおんねんくぎかなづちをもつて、妙じゆいんの打ころしめぐる。いんぐわのむくいのほざ、おもひしれさ、いふかさおもへばたちまちあつきさ成めうじゆいんのむくろをつかみ、こくうにこそはうせにける、かづま今は是迄さもさゞり切て出給ふ、みだいさみの丞御あさしたわんさし給ふ所へ、淺右衛門いおりかけ付此由をきき、淺右衛門はかづまの行ゑをしたい行、いおりはみだいさみの丞の御供申、きのくにおのがもさへぞおちにける

中

さがら忠左衛門さいへるぶし、みよし清六にあわんため、ふかくさほうさうじゑ来りぬ、かゝる所にしも

く町のけいせいあさづまといふ女郎これもほうさうじに参り、きやくでんのへいにかけたるはしごを、松のゑだにかけ其身もはしのこをのぼり、小ゑだにかゝゑおびをさげくびをくゝり、うんさいふこへに忠左衛門かけつけ、たちよつてなわを切したゑおろし、きつけをあたゑければ心づく、うれしやしなしはせぬこと、よく〳〵みればいもふとつまなり、こりやそちはつまではないか、何ゆへくびをくゝり、しのふとした、しておつと清六はなんとした、されば清六様ゆへくるはをでとふおもへ共、ままにならぬゆへくびをくゝりました、扨はふうふいさかいか、きづかいすなあにの 忠左衛門がきた心やすふおもへ、いやこなさんはしらぬおんじやお、尤下人共が前お思ひしらぬと申か、扨は清六が其方をけいせいにうつたかそちがそんぶんにしてやろふ、まづ方丈ゑ行やすまれよと、さむらい共にいたわらせ寺中にしのばせ、もゝだちとつて清六が行ゑをこそは尋ねける、かゝる所へ清六、浅づまがさいごの書置をみておどろき、かぶろのうてなもろ共、方々と尋わがすむ寺はほうこうじしにきたり給ひ、忠左衛門みつけ是清六久しい、其方心におぼへがあろうかくごせよ、清六聞様に久しいあう人殊におの〳〵のやつかいになる、もはやめんごうにおもひ一もんのゑんのきらんため左様にはの給ふか、さもあらばさむらいにいふべきことばら有べきに、あまり成る一ごんたか比きゝにくい、こりや清六そのごとくすゞじくはいへ共、諸侍の女ばうをけいせいにうるといふ事があるものか、何ごぞよいにさるゝ私の女ばうをけいせいにうつたとの給ふか、それは何をみて左様に申さるゝ、いやちんじても申わけは有まい、はてやくたいもない、女共はきよねんしも月に相はて、すなわち当寺にほうむり、それならせきこうが、つまがはかでござる、忠左衛門聞何いとつまはしんだと申さるゝか、これは何共心へぬ、只今こゝにていもとのつまにあふた、其ごんにいつわりあらば其方いけてはおかぬぞ、何が扨ぞ[illegible]にならふ、其時忠左衛門 下人に申付ていもふとをよび出す、あさづま立出何事でござんすと云ふ、忠左衛門申けるは何と清六、これは身がいもうとではないか、清六みて其方はあさづまか、これ忠左衛門殿、其女はしもく町の 遊女でござる、何けいせいにてあ

るかとよく〳〵みればいもうとにてはなし、大きにおどろきこれ女郎さいせんくびをくゝられたる時、そちはつまではないかとゝへば、いかにもつまでござるといふた、あさづまきゝ御尤にぞんじます、わたくしのながあさづまと申ます、つまが〳〵といわしやんすゆへ、あゝつまでござんすと申ました、扨はみそんじた、これ清六いもうとはしんだかさりとてはおしい事をした、さて其女郎が、其方ゆへにしぬるといわれた、しさいはいか様の事ぞ、清六罷出ちか比おはづかしいお尋にあづかります、是には段々やうすがござります、何をかつゝみません、女共にはなれてよりふさしもく町ゑゆさんにまいり、折ふしそれ成るあさづまがおもざし、しにました女に少しもちがいませぬ、それゆへ二三どあいました、心入立ふるまい、是はど迄もにる物かなとおもひ、ついになじみをかさね、此比身うけをいたすけいやくを仕り、さむらいのはづかしや道具迄うりしろなし、金子五百両迄こしらへ、此金子にてあさづまをくれるやうにとさま〳〵に申せ共、千両よりうちにてはならぬと申、もはや五百両よりうへは何とあん致てもでませぬ、それを口おしうぞんじて、しにゝまいつたものであろふ、全くゑようにたわむるゝにてなし、たゞ女共がこいしさのあまりと涙をながしかたりける、忠左衛門おどろき扨は左様か、身がおやもこぞのふゆあいはてた、さいごのぢぶん其方ふうふがかんどうもゆるしおかれた、扨此女郎は身がいもうとに其まゝ、其うへ清六と申かわしたと有事、いかにしてもみすてがたし、此うへは某がいもふとにいたさん、さいわいおや共がさいごのぢぶん、いもふとがかたへのかたみとて、にちれん大上人の直筆、十かいのまんだらをゆづりおかれた、これをそなたへゆづる大事にかけてもち給へ、あさづまきゝこれにまあ有がたい彌々頼あげますといふ、清六忠左衛門にいふは、お心ざしまんぞくに存るさりながら、今物語申通金子が五百両なければくるはを出ます事がなりませぬ、ムヽきこへた〳〵此うへは其金子も日ぎりにちがわず、國本よりのぼさん、口めでたいさかづきを、上人のおまへでいたさんもつ共と皆々打つれ入にける（しもく町あけやのていおりつね所やごけお）らう人てづか傳左衛門立出、おつねをよびこれくわしや、此中たのまれたまんだらを、われらがか

ちゑをもつて五百兩にうり付た、あさづまどのにかねをわたそふとおもひ、かいぬしをつれ立てきた、つねよろこび、中太夫樣ない〳〵の事がしゆびいたしまして、かねを今うけとるはづといふ、所へかいぬし源三郎きたり、是傳左衞門殿、金子をしんぜてくだされ、心へたりとはさん箱より百兩づつみを取出し、これくわしや受とり給へとわたし、此うち百兩は拙者きも入ちんとふところへいれる、ごけいろ〳〵にいへ共傳左衞門きゝいれず、惣じて道具のうりかいは、きも入が十ぶ一銀をとる法也、むりは申さぬといふせひなくごけ源三郎に申けるは今百兩わたくしにかしてくださんせ、太夫樣の身うけの銀が五百兩たりませぬゆへ、此まんだらをおまへのかたへしんぜられました、か樣のせりふのかねをきも入ちんに百兩とられます、今百兩なければ身うけは成ませぬといふ、源三郎聞こヽろゑました六百兩のおやくに立ませう、さあらちがあいたといふ所へ清六きたり源三郎に一禮いひ、こりやくはしや、げんとのへ身がちそうに、大夫をよんであわせんと人をやる、おくらきたりてにかいゑあがり（ここにていろ〳〵せりふさわぎ有）折ふしかづまは

おぐらにあい大吉がさいごのていをきかし、其後しゆつけをとげんとおもひ、しもく町へ來りしを、くつわの九郎左衞門ゑ付下人あまた引つれ四方よりとりまわし、申こなたはかづま殿ではないか、れき〳〵のお大名が、われ〳〵の銀子をすまさず、のめ〳〵と此町ゑはござつた、只今銀子をおすましなさるヽか、さもなければ此所の法にまかしておけぶせにするといふ、かづまきゝ給ひもつ共〳〵、今少しまつてくれよとわび給ふ、いや〳〵まつ事はならぬと、大せいおりかさなりむたいにはぎとる、ごけのつねこのていをみておどろき、おのれがおびをとき、うしろよりかづまをいだきはだをかへさせ、是九郎左衞門むごいしかた、銀はおれがすます、きづかひすなとかづまをいたわりうちにいる、九郎左衞門きゝいかにもごけのうけやいならばおつねにあづけと下人にいひ付ばんのさせ、其うへにてごけはと口に、おけをさか樣につりかへりぬ、所へ清六あさづまおぐら傳左衞門出、おけぶせがあるときいた、みぐるしいに其おけとれといふ、傳左衞門きゝ女郎にあふても、かねをすまさねばあれじや、何とかわゆひざまではな

いかさあつかうす、おぐらかゝまさはしらず、くわしやさんおこましい何人じやゑ、こけさいてかつま様ごさ、やさければおぐらおごろきしのひ〳〵になげく、傳左衛門申けるは、なんこゝわしやここ人にはじめ奴か、かみこ様さがつゐたこ、皆々打つれおくにいる、おぐらは只ひとり涙をながし、こたつのふとんをかつきいる、所ゑこけ、せんのもち出かづきをまひこたつにふたふし　こゝにてかつまにかいより(おりめしなくいさけないむ)ふ何おくらの兩人のものがたりをきゝ、かづまこけこふか有とおもひりんきのせりふ、かづまはらをたて、此こごいゝ侍のにがれたるもおのれにあふて大吉かやうすをしらせ、其後いか様共ならんとおもひ、か様のていになつたこ、大声がかいみやうをさりいだす、おぐらおどろき涙をながしわび事する所に人おこす、かつまおどろき、いかいゑふるこけはおくゑ行、おいしだへしてたゞ所へ、傳左衛門まんだらをもち出、是くらどの、此まんだらをおがみ給へとさし出す、おぐらはらたてしらぬかほする、傳左衛門こゝにておぐらにむたひのぬれ有、おぐらはらをたてまんだらをとり一傳左衛門が打、にげ様にかのまんだらをこたつゑなげこみおくゑいる、傳左衛門おどろきさ兩む三ばう、源三郎にあふて何ごせんこ様々しあんしおくに入る所ゑおくらしのひ出、清六がねやに入、かの四百兩の金子をぬすみいだし、かづまにわたし、兩人つれ立く　つわのもさへ行、おい銀の濟しかへりぬ、あさに清六めをさきまし、いゑいゑせんきのうへにて、傳左衛門がぬすみたりさいへば傳左衛門覺なき事なればかんにんならぬこいふ、源三郎は傳左衛門にさいぜんのまんだらをもちごし給へさ、三人いりくんだるせんきの中ゑおぐらきたり、金子をぬすんだるやうすをかたりじがいす、傳左衛門悦金子のやうすしれたるうへは、まんだらも此女がぬすんだるにきわまつたりさなわをかけ、大くはんゑひく所へかづま來り、はらをきるべきさいふ、みな〳〵おしさめ共なひかへる、それより傳左衛門おぐらを引たて、ついにくびを打ごくもんにさらしける

下

たきもさのくわんおんおぐらさへんじかとる、ふし

ぎこをみせ給ふかづまほつしんして國を富五郎にゆづり傳左衛門を打浩六はおさづまをうけ出す、其後かづまくまのさんのかいちやうする也万歳

熊野山開帳終

業平河内通

上　大たぶさ　女ごもみへさしおさこ
　付りうひかふりして紫ぼうし
中　大しまだ　ほむら共みへ手水鉢
　付りはらかりすみけりりんきの枕
下　大いちやう　よせい共みへつれ六法
　付りおきつしらなみのごかなる國

座本　小佐川重右衛門
　　　都　万　太　夫
立役　杉　山　勘左衛門

一ありはらのなり平　櫻山林之介
一きのありつね　川上三郎左衛門
一姉娘いさはの前　小かん太郎次
一中娘井筒の前　神崎かりう
一妹娘玉水の前　松本兵藏
一さよらのつぼね　つま木虎之介
一こしもささゑだ　はな本井づゝ
一同みどり　柳春之介
一同わかな　よし澤小仙

一同きしの　山澤竹之丞
一同つはな　櫻山昔之介
一そねの彌九郎　杉山かん左衛門
一そねの・角　でき嶋小三郎
一みかさ左衛門　柴崎林左衛門
一弟もとめ　はや川はつせ
一くま川大膳　澤井その右衛門
一柴田左近　小さ川八郎右衛門
一弟右近　近松勘之介
一岩田兵之庫介　あだち三郎左衛門
一はま松かもん　ちか松京之介
一いそ竹金吾　宮崎彌津三郎
一いはら木や彌左衛門　せんたい彌五七
一たき山法印　柴崎龍左衛門
一たつた武太夫　あら川十郎右衛門
一おしげ　神崎ちさと
一おさつ　竹中初三郎
一村上がう右衛門　小佐川十右衛門
一女房おはる　きり浪千壽
其外座中不殘出申候

業平河内通

作者 冨永平兵衛

第一

そも〳〵きのありつねのそく女、井づゝのまへと申は、ならびなきびじんなればみかど聞召およばれ、きさきにそなへ給はんと有けれ共、ありはらのなり平と、ふりわけがみのむかしより、ふうふのかたらひ有しかば、有つねきのごくに思召、なり平とゐんをきらせんためとて、ならのふる御所にをひこめ、くま川大ぜんしばたさこんを相そへ、しゆごさせられける、頃しもあらたまのとし立かへり、こよひせつぶんの夜なりとて、大ぜんさこんも御所にあいつめければ、いそ竹金五しばたうこんは年男に出立、升にまめを入てもち出る、扨大ぜんはさこんにむかひ、しきだいしせんしうばんせいおめでたうござるとあれば、金五うこんは升をもち、おにはそとふくは内へと、はやしおさめけることそめでたけれ、扨さこん申けるは、是これ大ぜん殿、ゐづゝ様仰出さるゝは、こよひ年男のやくをおつとめなされたいと有事でござる、何とこなたにはやうすをお聞なされたか、いかにも私へも御あんないがござつた、しかしながら此ぎは何とござらふ、御たいせつなお身でかやうの下々のわざをなさるゝは、何共心へぬ事でござる、さこん聞いかにもこなたの仰の通り、私もさやうに存てござるが、ゐづゝ様に仰らるゝは、外の物のしる事でない、あまりきがつまる程になぐさみになされたいと有事でござる、しからばくるしうござるまいと存て、御意しだいと申てござる、大ぜん聞て尤でござれ共さりながら、申てもおまへさまは大事のお身なれば、もしもの事がござつては何共成ますまい、さこん聞て、尤さうでござれ共、しかしながらこなたと私とかやうにつとめまするからは、何の事もござるまい、しからば此よしを申上んとおくへ入、扨井づゝのまへは、わか衆のすがたに出立岩田ひやうごはま松かもんを御供にて、しづ〳〵と出給ひ、春の始の御よろこび、きはうにむかつて先いはひ申候おはん、ふつきばんぶくなをもつてかうぢん〳〵、そも〳〵せつぶんのぎしきとて是はめづらしいなりではないか、時にかもん申やう、はゞかりながらおひめ様へ申上まするは、かや

うのおすがたで年男のやくをおつとめなされまするは、何共がてんが參りませぬ、をゝいかにもそちはわけをしるまいによつてふしんをたてるは尤じや、おれが事はおさなひ時から、なり平樣とふうふのけいやくをした事なれ共、こゝ樣のおつしやるは、玉水となり平樣とふうふにして、おれが事はきさきにたてるとおつしやる、しかれ共なじみの事なればいかにしてもなり平樣の事が思ひきられぬ、又しても心のおにが身をせめるによつて、こよひは年男になつて、もゝのゆみあしの矢をもつて心のおにをはらふて、なり平樣の事をぷつつりとおもひきるがてんじや程に、皆のしうもそう心へてよからふ、なんとひやうごらはやじぶんではないか、いかにもじぶんでござりまするが、まだやく人が參りませぬ、ふゝまだやく人がたらぬとは、いな事をいやる、さればでござりまする、鬼が參りませぬ、はあこはい事をいやる、ごふじやや、いかにも御存なされますまい、こよひおにやくを致まする物がござりますが、いかふおそふ參るとて彌左衛門をよび出す、彌左衛門はおにのめんを持出る、はあ是におりまするといへば、ひやうご見て是はいかな事、なぜにおそかつた、いやさいせんからおもてにをりました、それなら內へはいつてゐなんだいやおにはそこゝ申まするによつて內へははいりませぬ、いづゝ見給ひ、おにといふはあれが事か、皆の衆がおに〳〵といふによつてこわい物かとおもふたれば、そちがおにじやよな、はあ皆樣はおにおにとおしやりますれ共、ないしやうは佛でござります、してそちはどこの物じや、私の國もとは丹後とたんばのさかいで、おにがじやうやと申まする、したが只今はやどがへをいたしました、して又どこにゐるぞ、東寺らしやう門におりまする、私のぢいは大力でござりました、したがかたてござりませなんだ、それはなんとしてなかつたぞ、わたなべのつなに討おとされましたといへば、人々わらひ內に入給ふ、かゝる所へなり平は女のすがたにさまをかへ、かごにのり來られしが、かごかき共かごちんをこひければ、せんかたなく彌左衛門をよび出し、やうすをかたり給へば、彌左衛門聞、いかにもおれがりやうけんしてやりませうとて、かごかきにいろ〳〵せりふしけれ共、かごかきがてんせねば、それなら何程ほしい、されば

でござります、下たう人もらいませふ、それはなんぼ
うの事じや、げたう人とは一貫の事でござります、ふ
ふ聞へたそんならりやうけんせう、らかんでまけや、
一人がいふやう、らかんとはいくらの事じやしらぬ、
一人がてんして、はて五百の事じや程にまけてやら
ふ、是〳〵だんな殿やすけれ共まけませふ、彌左衛門
聞、しからばさてせに十六文わたしければ、かごかき
みて、こゝな人は五百らかんのはづじやといへば、い
や此方は十六らかんの事じやといへば、かごかきは
らをたつる、こりや〳〵われらは、おれを何じやと思
ふ、おにじやぞよ、きのふもふたりまでとりまへてひ
とりは當ざにくふてしまふまひとりはやしよくにせ
ふとおもふていけておいたといへば、かごかき彌々
あざわらへば、彌左衛門はやがておにのしやうぞく
して、おひとほせばかごかきはにげてかへりける、扨
なり平は彌左衛門にむかひ、して先わしはごふしま
せふの、彌左衛門聞て、こな様はおれが女ぼうぶんじ
やによつて、此きじんのめんをきせねばならぬ、おに
の女ぼうにきじんといひまする程に、此めんをきて
けいこをさしやれとて、けいこをする時内よりまめ
をはやしければ、彌左衛門はおにのまねをする時、お
くよりしばたさこん同うこんは、かねてあいづの事
なれはゐづゝの前をともなひ出、なり平に引合、井づ
つなり平のすがたを見て涙をながし、扨々あさまし
いお姿かな、いかに戀なればとて此やうな事が有物
でござりますかと、たがひに袖をしぼらるゝ、さこん
みて、いかにも御尤でござります、さりながらこよひ
のやうなよひしゆびはござりませぬ程に、思召だけ
をたがひにおかたりなされませいとあれば、なり平
の給ふは、とかく此やうにせいたうがつよふて思ふ
やうにあふ事もなりませねば、此上はこなたをつれ
て立のきませふ、ゐづゝ聞召、尤そうでござりますれ
共、こな様もあしよはの事なり、私はなをもつてあし
よはなれば、もしもおつてがかゝり、二たびうきなを
ながしたらば口をしうござんしよ、其時は何といた
しませう、なり平聞召、はて其時はこなたをさしころ
して私もしにまするかくごでござるとあれば、ゐづ
つ聞給ひ、とかくなり平をたいせつに思ひ、ちりやく
をもつての給ふは、いや〳〵もはや立のきますまい、
私には大事の男がござんす、なり平聞給ひ、何をや

くたいもない事をいはしやる、ざれごとも時による、さあ〳〵はやうとあれば、ゐづゝきしよくをかへ、いや〳〵もはやいふてもらひますまい、きゝともない、なり平たまりかね、何其男とは何ものぞ、さあなをきかんとあれば、ゐづゝとうわくして、是成さこんとあれば、さこんめいわくがりけるを、ゐづゝ見給ひ、是さこん、侍のひけう千万な事かな、そなた程かしこい人ががてんがゆかぬか、是なり平様は おれゆへにしぬるとおつしやる、何とそなたは是程の事がきがつかぬかとあれば、さこんゐづゝの前のちりやくの言葉とおもひ、成程私はおまへの男なりといへば、うこん聞もあへず、是〳〵さこん殿、何とそれは誠か、ゑゑ口をしいじよぞんでござる、しつかいちくしやうなれば、もはやいけては おかれぬと刀に手をかくれば、なり平やがてうこんがさしぞへひんぬいて、切かくれば、井づゝもさこんもおくをさしてにげ給へば、やれらうぜき物よとて、あはてさはぐ所へ たつたぶ太夫といふもの、かけこみしを、村上がう右衛門といふもの、武太夫をおつかけきたりしが、さこんを見ておやまつて 武太夫とおもひ、くびをうつてかへりける、ゝめ川大ぜんはなり平うこんをからめける所へ、武太夫うろたへ出けるを、大ぜんみとがめ武太夫もともにからめける、かゝる所へがう右衛門女房を手ごめにしてかけ來り、大ぜんにむかひ、ちか頃めんぼくもござらぬ、私人たがへをいたしました、則こよひのらうぜきものは私でござると、いひもあへず武太夫を見て、やあ武太夫め、おのれをうたんと思ひしに、人たがへして口をしやといへば、手ごめにせし女ぼう、是〳〵がう右衛門殿、武太夫がおりますすればわしがなんははれまする、こゝをゆるめて下されいひわけがござる、がう右衛門聞、おのれいたづら物め、さあ何成共いふてみよとつきはなせば、女ぼう武太夫にむかひ、是其方とふぎな事は少もない、なぜいひわけをしてたもらぬといへば、武太夫聞、是〳〵がう右衛門少もふぎはない、といへどもがう右衛門がてんせず、其手はくわぬといへば、なり平つく〴〵聞て、扨も世にはようにた事が有物かな、是もふぎとみへた、是〳〵、女ぼうといふ物はこわひものじや、きつとせんぎを召れよとあれば、女ぼうめいわくがり、こゝな人は何をいやる、わけもしらひで、見ればそな

たも女ごじやが女はたがひの事じやに、わるい物のいひやうじやさいへば、なり平聞給ひ、扨もしれ〳〵しい、いひぶんじやさあればうこん聞、いや〳〵あの女ぼうのいひぶんを聞まするに、いかさまふぎな事なんごしそうな人ではないが、がてんがゆかぬ是れ是れ女ぼう、何ぞふぎでないとの。しやうこはないか、いかにもしやうこがござんす、あの武太夫がおさしました文がござる、此戀がかなはずば、私をさしころさふといふてこしました、すれば私のふぎではござりませぬ、こりや〳〵、其やうな文はやくにたゝぬ、まさしう武太夫めはおびをといてねてゐたではないか、それでもふぎではないか、女ぼういよ〳〵めいわくすれば、うこんみて、是〳〵、其ぶんではしやうこにはならぬ、其外何ぞしやうこに成さうな事はないか、女ぼふしあんして、さればでござります、あのものが申まするには、とかく、がう右衛門殿いきてゐられては戀のじやまじや程に、こよひがう右衛門殿をうたふと申ましたによつて、先だましておびをとかせまして、其まに刀のめくぎをぬいておきました、是がしやうこでござんすといへば、さらば其刀を見せられませよとて、侍共にこひみれば、大小共にめくぎなし、扨は女ぼうにふぎなしさ、がう右衛門もあんごし、扨人たがへせしくびを出しみせければ、なり平見給ひ、是こそ此方の打もらせしめがたきよさあれば、がう右衛門ふしぎに思ひ、こなたにはみれば女の身として、めがたきとは心へませぬといへば、なり平右のしだいをかたり給へば、江右衛門よこでを打、扨はおまへはなり平様でござりまするか、いかにも段々承ました、御尤でござりまする、さりながらおまへのにくしとおぼしめさるゝものは私のくびを打ました程に、おうれしうおぼしめしませい、なり平聞召、是〳〵其方は侍かと思ふたればめがねがちがふた、やいうろたへ物、にくしと思ふ物を打もらして口をしう思ふに、なんじやうれしう思へといふかなんのうれしい事が有、江右衛門聞、いやいな事を御意なさるゝおまへは上ろうの事なれば、かれめはあら男、とてもお手にはかなひますまい、所をわたくしの打とめましたは、いかいちうこうでござる、やいその方はさすが下ろうじや、たとひ手にあふまい共、たがひにはたらひてこそ本もうなれ、人にうたせて

何のよろこびであらふ、江右衛門しごくして、はあ御尤でござります、私のあやまりました、ゑい〳〵しあんいたした、是〳〵ちと御そせう申たい事がござる、大ぜん聞て、何事じや、いやべちのぎでござらぬ、さき程より段々お聞なさるゝ通、私のかたきは是成武太夫めでござれば、かれめは私の申請ました手にかけたふござる、又なり平様のめがたきを、私の打ましたれば、私はあなたの敵とてものがれぬ所でござりますする程に、私のくびをうたれまする間、あなたのなわをといて下されましたらば忝存ませう、ならぬならぬ、何をぬかすすらう人、おのれとてものがさぬ、あゝいかにものがれぬがてん参りました、こゝは何分にもおわび申ますする、ならぬ所がそせうでござるごふござりまする共、私のくびをうたれまする間、なわをおときなされて下されませい、お侍衆さあちとの間願ますする、大ぜんはらを立、やいさすらう人、ならぬ、江右衛門聞て、いかにも身はすらう人じや、侍の頼むといふに聞わけのないとて、やがて両人を引立、なわをとく、大ぜんも侍共ものがさしとぎしめけば、江右衛門大ぜんにむかひ、やいさ何をはたつく、おのれら侍かとおもふてはいろ〳〵わけをいふに聞わけもない、こりや身は村上江右衛門といふて、いづみかはちにかくれもないもの、おのれらごときのばた〳〵侍二十や三十はくにする男でない、おそらくは一寸成共いごいて見よ、かたはしになぎたふすといふ所におくよりいわたひやうごの介はかけ来り、井づゝの前をなり平にわたし、是〳〵なり平様、いづつ様に少もふぎはなけれ共、おまへのおためを覚し召ての事、扨又江右衛門殿おはたらき、忝しといへば大ぜんいよ〳〵はらを立、やれ侍共のがすなといへば、其ひまに武太夫はいづく共なくにげゆきける、江右衛門ひやうごの介ぬきつれて切たつれば、みなちり〴〵ににげうせける、扨ひやうごの介はゐづゝをともなひ立のけば、江右衛門はなり平をともなひ、まづしのばせたてまつる、

第二

井づゝの前のいもうと君、玉水のまへと申はちゝありつねのはからひにて、なり平とふうふにならせ給ふべきを、あね君ゐづゝの前、ゑんを切給はん事をね

たましく思召、こしもと共をめしつれられ、しのびしのびに三わの明神へ参らせ給ひ、じよぐはんじやうじゆごきねんある、所へそねの一角みかさのもとめ雨人は、あみがさふかく引かぶり、三わへさんけいし、神木にくぎをうつ、玉水見たまひこりや〳〵一かくもとめではないか、そのほうたちは何の頼があつて、おそろしい事をするぞ、雨人こうわくすれば返事らちあかず、ゑい〳〵とかく、と丶様へ申てきつとせんぎする、一かく聞て、しからばまつすぐに申上ませう、あの〳〵ぎはなり平様に打ました、玉水はつと思ひ、なり平様には何のとがゞあつてくぎをうつぞ、さればでござります、なり平様には井づゝ様とみつゝうなされてござりまするゆへに、おまへ様との御ゑんぐみがらちがあきませぬ、それゆへ御かちうもさうごういたしまする、とかくなり平様のござるゆへかやうにさはがしうござりまするによつてかやうにいたしまする、いや〳〵それはわるいがてんじやなり平様にとがはないとかくあねさまのいたづらゆへなればとがの有はあねさまじや、むゝ扨はあねごさまにならばおまへもくぎをうたせられませうか、をいかにもあねさまはやうすによつてしれまい、とかくなり平様と縁ぐみのらちのあかぬもあねさまゆへじや、もとめ聞て、さればでござります、此頃世間でさたをいたしまするも、おまへの其お心がござりまするゆへ、あねごさまをのろはしやれまするかと申まする、かやうにしのび〳〵に御さんけいなされまするを兄さへもんが承りましてきのどくに存まして、我々をかやうにいたしておこしましてござりまする、はゞかりな申事でござりますれ共、おぼし召きられましてようござりませう、玉水聞給ひ、やゝいかにもあやまつた此上は日のもとのあらゆる神かけて思ひとまらふ程に、さたなしにしてたも、あゝ何が扨其お詞にいつはりはござりますまいが、あにさへもんが承りましたらば悦びませう、しかれば私はおいとま申左衛門に申聞せませうと いへば、一角聞て、さいわい兄彌一郎かへりました程に申聞ませふ、玉水聞たまひ何と彌一郎はかへりやつたか、うれしやさらばはやうあはふとあれば、こしもと衆はよころびて彌一郎様にみやげをもらはんと、みな〳〵屋かたへ帰られける、扨そねの彌一郎は玉水の御ま

ヽに出ければ、玉水見給ひ彌一郎歸りやつたかなり平には御そく才なか、井づゝさまへお文でもきたか、おことづてがあらふの、いへ〳〵何のおことづてもござりませずお文でも進ぜられませんかと申升たれ共、何の事もござりませなんだ、こしもとつぼね取つき、さあみやげをとせがみける、あゝかしましい、ざれ〳〵はさみ箱とつておじやとて、はこのふたをあけ、いひけるはなんぞかわつたみやげをと存まして、なり平様と御だんかういたしました、こゝにもくろくがござります お引合なされませとて、書付をわたしける、先一ばんに人ぎやう筆、扨いもはしかのまじない、是はなんぞ、いもをとうげのまごじやくしとて、しやくしを出しける、扨あさま山さあこれはなんでござりませう、そ、あさまはけふりの立所じや程にかうろか、いへ〳〵、尤あさまにはけふりが立まするによつてひふき竹、扨其つぎはたが袖、ぬすみ人舟、是はがてんのゆかぬ物じや、先ぬす人なればすりでござります、舟はこぎまするによつて、すりこぎでござります、扨はおなぐさみでござりまする程に、是をくじ取にいたしませふとて、大かたぬぎにてほう

引をはじめけるが、なり平の文をおとしけるを、玉水ひろひ給ひ、是〳〵彌一郎、なり平様よりあね様のかたへ文はこなんだの、いかな〳〵けもない事、こりや彌一郎、此文はなんじや、うは書を見ればせいとう様、ざい五よりと有、せいとうとは井づゝといふ事、ざいごとは在五中將といふ事、なんと是でもこぬか、はてわけもない、それはせいとうねんと申しんごん寺へ參る文でござります、つぼね小袖をもち出、これこれ彌一郎殿、此お小袖はゐづゝ様のではないか、しれ〳〵しいうそをいわしやるといふ所へ、ゐづゝのこしもとさゝゐだは彌一郎おそしとてむかひに來りしを、玉水の前なればゐづゝよりつかひに來るよしをいひけれ共、玉水がてんせず、やいさゝゐだ、まつすぐにいへ、そちは彌一郎をよびにきたと、さればさゝゐだはめいわくがりていひわけをする、玉水はらをたて、長刀にのせんとせしを、彌一郎引立かへしければ、玉水いよ〳〵はらを立、文ずん〳〵に引さき給ふ、所へ有つね來り給へば、彌一郎こうわくする、有つねみ給ひて何共がてんのゆかぬていと、いろ〳〵やうすを尋ね給へば、つぼね次第をかたりける、有つねりつぷ

く有やい彌一郎、ごんごだうだんにくいやつかなと、此上はいそぎゐづゝがくびを打て參れと有、彌一郎めいわくし、先一通お聞なされよといへ共、有つねせき給ひ、それ侍共いそぎゐづゝがくびをうつて參れかしこまりましたとて、立ければ彌一郎聞て、是〳〵侍衆、たゞ今に立騒ぐぞ、殿樣にはおとしよられてらうもうなされて仰らるゝを、かしこまつたとは何と、立さわいでかしこまるゝか、下にゐやれといへばやい〳〵彌一郎何と身をらうもうとはすいさんなりといかり給へば、彌一郎申樣ちかごろはゞかり申事で御ざりますれ共、此義はとくと御せんぎなされませい、先なり平樣より文に參りましたれ共、其文はいとまの狀でござります、則此お小袖ゐづゝ樣よりなり平樣へしんぜられましたれ共、ゑんを切からは此小袖もいらぬ物じやとておかへしなされましたといへば、有つね聞給ひ、扨はゑんをきつたか、そうとはしらいではらが立た、此上は玉水もあんごしたがよび、彌一郎くたびれであらふ、先々やすめとておくへ入給へば、皆々內へ入給ふ、扨彌一郎は一角を近付、扨々なんぎをした、身共はかへらうといふ所へ玉水出給ひ、此小袖をきつと見て、ねたましやとて立給へば、玉水のじうしん小袖に取付、引上んとすれ共あがらねば、彌一郎きもをけし、あきれてゐたりしが、一角やう〳〵なだめ入ければ、彌一郎も小袖を持、井づゝの方へいそぎけるこゝに井づゝのあね野とはのびくは、井づゝをあづかりゐられしが、たき山ほうゐんといふ物をかたらひ月待のあら行をしておはします所へ、彌一郎來り有しだいをかたりければ、ゐづゝきもをけし何業平樣よりいとまの狀がきたか、口をしやもはや月待してもやくにたゝぬと、なげき給ふのざわのびく聞給ひ、是〳〵ゐづゝ何とぞしてそなたにやゝをうませふと思ふて此やうなあら行をしてゐるかひもない、とかくいきて詮もない、此きたう刀でじがいしてしにやとあれば、彌一郎是を聞、何とやらこなたのいひ分一物有やうにおもふといへば、いかにもゑいがてん、おれは有つね殿にはそうりやうなれ共、下しやくばらとて此所へおひ下された、其うらみが有、ゐづゝも玉水もころしておれが家をつぐ、彌一郎聞もあへず、とつてふせやれ人よとよばはれば、たき山法印立出、扨々惡人かなとて野とはい

びく〳〵を引立ころし、井のもとへ入にける、扨彌二郎はゐて、をいたはりけるが、井へゝはかみをとり、てうずばちへなげ人おくへ入給ふ、扨彌二郎かへらんとする時玉水のしうしん小袖より出、かなたこなたとする所に、てうずばちよりゐづゝのかもじとび出てたがひにしんゐのあらそひはすさまじかりけるしだいなり、彌一郎はしばがきの内へかくれける、井づゝのめのとみかさの左衞門は、此の有さまを見付かけ來れば、兩人のしうしんけすがごとくにうせにける、左衞門はつと思ひ、ゐづゝのねまへかけこみ引起し、是〳〵ゐづゝ樣ゑゝあさましき心やといろいろゐけんをすれ共、とかく命はすつる共、なら平樣の御事を思ひ切る事はならぬとあれば、さへもんはせひもなく、しからば爰を立のきなり平樣にあはせ申さんと、すでにのかんとすれば、庭のすみよりのざはのびく、やれゐづゝその方ゆへに此くるしみをうくる、かたきをとつてくれよとさもすさまじくいひければ、さへもんあきれはて、人はなきかといへば、たき山法印立出、しやくじやうをならし是はさへもん殿何とした事ぞといふ時、おとしあなより井戸ほり二人くびを出すをさへもんみて、是は何共がてんのゆかぬていじや、是〳〵法印、まつすぐにおいやれといへば、法印さあらぬていにてちんじける、時にさもん大地をふみ、やい地の下にゐるくせ物共、出ずばおのれら一々ふみころさんといふ、井戸ほり共きもをけし、ゆるさせ給へとこんで出、右のてだてのしだい大こごらを打、かやう〳〵の次第といふ所へ、又庭のすみよりそねの彌一郎がゆうれいとなり、是れこれさへもん、地ごくよりみやげをとつて參りたりとて、いざはのびくにをからめ出れば、さへもんいよいよあきれつゝ扨は此物共、いろ〳〵のたくみをなしける惡人なればとて彌一郎さへもん心を合、惡人共をいましめける、

第三

岩田ひやうごはま松かもんは、なり平をかくまはんため、山だちのすがたに成、ゆきゝの人をおひはぎしてゐたりしがかゝる所へ都より、おしげおさつ兩人ゐづゝのゆくへを尋ね下りしを、ひやうごかこもんすでにはぎとらんとせしが、よく見ればいもうこ

成、是は〳〵さいふ所へ、たつた武太夫馬にのりて通りしが、人々を見付・岩田ひやうごの介殿でござるか、いつぞやはさう〳〵おめにかゝつてござる、さてくまがわたいせんあくぎやくをたくみ、東大寺にこもり人々をほろぼさんとたくみまする、扨あの方のかまへはかやう〳〵さ語り、此段を業平様へちうしんをいたすさあれば、ひやうごつく〳〵と聞、武太夫をとつてふせ、おのれちうしんではない、有やうにいへ、たばかつてなり平様を、なん大もんへまねきよせ、やす〳〵とほろぼさんとのてだて、かうにらんだまなこはちごふまいとせめければ、武太夫もせんかたなく、此上はまつすぐに申さんたすけてたべさいへ共、ひやうご聞入ず、たちまち打てすてにける、此よしかくれなければ、玉水のまへはなり平様のてきなれば、大ぜんを一太刀うらみんさ、南大門に出給ふ、所に村上ごう右衛門女ぼうおはるも、南大門に出けるが、たがひにりきみのあらそひせしが、雨ほうそれこなのりあひ、大門にむかひよばはれば、大門の仁王、女はけがらはし歸れさいへば、仁王の物いふはめづらしいさわらひ給へば、仁王あいづのことばをいふ時、内より四天王さまのり、手に〳〵ほこ〳〵引さげ、がうぶくせんさいふ時へ、がう右衛門じやうこの介其外の人々、思ひ〳〵にかけ来り、是〳〵四天王、佛は人をたすくるやくなるにしかも佛法はんじやうのれいちにてせつがいせんとは、おのれ一人ものがさぬこいへば、四天王はしやうぞくをされば、仁王こいひしは大ぜんなれば、人々おりかさなり、悪人共をたらげてなり平ゐづゝもろ共に、ながきちぎりもすへはんじやう、めでたかりける次第也

二條通寺町西へ入北側

正本屋九兵衛新版

業平河内通終

御曹司初寅詣

近松門左衛門作

上 虎之巻 物もふ兵法の手は暦の中段伊勢三郎
付りつゝみづゝまるれのまくら

中 龍之巻 ごれい女にあふてあまいやつ佐藤次信
付り玉すだれ目をせる小判

下 [illegible]之巻 御出の山をふ袋につめ込今吹の金賣吉次
付りさ[illegible]右御庭の[illegible]

一源九郎よしつね　若衆方 小の川宇源次
一しつか御ぜん　太夫 きり波せんしゆ
・こしもとねいひ　きり波あふよ
・同わかまつ　はや川さのゝ介
一武藏坊辨慶　座本 古今新左衛門
・いせの三郎義盛　立役 中村四郎五郎
一上るり御ぜん　上村おりの介
・れいぜい　山下かめの丞
・十五夜　よしをかみゆき
・鬼一ほうげん　宮崎だん九郎
一同手かけ小しば　さかた市彌

一娘かつらのまへ　おのへうこん
一いもとあやあけ　をぐら山をのゝ介
・北しらかはたんかい　敵役 三かさしやう右衛門
・さこうたゞのぶ　立役 生島新五郎
一いもとまがきの前　ふぢた大次郎
一清水坂あんじゆの姫　若女形 ちさを十次郎
・娘小いさ　長しま庄のすけ
・しのぶ小太郎　山下小才三
・梅津さいしやう北の方　玉川千之丞
・同娘少なごん　鈴木長三郎
一妹小がう　あさをつまばし
・こしもとおかめ　さかたをぎの
・同おたけ　山下かるも
・梶原平三景時　しが山ばん十郎
一らうどう犬間げんない　とみ山十郎兵衛
一四條中島おしろいやお雪　小さはら友三郎
一同あぶらや娘おたね　きりなみきさの介
一同くはしや新兵衛　ゑぐち甚五郎
一江間の小四郎よし時　若林四郎右衛門
・かねうり吉次のぶたか　道外 金子吉左衛門

御曹司初寅詣

近松門左衛門

上

ゆふべ〳〵の鞍馬山、いつあきらけき月をみん、扨も源氏さまのかみ義朝の八男、常盤腹には三男、源の義經は、平家の一門追討あり、勳功をおこなはるべきところに、梶原が讒言によつて、賴朝義經御中不快にならせ玉ひ、鎌倉より討手上るよし聞えしかば、一先奥州秀衡がもとへくだらんと、紙子姿に古編笠、むかしにかはる有様なり、はあ扨□□なる春景色、我いにしへ牛若といひし時、鞍馬山にて人となり、何とぞ平家を滅し、父祖の耻辱をすゝがんと、よな〳〵多聞天に詣で、祈誓したる其しるしにや、平家の一類ことごとく西海の浪にをつちらし、其賞莫大なりといへども、梶原父子が讒言により、兄弟の中不和になつた、一先奥州へ下り秀衡を賴み、二度義兵を擧げんと存る、靜は女の事なれば、義經ほどの者が、女を具してはと都にとゞめ置た、又矢矧の上るりは身共が事を思ひ焦れ死に死だと聞く、うらめしいは我身じやと歎き玉ふところへ、向ふより乘物かゝせ、武藏坊辨慶來れば、義經乘物の前に畏り、御乘物の内へ申上たきよしい玉へば、辨慶怒つて御輿の内へ用ありとは、かたじけなくも源の牛若君、今度鬼一・法眼殿の聟に御なりなされ、たゞ今お越しなさるゝ、不調法な奴のそこを立退け、まだ退ぬかと編笠をとり顏を見合、こは我君かと歎くを侍咎め、これ辨慶どの、我君とはどなたでござる、辨慶まぎらかし、そうではない我君の御馬やの喜三太じや、まだ都にうろたへてゐるは、此乘物のお人と一所に奥州へ下らんといふ事か、いやさやうでござらぬ、そとおめにかゝり申上たい事がござるといへば、靜は牛若と名をかへ、若君の姿となり乘物より出、是は喜三太かと取付きなげき、扨こそそちは卑怯ものじや、なぜ奥州へは下らぬ、今の世に賴朝に睨まれては身がたゝぬ、今度鬼一・法眼が方へ聟入をし、まさかの時は義經と名乘り討死をする、いまだ都にうろたへまはりゐるは、卑怯ではござらぬか、いや左樣ではござりませぬ、靜は常々心にかゝる事があるといふ故、今日御乘物の先に立ちました、つねづね靜御前の仰りますは、奥州へ下るといふて、矢矧

の宿上るり御前と馴れ染めてござると仰しやる、上るり御前はお果なされたと、此枕を冷泉十五夜かたよりをくりました、上るりは義經故こがれ死に死しましたと歎き玉へば、靜は枕もち上るり御前はおはてなされたか、喜三太とて歎き玉へば、辨慶も涙をおさへ、喜三太さらば〳〵、まづ明神へお參りなされこ神前へ入り玉へば、義經は殘りゐて、さりとは〳〵女ながらも頼もしいは、此義經に成かはり、まさかの時は討死をするであろふ、早く奧州へ下り二度義兵を擧げんと云玉ふところへ、辨慶來りまづお待ちなされ、靜御前の何やらおしやる事があるといふ、所へ靜出玉ひ、辨慶とめてたもつたかと、互ひに取付き心底を感じ歎き玉へば、辨慶申すは、目出度門出じや歎く所ではない、追付めでたふおつきなされといへば、義經の玉ふは、何と望みの虎の卷は見せぬか、かつらの前と祝言はあつたかと、玉へば、虎の卷は家の重寶とていまだ見せませぬ、祝言にはうご致しましたが私が智惠を出しまして、私の申ますのには、八島の合戰に大勢の軍勢を殺した故、平家の法華經を書き供養を致す、其間は女と肌を觸れる事はなりませぬといふてをきましたと話し玉へば、是は出來たと笑ひゐる所へ、二十歳あまりの若侍來り、刀を拔き指より血を出し、起請文に血判を押し、辨慶を頼み、これむさし殿、これを義經公へお上げなされて下されといへば、辨慶怒つて、大將たる御身へ不調法千萬なこといへば、侍申すは是むさし殿、こなたも西塔のちごではないか、義經公北野詣の折ふし見染しよりこのかた、暮れば戀慕の床にしづむ、其思ひのたけを一通の起請文に指を添へてさし上ます、お取次を頼みます、武藏聞いてあなたには念者がござる、ならぬ、それは何者でござる、直に申さふ、聞たくばいふて聞せふ、鞍馬の天狗じや、侍聞てお言葉のお情けも、ぜひならぬとならば、腹十文字にかき切て、一生義經の惡魔となり思ひ知らせん、先辨慶が首取てと飛でかゝるを、誠の義經おしとめ、拙者義は此麓にをる素浪人でござる、左程に思召すならば、私が取持ちませふと靜に向ひ、是義經さま、あの者が只一言のお情と申ます、かなへてつかはされませいと、扨侍に向ひ、こなたの思召入はごふでござる、左様でござる、然らば此起請文の與がきに、こなたの心底、こんじやうの思ひで、忝いと

書きて下されと硯を出し、書きて貰ひ、起請文を取り、若侍はゆくゑも見えず成ければ、辨慶はかごでを祝ひませふと、義經しづかもろ共やかたの内へ入玉ふ、所へこしもと子の日若松は、最前の枕もち出あげて見んとするを辨慶かけ出、それは大事のかたみの枕とせり合ふ、あけて見ればしやれかうべなれば、きもを潰しこしもと いづゝの内へ投入ける、所へやはぎの宿上るり御前の女房達、れいぜい 十五夜は琴笛を持來り、辨慶を頼み、此琴はやはぎの宿長殿の娘、上るり御前の御琴、ここせ牛若殿、金賣吉次の馬追冠者となり、奥州へ御下向の時、一夜の契をこめたまひしが、ここせがうちには御迎の參る御約束なれ共、いまだ御約束の參らぬうちに、上るり御前はそれを思ひ死におはてなされました、其時のよひのくはげんの琴、又此笛はさうくはう坊も御存知の笛、御かたみにつかはされました蟬折と申御笛、御寺へ上て下さんせ、何ごとも昔語に成ましたと歎けば、扨は十五夜冷泉か、おれは武藏じや、なつかしやと涙を流しゐる所へ、井筒のうちより上るり御前の幽靈あらはれ出れ共、十五夜れいぜいが目には見えず、辨慶あせつて、こなたはどつからござつた、ヲヽおれは義經の紙子の上にをはれてゐた、やはぎの上るりがなき面影の、これまであらはれ出たるぞや、はかなき昔を語らんと、琴引寄かきならし玉へば、辨慶は琴に合せ、小唄をうたひをさめければ、姿も見えず井筒がもとに隱れうせければ、辨慶みな／＼涙と共に入にけり、かゝる所にゐまの小二郎義時馬に打乗り、讃人の若侍、軍勢引具し、法眼が屋敷をおつとりまき、切て入んとするを、まて／＼侍共、いふても賴朝の御舍弟、尋常に名乗て切て入と、大音聲、北條の四郎時政が嫡男、江間の小二郎義時討手を蒙り罷り向つて候、義經やおはします、おりあい玉へと罵れ共、音する者もなければ、侍共きつていれ、承つてこみ入ところを、義經これに有やと駈出玉ひ、やあ見ぐるしや雜人ばら、此義經が太刀先きにまはらん者、一人にてもいきてかへらんや、義時に一言云事あり、出あへとの玉へば、義時かけ出見れば口つちじやが、義時に向つて用ある時は、をのれは何者じや、何者とは、義時久しいな、世にありし時は、兜を脱ぎ腰を屈めたる義時が、見知ぬならば名乗りてきかせふ、征夷將軍右大將賴朝が弟、

源義經じや、義經公は身が見しりてゐるが、をのれは義經公の家來、龜井の六郎じやな、このばゞは義經公の生涯のばじや、此樣にいふてもわれは合點がいかぬか、此小二郎は義經の討手に向ふた、龜井の六郎ならば此場はたすかれ、扨はさやうでござるか、成程龜井の六郎でござるが、奥にござるは三代そうおんのお主じや、其首を取んとするをよそに見てやあるべき、片岡くまい伊勢するが、忠信ひたち武藏坊、かう申龜井の六郎まで、一人として我君の御命にかはらんと願ふ、何と女でもうたしやるか、義時聞て、義經と名乘るからは女でも討ねばならぬ、それほど義經はにくうおぼしめすか、兄弟多しといへ共、惡源太義平、中宮の太夫ともなが、此人々はとく〳〵にお果なされ、ながらへてゐるとては、賴朝公、蒲殿、扨は義經、ひととせ浮島が原にて御對面申たりし時、只今より惣大將を義經に下し玉はるとありしかば、諸國の大名一どうに、あつと音をさけしに、五尺に足らぬ義經が、今身の置き所がない、義時にいけんが致したい、所々の合戰に、男女の數およそ十万人余りも殺したが、今義經が身にむくうた、たとへ義經と名乘らふとまゝ、たすけてくだされ、義時聞て、義經とあればはたすけぬ事はならぬ、こぞの秋六はらに登つてゐれども、侍共に申付、義經の事は身が耳に入れなと申渡してござる所に義經公儘謀叛とある證人が出來ました、それは何者でござる、時に侍證人はそれがしじや、義經見玉ひ、最前の浪人か、それには證據があるかとの玉へば、最前の起請文を出せば、義經見玉ひ、これが義經の直筆じやとは、義時詮議かくらふござる、先おのれは何者じや、侍申はおのれ龜井の六郎じや、何と義時どの、義經の謀叛ははれましたぞや、誠の戀路と思ふて、身共が量見を以て取持てやつたに、ふたごゝろならぬに六はらへ註進をしたな、誠に鬼一が一類に、たんかいといふ惡僧がある、内々鬼一が家に望をかくると聞た、扨はおのれは頼まれたな、おのれまつ直に白狀せよとの玉へば、義時かの侍をとつて投げ責付くれば、りやうじをさしやんすな、成ほど申ませふといへば、義時聞て、今迄はさせいをし、侍のやうにあつたが、女の聲は何奴じや、成程白狀致しませふに、命をたすけて下さんせ、私は鬼一法眼が手かけ小しばと申ますが、かつらの前は私がほんの娘でござん

すが、北白川のたんかいのいはれますには、牛若を殺し虎の卷を奪ひ取たれば、かつらの前と夫婦に成、私もらく〳〵にさせふといはれました故、此樣な形になりましてござすんといへば、扨は知れた助けぬ奴なれ共、女なれば助けると引のくれば、飛のき侍共がつてんか、義時共に討取とうつてかゝれば、義時驚き小柴侍共をおつかけ行ば、義經は井戸の內へ隱れ玉ふ、所へ辨慶は靜を肩にかけ出れば、侍追かけ來るを取ては投げ〳〵防ぎゆく、所へ小柴は又駈來り、最前の龜井の六郞はまことの義經じや、討て取れと井戸の內へ入んとすれば、義經かけあがり、ぜひに及ばぬ是迄と腹を切玉へば、侍首を切らんとする所へ、義時駈付け侍共を追散し、是も腹を切らんとする所に、井戸の內より義經聲をかけ玉ひ、義時をとゞめ玉へば、こなたは腹を切はなされぬかといへば、義經いやをれは腹を切らぬとの玉ふ所へ、上るり御前の幽靈あらはれ出、魄はめいどに赴けども、魂は此世にとゞまり、お身代りに立たると、忽ち消失せせきこうに成玉へば、みな〳〵奇異の思ひをなし、伏し拜み玉へば、義時申は、一時も早く奧州へお下りなされといへば、

義經聞玉ひ、義時鎌倉の首尾を賴む、是と申も大ひ多聞天の御じひと、ふし拜み〳〵わかれ〳〵になり玉ふ、こゝに鬼一法眼が娘かつらの前、妹有明は、惠方參りをしかへれば、鬼一立出、けふは身が家の吉例、兵法のつがひぞめじや、どこへいきめされた、兄弟聞玉ひ、惠方參りを致しました、ふゝ見れば見馴れぬ者が供をして來たが、何者じや、左樣でござんす、妹が大勢の參りでふみはづし、橋の下へおちましたを、あの人が介抱をしてたもりました、聞ば奉公の望みが有といはれました故、連て參りました、禮をいふて下さんせ、鬼一禮をいひ、奉公にかゝへる、これは身が姉娘じやが、聟殿がある、以前は歷々なれ共、仔細あつて名をかへてござる、それ牛の介殿を呼べといへば、靜は牛の介に成り立出給へば、めみへをし、成程律義そふにござる、あのやうな者がきんじよで使ひますにはようござると、挨拶すれば、鬼一聞てこなたの氣にさへいれば、一段でござる、妹は茶の間をこしらへ、これは又お經をあそばすかと、かつらの前と打つれ、鬼一は內へいれば、牛の介は奉公人を呼び、國元を尋ね、我在所にも戀がはやるか、夜更てから手を

打つ時は來いよ、我を賴む事があると、耳に口寄せいへば、其樣なことはなりませぬ、しつかいそれはつゝもたせといふものでござると、合點せず次の間にゐる所へ、妹有明出玉ひ、奉公人に近付、牛の介と姉樣とはめうとじやが、ついに枕を並しやんせぬは、氣に入らぬそふな、どふぞおれに肝入て下さんせといへば、奉公人挨拶する所へ、かつらの前出玉へば、妹は逃げ入玉へば、かつらの前さま〳〵ぬれかけ玉へば、牛の介合點し玉はぬを、無理に引立入玉ふ、所へ北白川のたんかい御見舞と案内すれば、鬼一立出たんかい御出なされた、今日は身が家の兵法の遣ぞめゆへ、人をつかはした、たんかい申は、先以て新春の御慶めでたふ存る、いつもあのしやうぎにござつて御見物なさるゝに、今日は是にござるは何と思召てのことでござる、されぱでおじやる、身は老衰いたしたゆへ、今日よりして身が目鏡を以て、此しやうぎへなをす者がござる、たんかい聞、これは忝ない、法眼殿の一弟子と申すは此たんかいより外にはござらぬ、忝なふ存じますと禮をいへば、いかにも〳〵、その牛の介殿御出なされといへば、牛の介出床几になをり玉へば、

たんかい見て是牛の介、禮義を忘れたな、法眼殿一の弟子は此たんかい、なぜ座上にはなをる、いぜんは歷々な侍とな、世におちぶれた故禮義をしらぬそふな、いやたんかい身共が今日の上座は、法眼殿さしづ故床几になをり申が、御不審にござるか、たんかい聞て何と法眼殿左樣でござるか、鬼一聞、成程〳〵身が家に世に、なき虎の卷がある、牛の介に讓り與へてござる、それゆへ今日の上座を許し申た、たんかいきもをつぶし、これ老ぼれ、其虎の卷が望ゆへ、十七年以來春秋を送り、師匠とあがめ禮義を勤めた、此たんかいにはなせゆづらぬ、法眼聞玉ひ、是たんかい、牛の介師匠はな、忝くも鞍馬山の大僧正、平家を西海の浪におつくだし玉ひし御身、われはそれ程血臭い目にあはぬ、牛の介殿には成まい、たんかい聞、成程聞へた、然らば牛の介としあひを致し、勝負を致さふといへば、法眼竹刀持出で、牛の介に渡すゝめ、容赦なく此しないにて、首の骨を二ッ三ッ打てやらしやれといへども、誠の義經ならねば迷惑し辭退すれば、法眼申は、相手にならしやれぬと、讓り申した虎の卷を取かへします、日頃僧正坊に習はしやつたはこゝでご

ござる、静聞玉ひ、扨は相手にならねば虎の巻を取返さしやるな、せひに及ばぬ勝負は時の運、たんかいがやり先にて死するならば、此事を辨慶に傳へてたべと、打合さんとする所へ、最前の奉公人見て、たんかいを笑へば、たんかい腹を立、おのれ下郎なれ共悪言がにくい、相手にならうといへば、奉公人相手になり、さんざんにたんかいをたゝき伏せければ、法眼牛の介みな〳〵悦びあへば、法眼たんかいに向ひ、あのやうなる下郎に負けては、いまだ修行が足らぬ、隨分精を出しめされといへば、たんかいめんぼくなくあやまりました、先おいとま申ます、しかし牛の介殿には意趣がござる、明日しんけんで參ふと、暇申してかへれば、法眼かつらの前内へ入玉へば、牛の介も入んとするを、最前の奉公人、牛の介やらぬ、最前法眼どのより受取た虎の巻物を渡せ、其虎の巻に望かけてござる、身には主人が有、先牛の介と名乗るが合點がいかぬ、牛の介聞玉ひ、身は源の義經じや、渡すことはならぬと、互ひにせり合、しないにて打あひ、虎の巻を取て伏せ、身を何者と思ふぞ、義經公の家來伊勢の三郎義盛、虎の巻を奪ひ取んとつくり馬鹿となつて來

た、淺ましいかとしめつくれば、静聞ひ玉、伊勢三郎が顔は見しりてゐる、十八の年元服したが、そなたには前髪がある、をゝいかにも元服致したけれ共、是は付まへ髪じや、そちは何者じや、わしは静でござる、義盛聞、静めじやと、乳を見様子を聞顔を見合、互ひにきもをつぶし、扨我君はいつ奥州へ御立なされましたといへば、よしもり聞て、初寅の日もはや二十日餘りになる、先法眼もそなたを誠の義經様と思ふてゐる、したく〳〵を致し、明日立ませふといひ枕を見て、はる〳〵の道此枕は何でござる、静聞玉ひ、是は上るり御前のしやりかうべが内にござると、上るり御前の物語りをし、ころり〳〵とねぶるうちに、枕うごき出、則ち上るり御前の幽靈あらはれ、執念き顔にて覗へ玉へば、静申は、扨はこなたは上るり御前殿か、朝夕法華經かきたむけますに、ひきやうにござるぞや、あら怨しやな、その方ゆへ義經様には見捨られ、今奥州へ下り添ふとな、いかではなちやるべきと、をつけ給ふを伊勢の三郎諸共、法華經を讀みゐる所へ、小柴は鎗引き提げ來り、牛の介と思ひ、上るりの幽靈をつきとめければ、しやれかうべたればあきれたる所

を、義盛取て伏ける所へ、法眼みな〳〵かけ付見れば小柴なれば、鬼・怒つてをのれは身が手かけの小柴ではないか、小柴申は此上は有様に申ませふ、たんかいに頼まれ、虎の卷を盜みに參りましたさいへば、鬼一手討にせんさするを、義盛取付、申てもかつらの前樣のお袋さ申、おなげきもいかゞなれば、お助けなされさわびこさし、命を助ければ、小柴悅び、只今の命をお助なされましたはうおんに、ちうしん申こさがござります、たんかいが熊坂の長範さ僞り、今夜ようちに參りますさいふ所へ、たんかいは弟子大勢引具し大音聲、熊坂の長範、虎の卷に望みある故、是まで寄せ來りたり、切入れ者共さ切て入るを、義盛がけ出こりや、たんかい、おのれが企は小柴がみないふた、一人も餘さじさ切て出るを、押へだて女房達は、小太刀を拔いて渡りあい、侍共を切てすつれば、義盛はたんかいを討てすつる、所へ義經辨慶かけ來ら、辨慶法眼に向ひ、辨を今迄は牛若さ僞りおきました、誠の牛若はこなたでござるさ、みな〳〵對面し、是さ申も毘沙門天の御利生、鞍馬山へ參詣し、其後奧州へ下らんこうちつれ詣でたまひける

中

扨も佐藤忠信は義經の跡を慕ひ、都なれや東山四條河原中島へんに徘徊し、よもを詠めてゐたりける、然る所へ梅津宰相の娘少納言は、こしもさ少々召つれ玉ひ、祇園參りのかへるさに、吉備が店に腰をかけ、忠信さ顏を見合、じつさしたる目の內に、互ひに戀を含せて、さま〴〵戲れ玉ふ所へ、町の年寄かけ來り、町の衆を呼び大事が出來た、鎌倉より梶原殿が御上りなされ、めしうごを召つれ御出になるさいふ所へ、梶原平藏景時は忠信が妹まかきの前、娘小糸を乘物にのせ來り、乘物をかきすゆれば、妹眞眞梶原に向ひ、忠信が妹娘を死罪に御付らるゝこごは情ないこごじや、殊に兄忠信殿は、義經公の郎等にも、一騎當千の人、其首此樣に色か違ふては、はぢのうへの耻辱、是におしろいやもござる、兄樣の顏におしろいをさせ、幸ひ伽羅の油屋もござんす程に、繕ふて下さんせさ歎き給へば、梶原聞て、誠に齋藤別當實盛は、鬢髭を墨に染たるこさもあれば、苦しからすさ、おしろいをぬる所へ、信夫の小太郎駈出、小糸さ顏を見合

せ、こは小糸樣か、まがき殿かと取付歎き、つぎのぶ樣は八島合戰に討死なされ、忠信樣がさきをか、せ、私があとをかき、むれたか松の土中に籠ましたがといへば、まがき聞玉ひ、是はつぎのぶ樣の首ではない、忠信樣の首じやとの玉へば、宰相の娘少納言は驅出給ひ、何是は忠信樣の首じや、わしは忠信樣といひなづけの少納言でござんすと、首に取付歎き玉へば、梶原聞て、忠信が女房は清水阪のあんじゆならではないかと思へば、あんじゆは手かけで已れは本妻じやな、侍共しばれと、少納言しのぶの小太郎諸共に縛れば、少納言の玉ふは、たとひいひなづけなれ共、忠信殿と一所に死するは嬉いとの玉へば、まがき聞玉ひ、是につけてもあんじゆ殿はきこへぬ、是なる梶原があんじゆに心をかけ、忠信殿は殺したと、首を見せたれば、子まである中をふりすて、今は梶原と夫婦になつてござんすと語り出し、歎き玉へば、梶原怒つて侍共引立といふ所へ、八十ばかりの翁鳩の杖に縋り來りければ、梶原見てあら不思議や、ついに見ぬ尉じやがいづくより來り玉ふぞ、是はつぎのぶ忠信が親佐藤庄司でさふらふなり、娘や孫が生檎れしを助け

ん爲に參りたりと、梶原をたばかり、生檎をかこひ、縄を解き、身をまことの庄司じやと思ふか、義經公の御内なる佐藤忠信じや、をのれ逆櫓の意恨によつて義經公を讒言したな、主の敵のがさじと討てかゝれば、梶原は後をも見せず逃げにける、少納言に聞玉ひ、扨はお前は忠信樣か、わしはいひなづけの宰相が娘少納言でござんすと、夫婦の契約をし、是に付てもあんじゆめは、にくいやつじや、子まで有中をふりすて梶原と夫婦になりをつた、何とぞ思案もあるべきと、みな〳〵打連れ宰相の、舘へこそは入玉ふ、こゝに金賣吉次は、なにはの梅をになひ來れば、あんじゆはなにはの土賣となり來り、爰にて逢ひさま〴〵話をする所へ、宰相の御臺來り玉ひ、此屋敷の家來でもないが、どこの者じや、私は鞍馬の者でござるが、さる御所樣より賴まれまして、なにはの梅を取に行ました、私もなにはの土うりでござんすが、賴まれまして取に行ましてござんす、御臺聞玉ひ、それはどこへ行ぞ、梅津の宰相樣へ參ります、それは梅津の宰相の御臺じや、是が則やしきじや、われに賴むことがある、あの儀は、此屋敷のあくたやちはぶみの反故じ

や、大儀ながら此小判をやる程に、かつら川へ捨てくれと頼み、御宰は内へ入玉へば、梅持土賣悦び俵を持て行んとすれ共動ねば俵をあけて見れば、女の子なればきもをつぶし逃る所へ、少納言の妹小がうの前來り玉ひ、こなたは目がわるいになぜにこゝへはござつたぞ、お袋さまのおしやんすは、此俵の內へ入れば目がなをるとおしやんした故、はいりましてござんす、今俵の內で聞てゐますれば、桂川へ流せといはんすとなげき玉へば、梅持土賣も、おいたはしやと共に淚を流しける、小がうの玉ふは、をれがかゝ樣は心が邪慳にござんす、此ことは沙汰なしにして下さんせ、土賣の女中は、私もあのお人樣の樣な娘を持てゐます、おいとしやお目がわるふござりますか、目を見て進せませふと顏を見るもをつぶし、お前は佐藤忠信樣と、淸水坂のあんじゆ樣の中にできましたお子ではござりませぬか、其お子が此屋敷へはどうしてござりました、小がう聞玉ひ、忠信樣は此屋敷へござりまして、をれが姉樣と夫婦になつてござんす、それゆゑ此下も屋敷にござんす、あんじゆ聞て忠信樣は聞へぬと恐をいひ、娘に向ひ、こな樣は母にあひさうはござんせぬか、小いと聞玉ひ、かゝ樣にあひたう思ひまして、明暮泣てゐまして、此樣に目を泣きつぶしました、又父樣のおしやんすは、かゝ樣は畜生じや、子供がある中をふりすて梶原とめうとになつてゐさしやんすほどに、かゝ樣のこと思ひ出すなといひ付てござんすと、淚を流せば、あんじゆ淚共に、あんじゆが梶原と夫婦になつたには樣子がござる梶原がかしこい奴で、忠信が首じやとて見せました故、何とぞ敵を討んと思ひまし、梶原は大名なれば思ふやうにはなりませず、あんじゆはわざと夫婦になりました、忠信殿には聞へぬと怨みをいふ折ふし、ひとへ切の音すれば、あんじゆは小がうに向ひ、今のはたれがふきましてござんすぞ、小がう聞玉ひ、わしがあね樣がひとへきりが好きでござんす故、毎日忠信さまの吹いて聞さんす、女聞き、私もひとへきりがすきでござります、あの障子のわきで聞して下さんせ、成程聞しませふが其なりでは人が咎めませう程に、そこにわしが着る物がござんす、それを着てござんせ、こしもと共が咎めましたらば、今日參りましたこしらとじやと いふてござんせと、小督小糸は內へ入玉へ

ば、あんじゆ梅持は障子のわきに聞入ところに、障子をさつと明ければ、少納言に忠信に向ひやかましいに一へぎりを置さんせ、こしもと床をとれと烟燵にあたり寐入ば、忠信はあんじゆとはしらすねまより這出、こしもとが傍へ寄り顔を見合せ、驚き逃げて寐間へ入る所へ、少納言ゐんへ出玉ひ、そこにゐるは何人じや、あんじゆ申は、私は今日参りましたこしもとでござります、扨はそうか、あれにござるはおれが殿御じやが、いつもこちから詫言をすれ共、今日はあちらから詫言をさせねばならぬ、そちは碁は打たぬか、私も打ますと、少納言あんじゆ碁を打つところに、あら恐ろしやあんじゆの嫉妬の一念、蛇と顯はれ、少納言の首に喰ひ付けば、お痛〳〵との玉ふを聲に、忠信驚きあんじゆを取て椽より下へ投げ、あれ清水坂のあんじゆじや、おのれ憎くい奴の、今おのれが一念蛇となつて大事の奥にくひついた、覺があらふ、今にてはいひわけがおそひ、助ぬ奴なれども、口に思ひ控へて助ると、睨み付ねまの内へ入給へば、あんじゆは涙を流しゐる所へ、梶原が郎等犬間の源藏かけ來り、あんじゆを見付おのれは是にゐるか、身が主人の梶原殿の、ねくびを取んとする其太刀風に目を覺し、おのれを討んと思ふ所に、いづくともなく逃げうせた、此間方々を尋ねめぐる所に、よき所にてあふた、侍共討てすてよといふを、源藏が刀を取り、こりや女と思ひあなどるか、少しいひたい事がある暫く暇をくれい是忠信殿、あんじゆが心底は是にて晴れませふと、侍共をつちらさんとするを、忠信とんで出あんじゆをおし伏せける所を、侍共討んとするを、おし留め、こなた衆は武士ではない、御家來が危く見へます故かけ出留めましてござる、身は梅津宰相が家來でござるが、此女が見へたらば討てすてよと主人が申付てござる、只今討てすてますと、あんじゆを殺す眞似をして、ねまへおし込み只今討てすてました、源藏見ておゝ出來したり、主人が申は身に首取てかへれと申付ました、首を取らねば皈らぬといふうち、障子の内にて、かゝ樣そこにござるかと歎く聲に、源藏見咎め、今のは何者でござるとぎせいすれば、忠信氣の毒がり、たばこきせるによそへ、先此きせるが侍の道にては、智仁勇の道と申、夫婦の中にてはが

ん首が夫、股口が以前の女房、らうが今の女房、此らうが挨拶にて、父ではれまい物でもござらぬと、色あんじゆに余所ながら物語りし、源藏に向ひ、あの首は私に下されませい、身がてがらにして主人に見せましたい、其かはりには忠信が行衞を申させふといふ所へ、梶原侍引具し來り、何とあんじゆが行衞は知れたか、源藏承り、あの者があんじゆを討てござる、忠信が行衞はしれました、梶原扨はうろたへ者が、忠信はあいつじや、侍共討て取れと討てかゝりければ、忠信は碁盤にて戰ふて、梶原が上にどんと打付て、侍共を追駈け行けば、梶原は碁盤をかたげ床几にし、少納言あんじゆ小いさを生擒ゐる所へ、金賣吉次は忠信が妹、まがきに繩をかけ來り、お手下の百姓でござりますが、此女は忠信が妹でござるが、やぎりを越へ逃げますを生擒參りました、まだ注進がござりますは、義經の郎等に、武藏龜井伊勢駿河常陸坊などゝいふあぶれづはもの只今寄せかけます、御油斷をなされますなと心をゆるさせ、生擒を圍ひ棒ひつさげ、そこな梶原のげぢ〳〵め、おれを誠の百姓じやと思ふか、三條の金賣吉次のぶたか、人々を助ん爲の智略じやと討てかゝり、追かけ行ば、忠信は太刀拔き、梶原は吉次が討であらふ、侍共のがさじと、くもでかくなは十文字、さん〳〵に切ちらし、息をつぐ所へ、吉次信たか走せ皈り、梶原に追散した、義經公も辨慶も、諸共身がたちにござる、一所に奥州へ御供をなされと、皆々と打連れ信たかの、宿所へ急ぎたまひける

下

扨も三條吉次のぶたかゞ屋敷には、義經公奥州の御門出とて、春のはじめの御悅び、誠にめでたい女まんざいとり〳〵に、御祝儀を祝ひ奉る、扨義經は夫よりも奥州さして下り玉ひける、源氏の御代の御繁昌、幾年重ねし姫小松めでたかりけるためしなり。

去方より生嶋新五郎殿へ進上致し候

生々平御藝身振　狂歌
嶋蝨見飛上浮レ心　いくさしもくる人お
新春忠信大々當　ほきしばゐにて

五萬年都置度人　まんねんまでもさまざまのげい

二條通寺町西へ入町

正本屋喜右衞門新板

御曹司初寅詣終

紅葉橋呼子鳥　當世名護屋大踊　座中不殘

勇十郎掛踊　傾情一張弓　ゑざうしや
威五郎雷屯

大あたり大狂言　五ばんつゞき

第一　元服曾我　丹前の七つ道具たてかけたゑぼし髪
第二　諫言曾我　玉祭の揚灯籠ゆりかけた八もん字
第三　勘當曾我　祭禮の大屋躰らみかけた草ずり引
第四　夜討曾我　仙術の木葉絹ぬきかけた袈裟衣
第五　記念曾我　世繼の御教書まちかけたあら人神

五ばんつゞき役人付

一北でうの四郎時正　はやま岡ゑもん
一はこわう丸　市川團十郎
一おに王新左衞門　市川長十郎
一だん三郎　さる若山左衞門
一はこねべつたう　みやこ彌五郎
一ごぢうくわいざん　市川又三郎
一山中うねめ　市川藏五郎
一みしまかずへ　四の宮團之丞
一畔川かづま　生島小てう
一北てうみだひ　袖さきかをる
一いもこまんじゆ　はやま門之丞
一かめつる　もりをか入江
一をつた　竹中喜世之介
一小野川こうたう　山科十郎兵衞
一もなか　筒井歌之介
一きせ川　もり岡なには
一そめ川　中村源のすけ
一二の宮ごけ　水木竹十郎
一二のみや次郎　袖をか小太郎
一くどう犬坊丸　早川傳五郎
一小しやう數馬　くめ川主膳
一をなじく　もり岡虎の介
一けわひ坂少將　中村源太郎
一かぶろきくや　袖をか春の丞
一やりてすぎ　てき嶋孫三郎
一またのゝ五郎かげ久　村山平ゑ衞門
一くさうすけつね　四の宮源
一にたんの四郎　鈴木平き

一そがの十郎助成　生島新五郎
一子すけ若　山村ら若太夫
一大いそのとら　筒井吉十郎
一かぶろもじの　生島初三郎
一青物や徳兵衛　荒川藤左衛門
一けいせいかめぎく　四のみや平八
一同くらはし　もりをか入江
一そがのはゝ　小かん太郎次
一すまふぎやうじ　四のみや平介
一くどうさへもん　小川善五郎
一大とう内　中村傳八
一う大將よりとも　四の宮万次郎
一ぜんじばう　みをぎなには
一太刀取しのさき五郎　山中平十郎
一しんがいのあら四郎　ふじ田平藏
一いくよ　生しま新藏
一狂言作者　津打治兵衛
　樋口半右衞門
山むら長大夫座　千秋万歳
寶永戊子年七月吉祥日　叶

傾情一張弓　ゑほしかみ

第一

わだの原やそ嶋の浪しづかにて、枝をならさぬみよなれや、爰に相州ゑの島の辨才天北でうの時正こんりう有、いさめのぶがくぞおもしろき、是は扨置箱根には河津が二男箱王丸、くわんくはつ成形ちにて、やつこどもをあつめ、七つ道具をもたせ打あいねぢあい力わざ、げにすさまじきいきほひなり、か丶る所へはこねのこちうくわひさんはとう三郎を伴ひ來り、此ていを見ておどろきさん／″＼にしかり、とう三郎もそがの老母より使に來りしやうすをかたり、かねて出家をねち男にお成なされんとの事、御老母樣御聞なされ、それゆへにもしげんぞくなされなば、御かんどうとの御使に參つたと、さま／″＼といさむれ共、箱王聞入ず、某がげんぞくは父河津樣の仰なりといへば、その／＼けうさめおはてなされた河津殿か、何とて左樣の事を仰られうぞとあらそへば、河津殿に合せんと鬼王をよび出せば、おに王罷出箱王樣御げんぞくの事は兄十郎樣の仰なり、親なき時は兄を親とせよとあれば御同前、是見給へと十郎よりの文をさし出し、そのうへ先住別當さまへも、此段々を申上たれば御せういん有て後住樣へ、御狀つかはされしと取出せば人々をどろき、扨はさやうか、此上はか程望にまかせん、去ながら後日のとがめもいかゞなれば、何とぞ名有大名をもゑぼしをやとなし、げんぞくさせん、まづ／＼こなたへ／＼とおくをさしてぞ入にけり、時正のや形には七夕まつりとて、時正の妹まんじゆの前、こしもと召つれ歌を吟じ居給ふ所へ、北でうのみだいうてなの前出給ひ、只今のお歌の心はいかぶおもしろふござんす、成程あの心は水からがのみ込ました、歌の通にねがひをかなへてしんしませうとあれば、まんじゆははづかしげに、よいやうにとの給ふ所へ、かすいち來りさま／＼なぶりたわふれゐ給ふ所へ、その山かうとう手引主膳をつれ來り、よも山の物語かすいちとせり合、くび引をしこしもとつぼね立か丶り、こうたうをおくをさしてぞ引て入、跡にうてなの前まんじゆかすいち三人のこり、さあ人はない、主膳をよびやとよび出し、万じゆの前の

手を取て、むすぶ契をわりなければ、□□主膳むいむくむくわんの身として、おそれ有とじたいすれば、うてな聞給ひ、尤なりと時正のゑぼし装束取出し、是をそなたに□□□是をきれば、諸大夫の官に成、すればおそるゝ事はないと装束をきせ、たがいの契りをむすび、さあおくにまつてゐる□□□はやうおじやと、うてなまんじゆ入給へば、主膳かすいちさあしゆびはよい此装束さへとれば本望ぞと、かすいち目をひらき悦び歸らんとする所へ、うてなまんじゆ出給ひ、なぜおそいぞとかすいちを見て、そなたは目をあきやつたかと、をどろき給ふ所へ、時正出給ひ何共ふしんはれぬ、様子をまつすぐに申せとあれば、しからば申上んかすいちと申は僞り、誠は箱根の別當手引と申は二の宮の一郎、かやうにいたしまいる事よのぎにあらず、箱王がか様〳〵のしゆびと、一々殘らず語り何とぞ時正殿のゑぼし子にと願申度存れ共、御心底を憚り扱こそゑぼし装束を盗、母のふけうのそせうのたねにもと御名をかたり申べきため、かくのしあわせ何事も御めん下され候へと、一々語れば、扨は左樣か先箱王にたいめんせんとあれば、おつぎ迄相つめをりまするとよび出し、いかにも願のごとく時正がゑほしごとなすべし、去ながら當分はならぬ、其子細は此北條のいへは、辨天のかごなきものにかめうをゆづる事かなはぬ、定紋のみつうろこも辨天よりさづかりし所たるによつて、某が一子ゑまの小四郎七才になれ共、いまだかみやうをつがせぬ、そのはうも是より大願をおこし、さいわひくらの内には辨天よりさづかりし、みつうろこをくわんじやいたしをく、此内に入行法し辨天のかご有しるしを見せよ、其時かめうをゆづらんと皆打つれて入給ふ、扨時正はうてなまんじゆ箱王おに王どう三郎二の宮次郎を作ひ、御ざ舟をしつらいゑの島にさんけい有、ふなばたへうてなひそかに出、箱王をまねき、我はもとおこごがおば河津殿の妹ふせやといふもの成が、よりともに公るにんの時、いもせのかたらいをなし、みたい共成べき身が、北條のいもとあさ日の前にへだてられしむねんさに、さるによつてわざと時正のつまと成、何とぞ此うらみをはらさんと思へ共、中〳〵女の力にはかなはぬ、おことを頼何とぞ時正をころし、我恨をはらしてくれよとあれば、箱王さら〳〵聞いれず、ぶ

だうなりといけんすれば、人に大事をかたらせ、今さらならぬとはいわせじと、はこ王が手を取兩人ともすいちうにしづみ給ふ、此をとに人々をどろき出、おに王とう三郎かつぎあげんとつゞいてとびいれば、うづまく波まに大じやのかたち、箱王めがけをいめぐる、あなたこなたとかけまはりしが、ふしぎや大じやはうてなの前となり、ぜんざい〳〵我は辨才天女なり、箱王汝が心ざしせつ成をかんじ、今のふしぎをみせしなり、さいぜんおことがおばといゝしも、汝がこゝろを引みんため、時正をがいせよといゝしなり、みなこれおことが心ざしをみんため、此上は願のごとく時正のかめうをうけつぐべし、必うたがふことなかれとの給ふこへと諸共に、有つる夢さめて御ざ船とみへけるは、時正のやかたとなりほうざうの前に箱王はじやうゑをちやくしふしいたり、時正人々立出たがいにふしぎの夢がたり、此上はかめうをゆづりあたへ、けふより北條の介五郎時宗となのるべしと御盃をたびければ、をの〳〵いさみそれよりもわかれ〳〵になる

第二　八もん字

折ふしの哀はあれど、玉まつる秋こそ增れと夕まぐれ、くどう犬坊介友は、おゝぢ介清のうらぼん祭、鴫立澤へひやうさんせしが、こゝにけわい坂の少〳〵いとなまめきて是もはか參と打みへ、犬坊と出合いろいろたわぶれいる、にはかにかみなりしきりになれば、犬坊をどろき乘物の內にかくれ、少〳〵ははかのうちにかくれいる、かゝるところにそがの五郎時宗はちゝかわづが存生の比より、かみなりぎらいなればさて、べう所に來りいつも神なる時ははかをめぐりて力をそへ、けふもこゝに來りしが、餘りをびただしきに少〳〵をどろき、らんとうよりとびいづる、五郎取ておさへ、みれば女なり、何者なればわがちゝかわづがらんとうへ、女のみとして入たるぞ、なのれ〳〵といゝければ、少〳〵ききもあへず、あのらんたうは水からが父のはかなれば、はいつたがふしぎかといへば、彌心へぬ、扨は兄十郎の心をかよわす虎御前か、いへ虎ではござんせぬ、さては何者ぞ、わしはそがの五郎時宗樣のつま、けわい坂の少〳〵す

ればかわづ様は、水からがこと様、わしはお前の女房じやわいのふ、五郎おどろき、さら〳〵覺へぬといへば、どうよくな兼々箱根に御入の折から、折ふし□□の御袖を送り、色々と心をつくしました、その上十郎様とふかい中の虎様は、わしが姉上郎、兼々十郎様のおまへのこと仰られ、何とぞげんぞくして力共なりてくれよとの事たび〳〵きゝました故、ぎりとこいとでこなさんに、ほれましたと様々いへば、五郎よろこび、扨はそうかしからば夫ふぞ盃せんといふ所へ、犬坊てうしたづさへ出、聞た〳〵めでたい、こゝは介友しやくせんと取持、□□□□外の女を女房にもつとは替り、此少將はくるはでの御大夫、大分の金銀なふては持れぬ女房、見事其才覺が成か、成まひ□□色色と悪口すれば、五郎こらへ兼石搭引さげ打ころさんとかけ出る、犬坊もせきたう追取たがいにこふよと見へし時、またのゝ五郎へうさん□□此ていを見ておしとゝめ、五郎に向ひ、その方は見限りはてたるしんてい、かね〳〵きけば汝らは身には大切なる望有と聞つるが、此所にて犬坊殿と口論をしあいはてどの命が殘つて、本望はとぐるぞ、とさま〳〵と心にこめてかんげんし、まづその大太刀見ぐるしし、さしふるしたれ共、さしかへをゑさするぞと、一こしをおたへ是に一生に一度大切の用に立せんため、をくるぞとよそながらいひふくめ、犬坊をともないてこそ歸りけれ、五郎少將跡見をくり、有がたし〳〵さあ是よりけわい坂へ伴はんと、うかれ〳〵歸りたり、爰に大磯くるはの内には、ぼんのおどりさい中聞ゆあせ道をにたんの四郎くせつして歸るさに、向よりらうしんの侍引ぐし來り出合、やあ四郎殿か介さまかと互に物語をし、扨四郎にさま〴〵いけんをし、かさねてかやうの所へ御出御むやうといふ内に、くるはのおどりのこへにうかされ、おどり出せば、にたん見付互に大笑しわかれしが、介は侍共諸共はさみ箱よりおどりゆかた取出し、さあ〳〵そそひぞ〳〵といさみにいさんでくるはをさしてかけゆけば、にたん跡より見付、是はならぬをせ〳〵と跡につゞいて入にけり、爰に中の町靑物や德兵衞かたには、そがの十郎はしかをして、虎かたよりあづけをきじが、けふは虎御前ひま入有て、きせ川かめつるかんびやうに來りし時、少將が妹上郎かめぎく來りしを、十郎さま〴〵

たわぶれしを、きせ川かめづる腹を立せりあふ所へ、とら來り此ていを見てくぜつする、十郎は腹を立、今迄つとめをもせず、某に立たる心底をむになして、けふつとめに出る、ともしいしんていと腹を立れば、虎聞それはこなたのためで、けふはつとめに出る ためとは、さればけふの客は敵介經それゆへとめをき、何とぞ本望とげさせ申さんため、少將が方へもいひ遣はし五郎さまもよびにやりしといへば、扨はさうかとよろこびゐる所へ、徳兵衛來りけふの大じん介經がとらさまに おごりかけんと、けいこといちうといへば、さいわひ〳〵此方よりも、おごりにことよせ打とらんうれしゝめでたし、ちよの はじめの一 おごりををどり行こそいさぎよき、扨くるはには大おどり初り、介經十郎五郎其外のこらずおどりに出、介經を取ておさへて、ほうかむりをとれば、やうふ介信なり、人々おどろき何共がてんまいらぬといへば、介信泪をながし、兄弟が身にはふかい望有、眼前只今介經よとなのれば、とつておさへたる程の事を、此介信にかくした、如何樣にしてとうたり共、申まいとわざと介のぶと僞り只今樣子を見出した、まゝ敷中なればへだつるか、兄弟五つや六の比より、某がやうしとなしたは此願をとげさせんため、其上さい前よりあげやのていしゆと云は、其方と虎とが中の子、某が孫成をみんかんに下し、ぢい孫のなのりをさせぬ、うらめしき所存やと樣々かきくどき恨給へば、人々誤りまつたくへだつる心底にはあらね共、か樣の事御さうだん後日に御なんぎかけ奉らんももつたいなし、ひそかに兄弟心を合せし計なり、悴の事は本望達して後くせ者の子なりとて、誅せられん事不便なれば、みんかんに下、忍ばせをき、なき跡に出家をもとげさせん爲と泪をながし、樣〳〵と申ければ 介信とくしん有、扨さいぜんの青物やをよべと近くよびよせ、取ておさへきやつは兄弟も見わすれつらん、其方達が兄京の小二郎なり、介經に賴れ今日兄弟を討とらんと、計よしつたへ聞ゆへ、某も來りたり、それあますなと切むすべば、小二郎はにげうせたり、よし〳〵かさねて本望はとぐべきものぞ、こなたへとみな〳〵うちつれかへらるゝ

草ずり引　第二

若宮八幡の御神事近々にて參詣をびたゝし、十郎介成はすし見世を出したる海道に、女順禮二人くわんじんするを色々たわむれ、一の鳥ゐ迄すしをやらねばならぬと入にけり、所へ介經大藤内を伴ひ、順禮を見てたわふれゐる所へ、十郎歸りお盃をさゝはぎすしを出し取持けるに、介經十郎を見出し、左様に淺ましいみんかにくだつたり、不便やと盃をしたみしたいのしたみをのませ、しんけんをぬきすし一疋切先にさし肴せんといへば、十郎おめずくいければ、介經をそろしき心底とねめ付、扨二人の女順禮を近付、一人は十郎が妹二の宮のごけ、今一人は二の宮の二郎女の姿となつて來りたるはいぶかしい□□いへば、十郎聞、二の宮太郎世をはやうさり申すかなしみに、順禮を思ひ立し所に、二郎も女姿となり、女づれにて順禮いたさん、□□まつたく外に所存なしといふ内に、すしのおもせにしたる虎が石、大藤内介經兩人が上にだうとをけば、二人はあわて□□□侍共も立かかりのけんとすれ共、此石男をゑらび上らねば人々いかりをなし、十郎を討とらんとひしめくをおつちらし、扨介經に向□□□の親の敵うどんげの花待えたる心地、さあ二郎さう〳〵五郎をよべといそがせる時、二郎立歸り五郎様は北條一けにさそはれ□□御參詣と申せば、十郎泪をながし、扨も〳〵我々はよく〳〵敵にゑんなきものかな、今討も安けれ共、さぞや五郎がほいなくおもわん、重て本ゐを達せんと問ながらに立歸る、哀なりけるふぜいなり、介經見送りかの石を取てなげのくれば、藤内驚きさほどの御きれうならばなど此無念なていは何事ぞといへば、藤内さにあらず誠にきやつら兄弟が心ざし、たうどてんぢく我朝にもためしすくなき所存、うたばうたるべき心底成にけふも五郎がゐ合ぬとて、手ににぎつたる敵をたすくる心ざしあつぱれぶしじや、重てめぐり合本望をとげさすべし、それ迄はさらばといひ捨歸りしはげにいさましきふぜいなり、若宮のさい禮山鉾をびたゝ敷引渡せ、爰に大礒より出たるわだ酒盛のやたい、そがのざしきの前にて所望しければ、虎は十郎が形ちと成、少將は五郎が姿、五郎は朝いなと成草ずり引迄しかたをなし、一々に語りしは面白かりける次第なり、其時そがの母立出、盃せんと虎を見しり十郎とのわけをも語り、盃をすれば、少將もお

盃をとねがふ時、母大にふけうし、をのれゆへにこそ箱王がげんぞくし、かんだうをしたるなれ、わが子の敵に何の盃をとかわらけ打わり、少將がいせうをはぎ、さん〳〵にてうちやくし給へば、五郎物かげよりさしのぞき、泪をながすていを見て、あれは何ものぞとあれば、少將がけらいなりといへば、こりや〳〵爰へこいとよび、箱王が母の命をそむきし事、父河津殿のうたれ給ひし樣子、物語あれば五郎たまりかね、母じや人かんだうをゆるして下され、かたきうたねばならぬといふ、母聞其方は何ものじや、はこ王でござる故、箱王と見たによつてさいぜんのごとくいふたいよ〳〵七年迄のかんだうと有時、十郎立出そせうをすれ共かなはず、いけてをけば物思ひ、手打にせんといへば、母いよ〳〵腹を立、それは母にあてゝの事成か、とかく水からが長いきこそうらめし、じがいをせんとさはぎ給ふを、人々おしとめ、おくに伴ひ入にけり、あとより又やたい引出しをくの丶みかり、すまふまい所望〳〵といひければ、河津またのがすまふまひすまふはまたのがかちたりと、たからかにこそよばわつたり、そのとき母はかけ出て、てんかにかくれなき河づどの丶かちたるすまふを、またのがかちたるとはきつくわいやと、なぎなたふりまはし、一人もとをさじときしよくある所へ、またのははせうゆびいだし、もつともすまふはまたのがまけたれども、とうじ御ぜんをつとむるまたの、まけたるとは申がたく、かれらがれうけんさうざのさくいをもつて、かくは申つらめ、それはそれ大せつの御神事をさまたげ申ぎつくわいやと、すけなりをさん〳〵にてうちやくし、はかま引さきふみつけ〳〵、てうちやくすれば、母はいよ〳〵はがみをなし、なみだをながし給ふ所へ、五郎かけつけ十郎をとつてひつたて、またのをうたんとはがみをなすを、十郎いさめておしとゞむ、またの見て、やいうつけものども、なんぢらはかね〴〵くどうすけつねをも、をやのかたきといひ、また此またのをかたきとねらふよし、さやうにうろたへたる心体にては、なか〳〵本いはとげられまい、なんぢらがかたきといふは、まことは此またの丶五郎なりとすまふのいしゆにてあかざはやまにて、とをやにていとめしものがたりしければ、十郎よろこび、

さあねんらいのかたきこそしれたれ、うてやうて五郎とたちあがりしが、やれまてそのはうは、はゝのふきやうのあればうつてもうつたにたゝぬ、ゑゝくちをしやといひければ、母はきゝもあえず、たゞ今のものがたりをきいて、河づのうらみさいぜん十郎のてうちやくにあひ給ふ、いきどをり、かれこれもつて許されず、かんどうもふきやうもゆるすぞ、きやうだいよつてまたのをうち、母が心をやすめてくれよ、はこねごんげんもしやういん、かんだうはゆるしたとあればまたのゝ十郎五郎かほゝ見合有がたふ、ぞんじますと母に向ひ、御かんきをゆるされんため、かやうかやうとかたり、さあ〳〵めでたし〳〵とをの〳〵いさみてかへらるゝ

けさ衣　第四

さるほどによりとも、公ふじのみかりの御ゆふあり、しかる所に、いくさしへたるいのしゝ一疋かけ出し、せこをあらしちかづく者もなき所に、にたんの四郎かけ出をふつまくりつ、いざみければさしものしゝもたまりかね、がんくつ口口口いりしがほどなくひつかへし、いでけるをにたんなんなくつきとめければ、ほうでうすけつねしんがいかけつけ、口口お手柄お手柄とほめわたるときにときまさ、此所はいかなる所ぞととひ給へば、所のものうけ給わり、これはいにしえよりふじの人あなと申ならわし候といへば、此うちをぎんみせよ、さうじていのしゝといふものかけゆく所をひつかへしたるためしなし、ひつぢやうこのうちになにものぞあるにきはまつたと、せこをいれてさがしければ、はくはつたるらうじん、このはごろもをちやくしていづる、さてこそとなにものなるぞといひければ、われはこれ九郎よしつねのかしんひたちばうよとかきつけて見せければ、すけつね見てよりともの御ぜんへひかんといひければ、ときまさおしとゞめ、なんぢまことのひたちばうならず、まなこのひかりしゆせきまで、いまださしわかなるにまぎれなし、いかに〳〵とせめつけ給へば、まことはわれは河津がばつしぜんじ坊なりと、はくはつ衣をぬぎすてかたちをあらわせば、さてこそしからばなにとてこれにしのびしぞ、さればきみはおほぢいそうがかたきなれば、このみかりをさいわひにね

らいより、うちたてまつらんしよぞんなりといひけれども、時正さらに聞入ず、さやうに申てはたすけられぬ、そのほうはほかにのぞみありての事と、すけつねがことをよそになしてといけれども、ぜんじばう心にありのまゝに申なば、兄十郎五郎がねんらいねらふすけつねをうたんずるさまたげにならんはひつぢやう、よしわれはこのところにてくびうたれんと一すじに思ひきり、きみをねらいたてまつるよし申ければ、ぜひなくそのよし申上る、よりともきこしめし、しからばときまさにあづくるなり、つみはかさねて申つけんと御かりやにこそいりたまふ、さても十郎五郎おにわうとう三郎とらせう〳〵は、かりやにて、さま〳〵にたわふれて、とかく母のなげきのつよければ、かたきはうたじとおもひさだめしとて、酒のみあそびてゐる所へ、またの丶五郎きたり、このていを見てさん〴〵にしかり、かんげんすれば、ぜひもない、このうへはなにをかつゝむべきとて、かきをきをとりいだし、こよひかぎりとかくのごとく、おもひさだめて候へども、おにわうきやうだいとらせう〳〵もしやかくと申なば、よもやいきてかへらんとはまうすまじきとおもひつゝわざとかくのしあはせといへば、またのきいてをごろき、おにわうきやうだいとら少將もぜひにをいて御ともといへば、そのこゝろざしと見しゆへに、いまゝではかくした、ぜひふるさとへかへりて、はゝにかう〳〵をしてくれよ、もし此事をそむかば、おにわうきやうだいは七生までのかんだうとらせう〳〵は、らいせのたいめんかなふまじと、いかりつないつくどきければ、人〳〵ちからなく、わかれ〳〵になりにけり、さてこそ五郎はかりやにしのびいりし所に、またの出あひ、さいごのいとまごひをし、かめぎくを手びきとし、御所中にみだれいり、すけつねをうちをほせければ、またのほうぢやうたち出て、このうへははなはをかゝれと兩人をいましめてかりやをさしてぞ引にける

あら人神　第五

さるほどにとら少將は、すけわかをともなひふるさとになみだながらにたちかへり、はゝにこのよしいひければ、はゝはなみだにふししづみ、とも口さへんとなげかるる、さて五郎ときむねは、ちうせられしが

たましいのこつて、はこねにきたり、べつたうにたいめんじけるを、よりさもきゝおよびたまひて、すなはちすけわかをめしいだされ、よつぎさなしほんりやうをあたへ、五郎十郎を兄弟のあら人神さいわゝせ給ふ、げに有がたやみちのみちたる源氏の御よ、せんしうばんぜいめでたくさもなかく申ばかりはなかりけり

右狂言者木挽町山村長太夫座五番つゞき大狂言惣子共惣立役銘々所作無殘所相改今板行者也

寶永五年戊子七月吉日　木挽町七丁目

ゑざうしや三左衛門板元

北條巳歳辨天
文學武運不動 傾城三鱗形 五番續

第一 はこ入のくわんじよ おさめく よろこびありや 今日力足蹈初吉
第二 柳さくらのあれいもさ さいわいぬれに まかせたり 邪婬寛濶色初吉
第三 大もんぐちの松かざり 所ちよまで なわしませ 艶郭御敵打初吉
第四 すめばむぐらも きやらのやど われらも せんしうさむらはふ 生贄酒壺呑初吉
第五 源氏かどでのたり なれば ひさゝしまをふ まんざいらく 出生寶船乘初吉

五番つゞき役人の次第

一まぶち平馬の助 市川又三郎
一しばた藤ぞう にし村三郎四郎
一根ぶ川三ごう しのづか新平次
一あか澤彌五郎 かまだ瀧右衛門
一まんげつのまへ まつしまていか
一あさひ御ぜん 津川半太夫
一源のよりとも はまざき磯五郎
一土肥彌太郎 いくしま初太郎
一たしろくわんじや 四のみや小八郎
一つちや三郎 あまつうこん
一藤九郎もり長 そめ川七郎兵衛
一大庭の平太 小川善五郎
一女郎きんざん 竹中喜世之助
一かぶろ左京 たきい松五郎
一さなだ與市 四のみや平八
一またの丶五郎 こみ澤半三郎
一北條のよしとき 中村七三郎
一同　ときまさ 四のみや源八
一けさごぜん はや川はつせ
一かほる姫 いくしま大吉
一行かい なんばく孫太郎
一もりとを 中村傳九郎
一あいきやう三郎 中川半三郎
一源のわたる すゞき平左衛門
一ちばのすけ の川うげん太

一かづさの介　　四の宮小源太
一ころも川　　山本勘兵衞
一長沼しん　　はや川傳五郎
一かしわや甚六　　あきた彦四郎
一女郎や彌惣右衞門　　くわばら長五右衞門
一女郎よし川　　たま川小もんご
一同かよいぢ　　まつほくめの助
一あげや淸六　　中村五郎四郎
一せうじもり時　　市川勝平次
一かぢはら源太　　ふじた所三郎
一よのすけ　　ふじもとなにわ
一うしわか丸　　山村長太夫

元祿十四辛巳曆正月大吉祥日
千秋万歲樂　　叶

傾城三鱗形

第一ばんめ

爰に北條の四郎時まさ侍ひ、中間どもに馬をひかせ出、さておの〳〵へ申ス、先以て主人北條殿は關八州に肩をならぶる大名もなく、殊に御惣領には小四郎義時さまと申て文武の道にかなひ、御きりやうゆへしき御かた、次はあさひの前まんげつの前といひ、これまた世にたぐひなき御形なれば、皆人心をかけぬものもなし、しかるにあさひさまには、御父時政公武運長久の爲とあつて、神馬を鶴ヶ岡八幡宮へひかせらるゝ、すなはち鶴ヶ岡は當年の惠方なるによつて、かくの通り、且又御妹御まんげつ樣には、御父上御長命のためとあつて巳待のなさるゝ、これもことしは巳の年にあたる故なり、そう〳〵御兩人の方には此神馬をひかせ、八まんぐうへ參り給へといひわたし入ル、さて妹御まんげつの御方には、巳まちをして遊び給ふ所へ、姉樣あさひ御ぜんはきたらせ給ひ、さきほどは巳待をし給ふとあつて、人をたもつたゆゑに、

これまではきました、とあれば妹もよろこび給ひ、さて今宵おまへを呼びにやりましたは、ちとお話し申たい事がござんしてのこと、その仔細は夕べ不思議の夢を見ました、所はいづくともしれず、高き山の上に參ると思へば虛空より月日がおち、私が兩の袂へ入ルと思へばつい夢がさめました、とても二ッの月日がおつることは合點のゆかぬことと思ひ、判じてもらひませうと思ひ、さてこそ御出を願ひました、とあればあさひつく〴〵聞給ひ、これはなにさまよろしからぬ夢のやうに思へば、とかく此夢は姉が買ひませうとあれば、いや〳〵それは迷惑、御大切な姉さまへ惡い夢をやりますことは氣の毒なとあれば、いやいやそうではない、なんでもそれほどのあたいをやりて、夢を賣買すれば、その賣る人にも又買かふ人にも、なんの障りがなければ、此夢はとかくおれが買ひませう、その代りには常にそちが望みのからの鏡をやりませう、とあれば妹も大きに悅び給ひ、しからばさやうにいたし申さん、まづ〳〵こなたへ御入り、とみな〳〵つれだち入り給ふ所へ、兵衛のすけ賴朝は伊豆の國に流され、伊東がたちにおわせしより、仔

細あつて又北條方へうつり給ひ、をり〳〵あさひ御ぜんを見染め、なにとぞ忍び入り、思ひのほどをも語らんと、土肥土屋たじろさて藤九郎盛長をはじめ、鳥さしの体にもてなし、此所へ來り給ひ、とやかくうかがひ給ふ折ふし、あさひ御ぜんも出給ひ、いろ〳〵濡れありて、後には互ひに夫婦の契約をなし給ふ、時にまんげつ姉君に向ひ、今更頼朝さまと姉さまの夫婦におなりなさるゝは、わしが見ました夢を買せ給ふゆへなり、とみな〳〵悅び給ふ所へ、大庭の平太御入りといへば、盛長思案して、頼朝あさひその外、人人をうちへ入れ、さて大庭に對面して長話しをしかけ、うちへとをさぬやうにすれば平太腹を立て、それがし此所へ來るは、あさひのまへが方へ忍びものあると聞しゆへ詮議のためきたる、盛長聞て、してこなたがなぜ忍びものを御詮議、といへば、あのあさひはそれがしが、北條にもらひ置きたれば、それゆへにかくの通り、といへば盛長おさへ、此方に兵衛のすけといふ夫があれば罷りなるまい、と詰合ば大庭腹を立て、それ討取れ、といへば頼朝をはじめ皆々立出さんざんに切り結ぶ、大庭かなはず逃げ行くを、盛長切り

伏すると思へば、有し館の景色忽ち變り、江の島の岩穴のていとなる、時にあさひ御前は辨財天へ參詣あり、はや下向道になり、つぼねをはじめ乘物をかゝせきたれば、あさひ出あひ、やれ〳〵不思議なる夢を見たる、と夢の仔細を語り給へば、つぼね聞いて、いよいよやがての内に頼朝さまと、夫婦におなりなされませう瑞相おめでたや、と悅び館へかへり給ふ所へ、爰に大磯の女郎きんざん、これも江の島へ忍びて參り、岩穴へ籠る体にて入ル所へ、佐那田の與市は頼朝の願書を箱に入れ、千歲の体にて出れば、北條の小四郎義時は翁の体にて出、股野の五郎は三番叟の形にて、おの〳〵辨天へ參詣し、さて與市義時は時の祝儀いわゐ、みな〳〵岩穴へ入ル、股野は三番叟を蹈み、同じく穴の內へ入らんとする時、きんざんは下向して皈るに互ひにあひ、路をふさぎ、いろ〳〵ぬれをする所へ佐那田、義時立出、なぜに股野は來りあはぬ、といふうちにきんざん義時を見付け、さま〳〵怨をいへば、義時氣の毒がり、いろ〳〵いひ紛らかせども聞入れず、此上は屋敷へ皈りいひわけをせん、と皈らんとするを股野押止め、あのきんざんにはおれが惚

れた、それがしにくれよといふ、いやかなふまじ、とせりあひ既に切り結ぶ、時にかのきんざん氣色を變へ、われは此島の辨財天なり、義時弓矢とつてくんしに私なし、いよ〳〵われを念ずるに於ては、北條の家九代相守るべし、又わがかへる跡に三枚の鱗有べし、それをとつて旗の紋になすべし、いよ〳〵賴朝にかしづき、旗を揚げ火急に平氏をほろぼすべし、その外股野大庭の舊行末仇をなすとも、わがゝげ身にそひ其の難を防ぐべし、まことの姿これ見よ、と二十尋の大蛇となり、股野をめつけかゝり給へば、景久恐れて、只何事も許させ給へ、とふるひわなゝくうちに、大蛇はもとの女となり、三ッ鱗を義時に與へ失せ給へば、義時有がたしと頂戴し、悅び館へ皈りける、爰に親時政は賴朝を聟にとり、やがて義兵を擧げんと悅びの酒宴をなす所へ、大庭股野きたり、まさしく時政は賴朝を聟にとり、平氏をほろぼす謀反人なり、といへば時政聞いて、それに證據あるや、證據はあさひがすけ殿の子を懷胎したる、といへばいろ〳〵陳ずれども今は早、腹を割いて詮議せん、といへば時政も是非なく今はゝや、あさひを討てすてん、といふ所へ、小四郎義時立出なに事といへば、かやう〳〵の次第といふ、義時思案して、ゑい此上はせひもない、さてもすけ殿の身の上大切なれば、此義を申さねば咎もなき賴朝公を罪に落す、即ちあさひが懷胎は、それがしと密通致してのこと、速に腹切らんといへば、時政聞いて、さては賴朝の身替りに咎を悴が蒙るとは思ひながら、知らぬ体にて、さては己れは妹と密通して懷胎とは畜生の仕業、斬つてすつるも刀汚し、七生までの勘當、此上は都へ登り、清盛へも時政があやまりなき事を申しひらかん、とすけ殿をかばひ義時を勘當して、大庭股野をたばかり返す、北條が心のうち賴もしかりける次第なり。

第二ばんめ

きよ水の地しゆの櫻の花盛り、老若貴賤參詣する、爰に北條の時政は都へのぼり、是も清水へ參り給ふ、尤も都におわします衣川といふは時政の妹なりしが、過し頃夫にわかれ、二人の娘を寵愛し、うき年月をおくり給ふ、姉は袈裟御前、妹はかほる姫といひ、月にもたとへ花にひとしき姿なるが、是も清水へ參詣あ

る所へ、遠藤武者盛遠、並びにあいきやうの三郎は、參詣する折柄、けさ御前かほる姫を見て、盛遠は妹のかほるにむたいの戀慕をしかけ、さん〴〵言葉をいひ募る所へ、源渡は妹かほると、夫婦の契約なれば、見へがくれに是も清水へ參りしが、此体を見て盛遠をさん〴〵惡口すれば、今は是までと互ひに拔きあはんとする所へ、時政清水の舞臺より見つけ、やれまてよといふて兩人を押止め、さて盛遠をさん〴〵に叱りふせ、さて渡殿、あの通りのたわけやつなれば、万事は身に免じて堪忍をしたまへ、やあそれなるは袈裟御前、次なるは妹かほる姫、殊の外成人いたした、ご悅び給へば袈裟御前も妹も、これはひさ〳〵にて對面をいたしました、母さまにもお前が都へお上りなされました樣子をお聞なされ、早うお目にかゝりたいと朝夕おほせられます、同じくは是より、都へお越しなされませい、とあれば、いかにもさやうに致さう、聞ば妹かほるとは、是なる渡どのと婚禮致したとある、なるほど夫婦中はよいかとあれば、姉聞給ひ、それは〳〵中のよきことどうも申されぬ、いやこれにつけても私とお前のお惣領義時さまとはいひなづけばかり、未だお目にかゝりましたことも、ござんせぬ、渡さまと妹が中のよいを見ましても、早う義時さまと夫婦になりたう御ざんすとあれば、義政聞たまひ、なるほど其方と忰義時とは夫婦の契約なしおいた、是につけても義時めは不屆やつ、しかしいはねばすまぬこと、義時は現在の血を分けた妹あさひと密通してしかも子まである、せうじんの畜生じやと存じ勘當したとあれば、袈裟ごせん驚き、義時樣に限りさやうの不義はなされまい、推量するにあさひ殿がわるい、此上はあさひどのに逢て怨をいはん、といへば時政大きに叱り、その畜生めらになんの怨をいふ事があらず、思ひきれとあれ共、中々思ひきられぬ、と慕ひ歎くぞあはれなる、時に盛遠立寄り、やれ〳〵是は笑止なる事かな、此上は渡殿こなたと相談がある、幸ひ義時を勘當とあれば、姉御はやもめじやないか、然らば其方が姉を女房に持ち、妹かほるを身にくれ給へといへば、いよ〳〵たわけをつくす、と大きに怒れば時政おし止め、やい盛遠是ほどの歎きの上に、時もこそあれ、夫程の辨へもなきうつけもの、さあ皈

るまいか、と叱り給へば、今は盛遠怒をなし、此うへは時政ともいへのうとうを斬割んと、飛びかゝるを渡まん中へ押入り、暫くまて、此場を立退き、重ねて事のいはれまいものじやない、よし夫程の心底ならばかほるは勿論、身が命なり共やらんほどに、先づ此所は穏便にして給れとあれば、おう〳〵その儀ならばかほるは其方に預けた、いかにも預つた、と互ひに怒りをおさへ、館々へ皈りける、さればにや盛遠はかほる姫を戀わび、今は戀の病に伏し沈む所へ、梅のせきだいに枕を添へ、衣川の館より使來れば、あいきやうの三郎出あひ、使のやうすを問へば、かね〳〵盛遠様かほる殿の事を戀慕はせ給ふ、その執心重き病となり、かほる姫は夕べ相果ましてござる最期のぢぶんには、せめてのかたみなれば此梅と枕を盛遠様の方へ遣すやうにと申し置きましたにより、扨こそ持參致しました、といへばあいきやうの三郎驚き、盛遠殿もかほるゆへに命も絶々に見え給へば、是は氣の毒なることかな、此よしあからさまにいはふかいふまいか、と思案する内に盛遠狂亂ごゝろにて立出、さてはかほる姫は死たるや、あら戀しや、と傍の枕を取持ちいろ〳〵現なき事をいひ、既に絶入る体なれば、人々慌てゝそれ水よ薬などゝ、みな〳〵騒ぎ奥へ入る所に、盛遠やう〳〵心を取直し、忙然として居る所へ、かの梅のせきだいよりかほるが姿あらはれて、私はこなたの思ひゆへに相果ました、今より執心を思ひ止つて下されと、此所は上るりにていろ〳〵思ひ切らすることをいへば、盛遠いよ〳〵あこがれ、たとへ死たりとも放ちはやらじと、取つかんとするを振放ち、見えつかくれつする内に、かほるがにせ幽靈を見付け、さては某をたばかることと腹立やと、取て伏せる所へ、母衣川も出あひ、是にはだん〳〵様子があれば、先づ〳〵心を靜めて仔細を聞けとあれば、さあ仔細はどうじやとつき放せば、その時母は、そちがかほるに戀慕のこといふても、渡といふ夫があれば、邪のうき名が立つ、甥なり姨なりふびんに思ひ、とかく此戀慕を思ひ切せんと思ふて、最前のやうに計ふた、此上は聞わけて思ひ切てくれよ、と泣つくどいつ意見あれば盛遠聞て、然らば今霄一夜ばかり、心に從せ給へ、といへば姨大きに腹を立、前代未聞の大惡人、それはならぬと、かほるを連れて皈り給ふを、盛遠おし

止め、叶はぬならば母を殺す、と刀を抜いて押しあつればかほる迷惑して、その儀ならば母様を助け給へ、なるほど心に從ひませう、とやう〳〵と心を宥め、母をば館へかへし、その身はあとに殘り、いろ〳〵盛遠とぬれをして、此上は夫渡殿を殺し給へ、幸ひ明日は禁裏の御番なれば髮を洗はせ、其上にて酒を強ひ寐させ申さん、洗髮を證據に斬り給へ、といへば盛遠悅び、契約して別れ〳〵になりにけり、その後渡の館には、姉袈裟御前を振舞によび、いろ〳〵酒宴する內に、かほるが袖より書置が落ちしを、姉袈裟御前拾ひ給ひ、かほる渡の目を忍びて、書置をつく〴〵見て大きに膽を潰すてい、されども心に思案して、まづ〳〵夫婦のものを奧の一間へ寐させ、その身ひとり殘りいて、さても〳〵盛遠は不義ものかな、此書置を見れば今霄かほるは夫の身替に立ち、相果るとの書置なり、さりとては貞女かな、しかし其方は殺すまい、おれは義時殿に別れてあるかいない獨身なれば、妹の身に替て盛遠に討れん、と思ひ定めて髮を洗ひ、根よりふつゝと押切り、盛遠が忍び來るを待ち給へば、案の如く盛遠忍び入て、洗ひ髮を證據に、袈裟御前を刺し通し、立退んとする所へ、火の廻りの番のもの提灯ともし立出、此よし見付ける內に、渡夫婦衣川もみなみな驚き立出、やれ狼籍ものよと詮議する內に、盛遠は渡を殺したると思ひ、館へ立入れば渡出あひ、是は盛遠かといへば、盛遠驚き、其方は討れたると聞たるが息才なるか、といへば渡此言葉に心をつけ、まづ盛遠を返すな、さて女房かほる、此儀は其方がしだいでかなはぬことまつすぐにいへといへば、成程是には樣子が御ざんす、と盛遠が不義の段々をいひ、さてこなたの身に替り相果んと思ひ、書置までを致しました、とやがて書置を尋ぬれども無ければ、是は合點のゆかぬこと、と難儀する內に、袈裟御前は息の下より、書置のないは道理、その書置はおれが拾ひし故、とかくおれが身に替らんと思ひ此仕合なり、とても世になき我なれば、相果ても苦しからず、尤も盛遠殿をも助け、願はくは出家となし、我跡を弔ひたび給へ、とついに空しくなり給へば、渡をはじめみな〳〵淚にむせびける、時に盛遠今は早これまで、身は是迄と腹を切らんとすれば渡おし止め、そちが腹を切ればば侍じや、なんぞや畜生めを切腹とは推參、いでなく

びにせんと立寄り、やがて元結を切て、さあ首は打た、いづ方へも立去れ、といへば盛遠聞いて、首は打ずして元結を切りしはいかに、といへば、只今袈裟御前が遺言なれば斯の通り、さてはさようか、と涙を流しゐる所へ、股野五郎が郎等あまた押寄せ、此所に北條時政があると聞いた、いふても謀叛人なれば搦めとらんと思ひ、是まで來りしと罵れば、盛遠怒つて爰は某が出家のかどで、憂世のくひを拔きおさめなれば、いでもの見せん、とさん〴〵におつちらし、さて人々に暇乞して分れける、かの盛遠が發心おそれぬものこそなかりけれ。

第二ばんめ

爰に股野の五郎が家來長尾の新五は馬に乘り、侍共を召しつれ、さても北條一家の者どもを方々尋ぬれ共今に巡りあはぬ、聞けば小四郎義時は、伏見の遊所町にきんざんといふ女郎に深く逢ふといへば、とかく色町へ立こへきんざんに逢ふて行衛を尋ね出すべし、これによつて主人股野殿もかの里へこへ給へば、又かた〴〵も賴朝あさひが行末を隨分尋ね出せ、さそれ〴〵にいひつけ入に、爰にあいきやうの三郎が家來木村の文三は三味線屋になり、主人三郎は女房の姿になし、世を忍びゐる所へ、佐那田の與市は編笠かぶり立入り、三味線を誂へんといへば、夫婦のもの立出さま〴〵三味線を彈き、胡弓をすり馳走する時に佐那田、成程そのやうな三味線を拵へて貰ひたい、併してんじゆに紋所を賴みたい、その紋所はひあふぎじや、といへば亭主聞いて、是はいかさま、色町への御進上ものと思はるゝ、しかしひあふぎはどの女郎樣の紋所じや、といろ〳〵思案して、いや思ひ出した、是はきんざん樣の紋じや、何とさやうでござりませぬか、といへば佐那田聞いて、成程さやうじや、しかしきんざんといふ女郎に逢ひたいといふは、少々尋ねたいものがあるゆへなり、と物語りする内に、女房は佐那田が顏をつく〴〵見て、何とそなたは佐那田の與市殿ではないか、といへば佐那田も女房が顏を見て不思議をなせば、その時女房、卒爾ながら與市殿ならば申したい事がある、某はあいきやうの三郎じや、といへば與市聞

いて、その三郎殿が女の体は合點がまいらぬ、いかにも合點が參らぬは尤も、某も盛遠出家の後は、世を忍びかくの仕合、といへば、さてはさやうか、と互ひに互ひにおちあひ、さてさいぜんも申す通り、三味線を誂へきんざんに逢ひたいといふも、何卒義時殿に逢ひたさのまゝなり、といへば幸ひかな、母が方にかくまい置た、といへば、是は嬉しや、とやがて義時を呼出し、みな〳〵對面して悅ぶ所へ、遊女町のくつわ、三味線屋の甚六が所は此所か、と尋ね來り、やがて義時に逢ふて、是は幸ひの所であひ申した、二貫目の揚錢のあればそう〳〵拂ひ給へ、ときん〴〵耻ぢしめる、與市聞かねて、此上は身が金子を渡さう、くつわどもを連れて屋敷へゆけ、といへば與市が家來共ゑせ笑ひ、さても太い若衆があるものだ、われ〳〵は錢百文づゝにて雇れて來た、そなたが屋敷はしらぬ、と大きに耻辱を與へしは、情なかりしありさまなり、くつわ共腹を立て、此上は家の鍋釜なりとも外してさらねばならぬ、と腹を立れば甚六聞いて、よいよい此上は家の內にあるほどの物は、何でもかつて行け、といへば皆々立入り、古き三味線或は鍋釜、古き

櫃などを取持ち皈れば、甚六見てよい〳〵此上はたくへた金がある、と小判を澤山に取出し見すれば、是はどうしてたくわへた、といへば各々をかくまふ程の者が思案なふてはならぬ、今迄の所帶道具は古くなつて飽き果た、さあ此金で初買をせう、といへば、是は出來した、とてものことにいざおすまいか、さあおしもせい、はや色里への談合して入る、此所は伏見の色町花の景色の面白く、あまたの女郎道中して、時めく風情賑々し、折しもきんざん禿やりてを連れて道中する所へ、袈裟御前は陸奥といふ傾城になり、是も道中してぎうのひたいをぬきいろ〳〵戲れて、皆皆揚屋へゆく、さて義時甚六は大臣になり、佐那田を草履取にして、女郎共を集め遊びゐる所へ、きんざんが禿使に來て、わる口の判じもの故に、後はきんざんと大きなる口說になる所へ、陸奥は獅々舞の体をなし、丸ほんを獅々頭にして、二人の口說を直さんと、舞ひ戲れしは面白や、それゆゑ互ひに中をなをし、酒宴をなして遊ぶところに、きんざんに相方の客長尾の新五は、大きにせいて立出れば、やがて義時を陸奥が後へ隱し、さあらぬ体にてゐれば、新五はやがてき

んざんを呼び、さあ何事も今霄限りじや、その方は身が六百兩で請出し、あすは國元へ連れ皈る、といへばきんざん驚き、是は私にもそうした事を知せもなく無体なる事や、と歎けば、亡八が合點して、身請する上はさあ引立よ、ときうの五兵衛きんざんを引立れば、いかにも行くまいじやない、したが暇乞したいものがある、と義時の方を見ていへば、陸奥心得、これこれ暇乞がしたいとは、おれが事であらふ、成程暇乞をしませう、といふて其身が義時になり、いろ〳〵暇乞する心の内、互ひに憐れをこめし風情なり、今はこれまでさあきんざん此方へ、と引立二階へ揚りしは情なかりし次第なり、あとに殘りし義時陸奥又は甚六佐那田をはじめ、呆れはてたるその風情、陸奥つくづく見て、餘りにいたはしければ、私が思案であの大臣を殺し、きんざん殿を取返して進ぜうといへば、それは御心底嬉いけれども、もし仕損じていかゞといへば、陸奥聞いて、はて仕損じて顯はれたらば、わしが死まする、しかし是程に心を盡すとは、こなたに私が惚れたゆへなれば、君ゆへに死る命少しも惜からじといへば、とかく此上は互ひに心を合せ、隨分たばかつて討つべし、といひ合せ、やがて甚六が福祿壽のていになり、女郎どもに囃させ、いろ〳〵可笑きていをすれば、大臣長尾の新五はきんざんを連れ、二階より下りて、やれ〳〵騷しうて、ようもならぬ、何を笑ひ給ふ、最早明日は國元へ立つものなれば、何でも可笑い事をして、慰めてからいたいといへば、陸奥聞いて、されば此甚六殿がおかしい事をして見せんと、今のやうに笑ひました、なほ此里の暇乞に慰めませう、しかしきんざん樣をすこしの内此方へおかしといへばそれではおれが手あきになるといへば、其代りには陸奥殿をかしませう、げにとはそうもせい、とやがて新五は陸奥といろ〳〵、酒を飮み戯れになす内に、甚六は女郎幇間に里のはやり歌をうたはせ、その紛れに陸奥は大臣新五に刀を拔き心もとを刺し通し、あつといふを幇間女郎何事といへば、又はやり歌に取紛らかし、知せぬしこなしさま〳〵ありて、ついに新五を刺殺し、今は早大臣樣は殊の外酒に醉ひ給ふほどに、皆々休み給へといへば、幇間や女郎は何心もなく内へ入る、後にて甚六陸奥きんざんはさあしすましたりと、やがて義時を呼出し斯といへば、義時立

出、先づは陸奥殿の心底、お禮は申盡しがたし、しかしこなたはいかさま様子ある方と思へば名乗給へといへば、陸奥聞いて、今は何をか包みませう、私は都において衣川が娘袈裟御前、と申ものなるが、北條の義時殿といひなづけの者なれども、仔細ありて義時殿は勘當の身となり給へば、何卒尋ね逢んと思ひ、都を紛れ出ました所に、人商人の所業によりて此里へ賣られ、斯る勤をしまするも、皆義時ゆへとかたれば、今は名乗いでば叶ふまじと、我こそ許嫁の義時なりと互ひに落合給ふぞうれしき、しからば立退んといへばきんざんは、して私はどうしたものぞといへば、義時開給ひ、やれ是程の事を思ひわけぬ事があるものか、そちは後に殘つてしにませう、そう〳〵こなさま方はお退なされたがよいといふ所へ、ぎうの五郎兵衞は、股野五郎となりかねて己れを尋ねんが爲に、斯樣に形を窶したり、それ遁すなといへば、やがて斬結びになり、散々に戰ひしが、股野五郎斬立られ、いづくともなく逃行ば、今は是迄なりと一先立退き給ひける、

第四ばんめ

さる程に頼朝あさひ御前は、盛永が親庄司盛時を連れ、東の方を落ち給ふ所へ、梶原源太景季、又は藤九郎盛長平氏の下知に從ひ頼朝を尋ぬる体、尤も盛長は源氏に志深けれども梶原が心底を思ひ、互ひに疑ひをなし、後には梶原も盛長も、源氏一味のものとなり悦ぶ所へ、源の渡是も夫婦づれにて落合ひ、聞けば小四郎義時は、紀の國の邊に忍びゐるよし、一先づ行衞を尋ねんと、皆々打連れ入り給ふ、こゝに小四郎義時は、袈裟御前と夫婦の契約なし、子をもうけ憂き年月を送り給ふ所へ、盛長並びに源の渡尋ね來り、對面して女房袈裟御前を見て、大きに驚く体、義時不審をなし、仔細を問へば渡聞いて、正しくあの袈裟御前は、盛遠が手にかゝり相果た、その袈裟御前が是へは來る筈がない、定めて幽靈ならんと爭へば、義時も合點ゆかず不審をなせば、袈裟御前今は早や顯れたるやうに思ひ、幼きものゝ小袖に、心のたけを書置して、泣々館を立出る、さて書置を見れば那智の瀧壺に、千年の齢を經る大蛇なるが、深き望あつて、袈裟

御前の形となり、年月あひなれ子中をなしたるなり、然るに北條の家には、江の島の辨財天より、三枚の鱗を得たまふ、此鱗を取れば鬼畜無慘の苦しみを逃れ天上の化を受くる、さるによつて斯まで形を僞りつき添ふといへども、源の渡袈裟御前が世になき事を語るに依て、せひなくもとの瀧壺へ皈るものなりとの書置を見て、義時は勿論渡盛長、みな／＼きもを潰す体、義時深く歎き給ひ、たとへ大じやともいへ、畜類ともいへ、一子までまうけたる中なれば、何しに別れ果べきや、殊に此子をふびんとは思はぬかと、歎き給へば渡聞き給ひ、よし／＼此上は今一度てだてを以て、親子夫婦の名殘を惜ません、その計略は酒壺に酒をたゝへ、此子を生贄の如くにして据へ置ば、必ず必ず形を顯はすべし、先づ／＼此方へとて、皆々かしこへ行き給ふ、去程に遠藤武者盛遠は、煩惱即ち菩提にて、今は早や文覺上人となり給ひ、行力の爲なれば那智山に閉籠り、一七日瀧に打れ、あたりの松に繪像の不動をかけおいて、一心不亂に觀念ある、心の内こそ樂もしき、

▲もんがく上人／かほるひめ 荒行の段

上るり太夫 虎や喜元□豐島小源太夫正本

「たまぼこのくさのゆかりもとへがし、われをほりにわくらは色もこく、夕日は花の時雨じやものを、染よ田舍も京鹿の子、しめつゆるめつゆわせておいて、水はつめたや薄情、しやんとかつくは戀衣、表裏なきよしなか染は、すいた殿御の色小袖、艶と情の二ツもん、あのとを山の霞に千鳥、それは及ばぬおぼろぞめ、月の光はもちろんしないた水鏡、影を洗へばおのづから、桂男も色白や、五尺手拭はぎ高くもすそかいからげたかいぐ／＼しくもさめぬまにせうせんたくを、せんだく／＼せんだくしよやれ、艶と色との覺ぬまに 喜元「あだなれや身ほどの山の奥にきて、人目稀なる谷の戸に、田舍なれどもめづらしき、初音あげたる鶯の、聲にひかれて文覺は、物洗ふたる賤の女をつく／＼と打詠め、ひなには稀にみめかたち、斯まではてし身なれども、雪にはぞつと身ぶるひして、昔を愛に思ひでの、さてもかほるが面影に、似たりや／＼とばかりにて、只めがれなく打まもり、浮々見とれていたりける 小源太○「見る人あるともしらぎぬを、ざん

ぶとひたし振りすゝぐ〳〵谷の流の瀬々に散る、露の玉川さら〳〵と晒す細布むねあわで、もすそしいとゞふわ〳〵と、折から白き細脛の、見へつかくれつ細めけば、文覺これをうか〳〵と、しぜんの色に失ひし、魂かろきその風情、のびつかゞみつやるせなく、身をもだへしが、今は早覺えず山より轉び落ち、顔と顔とを見合せて、呆れはてたる計りなり文覺▲やあ是はかほるじやないかかほる▲文覺様か▲いやさ何の譯もいはわずに取付て泣きめさるゝ、しかも手なれぬしわざ、まあ是はごういたした事ぞ▲なるほど御不審は尤、わしはこなさま故に獨身になりました▲ひとり身とは合點ゆかぬ、其方には母もあり渡といふて夫がある、それが獨身とは心得ぬ▲さればでござんす、一度はこな樣の心を背きましたが、思へばおいとしい心じやと思ふて、夜の寐覺にも云出しましたれば、母樣や渡殿のお聞なされ、不義者じやとあつて館を追出されました、それより迷ひまがふて、此樣な賤の女になりまするも、一度こなさまに巡り逢ふて、心のたけをもいひほどき、其後は兎にも角にもなりませうと思ひました、とかく世をたてる身でもない程に、わしを尼にして下さんせとなびき給へば、文覺もあはれに思ひ、なるほど其心ならば尼にしてやらふ、幸ひ此谷川の流で髪をも洗ひ給へ、とあればかほる姫聞給ひ上るり「げにいにしへは一筋を、千すじとなでし黒髪に、繫ぐや猛き大象も、情らしきに和ぎて、手ごとに露の玉くしげ、今は光もおぼろなる、谷の流を見渡せば、岸の青柳おのづから、風にそよぎてくしけづるだに、折からの景色まで、物のあはれやしりぬらんせりふ▲さあかほる髪を洗ひめさつたか、最早剃髪すれば、名號より外はない、殊にあれをお見やれ、あの日の傾く所が西でおじやるか南無阿彌陀佛といふて手を合せめされい▲すればあのお日様のお入なさるゝ方が西方でござりまつするな、嬉しやお前を戒の師に賴みまして、只今尼になりまするは、これもよく〳〵の緣でがなござりませう上るり▲「とくとくかはる姿をも、いそがせ給へと勸れば▲文覺やがて立かゝり、髪下さんとしたりしが、よく〳〵見れば色もなき、水さへかほる面影の、花はいつしか谷川の、ちりかゝりたる水鏡、思へばくもる心の內、げによくある煩惱の、離れがたくや思はれけん、とき亂し

たる黒髪を、おしなで〳〵打もたれ せりふ▲これかほる、よしない事ながら女は髪容といふて三十二相の第一じや、尤も思ひ切て髪をおろしたいは聞えたが、もしも悔しい心があつては出家になつたかひいがない、何とぞうあつてもおろしめさるゝか▲是はしたり愚なことを仰やります、三十二相といふは唐の揚貴妃にぐし君 上るり▲「或は褒似王昭君、越の西施の類こそ、美人の褒は有ものを、身は數ならで心から、色なき里の色なれば、散とも誰か惜むべき せりふ▲ましてかうしたさもしい營みを致しますれば 上るり▲髪はむ口口かかたちかほこゝろを亂す如くにて、足手の爪はけうさくも鷲鵰とや見え申さん、あら恥かしやとほのめけば▲いや〳〵それは卑下なるぞや、此文覺が見る目には、せいたいがたて いたにかうるりの墨をすり、さつと流すに異ならず、又は手足の爪はづれ、鷲鵰とは曲もなし、さあ執心の眼には十はらとをの指までも瑠璃の 如くに見へ申さん、いかにいかにとありければ、姫はめもなく打笑ひ、もたせ風なる御心ち、今さらかゝる窶れ 來るびく人もなき心のほど、笑はん爲の御なぶりか▲我を忘れて文覺は、何しになぶり申べき、可惜柳の髪容、剃りて返らぬ昔の夢、結ぶも解くも心ぞや せりふ▲さあ爰に談合がある▲談合とはどうでござんす▲はて尼にならぬが談合じや▲それでは獨身で何も面白い事がござんせぬ▲さあそれ寄り口じや、尋ねたらば何處ぞに面白い事があらふ▲いや〳〵何處にも思ひ付がござんせぬ▲思ひ付がなくばおれが思ひ付ふ▲えいこなさまは氣が違ひましたの▲なるほど氣が違ふたゆへにかうじや 上るり「是非此上は今迄の、袈裟も衣も捨坊主、きのふに變るあすか川、流れ渡りの世の中に、氣儘がよいぞかほる姫、いかに〳〵と寄添へば▲岩木にあらぬ戀もみぢ、うつろふ色はほの〴〵と、あからむ顔をふりあげて、いつわりながら神無月、たが誠より嬉さを昔は袖に包みしが、今こそ身にも餘るぞや、變り給ふなかはらじと、世に睦じきその風情、正体なふこそ見えにけれ せりふいや幸ひ酒をもち合せた、二世までの盃をせう 上るり▲「それ〳〵と ありければ、かほるにつこと打笑ひ、然らばさし申さん、げに尤とゆふ日かげ、うつろふ色は櫻花、時雨になして戀衣、はや染めかへす邪淫の罪、文覺次第に飲み酔ひて、先づは暫く

休むべし、是へ／＼と手を取て、あたりにありしかんせうに、むりくうせんと足を伸べ、膝を枕に寐ねたりし、不敵なうこそ見へにけれ　小源太▲「さる程にゆうやう西に風消えて、雲かうさんにみちしほの、湖水の浪はどう／＼うつ／＼として憂にだいすせきたんの燈火無明のおんしゆに酔ひ伏すを、よき隙なりと窺ひよる、時に不思議や、懸置し繪像の不動の持ち給ひし、利劍おのれと抜け出て、かほるのあたりへ近付ばおつ拂ひ／＼爰を先途と爭ひしは、すさまじかりける次第なり、さしもの一念や、暫し利劍に恐れて、つく息は天を焦してしばしが内しらけて見ゆれば、利劍は又もとの繪像にうつりける、時に文覺手足を伸べ、やう／＼として起上り、かほるが氣色をつく／＼見て、最前よりも愚僧めが、やうすありとは知たれども、猶々事をはからん爲め僞つて色をなす、察する所鬼畜の生、我行力を妨げんと、化して來るに疑ひなし、さあ正体を顯すべし、いかに／＼と罵れば、かほる今は詮方なく、さて見咎め給ひしな、今は何をか隱すべき、我こそかほるが姉たりし袈裟が執心、その元は那智山の大蛇なり、然るに 北條義時に天龍の鱗あり、それを取べき爲に、死たる袈裟が形を變へ、今義時にあひ馴れて、時節を窺ふ折ふしに、源の渡いつしかに我形を見咎る、それゆゑあかぬ別れをなし、舊のすみかに皈れども、なほしも殘る一念にて、鱗を取るべき心あり、然れ共その方は義時に緣あるもの、ごして對面なすなれば、我大望を遂げ難しと、かく形をへんまんして行を妨げその上に、魂を摑み裂き、我本望を遂せんため、かほると成てたばかれども、見咎められし腹立や、よし此上は今一度行を妨げ、一命をとらではおかじと、夕べの雲すわ／＼動く風のほど、眞砂を飛し古木をぬき單に形は龍宮のしもつおつとり歩み寄、勢ひ天地に動搖して、身の毛もよだつ計也、文覺ちつとも恐れずして、一心の誠を以て一祈り祈らば、などや明王々々のげばくにかゝつて動れじ、うんだらだかまん万法一如と聞時は、いかで障碍のあるべきやと、責めつけ／＼祈りける、餘りに強く祈れて、八万四千ごうが蛇の鱗は劍に異ならず、あるひは巖に火焔をたて、又は虚空にめん／＼たる、火の雨頻りに大事をやく、なほもしんいの通力にて、そばなる岩をおつとりあげ、手玉に取てくる／＼／＼、くるり

くるりとひさもぢりふたもぢりねぢしいはの勢か、つて慕ひよる、文覺いよ〳〵觀念し、天に向つて呪を唱へ、大地を蹈んでけんらうの、奇瑞をまねけば追の執念、はや手も力もつき弓の、八島の浪の立かへるを、おひ拂ひ〳〵祈りのけたる其行力、おそろしゝとも中々に、申すばかりはなかりけり、時にかほるは絶へ入しが、不思議やそでのうちより、ひらりと飛んで失せにける、かゝる所へ義時も渡も來り給ひ、文覺に對面し、はじめ終りを聞てみな〳〵驚き給ひける、さて義時はおさな子を池にゑにそなへ給へば、親子の別れを思ふにや件の大蛇は、袈裟御前の姿となり、そなへし我子を慕ひ、又は酒壺の酒を飲み、戲れたりしその風情、面白かりける次第なり、其後酒にほれ〳〵と、醉ひ心なる魂を、文覺祈れば忽ちに、誠の姿を現してそのたけ二十尋の大蛇となり、今は定佛なしけると、上人を禮拜し、瀧壺に飛んで入りたりしは、不思議とも申ばかりはなかりけり

五ばんめ

爰に鞍間の牛若君、奥州秀衡を頼み、時節を待ち給ひしに、此度兄頼朝北條の聟となり、義兵を擧げ給ふよしを聞給ひ、忍びて伊豆の國へ立越へ給ふと聞しかば、又頼朝公より佐那田あいきやうの三郎を、道まで迎ひに遣し給ひ、人めを忍ぶ事なれば、鷹狩の體にもてなし來り給ひしが、牛若やがて鷹をおはせ給へば、いづくともなく鷹それて行けば、皆々跡を慕ひ追かけ入り給ふ、折ふしあさひ御前は敵の者に襲はれ、さある伏し木の陰に忍び給ふ所へ、牛若鷹を尋ね來り、嫂めとは知らいでいろ〳〵濡れある所へ、大庭の平太來ればやがて牛若はかしこへ立隱れ給ふ、時に大庭來り、ふとあさひを見付け、是は幸ひの所で對面いたした、定めて頼朝が行衛をしりぬらん、その上日頃執着したる女なれば、奪ひ取り皈らんと、いろ〳〵邪の戀慕する所へ、牛若立出いろ〳〵なぶり歒の邪魔になり、其後我こそ牛若丸と名乘り給へば、大庭驚き、然らば討て捨んと長刀取直し、切てかゝれば牛若やがてわたり合ひ、散々に切むすび、やがて大庭を討て捨て、あさひ御前をともなひ、伊豆の國へぞいそがるゝ、さる程に頼朝は江の島へ參詣あり、下向になれば御座船に召れ、四方の風景を見給ひ、さて文覺上人

に向ひ、此度貴方の志に依つて平家追討の院宣を給はり、殊に父義朝の髑髏を拜し奉り、平家を討つべき門出なれば、牛若もろとも軍法を語り給へとあれば、文覺辭するに及ばず、烏帽子ひたゝれを給はり、昔しの盛遠となつて、一々次第に語られしは面白かりける次第なり、かゝる所へ股野五郎、小舟のうちに形を隱しゐたるが、やがて顯れ賴朝を一太刀にせんと飛びかゝるを、文覺やがて傍なる碇をおつとり打てかかれば股野も剛の者にて、互ひに碇を引合ひしが、文覺力まさりにて、難なく碇を引き奪ひ、かうべ微塵に打碎き、今は是までそう〳〵御座船をいだせ〳〵といへば、不思議や浪風頻りにして、牛若丸に討れし大庭が執心顯れ出れば得たり賢し文覺は、珠數おし揉で祈り給へば、大庭が幽靈忽ちに、惡鬼となつてしたひよる、かゝる所へ有難や、辨財天はあらはれ給へば、眷族十五童子は、みな〳〵利劍をひつさげて、揉み合ひもみあひ魔王を中におつとりこめ、やがて降伏し給ひしが、不思議や魔王は白虎となり、大福德の辨財天、是ほうべんのそのけしき、有難しとも中々に申すばかりはなかりけり、

巳ノ正月吉日千秋万歳

木挽町六丁目　ゑぞうしや三左衛門板

京ひながた

名代 龜屋

立役江戸 多門庄左衛門

座本 山下半左衛門

立役大坂 山下又四郎

（表紙の短冊）

座本 けんぶつは山下一はい入ましたお仕合

多門庄左衛門 江戸 たんぜんふうの四天王くらまの多門でけました

付り あづまの仕出し本むらさき

かほみせ大あたり 京ひながた ふや町通 八文字屋八左衛門

並に なにはの染出し梅のもやう

山下又四郎 大阪や トつたり又四郎鼠ちうこうの大でけじ

大夫 おかた役はうちついたお上手左馬

上 よめ入 よふにた物が兄弟になる

中 よめ入 よふにた物がおぢおいになる

切 よめ入 よふにた物がめうとになる

井ニ大小ぶし大おどりの小歌入

一 さゑだ殿ひめ むめのまへ　大夫 でき島小太夫

一 いもと松のまへ　同 山本かもん

一 おばぎみ　かめ四郎三郎

一 松のまへのこしもと おきよ　山本なにわ

一 同じくおしな　すゞきしげまき

一 同じくおかん　山本市之丞

一 同じくおいと　今村彌太郎

一 つぼね　若井久四郎

一 むめのまへのこしもと 小はる　高島林之丞

一 同じくおだまき　さの山花さき

一 同じくおつや　つゝゐ吉十郎

一 まひ子おゆき　かつ村半太夫

一 おほゑなにはの助　立役 山下又四郎

一 さゝき時之丞　山下佐五右衛門

一 東木みどりの助　立役 多門庄左衛門

一 小性やなぎの助　かつ村もん之丞

一同じくいおり　　ふぢた皆之丞
一同じく千十郎　　山下まつ井
一おさは山さみ五郎　　宮崎だん之丞
一九重殿みだひ　　玉川千之丞
一はつ花のまへ　　せ川竹之丞
一弟吉じやうの介　　よしおかもさめ
一おぢだん正左衛門　　大山万左衛門
一こしもさおせん　　小櫻友三郎
一同じく小まん　　おぐら七五郎
一同じくおりん　　よしおか染之介
一同じく小ぎん　　竹中花ぎり
一おにの金十郎　　ふぢ村宇左衛門
一つちのかん四郎　　くが六郎右衛門
一いなづか京右衛門　　座本山下半左衛門
一女ばうおくま　　大夫岡田さまの介
一よこた孫左衛門　　だうけ山田ぢん八

大小ぶしおどりの小歌

一よい〳〵、かしまうらからノ、うらから〳〵たからぶねがついたささ、詞かほの若やくさし男、よいこさよいこさよい〳〵こさ〳〵よいこさぶきをいはふて、ことふれが參つた、詞是やこなたへごめんなれ、來年のゑほうは、さるとりの間をばさしさく神さだめて、かのへたつのさしはじめ、卯の十六日はまめまきだ詞わつさつかんでよいやさ、かしまおどりをばち丶ちつさ、ちさ〳〵ちつさ、おんどりびやうしにか丶つて、是やこなたへ物さはふ、先此月は大かの、はて大さも〳〵二月小、お丶三大四五は小々だ、それ六月は大よの、口口〳〵〳〵どつこい、七八月は小さださだめて、九月は大のきく月、十月はがつてんか、霜月しわすは大々、きはめて〳〵しつかさきわめて大小元とさだめた　　千秋万蔵

京ひながた

第一　あづまの仕出し本むらさき　江戸　多門庄左衛門
なにはの染出し梅のもやう　大坂　山下又四郎

座本 山下半左衛門 扨おことはりを申上まする、何がなおなぐさみに成ますることをと存ますれ共、かほみせには はじめて出まする子共が、廿人もござりまして、まそつとせりふを云して下され、私は打かけがきて出ましたい、わしはまひがまいたふ ござるのと申て、私一人をせがみまする、外のしばいのやうに、狂言つくりはかゝへませず、内外共に一人して仕りますれば、しぐみもできぬことござりませふ、去ながら 春々にも成ましたらば、何ぞおなぐさみとなりまする事を、いたして御めにかくる義もござりませう、かほみせ狂言は、祝義迄じやと思召て御らんなされて 下りませ、すぐに狂言侍共こいとをくへ いらんとする所へ 大夫さまの介女ばうおくより出、是々またつしやれ、かほみせでいそがしいに何の用できた、さればけふはこなたの御見物がたへかほみせなさるゝ、ぶたいのしゆびが、どうかこうかと心もとなさに見にきました、むゝ尤、さいわひじやそなたも皆様へおめみへ申しや、是は 女房共でござります、私は事おゝいゆへ何かのつけとゞけを、半ぶんは女房共にさせますで ござります、そなたもお禮申しや、皆さまへ申上まする、私がなんぞのやくにも立ふかと思はれましてか、大坂よりよびのぼし、女房ぶんにはいたされましたれ共、ぶてうほうな私でござりますれば、おつ付しそこなひをいたすでござりませふ程に、皆様を頼上ます、御ひいきをなされまして、よいやうにおつしやつて下されませ、是そちはみなれぬ娘をつれてきたがたれじや、是はあんま取の妙立どのが、わしがかご通つたればよびこふで、まひ子衆じや大名がたを舞るゝ、まだはつじや程に、こな様にようして下さんせと有ゆへ、つれて参りました、はてよい きりやうじや 心へたが、今の内は成まい、かほみせの座つきの有間はしやうじんじや、こなたはなんのこといはしやる、はてはつじや程にようう

してくれじやないか、どんな人じや、まひの手をようをしへて下されとのことじや、おれはわるふ聞た、してしたじが有か、おゆき聞、四五ばんござります、頭取字左衛門聞四五ばんなればどのやうなでもらちがあきまする、はてわるいせうふまはしじや、さあなんぞまふて見やしやれ、そんならほうかぞう舞升ふと扇をひらき、おもしろの花のみやこやとさも見ごとにまひおさめれば、扨々きようなことほめる所へ、ゆゝしき侍供引つれ來りあんないこい、京右衛門御ふうふは内にござるか、身が參つたよしを申給へと云ば、をくへ入、どなたやらみなれぬお侍が御出なされ、御ふうふ樣は内にかと お尋でござります、おくま聞其はづじやさ立出れば、侍みておくま樣、御さしづにまかせ參りました、ようこそ成程內にゐられ、きげんがよいお入なされませ、御かんどうの私だはいりても大事ござるまいか、わし次第になされよと連入ば侍は、さしうつぶきゐる、京右衛門はどなたでござるさ、みればかんどうの弟れなばかほふつてゐる、女房は、けふはおめでたい日じや、是はおとゝど大ゐなにはの介じや、御かんどうゆるし御たいめんなされませ、なにはの介かほを上、私義六年いぜんに御かんどうをうけ、大坂へ下り、あの方で役めをつとめましたれば、皆人樣の仰らるゝには、兄弟とて扨も京の兄にようにたとあつて、人なみ〳〵の役めを、しゆびようつとめました、是私がはたらきと存せぬ、前〳〵おまへの御引まはしにあづかつたゆへ也、罷上りせめて、あしての御奉公成共仕りたふ存れ共、いや〳〵いまだみじゆく成私なれば、皆人樣の思召ふは、大阪へ行役めをしあげたと聞たが、あれでどこが上つた、やはりいぜんの又四郎じやなどゝ仰られふ、時にはおためにはならないで、かへつて、兄にちじよくを付ると存、當年今月の今日迄待てはござれ共、都こひしう存、一つはおまへのかほがおがみたさに、罷上りましてござる、御かんどうをごゆるされ、御せわにあづかり何とぞ京の役所を、つとめますやうに賴上まするど云ば、京右衛門聞、役めが身ににたとあるがそれはしらぬ、先口上はきゝごとじや、女房聞それは私が大坂で見ましたが、おまへに其□□□や口て云やうに身はもたれぬ物じや、そちがかんどうはあゝしやうゆへよ、なをりはせまい、身は女房より外に、女にゆ

びをさいたこともない、せいじんと云はおれじやと云ば、まひ子のおゆき京右衛門が袖を引、こな様のいはしやんすには、けふまひをならひたいと云てこい、おれが内に置て、女房をさつて、そちを女房にせふと聞たゆへきましたと云ば、京右衛門きのどくがり、云まぎらかす、女房腹を立、だまらしやれ、おれをさつてあの子を持ふとは、おとなげないよういはれた事じやといへば、めいわくさふにうつふきゐる、女房はなにはの介にむかひ、私がいはずにゐまするがあくしやうがなをりませいで、女でさへあれば、半きゐの下女迄手をかけられぬはない、こな様ちとゐけんして下さんせ、御尤じや是兄じや人、おまへのがようござらぬ、なにはの介が御ゐけんを申おたしなみなされ、京右衛門せきめんしあやまりました□□ゆるし給へ、やあそちがゆるされにきたでないか、然らば云たいこともいはず、みぬふりをしているはつじや、それに兄へゐけんは何事じや、しんきやうのれいをしらぬやつがなんの心がなをらふ、人でなしめがかんどうはゆるさぬ立てゆかふ、扨はゆりませぬか、おゝゆるされたくば人に成てこい、なにはの介むつとし

是京右衛門殿、かんどうをゆるさるれば兄、時にはいかやうに云れても、立けにけられたと有ても、兄なればはらも立まいし、身が一ぶんも立が、かんどうの身なればそなたは京右衛門、身はなにはの介たにんよ、殊に身は大ゑ治部の大夫方へやうしに入た侍じや、それに大せいなみゐるばで、人でなしとは、なぜちくしやうにおしやつた、さあ此云はけがないと、侍の道なればゆるされぬ、へんとうはどうじや、京右衛門わらひ、何そちを人でなしと云たがみゝにかゝつたか、おゝさすればそちは侍か、おゝくどい、然らば人でないことを云てきかさふ、是へ出よと太刀おつ取ばおお承らふと是も刀をさし、かたぎぬ取てつゝとよる、女房は是は何をおつしやるぞ、はて女のしることでない、是はじつごとのつめひらき、のいてゐよ□□なにはの介身を人でないとはさあ承はらふ、おゝされば汝は治部の大夫へやうしに行た、其おやたる治部の大夫を、おとは山とみ五郎と云物にうたし、其敵をゑうたぬは人といはれまい、むゝそれで人でなしか、是さ其敵をうたんため、此度都へも上つた、いつのなん時敵にあふまい物でない、せうぶは時のうん、もし

かへり打にあふまい物でない、誠に父のかたちさ云ては、こなたならでおがむ人もない、こんじやうのなごりに一めおがみたし、其上兄おやたる人にふけうをゑてゐれば、天のさがめあつて、本望もさげまいかさ思ひ、是へかんごうゆるされに來つた某が人でなしか、さあへんさうがないさゆるさぬさ刀に手をかくれば、いや其心で身さあいてにならふや、すいさんなさ兩方あやうくみゆれば、女房中へわつて入是は何事ぞ、なにはの介樣おまへのがわるい、何がわるふござる、されば先詞がちがひます、おやごじやさ思ふて兄樣をおがまふためきたさ有、其心が誠ならあまさかさまの事を仰られふ共、へんさうはないはづじやが、おやごに手むかひなさるゝかごうぞさ云ば、一ごんのりにつまり、あやまりましたさをしすざる、こちの人のもようない、それ程に云いでも大事ないこさを、さればあれはたんき物ゆへなをつたかさ思ふて云て見たが、まだ其心ではおぼつかないぞ、なにはの介は然らば敵のくび取參らばかんごうを御ゆるされふか、おゝくび取人に成て來らばゆるさふ、忝ないさつゝ立かへらんさするを、女房よびかへし、云ても大事のかご出じや、京右衞門殿かんごう御ゆるしなく共、かご出いはてやらせ給へ、おゝよう云ためでたふ本望さぐるやうに、につこりさわらはふ、然らば先おまへ御わらひなされ先そちからわらやさ、一ごにから〳〵さ笑ひ、なにはの介いさま申はせかへれば、京右衞門は女房諸共をくへ入にける、こゝにころだ殿やかたには、姫君松のまへ雪見のちんを立給ふ、てうのはじめのいはひのせきはんを、はう〳〵へくばる、松のまへこしもさ引つれ出給ひ、つぼねお寺樣へもやりやつたか、けさ又介に持してやりましたが、何してゐるやらまだかへりませぬさ云所へ、うか〳〵もどれば、こりやうつかりさいへば、きもつぶし重箱を取おさす、姫は其やうにしかりやんな、又介はお寺樣へ參りましたれば、おちやのこを忝なふござります、それはさぶらひごさじやさ思召たか、こしもさおかん聞、いやのしをそへてやりました、又介のし付てしんじやつたか、其のしはおれがくふた、是はさもしいかゝつた事でない、何をおれ計がわるいやうに云、皆がこさ云たらはづかしからふ、何もいはるゝ事はもたぬ、おゝ夕べもちやだんすをあけ、是々じやさ、

ぬすむまねをし、ふさころへ手を入、是はお寺様から禮文でござります、姫ひらき見、かうしよく百のうぐはんさよみ給へば、それは取ちがひましたさ文出せば、それ皆さらへておこすな、よふで見ろ、何々一女道はきのつきたるによき物也、せんきのおこつたには、おきよをだいてねて、こしをさすらしてよし、おきよ聞是はめいはくな覺はござんせぬ、まだ有うばの心はへらのごさし、おれがいつわりてへらをいつつかふたぞ、さふでない、へらとはごくつぶしと云事じや、にくいやつのさ、おいはしらかす、こしもさおいさ、お姫様のすまたさ書て有、又介聞それよみぞこないじや、お姫様の姿にひでん有じや、ひでんさはごうぞ、皆聞てゐるゆへ申されませぬさ、みゝへ口よせさゝやけば、そんならかうさ、ばんにあはふさ云けいやくし、ひでん有さはかうじやさ云所へ、からうさゝき時之丞來ればきもつぶしおしすざる、姫の給ふは、おば様からそなたをよびにきたは、ふしんをすなさ云事ではないか、其ぎもお尋ゆへよいやうに申たれば、さかく姫君のきのはるゝやうに、ふしんを急で立よさ有、よい時にはめでたい事がかさなります、今

日おば君一もん衆をあつめ、私を召れ仰らるゝは、松のまへにいか成人をも迎へ、さゐだの家をつがせよさ有、もし思召人の殿ごあらば、私へ仰られませ、お望の男ごそはせませふ、それはうれしい成程思ひ人が有、それをおつしやれませ、云してから跡で、其男さはならぬさ云やんなや、さんさいふぞさ又介がかほを見給へば、云なさかぶりふれば、いはねばらちのあかぬ事じや、時之丞はさあおつしやれ、どの大名様でござるぞ、いや大名の娘が、大名さふうふに成は有來つてふるい、そんならおくげ様か、いやおれが男に持たいさ思ふはつゝさ下々じや、時之丞聞、だまらしやれようござらぬ、すでにこなたのあねご梅の前様が、すいた男でなければ持ぬさ有ゆへ、大殿か家はつがされまいさあつて、ふぢいおの下やしきへのいてござる、それゆへ大殿御りんじうの時某をめされ、あねはあの心なればぜひない、いもさ松のまへにぶけかうけをもむこに取め合、さゐだの家をおさめよさの御ゆいげんこなたも聞てゐながら、大名が大名さふうふに成はふるい、ぶけもいやくげもいや、下々□□□ようはおつしやつたのふ、そりやならぬ、そなた

がたれ成とすいた男もたす云ゆへじや、そんならよめ入のだんかうおいてもらはふ、どんらしいとはら立給へば、時之丞いやさ此事計は我まゝにはさせぬ、又介きのどくがりゐるかはを見、おのれがじたい身をしらぬやつじや、いやしいさまで　おそばちかう参り、あだことぬかすゆへあのやうなお心にならしやる、おのれには身がひまをやる立てうせふ、又介ぜひなう行んとす、姫は又介行な、時之丞はまだうせぬかといかれば、姫はそなたはあれがじつたことでもないにいなさふとは、それでもおまへがゐんにつくまいとおつしやる、はてそんならよめ入するは、然らば大名と御ふうふにならしやれや、おゝくどい、それでこそよけれ、今のやうにしかりましたはおためを存てじや、つぼね何ごと成といたしおなぐさめ申しやと、きげんを取をくへこそ入にける、又介はしやく〳〵をこしもとに持し、おれをまねいでたも、是でまねくと三年の内にしぬるぞや、三年はまだるいと、五六本取出し一々持し、皆よつて五六本でまねいだら、命がちゞまつて、五日か三日の内にしぬるであらふ、それはいらぬことゝ云中に、おいとはおれまねいでやらふと云を、姫引のけこしもと共したゝるい、又介がそばにな、をくへ行よぎふとんしき枕二つこしらへておけ、はやう行としかり給へば、皆をくへ入、又介はゐゝどんらしい、今しぬるやうもあれ共、またそうはせぬ、とかくはやう出たがよいと、行んとするを姫引とゞめ、そなたは何をはら立るぞ、何がはらが立とは、此方はうつくしい御すがたじやが、姿より心がまさつた、こなたとおれとは人しらず、せいし迄取かはしてゐる、こなたの心にはなぐさみに、おれをなぶらしやつたの、され共云かはしたことば有おれがうらみをいへばあしいと思ふて、時の丞とだんがうで、今日おば君が御祝言の義を仰られた、思召入の處ごはござりませぬか、いかにも有、それは大名かくげか、いや下々じや、いや下々とはふうふにはさせぬと、さん〳〵しかられそんならどう成とせふと云て、心にはそまね共ぜひなうゐんに付と思はするため、是□はでけたが、たくむ事はしれるは、其中へかまいもせぬおれがはいつた、やい又介いやしい身で、おそばへ行たはことをつくゆへじや、ひまをやつたと云ておひ出し、あとでゆるりとそはふため、じやないか、お

れが心をしつてゐて其やうなことゐやるからは、よい出てゆきや、おゝこなたがおひ出すと、又ゐじりに成ていつ迄もゐると云はふるい、やつはりこなたのたくみにのせられ出て行ますがうれしいか、又此やうなとろい男もない物じや、よう見ておかしやれお姫殿と、ゆかんとするを引とめ、ゑゝしんきなそなたのけて外の男は持ぬ、まだだましたらぬか、其心ならさいぜん時の丞が尋る時、又介とふうふじやとなぜいはしやれぬ、それはそなたの、此事はたれにも云なといやる、又云とそなた身のなんにならふかと思ふていはなんだ、是時之丞が聞て、下ろうの身でお姫様にふぎをなしたとがとて、うでをぬくか、あしをへしおるか、さんとくびをうたれても、又あたまからつまさき迄、じよき〱とたばこ切やうにきざまれても、しぬる命はたつた一つ、おれはこなたゆへ命をすてゝゐる、ひけうにはないはいのお姫殿様、むゝ云なんだゆへはら立か、やいこしもと共とよび出し、おくへ行時之丞に、おれは又介とめうとになつた、外の物とゑんはくまぬと云てこい、心へました、又介は是ゆくまい〱、お姫様のおためにならぬ、其御しんていなら忝ない、それでもむり計云て、しなふの出て行のといやる物、いやどこへも行ずそばにゐませふ、きげんがなをつたか、成程ようござる、そんならこよひあふけいやくで、けふを〱と待てゐたあそこへおじや、又介聞扨は御しんじつ私と枕をかはされふな、さあゐてだかれてねるはいの、又介はつとさうはくし、ああさふじや、おまへのは皆誠じや、私がいつわりじや、此義は某が玉しゐより外へ出さぬ事なれ共、おまへのお心がせつないふり切て出ゆかば、おまへはじがいをもなされふゆへ、一通り身の上をおはなし申ませふ、是はあらたまつた詞じやが、どうでござんす、されば私は生れついた下らうでもござりませぬ、せつしうにおいて、大ゑなにはの介と申もの成が、おやと頼んだる人を去物にうたせ、其敵をうたんため、有時は舟おさ馬かた、又有時は中げん小ものと成やしき〱を一か月程づゝ、奉公にはいり尋るかたきなければ、其やしきをも出、此おやかたはひろいことなれば、もしや敵のまぎれゐる事もやと、先々月かやうの姿と成御奉公に参り、みれ共敵なければさうさうおやかたを出べき所に、おまへ御姿をちらと見、扨

もし〳〵あのやうなお姿も有物か、かやうな女郎とせめて一夜の枕をかはしなば、人上の思ひで共いはれふすれど、心もうか〳〵と成ました、過つるいのこの夜、おまへの私をひそかにめして、やゝ又介そちは物思ひ姿じやが戀をするさふな、もしおれならばどう成共じやぞやと、有がたいお詞にあづかり、やしきを出かね今日迄罷有、今有がたいおなさけにあづかりなばよもわすれはいたすまい、時にあすが日に敵にあふたりさまゝ、おまへに心が殘つてみれんのはたらき、本望をとげぬ時は、せんぞ迄のちじよくなれば、お聞とゞけ下され、私には御いとまを下され、敵をしゆびよう打ならば、おもてむきからゑんを申て、ふうふと成でござりませふ、只今は思召きられて下されませ、やあ是々こしもと衆、思はずはなしたかまひて大事のことじや、たごんして下さるゝな、是手を合ますぞ、姫君聞左樣の御かた共存ませなんだ、こりやこしもと共あなたは大事の御身じやぞ、聞た事□□たこへ私がこがれじにゝすればとて、おまへの本望とげさせ給ふさはりに成事なら、成程思ひ切ませふ、それは忝ない、思ひ切は切ましたが、何やらたらぬやうに有、かご出をちよつとゝじんきさふにのたまへば、いづれかご出いはひませふかと打つれをく〳〵入給ふ、然る所へ侍共大ぜい花がさをさゝ手に〳〵ぼうを持來る時の丞出、雪見のちんの御ふしんがいそぐゆへ今日中に地をつきかためる、せい出しついたがよい、扨お姫樣はふうりうなだてずきなれば、後程まじりて、千ぼうづきに出なされふ程に、きをつけずと、こしもと衆やらのやうにいたせと云付をく〳〵入ば、こしもと衆皆花がさにて千ぼうつきに出る、所へ松のまへなにはの介諸共、花やかに出立、千ぼうづきに打まじり、踊りひやうしぞおもしろけれ、侍共めくばせし姫君をうばい取を、なにはの介侍共を引たをし姫君を取かこふ、所へだんの丞おば君諸共立出、侍共なんとした、しそこなひましてござる、どんなやつらの、是松のまへない〳〵其方へ心かけふみをつかはした身はだんの丞じや、身が文を手にもとらず身とふうふにはいやといはるゝと聞たなれ共某がゑ思ひきらぬ、それゆへ侍共を千ぼうづきにして、うばひとらんとする所に、下らうめがじやまと成た、身が女房にせねばおかぬつれて行ぞ、姫聞おれはそなた

はいやじや、おば様あいつをいなして下され、おば聞あなたはだんの丞殿と云お大名ゆへ、おれがゑんをむすんだふうふに成たがよい、なにはの介聞、是お姫様おば様もがてんじや、あなたとめうとにならしやませ、そちがさふいふはづか、ひけう物が、おれは外に男は持ぬと取付なき給へば、是此通じやかへられよ、扨は姫がみつつうの下らうが有と聞たがおのれか、侍共あれしばれ、なにはの介いかつて、どこへおのれら、よつたら此ぼうでたゝきころし、千ぼうづきやゑいとなど、地へつきこんでやらふぞ、だんの丞はらを立、おのれのがさぬとつめかくれば、なにはの介刀おつ取あやうき所へ京右衛門が女房おくま、長刀ひつさげかけ付わつて入、是は戀のかうろんとみへた、私がらちあけませふお待なされ、だんの丞聞然ば取持て埒あけよと立のけば、なにはの介は何やつなれば手づめのじやまをすると、かほをみてきもをけし、おくま様是へは何としてござつた、さればいな所へめいよな物がきたでござらぬか、こなたが此やしきへきて色にまよひ、大事の望をわすれてござると云事を、ぬしがきかれて是へきて手打にせふなどゝ

いはるゝゆへ、わしはこな様がおいとしさにけふ此やしきへしのび入御ゐけんを申さふと思ふ所に、さわがしいゆへ、出てみれば、まだあくしやうがやまいで、戀ゆへ打はたさふとや、こゝでしんでは侍が立まい、おれがつれにきたもごらしやれまいか、なにはの介つまり、あやまりました、おゝござれとひつ立、是お侍よう待て下さんしたと、ゆかんとすればをさへ、身が戀を取持ふと云て、かへりてらちがあくか、はてらちはあいてござる、此男がじやまに成でないか、それをつれてかへれば、跡はこなたのまゝじや、いやさあの姫にがてんさせ、身をねやへともなへ、それがならぬと、其かはりに我を身が女房にする、それはだんかうがならふ、わしには男が有でもなしないでもなし、去ながらわしを女房にもたしやると道具がいる、何成とこしらよふ、先やりが二本と紙のぼりうしろに立つじ〳〵で是はふぎした物でござると云、こゑをこしらへねばならぬ、じぶんからさむいに、木のそらですゞまふより、よしにさつしやれ、こいつは身をなぶるか、姫はおくまに取付どうでも此男をやることはならぬ、なにはの介は是おくま様、本望をとげ

ふと云も侍のぎり、又此所をすて行ばなさけをしらぬ、ぎりを立ればなさけがすたる、よいおれさへすつればよいと、はらをきらんとするをおさへれば、姫はなふあなたがじなしやると、いきてはゐぬとめて下され、お熊みて扨はくさりやうたの、是お姫様、あなたはとみ五郎と云おやの敵有、それをお打なされねばならぬ、はなれとむなふ思召ば、此やしきを出一所に敵をねらひ給へ、一所に行て大事なくば、それこそ所望じやと打つれ行んとし給へば、まて〳〵扨はなにはの介よなそれのがすな、むゝ身が名を云てのがすなと云一ごんに聞所有、汝は何物じや、おゝ某こそ治部の大夫を打て立のいた、嵐山とみ五郎、今だんの丞と名をかへてゐる、扨は敵か、めんていをしらず名をかへしゆへ尋あはなんだ、天□□□□我となのつて出たうれしやと悦べば、おくまは今ぞ本望とげ給へ心計のすけだちをいたさふと、長刀を水車にふりまはし、侍共を切立れば、むら〳〵はつとにげて行、とみ五郎むずとくみあやうき所へ、なにはの介覺たかと切付取てふせ、おやのかたき思ひしれとさゞめをさし、今ぞ本めうとじやと姫君にいだき付、所へ京右衛門はしり出、おゝでかした〳〵、身もかけ付やうすを見たが、あつぱれなはたらき、それでは京の役めもつとまらふと悦びおく〳〵へ入にける、山下又四良大でけ〳〵

第二　江戸立役　多門庄左衛門丹前六法あたりました

あらおもしろの初雪や、東のそらをあとにみて、行もかへるもあふ坂山、かち侍大ぜい、小性いおり千十郎さきをはらひ畏つて、東木みどりの介、□□はじめての京上り、一ゆりゆつたふり出し、げにたんぜんの只中、其中村にきりやうふうぞく其まゝ、こはつき迄うつります、おぼろ□□□かげはやせのさと人、おはら木かはひ〳〵男のしだし也、然る所へ京右衛門のからう、よこた孫左衛門來り、おまへの兄ご中村七三郎殿も、私が大□□□かひに參つたゆへ、こなたの御上京もおそさに御むかひに參つた、みどりの介聞されば〳〵、せつしやが兄も、いかい皆の御やつかいに成ましたげな、おぢかたからのぼれと申こしたゆへ、おぢにあいたし、一つはこゝのへ殿へむこ入じや、是がちとおとなげなうは有、扨江戸とはかく別でござる、

くわなのわたしをこへてござれと、はや山の木たち谷の水おと迄いとゆう〳〵と、はたごやの女迄ふうぞくやわ〳〵と、こゝさへ是なれば、すいどの水のふだせつしやが、京女郎にあはん事およびもないこと、のぼつておぢにちじよくをあたへふより、くはなからかへらふと存たが是迄きて都をみぬも残りおゝさに、こゝ迄のぼつてござる、ひとへに頼ますぞ、孫左衛門聞、あたまから長老はない、すでにこなたの兄七三郎殿初てみめへの時は、何とやらきのどくに存たが、だん〳〵に役めをでかされ、殊にいとまごいの役めを、大きにでかされました、とかく京へしゆ行にきたと思召、尤てござる、初めから長老はないと有詞で力をゑました、孫左衛門はいざお供いたさふ、いやすぐにおぢかたへ参ると云事を、柳の介と云物に、九重殿へ申てつかはした、おつ付かへらふ今少待給へ、心へましたと待ゐる所へ、こし元小はるおだまき帳とすゞりを持出、皆様がたへ申ます、私らがお主は、お大名のお姫様でござりますが、すいた男を持ふと有て、京へ男をぎんみにお上りなされました、それでいづれも様の御きりやうを付ます、付られて下されませ、是はかはつたことじや付られませふと いへば、一ッ男せい高にもなしひくうもなしよいかげん也、いろ白くめふたかわ、はなみごと也、かはゆらしきさ一々付、添なうござんすと、まくの内へ入所へ姫梅のまへこしもとつれ立出よいきりやうと云はあの人かと、そばへより給へば、みどりの介はもしお上郎様、私はまだ女がござんせんそれで女房を見立に上りました、見られて下さんすまいか、はて同じやうなことじや、云ながらはわしはみずとおかしやんせ、もしおまへのきに入ましてもわしがいやでござんす、はじめて京へ上り、女にきらはれて一ぶんが立ぬ、此上はおれがほれぬかねばおかぬ、是はちとさきがでけておもしろい、わしもほれらるゝきじや、そんならちと見ませふか、何をかげんをといだき付、よいはこふところへ手を入、是はなんでござんす、はてちでござんすと たはふれ給へば、孫左衛門 みて、ほんによいめうとじや、私共もかたつきませふと、こしもとを千十郎いおりへ一人づゝわたし、其身も小はると打つれ、皆かしこへぞ入にける、然る所へ柳之介立かへり、九重殿やしきへ参り、仰の通申でござり

ますれば、こうしつ様の、むこ殿よりのししやこなたへと、おそばちかふめされ、成程京右衛門殿方へ御入なされ、むこ入は吉日をあらため申つかはさふとのおへんじでござります、私もついでにお姫様を見やうと、かなたこなたといたしたれば、みすのあいよりちらとみましたが、それは〱うつくしいこと、私をごらんなされ殿ご様の人なら、むこ入まで待ごをな、しうげんのおさかづきをしんぜますと、此さかづきにてうご參り、是をみどりの介様へしんぜまして、其さかづきを持てきて下されと有て、則さげぢうが參つた一つ上りませ、いや祝言のさかづきは、一家一もんあつまつて其ばでする、此とちうへさかづきとは、ぶてうほうなかへしてこい梅のまへ聞、いやそれはせけんなみ、こゝのへの姫君なればこそ、祝言のさかづきを此所へおさしなされた、是はのふでしんぜられませ、みどりの介聞、おれはこなたのまへでのまれぬゆへじや、さりとはすいかな、然らば此さかづきをさへた、姫にのましてこい、梅のまへ聞、こゝは一つ私があいしてやりませふと、一つうけのみ、なふ是は毒しゆじやと色かはればみどりおごろき、扨はしうとが方に惡心有てのしわざか、又は姫が外におつとを持、某上りしゆへ身をころさんためか、やしきへかけ入んと、行んとする所へ、孫左衛門はしり出おし止、先待給へ、こしもと共はどこへ行しか姿もみえず、是は女郎はしなれさふなと云ばみどりの介立より、なふ心は何と有ぞ、女郎くるしげに私はしにまする、おまへに云置事が有、わしがしんだあとに、外に女房持て下されな、おゝきづかいし給ふな、そなたより外に女房は持まい、先こなたはいづくの人ぞ名はなんと云ぞ、女郎聞、わしはあのと云んとする内に、いきたへむなしく成給へば、是はどうじやとなげき給ふ、孫左衛門はおしのけ、しがいへきぬかけ置みどりの介は、行ゑもしれぬ女郎の□□□身がはりにしんだ、やしきへ行せんぎせんとかけ出給へば、柳之介おれも一所に行ませふおのれはつれ行ぬ、はてこなたはねんじやおりや若衆一所に行、其若衆がごくでころしても大事ないか、ぶ心中物めが、おれもごくとはしらなんだ、ぶ心中じやない、まだぬかす、心中のよいと云は今の女郎、かりのたはふれに身がはりにしゝ給ふ、是を心中物と云と、きぬ引のければしがい

なく、白玉上りうせにける、みどりけうさめゆめではないか、所はやはりあふ坂山あらふしぎや、扨は某に心有女郎の念が來つて命をたすけ給ふよな、玉しゐのかよふからは、かたちのないはづはない、たとへ日本は云におよばず、ぼんなふの山戀のうみ、とびこへはねこへ戀しと思ふ女郎を尋あるいておくべきかとこくうにかけ出給へば、皆あとをしたふて行にける、こゝに九重のやかたには、けいぼだん正左衛門は、金十郎勘四郎と云下人を、あを鬼に出たゝせ、やう□□されば火の車、引やく人がたりませぬゆへ、あか鬼の半兵衛とて、こうしやなやつをやといましたと云所へ、半兵へ出れば、けいぼは、やいやうすを云てきかさふ、姫に□□□□云のはまゝ子、弟吉じやうの介はほんの子じや、女なれ共惣領じやと有て、大殿が姫に家をつがせと有ておはてなされた、それゆへ姫をころし、吉じやうの介に家をつがせたふ思へ共、めつたにころしても跡がなんぎゆへ、おにをこしらへこよひ姫がねやへ入、おやにふかうゆへつかんで行しと云て、火の車にのせ門を出、ころしおもしをかけよど川へしづめにかくるさう心へ、半兵へ聞、私はなぐさみのおにがゐると存やとはれてきた、人ころすことなりませぬと、いなんとするを引とめ、大事をいはせいやと云と今ころすが、ぜひない、心へました、然らばあいづの大この時出よと云付をくへ入ば、半兵へはおれはひやうしごとはへたじやおしへてくれと云ば、二人はをしへてかしこへ入所へ、人をとすればこかげへしのびゐる、こしもと共よぎふとんざしきへしきをくへ入、半兵衛はそつとよぎの内へかくれゐる、所へはつはなこしもとつれ出、かゞみを見給ふ、れば、なふこはやおにがゐる、いや何もござんせぬ、扨は心でみへたか、おれもねる皆やすめと有ば、皆悦びをくへ入、姫はふとんへねて、これぞきてよるの物きせと有ば、半兵衛よぎかつぎ姫の上へねる、是はたれじやわるいことと計と、にげ出、やいこしもと共とよび給へば、皆出そちはどこからきた、姫はにくいやつのあすでもむこ様が御入なされたら何と云はけせふ、半兵衛ははてきずがついていやといはゞおれが女房にせふ、おのれがやうなやつはいやじや、してそちがむこはなんと云、おゝ東木みどりの介様と云侍

じや、是を闇にげゆかんとすれば、とらへればひらにはなしてたも、いやさらへて置云わけさす、それではしなねばならぬ、何をかくさふ其みどりの介がおち、身は京右衛門じや、みどりはあふ坂より行ゑがしれぬと有、もし此やしきへは入てゐぬか、何ぞやうすあらふと存、此姿で是へ入こふだ、所にひだうのたはぶれはせまい物じや、おちがおいよめの草をかつた共いはれまい、是ではら切、姫聞なふ待給へ、ほんの事があつたではなし、おまへと私さへいはねばすむ、おはてなさるれば、ふぎに成ます、さふじや誠に下ひもとかふとしたまてじやと云所に、たいこなる、いや誠にこなたがはつ花殿よ、けいぼだん正がたくみで、かやう〳〵にしてころすはづじや、身はやはりおにゝ成こなたをつれもんを出、みどりの介を尋合ませふと、おにのめんをきひつ立出る、所へだん正おにの姿と成二人のにせおにつれかけ來る、所へ吉じやうの介はせ來りとこへ□□ぬ、だん正いかつて、此女はおやにふかうの大ざいにんゆへ八万ぢごくへおとす、それ火の車にのせよ、京右衛門聞、いかにざいにんざいにん、いそげとこそ、くはつ〳〵と云ば、扨もぶてうほうな鬼めかな、やい惡人こそぢごくへおとせ、あね様はあちら向てござれといへば、三年もこちらみずにござる、正じきなあねごを惡人とは、おちのあかおに、せうづがはのむり云うばが一所に成つて、あねごをうしなひ、跡で何とようしたでないか、おにとはでけたくはつ〳〵のこゝゑを、さゞんざにうたひなさふと思はふが、さふうまふはおれがさせぬ、だん正ゑゐあらわれたのかぬかと、けんにてつくを、心へたと切付ればにげて入、あを鬼姫君をつれゆかんとするを京右衛門をしふせる、吉じやうの介は鬼めのがさぬぞ、京右衛門めんをぬぎ右のやうすをかたり、一先やしきをのき給へと、おさへしにせ鬼に姫君をおはせ、やしきをおちて行給ふ、おつてかゝれば京右衛門吉じやうの介、取てかへしおい行給ふ、其あとへ又おつて來り姫を引立る所へ、みどりの介通り合おつてをおつぱらひ、やうすを尋給へば、私はこゝのへの娘はつ花と申物成が、けいぼおぢだん正の惡心でかゝころされる所を、京右衛門様と弟吉じやうの介のはたらきで、是迄にげのびしと一々の給へば、扨は身にごくもらふとしたもけいぼがしはざよ、則身はみどりの

介じや、こは殿ご様かさいだき付、おまへにあふたればこしがぬけたあふて下さんせ、あまへた事計、野道で人がみぬ程におふてやりませうと、おふて行給ふ所へ、梅の前のさゝし、こしもと引ぐし來る、おまへは夢にあふて身がはりに立た殿ごじや、夢中の詞に外に女房は持ぬと云て、其女をなせつれて行給ふ、ねたましやとうらみを云ば、げに誠あふ坂であふた女郎じや、はつ花はいやおれが殿ごと、兩方たがいにせりあへば、みどりの介は、あゝ拙命が二つほしうてならぬ、一つは君に奉り、一つはそさまと二世そはふに、まゝならぬとの給ふ所へ、だん正おつかけ來れば心へたと切付給へばにげて行、所へ吉じやうの介京右衞門きたりたいめんし、めでたいときは切ぬがよい、二人の姫はおれが男いやわしがのとせりあい給へば、京右衞門聞、先江戸より上つて女にきらはれいで仕合、月がはりに二人共にもてと打つれ入給ふ、

第三

口上云
皆樣へ申上まする、しうげんめでたふおさまつて、祝義の大おごりをいたします、よろしう御ひやうばんを願上ますと、大小ぶし大おごり、

八もんじや八左衞門新板

一のたにさかおとし　三番續

付りいくたのもりおきくさつれ井にみかげのもり七兵衛さつれ

上　しゆゑんくまがへ
　あにぶんはかたきにてはなかりけり

中　百しやうかげきよ
　かたきうつうでのほねこそつよけれど

下　あづましづか
　たびやどりはるのよもしづかならで

一源九郎よしつね　むめだ八十郎
一かめいの六郎　すゞきさくや
一かたおかの八郎　市村七十郎
一わしのおの三郎　すゞきうこん
一いせの三郎　ちか松かんの介
一するが次郎　と山千の介
一むさし坊べんけい　澤村十郎次
一くまがへの次郎　立役 あらき與次兵衛
一ひら山すへしげ　三原十太夫
一弟平山くま次郎　大もりたつ右衛門

一かぢはら平藏　ふじ川しげ右衛門
一あつもり　今村半の介
一みだいもみぢのまへ　玉村つやの介
一こしもとさごろも　にし川おかの介
一いがの平内左衛門　こきん新左衛門
一あく七兵衛かげきよ　座本 大和屋甚兵衛
一かげきよが子　みつき金五郎
一いくたのせうじ　さいごう五兵衛
一むすめおきく　太夫 みづきたつの介
一同いもとおしも　きしだ小才次
一同おかち　みつしまもしほ
一同おしげ　玉村あさのせう
一らうにんみかげかん介　松永六郎右衛門
一しづかごぜん　いわい平次郎
一こしもと　おのへもんご
一同じく　玉澤左源太
一あまがさきせんどう仁兵衛　山田ぢん八
一女ぼう　こかん太郎次

其外座中不殘出申候

一谷坂落　三番續

第一

源九郎よしつね平家ついとうのゐんぜんかうぶり、頃はげんりやく元年やよひ中じゆん、みわたせばうなばらかすみ山とをく、なみのをとごう〳〵たり、平家は竹のそのふのすへはなれば、しいかくわげんにはくらからね共、ぶりやくの道は中〳〵いたらず、さあればさてかた〴〵是をあな取べからず、てきにもせいびやうのほまれ有、のとの守のり經、さつまの守たゞのり、もりとしもり久、いくさ大將にゑつちうの二郎兵衞、かづさの五郎兵衞、あく七兵衞かげきよ、らんぐいを引てろうじやうせり、又みかたに大將此よしつね、したがふ物にむさし坊べんけい、かめいかたをかいせするが、又大手に平山のすへしげ、くまがへの次郎なをざねを初、一きたうせんのつわ物也、かたきぎよりんにか丶らばくはくよくにひらき、かけ引を某がげぢにしたがい、一せんに打やぶらんはあんの内と仰らる丶所へ、いせの三郎するが二郎はせさんず、大將ごらんじ何と一のたには、さかおとしに成所やある、さん候我々けんぶん仕候所に、き丶しにこへてけはしく、人間のかよふべきとは思はれず、いはまをつとふほそ道一つ有とはいへ共、くんしはあやうきに近付ずと申せば、只はまべを打て出、ひらせめになされなば、らくじやううたがい有まじと申、よしつね聞召、是程の城を日數をこめおとさんに、何の事か有べき、其上一の谷をさかをとしにして、一こくに打つぶさんこそ、ちぼうけいりやく共いふ、其上此よしつねが一ごんいひ出せし事、ひるがへす事なし、兩人はあとに殘り命をながくもて、ぐんぜい共よういせよとの給へば、いせするがこはなさけなき御ことば、命は君に奉りし我〳〵に、とゞまれとはなさけなし、大將聞なんぢらが申も、一り有ばあしくはきかね共、らんせいの時はがせつを以おさむといへば、大將がおくる丶ことばをきいて、しそつおくる丶、よしつねが今のことばもしそつをいさめんためよ、其方にむかつてのりつぷくでなし、さあちかうよつてようだいをかたれ、畏つて兩人、一の谷のあんないを一々かたれば、よしいか程のなん所成共、よしつねがむね

に有と、諸ぐんせいを引ぐし、一の谷へぞむかはる、こゝに平家侍いがの平内左衛門は、びやつこを見付、弓に矢をはげおつかくる、きつねはおはれ、あつもりのやかたへにげ入ける、をくよりこしもと立出、こは平内様か、みだい様の御出なさるゝといふ所へ、みだいきつねをかこひ出給へば、平内見付いんとする、みだいおさへ、何ゆへ此きつねをころさんとはする、さん候ぢん中できつねあらわるればらくじやうすると申、ふきつにて候へばそれ故いまするおのきなされ、みだい聞そちは此城は、まだらくじやうせぬと思やるか、もはやおちて有、一もんの衆ははや舟にのりおち給ふ、つまのあつもり様は、其方のつれおち給へば、だれ有て此城の大將とならん、すればらく城といふ物、此きつねの來りしは、まだ神のりしやうも有と思ふ、平内聞ふきつ成きつねをなぜ左様には仰せらるゝ、さればみづからはいなり明神の申子じや、それにきつねのあらはるゝは、まだ神のちかひが有と思ふてうれしい、ころさする事はならぬ、平内聞、承れば尤に存る、いかにもたすけ申べしと、きつねをよびよせ、やいそちは今ころさるゝはづなれ共、みだい様のおなさけゆへ命をたすくる、ちくしやうといひながら、某がいふ事をよくきけ、御一もんは申におよばず、べつしてあつもり様の御命に、べつぎないやうにまもれと、念頃に申せば、みだい立より、命をたすくる程に、あつもり様のかげ身にそひて、まもりの神と成べしと、こまぐといひふくめはなし給へば、きつね悦て草村へ入にける、みだい平内にむかい、只今は何ゆへかへりしぞ、さん候あつ盛様、あをばのふゑを御しつねんなされしゆへ、取りに參りました、みだい聞おれがしあんが有、今は先わたすまい、あつもり様のふゑのことは、くはんとう迄かくれがない、みづからが此城にふゑをふいていたらば、てきはあつもりのましますと心へ、此所へをしよするであらふ、少でもひまをさらば、其間にあつもり様のおち給ふといふ物よ、ことに此ふゑは、御手になれさせ給ひしなれば、せめてあつもり様にそふているとと思ふて、みづからが手にふれたい、其方は立かへり、ふゑはみづからが手よりわたさふといふたと申せ、平内聞げにおまへの此ふゑをふき御座候はゞ、てきはあつもり様と思ふべし、たとへくみふせたり共、女なれば命に

べつぎは有まい、其まに少でも君の おちのび給ふなれば、然らば立かへり君をおとし、おつ付むかいに參るべしと、おいとま申行にける、こしもとは先おくへ御入と、みだいをともない入にける、ゆふべの空のくものなみ、しゆらのたいこやなみのつゞみ、かせんのちまたにがくのおと、あをばのふゑはおもしろや、ここにくまがへの二郎なをざねは、只一人しのびて此所へ來り、ふゑのねに聞入、扨もおもしろいねかな、あつもり殿はまだ此やかたにまし升な、此みとせいぜんに用事有都へ上り、おむろの花一見に立こへし、其時あつもり殿ふゑのねを聞、あまりおもしろさにみぬ戀にあこがれ、とうざを書ておくりしが、誠お若衆じやは、其まゝへんかをくだされた、それゆへはだをはなさず持ている、其後源平かせんをあらそふ、某しのび此所へ來るは、ついごあつもりの おかほをみねば、どうぞ御めにかゝりおとし申さんため也、何とぞ内へ入たいと、長刀のゑにてもんをつけば戸びらあけば、是はもんがしめずに有、さいはひじやと、もんの内へ入ば、みだいあつもりのすがたに成打かゝり給へば、くまがへ打物たゝきおとし取てふせ、某にむかつて太刀打はすいさんな何物じや、いやさ某をくみしいた其方は何物じや、おゝ身はかくれないと、なのらんとせしがしあんし、身ははるかすへの名もなき物成が、ふゑがおもしろさに聞にきた物じや、何ふゑをきゝにきたとや、其方はくはほうな物じや、某がくび取大將よしつねにみせなば、引上侍に成であらふ、某こそむくはんの太夫あつもりよ、くまがへはつときもをけし、引おこし御かほをつく〴〵みて立のき、扨〳〵うつくしい事かな、何とぞしておさかづきがいたしたいと、こしにつけしひやうたん取ふところよりさかづき取出し御そばへそろ〳〵と立より、おまへがあつもり樣でましますか、是はあづまのにごりざけにて候が、かせんを仕りせいのつきたる時は、一はいのみ心をはらし候、おまへも一つ參り候へとさし出せば、はてそなたは心のやさしい人やと、さかづき取上是はあぢななりじや、さればそれはくまがへさかづきと申するといへば、是で思ひ出した、いつぞやおむろのくはげんの時、くまがへの二郎といふ侍某に心をかけ、ふゑのねに我が玉のをもたへぬべし、さくらの花は春はさきけりと、歌をおくら

れし、心ざしをかんじへんかをしたが、其くまがへ殿はごぞんじでないか、成程念頃にかたります、則其さかづきも、くまがへのし出されしゆへ、くまがへさかづきと申ます、扨は左様か、然らばくまがへ殿にあふと思ふて、一はいのまんと引うけ一つほし、なふこなたを頼む、あつもりが申是は衆道兄弟けいやく、かためのさかづきじやといふて其くまがへ殿へしんぜてくだされ、もはや思ひのこす事もない、某がくびを取給へ、くまがへさかづきおしいたゞき、あらうれしの心ていやと、引うけのめば、なふなこたへはさゝぬなせのみ給ふ、いや某がのまいでたれがのみませふ、私がくまがへにて候としゞうをかたり、いざ〳〵おさし申さんかたにかゝらせ給へ、扨は左様かとの給ふ所へ、あつもり来りなふくまがへ、兄弟けいやくのさかづきをいたゞくとのまんとし給へば、是はそなたはたれ人じや、はてあつもりじや、いやおれがあつもりじやとせりあい給へば、あつもりは是みだいくまがへの心ていはしれた、有やうに申されよ、時にみだい誠はあれ成があつもり様也、私はみだいもみぢのまへにて候と、一々やうす語り給へば、扨は左様で候かと申所へ、平山のすへしげ大せい引ぐしかけ来り、やあくまがへてきはあつもりとみへし、何とてうたぬたゞし平家に二心有か、くまがへ聞されば只今あつもりをくみとめし所へ、又一人あつもりが出たるゆゑいづれがあつもりならんと見まがふている、某が存るにはあつもりはさきだつておち、是は小性共があつもりとなのり、命にかはるとみへし、なぎさのかたへおちたであらふおつかけん、其方もおつかけられよ、平山聞いや〳〵尤平家の一もんはおちたれ共、あつもりは此やかたに有にきはまつた、其中があつもりじや、二人共にくびを打、大將のまへにてじつけんにいれん、くまがへ聞いや〳〵何物共しれざるくびを二つ持て出、此内にあつもりがござらふ程にみはけてくだされと、うろんなる事はいはれまい、其上某がくみとめたるてきなれば、ころさふといかさふと某が心しだい、其方はかまふな、むゝ其ことばがらは平家と一みじや、くまがへ共にのがさぬと打てかゝれば、心へたりとくまがへ、みだいもろ共太刀ぬき、平山をおつちらす、あつもり是迄と思召、さしぞへをはらへつき立、是くまがへみだいとよびかへし、

さあ〱くまがへ其方が手にかけくび打て、あとをとふてたべとの給へば、こはなさけなやとなげく所へ、平山かけもどり打てかゝる、くまがへみだいをおしのける、其ひまに平山かけより、あつもりのくび取にげかへる、くまがへなむさんぼうとおつかけんとすれば、みだい是迄とじがいせんとし給へば、こはまち給へとおしとめる、所へ平内來り、やあくまがへのがさぬぞ、くまがへ聞やれてきではないぞ、てきでない物がなぜみだいを手ごめにする、されば只今平山のすへしげが、あつもり殿を打、くび取てかへりし、それゆへみだいの共にじがいとの給ふゆへ、それをとめている、平内聞いよ〱うろたへた事をいふ、敦盛様は身が御供申た、なふ御出ましませといへば、あつもりかけ來りなふみだいかと取付給へば、くまがへおしわけつく〱みて、はてふしぎな、只今うたれ給ふあつもりの、くびのあらふはづがない、平内いかつてうたれ給ふが誠ならば、其しがいを出してみせよ、おおしがいこそあれと、さい前のしがいを引出しみれば、ふしぎやきつねのからだ也、くまがへ是はとあきれいる、時にみだい平内にむかい、是はきたいや、扨はびやつこが身代りに立し物ならん、平内げに左様にて候と、有しやうすを一々かたればくまがへ聞、扨さてきたいの事かな、いざ先をとし申べし、大せい一所はいかゞなれば、平内殿はみだいを御供し、都新くろだにへむけおち給へ、某はあつもり殿をつれぢん所へかへり、めしつかいの物にしておき、しゆびをみて都へおとすべし、時にみだいあをばのふゑをあつもりへわたし、めでたくおい付たいめん申べしと、御いとまごいなされ、兩方へわかれ給ひける、かくて源氏の大將よしつねは、一の谷をまつくだしに、おめきさけんでおとし給ひ、一こくに平家をおつちらし、かち時つくつてぢん取給ふ、所へ平山御前に參り、あつもりを某が打取て候と申上る、大將聞召おゝあつはれなてがら、くんこうはかまくら殿より仰出さるべし、それ〱帳面にしるせとの給ふ所へ、くまがへはせさんじ、あつもりを打取候と申上る、大將聞やあくまがへ、あつもりは只今平山が打取しと申、則帳迄にしるしたり、所に又其方が打たるとは、たゞしあつもりは二人有か、時に平山つゝと出、是くまがへ、あつもりは某が打取た、何事をいふ、いやと某が打たり

こ、両方せりあへば、よしつね聞召とかくのろんはむやく、やいくまがへあつもりをうつたといふせうこが有か、さん候くみふせて候時、あつもりの給ふは我くびをよしつねの前へ出さば、ごくもんにさらされんが口おしい、其方侍と思ふて頼む、くびをばかいちうへしづめてくれよと頼まれしゆへ、くびはうみへしづめ、印にあをばのふゑを取候とさし上れば、げに是はあをばのふゑ也、して平山が打たといふはいかに、さん候某はふゑなどをせうこにいたさぬ、あつもりのくびを取て候と、くびをつゝみしきぬおしあけ御前へ出せば、ふしぎやきつねの首なれば、こはいかにときもをけす、くまがへ立より扨〳〵あつもりのくびはきつねじや、げに思ひつけた此の一の谷にはふるきつねが有て人をばかすといふが、扨は其方をばかさんと、あつもりに成、馬にのりさきへ行しを、あつもりと思ひ打取給ひしな、其馬とみへしはわたくりであらふ、さしものはなんばんたうきび、よろひはほしなであらふと打わらへば、よしつねみてゑゝ畜しやうにたぶらかされて、うろたへ物めが大事の帳迄よごした、さう〳〵是よりかまくらへかへれ、やいくまがへでかした〳〵、くんこうはかまくら殿よりおこなはるゝであらふと、ぐんぜい引ぐしがいぢん有、平山はめんぼくうしない、がてんのいかぬかほつき也、くまがへみて、是あとでさんようしてあふ物でないぞ、まだきつねのどうるいがあらふ、ばかされぬやうに、どこぞでまもりでもいたゞいてかへられよと、打わらひ立かへれば、やいくまがへ、某かやうのちじよくを取もおのれゆへ也、のがさぬと打てかゝれば、すいさん也と切合せ、なんなく平山切ふせる、平山が弟くま次郎、こはむねんと大ぜい一ごに打かゝる、所へあつもりかけ来り、やあくまがへあつもり成ぞと打てかゝり給へば、くま次郎扨はあつもりか、一所にのがすなと打てかゝれば、くまがへ長刀のゑにてあつもりを打ふせ、でつちめがすいさんな、あつもりとは何をいふぞと、くま次郎をおつちらすあつもりは是心がはりかくまがへ、なぜ某を打ふせる、いやさこなたの名をかくさふためじやといふ所へ、くま次郎又おつかけ来る、両人心へたりとさん〳〵に切はらひ、さあしゆびはよいいざのかんと、くまがへあつもり手に手を取、一先其ばを立のきける、

第二

女房おきくはかごをばかつぎ、さきへあゆめばあさから七兵衛、子をせなにおい、一のたにをおりんとすれどけはしき坂で、女房は七兵衛がぼうに取付てさきへおるればあさから七兵衛、子をおろしつゝ、一のたにをばゑい〳〵つきて、やう〳〵ふもとへおりにける、女ばうはなふあれぼうづがあとにいまする、おろしてやらしやれ、はて先あそこにおけ、あいつをこゝへおろせば、さしあいできうくつな、ちと心をはらしたがよいと、女房がしりをたゝけば、子は坂の上より、ようとゝさまぬれ申といへば、女房聞しやうのわるいがこなたににて、あのいふ事をきかしやれ、おれがどこにしやうがわるいぞ、はておれとめうとにならしやつたも、しやうのわるいからじや、そんならせけんの女房持物は皆しやうがわるいか、いや女房持もちうが有、こなたのやうに女房をうばふといふは、しやうのわるいでないか、其上おれは兄弟が四人有、わしがあねで皆おなごじや、おれにほれてうばはしやつたればまだよいが、いもとにほれ取ちがへうばはしやつたやらしれぬ、はていちごさふ女房を、めききせいでうばはふか、成程そちをみてうばふた、いやおれはついどこなたをみた事はないが、どこでみさしやつた、おゝすま寺でそちはこしもとをつれ、ゑんまをかけていた、むゝそれか、それはわしがいもとのおしもじや、すればいもとゝ取ちがへおれをうばはしやつたか、さあいもとさへうつくしいさかいて、あねはなをよからうと思ふてぬすんだと、いろ〳〵といひなをせど、皆いもとの事なれば、扨もあくしやうなゆだんはならぬ、さああの子をおろしてやらしやれ、わしはこゝでわらびを取と下にいれば、七兵衛は子をおろしに、一のたにへ上る所へ、二八計の女來り、なふこゝは女のおりられる所でござるか、いやいや女のおりられる所でない、あの下成女もむりにおりてこしをぬかしていやります、はてきのどくやこなたを頼む、どうぞおろして下され、いかにもおろしてやりませふが、此所にはをりるじふんがござるぞれ迄待給へ、其間名所をおしへ申さんと、めい所にかこつけさま〳〵とたはふるゝ、たに成女房はなふこちの人もはやをり給へやいぼうずさゝまは何して

いやしやるぞ、子聞よそのおなごとだかれてじやと いへば、ゑゝしやうわるがとはらを立、七兵衛をだま し皆下へおろし、さだめて出あい女であらふと、りん きしたびの女をさらへ、かほつくゞみて、はてふし ぎや、みたやうな人じや、されば わしもこなたをみた やうな、女房聞してこなたの所はいづくぞ、わしはい くたの物で名はおしもといひまする、何おしもか、お れはあねのおきくじや、なふ扨はあね様かと、悦びた いめんしたりける、おしも申はおまへのうばはれ給 ひしを、父上いかいおはら立で御かんどう有しを、い ろ〳〵そせう申たれば、少御心やはらぎしゆへ、私か やうにしのびて、おまへの行ゑを尋候所に、只今たい めん申うれしさよ、いざ御ふうふ共にやかたへ御入 有、父上にわび事をなさるべし、しゆびは私にまかせ 給へと、人々をつれいくたへきたり、七兵衛にむか いおまへは是にしばし待給へと、あねおきくとおさ ないをつれ、おくへ入にける、所へいもとおかちおし げ立出、あね様のおかへりなされ、是程うれしい事は ない、あね様をうばい給ふ男をみんと、七兵衛をみて 扨もよい男じや、是へよびお近付にならんと、をくへ よび入れば、七兵衛あくしやう物にて、いろ〳〵とう そをつき、いもと共にたはふるゝ、所へ女房出、父上 の御出といへば、いくたのせうじ侍引ぐし立出、おき くとみつつうの男といふは其方か、りふじんにうば れしゆへ、殊外きつくはいに存た、然れ共子迄でけた 事なれば、ふくりうをやめたいめん申と、さかづきを さし給へば、七兵衛おしいたゞき一つうくれば、それ それさかなとあれば、おしもは太刀一ふり持出、是は 家のてうほうなれ共むこ引出物にしんぜらるゝとわ たせば、七兵衛をしいたゞき、御たいめん有さへ忝な いに、てうほう迄下さるゝだん、めうがもなきしあは せなり、おゝ扨其太刀は其方のしつていやるはづじ や、私は百性の事なれば、太刀のやうすは存ませぬ、 いや〳〵おぼへがあらふ、然らばそこ中をみませふ と、ぬきかけよく〳〵みて、げに是は承りおよふた太 刀でござる、一とせ八島のみだれの時、あく七兵衛か げきよが、さいかいのそこへしづめし、あざ丸と申太 刀也、是がこなたのてへは、何として入ましたぞ、む むすればあざ丸といふをたしかにみしつたな、それ のがすなといへば、侍共取てかゝるを、心へたりと、

よるものを七八人取てなげ、こはらうぜきな何事ぞ、せうじ聞、いやさ其あざ丸をしつているうへはのがれは有まい、なんぢは景清じやのがさぬぞ、あ丶をさたかし〳〵、よそにも人のきくぞかし、其あく七兵衛かげきよといふは、平家の侍大將、左樣な物ににるもいや、只ごみん百性とはの給はで、かげ清とは何事ぞや、せうじ聞いふな〳〵あらはれた、此度かまくらよりとも公より、かげ清を打て出せとふれがまはつた、もしかやうのぎを、わきよりそにんせられては、某一家たやさる丶、それゆへ其太刀をみせたれば、あざ丸といふからは、かげきよにまぎれないぞ、是おやぢ某をよしば其かげきよに もなされ、かやうにむこしうとのさかづきをいたし、まご迄有でないか、それをそにんなされたとま丶、こなたのつみものがれまい、おおまごがいきていれば、其ゑんにひかさる丶ゆへ、さいせんをくでさしころした、何せがれをころしたとやなむさんばう、女房はなふなさけなやと歎くを、七兵衛はつきたをし おのれも皆一所じや、 さいせんよりの事は、某を此所へまねきよせん ためのたばかり事で有しよな、某こそかげきよじや 我子のかたきのがさぬと、太刀ひんぬき切むすび、なんなくせうじを取てふせ、むねにかたなをおしあつる、せうじはやれれうじすな、是にはやうす有、まごともころしはせぬそれつれて出よといへば、おしもやがてつれ出る、かげきよみて是はがてんのいかぬ、どうした事でござる、お丶ふしんは尤じや、其方に賴む事が有、それゆゑ其方の心を打みんためじや、誠にあつはれな侍じや、何と賴まれてたもらふか、何が扨いかやうのぎ成共、いなと申さふやうはない、お丶うれしい、誠に平山のすへしげはくまがへにうたれた、其すへしげが弟くま次郎といふ物、我〳〵をほろぼし、此いくたのさとをおふれうせんとする、それゆへ一るい大かたうたれ我〳〵計りに成た、某はさしよつたれば、かれを打事はならぬ、其方はおきくとふうふなれば、此事を賴みくま次郎を打てもらはふと思ひ、心ていを引てみた、賴むといふは此事也、扨は左樣かおきづかいなさる丶な、私がためにこなたはしうと、しうとはおやよ、其こなたをうたんとするくま次郎なれば、某がためにもかたき也、さつそく打つて望をかなへ申さん、ゑ丶むねんなはいにしへのかげ清ならば、大せい

を以てつゞく打取、御心をはらし申さんに、くま次郎はいせいつよし、我はかく百性のていなれば、しばらくもじこくをうつすがむねんな、かく成はてしも何ゆへぞ、源氏はさかへ平家は日々におとろへるゆへ是につけても思ひ出すは、いで其頃はげんりやく元年、三月十八日のことなりしに、源平雨ぢんのかいがんにはつて、たがいにせうぶをあらそふ、のりつねの給ふやう、何とぞよしつねを打、はかりごとやあるとの給ふ、かげきよ心に思ふやう、はうぐはんなればとて鬼神にてもあらばこそ、命をすて はやすかりなんと思ひ、のりつねにさいごのいとまごい、くがに上ればげんじのつわ物、あますまじとてかけむかふ、かげきよ是をみて〳〵、物〳〵しやさいふひかげに、打物ひらめかいて、切てかゝればこらへずして、はむかいたるつわ物は四方へ、ばつとぞにげにける、のがさじと、さもしやかた〴〵よ、一人のとめん事は、あん内物こわきにかいこんで、何がしは平家の侍、あく七兵衞かげきよと、なのりかけ〳〵、手取にせんとておふて行、みおのやがきたりける、かぶとのしころを取はづし〳〵、二三どにげのびたれ共、思ふかたきなればのがさじと、とびかゝりかぶとをおつ取、ゑいやと引ほどに、しころはきれてこなたにとまれば、ぬしはさきへにげのびぬ、はるかにへだて、立かへり、さるにてもなんぢ、うでのつよきといひければ、かげきよはみをのやがくびのほねこそつよけれと、わらひてさうへのきにける、むかしわすれぬ物語、をとろへはてて心さへ、みだれけるぞやはづかしや、此世はとてもいく程の、命のつらさすへちかし只頼むぞよ頼むとのたゞ一こゑをきゝのこす、是ぞおやこのわかれ成、かげきよはきづかいなさるゝな、くま次郎は打てしんずると、かほふり上みればこはいかに、せうじむすめ其外の侍皆うせはて、やかたとみへしは草村の石とう計りのこりしはふしぎ成けるしだい也、かげきよおどろき、こはゆめかうつゝか、うつゝかと思へばもらふたるあざ丸はこゝに有と、ばうぜんとあきれいる、女方申やう、扨はおまへの私をうばひ給ひしあとにて、父上やいもとはくま次郎といふものにうたれ給ひ、其かたきをこなたに打てもらはんため、父上のぼうれいかりにあらはれ、頼み給ひしものならん、かげ清聞げにそふじや、誠に今迄有とみし人もなく、

又かくいふ我もとゞまらず、一もつうじやう又むじやう、尋ねみればもとはくう、梅もとみへてのきくさの、みつばよつばにとのづくりせしも、あれあふちの木からすのこゑ、おや子のさかづきめでたいといふて、さゞんさのこゑと聞しは、うら風なりけり高松のおと、いはほと成てこけのむす迄といはひしも、地水火風空のせきとうよな、くうの身がむぐらの我にたのんだか頼まれしぞ、かたきはうつぞうかみ給へ、なみあみだ佛とゑこうして、いざ女房かへらふと、おや子三人かへりける、きたいなりけるしだい也、こゝにらうにんみかげかん介といふ物、七兵衛所へ來る女房立出、るすでござりますといへば、はてあいたいが、よいこなたに申ておかふ、べちの事でもない、平山のくま次郎といふが、こんど此所のしゆごとなられしが、兄すへしげはきつねのわざゆへくまがへにうたれし、それゆへきつねは兄のかたきじやといふて、此所のきつねをかりたやす、それゆへやくにさゝれて、家一けんにわな一つづゝわたす某はぎやうじゆへわなを持てまはる、七兵衛かへられたら此通をいひ、きつねをつり給へ、女房聞きつねといふ物は、しやうねのをそろしい物でござんす、つる事はむようになされませ、天ぢくでははんぞく太子のつかの神、たいたうではゆう王のきさきとうじとげんじ、我朝ではとばのいんの上わらは玉ものまへ、其しうしんなすのせつ生石と成、てうるいちくるい迄命を取しと有、つり給ふ事はいらぬ物、かん介聞、物語をきいてはおそろしい事じや、おれもつりますまい、わなもすてませふ、女房聞其わなといふ物をちよつとみせ給へ、おゝやすい事と取出しみすれば、女房はつとけしきかはる、かん介みて、はてきつうこはさうなこはい物ではない、して是はどのやうにしてつる事でござんすぞ、おゝしかたをしてみせませふと、わなをつき立、是がねずみのあぶらげ也、そも此あぶらげと申は、ういきよかんきよ、ちんぴさんせうであげた物なれば、此にほひが十丁四方へひゞくと申、此にほひがはなへ入と、かのきつねがのさり〳〵と出て、くはふ〳〵とする後にたへかねくいにかゝるを、わなを引しめたたいた物じやと、しかたをすれば、女房はきつねのごとくしたりける、かん介はゆうべよりはうばうへわなを持て行くたびれた、ちとこゝでやすま

ふといへば、女房めいわくさふにてさけ一つ參りませと、さけをしいてのますするうちにも、わなへこゝろをうつしうろ〳〵する、かん介はさけにゑいねいれば女房はおびをとき、上成小袖をぬぎ、かん介がかほへかぶせ、かのわなへねらひより、ゑゝはらのたつ、此わなゆへおゝくのきつねをつられた、いでかたき打せんとつゑふり上、ちよこ〳〵とはしりよりてうと打、あぶらげのかざに心とられ、思はずやかんのかほと成、かん介おき上り、なふおないぎ、かほがちがふたといへば、なふはづかしやとおくのねまへにげ入ける、かん介きもをつぶし、扨〳〵おそろしや、七兵衛ないぎはきつねじや、七兵衛が此ていをみたらば、おれをもうらみるであらふ、先かへりませふと、かへらんとする所へ、七兵衛かへり内へ入みれば女房がきる物おび取ちらし、まくらさけさかづき有ければふしんをなし、かん介を取てふせる、是なんとする、おゝみつけた、何みつけたとや、そんならはら立るも尤じや、さりながらそちとおれさへ心を合いはねば、ないぎの名もたゝぬといへば、やい此だんに女房をかばふか、女も共にかさねる、まおとこめといかれば、やい何おれをまをとこじやといふか、それは見つけやうがちがふた、是にはやうすが有、一通ときいて其後はいかやうともいたせ、おゝいふ事あらばいへと、かたなをうばいさあ申せ、さればそちは此きる物何かのていをみて、まをとこといふさふながさふでない、そちが女房はきつねじや、はてひけうななんぎをのがれんとて身が女房をきつねにするか、いやいつはりでないと、右のしだいをかたり、きつねのかほと成おくへかけ入し、それゆへ人がみねばよいが、もしそちがみたらばおれ迄うらみるであらふ、見ねばよいがといふ所へ、そちがもどつてみたといふゆへ、きのどくやといへば、そちはま男を見付たといふ、見付所がちがふといふは此事じや、いや〳〵左様にいふとあつてもがてんがいかぬ、然らば女を是へよび出し、きつねならばぜひもなし、人間ならばのがさぬぞよ、おゝ又きつねならばいひぶんが有ぞ、おゝいかにも先其間なはをかゝれと、わなのなはにてしばりかたはらにおき、扨女房を何としてみんとしあんし、やあもどつたぞ、風がふいてかみがそこねた、かゞみ持てきてなでつけてくれよ、女房かゞみを持

て出、むかふに立、かみなでつくる、かゞみへうつるほをみればきつね也、七兵衛是はといへば女房はつとおくへにげ入、七兵衛がをり、かん介がなわをとき、扨〳〵めんぼくない、此上は某をいかやう共なされと涙をながせば、おゝ心ていを思ひやられていとしい、某は先かへるといへば、七兵衛聞こなたも見付給ひし事なれば、是にござる時女をよび出しわけを申、やはり是にいるやうにいたしたいおゝ左様になされ、七兵衛は女房をよべば、しやうじの内よりいや出ますまい、ぜひ出よならそせうがござります、私にひまを下されなば出ませふ、おゝどう成共せふ先出よといへば、女房のかほにて、しほ〳〵と立出る、七兵衛みてくるしうないぞ、たとへやかんなればとて、今迄のなじみをわすれんや、扨はいつぞやいくたにて、おやといふたもゆうれいでも有まい、いかにもそれも皆私がしはざにてござります、私がおやぎつねは、平山のすへしげにころされました、それゆへすゑしげはくまがへにうたれしゆへ、平山が弟くま次郎きつねは兄のかたきじやと申てけんぞくのきつねを皆ころしますゆへ、其かたきを打てもらひ申さんため、かりにふうふとなり、いくたにて頼みしも、おまへをたぶらかしました、いよ〳〵くま次郎を打て下されませ、たとへいかやうの事有共、あの子が十に成迄みそだてんと思ひしに、あさましきすがたをおまへに見付られ候へば、かはす枕にも心がをかるれば、もはやふるすにかへる也、なごりおしきはあのわか也と、涙ながら立ければ、七兵衛引とめ其だんはくるしうない、先あの子にいとまごいもせよいや〳〵わかをみては心がみだれあしし、只かへす〳〵若が事を頼む也、何としたか此程はよに入て三ごつゝおそはれ候ゆへ、いしや殿にみせ候へば、日頃かんけなゆへ、むしが出たと仰せられくすりを下されました、わしがはりばこにござんす程に、みつぶづゝのましてくだされませ、あゝなごりをしやといふをば、いだきとめればすがたはきへ、小袖計りぞのこりける、かん介子をいだき奥より出、やれ此子にいとまごいさせふと思ひしに、はやかへりしかや、是七兵衛尤そちとはゑんをきらふが、此子に心がのこらふ程に、此子をつれいくたへ行なば、母があらはるゝであらふ、いとまごいをさせ給へ、七兵衛聞いかにも、しからば子を

つれいくたへ行、女房があらはれなば、むりにつれてかへらふ、其間こなたを頼むぞと、涙ながら子をいだき、いくたのもりへ行にける、かくて七兵衛子をふごへ入になひつ丶、いくたへ來り尋れ共、有かさらにしれざれば、何とかせんとあきれしが、某といもせの道あれば、はづかしう思ひあはぬとみへし、きつねといふ物はわなにかゝる物なれば、此子を其やうにせんと、ふごにいれをきやい母にあはさふ程にこうしていよ、某もすがたをかへきつねに成ていたらば、出る事もあらふと、もとよりよういの事なれば、ふごの中よりきつねのおもて取出しかぶりつ丶、やい母が出ると云ても、此やうなめんをきて出るであらふ、こはい事ではない、是はめんじやと、きつねのすがたとなりにける、所へあんのごとくおきくぎつねとび出、子をみて涙をながすぞあはれ也、七兵衛は何とぞしてとらへんと、さま〲とだませ共、心かしこき物なれば、さらにとらへられず、草村へぞいりにける、七兵衛はあきれいる、所へ女房のかたちにていろよき花を持て出、わかにとらせばいだきつ丶、ちをのます其ふせい、ちく生といひながら、おや子の心ぞやさしけれ、七兵衛は涙ながら、のこへ山こへたにみねすぎて、くるはたれゆへそなたゆへと、涙と共に申つ丶、きつねと同じやうにくるい、とらへんとすれどかなはず、又草村へ入にける、七兵衛あきれ、かほどにしてもかへらぬな、よし此上は此子をころしはら切しなんと、すでにあやうき所へ、かん介かけつけをしとめ、やれくま次郎が、きつねがりをするといふて大ぜいくる、其方をみたらば、かげきよといふて、のがすまいが何とする、何くま次郎がくるとや、かれは源氏なればもとかたき、女房とゑんはなれしもきやつゆへ也、是にまつて打とらんといふ所へ、くま次郎來り、やあきやつは景清じやのがすなと、大ぜい打てかゝる、かげきよ心へたりと、あざ丸ひんぬき切拂ふ、所へ女房あらはれくま次郎を取てなぐる、かげきよすかさず切ふせる、女房はあゝうれしうござる本望とげました、さらばとかへらんとするを、かげ清いだきとめ、せめてあの子が十に成迄そだて丶くれよといふ、かん介は侍共をおつちらし、子をいだき立かへり、七兵衛ないぎをとらへたか、つかまいてはなすなつれてかへれ、お丶はな

しはせぬぜひもどりてくれよと、むりにつれてかへりける、きたい成ける いもせかな、

第二

しづかごぜんは旅のよういし、出んとし給ふ所へやどの女房立出、こは何事ぞしづか様、おまへの事は一とせよしつね様西國へ下向の時此大もつのうらに御さうりう有、其よしみゆへおまへを此せんどうふうふにあづけおかせ給ふに、いづくに行せ給ふぞ、されば よしつね様は よりとも公と ふはにならせ給ひ、あづまへくだらせ給ふと聞、それゆへ 御あとを尋ねて行、扨は左様か 然らばこちの仁兵衛成共、供につれさせ給へ、されば仁兵衛はがてんで 供をしてたもるはづじや、扨は左様かわしには かくして何共いひませぬはらの立といふ所へ、仁兵衛はふるどうぐやをつれ來り、おれはおふしうへ行ゆへ、しんだいをしまふ、だうぐをうるかふてたもと内へ入ば、女房是を聞いよ〳〵はらを立いさかい、後には仁兵衛だうぐやとけんくはすれば、皆取さへ先だうぐやをかへしける、女房申はかやうにはらを立るも、おれにかくし給ふゆへじや、しづか様のあづまへござるなら、是をろ銀にし給へと、小判五両やれば、仁兵衛うけ取そちはかやうの心じやに、おれはむ ごいどうぐをうらふといふた、こらへてくれいと中をなをり、扨たびのよういし、しづかの御供し、あづまをさして下りける、こゝにいがの平内左衛門は、あつもりのみだいをつれおちけるが、源氏の世なれば身をかくさんため、みだいもろ共馬かたに さまをかへ、あつもりの行ゑを尋ねける、所へ仁兵衛しづかの御供し此所へ來り、馬をからんと平内といさかふ、かゝる所へ よしつねはべんけい其外のらうどう、皆山ぶしすがたにて來らせ給ふ、しづかごらんじ、なふ我君かと御たいめん有、所へくまがへ道心と成あつもりをつれ來り、こはよしつね公にてましますか、あつもり殿とはやうす有ゆへ命をたすけ、都くろ谷にしのばせ候、所にかぢはらさがしに來り、それゆへ是迄おちて參り候が、あとよりかぢはら追かけ參るといへば、みだいは何つもり様かと悦びたいめん有、よしつね聞召、某かくるらうの身と成も、かぢはらがざんげん故也、さいはいじや此所で打とらんとの給ふ所へ、かぢはら大せ

い引ぐしなつかけ来り、のがさぬさ打てかゝる、心へたりさん〳〵はぬきつれて わたりあい、こゝをせんごたゝかい、なんなくかぢはらを打取、先かご出よしさ、あづまへ下らせ給へばひで平悦びたかだち殿さあがめける、

八文字屋八左衛門板

當麻中將姫まんだらの由來

付り三月三日しほひのゆうらん
井にけい母は二人きやうだいの中

上　あをきがはらやなみまの神
　付りあらはれてしる下女がいにしへ
中　いでそのころはならの京
　付り御いたわしやおや子のわかれ
下　二上がたけにむらさきのくも
　付りとよなりたへま寺をこんりう

中將姫ごくらくのていさうをはすの糸にておらせ給ふ事
ぼさつねりくやうけい母のしうしん四天王たいじ
くじやくほうわうおんがくのまひ佛法はんじやう

一右大臣とよなり　金澤五平治
一中將ひめ　女かたかも川のしを
一まゝはゝ　鶴川茂十郎
一いもふとさよひめ　おきの万太夫
一こしもと すま／おかし　ふじたゆきへ／きり山牛太夫
一中務之丞はる時　立役瀧岡彦右衛門
一たつ田重助　金や金左郎
一三保の藏人頼ざね　川上三郎左衛門
一けいぼ　平井吉郎次
一子息せうく　若衆がた出來嶋小三郎
一おはしたこずへ／いくた　山本宇左衛門／淺川宇兵衛
一久米の六郎光重　座本荒木與次兵衛
一同女ばう　花井喜世三郎
一弟久米の藤太　梅田八十郎
一弟久米の伊織　宮崎彌津三郎
一下女みさき　女がた松本玉のい
一下人とら藏　てきやく小野山宇治右衛門
一けんみだい　立役さるわか三左衛門
一せきのとの與市／みよしの源太　さよ田だん右衛門／につさり二郎左衛門

當麻中將姫まんだらの由來

上

はるなれや彌生三日のしほひさて、われおさらじさすみよしにあゆみをはこびうみつらをみわたしいつはいさけのよいきげん、はま松のこかげにまく打まはし、くんじゆの人をみる中にこう三條のくらんご、頼さねの一子少將、御供には久米の八郎がおさゝいほり、下らうさらぞうにべんさうもたせ、わざこ御身をやつししう〳〵三人すみよしにもふで給ふ、せうせう仰けるいかにいおり、げに此うらの名所あつはれわこ〳〵いふらけい、むかふにみへしはあかしがた、ひやうごのみさき一のたに、あはじの嶋もめの下に、みゆるなぎさのあまを舟こぎわたるよそおひ、是をながめてさけ一つのむべし、げにあれなるひがたにやすみ心しづかにながめんさの給へば、さら藏かしこまりべんたうおろしいたりける、其折ふしさよなりのそく女中じやう姫、御いもふささよ姫其外こしもこあまためされまくのそさへ立出給ひ、少將のおもかげを御らんじ、やい〳〵こしもこ共あの若衆さまは正しく少將さまさみた、おそばちかく参よりそこお物語のしたい事も有、皆々供してこいさ少將のそばへ立より、申〳〵さの給へば、少將はあみ笠かつぎこなたの事にて候か何の御用にて候ぞ、そりやそりやおかほがみゆるはさの給へば、こしもこ共は口・をそろへなむあみだぶつさいふにおごろき立歸り、扨もうつしひ若衆かなこいふ所へ、おく〳〵がら三立川十助立出、是々こしもこ衆びろう千万何事でござる、又お姫様にもはしたのふぞんじます、はやかりながらおたしなみなされませい、まくのうちはもじやもじや致ます、中將姫聞召されば其事あれにござるはよりざね公の御しそく少將さまじや、ない〳〵いもふささよ姫の心をかけていやる、其上けふしほひにここよせおれもみつ〳〵お物語のする事も有、何こぞおめにかゝりたさに今のごさくさやかくさした、十介承り扨はあなたが少將様でござりますか、お姫様それはてがわるふござります、おいもとごの戀をとりもつかほゝなされまして、旨い所はしてやるがつてんじや、さよ姫あねご様じやこおもふてごゆだ

ん被成ますなさいへば、いや〳〵まつたくそふでは
ない、先さよ姫がおもふ心をちよつさしらしたい事
じやさの給へばいもふさ君聞召、さん候若少將樣に
おめにかゝる事もあろふさぞんじ、たんざくに歌を
かいでまいりました、是はさいわいさこしもさすま
同あかしに仰わたされ、此たんざくを少將樣にわた
し返歌をとりまいるべし、かしこまり候さ少將の御
前に參りこゝに、たんざくをわたし、さくぞうまかりいでせりふ少將うけさり給ひ返
歌をなされけるを、こしもさ共悦うけさり歸りよろ
こぶ、すゝ少將の御前へ罷出、是にはめづらしいおすが
た、さつそくながらしゆくん中將姫、みつ〳〵御物語
申たきよし申こし候、少將聞召いかにも今日此所に
ておめにかゝるはづじや、しからば御供申さんさま
くのうちへいりにける、中將姫立出めづらしや少將
樣、ない〳〵おはなし申そふさ存じふみしんせまし
た、こゝでこおはなし申ませふ、やい〳〵みなの者ちこ
わきゑよれ、十介かしこまり申お姫樣是におります
もの共はお手まはりの者、殊にしゆ人のぎをさた致
すものはござりますまい、何事にても御ゑんりよな
くお咄なされませい、姫聞召いかにも〳〵そうじや、
しからばかうした物語をまたすでにもいふな、扨少
將樣よの義ではござりませぬ、私程世に淺ましいも
のはない、ちぶさにゝてはゝ樣にわかれみなしごさ
也、殊に只今のはゝ樣はけい母、いかなる御事にや私
をにくうおほじめさるゝ事、ま事にわらはがかたち
のすなをなるに付、きさきにたてんなごゝの御うわ
さも有、母樣のおぼしめさるゝは私さへなくば、これ
なるいもふさを天上のまじはりすべきものおさ、只
これのみおぼしめさるゝ、其うへにお前樣のはゝ子
さ私がはゝ樣さは御兄弟、お前のはゝさ樣より、何さ
て中將姫をいけおくぞ、はやくころしていもふさを
きさきにそなへるしあんをせよさ、ひゞにしゝやが
まいります、其せうこには是なるさよひめがよふしつ
ていやりますひごろにくい〳〵さおぼしめすに又ぞ
やお前のおふくろ樣か、さま〳〵の事を仰こされま
す故、わたくしの身がいつくてたさふさおぼしめさ
れます、母樣の惡をたのものにははなされませず、お
前樣を賴おふくろ樣ゑごいけんを申てもらいなば、
すこしはお心もやわらぎませふさぞんじ、此所でお
めにかゝりお物語ます、少將聞召いづれおもひはお

なじ事、私も母様とはまゝしい中にて、折もがな私をうしないおごと大助に世をつがせこふおばし召、みお心の有に今何を申あげたとあつて、中々御せういんはござりますまい、お前様や私は、いかなるひとがおやとなり子となりました、はてせめころさるゝをまつばかりでござりますと、泪をながし給へば、十助申けるは御兩人様の御しんせつ中々おいたはしうぞんじます、御物語のうちに私御兩所のおふくろ様へ御いけん申あぐるしあんの仕りおきました、其義は少將様のかたには、くめの八郎と申御家老、又御方には、はるときさと申しつけん、御兩人ゑ右のおもむきを申入、ごいけんをいたさせなば、よもかしお心のなをらぬ事はござりますまい、お心やすふおぼしめせ、まづおさかづきと申上る、さよ姫聞召申あね様、私が事はなんとしてくださんす、中將姫きゝ給ひいかにもわすれた、申少將様、ない〳〵さよ姫が御しうしんなと申ます、今日程よいしゆびはないふうふのおさかづきをしてくださんせ、何が扨ごうなり共との給へば、さら藏は悦、いでさけかふてまいらんと立出る、十助悦まづ〳〵まくのうちへおほいりなされませいと、皆々つれだち入にける、かゝる所へろう人とみへし侍二人、まくのうちをのぞくとてあしをふむ、いやりよぐはいものさむらいのあしをふんで御めんといへばすむ事か、かくごうせよといへば、手をさげわびるにかんにんせずばはてぜひにおよばぬ打はたすぶんと、たがいに身ごしらへする所へ、少將いほり立出さま〴〵あつかい給へどさらにきゝわけねば、少將りつふくましまし、さふらいとおもひあいさつしてくやしい、めん〴〵心まかせにいたさるべし、あいさつ是迄成といらんとし給ふ、兩人のものいかつてさふらいをとらゑてぶしでないとはしたながな、今一ごん申てみよ、其座をたゝせぬといふ、少將きゝ給ひ、何某をのがさぬとはおかしい事をいふものかな、いかにもあいてになるべしとすでにあやうき所へ、さら藏一もんじにかけ付少將いほりをかこひ、是々旦那きや・つらが口論はつくり事じや、さい前さけさりに行さきでこいつらにあふた、其時きやつらぬかす事は、少將がみへた、にせけんくわをしたらば定めし少將があつかいにでるであろふ、所をとりまき打てすてんとしぐんでするけんくわじや、其しやうこ

にはあれ、兩人のやつちかひ　にならんでおるぞ是十助樣お前には少將樣ひめ君ゑ御供なされ、あとは某がうけとつた、心得たりと、十助少將姫君の御供申歸けり、虎藏いおり悦もはや心やすしと、兩人にわたしいさんぐ〵にきりむすぶ、いおりはふかであまたおいここかしこにたおれふす所へ、源太與市かけ付くびを打んとするを、ごらぞうおどり出、與市源太を切てすて、いおりをかいはうし一まづこゝを打ちのきける、さる程によりざねの北方、此度すみよしにて少將を打もらしむねんたぐいなきまゝに、はしたのこずへいくた、兩人のひそかにちかづけ、その方共にたのみおいた事は何としたぞ、さん候只今是ゑまいるはづてござりますといふ、所へ下女みさききたれり、けいぼ悦まねきよせ、扨々そちはかわゆいものや、したじたなれどつまはづれしおらしく、いにしへさこそゆかしけれ、いつくいかなるものなるぞ、みさき承り、さん候はらからさもしひものにてもなく候、ひとりのおやはしさい有て嶋にながされ給ふ、のこり給ふはゝをはごくみ申さんため、か樣のさもしいみづしぼうかう仕り候、けい母きいてさこそぐ〵扨そちにちとたのみたい事がある、よの義ではない、おれがひぞうにおもふ少將が、そちを一めみてこがれ死するふ、戀にへだてはないが情をかけてくれまいか、みさき打わらい何つがもない私をおなぶり被成ますか、いやぐ〵まつたくなぶりはせぬ、わが子が戀ゆへわずろふをおやの身としてみすておかれふか、せひかなゑてくれよと、目につばをつけ、そら泣してみせ給へば、みさきは嬉しく扨はま事にて候か、何が扨其お心をむげにいたしませふ、扨はかなへてくれるか、しからばこよひしのぶべしいかやう共仕らんと悦内に入にける、しすましたり嬉しやな、此事しゆびするものならば、その方兩人の者にべにの花のやうな小判を五十兩づゝとらすべし、沙汰なしぐ〵といふ、嬉しや小判をもらおふと□へは、けいぼはおくに入にける、こずへいゝ田はのこりつゝ、口をそろへて嬉しや五十兩づつもろふたら、おれもそなたもあきんどの所へよめ入せうと、高咄する所へくめの八郎が弟くめの藤太來り、せうじのこかげに立ぎゝし、つかつかとよつて兩人をとつて引よする、いく田こずへごうてんし何事あそばすといへば、藤太ゑせわらいさ

れば我いく田にないない心をかけ、折もあらば某が心程をかたらんとおもふ所に、只今あふた、おくゑいらんとゐさる故だきつかふとしたが、そそふなふたりながらにだきにいた何といく田、是ほどにおもふているが心にしたがい身が女ばうになつてくれまいか、やくたいもない何事をいわしやんす、侍みやうりきよこんはない、はてこな様さへ女ばうにしてくだんすならわしはどう也共といふといふ、嬉しやらちがあいたさりながらおれはよくがふかうてしきかねかいる、それもござんす、むゝかねもあるかそれは何ほど有ぞ、五貫目ござんす、其かねはどこに有、今もらいます、たれに、いやそれはいふ事がなりませぬ、めんやうな事をかくすこりやこずへ、そちもかねがあらば、あに八郎に女ばうをさらし、そなたとふうふにしたい、なるほどわしも三貫目ござんす、そちも三貫目有か、どこからもろふといへ共さらにいわず、藤太南人のとつておさへおのれしぶとい女かな、はくじやうせぬにおいては只今ころすと大刀をぬく、おどろき有のまゝにいへば、さも有べしと引たて、ひそかにおくゑしのびける、かゝる所へみさきは手しよくおもつて少將のねやゑしのぶ、所へせんみだいのゆうれいあらはれ、いかに少將われはいにしへの母也、此女にことばにてもかわしなば身の大じとなるべし、とかくしゆけの身と也、わらはがあとをもねんごろにとふてゑさせよ、あらはらだちの此女や、はやはやかへれとさん〴〵にうち、かきけすやうにうせにける、少將も泪をながしおわします、かゝる所へけい母きたり、みさき〳〵とよび給ふ、みさき申けるは、いかに悪なればとてあゝおそろしや、もはやかへりますといへば、いや〳〵いなしはせぬと少將のそばへつきやり、申との様〳〵とよぶ、よりざね何事なりと立出給へば、あれみたまへ少將が、下女のみさきとふぎをいたした、かねて申さぬ事かきつとせんぎあそばせといへば、頼實りつぷく有、しよせんみるもはら立打てすてよとの給ふ所へ、せんみだいのおとと國てる、藤太いく田こずへを引たておどり出、まつたまつた、是頼ざね、まつたく少將がふぎではない、是けい母のなすわざ、此よしをきゝ付さい前某せんみだいのゆうれいと也、段々やうすをきゝとゞけた、其せう人は此二人の女じや、けい母おどろき其まゝ

こすゑいく田を引よせ何とおこどらがしやう人か、但し少將とみさきがふぎのしやうにんか、さん候少將様とみさきはふぎにきはまつたといふ、國てるおどろき扨はきやつらはうらかへりしな、それはさもあれたゞしき少將に何とがあつてころさせん、わるくよつてけがするなと仁王立に立給ふ、みさき立出、是は何共心得ず扨はかやうのたくみにせんため、こがなきわたくしまでをつみにおとすしやん、是大との様少將様と私のふ義はさら〳〵ござりませぬ、けいばいかつていや〳〵汝とふぎばかりにあらず、少將ひめともふぎが有、藤太聞ていよ〳〵心得ぬ事何とそれにはしやうこや有、くどい事しやうこのうて大事をいおふかそれ〳〵しやう人とよぶ、貢藏おごり出、成程少將殿と中將姫にはふぎにきはまつた、おてうこは是也としほひの折からさよ姫のかたへかきおくれしあふぎをいだしみせければ、頼ざねひらきみ給ひ少將か手跡にまがふ事なし、いよ〳〵のふぎもの、それ〳〵ひつたてと有ければ、此しやうこにいふべき事なく藤太御供仕りおくをさして入にける、あとにのこるはとら藏、くにてるにむかい是々くにてる某は今迄少將様のぞうりをつかんだ下らうじや、少將様にいた時はじつがたをしたが、いかにしてもあはぬによつて此度けい母にたのまれ、あく人となつたゆへ三百石のちぎうとりとなつて、少將をとつておとした、その方もにがさぬといふ、扨は一つばいくふた、おれをつみにおとした悪人打て本望とげん、これみさきみ事きやつらをうとふか、いかにもすけ太刀いたしませふ、ヲヽ嬉しい然ば某が女ばうじやといそがしい中にたわむれとら藏を打てすてゝ、みさきをさきにたて、先そこを立のきける

中

頼ざねのしつけんくめの六郎光重、さふらいにおりをもたせとよなりやかたへ使者に來り、とりつぎにかくといふ、とよなりのかうけんはる時立出、ひさしや六郎殿、先以先刻のおふるまいには殊のほかな御しゆこう扨々たべゑひましたそれははる時下がわるい、ぎしきをぬけてもごるといふ事が有か、某しはおうらみにぞんじた、御もつ共〳〵扨おしそのおもむきはいかていの義でござる、さまでない事ならば

御家來にも御付られいで、さればしゆ人よりざね申は、とよ成公に直におめにかゝりけん上物をも指あげ、其後御口上を申すと有事にござります、是はあらたまりたるお使者、然ばとよなりへ其段御ひろういたしませふと、おくに入、右之段申上る、とよなりふうふ立出給ひ何と申頼ざね殿よりくめの八郎が使者にきたと有かはやくとうせ、八郎罷出かしこまりけん上物を指あぐる、とよなりみたまひ使者と有所に何やらふんしん物にあづかつた、定めし拙者が好物のまんぢうであろふ、八郎がいらるるうちひらいてしやう／＼はんいたそう、はる時ふたをひらけと有、かしこまつてはる時ふたをとつてみればなまくび也、はつとおどろきもとのごとくふたをする、とよなり仰けるは何とてふたをとらぬぞ、さん候御らん有てゐきなき物、そう／＼くだしおかるべし、いやとよはる時、頼ざねこんゐにしておくらるゝしん物某見ずして何と返事をするものぞ、よし何にもせよはやくみせよ、いや御身のけがれ御ようしやあそばさるべし何いみものじやといふか、しからばそくたいしてけんぶんせんとかんむりしやうぞくぬがせ給ふ、はる時せひなくふたをとる、とよ成おどろかせ給ひいかに八郎是は何共心得ずよりざねもきんりしゆごの人、身をけがしてさんだいならぬ事はよくしり給ふ、所に是はまづ何ものゝくびぞ、八郎承りさん候其御くびは、よりざねが一子少將樣のくびでござります、何といふぞ少將がくびとはいよ／＼がてんがいかぬ、してくやうなどがありてくびを打、某かたへはよこされた、さん候少將義は御そく女中將姫樣とふ義のみつつう遊ばされたゆへ、御りつぷくのあまり某に仰付られ討奉り候、御しあんのうへにていかやう共おへんじくださるべし、とよ成あきれ給ひ、さしあたつてとうわくした、はる時よろしくはからへ、はる時申けるは某とても十方にくれ候、まづ八郎殿にはおかへり有べし、およばずながらあとより御返事はなさるゝであろふ、八郎きいてなる程御もつ共、それはたの沙汰申ても御一家、しかるうへは御そうだんの中に某がありてもくるしからぬ事、心おかれずとも仰せきけらるべし、はる時きゝ御言葉もつ共いざんずる然ばとも／″＼御しやん頼入と、兩人まゆをひそめ、やゝあつてはる時申けるは是八郎殿、某存るは

先此御返事はさしおかふと存る、しさいは、もつ共ふ義はふぎなれども、もうさば是は戀ぢのならい、御ふた所ながらめなしおとこなしよ殊に御一家、先いつたんとよ成公へ仰せこされ、其うへにてはいかやうになさるゝとあつておうらみをもうさず、はやまつて少將樣のくび打てつかわさるゝは、此はる時はのみこます、少將を討てつかわすうへは、中將姫を討ていだせといわぬ計かしこまつたと申て姫君のおくびはゑうつまい、此うへはめん〱かうに仕らんと存るか何とおぼしめすぞ、もつ共なれ共それでは後日のおためがあしかろ、してためあしきとは何をもつて申さるゝ、されば中將ひめ樣にはきさきにもそなへんとちよくぢやう有しをうけたまわりていながら、ふぎしたを其まゝ指置ては、天子のちよく〱をそむく〱、それおぼし召て少將樣のくびを討てつかはされた、此方よりはうつてだしたに其まゝすておくとあつて、一ッせんにもとりむすばゝ何とおためであろふか、いやいな事をいわるゝ此義について一ッせんにおよぶがこわいといふて、只今姫君を討てだそふか、それは其時のうん、よりざねのかたには一つきとうせんのくめの八郎殿．またとよ成がかたはみふせうなれ共、中つかさの丞此はる時、はな〴〵しく打じにを仕る迄よ、もしうんつきなば某ひめ君の御くび討奉り、はらきつてしぬるより外なし、いやとよはる時左樣よとりむすんでは事なし、此そうだんもいぬ也、某が存るは一ッたん姫君を御供申、よりざね公の御目にかけ、段々御とく心なさるゝやうに申てみよ、さすが又それほどにあるとも有まい、いやまづ姫君を其方ゑわたし、頼ざね御りつぷくのうへなればゝ、わが子のかたきそれうてとあつて討た（脫字あるべし）給へば、おろか成はる時、其時にこそ此八郎がこゝにありとむねをたゝく、何心にあるといふ事か、もしひめ君をうたせて其跡にてもこゝにあるといふて、むねをたゝいてすむ事か、しよせん是迄相だんはすまぬとももゝ立とつてかけ出る、八郎おしとめいづくゑ行ぞお返事を申に行、まて〱はる時、それはけつきのゆうじやといふて、ぶしの家にはもちいぬといふ、おろか也八郎そちほどにこそなけれ、ぶしのみちを少しは、ぞんじたゆへ、かる〴〵しくしゆくんはゑうたぬ、此はる時があらん間おめ〱とひめ君をわたそ

ふか、人でなしのさむらいは心やすくおしうのくびをうつ、少將樣にはほいのふおぼしめさるゝであろふといへば、八郎はる時がそでをひき、つぎのまへよぶ、心得たりとそりうつて行、人でなしとはたが事ぞおのれが事よと、すでに打はたさんとするを、とよ成兩方をししづめ給ひ八郎はる時がしんてい、いづれをいづれ共りやうけんなりがたき忠臣、ぶちか比まんぞくにおもふ、さつする所はとかく子をひとりもたぬとさへおもへば、たれにうらみもない、ぜひにおよばぬ中將姬を打てだせ、はる時八郎おどろき是はま事にぎよいなさるゝか、おろか也兩人ないし所のごばつをかうむる法もあれおもひきつた、ひばり山へこもない、ごいごみぐるしからぬやうに打てすてよ、すなはちたちとりはくめの八郎に申つくる、龍立よと泪をながしの給へば、はる時申けるはこはおもいよらぬ事をうけたまわる者かな、せめて某にたちとりを仰せつけらるべし、おゝ事はり也其方事はひめがめのと、みるめもいかゞとわざと申つけぬ、さ程におもはゞけんしを申つくる、はや〳〵打てまいれとおくをさして入給ふ、はる時は八郎をうたがふ、又八郎ははる時をうたがい、たがいに目じりにいかりをなし兩方へこそわかれける、程なく中將姬の御供申ひばり山へ御供し、しきがわしかせすでにさいごとみへし所へいもふとさよ姬其外こしもとはしり來り、中將姬にいだき付わらはがふ義を御身樣にかけ申事、天めいおそろしく候いかにはる時八郎、あね樣をたすけわらはをうてとの給へ共、左樣には成がたしとひきわけ、これ〳〵こしもと乘はや〳〵御供申てかへれといかりければ、ちからおよはず御供申皆皆やかたにかへりける、其後はる時いかに八郎彌々御くび打奉るかおろか也、はる時仰せなれば只今打と大刀ぬくを、はる時是迄とおなじくぬきつれ、八郎に手おおせ姬君の御共申こかげにこそは歸りける、所へ八郎が女ぼうかけ付おどろき、光しげをかいにうしはる時あとをしとふておつかけたりかゝる所へ、賴ざねのみだいはしりきたる、はる時こかげより立出けいりやくをもつてけい母を打、さあらぬていにている所へ八郎女ぼうにかいはうせられはる時をみ付やい〳〵はる時姬君はいよ〳〵打たか、おろか成くびは某が打たてまつゝたといへば、忍ゝ人でな

し三代そうおんのお主を打奉るといふ事が有か、はる時ゑせわらいさいふおのれは又しうたる少將樣はなぜ打た、今いふはゑきなき事ながら何しにおしうをうとふぞ、さいぜんのくびは某がおとゝいおりがくびじや、何といふいおりをお身替りにたてたかでかした〳〵、左樣にはあるまいとおもひうたがうてはやまつた事をしたゆるしてくれよ心やすふおもへ姫君はたすけおいた、何共心得ぬさい前みせたくびは何ものがくびじや、あれはけい母がくびじや、是姫君はこゝにござるとあはせければ、八郎悦とりつきなげく、所へ中將ひめのけい母かけつけうつてとれとげちをする、はる時八郎心得たりとかひくゞりけい母がくび打おとし姫君をかたにかけ、八郎をかいはうし、よろこびいさんで少將のおわします、藤太がたちへいそぎける、

下

かくてとよ成頼ざねは此度けい母にまかされ姫君わか君むなしく也給ふにとゞり、くけてんと人のことのはにかゝり、おのれとみしりぞきひばり山に來り給ふこゝにてひめ君わか君はる時八郎にめぐりあいたまふかゝる所へみやこより、ちよくし來る、頼ざねとよ成をめしかへされ中將姫はかみをおろし大和の國たへま寺をこんりうしはすのいとにてまんだらをおりあらはし給ふ、所へけい母しうしんきたるをたもんぢこくそうちやうこうもく四天王あらはれたいじをし給ふ佛法繁昌

かほみせ
きやうげん箱傳受　三ばん つゞき

直傳寫 正本屋九兵衛

上　都にかくれなきたへまひめ
　付タりさけにしな〳〵ある事

中　都にかくれなきぬれおさこ、
　付タりこひにしな〳〵ある事

下　都にかくれなきにせゆうれい
　付タりうたにしな〳〵ある事

一さみ原くるすのごのごけ　龜　四郎三郎
一あねたへまのすけ　さみさかさまの介
一いもさまつらのすけ　松本たまの井
一こしもさおつま　竹中市彌
一からう小わたしやうげん　村山平右衞門
一いもさふしみ　みつき辰之介
一女ばうきよす　玉川　三彌
一からうかぢ川大しん　大さわ團七
一いもさ小さよ　岩井花之丞
一弟かぢ川市三郎　音羽勝之丞
一伯父常らくゐん　市のや金十郎

一弓頭椋はし作左衞門　中川六郎左衞門
一詰衆　にし川金左衞門
一いしや原ぎうわん　みくに彥作
一市のせくない　むらかみ竹之丞
一たの上しんの丞　おのへたかの丞
一大原二郎左衞門　市川團十郎
一はゝ　まつ本閒三郎
一よめおかん　村上市之丞
一は山一學　坂田藤九郎
一いはた早之丞　大和屋甚兵衞
一せんごうでん吉　宮さき平三郎
一女ばうおまき　玉村淺のせう
一びくにせいぼ　長岡六三郎
一同　りんせい　はや[illegible]ら梅之せう

箱傳受　三番續

座本　村山平右衛門

第一

こゝにとみ原〳〵すのどのとて、公家一人をはしますが、三とせいぜんにあいはて給ひ、みだいくにををさめ給ひ、御子二人おはしませますあねたへまの介は、せんばらいもとまつらの介はいまはらにて二人おはします、からうには小わだしやうげんとて、ぶんぶ二どうのゆふしなり、又あいやくにかち川大しんは、大あく人也、爰に又市のせくないとてび男おはせますが、ない〳〵あねたへまの介どのへ、かよひなれこよひも、たの上しんの丞を御ともにて、かよひ給ひしが道にてしん丞まことに、かちうあまたあるなかに、わけてそのはうをともにつれるはなさけぶかい人じやこれふてつれるあいだ、かまへて此やうなすがたになつてかよふと人にかたつてたもんなや、をふかた様御意なされます、御ためになりませぬ事を申さうやうは御ざりませぬがやうに御いでなされます道のほどもおぼつかなふ御ざります故、わたくしかたよりこひねがひまして御ともをいたします、そつとも御きづかいなされますな、何といやる道のほどもおぼつかないによつてともをするといやるか、それはみなおれにおんにきしやる事ではないぞちもあのふじ見にほれていやるゆへ、わたくしおともいたしませふ道のほどもおぼつかなふ御ざりますと、いやる、それはそんにはきませぬあやかりものじや、しかしもはや屋しきへきたと、てそうてばうちよりふじみ見出たれじやいやくない様で御ざりますか御はいりなされませいと、手をとりてはいるしんのせうみて扨々はらのたつ事じやと云所へふじ見出こな様はなぜはいらしやれぬ、うゝたれぞまつて御ざる物であらう、たれをまつていませふ、おれがやうなにくまれ物じやもの、うゝこなた様はにくまれものでござるかいかにもにくまれ物も〳〵、にんほんあめが下でおれをにくまぬ物はたつた一人も御ざらぬそのにくまれ物をそれがたつたひとりいとしいと手をとつてうちへいる、かゝる所に市のせくないはかたなにて、小ゆびをきり出たまへば、たへまの介御らんじいそぎかたなをとりこれはどうした事で

御ざりますかやうの事は、下々のする事で御ざります、ちごたしなましやんせ、すればわたくしのゆびをきりたがはしたのふみへますか、是はみなこなたのさしやる事じやなぜなればあのながまくらはなぜきらしやつた、いかにもあれはこな様にみさがめらりうと存、きりました、いかにもそれがしごのあいさつをきゐうごおぼしめしての事よ、それならばそれぞごはおゝせられいでいや〳〵さやうの事では御ざりませぬ、かまへ御出なされぬ故まちかね、しぜん、此まくらもいらぬと存、きりました、こな様のあまりつれなき故、みなこな様の さしやる事じやいかにもわたくしはこなた様が いとしさにきませぬ、いやいさしくば毎日も御出なさりうはづで御ざります、いやうけたまはればめうこうにおはい、あごめのきわめが有と承はりました、然らば其上でさだめし御ゑんへんのきはめもあらうと存、それ故かよひませぬ、いやこな様ばかしこひ事を御意なさるゝ、こゝ様と、ちぎりましてたれとつまをかさねませふ、うゝしかれごもこなたには御母子様が御ざる、事にまゝしい中、其上からうごも有ば 其ひやうじやう次第、其上おや

へのかう〳〵と申物よ、いや〳〵かうした事にはをやも、かゝうら、いるものでは御ざりませぬ、ちごふし見とふたりの中を御らうじませいと云所へ、しんの丞内よりかへらねばならぬと、ふたり出る、ふじみおいかけ出是した丞様をれがかへらぬ節がはらが立ます、うゝをれがてんのせまいごをもやるが、あのまくらにきりのごうの 文所をなせつきやつた、あれはこな様のもんがつたわたくしの紋がふじ、ふじごつたごを一つにして、花菱とみせましたいや〳〵あれはきりのごうじやをれとふたりの中をきりのさうじや、やいそこなぶしんぢう物、いや〳〵あれはつたで御ざる、いや〳〵きりのごうじや、ひめ君御らんじくない 様あれ御らんなされませいうらやましい、こな様にはつよい御心じやわたくしは御かへりのあとではなきて計りいまする、うゝわたくしとてもなごりはをしう御ざると なきければ、それはあまりきうに御ざります、ふじ見みて あのようにくない様には、御なきなさるゝにこな様をかはいかちとないてくされませい、いかにもわたくしはなく事はきらいおやのしにめにもなきはいたさぬ、くない御らんじ

やいしんのせう、なきこむなくとも、ぎりにもないてやりや、しんの丞うけ給り、南無八まん大ぼさつをよそせんじやうに出て、ゆみやとつてのはやわざは、いこくのはんくわい張良かんしんにもをとるまじ、たとはゞ大六天のまおうなりとも、とつてひきよせたゞひとうちにとぞんずるそれがしなれども戀と云物はとなきけるが、もはや八ころのこともなきわたり候へば、早々御かへりなされませい、いかにもわかれをおしみかへるさをわすれた、ふじ見あんないに出、もはや御かへりなさる事はなりませぬ、ばんの衆がつめました、こよひは御とまりなされませい、いかにもかたじけなうは御ざりますけれどもこよひかへらずばやしきがさうどういたしませふ、是へしのぶと云事はたれしつた物もないと云所へ、ふじ見かけ人まだならぬ事が御ざります御いしやのほつきやうが上られましたが何とした物であらうまづこのうはぎをきせまし、かくしをく所へ原きうわんをみまい申ます、お姫様の御き色もこん日はことのほか御きげんで御ざります、いかにもきしやくもよいほどにもはやくすりをのむまい、いや御みやくをうかゞいその上でをくすりはとめませふ、みやくをみてはあ御姫様には、御くはいたいのみやくがうちます、ふじ見きゝほつきやうそさうな、をしやるな御姫様には殿様もないに、御くわいにんとは、いや此ほつきやうがそさうは申さぬ、そをたい、みやくは六みやくうちます、しんかんじんはいいめいもん是六つ、いまお姫様のは十二みやくうちますすればきうわんが見なた所、ひがめではあるまい、うゝがつてんいたしました春は人のきが上へく〳〵として、みやくがかずがおほ御ざりませふ、そちらなは、何で御ざります、是はこたつじやふじ見ごい是は何で御ざる、是はひおけでござります、うゝ女良衆のそばにはひをけやこたつはおかぬ物で御ざるわるすればひをけがこげてけがをするもので御ざるひおけや、こたつは御むやうになされませい、さるほどにうへつかたのこたつはあじなこたつで御ざります、こたつにはなが御ざりますうゝすればこたつのていをみやつたか、なるほどゝ口のあるまで見ました、うゝちかごろはづかしい、さりながらおんみつにしてたむろばうれしかろう、なにがさて御姫様の事で御ざりますればたゞは命

でもさし上ますたゞにくいはこたつで御ざります、此ほつきやうがしるまいかと存まして いまする、出ましてほつきやうたのむとあるならば、こたつが、かへりたきじぶんにはあののり物へのせまして、すつこかへしませふず又まいりたいと申ますじぶんにはのせましてすつこをしませふにたゞにくいはこたつで御ざります、くない出、ほつきやうどのちかごろはづかしいていを御めにかけました、こたつが物を申ます、なにとぎうわんどの おれをみしらしやつたか、いかにもみしりました、おまへはくない様では御ざりませぬか、いかにもさやうで御ざる、何がさて御心やすうおぼしめしませい、たゞにくいはひをけで御ざります、しんの丞出、お前はついと御ちかづきでは御ざりませぬども、わかいものゝ事で御ざりますほどに頼み存ます、うゝひをけ出られまして御ざります何とぞして、かへしてくだされ候らはゞかたじけなふ御ざります、いかにものりものにのりて御かへりなされませいと、両人かへるあとにて御ひめ様に申上ますぎが御ざります、殿様御はてなされますきざみそれがしを召よせられ、三年もすぎてあるならば此箱をあね君たへまの介様に、相はたしますようにと御ざりました則御よつぎきわめの箱で御ざります、何といやるぞ大殿様よりあづかりをきいまそれがしにわたするとある いかにもうけとろう、けれども此箱をめうごうにち、もつていづるならば母様のいまゝでかくしをきたとをぼしめそうもはづかしいほどに、此はこはからうのしやうげんにわたしてたも、きうわん承りさて〳〵ふかき御しあんいかにもしやうげんにあいわたしませふ、もはやおいとま申上ませふ、いかにもいまのこたつ様の事をたのむとをくをさしていり給ふ、きうわんはからうのしやうげんはをくにつめてあるげなしばらくまちいる所へ、しやうげん出、いやきうわん御出なされたか、ただいまやしきへかへりますがこなたへ御姫様より御つかいが御ざる、なにわたくしに御姫様よりの御こう上の御つかいと御ざるか、しからばあたりに人もなきあいだ是にてうけ給はらう、べつきでは御ざりませぬ、此はこは大殿様おはてなされしせつわたくしにおゝせられ候は、三年もすぎたらば、此はこをたへまの介様へ相わたし申様にと御ざ候、則御あとめ

のはこにて候故、御ひめ様へ指上候へば、御姫様には此はこを今までかくしをきたと、母様のおぼし召もはづかしいほどにかうしやうげんに相わたせとの御つかいで御ざります、うゝ御ひめ様の仰せらるゝはあつぱれな御しよぞんじやが、何ともがてんがまいらぬはかずならないでもかろうしやくをかふむりし、某にはじきに仰せわたされいで、そちにあづけをきなさるゝ段一ゑんがてんがまいらぬ、しかしながらまづうけとりませうと云所へおくよりかぢ川市三郎かけ出めいやうな事じや今まであつたと思ふたがはてふしぎな事じやとそでをふるいたづねまわる雨人みつけ是市三郎何ををとしやつた、いや物ををとしましたふみかいかにもふみで御ざります、ひろわしやつたらくだされませい、きうわんふところよりかみをとり出しうはがきは何と、はてくだされませいとせけば、いや是ははなかむかみじや、はてきのごくじや、はてなんぎな、まづしやゑんよりいでゝつぎのまへゆきたればこしやうの吉十良殿がついとをりやつて、をれがをびをしなをしてはあ、あればよいがとをくへかけ入、しやうげんみてきうわんいまのは何で御ざる、さればがてんがまいらぬ、わたくしはがてんいたした、あれはあくしやうで御ざる、すれば懸か、いかにも懸で御ざるうゝきのふも、しやゑんさきをとをつたれば、喜三郎が市三郎の手をとつて、いたによつてそこをば、きをとうして、とをつたれば是ほつきやうとことばをかけられたによつて、何でをじやると云たれば、御むしんながら市三郎に状をやつてくれと云たによつて、状をやつたれば其へんじがいかい事あつたが、其あとはしらぬ、しやうげんきゝおてまへが状をとりついだか、いかにもそのたうりじや、うゝすれば侍二人ははらじや此ぼうずは、あほうばらいかしばりくびじや、きうわんふるいわなゝく、しやうげんみて、ぼうずおれを何ものじやと、おもふてはゆふたぞ御家ではかたうしをきをする、某をよく〳〵たわけにしてはゆふたぞ、きうわんきゝ、なにときかしやるぞ今のゆめにみたいと云事じや、うゝゆめならばゆめのやうにはなしたがよいに、さればそちにまことにきかしやるによつてそれでまことにはなしましたそれならばよいが、今のは物があると、わるうゆふている所へ、市三郎出、はてあつて

うれしい、二人は唯わるうゆへはなにとや丶み丶にさわります、いやこなたのみ丶にさはる事は申さぬ、それでもみ丶にさはります、なぜあて事をいはしやる、う丶み丶にさはればされどもで御ざる、こなたはたゞさきのふみをだいじにかけてひろはしやれ、ううはてきやうこつな人がある物じや、そのふみは是で御ざる、はて人に物をおもはすような、たとへきやうだひのところへゆく狀なりとも、先われにみせたがよい、なにもつ丶むまいとゆふたではないかと、狀のうはがきをよみ、小わたしやうげん樣まいる、かぢ川市三郎より、是がなにじや、たうからゆふたがよいにとふところへいれるを、きうわんみてやいからうぬすびとよと、あふぎでうちこけまはりてわらへば、ゆるせ／＼と手をあはせわびれば、いやいまのふみをそこでよふでみや、よみやらぬとたごんをする、いかにもかきてをそばにおいてよむもあたらしい、それならばよもふと、ひらきよむに、なに／＼三とせいぜんよりそい參らせ候事ひとへにふかき御ゐん、ただなに事も、ゆめのよと存御なつかしく存たてまつり候、さりながら此たびあいさつを御きりくださるべく候、われらはけふは／＼、あすは／＼、たゞ物ごとあぢきなくくらしゐ／＼しらし、小わだしやうげん樣まいる、かぢ川市三郎、是はなにじや、あらたまつた、何がめにみへてあいさつをきろふ、わけもない事計り、う丶すればこれほどにゆふてもかわゆふ御ざるか、う丶きうわんどのまへはづかしけれども身にかへてもとをもふている、それほどにをもふてくださるならばはなしませふ、本此御家はふたつで御ざるぞやそれ故あにの大しんとてもゆだんは、させらるなとゆふ事で御ざる、いかにもがてんしたそれならば先やうきへかへろう、きうわんはをくへつめます、二人はうちつれかへる、

第二

扨よつぎの日にもなりぬれば、かちうのこらずじやうらくゐんへ相つむる、二人の姫君は女良衆にいざなはれ、さくらゐだをかざしつ丶、さもをもしろく出給ふ、か丶る所へ、小わたしやうげんは、かぢ川市三郎に御あとめのはこをもたせ、おの／＼御まへにさしあぐる、じやうらくゐんは御らんじて、何と此はこ

はしやうげんのこんにちのちそうにぢさんせられたは、すぎちうでもなし、をりでもなし、何で御ざろう、しやうげんうけ給はり、いや今日御あとめ定の御はこで御ざります、なにと此箱があとめ定る箱か、いかさまにもうへには是非と云もんじがすはり、御ふうも殿の御はんじやが、しからばげんざいのをとゝなればそれがしにあづけなさりやう物が、しやうげんに御あづけなさりうはがてんがいかぬ、うゝそれがしはしゆつけといゝ、ながそでといゝ、それゆへしやうげんに御あづけなされた物よ、いかにも此は家のけいづといゝ、かんじやうたゞしき御家じやが、二人ながら女子の事なれば、此はこしだいであとめがさだまると云物じや、いそいでしやうげんふうをきりてあけてみや、はあなにと大しんどのあそばせませい、いや殿のおめがねをもつておあづけなされたいそいで御ひらきなされ、しからばさやういたしませうかと、ふうをきりひらけば中にはきんぎんのひやうたん二つ出る、きんのひやうたんは、あねたへまの介様ぎんのひやうたんはいもとまつらの介様へと御ざりますと、しばらくかんがへはあ、おめでたう御ざります、御よはあねたまへの介様の御もちなされます、侍衆御よろこびなされませひ、はあおめでたう御ざります、大しんみてやあ、しやうげんどのはこのうちにひやうたんがふたつあるをみて、御よはあねたまへの介さまじやとは身は一ゑんがてんがまいらぬ、やあしやうげんどの、うゝあらほどしれました事をすでにこのうへにも是非と云もんじがすはりましたすればせはこんにち、ひはきのふすれば今日御よがきはまつたと云物、又ぜはいちひはつぎで御ざるすなはちぜはこれとよむ、すればたへま様の御よにきはまりました、大しんきゝ人ほど口がしこひ物はない、あかいを、しろい、白きをくろいともいへばいはれる物じや、みなこなたのは一ずといふ物じや、いやいちづといふ事は、御ざらぬ、たへまの介様と、御みだい様とはまゝしいなかで御ざる、いやはやとかく物は申さぬがよふ御ざると、たがいにせりあふじやうらくゐん御らんじ、いやとかくあのひやうたんのなかでしれるであろう市三郎、あのひやうたんのなかをみよ、市三郎だいよりほかへ出し、ぎんのひやうたんはすはりますが、きんのひやうたんはすはり

ませぬ、かち川大しんみて、おゝおめでたい〳〵御よはいもさまつらの介様に、きわまりました、ぎんのひやうたんはたちました すれば御家がたちました、いよいよすはりました、又きんのひやうたんは こけますは御いへがこけましたのいやたをれましたさあるは、御家はまつら様にきわまりました、しやうげんききいや〳〵申てもきんは七ほうのたからそのうへそうになをしてみれば、金は人の主さよむ、水はさかさまにながれはいたさぬ、ぢよりあめはふらねば天よりさうもくもせうぜず、天よりあめが ふればちよりさうもくはせうずる、そのもさみだれてすへのをさまるものは あらじ御よはたへま様に極りましたさ、あらそふ、みだい御らんじ大しんしやうげん せりよふ事はいらぬ、たへまはあねじやによつて、たへまによはきはまるしやうらくゐん様あねたへまの介様によをゆづりさふ御ざりますが、なにさいたしませう、はてそれはしんじつで御ざりますか、みなこたな御一人のきをかねさ かくさ申ます、此うへは大しんしやうげん、たがいにいしゆをのこさず たがいにだんこをしめしあはしやなにがさて、しやうげんごのさ

きほどは、いらざる事を申、りよぐはいをいたしました、是はいたみいりました御あいさつで御ざるさてたまへの介けふよりはそちはくにをしいやるほどにそうこゝろや、いやわたくしにさ御ざりますはかたじけなふ御ざりますが、いもさまつらの介へ御ゆづりくだされましたらかたじけのふ御ざりませふまつらきこし召、いやおまへの、御つぎなされますればわたくしさても、をなじことで御ざります、みだいきゝ給ひのふたへまの介けふよりは、くにのかみなれば、上ざへあげませふこちらへ おじや、いや御もつたいないぎで御ざります、しやうげんみて、いやみだい様しだいになされませい、おまへのためには、おやご様おまへは御なづけばかり、万事さもに みだい様の御さばきなされませひで かなひませぬ、たさひにしを東ひがしを西さ御意なされても、御意しだいによう御ざりますこちらへ御なをりなされませひさ、なをし、さてものぎに此ひやうたんにかさくさうてんしゆさ御ざりますが御きはめのおさかづきをなされましたらよふ御ざいませふ、いかにもたまへの介、さりあげこちへたも、是は御もつたいないぎで御ざりま

すおまへはをち様からいたゞきたう御ざります、まつらの介き丶給ひ、いかにもさやうがよふ御ざりませふ、はて、こ丶な子はなにをしりやつて、わがみはうちへはいりてほうらいのこしらへをしや、と、むりにうちへつぼねつれゆき、扨たへまさかづきをしや、いやおまへよりくだされませい、しやうげんみてやつはりそれみだい様しだいになされませい、いかにもと、のまんし給ふとき、市三郎さかづきをうちをさす、大しんみてすいさんなやつと、手うちにせんと、とんでかゝる、しやうげんをしとめまづまち給へ、御尤とも／＼で御ざる、先待たまへ、さて市三郎、何としたそさうな事じや、ごふしたぶてうほうじや、いやけがで御ざります、いや／＼けがといふはちよつとした事がけがといふ物じや、御姫様の御うけなされたさかづきをうちをとしけがとはいはれまい、いかにも御ひめ様のおうけなされたさかづきを、みだい様へ御さしなさるとゆふ事はあまりといへば、ほうになき事じやとそのいちづに存それゆへふとけがをいたしました、う丶それならば御ことはりを申さうこ、扨たゞいまの市三郎がぶてうほうは、おひめ様よりおさかづきをみだい様へ上らる丶はあまりと申せばほうになき事と、存候いちづに存それゆへぶてうほうと申ます、たゞ物はいわひから御家はかずおうを御なりなされて、くわつくわといたすがやう御ざります、たゞ物にはおにと申事が御ざります、市三郎が只今のはどくみをいたした心で御ざいますほどにあのおさかづきで御めでたう、あがりませひとゆふ、姫君とりあげのまんとし給ふを市三郎さかづきをとり、すぐにのみはらをきりしする、しやうげん大きにをどろき、やれ市三郎／＼とよばわる、たれじや、しやうげんじやが、まづ刀をはなせ、いやしなぬやうにはきりませぬ、のふ御ひめ様何事も此しやうげんを、おたのみなされませいや、もはやさらばもけすがごとくにし丶にけり、しやうげんみて、なむさんぼうと八方にめをくばり先ひめ君をうしろへかこひ、やい市三郎そのほうはあつぱれ、おしゆうの御やくにはたつたよな、むかしもしやかのいとこにだいば有、こそうの子にしゆん有と申、誠にふびんなしにをしたよな、あ丶さてみなあく人がしわざじや、やいそこなあく人どもようもたくんではころしたな、此御姫

様にはごくしゆはあげぬ、そこなあくにんごもら、おのれらよつてみよかたはじよりなでぎりにする、しやうらくゐんきゝ、しやうげんごく酒なればおのれをのがさぬ、そのさけはたれがもつてきたさあゆつてみよ、しやうげんきゝ、はあ誠にせつたいせつめい、一ごのふちんこゝなりと、はがみをなして控けるが、いしやのぎうわんのふしやうげんくちおしい、おれさてもだまされた、そのさけはじやうらくゐんより出た酒じや、何此さけがじやうらくゐんよりでたか、それならば先お姫様をあづくる、さていづれもの前へで、、さきほどはちかごろぶてうほうを申ました、じやうらくゐん様より出ました御酒なれば、何しにごく酒で御ざりませふ、申てもたへま様はげんざいのめいごなり然らばなにしにごくをあたへなさりう、此市三郎はらんきいたしましたさうに御ざります、此うへはいくたびもめでたうおさかづきをいただきませふ、先じやうらくゐん様あがりませい、いやおればのまぬ、然らばみだい様あがりませい、おれはげこじや、大しんごのまいりませい、おれはきんしゆじや、はあそれならばさいぜんごくしゆと申ました、あやまりが御ざりますほどに、わたくしが一つたべませう、じやうらくゐんみて、しやうげんのみやるか、わたくしがたべましたらおまへもあがりますか、いかにもせんばいでものもふ、さあおれがしやくをしやうとよる所を、とつてふせ、やいぼうず此ようすをまつすぐにかたれ、さなくば只今さしころす刀をむねにあてければ、のふ命をたすけてたもはくじやうせふ、あの大しんがゆふには此事しとふせたならば我をげんぞくさし、まつらひめとふうふにして此くにををさめふといふた、うゝそれをこなたにはしやうゐんさせられたか、いかにもふうわりとのつた、うゝぼうずのやくはしやくそんのをゝせにはたとひもゝをきりても人をたすくるとのおしへじやなんぞ人をたすくる事はさておき、げんざいのめいをころすがこれがぼうずのやくか、大しんみてやいこのくにをおうりようせんとはおれがたくんだ、うゝ此ぼうずはずん〴〵にしてもあかぬけれども一つははくじやうをする又は殿のかたはれなれば命はたすくると、とつてなげ大ぜいをおつちらし先ひざまづ立のきけり、扱いもとまつらの姫はこしもと下やしきに

おはします、か丶る所へこさよはふみ箱もちかへりしが、大原二郎左衛門あとをしたいつけうちのていをみる、こさよとをさしごぜんへ出、かへりました今日はしゆびがよふござりまして御へんじまでとつてまいりました、御うれしう御ざりませう、いかにもばんに御いでなさりうとあるとかゞみにむかいこしもとかみをなでいる、二郎左衛門しばらくもんぐわいにたゝずみ刀にてへいきりぬき内へいり、いこうなこそでをふところへいれるば、姫君のかゞみにうつる姫君の給ふはみなこゝはさとはなれた所じや程にようじんをしたがよいぞ、はて御姫様の何をつがもない事を御意なさるゝ、たとへぬす人がはいればとて、女でこそ御ざりませふけれ、長刀をもつて首をちよつきりときりませふ、おゝそれがよいぞ、二郎左衛門おどろき、きる物をかへてにげんとするが、又立かへりさらんとし、おもはずひめ君のかをがうつるをみてひたすらそばへより姫君は、こゑをたてなとかがみをさしへ給へば、四人のかをが鏡にうつるちかづきより四人かををみあわせ、わつとゆうてちりにけり、姫君こゑをたてなやいそこな物、そちは此やしきでみなれぬ者じやがたれじや、はあわたくしはぬす人で御ざります、いやゝゝぬす人ではあるまい、ぬす人かぬすびとゝゆふはづがない、まつすぐになのれ御意で御ざりますほどに申ませう、わたくしは大はら二郎右衛門と申ますらう人で御ざりますがそのいにしへはやせ馬にもこしかけ、さびやりの一すじももたしましたがながゝゝらう人いたしました故おはをからしました、さきほど御けらいの女良衆が御かへりのときうちのていを見ますれば、何かけつこうなきる物を見まして、ふつとでけごゝろでいたしました、いかにもはらからのぬす人では御ざりませぬが、かやうにあらはれました故はのがれやう御ざりませぬいかやうともおこゝろまかせになされませい、うゝいかにもらう人をしたならばこうあるであらう小さよそれをやりや、是をやりますればぬす人においで御ざりますと、二郎右衛門見てなみだをながしさてゝゝいかやうともなさりう物がかへつて御ほうしをくだされ、しやうゞゝせゝわすれはいたさぬ、わたくしふせいの物がきやらをもちましたとてたがまことにもいたしますまい、たゞもどします、

いや是はかねで御ざる、はめかねで御ざいませうともかへします、いやそれでは御姫様の御心がむになります、ひらにいたゞかしやれ、それならばいたゞきませふ、扨々めうがもなきしあせとなみだながす、然る所へ伴左衛門おもてをたゝき、はあゝない様が御出なされましたが此人をなにとせふ、先うちへはいりや、扨をもてをあげこしもときもをつぶし、ちがいましたと、かをゝみれば、伴左衛門にてはてきよろきよろとなんで御ざる、おれが此やしきへこまい物がきたやうにはてさて、扨御姫様には御きしやくがよさそふに御ざります、御やしきへ御かへりなされませい、いやおれはやしきへはかへらぬ、うゝ此たびのぎてさやう御意なさるゝとぞんじます、此たびのぎは一家中べつしてそれがしがたくみました、うゝなにといやる此たびのはそちがたくみか、それは又どうぞわけがあろう、いかにもこれは戀からで御ざります、はてそれはおもしろい、どうぞはなしやいや、はづかしふてはなされませぬ、いやちつともだいじないそれならはなしませうが此ようにあいをおきましてははなされませぬ、それならこゝへおじや、まいりませふか、こしもと衆御意がおもふ御ざるによつてまいりますと、姫君のそばへより扨たれが、わたくしが、おれにほれました、何とにくう御ざりますまい、なにのにくからうぞとせなかを叩き、扨どうぞ、さればあね君をころし此くにをおうりうせんとたくみました、ひめ君きゝ給ひ伴左衛門をつきたをしやいそこなちくせうめ、おのれはやうもおれにほれたな、おのれはみせしめにもせふけれども、戀とゆいおるほどに、いのちはゆるするそこなちくせうめ、伴左衛門はらをたて二人のこしもとをとつておさへ、姫君をすでにさしころさんとする所へ二郎右衛門とんでいで、伴左衛門をとつてなげ人々をたすくる伴左衛門みて、うぬめはなにやつじや、名はゆはぬ、いやなのれ、ゆふなとおつしやる、扨はおのれはしのび男じやな、いやさすりじや、そこなあなからかごぬけしたとさん〳〵にきりあい、伴左衛門をおつちらし、小さよは手をおい、そのひまに二郎左衛門はきり物とりわがやにかへり、

第三

かゝる所へ一學早之ぜうきたり、小さよが手をおふたをみてたづねければ伴左衛門が來り、お姫様をうばいとりかへりたりと、かたるそれなれば先そちをつれゆき、ひめのあとをたづねんと出けるが、くらさはくらし道みへず、姫君はまよいゆき給ふが、はかはらのふる井のなかへおち給ふ、一學あとをしたふてゆき給ふが是もをなじくおち給い、はやのぜうあとよりきたりさてもくらい事と、たづねかねしが、かたはらより女のこゑとしてそこにいごが御ざるはまらしやるな、うゝどこじやおしへてたもと、手をのばし手をとり、とつてをきへ先なはをかけてそばなる松にゆいつけ、扨一學〳〵とよばわればこゝにいます、一かくあげてくだされ、はてがてんゆかぬとやうやうたづねさあがれ、いやまだしたに人がござるしんだそうに御ざるが、まづこれからあげませう、いかにもと先ひきあげさて一かく上りはやのぜうはむかうのひをとりにゆきみればまつらひめなり、兩人なげきかなしみ、いやころしてをしばりておいたと云、それをつれて御ざれ、いかにもとかの女の所へゆき、やいそこなたぬきめ、をのれせうたいをあらはせ、さなくばたゞいまさしころす、いやさやうのものでは御ざりませぬ、さてもけつねの子はつらじろと、さてあれはたがはめたゆはねばおのれをさしころす、はあ御侍はいこうせかしやますとみへました、またあいもなき事なれば、まづくすりをしんぜて御ろうじませい、はあくすりはなし見ごろしにする事のかなしやとなげく、これにくすりが御ざります、わたくしがごくをいたしてしんぜませふ、それならばをくすりをとりのませば、きがつきその體に早のぜう、はをりをもち、ちかごろで御ざりますますれど是をしんぜます、さて〳〵かたじけのふ御ざります、かさねてゆるりと御禮申ませふと、かへるさて二郎左衛門は女ぼうを、ひつたて出己れにくいやつの、此はをりをもちかたみとおつしやるとは、やいふぎ物め、うゝ此はをりにはゆいわけが御ざるが、さてあのきりもいはどこからとつて御ざつた、何を、かみ様二郎左衛門殿は手かけぐるいをしやりますと、たがいにせりあいゐる所へ早之ぜうはまつら姫をつれ來り、先此人をあづくるといへば次郎左衛門みてこそでをかづき、かくれるを、しうとめみて、おかたあれ手かけゐ

がきたわいの、女ばう出いや御女ろう様いや御内ぎ様是はなにとして御出なされましたさて此はをり故めいはくをいたしますゆいはけをしてくだされませい、いかにもこゝろへました、さて次郎左衛門をみ付いやぬす人どのかこれへ、伴右衛門がまいりますほどにたのみます、こゝろへましたといふ所へ、伴左衛門來り人々わたしあい、伴左衛門を、うちおゝせよろこひ内へぞいりにける、さてこゝにせんどうのでん吉は、二人のびくにをふねにのせ、さもおもしろくこうたをうたひけるが、いや〳〵そちをこゝへあげる事はならぬほどに、むかふな吉助が所へ上てやすまそこ、先米つかい錢をとつてこうとかへる、然る所へでん吉がわか衆來り いろ〳〵せりふある事すみかへり、かゝる所へでん吉女房は、こま商人になり是もおもしろく色しなをこゑをはかりにうりかはばたへ出、こちのふねがきてあると、ふねにのる所へでん吉は米ぜにふとんをもちきたり、三人色々とせりふ有しが、でん吉は身をなげる、女ほうびくになげきかなしむ、でん吉ゆうれいになり出、あらむねがくるしい一ぺんのねむぶつも申てたも又びくにの事もたのむ

もはやかへる女ばうみてなげけば、おれはじやうごうでないによつていきふとおもへばいきる、それならいきてくだされそんならはいきやうとふねへとびのる、又むかふより、小わたしやうげんはたへまの介、まつらの介、一學二郎左衛門ともない、出しが、西の方よりかぢ川大しん侍どもをひきつれきたりふねをからんと申せしが、じやうげん、はやくもみつけせんどうにかくとしらせふねにのせ、うちかへし川の中にてたゝかいついにかぢ川大しんをうちおゝせ、殘るさむらいどももことごとくうちおゝせ、めでたくほんごくさして下り給ふ、人々の心のうちせんしうばんせいとさいみすゝみてかへり給ふ、

西ノ霜月吉祥日

女筆今川假名手本　付り身請は間夫との中あき誓紙の條々

上　あふ夜の枕　よりそふてふしみの里

中　たびねの枕　ふりつけてすゞかさうげ

下　へいさんの枕　まきそめてさなへの祝ひ

弁三浦ノ和田左衛門めいごの置みやげ

一色道を知ずして女郎にふられ床で勝利を得ざるこゝ

一浮氣潜上を好み無益の金をたゝき上るしゆもく町の色を樂む事

一少氣の輩嶋原狂ひを遂ず磯せゝりにて身代分沒落る事

一大粹の輩よし原通ひに末社の手くだを見ながらそこらを致レ宥免事

三ケノ津色里諸分鏡好色壁書如件

右五卷來る六月朔日より本出し申候

八もんじや八左衛門

一うの花うたのすけ　立役 村山平右衛門

一おくあをばのまへ　若山さよの介

一つぼね高はし　玉川千の丞

一娘おゆり　大夫 市村玉柏

一こしもと小ざらし　村上初十郎

一こしもとしのぶ　淺田かほる

一こしもとむぐら　山本春の丞

一こしもとおかる　よし澤左源次

一七川兵部左衛門　敵役 若林四郎右衛門

一弟外記左衛門　立役 名留川源左衛門

一ふぢ岡彌次兵衛　市川だん右衛門

一下女おたけ　大夫 神崎かりう

一同おたま　松本三五

一同おなつ　山本松重

一下女おかめ　竹中吉十郎

一中間谷右衛門　藤田九八郎

一中間定事　淺田善右衛門

一中間九郎介　大谷彦三郎

一中間角藏　松本友十郎

一うかゑ八郎左衛門　立役 山下京右衛門

一三わら九郎左衛門　村山長九郎
一あげや八わたや次郎介　小の川宇□□
一けいせいみな川　大夫山本かもん
一おろせ庄九郎　立役小の川宇源次
一はたごや十兵衛　青木源□□
一出女おかや　花川さくや
一同　おまつ　霧波□□
一同　おさん　松本半彌
一同　おいち　富永半左衛門
一びくにんていさん　霧波おさの介
一同せいじゆ　若林万太夫
一同けいしゆん　松嶋半七
一すゞか半太左衛門　實惡藤川武左衛門
一女房おたつ　霧波たきゑ
一こしもとおさら　中村左門
一同　おきわ　筒井もんど
一こしもとおぎん　若山こでん
一下女おまん　わかい久四郎
一ざうり取小六　筒井万十郎
一年寄太郎兵衛　福岡彌五四郎

一みな川いもとおせん　霧波民之介
一こつまの作太夫　道外金子吉左衛門

若後家卯の花重　しゆもくにとまる今のせみ　大當り

第一

おそばの前はつぼね高橋こしもと残らず鉢卷し、長刀かいこみかひ〲しく立出れば、たかはしは扨養ひ君さまへ申上ます、此たちの一万丁の御知行所、大殿様の御はてなされたれば、家老共が我儘致しお前をうしなはんとのたくみゆへ、私がお供申立のきまする、姫聞き嬉しい〲いざ立のかんとの玉ふところへ、家老七川兵部左衛門同弟外記左衛門はせ來れば、高はしはじめこしもと共長刀かまへ近付ねば、是は何とも合點參らぬ、承ればお姫様には屋敷を御立のきなさるゝとある、我々にも御知せなく是はどう致した義にて候ぞ、姫聞召やい尋ぬるに及ばぬ、汝等兄弟が心を合せ、みづからをうしない國をさらんとある企と聞きそれゆへ國を立のく、外記左衛門聞き、是は思ひもよらぬ事を承る先やうすを仰せ聞けられませ、姫聞召されば大殿御臨終の三日前にそち兄弟を召て仰せらるゝは、姫一人の事なれば和泉國大とりにござる將監様の子息、卯の花うたの介様をよび迎へ、夫婦となして家をおさめよとの御遺言、それに今に入てくれぬはそちたちが逆心ゆへでないか、外記左衛門聞き其儀は百日の御とふらひ過ると、拙者が和泉へ參り委細を申入たれば、成程と家の事うたの介様をつかはさふと有て、御契約を申皈りたれども、此うたの介様には伏見の撞木町の傾城、みな川と深ういひかはし外の女房は持ぬといふて、傾城町に入びたつてござる、此事が親子へ聞え、沙汰の限りなと有て勘當なされ、今では御行衛がしれませぬ、それゆへはう〲尋ねさせまする、□□聞きいやそうはいはれまい、うたの介様は、親殿の御勘當うけ、そち達を頼みに夕部屋敷へ御越しなされたげな、そなたがむごう突出し、寄せ付ぬと□□□□見付たお侍かあつて聞知てゐるぞ、むゝ然らば其者に合したまへ、おくそれ〲といへば、ずぼつこう成る男と腰をさし立出、やあ外記左衛門、夕部そちが屋敷へ行た□□□ようつれなふ追出したな、身はうたの介じや、兵部左衛門聞き、私は夢々存じませぬごゆるされませ、外記聞き其儀に就てはや申譯がござります□□□其儀

取て蹈み付れば、兵部たかはし是はいかにさ取まはせば、外記は是見じや人、内々某此家に望をかくる、夜前此のうたの介が屋敷へ來りし□□□身が此家をおさめんさ思ふての、さあごいつらもよつたらば一々くびを取ぞ兵部聞き、すれば實正逆心を思ひ立たか、おんでもないこさ、扨は其心底□□□某も其思ひ立で高はしさ申合せ姫を殺し、此國をしてやる合點で、其うたの介さいふは藤岡彌次兵衛さいふ浪人者を、うたの介にさいつてそちに合したは、つねづね□□□たゞすかたい者なれば承引せまい、汝が國にあつては望が遂げられぬゆへ、國を追拂ふための企じや、さては左樣か先姫を拂ふさ、青葉の前其外こしもさ□□□縄をかくれば、姫はるゝ口惜や高はしを乳母さ思ひ、かへつてだまされたか、外記打笑ひ、何を悔みてもかなはぬぞ、扨兄貴聞えぬはおれが國を取さ、こなたへ半分□□じやに、こなたはおれに隱してよう此企をなされた、おゝそれはそちが心を疑ふてじや、こらへてくれよ、いやこらへぬ〳〵こさん〴〵にたゝけば、あゝ痛いは〳〵、是高はし殿、こなたの娘□□さ夫婦の契約あれば、おれは聟じやに、同じやうに隱したまふは怨みに思ふささんざんにたゝけば、あゝいたや〳〵、兵部はさあ一時も早う先姫が首を討て、外記聞き、是は思案ごころじや、せきゑすまい、某が姫の首を討ばこなた方の望はしてやるが、主を討たば惡人じやさ私を惡う申さう、國君を討ち惡人さいはれふより、こなた方の首を切り、善人さいはれた方がましじやさ、姫こしもさの縄を一々切はごけば、兵部高はし興さまし、扨はおのれは一所じやさいふてたばかつて身が惡事を聞たよな、おゝよい推氣の付やうがおそい、夜前あの男がうたの介殿さ云て參つた、捕へて詮議せんさ思ひしが、いやいや戻したらば企のやうす顯れんさ思ひ助けたれば、てうご身が推量の通り是へ出た、扨こそさわざさ惡人になり、そち達が企みを見拔たは、なんさあぢでござらふがの、兵部腹立物ないはせそ打取れさ、侍共討てかゝれば、心得たりさこしもさ其槍突きかけ戰ふを、外記は大勢に割て入りさん〴〵に切立れば、皆叶はじさ逃げ去れば、兎角私屋敷へ御供申さんさ青葉姫を先に立、我家　さして皈りける、誰身の上も戀なれや、うかゑ八郎左衛門はお百合をつれ、伏見街道

を通れば、撞木町の壁越に、三味線の音きこゆ、さてそちを連れて走りたれば、定めて追手かゝらふ、おれが名をかへて云たがよい、そちゆへうた〳〵と歩けば、今からおれが名をうたと云たがよい、心得ましたあゝきつう腹が痛ふござんす、まだ七月が產月なれば、けがつかふ筈もないがあの壁のきわで暫し休んだらなをらふと寐さし、きる物裾へかけ、提灯の蠟燭の心きるとて火を消し、是は暗い何とせふぞといふところへ、傾城みながはへいの上へ出て小聲にて、なふそこなはうた樣じやないか、八郎左衞門替名を呼ど心得、おゝうたじや、そんなら下して下さんせ、きつうづゝない足さし出してゐますといへば、八郎左衞門はお百合が胎内の子を下してくれといふと心得、はてやくたいもないおろす子はならぬ、足引込めて辛抱しや、お百合目覺し何をいはしやんす、今物云たはそちでないか、皆川はそこに女の聲がするが、其女をつれてのかしやるかへ、おれを下すまいといはしやるの、こなたとは二世まで變るまいと起請取かはした、今取て來てこなたなんとするぞ、待ていやしやれと、壁の下へ降るところへ、卯の花うたの介手提灯さげ來る、所へ皆川又塀の上へ出、是起請取て來たと塀より飛び下り、こなたは私を捨てよう外の女をつれてのかしやると、怨みさま〴〵いへば、迷惑な口も腐れそのやうなことはいひはせぬ、八郎左衞門是を聞き、もし〳〵りやうけ違ひでござります、此女房共は懷胎でござる壁ぎわに寐させ置ました所に、おろしてくれ〳〵とあるゆへ、女房が子をおろしてくれと申と心得、おろす事はならぬと申たは私でござる、みな川聞き、こなた樣の名に何と申ます、只今はうたと申ます、それでじや扨はこな樣のお名もうたか、私はうたの介と申此女郎といひかはして罷あり、是みな川今宵此裏の壁のもとまで來いと、文をおこしやつたがどうした事ぞ、されば此中わしを買ひます江戸のみわら九郎左衞門と申は、いかい粹な客で親方と談合し、身請金をがらりと渡し、明日夜があくるとわしをつれ、直に是より江戸へ立ます、こな樣にはなれ江戸へゆく事はいやじや、連て走つて下さんせ、はてあたりに人もあるにと口とめれば、八郎左衞門は是お百合、そちが嫁入する晩に裏門より出、どうぞ思案してくれいとあるゆへ、連れて走りたればこそ

今めうごじやさ一所に連るじやないか、急な場は走るにしくはない、誰しもかやうな事のあるまい物でない、追手が來て問へばこて身も侍じや物、それを有やうにはいはぬさ聞がしのやうに申せば、うたの介はお志忝けない、さあ走るにしくはないこ皆川をつれ立しが、走る覺悟をせなんだゆゑ、路銀の用意がない、そなたは持てゐやるか、いや守りならで何も持ませぬといふを、八左衞門金五兩紙に包み投げほり、誰ぞ拾ひゆかふまでといへば、うたの介は押頂き、御志死ても忘れぬ、はて禮いふ手間で早う立のかれよ、忝ないこ駈出しが、向より提灯あまた人あしが見ゆる、九郎左衞門□□追手こ見えし、南無三最早是までといへば、八郎左衞門はこれ〳〵氣遣ひせられな、先此番小屋へ忍び玉へ、うたの介聞きいやそれではこなたの御身の難儀に成、いや其時は□□□働き玉へさ、番小屋へ兩人を入る、お百合向ふを見て、いやあの提灯の紋はわしが屋敷の紋じや、こちらへの討手さふなさいへば、八郎左衞門は南無三ぼうといへばうたの介出こゝは私にお任せなされさ、兩人共に番小屋へ入其身一人立てゐる所へ、藤岡彌次兵衞侍共に提灯こぼさせ駈け來り、舟の上り場で尋ねたれば、た□□□□申た、吟味せよこうたの介を見付こなたへ尋ねたいは、若い侍が振袖の女を連れ此道を通りませなんだか、いや左樣な人は見ませぬ、供の侍やあ□□□□づゝみがござりますこ廣げて見て、是はお百合樣の小袖じや、是があるからは此邊を詮議せよ、其番小屋をさがせこ大勢立寄るを、うたの介おさへ□□□□□左樣な人はござらぬ、私が證據に立升る、むゝ扨はお百合樣をつれ立のいた、うかゑ八郎左衞門こいふはそちじや、それ縄をかけよ侍共かけよるを、ごこへ寄たら首がないぞ、ぜひもない有やうに申さふ、某は去人の娘こ今宵番家で忍び合ひます、其娘に合せこむないこ存じ、番小家を見せまいこ申事じや、疑の上は其□□□合せ申さふが、そなたが尋ぬる女郎でないときには何と致されふぞ、はてお百合さまでないこ身が首をやる、むゝ其お百合殿こいふ女郎のお顔は見知てか、主をしらいで尋ねに來れふか、尤々合せ申さふこ番小家より皆川をつれ出れば、それ打燈あげよこ顏を見て、是は違ふたさいへば、何と最前申た通り、いでお首をたまはらふ、いや其段はあやま

つた、いやさ首を取らねばおかぬと刀を抜ば、やれ逃よにげよと背後をも見ず逃げ去りける、八郎左衛門お百合出で丶扨々おかけで忝いと禮をいふ、皆川向ふを見、あれ曲輪の者共か九郎左衛門を先に立て來る、何としませふぞ、八郎左衛門開き、只今の返報にこゝは某受取たと、兩人お百合を番小家へ入る所へ、九郎左衛門大勢つれかけ來り、こりや其方は皆川が腰おして走せたうたの介じやな、のがさぬぞ、むゝ大かた同じがくにくるよ、身は左様な物でない、いやまぎらはしい、此番小家を詮議せよ、まつた〳〵何かくそふ某は去娘と此内で忍びあふ、其娘が羞しがれば、此内を見せることはならぬ、みせぬからは皆川に極つた、して又皆川でない時は、はて其時は首をやる、てうど思ふ通りじやとお百合をつれ出て、是が皆川か、はて違ひました、さあ契約の通り首もらふ、いやまだ詮議が殘つてあるとせりあふ所へ、彌次兵衛大勢引具しかけ戻り、やれお百合様じや扨は汝が八郎左衛門か、のがさぬと取まはせば、うたの介も駈出で抜き合ひ切むすぶ、其まぎれに彌次兵衛はお百合をつれて立皈る、八郎左衛門は九郎左衛門と切結び、曲輪の内へ入、うたの介は侍共をおつ拂ひ番小家より皆川を出す所へ、揚屋八幡屋治郎介駈來り八郎左衛門といふ侍を九郎左衛門様其外大勢取まはし、皆川様をいづくへ走せたと、ほうで取まはし詮議最中でござります、なむ三寶其難義は皆われ〳〵ゆへなれば見のがしにならぬ、是皆川そちは此塀を乘越へやはり曲輪の中にゐたていにして其詮義の中へ出てたも、時には八郎左衛門の難義はないといふ物じや、成程私さへ出たら事は濟みまふが、こな様と一所に立退ことがなりませぬ、いやそれは此二郎介と心を合せ今霄の内に又盗み返す、こりや二郎介がてんして、呑込んだといへ〳〵と、めはぢきして申せば、成程呑込みましたみな川聞、こなさんの請合からはそんなら曲輪へ戻りますと、うたの介を踏へ壁を乘越へ曲輪へ皈る、うたの介は扨々すいとはいへど道は女じやは、曲輪へ戻つたらば九郎左衛門が取逃すやうにして置ふか、八郎左衛門に難義させては、侍の義理が立ぬゆへに、だまして戻した、此心底を知せてくれよと、涙ながらの玉へば、二郎介は御心底おいとしやと共に涙ながし曲輪の内へ皈りける、程なく明六ッ

の太皷の音、扨ははや夜があくるそふなといふ所へ、九郎左衛門は皆川を駕籠に乘せ先へ立、其身も駕籠に乘り大門口を出れば、二郎介はお供申見送りに出る、皆川はうたの介かしこに忍びゐる方へ目をやり、是二郎介さん、こなさんの女房にならふと云た女郎がわしにいひ置れました、たとへいかやふなことがあらふとも、かまいて外に女房を持て下さんすな、身は百里二百里隔て、鐵で繋れてゐたと儘、拔て來てこなさんに添ねばおかぬと、いつてくれといはれましたと、余所事にしてうたの介へ知すれば、九郎左衛門は駕籠急げ〳〵といへば、皆川せひなく駕籠の內より見合せ、忍び淚に伏し沈み江戶へ下るぞあはれなる、二郎介も淚ながらかしこへ入ところへ、八郎左衛門來り、是うた殿某曲輪にて樣々ひまを入れゐたりしは、其間に一里なり共落ちのびさせふ爲なるに、思ひの外皆川曲輪へ戾り玉ひ肝を潰した、あれ九郎左衛門が江戶へつれ下りし、こなたと心を合せよい塲に奪ひとらふ、いざござれ、いや〳〵私は思ひ切りました九郎左衛門はよい身、私は浪人もの皆川を眞實かわいと思ふなら、よい身になる方へ遣したがよいと存じ、ふつゝりと思ひ切ました、それでもこなたなくば、はて一期つれそはふと思つた女房に引わかれ、これが悲しうござるまいか、是夜が明け人が見れば人立がする、外聞がわるい、いや大事ござらぬ腹一ぱい泣かねばならぬ、はて埒のないよい〳〵、女房よび出し意見させふと、お百合〳〵と番小家を見れば、うたの介は、扨はこなたは何もしらぬそふな、お百合殿は最前の騷ぎの中に、追手の□□つれて皈りました、何ゆりは奪ひ皈りしとやと、腰を拔し泣ば、是々人が見まするわいの、いや立ても大事でござらぬ、女房を取かへされ、是が泣いでゐられふか、腹一ぱいなく、扨□□□□もおれも同じ思ひじや、不思議にあふて志をうけた、又御緣があらば御めにかゝらふ、さらばさらばと名殘惜めど淚は盡ず、兩人共に泣き悲しみ別れける、爰に靑葉の前□□左衛門屋敷へ入玉ひこしもと共を召れ、此中入玉ふ外記の內方お百合の心うき〳〵とし玉はず、何がな慰みをと尋ねたれば、中間下女打まじはり、臺所で下々のわざ□□□□すが見たいとある程に、中間共をよべとあれば、畏つて中間谷右衛門定平九郎介御前に出る、下女たゞ申は、こ

ちが思ふは此中から奉公にはいつた中間の杢兵衛□□□□とはめうとそふな、點頭やうて囁いてゐる、中間共聞き、成程そふじや杢兵衛をよふでこふ、そちはたけを呼出し詮議せよ、姫聞き是は何より面白かろ□□□□此通りを云つて見せふと、こしもと打つれ奥へ入給ふ、下女共はおたけ〳〵と呼立れば、はてやかましい聞てゐるわいの、中間衆がいふには、奥様が我々が手業を見て慰みせふとの事じやげな、じたい此奥様は殿御が氣に入ぬさふな、屋敷へござつてから碌に殿御と寐さしやれぬと譏る、後へお百合出れば肝潰□□大事ない〳〵、其そしる話が聞たいと思ふての事じやとの玉ふところへ、中間皆々出る、あの後な中間は何といふ、杢兵衛と申ます、むゝあの杢兵衛どれやら念頃□□□□があるげな、下女共聞き、そふでござりますと、おたけが顔ながめ詞揃へて申せば、たけはおれが顔を見ていな物のいひやうじや、但し杢兵衛殿おれに惚て いやしやるか、何□□□おごれがおれに惚て〳〵女房になりおつた、お百合腹立、其様な徒があつては是に置事はならぬ、たけ出てゆけ、おたけはさあ杢兵衛殿一所に出ふ、そちにこそひ

まやれ杢兵衛にはひまやらぬ、奥様それを聞ふばかりじや、最前杢兵衛と呟きかけで泣しやつた、あちやらんすの、是杢兵衛殿いとまの印しおこしや、おゝ十代をやると一腰投げ出せば、其儘引拔きあの人を切ておれも死る、杢兵衛おしとめ、こりやたけそちを去つたは、お[illegible]今宵死るゆへ縁を切た、身には以前深い女房があつた、此娘が身が事を思ふて今の男の心に從がはぬ由を聞き此上は身は死で見せる此事いはふ爲かやうのていに成てゐる、杢兵衛といふは八郎左衛門、お百合我身の上なれば是は〳〵皆の者兩人が中直しをせふ、下女共は奥へ行け、中間共は外記様の戻らしやるか臺所へ行き見てゐよ、畏て皆々かしこへ行ば、後にてなふ八郎左衛門様ふつゝりと思ひ切る程に、やはりおたけを女房に持て死ずにゐて下さんせ、おゝ其心なればなんの死ふぞ、たけおゝよういはしやんした、お百合は是[illegible]け今宵外記様留守じや、たつた一度合せてたもと賴めば、たけ氣を通し火を伏消し合る所へ、中間共下女共といひかはしゐれば皆あいに來る、所へ人音すれば八郎左衛門お百合うろたへ一ツ帶を兩人して出るを、てつしんくらま

ぎれに兩人をつかまへ、火をもつて來いといへばこしもと手燭持出るを、顔を見て火を吹き消し、やい皆の者是を詮議すればどいつらも命がない、そこを思ふて火をとぼさぬ、此内に女の分は皆奥へはいれといへば、皆悦び拜み／＼内へ入、侍共火を出せといへば、大勢火を持ち出る、是々身は外記が兄兵部といふ者、こなたは八郎左衛門と聞いた、大小をやり身に大望があるが頼まれて下されふか、名まで御存知の上只今の御恩一命を進上いたす、然らば申さふ某此國に望あつて一たん思ひ立たれ共、弟外記に詮義せられ、其首臺に髮を切り、今てつしんと出家の身になつてゐる、今霄は外記が他行致した道にて打取て玉はれ、中間共も其通り心得よ、八郎左衛門聞き心得ましたと、中間引つれ走せ行き外記と切結び來り、太刀打と一外記を搦める、てつしん悦ぶところへお百合姫君たけ諸共槍ひつさげてつしんやらぬぞ、てつしんは是家の系圖は盗み出せしといへば、八郎左衛門私にお渡しなされと請取り懐中し、其儘外記が繩ほどけば、兵部は叶はず逃げゆく、八郎左衛門は是外記殿、お百合を腹な子共に渡す。女房になされて下されれ、心得ました、又おたけはこなたへ進上致す、何よりの物を添ない、お姫の聟君を尋ね御ふうふに致しませふと皆打つれ内に入にける、

第二

道中の出女口早に泊らしやんせ／＼といひ立る、皆川は駕籠に乗り小六を供につれ通るを、比丘尼共御參宮の下向勸進入れさんせと小歌うたふてついて來る、皆川は此半太左衛門樣はおそい、こゝらで休んで待合して行ふ、びくに共は此竹屋といふ所がよい座敷もござんす、あれへお入なされませ、おゝそなた衆も來て、歌うたふて聞しやと、皆打つれはたごやへ入る、程なふ皆川が姉聟鈴鹿半太左衛門は下男に荷を持せ來る、山伏は柿の頭巾輪袈裟かけ錫杖振り立二日は三日の大明神、一／＼やらしやれと尻について來る、最前からついて來た錢とらさふと巾着あけ、仕合な奴じや錢がないこりやこまがねくれる、何と大盡であらふが、是は見事じや三匁はあらふ、是で酒をかふて今夜は樂むじやと、立皈るを呼戻し、銀貰ふたら米買ふといひそうなものを、酒にして樂ふとは以前

のしやうじや、私らが目をぬく〲と思はさんせふが伊勢道はぬけぬぞへと、□□□ける、皆川うたをかしこへつれのき、此形には何さしてならしやんした、されば揚屋次郎介を頼んで借た三百兩の金が、利を書上げ〲今千二百兩に成てある、餘りきつふせがむゆへ上□□をはしりた、それは氣遣ひさしやんすな、私を身請した九郎左衛門といふ侍は、誠は江戸よし原のみはら屋四郎兵衛といふかね持のくつわじや、此度死だ讓り金三千兩貰ふて奈良の京へ上ります、奈良の三條へ尋ねてござんせ、金をすましてこなさんと夫婦になるといふ所へ、はたごやの亭主十兵衛戻り、やい男共お尋ね物がある、お客は奥へと皆川を內へ入る、うたは頰冠しぼう持いる所へ、大勢來り、某は京天滿屋作兵衛手代甚兵衛といふ者じや、うたの介といふ者千二百兩金おいながらはしりた、此所に山ぶさなりゐるよし、所の代官樣へ斷り捕へに來た、其方冠をされ、うたは聞き山伏詮議ならば爰に一人寐てゐます、誠にゐるはさ、半太左衛門は山伏頭巾に錫杖持ちゐいふすを引起し、そちはうたの介かといへば、うたも〲錫杖ふれば、それ捕へよ、こは

狼籍なさせり合ふ內に、うたの介は人に紛れて逃げにける、奈良の京半太左衛門家へ、大阪こつま作太夫女房おせん夫婦づれで尋ね來り內へ入ば、半太左衛門が女房おたつ出、作太夫樣よう上らしやんした、おせんは姉樣お久うござんす、江戸へ行しやんした姉の皆川樣はたよりがござんすか、されば大分讓り金貰ふて上られたゆへ此家も買ふた、今はおちよといふ逢はせふと內へ入る所へ、皆川出、作兵衛樣賴むことがある、此度もらふて上つた三千兩の讓り金を半太左衛門樣の請取て、私を座敷へ追込めて外へ出る事もならぬ、金の手に入るやうにして下さんせ、成程思案せふと打つれ奥へ入る所へ、若い男來り案內乞い、私は撞木町のおろせ庄五郎と申者、此ふみを皆川樣へ進ぜて下されませ、ちよつと御めにかゝりたい、角藏聞きそれに待たまへと內へ入、半太左衛門へ渡す、ふみ披き見、かやう〲と囁き內へ入、角藏表へ出成程ふみ進ぜたれば、あはふと仰せらるゝと內へ入、おたつ酒にゐい寐てゐるそばへつれ行く、今は皆川樣をおたつ樣といふ、人が來たらば蒲團の下へ隱れたまへといひ含め內へ入、庄五郎は是おたつ樣お

たつ様と枕元へよる、所へ人音すれば其儘蒲團の中へかくるゝ、所へ半太左衛門出で蒲團取て見、其儘兩人が胸ぐら取る、お辰膽潰し、そなたは何人で爰へ入り難儀さする、お前が來いと仰せゆへ參りました、半太左衛門聞き、扨は身が女房を知ずに來たな、しればいひ分はないそちはかくれ、おたつ庄五郎を引留め、おれが不義のないといふことを埒明けていねといふ、所へ皆川が出れば是おちよ、道中でもこちの人と寐やつたげな、おれは疵付け追ひ出そう企じやの、半太左衛門聞き道中の間あの人のそばへねやつた事もない、皆川聞きいや成程毎夜ござつた、それは不粹ないひ分じや、さあ私は不粹なゆへ、遂に一夜も心に從ふことはない、半太左衛門迷惑がる、庄五郎は男衆に風呂敷包を預けましたそれを戻して下され、角藏出で是々と渡すと其儘取こふせ、身は彦阪〻平次といふ侍じや、此奴がわざでござる、うた様よりのお文を渡さふ爲め、おろせの庄五郎と僞つて參つた、文を請取せたふが、いや見ませぬ、其文は何とした責めれば半太左衛門氣の毒がり、それ落したであらふが、いかにも落しましたといふ、然らば太儀ながら半太左衛門殿尋ねて出したまへ、さないとこいつにいはさするが、はて迷惑なと懷中より取落し、是々こゝにござる、皆川讀みてすればこなたはうたの介様の家來衆か、成程左様でござります、此上はおたつ様にあやまりはない御夫婦の中よう添ひたまへ、お返事を明日取りに參りませふ、拵へて置て下されませと我家へ皈りける、皆川は兄弟打つれ奥へ入、後にて半太左衛門角藏を近付け、最前の文にうたの介から金をおこせといつてこしたれば、皆川を兎角外へ出さぬやうにせよといふ所へ、作太夫出なふ皆川が内々椽の下からぬけ道を拵へ置、うたの介方へゆくとて今入つたといへば、やれ男共椽の下を搜せと皆々下へ入る、半太左衛門も椽の下を覗きゐる内に、おせん皆川を後にかくし門へ逃げ出る、作兵衛も隙を見て逃げ行きけるぞ危ふけれ

第三

かくて皆川逃げて出、大德屋といふ呉服屋の内へ逃げ入、びく尼ども出是は久しや、道中で御めにかゝりました、なふ此内にお前の鈴鹿で逢しやんした殿御

が、煩ふてござんすといふ所へ、うたの介ふさん敷かせおもてへ出、皆川がなつかしや、撞木町であふた八郎左衛門はもと身が家來で互ひに名乘あふて、今は此呉服屋となつて、おれをかくまふてゐるといふ所へ、半太左衛門は町の年寄□□□□□皆川を見付こらへ、それ成は道中での山伏め、それたゝけと取付けば、脇ざし拔く、やれ出あへ〳〵といふ、女房おたけ駈出留める所へ、八郎左衛門戻り、是はお年寄様どうでござる、半左衛門出□□□□□やうし娘なるを、あのうたといふ男が密通し走らせた、むゝ皆川殿と思ひやふた中ならば、此方へ貰ふて夫婦にしませふ、□皆川には男がある、(十五六字缺ク)くるゝ、女房皆川はいや三十兩金をくれと有て、之れを書いてやりました、八郎左衛門拔き見て□半太殿、是は三十兩(七八字缺ク)にした物、女房皆川とあるも女房は書添たのじや、墨色が違ふてある、殊に娘を女房にしたといはるゝならでんごへ出て云て見よといふ所へ、ぼうぐわん侍引具し來り、(十五六字缺ク)るでないかようばけて來たな、兵部鼻のぼうし取て捨て、うたの介、是にありと聞き、半太左衛門と心を合せ、ぼうぐわんとなり生捕ん爲なるに、あらはれたと打てかゝる、所へ平次駈付け半太左衛門を□□□□□左衛門兵市を切伏せ、お國の敵を打た、いざお國へお供申さん、皆川殿はお手かけ、靑葉姫様は御本妻になされよと、うたの介の御供し國入あるこそめでたけれ

八文字屋八左衛門板

有卦入万倍曾我　二番つゞき

兄曲輪水性
弟箱根土性　大あたり
第一　こもゑだいこ　思ひ羽の鳥
第二　かたみの文箱　ひれふる鯉
第三　かりばのまく　すその丶駒

▲扨お斷申上まする

役者紋揚喫　三ヶ ノ津　三　巻
付り當りのつゞく東穴は
一二の替り藝品定
第一　金貝の京蒔繪
第二　泥書の江戸畫
第三　朱書の難波傘
右二の替り大評判
三月三日より本出し置申候

一源のよりいへ	澤村吉松
一ちばのつねたね	澤村政五郎
一にたんの四郎	市山金十郎
一ごいの彌太郎	市山辰十郎
一けいせい龜ぎく	藤川正松
一同　かめづる	嵐花まつ
一同　きせ川	辰岡玉菊
一同　手ごし	さの川市松
一かぶろ	辰岡品菊
一かぶろ	小倉山万四郎
一やりて	尾上源次
一下男	大原藤八
一あげや長三郎	市山仙介
一みうらや下女りん	さの川妻橋
一祐のぶ下人つやの介	よし澤四郎七
一ひにん	市山傳藏
一ひにん	其外あまた
一工藤いぬばう丸	玉川みやこ
一うさみの三郎	澤山春五郎
一そがの祐のぶ	辰岡染右衛門

一大いそのとら　大夫辰岡久菊
一そがの五郎時宗　大夫嵐　小六

▲是より二役の分

一みだいまさごの前　二のみや　岩井甚之介
一けはい坂少将　みうらのかたかい　岡島元太郎
一祐つね女房万かう　そがのらうば　坂東豊三郎
一かぢ原平三　みうらや三右衛門　大谷彦三郎
一さもふ御ぜん　かまや武兵衛　笠屋又九郎
一六十六部正心　御所ノ五郎丸　市川權藏
一あわしま德太夫　片かい下人與も八　春山源七
一そがの十郎　立役春山源七
一わだのよしもり　三保木義左衛門
一工藤祐つね　實悪三保木儀左衛門
一かけすか百性與五兵衛　大谷廣次
一小林ノあさいな　立役大谷廣次

以上

兄曲輪水性（あにはくるわのみづしやう）
弟箱根土性（おとうとはこねのつちしやう）

有卦入万倍曾我（うけいりまんばいそが）

都万太夫三の替り
大谷廣次 大當り

第一

千世のことぶき鶴が岡、八幡宮の神前にて、頼家公御具足着の御祝儀、御母政子の前つれて御出あれば、梶原仁田千葉土肥をはじめ、諸大名しかう有、御祝儀にさま〴〵のおごりはじめ、虎少將も御しやくによばれ來る、所へ神主妻ゆふだすきかけ、虎少將と色ばなしの所へ、朝夷母巴と、陣太鼓をになひ出、此度伊豆のちか平謀叛に、荏柄の平太一味せしゆへ、三浦は一家、和田九十三騎閉門仰付られ、父義盛も出仕ならず、〱はたいに母巴と某、太鼓擔ひ三日が間持あるくと、神主を見、こは我君樣じやとかうべを下ぐれば、ゑゝ此なりで頼朝とはしらず、よい慰みであつたにとの給へば、御裝束着せかへる、政子樣頼家公諸共、お待なされてござると、頼朝を御供申をくへ入、巴いふ、祐經此度伊豆の次郎が討手の役、此大太鼓の中に入てゐ、我々が何をいふぞ聞ん爲、とういんひじのはかりごとじやと云を聞、曾我の五郎敵祐經を見知ぬゆへ、少將となり女の妾に成來り、是を聞かくせし刀を拔き、太鼓切破は二ツに成、中に何もなし、朝夷これを見、南無三君より預りし太鼓を破て何とせふとうろたへぬれば、母巴はやい朝夷、汝は木曾義仲のたね、頼朝を討て無念をはらせ、五郎いざ奥へ切入んといへば、朝夷□□木曾殿討れ、こなた生擒れ死罪の所を、君義盛へ妻に下され、三年して某誕生したれば、和田殿の子でござる、巴きゝ、いや〳〵辨慶は三年三月めに生るゝ、老子は八十年で、生れながら白髮はへたりと云ふ所へ、祐經出仕と云ば、五郎太鼓の中に隱るれば、巴も奥へ忍ぶ、祐經來り、是は朝夷殿か、大磯の虎少將が來たとある、どこにゐますぞ、かたい〳〵身はおり〳〵參ると、素袍引取りこしまきはおりにすれば、祐經見て、長ばおり持せた、それ〳〵と取出すを見れば、ひしかきに秋野の、いほりにもつかう、是は曾我殿原がもんじや、成程くるわ通ひに金一兩に賣たを身が買取た、其賣主是へ出よと云ば、六十六部出、曾我中村を通りたれば、金一兩に買てくれと有ゆへ買取り、祐經樣へ上たれば、金百兩下されたと云

ふ所へ、奥より祐經呼立れば、御前へ行にける、五郎聞かね、太鼓より飛出し、六十六部を引捕へ、此羽折此中見えずせんぎするに、己れどうして持て來たと責れば、有やうに申ませふ、あばらやの内に、此羽折が見えたゆへ、此棒で掻き寄せ取り、祐經樣へ賣りましたと云ば、さん／＼蹈み殺さんとするを、朝夷おしとめ、こいつ殺しては、賣ぬ云ひわけがない、とら六部がかいなに、大盗人と入ぼくろさせ、是で盗んだ印、五郎百杖打て、それは唐土の成敗と、さん／＼打ふせる、朝夷見て、もよいは、命が有まいと引のくれば、虎につれられかしこへ入、朝夷顔へ水打ば、六部氣が付起上ればでかした／＼、今のでは、十郎五郎が、曲輪通ひとまるであらふ、六部聞、私は十郎樣一万と云時、乳を上たうばでござる、御兄弟の曲輪通ひとめんため、お前のさしづにてかくの通り、何とぞ祐經へ奉公に出、敵をお打なさるゝお爲に成ませふ、朝夷聞き、惡人となつての忠はめづらしいと、悦びかしこへ入にける、所へ祐經が弟宇佐美の三郎、万かうをつれ出、六部を氣を付け、是は祐經殿の御臺じやと云ば、先達て樣子は聞た、何と奉公するなら、侍に召抱へふと有ば、忝ない、少將と申すは曾我の五郎、女姿となり祐經樣へ近付ん爲といへば、万かう聞き、汝今より近江の小藤太と付け、犬ぼうが家來にするぞ、忝ないと打つれ奥へ入、賴朝の御前には、祐經伊豆の次郎討手の、おいとまの盃下さるゝ、銚子少將につげと有ば、五郎つゝとより睨みあふ、祝儀の御能は楓狩、小藤太白鞘卷の刀持出れば、祐經五郎にやる、手を握りしめれば、血流れ柄の鮫赤くなり、赤木作りの刀となる、所へ巴、衝立蹴破り、長刀を賴朝へ討つくるを、朝夷引とり繩かくる、五郎は女かづら引脱ぎ、鎧着んとするを、虎狀持添へ引とめ、是は曾我の老母の文ちぎれるとお母のお手ちぎれるといへば、道理につまり引かぬる、朝夷五郎を止め、此場に兄十郎がない先待、いつまで待ますぞ、おゝ兄は水性そちは土性、五月には有野に入るそれ迄まて、ゑゝ無念なと三方嚙み碎きさゞまりし勢ひこそはすさまじけれ、かくて大磯揚屋長三郎方へ、三浦屋三右衛門來り大騷ぎ、かま屋武兵衛片かいに惚れ、親三右衛門に貰へど、五郎に心あるゆへ戀かなはず、腹立奥へ入る、十郎來りきせ川に逢ひ、祐經伊豆の次郎詮義の爲、曲輪へ來る

由、教へてたもと頼めば、きせ川聞き、さま〴〵物賣になりござる、曲輪の衆ぢぎして通るが祐經殿じやと教へかしこへ行く、所へ小藤太扇賣になり來る、曲輪の者皆々ぢぎして行く、十郎祐經と合點して扇の地紙買んといへば、取出し見せる、見れば庵にもつかう、虎が紋、是は若侍衆が、虎に惚れたれど、十郎ふかまゆへ戀かなはず、腹立にころさう爲じや、煙草下されと、煙草入へ金十兩入れ返せば、取出し戻したまへば、請取其塲を立去りける、十郎揚屋へ入り見れば、逆澤瀉の鎧、賣物と張紙あり、揚錢の方に渡し置、賣物とはどうじや、長三郎聞き、されば三百兩の方じや、さお金渡さるゝか、有まい〳〵それ男共と、棒振上げ取卷く所へ、祐經駈付け樣子を聞き、お侍の御難儀、幸ひ是に持合ましたと、金三百兩こなたへ御用に立ますと、取出し揚屋へ渡せば、長三郎請取、相濟ましたればお前の鎧と、賣物の張紙とれば、十郎はさてさて忝ない、金子持參仕るまで、此鎧お前にとめ置下されませ、いや〳〵質物は取ませぬ、御笑止に存じ御用に立ます、然らばお名は何と申ます、いやこなたのお名、御宿所も存じておりますれば、私が名を申すに及びませぬ、其心からは仰られまい、追付返辨申しませふと、十郎は別れてかしこへ行にける、小藤太來ればだん〳〵と話せば、私も最前煙草入戻しさまに、金十兩入れやりたれども、合力受ぬとて戻された、お前と知ては受られまい、扨詮議致せど知れませぬ、然らば身が衣裳そち着替、扇賣に身がなると、互ひに着替る所へ、十郎見れば最前の扇賣結搆なる衣裳不審をなす、小藤太は、そちが曾我の十郎じやな、大小竹ぺらか、此かんなべのかね同前と、さま〴〵惡口すれば、十郎無念がり、一心で付通すと、扇おつ取り、かん鍋付ぬき酒出る、祐經見て、其扇折れといへば、へし折る、十本出しこれ折れ、十郎力出せど折れぬ、身は祐經じや、一本の扇はそち一人、十本はそへ力五郎と一所に來て討て、道理を云て皈れば、十郎はゑゝ五郎はどこにゐるぞと、尋ねてかしこへ行にける、百性與五兵衞旅姿にて大磯へ來り、女郎衆をながめ、遠州かけすかの女郎はどなたぞ、教て下されといへば、小藤太聞き、それは何年になる、十二年になります、先女郎買ふて、しつぽりと尋ねたがよい、買ませふ金がござりませぬ、それは身が出してやらふと、揚屋へつれ

行き、是は身が客じや、女郎よふで合してくれ、心得ました、新造の手ごし樣がよからふと、云つてやれば、八文字の道中姿揚屋へ入る、與五兵衛見て、おれが賣れて來た娘も、あの通り勤するであらふと、しほしほとなり心浮ねば、手ごしはおれは氣に入らぬさふな、女郎かへて遊ばんせ、ふつて奥へ入る、やりて杉、はしり出口に行を、與五兵衛引とめ、こなたは久しう大磯にか、あゝ三十年もやりてしてゐます、そんなら尋ねたい、十二年以前に、かけすかより賣れて來た娘、今の名は何といひます、知らしやりませぬか、幼名は、おせんおひやくと申ました、それは今御全盛で、大磯の虎少將樣とて太夫樣じや、あゝ急がしと云すてかしこへ行にける、小藤太うしろで聞、そなたは何ぞ、私は其虎少將の親でござります、十二年以前に女房共が人にだまされ、二人の娘を奉公に出し、跡で曲輪勤と聞、氣上り狂氣いたしそれに取込みゐ、此正月に相果升たゆへ、娘尋ねに來ました、それには證據が有か、懐より秋葉山の札取出し、姉は七月生れゆへ七枚、妹は五月生れゆへ五枚、母が手にて、おせん、おひやくと書き、娘共が守りへ入、此方にも持てゐますと、取出し見すれば、是慥なる證據、先奥で酒一ッのまふとつれて内へ入、小藤太出、みれば秋葉山の札、取忘れあるを拾ひ取、ところへ虎奥より出、そなたは以前逢ふた、六十六部でないか、成程そふじや、今は祐經樣の家來近江小藤太 廻國したは二人の娘が行衛尋ねん爲、身は遠州かけすかのもの、姉におせん、妹におひやく、身は兄弟が親じや、虎きもをつぶし、そふ仰るには證據がござんすか、おゝ秋葉山のお札に母が手で、おせんおひやくと書付有と、取出し合せ見、成程母樣のお手じや、さてはお前が父樣か、おなつかしや、嬉や、そなら身請して、祐經樣の手かけにする、悦べといへば、虎けでんし、わたしは云ひ替した男あればいやじやといへば、親のいふこと存くか、ぜひ身請するといひ奥へ入、虎難儀し、書置してゐるところへ、與五兵衛出、煙草入から取落した、爰に江戸繪のやうな物はござらなんだかと、うろ／＼尋ねる、虎見て、此男だまし、殺して貰はふと、色をしかけ蒲團しき、いざねやうといふ、ところへかたかい出話しする内、與五兵衛蒲團の下に、相口書置あるを見讀みて、そなた死る書置じやがどうじや、されば私

は大磯の虎と申、十郎樣と深ふいひかはした中を、父樣が身請して、祐經の手がけにするとあるゆへ死まする、虎とあれば遠州かけすかの生れ幼名をおせんといはなんだが、成程そふいひました、おれはそちが父じやと取付ば、最前親にあひしと段々をいへば、それはおれが落したお札じや、さてはお前がまことの父樣か、母樣はおまめか、此正月に相果た、おひやくに合してくれといふ所へ、きせ川來り、中の町に十郎樣口論してござるといへば、虎は走り行く、十郎行違ひ來る、小藤太奥より出る、與五兵衞は、札を拾ふて親じやとなぜ詐つた、小藤太聞、身が親になり、祐經の手かけにせふといはゞ、詮方なく自害でもするであらふ、時には十郎樣、曲輪通ひやめばお爲、もと某は、御兄弟へ乳を上し乳母、月さよが子彥六と申もの、祐經へ奉公に出しも、御兄弟敵討たまふ手引の爲、此團扇は、河津三郎樣、奥野の狩場で、御持なされた團とさし出せば、與五兵衞聞き、身も河津樣の家來、鬼王庄司左衞門が忰、生國ゆへかけすかへ皈り百性となりし段々いへば、十郎聞き、今より鬼王新左衞門と名乘れ、忝ないこれ彥六、そち團持たればだん三郎と呼び、身が弟にせふと、兄弟の契約するところへ、虎少將つれ立來るを、一間へ入鬼王少將を切る、虎があつては、十郎樣心亂るゝ故手にかけた、きせ川聞き、少將樣死でござるといへば、扨は取違へ親の名乘もせず、おひやくを殺した、是もお主の爲、ゑかうせんと、大せい題目となへとふらふ所へ、下女のりんつれ來る、裏のろじより與茂八出れば、あれは何のとふらひぞ、少將樣不慮にお果なされ、其とふらひ□□□□武兵衞來り、かたかいを肩にかけ行く、向ふより曾我の五郎、道ふさぎ通さぬ、つれの男だて取付を、さん〴〵に蹈み、ご□□□□こめば、武兵衞をはじめ逃げかへる、五郎が勇力、聲を揃へてほめにける、

第二

大磯の虎は、揚屋の二かいの障子あけ、少將のおし鳥の思ひ羽が五郎樣へやりたいとありしが、今死なれたればあまた出□□といふ、かたかいおん鳥とらへれば、五郎かへてほしいといふ、戀かなへて下さんしたら、梶原樣に貰ふて置た、狩場の切手しんぜふと内へ取にゆく、五郎はかしこへ入にける、かたかい切手

文箱へ入れ持出る、ところへ武兵衛出さま〳〵口說ど、承引せねば付通す、文箱を池水へ投込む、武兵衛難なく殺し、懐なる金取る、非人共これを見、わけ口下されと取付、さん〴〵に投げて立退く、與茂八來り、死骸見て肝を潰し、ろじより內へ入る、池中より大鯉出るを、飛び入り鯉を抱へ、難なく岸へ上り、腹をわれば、中より文箱出る、是富士の御狩の切手、かたかい樣の心ざし、五郎樣へ進ぜふと、悅び持て行にける、かくて曾我の舘には、河津殿十七年忌明日なれば、十郎は五郎をつれ來り、ぜひ今日勘當ゆるされねばならぬといふ所へ、朝夷紙子一枚着て、ふるいふるい來り、親義盛が勘當うけた、二の宮と夫婦になるといひ入れあれば、こゝにかくまふてくれ、五郎が勘當がゆるさする狂言拵へた、十郎聞きそれはどうぞ、されば虎が土產の此面が幸ひじや、此地藏菩薩、老母信仰すれば、拜みに出らるゝ時、身が此鬼の面を着て、五郎勘當ゆるし、河津が敵を討せ、さないと八大地獄へ落すといふ時、十郎は地藏の面着て、勘當ゆるしたら、河津を極樂へ救ひとらふ〳〵といふと、母が勘當ゆるすと、いひ合するところへ、老母出地藏ぼさつを拜むところへ、朝夷面取り違へ地藏の面を着れば、十郎鬼の面着て、せりふ違へば母をかしかる、ところへ義盛來り、五郎箱根にありしを、朝夷が男にした、それで勘當、五郎に咎はないゆるして下され、承引ないと、朝夷を手打にせんと太刀を拔けば、十郎も五郎を手打にするど刀拔く、母おし止め五郎が勘當ゆるせば、朝いな殿もゆるさるゝか、せふ事がない、五郎勘當はゆるす、祐信殿存生の內、敵打はならぬといふ、ところへ祐信出、河津十七年、墓參りといひ、內は出和田殿へ行き賴んで、勘當の訴訟して貰ふた、やい十郎、そちは祐經に金三百兩借たとある、敵の金返させふ爲、千葉北條へ行き借用して來た、是を返せと、さいふに入れ投出し、母が身が存生では、上へおそれゆへ討ぬといふ、是見よと肌ぬげば、腹切、狩塲へ行く刻限になつた、急げ〳〵といふ、鬼王どう三郎馬引來れば、兄弟うち乘る、祐信見て、敵を首尾よふ打て、是までと腹帶解けば息絕る、養父の情、兄弟は富士の狩塲へ行にける、

第三

五月廿八日、そが兄弟富士の狩場にて、親の敵祐經を討つ、十郎は仁田四郎に討れ、五郎時宗は、五郎丸を女と思ひ侮り大勢おり合ひ繩かけ、ついに御前へ引れける、頼朝御覧じ、祐經は親の敵打は尤、狩場へ切入りしはいかに、されば我君はおふぢ伊東の敵、それゆへ切入りました、兄十郎討れぬれば、冥途へ追付く、早く首討たまはれ、心底殘さず申段、あつぱれ剛の者、富士の裾に宮を立て、兄弟あら人神に祝ふべしとのたまへば、梶原いふは、十郎は祐經に金三百兩返さねば盗人じや、其金腹へ入れ祐經死骸より取出し、五郎繩を切り、梶原に飛びかゝるを、朝いな草摺引、大當りと町中の御評判〳〵

入もんじや八左衛門板

新群書類從第三終

明治四十一年八月十五日印刷
明治四十一年八月二十日發行

非賣品

東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　市島謙吉

東京市神田區蠟燭町八番地
印刷者　武木信賢

東京市神田區三河町三丁目四番地
印刷所　武木印刷所

大正十四年十二月

喜代三郎撰